

三木清関連資料第4輯

座談会集二

三木清関連資料第4輯 座談会集二

三木清の参加した対談・座談会を、「文学界座談会」を除き、1940.5以降のものすべて収める。ただし『時局月報』1941.11に載ったらしい岩淵辰雄との対談は、資料を発見出来なかった。

凡例

○底本に於ける旧字体を新字体に直した。基本はシフトJISに収まるが、第二水準まででない二倍の踊り字「ゝゝ」は、ユニコードが使われている。

○満州・欧州の「州」は、基本的に「洲」が使われているがすべて「州」に代えている。

○新仮名遣いにしたが、口語体の「ぢゃ」はそのままとした。

○一部、送り仮名の統一をした。

○いくつか漢字交じりの副詞を平仮名に変えた。

○いくつか作成者の判断でルビを振ったが、底本にあったルビとの別はとくに注記しない。

○カタカナ表示の人名・国名・地名表記を統一した。

○外国語のカタカナ表記は、半ば日本語化したものはそのままであるが、作成者の判断で原語を追加

した。また、表記の統一もした。

○あきらかな誤記・誤植は脚注なしで訂正した。

○新聞・雑誌では改行時に句読点が抜けたと思われる箇所が多数ある。それらは適宜追加変更した。

○判読出来ないまたは文字が欠けている箇所がある。※【】で示す。単なる【】は作成者の追加である。

○脚注は、すべて作成者の追加したものである。一言だけの注は文中に「#」で記す。

○参加者略歴はネットなどを通じて調べたもので、登場回数が一度の方は冒頭に、他は巻末にありま
す。発言があつても雑誌などの編集関係者で略歴不明の方が居られます。また学生で参加した方も
不明です。

目次

現地座談会・更正支那の課題	1940.5	6
対談・文化運動の基調	1940.5	21
対談・民族主義の問題	1940.5	31
座談会・世界史的に見た東亜問題	1940.6.4～11	36

討論会・日本政治の再編成	1940.6	58
座談会・戦争・政治・文化	1940.6	95
対談・文政革新の方向について	1940.8.1～4	132
対談・新政治体制	1940.8	141
座談会・新党運動の国民的基礎	1940.8	180
座談会・新文化の発足	1940.11.2～12	217
【参考】コラム・昭和研究会の解散		245
鼎談・満州国	1940.11	247
検討会・国民性の改造	1940.11	276
座談会・文化問題を語る	1940.12	311
対談・明日の科学日本の創造	1941.1	340
座談会・新体制運動と国語の統一	1941.1.14～2.1	367
読者応募座談会・政治と生活	1941.4	409
座談会・社会科学の新方向	1941.7	453
対談・実験的精神	1941.8	470

座談会・現代の思想に就いて	1941.9	482
座談会・国家と大学	1941.11.5	517
対談・民族の哲学	1941.12	554
時局研究会・文化の運命	1941.12	580
座談会・学生は如何に生くべきか	1942.1	620
時局研究会・決戦政治の確立	1942.1	642
座談会・占領地の経営	1942.2	665
座談会・比島文化を語る	1942.5.20	698
座談会・南の日本語教育	1942.8.18～21	705
対談・大東亜文化	1943.3	718
参加者略歴		736

更生支那の課題 現地座談会

三木 清

今中次磨：1893～1980、広島県出身、政治学者、北九州大学学長。この座談会当時は九州帝国大学法文学部教授、九州で軍部を批判、満州経営の益少ないことを新聞に載せていた。ドイツ・ナチズム研究では先駆者。

杉村廣蔵：1895～1948、経済学者。東京商大（現・一橋大学）で杉村の経済哲学の博士論文が7票の白票のため不合格になった事件でも有名。

伊藤武雄：1895～1984、満鉄調査部事件被疑者（当時49歳）、著書「満鉄に生きて」。

中西 功：1910～1973、満鉄調査部、中国共産党に協力、治安維持法で無期刑、戦後日本共産党か

ら参議院当選、後除名される。

立石峻蔵：不詳『近代日本社会運動史人物大事典』では名前が四度出るが、共産党へ勧誘したか関連事件である、本人の記述はない。

山崎 進：1908～1987、福岡市出身、東京帝国大学経済学部卒、満鉄調査部、相模女子大学学長。自民党の山崎拓の父親。

三輪 武：京都帝大経済学部卒、満鉄調査部事件被疑者（当時38歳）

石川正義：1913～1948、東京帝大経済学部卒、農業経済研究者、満鉄調査部事件被疑者（当時31歳）、敗戦後中国で拘束され病死。

名和統一：1906～1978、経済学者、大阪商大（現・大阪市立大学）教授、満鉄調査部事件被疑者。

具島兼三郎：1905～2004、九州帝大文学部卒、満鉄調査部事件被疑者（当時39歳）、国際政治学者。『ファシズム論』（1935唯物論全書）。長

崎大学学長。

内ヶ崎虔二郎…満鉄調査部か、調査資料の執筆者の一人（「事変下の北支農業の諸問題」）。『實際経済問題講座・第9巻』（1931 平凡社）「我国に於ける農業政策と其の批判」。

（順序不同）

本誌特派員 畑中繁雄・1908～、東京出身、中央公論編集長、二十世紀研究所。

日時 昭和十五年四月四日（1940.4.4）
場所 上海佛蘭西租界伊藤公館

畑中特派員

今晩は御忙しいところ有難うございました。この度、新中央政府成立に当りまして、この機会に一つこの新政府を本当の更生支那の基盤たらしめ、それから更に進んで東亜新秩序建設への一つの大きな階梯としての課題を凡ゆる角度から検討して見たいと思うのであります。順序と致

更生支那の課題

しまして、先ず最初に今中さんから新中央政府生誕の政治的な意味を一応御説明願つて、そこからいろいろ意見を吐いて頂きたいと思っています。

今中 私は結局この外に和平を獲得する方法がない、と云う結果、此処に來たのだと思う。重慶と日本との直接和平という考え方も一部にはあったように思いますが、それは不可能なことだつたと思うのです。不可能な理由の主なる点を考えて見ると、日本と支那とが完全に民族独立尊重と云う立場で離れて了うことが出来るならば、之は重慶との直接和平は、或は可能かもしれませぬ。然し今日の問題としては、重慶が抗日政策を止めなければ戦争を止める筋が立たぬと思います。所がすぐ止めるとは考えられない。だからこの和平は同時に抗日政策を止めることを前提にしないで不

1 南京が占領される前月1937.11国民党政権は重慶に遷都した。以下単に重慶と言うのは国民党政権のこと。

可能です。その意味に於て重慶と何等かの結合関係を保たずには本当の日支和平は出来兼ねると思うが、そう云う風な結合関係を基礎として重慶と日本との和平が果して可能であるかどうか、と云うことを考えて見ると、とても難しいと思います。結局日支の政治的・経済的統合関係と云うものは中々出来にくい、そう云う意味で出来る和平条件を前提とするならば、中々抗日政策は止めないのではないかと思う。そこで自然日本の指導性が認められる形に於て新支那は出来なくてはならんと思う。そこで、結局、新しい政権を援助して行く、抗日政策を前提としない、そう云うものが発生する虞れないものにして、武力工作を終結に導く、という点に少くも一つの重要な問題がありはせぬかと思う。

今一つは所謂日本で云う日滿支の協同体を構成すると云うことが、重慶政府とでは不可能でない

か、又支那の言葉を以つてすれば、汪精衛氏あたりの云つて居る「大亜細亜主義」と云うものを具体化すると云うことが、重慶政府相手では不可能である。で、唯その為に新政権は普遍的平和を実現する迄に、尚非常に将来性を持つて居るからして、急に和平を完成する訳に行かない。その点に今度は反対の困難が発生して来るかも知れない。之を如何に克服して行くかと云うことが非常に重要な新政権にとつての問題になると思いますが、その点、皆さんの色々な御意見を承りたいと思うのであります……

畑中 東京では例の協同体ですね、相当に青年層や

何かに一つの指標を持たしたと云う意味から、一時活潑な動きを示したと思うのですが、現地での
 1 1883〜1944《汪兆銘、字は季新、号は精衛》清朝の
 官費日本留学生、孫文らと辛亥革命に参加、孫文死後国民党
 の重鎮として活動、近衛声明に應じる形で1940年3月日本
 軍の占領下の南京に新政権の樹立を宣言、1944年来日中病
 死。

反響は如何でしたか。

今中 協同体は向うの人が受入れない、先入主がある為と思います。大亜細亜主義と云えば、勿論向うは賛成するが、協同体と云いますと、全く撥ね返して終う。

それから今一つは、中国の人達に取っては、先ず民族独立を完成することが主要な問題であつて、日滿支の協同体を作る、と云うことは第二次的な問題に違いない。日本に取っては協同体こそ主要な問題で、そこが一寸ポイントの置き所が違ふと云う事になって来ると思います。併し言葉を受付けないので、内容は大亜細亜主義、と云えば、向うは双手を挙げて賛成する。

中西 大亜細亜主義と云つても色々内容は分れるのでないでしょうか。さつき東亜協同体に向う側に受け入れられない、兎も角も、従来の協同体と云うものは余り受入れなかつたと云うのは確かかも

知れませぬが、最近重慶の方にも特殊な協同体的な考え方が生れて居るようなことが向うからのものにみえるのです。例えばあの日本人に有名な沈鈞儒¹と云う弁護士ですね、……漢人主義の立場に立つて、支那の果す役割として三つある、一つはこの戦争に勝つこと、一つは憲政をやること、一つは東亜新秩序をやること、と云う風なことを書いて居るのですよ。結局、その東亜新秩序と云う内容はよく判らないけれども、日本で云われて居る東亜協同体とよく似て居る。やはり必ずしも東亜協同体と云うようなものに支那が直面してない²と云うのでなくて、その東亜協同体の体制が具體的なものであるなら、重慶の方だつて充分に受入れるだけの素地があるのでないか、と斯う思うのです。

1 1873～1963、浙江省の政治家・弁護士、抗日救国運動家。中華人民共和国最高人民法院院長。

今中 向うで云つて居る東亜協同体と云うものはど

んな内容を持つものでありましようかね。

中西 結局、支那民族の完全な解放の上で、新しく組織を考えると云うことになると思います。

伊藤 重慶の出した例の和平条件ですな、あれの第六条にやはりそういう風に解釈される一条がありますね、亜細亜をフリーにしろ、と云う意味の

……

杉村 東亜新秩序ですか。

立石 政治の一つの理念としては出てないが日本とやつて行こうと云う気持は非常に強く出て居るのぢやないかと思ひます。

中西 特に経済提携の問題で、非常に強く出して居るのではないかと思ひます。

山崎 日本が従来 of 侵略的なものを止めるならば、日支の経済上の有無相通ずると云うことは、何も支那側は拒否しないと云う内容らしいですね。

石川 前線で日本の兵士に呼びかける宣伝文の中

にも、日支は歴史的にも地理的にも特殊な關係にあつて、将来新しい東亜の体制をそこにつくらなければならぬ、我々もそのことについては充分考慮がある、と云つた意味のものが最近の戦争で、向う側から押収した文書にありました。

具島 東亜協同体論は、日本の現在の実情を基礎にして考へて来ると、どうもそこに云われて居るような綺麗な言葉は実現性がない、と云うのが本当は向うの云い分でしょうね。

内ヶ崎 大公報に斯う云う論文が出ていた、非常に卑近な例を採つて、北京の東安市場に支那料理がある、その他もう一つ何とか云うのがある、それが皆日支合併になつて居る、之が所謂東亜新秩序だ、之が協同体だ、もう現実に於てそうやつて居るぢやないかと云う意見で、よく判るのですな。

1 1902 天津で創刊された中国の代表的な新聞

そう云う例を出して、皆日本に取られたのだ、料理屋迄もそうだ、或る寺院の如きは坊主迄日本化して、それが住職になって居る、之が新秩序か、そう云つた意見です。

具島 そう云つたことは判るんだね。

三木 それはありますね、——併しそれは軍事行動中であるという立場も考えなければいかぬと思います。それは戦時ですから、今その現情を持つて来てすぐ東亜新秩序を反駁するのは無理ですよ。そう云う所からして支那人がなじるのは無理もないと思うが。然し我々の方では今後どうして行くか、と云う事までを具体的に示してやる事が必要です。それは当然理論で反駁しなければならぬ立場にあると思います。

杉村 それは皮肉つてる態度ですか、弥次でしようか。（内ヶ崎氏に）

内ヶ崎 マア弥次でしょうね。

三木 実際そう考へてるかも知れせんね。

名和 アメリカ人なんかもさつき三木さんが云われたように、日本が満州と同じようにしてしようと云う感じを非常に強く持つて居るような風に考えます。

具島 一般にそう考へて居りますね。

三木 その違いをもつと具体的に示してやる必要があると思いますね。

杉村 日本で近衛声明¹を出して居る、それはつまり、そう云う状態に達するのだと云うのでなくて、それが出発点であるようにうけとつて居る所に、或るアイロニーを感じて居ないですかね。詰り、先に行つたらそう云う状態になると云うことを説明して、将来に於ける国交調整の基本的な方向にしようと云うのなら、之は今の三木さんの云

1 前年 国民政府を相手にしないという第一から条件付きで応じるといふ三つを出す。

われるそこいらの実例は今の状態としては已むを得ない、之はその方向に段々持つて行こうと思うのだ、と云うことを納得し易くなるが、出発点がそれだとすれば、あれはどうだ、之はどうですと訊かれた時に困ると云う状態がなきにしてもあらずで、そこに日本の声明としてアイロニーを感じる、と云うことはないですか。

三木 詰り今の現実はどうでも、声明の方向に行つたと云うことを一つでも、二つでも現実に示して行けば良い。

伊藤 説明しただけでは向うの人は信じない、具体化さ【せ】なければ……。

内ヶ崎 満州とは違ふのだ、と云うことを懇々と云つても向うは却々信じない。

具島 事変の当初なんかドイツ辺りでさえ、又日本は満州でやったようなことをやるだろうと云う気分を相当持ったですからね。

山崎 歴史的に現実を見まして、少くとも、日本側の主體的な条件が改つていない。先入主があるとしても、これでは、向うが随いて来ないと云うのは無理ぢやない、とも思われる。どうも支那人と色々附合つて見て……

杉村 先刻も三木さんの云われたように、そういう場合、戦争と云うことを大抵除外して考える、外国人でもそうですね。商売が出来なくて困ると云うことは、戦争して居ると云う現実をまるで差引にして、日本の商売人は許されて俺達にさせないのはおかしいぢやないか、日本が戦争して居ると云うことはまるで考えに入れない、支那人の方でもそう考えて居る。少くとも日本に対して非難する時には、今戦争をやつて居ると云うことをまるで問題の外に置いて、ものを言っていると云うこともあると思う。

三木 私はその点に就ては、西洋人も支那人も非常

に虫が良過ぎると思う。そこはやはりそれを抑えなければ、今後はどうも新秩序も何も出来ないから、日本としては次に出て行く方法をもう少し具体的に確保して、一步步々実行して見せると言うことが必要なんだと思います。

杉村

自分達は外の場合は兎に角少くとも理窟を云う時は戦争を差引いた商売人とか、経済状態と云うものを前提にして理窟を云いますから、それに對して日本は兎に角戦争の状態なんだ、先にはこうやる、相手がこうやるならこうすると云う段取を示さないで、動もすれば云い訳のようなことを云うでしょう。その点がもう少し説明の仕方が悪いと云う許りでなく、相手に納得させるだけの迫力がなくちゃいけないがそれがない。

三木

詰り国内体制が完整しないと云うか、色々な統一が不十分な為に、結局輕視されて居る。外国人だつて輕視して居る。というのも、やはり体

制が完整してないからだと思います。国内体制さえ十分に整えば、そんなに輕蔑出来ないと思います。

具島

そこに根本問題がありますね。

畑中

結局国内問題になる訳ですね。もう少し更生支那の課題に就て話を進めてもらいたい度だと思います。

今中

将来重慶政府と云うものと、新政權と云うものは、どう云う風に發展して行くでしょうね、それが、我々の問題ですね、どうですか。

伊藤

要人に御会いになった感想は如何ですか。

今中

どうも上海と云うところの觀察は……

中西

現在の汪派、中央政府の建前は民心を主にした建前から見て、明かに重慶政府との合流と云うことになるでしょうね、方向は……

今中

どう云う形で合流して行きますかね、向うから此方に合流して来るのか、此方が向うに合流し

て行くのか、その中間もあるでしょうが……

中西 もつと極端な場合もある訳ですね。

立石 僕は或る支那人に会ったのですが、偽わらぬところでどう考えるかと聞いて見た。重慶あたりが新政府に対してどう考えて居るか、貴方の主観を一つぬきにして話してくれと云った。所がその支那人は自分の主観も重慶の主観も同じようなものだが、と云う前提でやったのには、結局、日本が新政権に実際上の独立的な性格を与えて行く、と云うことになって、新政権が成長して行つて、そう云う場合には重慶の方でも、日本のやり方に対して応じて来ると云う考えも、或は起つて来る可能性が非常に多い。然しその場合にも、重慶の方が新政権に合流して来るとか、或は新政権自体として重慶の方に合流して行くと云う形は取り得ないだろう。新政権が解体して、新政権の多くの人間が向うに入つて行く、そう云う風な形態でな

ければ仕様がないと云うのです。一つの観祭と云うか、自分の主観なんでしょうが、そう云う希望はこゝらの支那人にも非常に多いのでないかと思ひますがね。

具島 重慶側では、やはり和平を希望して居る。一般の人達でも、汪政権と云うものが向うに合流することを考えてるだろうし、又汪政権の方では少くとも、主観的には向うが、此方に合流して来ると云うような形を考えてると思うのだが、結局、問題は力の問題になると思う。

伊藤 力と云つても兵力はないのだから、結局、支那の民衆の心を掴む、之は宣伝力だとわしは見ると、その可能性は何うかね。

具島 それも実質を伴ふぬ宣伝と云うやつは殆ど実がないので、何処迄実質的に民心を掴むかと云う問題なんですな。

伊藤 然しどん／＼對抗して行けば向うは窮迫す

る。こつちが段々強くなつてゆくと云えば消極的にその可能性が殖えて来る。

今中 此方が地の利を占めて居ると云うことは云えますな。その場合にそれを基礎にして民心が此方に集つて来れば良いが……

三木 それは汪政権は日本が援助しなければやれない。日本が援助する場合にそれが纏つて本当の方針を立てて行けば、僕は相当押せると思う。軍事的には占領して居るし、要所は掴んで居るし、本当に纏つて日本が汪政権を押して行くなら、相当行けると思う。

伊藤 こうなると結局、問題は又国内体制に引かかる。

中西 最も具体的に云えば、現在民心把握と云う点で当面して居る問題は三つあると思います。一つは従来云われて来た、即ち、民族資本に対する対策、もつとそれを具体的に云えば軍管理工場、そ

うしたものに對する対策があるし、もう一つは、もつと積極的な部門で新法制をどうするかと云う問題がありますし、最後に決定的に重大なのは現在の占領区域自体の食糧饑饉を如何に解決するか、こうした三つの兎に角非常に大きな、或る場合には命取りにさえ値するような問題があると思います。従来民族資本に対する問題は非常に沢山云われ、又現実には或る程度着手して居る。それで之は現在の見通しでは一応うまく行く可能性があると云う氣が致しますが、現在、北支、中支を押しなべて直面して居る食糧問題、民生の問題、それに対して何処迄決意を持つてあたり得る可能性があるかと云う問題が、結局汪政権自体の力量によることになると思います。

今中 物資ですね。

三木 食糧問題は殊に北支はひどいようですね。

今中 食糧問題を解決しようとするれば、協同体を完

成して行つて、満州、北支、中支あたりの生産を日本の資本を入れてどしどしやることと云うことが出来るようにならなければならぬのですが、然しそれをするにはどうしても支那工作を完成して行かなければならぬと云うことになりまして、互に關聯を持つてトートロジーになる。

三木 今はそう云う大きな問題でなしに、今数ヶ月の食糧問題、——国内にも持つて居る問題が問題なのです。

中西 結局、占領地区に於ける統制をどう云う風に処置するかと云うことがさしあたり何か考えさせる問題ぢやないかと思ひます。食糧問題に關しては……

山崎 それとともに、従前に我々が聞いた範圍に於て、物資統制はやめない、現地調弁の必要上緩めないと云う噂でしたが、新聞で見ますと四月一日から物資統制は軍の行動に差支えない限り緩和す

ると云う声明を出して居ります。それからその一つの具體的な現れとして、結局之も亦民族資本に對する妥協の一つの現れですが、大昌公司と云うものを創つて、五千万元の資本金で支那側の米穀商人を中心とした米穀搬出入の会社を作る事になりまして、之に米が出来たなら、その他の物資に就ても扱わせようとする風な一つの妥協の方法です。そんな訳でこれ迄は民族産業資本に對する妥協についてだけはつきり聲明して居りましたが、今後、四月一日から軍事行動に差支えない限り民族商業資本乃至貨幣資本に對する妥協を取つて行こうと云う事が新聞に載つて居りました。之は確かに賢明なる方策でこのコースを進められるならば絶対量の物資の不足は考えられるかもしれないが、或る程度のそれに対する寄与と云うものは出来るでしょう。この両方のコースをもう少し意識的に徹底的にやつて貰ひたい。そうすれば汪政權

の持つて居る一つの民族的な展望、これも又支那

民族の解放に対する具体的なやり方に違いないと思います、それに対する日本の協力が出来るのぢやないかと思う。このコースを少くとも汪政權が出来て半年以内の今年の八、九月頃迄に明確なる姿で纏めて貰いたい。そうすると、中西君の提出した問題の全部が解決出来なくても、それに対する非常な貢獻が出来るだろうと思う。然しこれだけでは、民族資本との妥協だけでは問題が解決しない。その半面は残されて居ると云うことはつきり附け加えて置かなければならんと思います。後の半面が即ち民衆の生活問題を何処迄新政府が真面目にやり得るや否や、現在我々の知られた限りに於ては考えても居ないぢやないか、そう云った方面に於ける民生問題をはつきり意識に上して居るかどうか……

今中 それは考えて居りますね、米の問題が一番重

要でしょう。

中西 米の問題を差当りどうするか、と云うことは考えて居るでしょうけれども、さつき山崎さんの提出された問題、之に附随して従来の遅れた農村を如何に進歩させて行くかと云う点の考慮が必要なんぢやないでしょうか。

今中 それが治安工作、資本力の問題になるでしょう。

中西 単に治安工作と云うことでなくて……

今中 農民の解放ですか、根本的な問題ですね。

中西 従来の桎梏と云うものを基礎に、根本的に片づけなくても良いと思うが、基礎の方法が何とかなれば良い。

立石 多少は考えてるぢやないですか。

山崎 物資の統制を緩めて貰いたいと云う希望ですが、物資の統制を緩めさえすれば民衆の不安はいくらか除去されるであらうと云うのです。之は

結局、僕達から考えるならば、民族商業資本に対して、日本側でもう少し考えて貰いたいと云うことです。仮令戦争遂行中であるとは云い乍ら、もう少し考慮を拂つて貰いたいと云う一面なんです。このうしろにもう一つ、商業資本でなく、民衆と云うものがある、之は物資統制が緩和されても救われない、戦争が起ろうと起るまいと救われないものであつたけれども、戦争が遂行された後は尚ひどくなつた。之を少くとも、戦時中のそう云つた負担を何とかして軽減してやる。而も戦前に持つて居つた彼等の桎梏、枷を何等かの方向に於て取りほぐして行く方向を新政権が進めない限り新政権の基礎は弱いと思う。そういう風な民衆は重慶であつても、新政権であつても同じことだが、結局彼等にもつと親しい従前の政府を支持すると云うことになりはしないかと思う。だから出

発の当初からやはり多くの困難はあるが、解決の

第一歩だけは切り出して貰いたいと思う。それに対して日本が協力して貰いたいと思います。

杉村 占領地区外はどうなんですか、差当りの問題として余り困つて居らないのですか。

山崎 同じだろうと思います。

杉村 占領地区に対しては、重慶側に対しても、お前のところ困るぢやないか、しつかりやつてくれと云うことを注文しますか。

山崎 そこが力関係ぢやないかと思ひます。そこを新政権がそう云うことであれば向うがそれに応じてやつて来なければならぬ。やつて来ない限りは、民衆の支持を失つて行く。

杉村 こうやつていては皆が困るから、重慶が何とを考えたらどうだと云う話をやる態度でなくてはいけない。日本に対する態度だけは話をすると云う、これでは新政権の将来も心配だ。

中西 若しそう云う風に新政権が採り得れば和平の

可能性と云うものは非常にあると思います。

杉村 僕もそう思います。ところが、日本に対しては統制緩和をしてくれ、と云う話をやるだけでは、それは出鱈目ですね。

中西 そうです。だから現在のところ片鱗が出てない訳です。多分為政者の頭の中にはそれがあると思います。その片鱗を実際に見せて、将来の見通しもそれに附け加えて出して貰えばこの和平運動は非常に実質的なものになる……

立石 そう云う点に就てのはつきりした話を御聞きになったことはありませんか。

今中 農民問題に就ては理論は持つて居ない様です。

立石 之は理論か何か知らぬが、私の又聞きですが周佛海なんか納税制度を変えたいと云うことを主張して居ると云うことを……

山崎 苛捐雜税¹の廃止と云うことは前から云われたので、何う云う形でやるかと云うことが非常に問題なんです……

中西 苛捐雜税の廃止及税制制度の確立、と云うことは新しい、新設される新政府であるだけ楽だ。

立石 やつて行く力があれば良いが。

石川 政治がいろ／＼な意味の力を欠いて居ては駄目でしょう。新政権の性格が問題だと思ふ。周佛海が何を言つた、どんなスローガンを出したと云うことは大した問題でない。そう云う政治的性格と云つたものを寧ろ検討すべきぢやないでしょうかね。

杉村 重慶に戦争の責任を課して追求すると云うか反省させる、こう云う風に人民を困らして居るんぢや困るぢやないかと云うことに就て手を緩めないだけの熱意がなくて、日本に対してだけ貴方

1 《かえんざつぜい》こまごまと雑多にかけられた重税

のところもそう云う風にしてくれれば良いがと云う。日本の方でも、あ、そうか／＼と云うことで、所謂占領地域に於て一生懸命に尻ぬぐいするのは新政府の為にもいけない。

具島 重慶に対して呼びかける為にも、俺のところでは斯う云うことをやって居ると云うことでなくては、アッピールしないのぢやないですか。

杉村 日本は甘いね。と云うことを向うで利用する材料になるのぢや之では困る。動もすれば日本が甘いと云うことを思わせる材料をこちらから提供しているのではないか。

具島 日本側としても痛し痒しの点ぢやないかと思えますね。

畑中 何うも有難うございました……。

底本：『中央公論』1940.5号

文化運動の基調

林 柏生：1902～1946（リンボーシヨン）汪

兆銘の秘書から、側近として政治に携わる。日本の敗戦後は蒋介石政権により処刑される。

三木 清

四月七日（1940.4.7） 於 南京首都飯店

林 柏生 三木さんは今日日本での指導的な理論家で

いられるし、そういう方との対談で私がどの程度に、何をお答え出来るか、一向に：

三木 いえどうして……いま現におやりになっている仕事や、今後の方針などに就いていろいろ伺いしたいのです。

林 柏生 例えば宣伝工作などに就いてですか。

三木 それもお伺いしたいのですが、先ずその工作が一体どう言う基本方針の上に立っているかと言うことに就いて……

林 柏生 宣伝工作に於ける基本的な部面として一番重要な事柄は、申すまでもなく先ず当面、親日的建設だと思うのです。

抑々あの鴉片戦争^{アヘン}以後、中国では極めて大きな変化が現れました。而もそれは抜き難い一つの心理的影響となつて、今日までずっと国民の中に作用しているのではないかと考えます。ちょうど明治維新と云う大きな歴史的事実が日本の国民心理に与えた影響に較ぶべきものでしょうか。これは現在文化的建設を考えるあらゆる場合には、忘れてはならないことだと思ふのです。

三木 というのは西洋文化の進出が東亜民族に及ぼした心理的影響のことなのですか。

林 柏生 そうです。この事情を先ず日本について考

えると、日本は明治維新と言う歴史的事実を通して、思想文化は勿論、その他政治に於て經濟に於て日本古来のものを保存しながら、その上に西洋文化の長所を吸収し、今日あらゆる方面に於て輝かしい成果を示めしていることは、これは日本のために慶祝して熄まないことです。

一方、中国にあつてはどうか、その影響の受け方に於て、全く反対の事情を示しています。同じ心理的影響、心理的刺戟を受けながら、かように結果に於て相違しているという事実を、私共は今日深く追求して考うべきではないかと思うのです。元来私は、鴉片戦争以来中国の国民が西洋文化から受けた影響を一つの心理的变化と観、心理の上での戦争であると言いたいのです。それではその心理的戦争、心理的交戦とは一体何かと言うと、先ず、西洋文化に対し、中国の一切の古い思想を打破して、西洋文化をもつと積極的に受け容れ、

新中国の立国の基本としたいと言う要求のあるのが第一のものです。第二は、中国古来の国情の上に西洋のものを取り容れるに当つて、余りに多くその政治的要素を取り容れたがために、それが却て中国を善導するに至らなかつたと言うところから、西洋文化を敵視しようとするものがあります。この二つの傾向が今日まで相互に抗争し合ひ、国民の心理に深刻な混乱を生じていると私は観ているのです。かような心理的交戦を是正し、明確な方向を指示すると云うことが、今日先ず対策として考えられねばならないと思うのです。

三木 その対策をどういう風にお考えですか。

林柏生 その方策として、今中国に於ては「文芸復興運動」が必要だと思ひます。

この運動が飽くまでも東亜的な基礎の上に立たねばならぬことは勿論です。即ち中国の文化の本質的な復興が必要なのです。今次の和平運動も亦、

当然この心理的交戦の是正を目指して進むべきであり、私の言う文芸復興運動はその基本的な方針であるのです。

私の申し上げたことは、概念的でアウト・ラインに止まりますが、三木さんからはもっと深いものが聞けることと思います。

三木 中国の文化の復興を考えるにしても、何か影響なり刺激なりが必要なのではないかと考えます。そこで、貴方のいわれる文芸復興運動においても、西洋文化との接触が問題ではないかと考えるのですが、西洋文化について何を基本的なものとして見ていられますか。

林柏生 勿論そう云う意味での刺激がなければ、この運動も反響なしに終わってしまうでしょう。東洋文化の根本は道義精神であり、その上に西洋文化の特徴をなす科学精神を摂取してゆくことが大切であると思います。

三木 前の新生活運動では、一時儒教を排斥したが、やがてそれを或る程度尊重するようになったと覚えていますが、今日に於て儒教はどれほどの意味をもっているのでしょうか。貴方の場合、儒教と云ったような特定の思想を基礎とするのですか、それとも極く広い意味での東洋的な感情と言ったものを基調とされるのですか。

林柏生 あの新生活運動は、多分に政治的意味を持ち、その現れに過ぎなかつたために、私の言う国民の心理的影響は少しも改善されることなく、その点での運動は失敗だったと言えるでしょう。例えば儒教ですが、今その根本問題の批判は別として、この儒教思想は、中国にあつては何千年かの歴史を持つている関係から、これを直ちにたちきめることは出来ないのみか、今なおこれが中国人の気持の上に相当影響している事実是否定出来ませんまい。いわゆる新文化運動は唯物的な傾向が強

かつたわけですが、一体に中国人の哲学思想は唯心的でも、唯物的でもないのです。中国人を表面から見ると非常に唯心的に見える、然るに實際生活の側から觀察すると唯物的とも考えられる点が多いのです。即ち単に唯心的でも、また単に唯物的でもないのです。この辺の事情について、もつと考察を深める必要があると思います。古来中国には知ること易く、行ふことは六ヶ敷いといった思想があるのですが、孫文先生の哲学によると、「知は難く、行ふは易し」というのです。これは一見前の理窟と相反するように見えますが、實際はそうでなく、孫文先生は、知を重じ行を輕んじたのではなくて、行ふことの必要と同時に、知ることの必要を言われたのです。先ずはつきりと知らなければ行ふことが出来ない、同時にまた行わなければ知ることが出来ないと言うその反面の意味に注目すべきであると考えられます。これ

はつまり認識と実践との有機的な不可分の關係を強調されたわけなのです。この説は王陽明の知行合一論と全く同じものと私は考えます。日本に於ても王陽明は盛に研究され、専門の学者や研究書が沢山出ているようですが、私も日本で刊行された「王明與禪」と言う書物を見たことがあります。汪（汪精衛）先生も王陽明の説にはたいへん興味を持たれ、先生は身を以てその説を実行していられると言えるでしょう。尤も私は王陽明の學説を専門に研究しているわけではないのですが、ともかく我々の運動にとって重要な思想であると考えられます。

三木 新政府の方針が、「文芸復興運動」と言うような広い、大きな包括的な言葉で表されたことは、甚だ悦ばしいことです。

元来、文化と政治との關係についての考え方において、東洋と西洋とでは相違があるのではないで

しょうか。つまり西洋に於ては文化と政治が二つに分れている。ところが東洋の伝統に於てはこの二つのものが切り離しえない関係にあつて、一つのものとして密接に結び附いていると思うのです。政治家は同時に文化人であるというのがその理想なのです。ですから政治運動は文化運動と別のものであつてはならないので、中日の今後の結び付きも、やはり文化運動を通して行われねばならぬと思うんですが、この点如何お考えですか。

林柏生 私も全く同感であると申し上げるほかありません。

西洋では、科学文化の進歩が工業の発達となり、それが分業の発達を促したのですが、そのように政治と文化とが分化し分離してしまったのです。しかるに東洋では政治と文化とはもつと密接な関係にあつたのです。政治が文化を動かし、文化がまた政治を動かして来たような次第で、今次の新

政府においても、この文化過程と政治過程とを如何に密接に調和させて行くか、と言うことが差し当り大きな問題だと考えるわけです。ところで茲に是非申しておかなければならぬことは、この文化運動と政治運動との結び付き方だと思います。我々の東亜建設に於ては、文化運動を政治運動のための道具として考へてはならぬと言ふことなんです。共產主義はその文化運動を全くその政治運動のために利用しているのです。そう言う文化運動に真の文化的発展のありえよう筈はないと思います。文化運動を政治運動の道具と見る位なら、私はむしろ政治運動の方が文化運動の道具であると考えたいのです。歴史的に見てもわかる通り、文化運動は悠久的なものであるに對し、政治運動は一時的なものなのです。即ち政治運動は広い大きな文化運動の流の中の波であるとするべきでしょう。尤も政治と文化との、何れが真に悠久

的なものであるかは、直ちに決定出来ない。人類あつて同時に政治もあり、文化もあつた次第ですが、その何れに重きをおくべきかは、それぐゝの場合に實際家の判断に委ねべきことなのです。今我々としては政治と文化との結び付きについて基本的な認識を持つべきであつて、つまり悠久的な文化の発展に対してその都度々々の政治を配合してゆくことが大切な問題なのです。政治が真に文化に配合されていない事実がありはしないかと冷静に反省さるべきです。

三木 これは今の問題と關聯することですが、平和を愛するということは中国の国民性であると言われていますが、それは政治にまして文化を愛する中国人の氣持の表れとも見られます。そしてその文化は中国人にとって生活と融合したもので、生活とは別のものではないのです。然るにそのような民族の性格をもつた中国であつたために、欧米

勢力の進出に伴い、追々その政治的壓力に押されて、今日の半植民地的状態を生じたとも考えられるのです。中国の解放は言うまでもなくこの半植民地的状態からの解放であるのですから、茲に文化と言つても、もつと積極的な政治的意識となつて表れて来なければならぬのではないのでしょうか。日本は欧米勢力に接觸して以来、政治的軍事的なものを基礎として進んで来たのですが、尤もそのために弊害もなかつたのではないのですが、兎も角、中国に於ける当面の文化運動としても、強力になるためには政治と結びついていいのではないのでしょうか。

林柏生 私もそれには同感です。政府の宣伝部の役割は政府を指導するところにあるのですから。

三木 これから日本と中国とが提携して、東亞の復興を図るという場合、文化上においては、さし当りどんなことをやらねばならぬとお考えですか。

林柏生 私が今第一に考えることは、日本に於て

その優秀な評論家や知識人の鞏固な文化団体が設立され、これに対し中国に於ても同様の文化団体を設立し、共同の目的に向つて、互に腹藏のない意見を交し合う、そう言う中日文化協会の設立など、目下一つの方策だと思います。

三木 それは勿論いゝことだと思います。然し從來

も日本の政府は、そう云う目的から随分沢山の人を中国に派遣したわけですが、私にはそれが必ずしも成功したとばかりは言えないと思われるんですが、一体何故でしょうか。そこに改革すべき点があるとするれば、それは何でしょうか。

林柏生 慥かに一つの御意見だと思います。他に例を

とれば嘗てソ聯との間に中ソ文化協会と言うものがありました、それがやはり失敗でした。その理由はそれが余りに政治的であつて、文化運動を政治の道具としていたためだと思います。今後中

国と日本との間では、こう言う行き方は絶対に排除すべきです。私の考えではこう言う文化協会を政府は援助するが、その活動は文化人に任すべきで、政府自身が指図すべきことではないのです。新民会、大民会などもつと文化的な面を強調していいのではないかと考えるんです。

三木 これまで日本のいわゆる文化工作は、日支

の文化提携と言つても、日本と中国とを同じに考えるような風があつたのではないかと思います。日本と中国とではその歴史とか伝統とかが違つており、その個性をお互の提携によつてそれぞれ有効に發揮させるところに民族的文化の發展があるのです。しかし民族主義は難しい問題で、中国の民族主義も、いまのうちに、うまく指導されぬ限り、やはり排外的傾向をとる慮れがないでしか。これらの問題を如何に処理すべきものとお考えですか。

林柏生 文化工作において、日本的なものを中国

人に押し付けようとすることが不適當であることは、今日日本の知識人の間では大分反省されているようです。中国についても同じようなことが言えるのです。従来は日本から来るものは凡ていけないと決めてかゝる者が少くなかったのですが、然しこれは今日大分是正されたと思います。

中国人を指導する場合、我々は彼等の心理の動きをよく見究めてかゝらねばならぬのです。中国人は一見極めて柔順のように見えますが、その心理に沿うことが必要なので、若しそうでなかったら、いつしかそれが反抗と言う形で表れて来るのです。要は人民の心理に芽生えたものを忠実に見て行くことです。

民国十三年の革命の初期、当時国民党員は百人ばかり、これに数人の共産黨員が加わっただけの少数で、あれだけの成功を取めえた理由は、やはり

その人達が巧みに人民の心理を捉え得たからです。尤もこれは政治運動で文化運動ではなく、若しこれが文化運動だったならその成功はもつと遅れたかも知れませんが……。しかし文化運動の進度は遅いが、その影響はそれだけ確実で持続的なのです。

元来、中国人を対象としてものを考える場合には、先ず第一に「国家の独立の自由」第二に「安居樂業」——この二つのものを追求する心理作用を掴めばいゝと思うんです。こゝまで言う文化問題を離れ、政治的に傾くが、これは文化の上に表れる政治性として見逃しえないことと考えます。先ず第一の心理的対策が行われて後、第二に及ぶべきで、更に進んでは今日の中国の事情と日本の関係とをよく国民に知らしめ理解させることです。これは先きの対策が出来上つての上のことですが……。

三木 中国人はもつとよく日本を理解すべきだと思います。

これまでの中国に於ける日本研究ではまだ不十分だったのではないですか。例えば日本の歴史を観るにしても、これを全体として把握しないで、特に明治以後の歴史を局部的に観ると言つた具合ですが、こう言うことが毎日的傾向を生じた一つの理由ではないでしょうか。いずれにしても一部分で全体を判断するということなく、もつと日本の全体を観て戴きたいし、互に信頼して、根気よくやつて行くことが必要だと思ふんです。これからは我々も中国人民の全体に頼らねばならぬと思ひますし、同じく中国人も日本の民衆を信頼して欲しいと思ふのです。こう言う風に進めて行くことがお互い文化人の仕事であると思ひます。

林柏生 一部によつて全体の認識を誤ることは遺憾です。相互理解に於て欠くる処を今後はお互いに

補つてゆかねばならぬということは同感です。私の言う人民の心理的建設も亦そこに根柢があるわけなんです。中日人民の積極的な相互理解、そこから中日提携は出発するわけですから……。

三木 話は一寸変わりますが、重慶側への宣伝はどう言う方向をとりますか。

林柏生 鬭争宣伝です。勿論理論鬭争が必要なのですが、これを一つの文化運動として展開するよりも、もつと政治的に重点がおかれているのです。その第一は、事実の宣伝です。これは、重慶側に我々と志を同じうする者があり、而も彼等が出て来ないのは、この和平運動の成否にまだ疑念を持つてゐるからです。尤も我々はいま国民政府還都の基礎を作り上げたばかりなんですが、これを全面的におし進めて行く、即ち我々は飽くまでも実践で示して行くつもりです。真に和平を希望し中国の建設を希望するならば、一先ず疑念を

去つて実行しなければならぬ。そう言う希望は我々に参加して実践してこそ事実として現れるのです。日和見主義は不可であつて、実践によつて疑念もなくなり得るのです。兎も角、当面の仕事としては共産党の理論が中国の建設に絶対不可なることの理論的展開、更に欧米依存派への宣伝工作、日和見主義者への宣伝が挙げられます。

三木 そう云う場合に於ても日本と中国との共同戦線がもつと必要であるとお考えになりませんか。

林柏生 それは必要でもありますし、またやりようによつては可能のことと思ふのです。

底本：『中央公論』1940.5 号

民族主義の問題

周 佛海：1897～1948（ヂョウフオーハイ）

本名・周福海、日本留学中は中国共産党に近付くが、汪兆銘政権に参加。蒋介石政権にも加わるが、1940年汪兆銘の新政権に加わり、日本の敗戦後は蒋介石政権下で死刑判決を受けるも減刑されて獄中に死去。

三木 清

四月九日（1940.4.9） 於南京財政部

周佛海

この頃はいつも非常に忙しく、只今もあとに数人の客が待っているような次第で、貴方とゆつくりお話しする時間がなくて残念です。それにお答えするだけの充分な準備ありませんので

……

三木 それでは早速お尋ねいたしますが、先ず民

族主義の問題です。これは今日、中国の問題であり、また日本の問題でもあり、更に広く世界の問題でもあると考えます。この民族主義の問題に就いて貴方の御意見を伺いたいと思うのです。

周佛海

民族主義は、要するにすべての民族の独立と自由、平等を主張するものであつて、孫文先生によるとそれは三つの要素を持っています。その第一のものとして、中国人即ち漢民族ですね、この漢民族の自力による自己の解放が挙げられ、次に第二のものとしては、国内に於ける他民族、例えば西藏族とか蒙古族とか言つた民族の解放が挙げられます。最後には一切の被圧迫民族が自由平等にならなければならないと言う、つまり国際的な広がりを持つて来るわけです。そこで今後、中国だけの独立でなく、更に他の被圧迫民族の独立が問題であるのです。

三木 ところで民族が自己を解放して独立になる

というには政治の力に依らねばならぬと思います
が、現在貴方がたの考えられる民族主義と結び付
く政治の方向はどのようなものなのか。

周佛海 中国の民族主義は、国家主義とは違うの

です。英語では同様にナシヨナリズムと言いま
すが、このナシヨナリズムという言葉には、何か侵
略的な響きがあるようですが、我々の言う民族主
義は、そのような侵略的な意味を少しも含まない
ものです。

我々の言う民族主義と国家主義とが違うわけは簡
単だと思います。つまり民族と国家とは根本的に
違った現象だからです。御承知の通り、国家は人
為的な力によつて作られたものであるのに対し、
民族は血統や生活、或は言語、宗教、また風俗習
慣といった自然的な条件として出来上つて
いるのですから……。言い換えると、民族主義は

王道的であり、国家主義は覇道的であるというこ
とになるでしょう。

三木 民族の基本的な概念はお説の通りでしょう

が、今日、中国が近代国家として生長するために
は、そういう自然的なものの上に、政治的な力が
加わらなければならぬと思うのですが、その政治
の方向についてお聞きたいのです。

周佛海 中国も嘗て国家を形成する場合、漢民族は

やはり、その力を以て周囲の民族を経略しまし
たが、今日では、自由平等を望みこそすれ、そのよ
うな征服の意図は少しも持たないのです。です
から西藏が今日完全に独立しイギリスの勢力から解
放されるなら、中国は喜んでその独立を尊重する
でしょう。これは今日ソ聯の手に操縦されている
外蒙に対しても同じことです。

三木 民族は固より極めて古くから存在している

のですが、それが近代的な民族国家として形式さ

れるためには、世界の何処の国の歴史を觀ても、やはりその自然的なものの上に一定の政治的な力が働いていると思うのです。中国も同じプロセスを辿つて來つたのではないでしようか。現に中国は近代的な民族国家として生長するために民族主義を強調して來たのですが、その民族主義も、中国が外国勢力に対しておかれてゐる關係からいへば、欧米に対して對抗的でなければならなかつたのに、それを特に抗日という目標に従來の指導者がもつていつたのは、その民族主義が政治的意味を含んでゐることを実証するものではないでしようか。

周佛海 私の言つたのは民族の問題で、民族主義の問題ではなかつたのです。

三木 私は最初から民族主義の問題についてお尋ねしているつもりでした。それでは新國民政府の民族主義に就いて更めてお伺いしたいのです。

周佛海 一方に於て中国の獨立自由を重んじ、他方に於ては第三国の獨立自由を尊ぶということを基本として、他民族には平等に合作する……つまり民族の獨立、自由、平等は如何なる場合に於ても絶對的なものであつて、或る民族と特殊關係を結ぶ場合に於ても、その特殊關係は合作の方法に關すること、根本の思想としては飽くまでも民族の獨立、自由、平等であるのです。それですから、我々の關係を持つ相手の民族が、若し侵略的なれば、われわれは、それに対して反省を求めなければならぬと思ふのです。

三木 同じ民族主義といつても、日本と中国とは發展の段階が違ふとお考へになりませんか。日本では明治維新以後封建制から近代的な民族国家へと急速に發展してきたのですが、中国ではこの変化が遅れて現れてゐます。そこに同じく民族主義といつても喰ひ違いがあり、日本の民族主義と

中国の民族主義とのこの喰い違いを調節してゆくことが現在の一つの重要な政治的問題ではないでしょうか。

周佛海 民族はどこまでも自由平等であるべきもので、両国の民族主義に発展の段階の相違があるとすれば、中国が消極的であるのに対し、日本は積極的であると言うことができるでしょう。

三木 お説のような民族主義の主張の下に、それぞれの民族が独立、自由、平等であるとして、そこにそのような民族を結び付ける何か新しい政治的組織がなかったら、その独立、自由、平等の主張から却つて摩擦が生ずることがないでしょうか。

周佛海 さあ……

三木 現在の政治的段階の認識が決して来ないと、ただ民族の自由や平等を望んでも、その実現が困難なのではないでしょうか。

周佛海 政治的な組織と言われると、例えばどんな……

三木 たとえば東亜の聯盟とか、協同体とか言ったような……。民族の独立、自由、平等といったものの上に何かそう言う具体的な形をこれまでに考えにありませんでしたか。

周佛海 それは極めてむづかしい問題で、こゝに即座にはお答えしにくいのです。

三木 ともかく今日は、以前の民族国家成立時代とは世界の政治的、経済的、社会的情勢も大分變つて来ているだけに、単に民族の独立や自由を考えるだけでは足りないので、そこに何か民族主義を超えたものがなければならないのではないのでしょうか。

周佛海 われわれの言う民族主義が要求するところの民族の独立自由は、最低の条件であつて、必ずしも最高のものではないのです。

三木　そういう風に表現するなら、最低のものは

まいった御意見を伺いたいものです。

最高のものによって規定され、従って民族主義といつても内容の変つたものになつて来なければならぬのではないでしょうか。ともかく独立な民族と民族との結合を新たに考えてゆくには、政治、経済、文化の各方面において従来言われている民族主義とは何か違つた新しいものが作られて来なければならぬとはお考えになりませんか。

周佛海　大分話が機微の問題に触れて来ました。何

しろ今日はこういう忙しさですし、またこういう問題は、私もよく考えてでなければ、お答えできませんから、なんでしたら、御質問を文章に書いて渡して下されば、私も文章をもつてお返事します。

三木　民族主義の問題は、日本と中国とが提携してゆく上に、根本思想に関する極めて重要な問題であると思ひますから、何かの形でいつかぜひまと

底本：『中央公論』19405号

世界史的に見た東亜問題

三木 清

細川嘉六

尾崎秀実

平 貞蔵：1894～1978、山形県出身、東京帝国大

学政治科卒、社会思想家、法政大学教授、満鉄参

事、昭和塾。

友岡久雄：1899～？、昭和研究会東亜経済ブロック

研究会

森山・本社東京支社長

森山東京支社長 それぢや一つ、平さんに御司会

願ってこの日本の高峰を行く権威の方々に支那問題に限らずヨーロッパ戦争も恰度今日白熱化¹して

1 1939年ドイツ軍がポーランド侵略を始め、この年ノルウェー・デンマークを手中にし5月オランダ・ベルギーを攻め始める。

いる時ですから世界史的にみた東亜問題というところで御進行をねがいます。

平

それぢや森山さんのお手伝い役でやらして頂きます。どうも私自身いろいろの問題の掴み方が非常に中途半端で考えが※²ついていないので私が司会したのでは話す場合進行が不十分とも思いますがその点承りつつ責めを果たして行きたいと思えます。

私自身が先ず感じますことを申し上げますと、今あらゆる方面が非常に重大な時期に立っている。

日本が非常な、決定的な時機に立っていると感じますが、それにも拘らず何となく目標もはっきりしない、何処かに問※³がある、何となく沈滞感があるといつていいといえるのぢやないかと思う。そういう沈滞感というものがどういうところから

3 2

つぶれてしまっているが「纏」だろう
つぶれているが「題」だろう

来ているか、それが日本国民の民族的目標がなかったからか或いはもつと複※【雑】な原因があるかどうかというようなことを一つ尾崎さんから……

尾崎

僕は……深い問題の考え方なり掘下げた話

は細川さんにお願ひするとして——今の平さんの云われたようなことはこんな風に感ずるのです。拙い比喩ですが——非常に大きな世界的な変化というか大きな変革というものが大きな瀧になって落ちている。日本は従来はまア瀧の上の方に向かって、流れに向って一生懸命ボートを漕いで居った、一生懸命に上つていたところがまあ最近になってその漕いでいるのをゆるめて流れのままゆつくり行こうということになったらしいというような気がするのですね。

それで問題はそれにも拘らず、ボートがとまっていかぬとか、舳先がくると後の方を向いてその

まま流れ下つてはいかぬということになるのぢやないかと思ひます。その中に乗っている連中は舵を執っている気持でいるのですが、ある人はとにかくここでは問題にならないのだ、いつかその時にこそほんとうにみんなが気がついて努力するのだ、新しい努力というようなことを考えていないのぢやない。全体として考え方は今、平さんのいわれたように「流れている気がする」だ※【け】でそこに沈滞があるのですね。非常に妙ない方なんだけれども……

平

どうでしょう細川さん。東亜新秩序建設といううような非常に困難ではあるが、どうしても遂行しなければならぬ歴史的な使命が、先ず言葉の上にはつきり確立されたというような状態になっておりますが、そういう目標に向って進行するのに今尾崎さんが云われたように実はそこに行く人達の目標に対するむつかしさ易しさについて判断が

区々であつたことが分つて、依然としてそれは比喩は比喩としてそこに沈滞感があるというお感じがありませんか。細川さんにそのお考えをお訊きしたいのですが。

細川 あまりはつきりしたことは申し上げられませんが、まあ全体として国内に多少沈滞した空気があるということは誰しも認める※【訳】でしょう。そういう空気を起こすという責任は政治の局に当るものにあると云わなくちゃならぬのですが国民からいいますとね、表面的にいえるこの沈滞は先ず根の深いものでない。国民というものはもつと底力をもっている。指導さえして行けばこんな沈滞した状態を示すものぢやなかうと思ふ。成程いろいろな困難に当面しているが、国民がほんとうによく指導されておればこんな困難にはヘタバル程のものぢやなかうと思われる。それで問題はこの動揺し沈滞した状態を打破するた

めの重要な問題は政治の局に当るものが拙くやつては駄目だという事になる。

尾崎 ※【観】方によつたらこの一種の沈滞現象というものは余裕の産物でもあるのですよ。詰まり外部から緊迫した、内部からでも緊迫した状態か、ほ※【消えているが「ん」だろう】とうにあればいくら指導者が緩んでいてもそういう※【つぶれている】安の気持は起らないのぢやないか。そういう関係もあるのですね。

細川 そこで、やはり、政治の局に当っているものは当を得た事をやっているかやらぬかは別問題としまして、危機が国民に犇々と迫るようになれば、これはまた政治の当路者も緊張してやることでしょう。

平 細川さんのいわれるような国民は確りしているが、政治の指導者が云々というような基本的な考えはある訳だと思います。一体こういう重大な時

機に次々同じような政策をもつ内閣を送り迎えるようなことに対して国民が黙っている筈がない訳だと思えます。単に政治指導が悪いということだけでなく、もつと日本国民の——何というか国民に対してもう少し我々が此処で批判してみることがあるのぢやないでしょうか、やはり政治家軍人と云った処で結局それぞれその生活に即した国民の中から出た人でしょうか？

6/5

細川 私のいう、国民というのはもつと底力があるという意味は、国民というものは我等が考えるような理論的に物を考える性質のものぢやないでしょう。その日その日の稼ぎに追われて朝から晩まで土と闘っている百姓労働者も同じです。その人達は政治の局に当るものの言うことをそのまま受容れて、そのままそれに従っている。ずっと農

村や都会なんかの様子を見て来ますと、日本国民ほど政府に対して従順であるものはない。よくそのいわれる所に従って全力を捧げる国民は一寸ないのぢやないかと私は思います。詰まり、政治の局に当るものの良い悪いはどっちにしても、使われるままに指導されるままに動くという習わしを国民は持つている。これを私は近年痛く感ずるのですがね、そこでその困難に堪え得る力を、ここにその力を付けたらいいかということについて、はつきりしたものを持たせなくてはならないと思いますね。

平 どうして国民全体にそういう力を起こさせることが以【誤植「出」】来るか？この重大な時機に処する国民としてのほんとうの力の発揮をさせるのは一体何が一番必要かということが問題になる訳ですが、友岡さんどうでしょう？

友岡 こういふ問題はやはり、僕も細川さんの仰

るようにやはり感ずるのですが、我々その国民が真に無氣力であつて困苦に堪える力がないなどとは全く僕等自身も信じない。そういうような力がまだまだ¹※してあるのだが、どうも最近の日本の歴史では今度のような重大な問題に打つかつたことはないのですからわかりませんけれども然しそういうような力は国民自身がある程度持つておつて、それを出し尽くしておつて無氣力の結果所謂沈滞感があるというのぢやなくて——やはりその点で非常な政治上の問題があると僕等は全く同感に思うのです。殊に国民がそういう風な力を發揮するためには、どうしても、その目的を国民自身の目的に持つて来るように教え親切に導かなくちやならぬと思います。非常に小さい国、狭い土地に包まれていて中小工場にも未だ曾て十分な組織や指導を政治的に与えられたことはない。個人

1 つぶれているが振仮名は《かく》と見える

個人を叩くと相当の考えを持つているし、政治的に非常に健全なものを有つてゐるのにそういうものを導く方法なり、組織する方法、国民の力をかき立てる方法が未だ十分でないと感ずるのです。その点では政治的にやはり再編成というものが要求されるのですけれども、最近の一つの原因はヨーロッパに於けるドイツの非常な電撃的な戦争策戦が着々成功を収めてゐるというようなことが、日本の政治家にとつて、また何か自分達の直接やらなくてもいい幸運を²※しはしないか、何か非常に好都合な解決が打込まれやしないかというように期待することがあるように思うのです。けれどもドイツがあゝいうような戦績をもたらすまでの、今までやつた準備というものは実に大きいのです。この国政の運営の場合も避けられる摩擦

2 違ふ 振仮名は《もたら》の様に見得るが字形は「齋」とは

というようなものは最少限度に避け、やむを得ず避けられなかったというでもその過誤に細心の注意を払って導いてきた。この導き方その※※あるいは如何に国民が騙されておつても政治的には完璧といわれると思うのです。

平 そこでまあ国民に対して大いに信頼することになるのですが、国民全体にどうすれば更に実質的希望を与えるかということについてはいろいろ議論もあるだろうが政治指導層が国民に信頼を受けるということにならなければならぬ。その問題にはあとでもう一ぺんふれるということとしてそういう風な問題は支那の場合にはどうでしょう。尾崎さん、支那国民と指導者の関係について……。

尾崎 これは国民自体の素質の善悪というような問題もそれは勿論あると思います。文化的な水準の高い低い、その文化内容にもあるでしょうけれど

1 「強請」の様にも見える2字目の振り仮名は「せい」

ども、教養の問題もあるでしょう。経済生活の水準問題もあるでしょうし、まああらゆる面があるだろうと思います。そういう意味ぢや細川さんのいわれるような日本の田舎を歩いて見て感ずるような意味での良さというものは変らない。支那農民の一人一人労働者、アマ、ボーイの中にも十分あると思います。苦力の中にもあると思います。だからそれから先刻の問題の横道に触れるのですが、この商業資本なんかの毒した面が日本人にはかなりあると思う。日本のこれまで支那大陸に発展しているある面には、少なくとも日本人の国民的良さというものを持たない、いやなものが最近まであった。今でもあると思います。

それは僕はどういう道徳の問題もこの場合挙げていい問題も確かにあると思う。然しそれは先程の

2 阿媽・外国人に雇われた現地の女性。
3 クーリー半奴隸的労働者、定職を持てず低賃金の肉体労働者。

いわゆる政治力に含まれる問題だからそれを関係づける政治力の問題になります。支那問題という大きな問題というものは結局、政治指導という問題で支那がずっと追¹つて来たその方向その政治方向という問題ぢやないかと思ひます。それは日本から見たら都会の悪い面もあるだろうし、それから厄介な面もあるだろうと思ひますけれども、支那が、あれだけ遅れた民衆というのが一つの方向へ行くという所には非常な大きな力が政治指導力にあるということは間違ひない問題と思ひます。近年での問題だけを見ても国民政府がやつた所だけを考へて見ても新生活運動の如きも我々はい々は輕蔑したものだけれども、その中にも政治と結びついた一種の迫力というものがあつて、そして非常に遅れた国民をあんなに引きずつて行こう、そして然も政治的な一種の理想と結びつけて

行こうというような努力が見えている。それが日本の国民精神総動員運動なんかでいつている目先だけのことで大きな政治的な行動と切離されたような運動よりはもつと政治性を有つていたように思ふのです。一寸頓珍漢なこともチグハグなこともあるのだけれども活力も旺盛で推進力も持つていたという氣がするのですがね。

617

平

支那が国家的な方向というものを目指して進む場合、支那の指導者と国民の關係は指導者が国民全体をリードしそれに順應せしめて行こうという点は尾崎さんのいわれることと同感だが、日本人はそれがまるでチグハグで指導者の意圖が国民に通じないから引つ張つて行けない、支那の指導者が国民を引つ張つて行くという力は非常なものだ。但し日本でも明治維新後なんかは政府が国民

1 「迫」の様にも見えるが振り仮名は一つ

を引つ張つて行く力が相当強かつたそれに類する
新支那の今後の政治は果たしてどうか。

尾崎 目標が問題ですね。

細川 その目標が国民を真から奮起させるものでなく
てはならない。

尾崎 根本的には違つた点がありますよ。それは較
べた場合、日本の立場効果の限界はどうか、そう
いう風な総合的な効果はどこに求むべきかとい
うような考慮が必要かどうか大いに考えねばならぬ
死活問題となれば各々の立場に即してエナジー
活動力というものは自ら掴めると思います。それ
と違つた方の経済力とか社会の持つ圧力とか、い
ろいろ関係部門でそれらから総合的な結果として
何を掴むべきかという問題でもそういう意味で単
純なものと較べられない訳でしょうね。

平 細川さんの仰るように国民が非常にはつきり教
えられて方向を与えられるならば付いて行く。処

が支那政府と国民の間は——僕なんか考えると
東亜新秩序を作る日本がここに標準を置いて行く
か東亜全体のためはつきりしているのです。従つ
てそこに標準を置いて内外の政策を樹てて行くとい
う他に途はないと思います。東亜新秩序を作る
ためには国内の体制を考慮にいれなければならぬ
が——仮に具体的にいえば利に鋭い実業家なんか
が付いて行くのに日本の資本主義段階が発達して
いるためにもう一步進んで行くべしとする人、ま
た今の状態でいいという両方がある。

尾崎 東亜新秩序建設の考え方も随分いろいろな
ものがあるが、これは私の考えでは結局支那との
関係は支那をやつつけてしまつてそこから何か
取つて引揚げるといふ形になるのではなくつて詰
り勝つたの敗けたのといふような形でなく自らそ
こに抱き合つた形でこの中に日本の本来の要求な
り何なりを向うに受け容れられる余裕を残して行

くという形で落着かせるのです。この中には日本の実業家の要求よりも支那民族資本の要求よりもっと進歩的な他のものが民衆の間から起つて来るかも知れぬと私は思う。これは※※【重慶】でも考えていない、新政権も日本もまだ考えていないが当然問題になつて来ると思います。そういう風な処においてはじめて新秩序のほんとうの姿が出て来るのぢやないかと思ひます。然しこれは非常に長い時間を要するでしょうね。

細川 平君が先刻あゝいわれたけれども国民は政治当局によつて対支あるいはアジア政策についても、目的はよく示されているが、国民が理解し得ないということなのですね。

平 東亜新秩序の建設がですね。

細川 インテリの一部には東亜協同体とかいうことは合理的なこととして受けられるが、新秩序論者には済まぬけれども国民というものから見ると

はつきりここで判つていないかも知れぬ
平 区々に理解している。

細川 私のいう意味は、国民の大部分からいえば全体的にはインテリであるとは考えられない。国民を離れて国家もある訳ぢやない。今の政治の局に当るものが国家的目的というものを強調して、民衆はどう考えているかどうかを欲しているかということをやあまり顧みない。

財界の人達が支那に対する経済的要求を有っているそれらのものが東亜協同体、東亜新秩序を作る必要適正なものであるかどうか。国民は財界だけが肥えるということが国家的目的の重大な部門をなすということは欲していないですね。又例えば国民の間には国力の限度ということを考え、話しているという向きもありますね。国民の常識というものは政治家よりもはつきりしている。

尾崎 荒川財務官¹がイギリスから帰ってきたの話を

向うは買※【溜】等をするものは一人もない。ガソリン券なんか余ったり返すというが非常にうまくやっているそうだね。事実だろう。これもやはり政治の問題になるかも知れぬ。

平 経済の問題でもある。アメリカ等で恩給生活しているものが他の職業につくと恩給を返すというから政治の問題でもあると同時に経済の問題だよ。

尾崎 教養の問題、文化の問題でもあるな。

平 細川さんは違った立場で日本の国民はい、ということを非常にいわれましたが、そういう点ももつとほんとうに考え、国民に解らせるのにはどうしたらいいか、その問題を一つ。

¹ 荒川昌一(1891-)、東京帝国大学法科卒、大蔵官僚、外国為替管理部長としてイギリスに三年、アメリカを経由し1940.3鎌倉丸で帰国。「戦時下の英国より帰りて」

尾崎 それはあるよ。広い意味で自然政治問題に帰

着する今の日本の交通道德に現れている所なんか非常に酷いよ。外国人ばかりか、支那から帰った軍人さんがびつくりしている位だから相当酷いものだね。

友岡 とにかく買溜めなどはイギリスではないというが問題はだね、イギリスでは政府が非常に親切なやり方で、例えば小さい子供病人には※【「卵」の様に見えなくもない】を必ず配給する、あるいは牛乳は必ずやるという風になっている、日本でもこんなシステムが確立していれば買溜はない、闇取引もしないで済むよ。

平 統制経済を徹底的にやるとすればもつと全面的に国民経済というものをほんとうに全面的な利害から出発せしめる必要があるだろう。

森山 どうですか、一、二次の問題に移って戴きましようか。

平 それぢや日本と支那とどちらが国民の指導者

と国民との間の歩調が合いますか、尾崎さんに承りたいのですが、この問題と併せて承つて結構ですが、現在新政府が成立してまあ日本にも容認使節が来て、こつちからも使節が行つた特派大使が行つたのだが重慶政権は重慶政権でなかなか積極的に抗戦に出ている。やはり抗日支那と親日支那と並んで行く状態がつづいて行く他ないと思いますが、一体支那はどう動いて行くのでしょうか。見透しを尾崎さん一つ。

尾崎 現地にいる人達も観測しているのでしょうか。僕等も結局そういう問題を研究に出かけて行つたが結論がつかずに帰つて来たのです。いろいろ各人各様の観測に委すということにするより他ない訳でありますが、私個人の考えなんです、今直にいうことを許されるならばこれは先刻もいったように非常に長い解決の途を辿る必要がある問題

で急速な解決ということは※【字画の少ない文字の様だが不明】み得ない。例えば形の上の解決は一応つくようなことがあるにしてもほんとうの意味の解決にはならないの※【で】す。

(三木氏出席)

※【詰り】重慶政府もどういう形※【で】民衆というものを掴んで行くか、民衆を※【掴ん】でいるか、民衆の※【攫】み方といひますか重慶政府の成立ち内部※【構】成という問題もあるでしょうし、汪政権も民衆をどう掴むかというそれが内部構成と言うものも問題だろうと思います。早い話が重慶にしたつて共產※【党】の考えている掴み方と、国民※【党】が考えている掴み方奥地の新しい民衆の線に沿っている考え方も違ひだろうと思います。まあ重慶の一種の根強さといひますか一つの力というものは相当なものだと思ひます。これは形の上で外国との関係は欧州戦争

になつてあるいはむつかしくなつて来たという、最近歸つた人の話を※【聴】くと向うの抗戦力抵抗というものは相当弱くなつたと感ぜられるという、恐らくほんとうだろうと思います。経済的

に困つて来ているようなことも一つの事実と思うのですがそれにも拘らず一種の力を有つている、これに対し汪政権の基礎というものは結局今のところ上海という大きな地盤というものをそのポテンシャルな勢力、というのは現実の形でなくてそれに非常に地域的に作れば作り得るところとてこれに來たということだけ、詰※【り】それは謂わば汪政権の発足というものは恰度孫文の出發した方向、蒋介石が一九二七年に出發した方向を引出そうとしてそれが問題を引出す諸条件であるかどうかという風な問題がかかつているのぢやないかと思ひます。それ自体としてもこんな面もあると思ひますがそれは確かに日本の態度とかあるいは

欧州戦争の状況とか国内事情諸条件から民衆の動向そういった事から問題は急速に解決し難いのではないかと思います。

平 汪政権は孫文の主義に従つてやろうとしてゐる。問題は支那自体は昔の支那、新しい支那という処から汪氏の進む途も相当※※【「難碍」の様に見える】が横たわつてゐる訳だろう。それをどう助けるかという事が問題になつて来る訳だ

が。

細川 そうだ汪政権を樹てた以上汪政権をもり立てる確乎たる態度を定めねばならぬ。汪政権をほんとうにもり立てることでなくてはならんだろう。

三木 汪政権を何処までも支持して行く立場に日本の態度が定まらなければ之が問題は解決しないだろう。ヨーロッパ戦争の不介入という事について外交手段だつてもつとはつきりした考えを有つてやらなくちやいかぬと思う。

細川 そこで汪政権をより立てる日本人の政治的の

態度だがね。それについて孫文が一九二四年神戸に來た時に新聞記者団に話をしたことを回想すべきだと思う。それは孫文が日本と打合せしたいと思つて來たが、日本当局が受付けなかつた。それで失望した訳ですがその時に言つたのには

明治維新は支那革命の第一歩だ、今日の支那革命というものは明治維新革命の第二歩だ、然るに今日の日本人は財産を作つてそれがために支那革命を理解し得ていない。もし日本が進んで不平等条約の撤廃の先※【鞭】をなしてくれば決して日本は損をしない、支那を独立国に仕上げるならば支那人は日本に感謝し、日本といろいろお互いの事情に即して経済的政治的提携その他について出来る筈だ。

とこういつたことがある。僕はこれを今日つくづくと事毎に思い出す。私は汪政権をより立てるに

はやはり今後政治家たるものはこのような広大な度※【胸】に立返らなければ駄目だと思う。

平

細川さんの仰ることに非常に賛成で孫文はなかなか正しく歴史を見ている。私はこう思うんだ。

汪政権をほんとうに盛り立てる肚で日本がやつて行くならばその日本の政策の内容はある意味に於いて重慶政権を相手にすることと同じになると考えられないことではないと思うんだが。

69

細川

苟も一国の力を挙げて汪政権を援けるといつたのだからこの立前は何処までもその形でその誓約に従つて重慶政府を引込んで来る引つ張り込まなくちゃならない。今度の取極めにしても決して謀略でない汪氏が騙されて作っているのぢやない、重慶政府が汪氏の横に座っている氣持で取極

めをしているのだという話を聞いています。僕はこの精神で押し通せばいいと思う。あまり何とか外に工作をして重慶に見せつけてやろうという色気たつぷりのことをしては信用を落すことになる。

平 その点は僕も同じだ。国民に信用を落し支那に對しても信用を失墜しては汪氏を援けるといつた處で、やはり支那人の不信用を買ったらかなかな言うことを聞かないだろうと思います。客觀的に考えて見て汪政權をほんとうに援けるということの内容をもし具体的に考え出してくれば重慶政府を肯定する結果になりはしないか。

細川 どうだろうネ。小さないろいろな心配はやめてびくびくすることはない。国民の総意をどしどし問うたら

平 細川さんの仰ることは理論的には賛成だ。

三木 僕の關係している問題を今出すのはどうかと

思うけれども例えば東亜協同体、新秩序、東亜聯盟、聯邦でもいいがそういうものの理論はともかく確りしたものを掴まずには問題にならぬ。そういう理論をチャンと政府が作らせるような方向に導いてそれを支那の大衆にも指導者にも叩き込むという、そういう努力が足りないのぢやないかと思う。

尾崎 足りないですよ。

三木 それをやらなくちゃいかぬ。それには支那人を引きずって行くためには三民主義だつて共產主義だつて一応の理論はある訳だ。従つて日本は本氣になつてそれに対抗して行ける理論を作らなければならぬ。そういう理論を語り育成することにもつと日本の朝野が努力しなければならぬ。そういう点に非常に足りないのぢやないかと思うな。

細川 日支關係の調整というものは結局日本においても支那においてもそれにピッタリ合うような

政策が出来た時に出来る。それ遂行する時に出来る。それは中々今日ばかりでなく日本と支那との間は政治指導者の連中がびったりしないものがあるからね。

尾崎 臨時政府や維新政府が※【判読不能】消してこれに代わる所の思想的な※【学問】も何一つ残らぬということは淋しい、呆気ないネ。三民主義なんかよりもっと一歩進んだものが当然出来るもいと思う。

三木 自由にやらせれば作れるですよ。幾らでもいいものを作るよ。

平 だから汪政権を育てるという希望は結局底を割って見るというと重慶政権の持っているものうち最も基本的な良いものを生かし、悪いものを取除くことに※着するのぢやないかと思ひます。

三木 重慶政府のイデオロギーというものは結局三
1 国構えがつぶれたように見える

民主義といつても救国主義というそれ以上に出ないと思ひます。要するに日本は明治維新の仕事をやろうというだけでなく世界史の段階を作つていいと思ひます。従つて今度のヨーロッパ戦争の結果はどういう様になるか知らぬけれ共とにかく仮にヨーロッパ聯盟とかヨーロッパ聯邦という方向を必然的にこれからとらなくちゃならない。それでなくちゃ成り立たないと思ひますが、ヨーロッパはそういう処から考えて見ても東亜の協同体聯盟というようなことは決して東亜だけのことでやないと思ひます。そういう処に認識を理論的にも現実的にも分析してはつきり支那人に叩きこまなくちやいかぬ。重慶政府も新政府もない、そういう風な努力というものがもっとやらなければならなないと思ひます。

尾崎 それは汪氏自身使命とするところもそこで当然そうあるべきだと思ふ。

三木 それでなければ要するに結局重慶政府と目

的は同じで手段が異なるということになる。それ
ぢや日本は危険なことになるからネ。余程考えな
ければならない。結局東亜協同体、東亜聯盟でも
名前はどうでもいいがそういう世界史的必然的理
論を確り作つて日本でそれを支那人へ重慶政府汪
政權指導大衆を通じて総てに叩き込むという、そ
ういう点を特に努めてやらなくちゃならぬ。それ
が根本的問題と思うな。

細川 それは思想的根底であつてやはりそれと共に
實際政策日本の大陸政策の不当な要求は抑えなけ
ればならぬ。支那人が感得するような方向から行
かねばならぬ。

尾崎 それはむしろ消極的な面だネ。

9/10

三木 その大方針を定めなければそういうことに

なれば自ら細川さんのいつてゐるような現実もそ
う定まつて行くと思う、詰り世界史的に見ても何
といつても時代の線に沿つてアイデアの民族とい
うものが榮えている。榮えて行くのに大きな役割
を演じてゐる。詰り結局私自身のやつてゐる方面
に引込むようですが思想工作が足りないと思いま
す。近衛声明をやつた当時は意気込みはあつたと
思いますが、最近になつて思想工作方面が非常に
鈍くなつてきた。これは困つたことと思います。

尾崎 それは非常に賛成だね。

平 先程三木君が來られたので最初の問題はもう一
ぺん戻るとして欧州問題に対する見透しを細川さ
ん一つお話がいます。

細川 いま英仏に対し非常に優勢であるが今のドイ
ツのすばらしい進出をそのまま今後の進出である
と取つていいかどうか、短時日の間に英仏が折れ
るということは一寸考えられない。軍事的にもね

ばるだろうしソ聯・アメリカ・イタリーに対する外交政策においても一段の飛躍をやるものと見なければならぬ。それからドイツとしてもこの戦が長くつづいていいかということも問題でしょう。

三木

これも自分の方に引込むようだが詰りドイツの進撃振りは非常にすばらしい目覚ましいものだけれども一体ドイツは何を目的としているかということだ、それは詰り第一次世界大戦の復讐もあるうが、あわよくばイギリスにとって代わつてやろうということで殖民地の再分割ということを目的としているのぢやないかと思ひます。然しこれも考え方ではもう非常に古い一九世紀的な考え方でドイツが勝つたとした所で殖民地の再分割は出来ない。若しそういうような方向にドイツが進んだらソビエトがドイツの背後の方から迫つて来るということはありはしないかと思う。そういうことを考えているとするとドイツのアイデアとい

うものはやはりドイツ的で狭いと思ひます。ドイツだけのことを考えている、世界史的な見透しを持つてやつていないと思う。

従つてここでドイツも英仏としても徹底的に考えなければならぬような時代に到達しているのぢやないかと思う。それは日本が支那事変に臨む態度と同じことで、近衛声明を出したようにドイツもここで世界的アイデアを作らねばならないような事態になつて来ていると思う。

平

僕はこんな風に考へている。短期戦か長期戦か更に短期戦に終る場合ドイツが英仏に徹底的に勝つかあるいは非常に沢山の資本の消耗する共倒れになるかあるいはこれ以上は堪らぬと共倒れにならぬうちに手を打つかということは四つの場合がある。短期戦にもう一つ形を変えた長期戦に移行せんとしてこれぢやたまらぬと急速に短期に終る場合も考えられる。僕でも個人的に見ればイギ

リスが崩壊するなんかが先決問題でそうありたいと思うのです。ところがまだまだ資本主義の現状を維持し得ると考えているのぢやないかと思えます。ところが実際はどうでしょうか。もし短期にドイツが決定的に勝つてかなり軍事力もそう傷つけないで残った場合世界資本主義が一番残る可能性が多いのぢやないか、というのもドイツが圧倒的に勝つたらドイツはもう一ぺん資本主義的に立直ることをやる。一方ロシア・アメリカが抑える。ドイツにロシアが迫つてはつきりますます資本主義的な組織替をやり、そしてロシアが日本の協力を欲するということになりはしないか、ドイツが短期戦に勝った場合日本の重臣層の希望することになりはしまい。

友岡 僕は少なくとも最近のドイツの雑誌新聞ではそういう風には行っていないとみていますね。詰り中央ヨーロッパに大ドイツというものの建設

それがドイツの一つのグロースラウム（大圏）【Großraum】の建設という非常に大きい考えでそれでヨーロッパは初めて安定するのだ。そういうことにイギリスやフランスや旧秩序の国は極力反対している。例えば今度のオランダベルギーに進出したのは旧秩序を破壊するためであつてオランダあるいはベルギーの独立を止めてしまふ、そういうような行き方で行っている。だから客観的に殖民地を再分割して大ドイツを作るといい得る。そういうような意味から例えば日本なんかにしても新東亜の秩序といつて見ても客観的に日本が一つの経済的指導力となりそして一つの大きな経済圏を作り合つて再分割の一つの役割を果たしているといえないこともない。

三木 ドイツのそういう結局大ドイツ詰り植民地再分割と同じアイデアなんです。要するに帝国主義的な従来のパスというものを同じ高さに切ろうと

いうこと、これはドイツが近代において資本的に遅れてきた。このドイツの野心というものは要するに結局戦敗と同じになると思う。だからドイツ

のヒットレーバーというものは非常にドイツ人は進む処までなんとか努力してそれにあらゆる苦勞をして※【臨】むが所※【謂】どういう策略をしてもそれ以上のアイデアという問題は生れていない。それが例えばドイツの国民主義ということでも英米の資本主義的世界主義に対抗して行くといふだけに国民主義なんてそれ以上目指してないし思想的に見てドイツが考えなければならぬ大きなことと思います。それに従つて大ドイツを作ろうと言うことを考えられるもそういうことになればこれはイタリーと衝突しソビエトと衝突する。決してそう簡単に行かない。この程度に従つて結局ヨーロッパ戦争においても初めにドイツが考えておつたこと英仏が考えておつたことそういうこ

とは結局途中で変更せざるを得ない必然になつて来ているヨーロッパの今日ぢやないかと思ひます。

友岡 それは僕と少し違ふ……

細川 結論的にはそう思いますが世界的には差※¹り

そんなに参らないと思います。

友岡 ドイツ鼻根ではないけれども大ドイツの考え

方は結局日本の経済なんかも資本的な一つの思想を有つて経済体制が最後に設ける経済体制が其点世界史的意義を形態しているイギリスあるいはフランスは今後どういう風になつて行くか殖民地なんかに対する問題からいつて従来恰度第一次大戦後カナダ・オーストラリア・インドの事業も産業こそ発展せしめて行つたと同じくもつと加速度的にオーストリア・カナダあるいはアメリカについて云い得るアメリカはヨーロッパ戦争の済んだ後

1 不明・振仮名の一字目は「あ」に見える「当」だろう

でアメリカが今日の工業力を発展する可能性というものがそういう世界的秩序を引受けるかという
と実際は殆ど新しい秩序でやっつては非常に困難だ
と思います。それでそういうような問題からい
と殆どイギリス、フランス、アメリカは戦後どう
いう風に※【変】るか※【変】らざるを得ない。

事実近代のドイツのような経済形態をとらざるを
得ないではないかと思えます。この点で日本なん
かも基礎的イデオロギーはどうなるか日本の経済
の形態あるいは構成という側からいうとこれは殆
ど今後つづいて行く形で脱し得ない思想的にどう
いう風にそれをよく説明するかということとは別問
題だが但しそれはどういう風に納得せしめるかは
別問題で形態はドイツの経済の今のある型という
ものは必ずしも一時的なものでなくして世界史的
一つの資本的最後にあるものと※形を示している

1 不明だが振り仮名は「るゐ」に見える

と思います。その点はドイツが大ドイツという標
語を※【「挨」か「採」の様に見える】つてやつ
て植民地再分割というような意味で考えられない
ものを有っていると思います。

6/11

平 所でヨーロッパはどうでしょう。ああいう形勢
になつても簡単には片付かぬ。やはり大体長期戦
だと思えますが……。

尾崎 大体そうだと思います。ただドイツとしては
長引くと不利だという細川氏のいわれることは間
違いないと思えますね。その前に一般にいうよう
な妥協の可能性が早期に出て来るか、僕はこの可
能性はないと思えます。

三木 それは出来んね。

友岡 フランスもドイツも同じ境遇で重工業は殆

ど増強出来ない、石炭も駄目だ、※工業も駄目

だ——非常に閉口垂れている。イギリスもそう
だ、未だカナダに重工業を移し終えていない。そ
れからイギリス、フランスがやはり今度はある程
度まで相当やられるということは言えるが恰度ド
イツ、フランス、イギリスの雑誌や新聞が二十日
乃至一ヶ月間位で手にすることが出来る。そうす
ると僕が二十日か一と月程事件の経過を知つて逆
に向うのそういう物の論説や報道の正確さを判断
出来る。大体ドイツ※の方が勝利を占めている。
大体正確だ。イギリス、フランスはちよつとした
戦勝も非常に誇大に載せている。非常に大きく評
価している。

三木 それは確かだ。然しドイツがこれだけ勝つて
いてもベルリン市民が一向騒がない。これは正当

2 1 「鐵」の様な画数の多い字がつぶれたようだ
「則」に「がは」と振仮名が付いているように見える

に表※している事実だと思う。

平 両方ヘトヘトになれば一番いいけれどもそれ
じゃ結局植民地やロシアが一層強くなるばかり
で、ヨーロッパが妥協して聯邦を作り、英仏露が
一致して東洋さして鉾を向けてこないかな。

三木 そんなに早く立直らないだろう（笑声起る）
両方が弱っているのだから東洋に手を伸ばせない
だろう。

尾崎 そうなつちやいかん。

友岡 私はドイツ臍盾である、理由はそれは日本の
戦時経済の運営があまりうまくないのでその点で
……（それは賛成だなというもあり）

三木 ドイツの体制というものは全部ナチズムの戦
時体制で理想的でしょう。

尾崎 イギリスを支援しなければならぬ理由は一寸
もない。

3 「徴」がつぶれたように見えなくもない

三木 イギリスの弱ることは世界史的に意味はあるよ。

細川 それはインド人を味方にする事だ。狭い南洋をねらうよりインド三億の人間の解放をねられふが意義がある。

三木 日本は要するに日本がソビエトと對抗してそれより優秀なイデオロギーを作る文化も国力もいろいろな問題もあるがそれ以外に問題はないと思います。そういう心がけで支那と戦って日本的な秩序を作って競争相手のソビエトを相手にする。

詰り古い考えじゃ駄目だ退嬰的な反動的な考えじゃ全然駄目だよ。だからソビエトの考えているよりもっと進歩的な考えを作る処まで行かなければならぬ。

平 ヨーロッパ戦争と支那事変の関聯について一つ。

三木 僕は簡単にいえばヨーロッパ戦争不介入を日

本で声明したが不介入というても呆槍見ている不介入じゃないと思います。だから詰り機会というものゝを掴むに努力を払わなければならぬ。機会を掴めなかつたらそういう機会を作るということ、例えば一見ドイツが優勢だからドイツに付くとか英仏側に一寸加勢したらということじゃないと思います。だから結局自分の肚を定めて積極的に移って行く。自分の肚が仮にドイツ側に付き、あるいは仮に英仏側に付くにしても手はあると思います。そういう手を同時に考えねばならぬと思います。

森山支社長 それじゃここらでどうも有難うございました。

底本…『大陸新報』（大陸新報社刊——上海で発行された日本語新聞）1940.6.4～11

「日本政治の再編成」討論会

於 芝・嵯峨野

三木清

林廣吉【林広吉】：生没年不詳、信濃毎日新聞記者、

後朝日新聞、国民運動研究会、昭和研究会政治動

向研究会

矢部貞治

風早八十二：1899～1989、岡山県出身、東京帝国

大学法学部卒、九州帝大教授、マルクス主義法学。

戦後衆議院一期。

石浜知行【石濱知行】：1895～1950、兵庫県出身、

東京帝大卒、九州帝大教授、読売新聞論説委員、マ

ルクス経済学。1928の二・一五事件で教授職を追わ

れる。

穂積七郎

記者

支那に新政府が樹立¹されましたのを劃期として、ハッキリと長期体制の段階に入ったように思えます。随つて、内地外地を通じて、総力戦体制の確立、それに伴う政治の再編成の問題が、既に具体的な日程に上つていて感じています。そしてこの問題を完遂することが総ゆる問題解決の大前提をなしているという意見に帰一しているかに思われます。そこで今夜は、皆様にお集まりを願つて、政治力の結集と国民の再編成という喫緊の課題を、ザックバランに取上げて戴いて、この問題の積極的、建設的な展開に資したいと思ひます。

三木さんは、最近支那にいらつしやいましたから、彼方と此方とを通じての御感想がおりと思ひますから、先ず話の緒をお願い致します。

1 1940.3.30、汪兆銘らが南京に新政府を樹立と宣言。

人間の動員

三木 私が支那に行つていたのは極めて短時間ですが、その間に得た結論を一言でいえば支那に於ける日本は要するに日本国内の縮図であるということです。つまり、国内も、支那の状態も、日本に関する限り、ちつとも違つていないということです。随つて、国内の改革というのが結局、支那に於ける日本の活動の改革になる訳だろうと思う。そういう意味に於いて、日本の国内革新が現在の最も根本的な問題であつて、これができなければ、支那の問題——事変処理というものも、結局解決せられないということを、強く感じた次第であります。

国内革新の問題について、これからいろいろ皆さんのご意見を拝聴したいのですが、基本的の点は、どうして国民の力を本当に盛り上らせ、それを十分に働かせることができるかという問題に帰着す

るのではないかと思う。国民再組織などという言葉でいわれていることも、要するに、国民の力を盛り上らせ、それを一定の方向に集中し、活用することに外ならない。若しそれがそういう結果にならないとしたら、それは意味のないことになる。今日の日本に於いて、私の最も重要な問題と考えるのは、人間の動員ということです。物資の動員はやかましくいわれておりますが、人間の動員というものができていないと思う。物を動かすにも、やはり人間を動かさなければできない。この人間を動かすということが政治の大きな問題なのです。ところで国民再組織というようなことは、すでに久しくいわれているが、それが充分出来ていない、その根本原因はどういうところにあるでしょう。

記者 その点、林さん如何ですか。

林 今日のような状態の下で、三木さんのいわゆる

人物動員、それに国民が広汎に応じ兼ねていることの結果からいうと、恐らく、国民に明確な政治的目標がない。目標が与えられていないということに帰着するぢやないかと思うのです。今日の学生であるとか、青年であるとか、国家の重大なる時期に際して、一向に立ち上っていない。歴史の前列から見れば、およそ国家の危急というような時機には、誰よりも青年が、その憂苦を背負って先頭に立つべきであるにも拘らず、今日は全くその逆で、寧ろ、時局を憂慮している者は、若い人達よりも中年の方に多いということが、私共の接する範囲で、偶々問題になっております。それもやはり同じことで、今日の青年に、政治的目標が与えられていないからだと思います。私は寧ろ、それ等の原因を、今日皆さんから伺いたいと思います。

三木 私が支那へ行つて——行かなくてもこれは

判つておることですが、感じたのは、支那の現在の指導者¹というものが、兎に角、新しい時代の人間であるということです。年齢的にいつてもそうだし、教養からいつてもそうなんです。ところが、日本では新時代の感覚を持つていない、感覚的に時代遅れのした人間が、指導的地位にある。これは考えなければならんことであろうと思うのです。今後日支の關係を調整して、東亜の新秩序を作つてゆくという場合においても、その点が一つの障碍になるのではないか。現在の支那の指導者は、日本の政治家ほど老練ではないといえるか知れないが、兎に角、感覚や教養の上からいつて新時代的なものがある。今日、日本に於ける人的動員¹ということを考えても、やはり新時代の感覚を持った政治家が指導者にならなければ、どうにも

¹ 三木が対談した周佛海、林柏生など汪兆銘らの政府關係者をさすのだから。

ならないのではないかと考えるのです。国民の政治感覚の方が政治家などよりも進んでおり、新しいのではないのでしょうか。

穂積 その点で、ちよつと質問したいんです。中国人が漠然と新しい感覚を持つておるといよりは、やはり日本と違つて、社会的に、若しくは政治的に、試験によつてそうなつたのではないかと思うのですか？

三木 勿論そうだと思います。しかし日本に於いても、既に久しく革新ということがいわれている限り、そういう新しい力が、動員されなければならぬのです。そうすることによつて、東亜の新秩序を支那と協同して作つて行くこともできるのでないでしょうか。

穂積 支那全体の国民経済というものを見れば、前資本主義的な形であるかも知れませんが、部分的には国民党の地盤であつた中支那に於いては、新しき

思想によつて、農村に於いては農業組織、工業組織、文化的には新生活運動というもので、相当国民組織というものが、日本より新しい成長を遂げている。その地盤が新しい指導者を産んだので、相関関係にあるのぢやないかと思う。国民生活の中に入つた、新しい組織が新しい指導者を産む地盤になつていたのではないかと思ひます。

三木 勿論その通りです。日本の問題としてはどうしてそういうような新しい力を動員し得るかという事です。新しい力が盛り上つてくれば、そこにおのずから新しい指導者も現れてくるのではないかと思ひます。これまで先へ進んで来た日本の政治が現在その新時代性において支那の政治より遅れるようなことがあつてはならない。その点に於いても、日本が支那を指導し得るだけのものがないければ、東亜の新秩序は作れないのではないかと思ひます。

記者 今、三木さんの仰った新しい政治感覚の点か

ら、現在行われておる新党運動、この運動に対して、どういう風に御覧になっておられるか、矢部先生その点を……

新党運動の地盤

矢部 既成政党が、一種の大同団結¹を作ろうという

ことそれ自体は、私は悪いことだなどとは思わな
いけれども、ただ政権を目的にしての離合集散な
ら無意味だと思う。先だって出来た東亜建設国民
聯盟²ですが、ああいうのはかなり革新的の色彩が
あるという気はするけれども、若し万一……僕は
よく知りませんが、次の政権というようなことが、

1 1940.6.11 聖戦貫徹議員連盟は政党に解党を進言、以後順次解党し、十月大政翼賛会

2 これは民間「革新」派の結集ともいうべきもので、安達謙蔵の国民同盟、中野正剛の東方会、松井石根の大アジア協会、橋本欣五郎の大日本青年党、また末次信正、徳富蘇峰、三宅雪嶺、清瀬一郎などが参加していた。

幾分でも目的になっているということなら、恐らくあまり国民の共鳴を買い得ないぢやないかと思う。やはり、新しい国民運動が起るとすれば、もつと別な方からでなくちゃならんぢやないか。必ずしも、政党の人がやってはいかんという意味ではないのですけれども、全然出発点が違うような気がする。

記者 どうも結局に於いて、挙国体制とか国民再組織とかいう場合と、所謂新党運動とは、全然別な動向のようですね。

風早 いずれにせよ、新党運動は、今夜の論議の対象になっっている国民再組織の問題の一つの型として見るという訳には行かんと思う。

矢部 ただ僕は、ああいう運動が動いて来たことはいいと思う。兎に角、何かこう無風状態に澱んでいたのに対して、兎に角、何か動いて来たことは、一步前進する姿だと思うね。

三木

現在の状況に於いて、新党運動というものが、純粹に下からの運動として起つて来ることができるかどうか。それとも上の方でイニシアティブをとらねばならぬかどうか。イニシアティブをとるというのは、つまり新しい勢力を出して来るための産婆役すること、一旦それが出てきた後には、その勢力に自発性を与えるのです。この問題が今の政治において大きな問題ではないかと思う。新しい政党が下からの運動として起つてくるといふことは、理論的には純粹であるが、現在の状況では困難なことではないでしょうか。どうも既成政党の離合集散という形しかできないのではないか。それ以外のものもありませんが、広く国民を掴むことはできそうにもない。ほんとの新党運動というものが、純粹に下からのものとして出て来ることができるかどうか、疑問になるのです。そこで上からイニシアティブをとつて、

ともかく国民のあらゆる層の選良を動員して、これを新しい組織の基礎にする。しかし国民に何か押しつけるというのでなく、そうして一旦国民の力を引き出してきた後には、それを自主的に発展させるという方式が考えられないかどうか、これが今の問題であらうと思うのです。

『国民の再組織』の意味

風早 問題はそこだと思うのですがね。しかし「国民の再組織」ということの意味を、もう少しはつきりさせる必要があるのぢやないでしょうか。再組織されるその「国民」というものは何か。また国民組織とは何であるかということ。それと、最後に、産婆役としてこの国民組織を作り出す推進力、この三つは、往々にして混同されておると思う。国民のあらゆる層の選良からなる新しい組織は、国民組織そのものであり、その組織を創出す

る推進力とは、これを区別せねばならぬ。

現在一番問題になつておる点は、やはり推進力の問題、それをどこに求めるか、上からか下からか、或はその接合点であるか、いろいろ問題があると思うのです。

穂積 その場合に、上からというのは政府の意味ですか。若しくは全然違つた国民的指導者というのか、政治的の中核見たいなものですか。

風早 これが又、今まで非常に曖昧にいわれておつた言葉ぢやないかと思うのですがね。いわゆる官僚、インテリゲンチヤも少くとも「上」と認められていたし。下からという場合に、やはり或意味でインテリゲンチヤが問題になる。労働者なり、農民なり、或は中小経営者なり、更に企業者そのものも、或場合には「下」からというような概念の中に入れて考えておる議論もあつた。そういうのを、内容的にやはりはつきりさして掛らなく

ちやならぬと思う。

矢部 これはよく議論になるけれども、その問題

は、純粹に上からということでは——官製運動では、国民がなか／＼ついて行かん。さればいつて、下からというだけでは、僕は日本の国ではなか／＼育たないと思う。強いていえば上下一致でなければならぬと思う。そしてそういう運動のキャラクター性格は、やはり党派的のものや、分派的のもの、或は又階級的とか、職業的とかいう性格を持つものでは、僕は駄目だと思う。初めから一つの国家的、乃至は民族的、或は公的な性格を持つ運動でなくちや駄目だと思うのですが、しかしそのことは、そういう運動が生れ、育つて行く過程に於いて、それがいわゆる一国一党だとか、挙国一致党だとかいう姿だという訳ではない。寧ろそういうものが起つて来るのは、何といつても対立と闘争の過程からだと思える。総親和では実践力がない

ので、実践力というものは寧ろ辯證法的な要素を含んでいるのだと思う。而もその運動が内包しておる性格は、やはり上下一致、民族的、公け、ということでなければならぬと思う。そこで上下一致ということをもっと具体的にいえば、やはりいろいろ考えて、結局、非常に卓近なことだけれども、軍人、官吏、そうして民間人の一番優秀な、そうして一番東亜新秩序建設という問題に關しての自覺の深い者の結合したものが、推進力の中心だと思ふ。その推進力に、産業報國運動、それから經濟的の職能団体組織、その他いろいろの國民組織がくつ附いて来なければならぬ。しかし、推進力それ自体は、經濟組織や、經濟的運動の中から生れて来るという風には考へない。

風早 無論そうですね。推進力そのものは、やはり主体的なものであると思う。がこの主体的なものは、唐突としては出て来ない。

矢部 そこで現実には、謂わば生命辯證法的に出て来るので、順序としてどこから出て来るか予想はできない。唯性格を言えば、そういう風のものぢやないか。

三木 しかし客觀的情勢の分析によつて、その推進力というものが、どこにあるか、どういう形で出てくるかということを知ることができないでしうか。

風早 それをすることが、当面の大事な仕事の一つと思ふ。つまり主体的条件の客觀的基礎、云い換えれば、今までいわれておつた客觀的条件というものを主体的条件という建前から見直して行くこと。今日までそういう風の分析の仕方も余りなかつたし、又現在でもそういう分析は、非常に欠けておるのぢやないかと思ふ。なお、さつき矢部さんは、動きつゝあるということそれ自体が、非常に重要なことだというお話であつたが、もちろ

ん動きつゝあることは確かだけれども、それを誰が、どういう風にして掴むか、それが寧ろ大事であります、それによつて、とんでもないことになりはしないか。

矢部 それはそうですが、僕はまあどこからか一つ動いて来る。そうすると又その外の方から動いて来る。そうして本當に健全な、強力なところに落着くと、樂觀しておるのですかね。

三木 しかし国民の中に動いているものを一定の方向に綜合し集中してゆく新しい政治的主体はまだ現れていない。現在表面に現れている新党運動などというものは、結局、前からのものの継続に過ぎない。

矢部 しかしあゝ、いう風のが、いろ／＼やつておる間に、正しい強いものが現れて来ると思うので、今までのように、どんよりと落着いておるよりは、まだいゝというのです。

風早 それが漫然とただ出て来た、いろ／＼古い物を焼直しの形でもいゝというのではなくして、やはり正しい推進力を求めることが重要でしょう。現在その客観的の基礎というものは、まだ十分充実していないけれども、しかしながらそれが充実した暁には、やはりその胎動の中から生れて来る新しい推進力がある。そういうものを、先ず大きく見究めておいて、そうしてこのような推進力が生れるための客観的基礎を充実させるに役立つ政策というものに協力する、支持を与えるということ。これは急がば廻れ式になるのですが。

矢部 しかし兎に角、中心が出来なければ、風早さんの仰る客観的基礎を以て充実させるような政策ということもできない訳ですから……

悩みの循環論法

風早 それが今日の日本の悩みの循環論法だと思

います。しかし論理を突詰めて行つて、客観的基礎を充実させるための最小限に必要な政策、これは具体的にいえると思う。そういうものを先ずハッキリ掴むことです。要するに再組織の対象は国民であり、国民の要求というものも存在しております。国民の要求というものを、我儉なものとして見るのではなくして、生産力発展の一つの要求の集約的な表現として見なければならぬ。肥料に対する農民の要求にしても、鋤夫の地下足袋に対する要求にしても少しも我儉な要求ではない。総て生産力発展の要求が、それら農民や鋤夫の作業上における要求の中に反映している。かような国民の要求に応えられるような政策を支持し、実現させるそのことのために、結局推進力が必要ぢやないかと言う話は、確かにそうです。

矢部 そこで結局客観的な基礎を持つような政治勢力が指導的になるというために、推進力を繞つて

いろいろの勢力が動いて来るということがいいというので、その間に、結局国民の共感を得て推進的地位に立つものは、客観的基礎と合致したものでなければ、とてもやつて行けはしないのだから、いい加減のものはどんどん毀れて行く。客観的基礎というものは、ちゃんとある。そういうものに合致するような政治の推進力が如何にして生れて来るかということが、今の問題ですから、それは僕はどこから生れて来るとも判らないので、いろいろそこらを繞つて動いて見るということが、先ず必要ではないかと思うのです。非常に客観的だといえそうですがね。

三木 しかしともかく経済情勢が現在の段階まで進展した以上は、かなり客観的に、どういう方面が動き出して来るかということは分析できるのではないでしようか。

徳積 僕は実践的の感覚から、こんな印象を持つ

ておるのです。新党運動その他表面的の動き、その中には僕等は新しいものはないと思う。しかし

新しいものを産むための動きであると思うのですよ。例えば既成政党の離合集散にしても、社大の分裂にしても、東亜建設聯盟それ自体よりは、その中に参加しておる政党、それらのものの実際の動きを見ますと、上の方の動きは、外交問題を捕えた運動、若しくは政権獲得運動というものに触れる訳であるが、それが今までと違つてゐる形は、下の方に国民組織——大衆組織を持つておるような形ではあるけれども、それが一步前進しようとし、若しくは大衆の生活が相当差迫つて来ると、大衆組織というものと、上の指導部が、又離れる現状に来ておると思う。下の方の連中は、そういう古い形、組織にあきたらずして、行詰つた苦悩の中から、自然発生的な形で——、統一された形ではないけれども、一つの革新的な、国民の要望

を持つて出て来る。そこに首脳部と下層組織との分解過程がなされつづつあると思う。

林

結果から見ると、やはり矢部さんの仰つたように、何か出て来るのぢやないかと思う。必ず出て来るでしょう。だが我々はそれが出て来るのを漫然と待つてゐるべきではなく、また日本の現状からいつてもそんなわけにはゆきません。一刻も早くそれをつくり出さねばならないし、そのための推進力が如何にして創り上げられるかということが、ここでの問題だと思う。勿論そのためには客観的条件を分析しなくてはならない。客観的条件が成熟するのを待つのではなく、甚だセツカチのようですが、先刻三木さんがいわれたように、今我々の前に横たわつてゐる諸条件を分析すればいいと思うし、積極的にそれをやらなければならぬ。つまり問題は、我々がやるか他人がやるか、その時期を待つか、その時期を我々が作り出して行く

か、これが一つ、もう一つは分析の仕方ですが、推進力となるものはどこにあるか、如何にしてそれが構成されるかということが、今までただ単に空間的にだけ捜し求められたような気がします。しかしそれだけじゃ足りないものであつて、それと同時に今日本が、どんな歴史の時期に置かれておるか、いいかえれば、歴史的に日本が今日解決しなければならぬのは何であるかが、しつかりと突止められなければならないのではないのでしょうか。

「立遅れ」の問題

三木 国民再組織というものは、理想的には純粹な形で考えることができると思うのですが、しかし現在差迫つた情勢の下に於いては、つまり支那事変に処する国内体制の立遅れというものを、急速に取返さなければならぬという状態の下に於い

ては、言つてみれば、或る特別の手段が必要であるとは考えられないでしょうか。この立遅れということを考慮に入れなければならぬ。これが現在の日本における再組織の問題の特殊性であるといえるでしょう。この立遅れを如何にして急速に取戻すかということから私は人物動員とか、選良動員とかということを考えてみるのです。そしてここに新しい政治勢力の土台を認めたいのです。立遅れということを考えないで言えば、いろいろ理論はあるだろうけれども、しかし立遅れということがやはり大きな問題ではないかと思う。支那事変というものが最初は不拡大方針から、だんだん拡大して来たということは、言い換えれば立遅れで、これを急速に取返すということが現在差迫つた問題ではないですか。

林 そうです。非常に立遅れておるので特別な手段を講ぜられるということも、或は避けられないか

も知れない。ではその際、如何なる方針で、如何なる方向に向つて、選良を動員するかが、問題だと思ひます。單に非常手段といつても、一時的に

動員するんぢやなく、それが新しい日本の政治的主体を創り出すための出発点となるのですから、それには一つの政治方針がなければならぬ。そしてその政治方針は、結局、日本が現在解決しなければならぬのは、如何なる問題であるかが、はつきり示されることによつてのみ生まれて来るものだと思ふ。

三木 その点は全く同感です。政治目標がはつきりしないで國民を動かすことは不可能です。

林 先刻の新黨運動と我々の考へている國民再組織の違いも、その政治目標の違いから出て来ると思ふのです。

政治目標と推進力

矢部 その前にその政治目標を、誰が一体決めるのか、そして誰が動員するのかという問題がある。それが正に推進力ぢやないですか。

三木 誰がどういふ風にして動員するかについて、ここで自分の意見を述べることは控へたいのですが、ともかく國家權力によつて動員することはできる。

矢部 それはできる。

三木 そして動員された力に対して、或る自主性を認めるということが重要なことであるのです。

矢部 その前に、今いつた推進力の問題、動員する主体的な条件と、もう一つは動員されて、而も動員された以上は、それに自発性を認めるというよきな動員の対象というものが、何か組織化されてもおるのですか。

三木 動員さるべき人間ですか。

矢部 え。

三木 それは、簡単にいえば、選良調査を基礎にするのです。

矢部 それは組織化されておるものではない。

三木 もちろん組織されておる訳ではないので、国民動員から国民組織へという方式をとるのです。そこで先ず動員されて出て来るものがあつて、それが母体になつて、それから自発的に順次に組織が出来てくるといふ風なのです。先ず核になるものを作つて、それから国民の組織化をこうして段階的にやつてゆくと考えてみたかどうか。

矢部 だからそういう意味で、そういうことを先ずやる推進力が何だということになると、僕は先刻いう通り、卑近だと思うが、やはり、軍、官、民というようなものの、優秀な、そうして時局に本當に自覚を持つ人達の結束ができれば、そういう動員の推進力になろうと思う。

三木 そういうことができれば、よいわけですね。

矢部 今それを作る、そういうものを誰がやつてくれるということなら、非常に実現性があると思う。

産業報国運動の展開

穂積 その場合に、立遅れた戦時体制を間に合わせるために、その対象にある国民を、全国民の規模において動員する場合に、日本には、まだ纏まつた国の政治拠点だけを動かすほどの、主体が纏まつていないという過渡的の時期に於いて、今の軍、官、民という中の革新分子、優れた分子が集合の形になり、背後には無論国家権力がかなり利用されるといつては語弊があるが、利用される結果になると思う。しかしそういう風に考えると、その場合直ぐに組織化されて、例えば、都市に於いては産業報国運動、農村に於いては農業報国運動という形によつてなされる組織化運動があると思う。その場合、そういう形に於いて為されたも

のは、飽くまで過渡的なものであつて、或る一定の段階に至れば、そこでバトンを渡すという性格を持つものと思う。然るに、動員された瞬間、組織した瞬間から、高度の政治目標をそこに与えるということそれ自身、困難なことではないかと思うのです。そこで僕等国民の基礎的下部組織運動に参加しておる者として、今日本の組織運動を見ると、産業報国運動、農業報国運動というのは、これは始めから政治組織として動員する、政治意思を認めるために直ぐ動員して、組織されたものの中から、政治勢力が盛り上つて来るという組織の方針は、方法論になるが、不可能ぢやないか、寧ろ混乱を来すぢやないかと思う。今のよう

に過渡的の時期に於いて、而も、自主的のものが出来なくても、国家全体の一つの組織形態として、全国的の規模で国民が組織されねばならなん。その中心はどこにあるか、私は飽くまでも生産力

の問題になつて来ると思う。労働力に、技術に動員することが重要な現在の目標ではないか。そういう意味からいえば、始めから政治目標のために、政治体制のために動員するのではなくて、生産政策のために勤労大衆を動員して行く。三木さんのいわれたように、物動計画に即応した一つの人間を動員する形態は、それは生産力拡充の両足として結びつけられて、その線で組織されて、次に人間は物と違ふのですから、その組織されたものの中から、主体的な意思が政治意思となつて動員されて来る。こういう順序を取るのぢやないかという印象を持つておるのですが、その点はどうでしょうか。

矢部 しかし生産政策の動員というものは、現に或る程度まで行われている。

穂積 それは物動計画は行われておるが、産報の例を取つていえば、実質は国民精神総動員の一翼と

いう形で、講習会をやり、精神講話をやる。国の生産力拡充のための労働政策は何かといえば、配置、保全であり、その中には技術の質的向上、再編成の問題が入っており、これが産業報国運動の中にちつとも活用されていけない。その点を、先ず考えて、精神運動をやるよりは、動員された国民の生活、つまり生産関係の中に入り込んだ生活の拠点に於いて、生産政策に動員して行くという必要がある、その必要のための要求から見ると、現在の実情というものは、非常に遠いものだと思うのです。少くとも今の物動計画に即応した程度の労務動員計画は、全然できていないと思うのです。

三木 物の動員に、人間の動員が即応していない。ところが、人間を動員するということは政治問題です。国民を政治的力として動員しなければ、国民を経済的力として動員することもできないので

す。

穂積 そういう意味に於いても、国民が組織されていないと同時に、現在の官製組織運動の実体を見ると、中には優秀な分子が、担当者の中にはおると思いますが、全体の性格として見れば、物の組織と違って、人間の組織の中から、主観的なものが芽生えて来る可能性が非常にある。随つて、現在の官製の動員は、その生産政策として入る前から、その組織された労働者の中から、何か出て来るぢやないか、思想的のものが芽生えて来はしないかという危険感が先走り、何か警戒的なものが含まれながら組織運動がなされておることが、極めて明瞭に認められる。

矢部 若しそうだとすれば、何故であろうか。結局それは動員する中心が、十分の力がないからぢやないですか。

生産力の拡充政策としての再組織問題

穂積

僕はそこところは、今晚是非お尋ねしたいと思つておつたのです。例えば經濟の再編成の場合にも、物価の問題を一つ取つて見ても、利潤の問題まで入らねばならん。新しいイデオロギーを振翳して切込んだのでなくとも、日本の実情としてそうである。統制經濟でも同じことで、今までの生産機構を以てしては、如何なるイデオロギーを持つておつても、現在そこまで行かねば、生産力の維持ができない。そういう必然性を以て、利潤の問題に入つて行つた。だから組織の問題にしても、これに即応して、經濟政策として、配置、保全の問題を考えなければ、国の生産力が上がらない。否でも応でも、一歩前進し、生産力を向上せしむるためには、技術的の側面に於ける動員網としての組織がなければならんと思う。そういう意味で國民の組織が一番重要だと思う。

矢部

それはその通りだと思うのですが、そこでそれを若し、退引ならんような必然性に直面して、始めてそうなつて行くということでなしに、予め見透して、十分の力と、自信と、前提とを以て、政策を施して行くという力が要るぢやないかと思うのです。

穂積

そこに指導する中核体という問題が出て来ると思うのです。しかし現在の瞬間に於ける日本の政治の実情としては、今いつた軍官民の割合進歩的なものが中核を結成しても、そこまで飛躍ができないと思う。だからその意味に於いて、結論的にいえば間違つておるか知れんが、本当に最後まで担当して行くところの、国の政治的の結集というものの、指導層というものは、即ち、本當の主觀的意味に於ける、政治の組織運動の指導者は、飽くまで民の中になければならんと思うのです。

矢部

それは僕も納得出来ないことはない。ただ民

というものが、下からだけで以て動いて、そういう国内体制を整えるほど育つという歴史的及び社会的の基礎が、日本では、僕はないだろうと思う。

穂積 そこが今いつておる点で、生産政策として組織化運動がずんずん進行して行けば、統制経済の問題が利潤の問題に入つた如く、生産政策として労働の保護政策、利潤問題、技術的の向上の問題等、直ぐ取上げねばならん。そうすれば即ち国民の側から見れば、その体制が立つておる所に、生活の切替え、生活の再編成がなされなければならんということに、直ぐ打突かる。その再編成をされる過程に、新しい政治的の中心が生れ、そうして上と下と交流して初めて動いて来るという印象を持つて居ります。

矢部 その場合、上下一致という型で入つて行くので、下からだけというのは、日本ではいえないぢやないかと思うね。

穂積 私も下からだけというのでなく、そこに地盤があるということです。

矢部 そいつは客観的な地盤です。主体的な中心が常にその中にあるという訳には行かんぢやないか。つまりドイツとかイタリアとかのように、ヒトラー、ムソリーニなどがおつて、ああいう運動を組織して行くことができるのと、日本は違ふと思うね。

指導者と被指導者

三木 しかし日本においても国民動員ができれば、英雄は自ら作られて来る。英雄という用語弊があるが、兎に角、傑出した指導者がないということでは、本当に国民が動員されていないからで、国民の力が本当に盛り上つて来れば、その中からおのずから指導者というものが出来てくると思うね。

穂積 その点が最初にいった支那の指導者と日本の

指導者の違いで、支那の指導者は、自分の政治方針が、大衆の支持を得て、大衆の中で育つて来たので、日本の指導者の弱いのは、混乱とか、闘争の過程を通して来ていないからで、ただ権力だけを足掛りにしておる結果になるぢやないかと思うのです。

矢部 つまり循環論法見たいになるが、有能な指導者がいないということは、訓練された被指導者がないためで、何故訓練された被指導者がいないかというと、それは有能な指導者がいないからだといえるね。

危機の真の自覚

石浜 僕はこういうことを考える。いま話に出てくる国民再組織にしろ、新しい運動にしろ、国民の総動員にしろ、国民が動かなくちゃできない問題だと思う。ところが、今日、実際のところ、消極

的ぢやないか。支那の中央政権の問題、重慶政府の問題、国内の問題などについても国民は直面せる問題が非常に重大かつ困難であることの実相がほんとに判っていない。それと現実の食違いがそうなる原因だと思うね。

矢部 その通りだよ。

石浜 本当の国民再組織の運動になり立たせるためには、国民に不必要な安易感を与えるより、むしろ反対に困難な時局に直面させて自覚させることが必要だ。新中央政府の問題でも、非常に困難であるということが、本当の意味で国民に判っていない。重慶政府の問題でも、国共の問題が起れば直ぐ分裂し、法幣¹が落ちれば直ぐ潰れるというような安易な考えに慣らされている。しかし、現実には決してそれ程安易ではない。国内問題について

1 1935年国民政府は銀通貨を排し指定四銀行発行の不換紙幣を通貨と定めたが、後に大量発行をし、インフレ政策を採る

でも同じで、そうしたことが国民を消極的ならしめておるのぢやないかと思う。だから運動を、本當に真剣な運動たらしむるには、国民に困難の現実を認めさせることが必要である。そうしなければ、国民の態度は懷疑的に止まつて積極的に動かない。精神総動員がうまく行かないのも、産業報國運動がうまく行かないのもそのためである。この消極性を打破して、困難突破の心を国民自らが振いおこすことが必要である。国民自らの心の中にそうした動きが起らなくては如何なる形をとるにしろ国民の政治的再編成の運動は強力なものとはなり得ないと思う。

三木 誤魔化しがないということが、一番大切なことだ。

石浜 いまのような状態をつづけてはいけない。国民も傍觀者の態度を是正すべきでしょう。

三木 それに関連してこういうことも考える。これ

まで十年間というか、兎に角、かなり長い間、日本の政治、文化、教育の指導方針というものに何か不自然なものが合つたのではないかということだ。一面、現在の国民の一部も亦何か皮相的なものになっている。これはなかなか一朝一夕に直らない。国民性の根本的の改造ということが必要だと思う。だから真実を知らせることはもちろん必要だけれども、ただ知らせるだけではどうにもならないというような状態に、国民がこの十年間の指導方針の欠陥のためになつてゐるのです。

石浜 支那などは、日支事変をやる数年前から事變を予想して戦時体制を整えておる。日本は統制經濟、統制經濟といつてゐるけれども、まだ戦時的な統制經濟が確立されてはいない。事變の見通しについても、イージーゴーイングに過ぎた。切符制度が今頃になつて漸く唱えられて來たが、ドイツの例なんかを見ると、そのために機構的に数年

の準備をして来た。日本は切符制度をやるにしても、それだけの大局的な機構的準備が出来ていない。これなんかも事変及び時局の重大、国難性を早くから知って整然たるプランを立てておくべきだったろう。

矢部 要するに強い中心勢力がない故ですね。

三木 この何年間かの指導は、ただ日本のものは何でも最も優秀だという風に教えて、国民に激しい自己批判をなくさせている。

石浜 国民ばかりでなく、有識者。政治の表に立つ人でも、支那事変の徹底的見通しをしつかり握っている人は案外少ないのではないか。国民に至ってはなおさらでしょう。だから戦時体制でも、予めそれを知っておつて、ちゃんと早くからその対策を取っておれば、今モサモサする必要はない。三木君のいわれた通り不拡大主義を取つて、支那の長期抗戦の態度を見きわめなかった。

三木 同時に、国民を立上らせる上に於いて、重要なことは、責任者が、責任をとるということだ。これがない限りは、国民は動かないと思う。

国民の政治参与

林 従来日本の国民は政治は誰かがやっているものとし、自分のものではないで、それに対して余りに依存し過ぎて居った。自主性がなかったのですネ。だから今のお話のようになんでも彼でも与えられるだけであつた。それは勿論国民の側に罪があるのではなく、国民にとっては、まことに不幸なことなんです、それが愈々こういうような時期になつて、国民動員が必要になつて来ると、国民だけでなく国家の不幸となる。国民はなかなか自主的に動けない。だから今日必要なことは国民を如何にして自主的に動かすかということです。もつとも議会があり、普通選挙法は実施されてお

り、それを通じて国民は、政治に参加して居ることになっており、そういう形態を取って居ます。だが事実はどうか。国民が参与して居る政治の部面はどの位の部面であるか。このことは余程考えなければならぬと思う。国民はたとえ感覚的にも自分達が政治の全面に、その重要な部面にも絶対に触れ得ないことを知っている。政治は誰かがやっているもので、自分達はその全面に関与すべからざるものと観念している。で、ここからさつきいった依存性、自主性の欠如、動員の困難がやって来る。だから、国民動員のためには、何よりも先ず国民を全面的に政治に参加させるための何らかの方法が講ぜられなければならない。若し国民が全面的に政治に参加して居なかつたならば、何よりも国民は国の政治を自らの責任において背負おうとはしないでしょう。

1 底本では「欠除」

三木 国民が政治に参加していないために、現在こういう状態に対して、自分達の責任でないと、傍観者のようになってい

林 だからどうしても、国民を政治的に腹から揺り動かすような政治的目標が与えられなければならぬ。

風早 その点は僕も同感だね。やはり、今言われたように先ず真実を知らせることが必要だ。

石浜 もつと国民と相談してやって行く、国民は傍観者でなく時局分担者だという考えを起こさせるように。

矢部 それは必ずしも根本的な問題に触れなくとも、政治の術としてももつとやり方はあると思う。
石浜 時局担当において、国民と当局がもつと密接に結びつくことが必要だ。国民を傍観者だけにしに行くことは頗るまずい。

国民の積極的協力の動因

三木 話が前に還るが、国民の方が政治家よりは、

認識はどうか知らんが、感覚的には進んで居ると思う、だからもつと時代感覚を持った者が指導者にならなければ駄目ですね。

石浜 今のような状態で、今のような条件の下に於

いて、国民を動かすような運動が起ると思いますか。

林 それは、現在与えられている政治的・経済的諸

条件に、何の変化も与えられないとすればなかなか六ヶ敷でしょう。

穂積 僕はその点はもう少し樂觀的というか、発展

的に考えて居ります。消極的というのは一般の空気ではあるが、しかし国民の生活の方から云えば傍観では居れない時代である。また指導者層から云つてもそうであつて、真の自覚者ならば、自分一人でもやるといふ積極性が主体的にあつて、そ

れらの中から成長し、そこに本当の結合があると思うが、そういう意味で今の情勢を見れば、僕はもつと樂觀的に見て居る。さつき言われた客觀的情勢は非常に成長して居る、寧ろ主体的条件が遅れて居ると思う。

風早 異議なしだね。

三木 問題はそういう力が出て来ても、これまでの

ようでは抑えられてしまうということだ。

穂積 抑えて行くことが可能な限界は、これまでの

政治経済体制で時局が賄われる限りに於いて可能だが、愈々そうでなくなると、抑え切れなくなると思う。

林 そういう場合は甚だ不幸だ。

インテリゲンチヤの責務

風早 いろいろその立場はあると思うが、全体とし

ては客觀的条件の分析ということが、インテリゲ

ンチャには——外にも任務はあろうが、最大の当面の任務と思う。それをしもサボらしたことは、インテリだけの責任ではないが、しかし何と云ってもインテリゲンチャがべしやんこになつて居ることと無関係ではない。

三木 何処へ行つて話しても大体皆同じような真剣な氣持を持つて居るのに、それが一つの勢力に結集されないというのは困つた事です。

林 お互いに向つて居る方向は大体同じと思うが、而も尚且それ等の人が一つの勢力に結集されないで、却つて何等かまとまつたグループがあれば、それに対して猜疑的な眼をさえ向け勝なのが現在の状態だと思う。殊にインテリにそういう傾向があるようだが、それというのも結局我々に政治の一般方針、いわば戦略とでもいふべきものがないからなのではないでしょうか。

風早 物の客観的な分析は結局帰一するのだから、

誰の手でやつても、それを基礎とする限り一致する筈です。

石浜 しかしその資料が今のところ不自由で、本当の現実に近寄る分析が困難ぢやないかと僕は思つて居る。例えば支那の重慶政府の本体、或は法幣の問題でも、本当を知りたいが、そしてそれが今の所必要なのだが、その資料が頗る不自由だ。

穂積 精密なものがなくとも、実践的な意味では、問題を展開して行く程度のものなら、極く大雑把に見て、生産関係のものは与えられて居る資料からだけでも、結論は出て居るのぢやないでしょうか。

石浜 生産関係のような国内的のものは色々方法があると思うが、例えば僕はいま支那の經濟を検べているがそれを分析する資料が得られないので、かなり困難を感じて居るのです。

風早 そういう基本的の經濟分析もそれ自身一つの

材料にはなるが、国民の実際の生活状態、その中から湧起つて来て居る色々な国民的要求、そういうものを先ずはつきり掴むことだと思う。

政治力結集と客観分析

矢部 分析が大事だということは勿論誰にも異論

はないが、幾ら分析して見ても肝心の推進力そのものは出て来ないですよ。前提や基礎にはなるが

……

風早 主体的な条件をどこから切り開くか、その抛

点はどこにあるかということを突止めることは、直接問題に関係している。やはりそういう意味に於いての客観分析は必要であるに拘らず足りないと思う。

矢部 確かにそれも足りないが、もっと足りないのは主体的な結集力ですね。

風早 我々が当面為し得ることとして、もっとと精

密な客観分析がやはり最大の仕事のひとつだと思います。

林 その方面の事は進んでいると思う、ただそれに

マッチした政治方針が出て来てないのだ。

風早 政治方針も精密な客観分析に基礎付けられなければ駄目だ。

三木 客観的分析は完全でないにしても、現在の政治方針を立てるに足るだけのものは出来てはいないのですか。

穂積 出来つつあるね。一方では分析が為され、一方ではセクシヨナリズムがあるが、上は別として、中堅層に於いては心構えが出来て居ると思う、そこに国民に希望を有たせ、我々も非常にそこに熱意を傾けて居るのです。

倫理運動と政治運動

三木 林さんらの国民運動研究会は倫理運動として

出発したようですが、それは現在も倫理運動で宜しいのか、或は今後はもつと政治的に行かねばならないのでしょうか。

林 僕等の団体がこのままその性格を少しも変えることなしにそれに、政治にタッチすべきかどうかということは別の問題として、我々の理念を現実のものとするためにはどうしても、もつと具体的問題を掴まえて進まなければならないし、従つて政治的活動にまで運動は発展しなければならぬと思つて居ます。

穂積 個々の団体は別として、国全体としてはその所が中心と思う。初期の啓蒙的なものは倫理的の形で出て来る事も差し支えないが、主力はやはり政治的のものに置かなければならぬと思う。

林 大体倫理運動は政治運動の前提と思う。いや、両者は不離のもの、一つのものであると思う。政治が倫理性を失つたとき、政治は頽廃し、新しい

政治運動は常に新しい倫理運動なんだと思ひます。

穂積 政治運動の中に倫理生活がなければならぬ。政治層も経済層もごつちやになつたものが、段階としては政治運動の中に入らなければならぬと思ふ。

林 それにしてもそれを僕等がバラバラに一人一人でもやつてもどうにもならない。一つの確乎たる政治的・主体的条件が出来てそれと結び付くか、或はその中に入つて行くかすることなしには、我々の運動すらも今後それ自身発展する力を有たないと思うのです。我々の運動はそういう主体的条件をも自ら創り出そうという希望をもつてやつてゐるのです。

穂積 その主体的のものが政治運動をやる場合は、個々の政治方針、運動方針でなく、今迄の利益代表的な議會政治を再編成して、次の新しい政治機

構の体系を一応示すべきぢやないかと思う。そこで我々は国民の基礎的の組織化の問題と結び付いて、職分的政治機構というものを漠然と考えて居るが、それについて少し纏まったご意見を伺いたいと思います。

議会と新しき政治機構

矢部 別に大した考えもありませんが、今の問題については、勃興期の資本主義を背景にした自由主義的な立憲国家、そういう場合の政治機構と、それから現代の大衆国家、或は総力戦的の国防国家というか、そういうものの要求する政治機構とはまるで違う事は明らかに認識しなければならん。それで数百人の議員が集って話し合う議会が、それが政治機構の中心になっていたというような事はそれは昔のことなんで、是からの政治機構は議会が中心ではなく、常に執行府、即ち内閣といつ

ても宜しいが、そういうものでなければならんということは言えると思う。ただその内閣が国民的な基礎と結び付いておらなければならん。それを従来は議会を通して内閣という形でやってきたが、今後内閣が如何にして国民的基礎と結び付くかそれが問題だろうと思います。

穂積 その場合組織された国民と、矢部さんの言われる執行府と結び付く時、即ち国民組織が国家の行政機構化する、或は国家機関化するという風に考えて宜しいでしょうか。

矢部 行政機構化はどうかと思うが、国家機関化とは言つて宜しいと思います。再編成された国民と、その上に立った執行府というものが出て来れば、それは議会を通さなくとも国民に基礎を有つて居るわけだ。

穂積 上意下達も、下意上達も、議会三ヶ月でなく、日々の生活の中に於いて必要ということですから

……

矢部 だからさっきの話の国民再組織運動が若し出来れば、それが内閣の基礎にもなれば、又議会の基礎にも、その外の色々の国家機関の基礎にもなる。こうなつて初めて国民の参政体制が全面的に出来て来る。今迄の機構では国民の政治参与と云つても極く形式的のもので、何等生きた關係がなかつたと言つても宜しい。それでそういう新しい内閣を中心にした政治体制では議會は不必要になつて来るかという、国民各部各層の要求を代表しながら建設的な批判を通じて、遂行意志に参与する、協力する機関として、やはり議會は大事だと思ふ。又政治家をそこにプールし、訓練する意味に於いても十分意味があるので、議會はやはり必要と思ふ。その外に国策の内容に内面から参加する機構が必要で、それがやはり職能団体組織だと思ふ。殊に経済的な職能団体組織、それから

出来れば新聞とか雑誌とかいう文化的のもの、そうして経済政策、文化政策の内容にタッチして行く。そして一旦決つたらそれを有効に遂行して行く機関にならなければならない。それが内閣の可能なブレイン・トラストと結合する。そのためには内閣のブレイン・トラストの強化ということが必要になつて来る。その強化された内閣の組織と職能代表の組織と、そして議會に何か常置委員の如きを置いて、その三者が常に接触すれば、国策の企画と樹立と審議と遂行ということが初めて綜合性を有つて来る、そうしてその基礎は国民の統合組織に在るということではなければならない。

穂積 その場合政治の中央機構の問題ですが、今迄三権分立で、立法府と行政府は対等の形で取扱われて来たが、次の国防国家というか、統制国家体制に於いては、議會の行政府に対するポジションは変えられて来なければならないと思ひますが。

矢部 それは指導的の機関は内閣で、議會ではあり

ません。だから内閣直属の部局が強化されなければならん、議會は国民各部各層の要求を反映しながら建設的な批判を通じて協力するという形になる。對立意識とか、権力分割とかは自由主義的な立憲国家の原理であつて、現在の国家が要求して居るのは寧ろ集中、統合、協同だと思ふ。集中、統合と云つてもそれは独善專制とは違ふ、国民全部の现实生活に基礎を置いて、それを通して一元化しなければならんという困難があると思ふが、それでなければ駄目ですね。

穂積 今迄の政治運動は、例えば選挙活動が中心になつて来たようですが、次の時代では、選挙活動に代えるに、国民生活の強化活動に政治の中心を置くべきだと思いますが。

矢部 選挙もなくなる訳ではないが、意味が変る。それも国民組織が出来れば滑らかに行くと思ふ。

だから国民の総力を政治に参与させる為の指導力は、常に生きて働いて居なければ駄目だ。その指導力は何だということは、さつきから問題になつて居るが、はつきりした結論はなかつたようすがね。

三木 それは国民動員から国民組織へという方式ととり、それに自発性をも与え、それから新しい政党が作られてくることに依つて出て来ると考えられないでしょうか。

矢部 或はそうかも知れません。それを予め順序や方法を考えることはむしろかしいと思ふが、或はそういうところから出て来るかも知れないと思ひます。

風早 「客観的」条件というが、その客観的条件というものは一つの口火になるんじゃないかと思ふ。主體的に用意されていることが、客観条件に一つの大きなショックが生じた場合に、ぐつと動

くと思う。その時には用意がその尽で生きて来ると思う。だからそれは今考えて置いても無駄ぢやないと思う。

客観的条件の成熟

三木 客観的条件から来る激動を待っているか、それとも或る所で先手を打つべきかということとは、大きな問題だと思ふ、殊に現在事変下に於いては。

風早 先手を打ってやる場合でも、客観的条件が熟しているに比例して非常に収穫が多いと思ふ。例えば、アメリカのように重工業も進歩し農業も機械化された、そういう国で問題が起る場合と、日本のように経済が非常に跛行的に行つてゐる国に問題が起るのとは非常に違ふと思ふから、やはり我々が支持する政策というのはこの客観的条件が成熟するに役立つ政策、具体的に言えば健全な富国強兵の政策であらう。そういう政策を一方で常

に支持しながら、他方その主観的条件を導いて行くことが必要とされるでしょう。

林 生産力の拡充はどういう意味からでも絶対に支持しなければならん。

穂積 それはしかし出来つつあるのぢやないか、大衆の中にも、インテリの中にも、何処に行つてもある。

林 色々な動き、気運はあるが、それを纏めるものはない。ただ傍観してゐるだけだ。最も歴史のズツト進んだ後から見れば出来上がつてゐるだろう。だが出来るかどうかということよりも、現存の日本ではそれを創ることが問題なんだ。意思が問題なのだ。

穂積 僕は自然発生的のものと違つて、はつきりした自主的な、政治意識を有つた動きがあると思ふ。片々たる理論や何かを除いてですね。

林 それは穂積さんの中にもあるんだろうし、他に

もあるだろうが、それが如何にして結合されるかは問題だ。

穂積 結合されつつあるのでなく、結合しつつある

……

林 結合させつつあると何故言わないんですか。(笑声)

政治結集の指導精神

三木 その政治結集の指導精神はどういうものですか、是迄の指導精神と言われて居るものに対してどういう批判が下されますか。

林 さつき矢部さんが言われたように、国民が全面的に政治の参与するということが基本でしょうね。

三木 それは基本的の方針だが、思想的にはどういうものですか。

矢部 それは東亜新秩序の建設だ。

三木 今危険なことは、東亜新秩序の建設ということに対して、色々に見たり聞いたりするところからして、国民が消極的になる虞があるということですよ。東亜協同体論というようなのは空想だ、何等現実性のない理想を言っているに過ぎないというような意見は前からもあったが、そういう考えが強くなってくる。しかし僕は国内改革の問題もやはり東亜新秩序の建設という目標の下に推し進めて行くべきものであると思うのです。

矢部 誰も彼も東亜新秩序を言うから、その言葉が現実政策上ではだんだん魅力を失うということは言えると思うが、やはり僕は東亜新秩序を建設しなければならんと思う。

林 それは大前提にはなるが、東亜新秩序の建設というと、国内問題とは別に考える、その点が非常に危険だと思うのです。僕等にとつては東亜協同体といい、東亜新秩序といい、それは支那の問題

であるよりも日本の問題なのだ。日本の指導原理なのです。つまりそれは国内問題なのです。日本の問題を解決することなしに支那の問題が解決されよう筈はない。日本の主体的確立こそ、東亜新秩序の前提だからです。このような観点からすると、今の日本が解決しなければならない問題は、二つ重なり合つて来て居ると思う。今日なお工場における労働者の組織の中に根強くはびこつてゐる前時代的な、いわばギルド的ともいえる種々なる関係、これを取除いて行かなければ生産力の拡充は出来ない。勿論農村において、前時代的なものが如何にその生産力発展を妨げているかは自明のことだと思ひます。だから僕等は当面の農村問題の解決、従つて農業生産力拡充の方法として農村共同体論を主張しているのです。それはどういうことかという、先ず土地の所有権から管理権を分離して、その管理権を部落に与える、それに

依つて農業生産力の発展を妨げている条件を取り除く。と同時に、日本が背負つてゐる資本主義的、個人主義的桎梏、これを解決しなくてはならない。その一つの案として僕等は経営共同体論について考へつつあります。資本と経営を分離、そして問題となつてゐる利潤統制はその先行的なものだと思ひます。何れにしても全体的国家的立場に重点が置かれます。それ故共同体論は、一種の全体主義です。だが一番重要なことは、全体主義が国家全体の利益を個人のそれに優先させるとはいへ、その余り個人の独立完成についての考慮が、忘れられることは危険です。日本ではまだ国民の個々が完全に独立していません。まだ精神的にも物質的にも甚だ貧し過ぎるのです。この日本では、この点余程はつきりさせる必要があると思ふ。資本主義資本主義と資本主義ばかり攻撃しているが、それも大事ですが、同時に遅れた面を見落しては

なりません。日本の資本主義は欧米のそれと比べればまだまだ幼稚です。だから今、日本が解決せねばならない問題は重なり合っているのです。

三木 その点支那に行つて痛感したことだが、日本人の支那についての行動がみつともないということの根本原因は、日本の国民がそれぞれの個人として完成していかないということにある。個人として完成しておれば、世界の何処へ行つても立派に働くことが出来る。それがないと自分の国を離れれば別人のようになる。そういう意味に於いてまだまだ自由主義とか個人主義とかと言われて居るものの良い方面を生かしてゆくことが必要である。だから日本で外国の全体主義をその倣真似ることはよくないと思う。

林 私共もそう思うが、例えば労働者の組織の中に実にまだ沢山の封建的のものがある。従つてそれから解放することなしには、労働力の保全すら出

来ないぢやないかと思う、と云つて資本主義で宜しいという意味では勿論ない。それをも乗り越えなければならんという二重の課題が今我々に与えられて居る訳で、さつき三木さんの言われた思想の問題も結局はそこが根柢になつて打建てられるのだと思う。

記者 国民再組織の問題は、当面の世界情勢の中にあつて国際的の圧力で早められますか、妨げられますか、どつちでしょうか。

穂積 僕は早められると思う。

林 単に早められると樂觀は出来ない。

三木 やはり世界政策が決まらないと、早められるとは限らない。

矢部 それは国内問題と別の問題ではない、同じことです。

穂積 話は少し外れるが、如何なる政治イデオロ

ギーで行くかという、大体今協同主義哲学が相当問題になつて居ると思う。東亜新秩序の建設のイデオロギーもそれに結び付くと思うが協同主義哲学が今迄の唯物史観と、観念的の歴史観との間にアウフヘーベンしたものとして生かされ、その中に我々の実感としては、一つの協和主義といふか、均衡主義というような匂いがするが、その点はどうですか。

三木 その点、私は日本の昔からの伝統的思想傾向を考えて、つまり極端なものは結局国民性にびつたりしない。対立の形式でなく、綜合の形式が日本古来の思想の形ではなかったかと思う。ただの折衷では困るが、弁証法的な、綜合の形式が、日本の形式といえるでしょう。だから現在日本主義といつても、それが西洋文化を排斥する対立主義であつては対立的の思想形式は結局国民の常識

にびつたりしない所があるのではないかと思う。日本の思想のスタイルはやはり綜合のスタイルではないかと思ひます。

穂積 型は明らかにそういう風に思うが、その場合に側面からでなく歴史観の中から強いものを導き出そうとする場合には、綜合という考え方はどうもすればその中に、二元的の歴史観が綜合主義というものに本質的の強さを出さずに雑居するのぢやないかというように感ずるのです。

三木 雑居では困るが、そういう綜合の根本的の論理というか、或は認識論というか、そういうものからスタートしなければならぬが、結局は綜合の形式であると思う。支那思想にしても、支那思想も東洋思想の一つの形式だが、支那思想もやはり対立の形式のものではない。それは支那文化は昔から周囲に自分と同等の文化国があつて、その文化と対立しながら、闘つて出来たものではない

から、支那文化は形式から云つて総合的だと思います。それは西洋的に言えば東洋思想の不徹底なところだが、やはり東洋思想の根本的のスタイルです。

穂積 非常に非現実的な、観念的な史観という意味でなく、やはり東洋的のものは、何というか、一つの理想的の要素が相当強くあるように思われる。

林 それが協同主義の中に出て居ますか。

穂積 西洋的のものではないが、ゲマインシャフトのロマンティズムが明らかに持ち込まれて居ると思う。

林 協同という言葉は、何だか、中途半端で、バレンスのことばかり考えて居るように見えるが、しかし僕等が考えて居る協同主義とは、さつき言つたように、今日本では解決さるべき問題が重なりあつて居る。例えば我々は個人に対する全体の優

位というような観点に立つが、しかし単にそれだけでは問題は解決されない。完成されない個人の問題がある。是も同時に解決されなければならぬので、個人の独立、完成というものを常に考えに置いての全体主義、こういうことを考えると個人の独立と、同時に全体の優位、従つてそれは全体主義でもなければ勿論個人主義でもない、個人を考えての全体、もつと抽象的の言葉で言えば、個人が完成されることに依つて全体が完成される、全体が完成されることに依つて個人が完成される、こういうことを考えて居る。従つて協同という言葉のうちには、全体を構成する個人の働きとでもいうような意味が含まれて居る、だから協同といつてもそれは妥協性をいつてゐるのではない。その中には一貫した理想性がある。

穂積 そういうメカニカルのことでなく、個人と全体を対等に考えて、どつちが後扱いになるかとい

うことでなく、個人は全体の中に生かされることに依つて生きるという、それだけでは一つの一元的の歴史観としては不十分と思う。あく迄一元的の歴史観として出すこと自体が、その要素を実証化することが、東洋的思想の傾向と思う。それを持ち込んで来ないと、民族の問題、国体の問題は、ゾーレン【Sollen 当為】としての歴史観はそこの中からは出て来ないと思う。

風早 僕は三木さんの綜合主義、それは日本的の、民族的の性格を捉えているという意味では正しいと思うが、是は、寧ろ歴史のものと思う。それで今の歴史的の段階に於いて、之を僕は国民主義と言いたい。社会文化の態様における特殊の歴史の型もそこにあらわされている。

穂積 哲学的の歴史観という意味で質問を提出して居るが、その意味だったら国民主義というような歴史観は、あく迄一つの理想主義の歴史観でなけ

れば説明出来ないぢやないですか。

風早 その理想主義とか、唯物主義とかそういうものをそれこそアウフヘーベンしたやはり統一したものです。

穂積 禅で「無」ということを言うが、それは一つの綜合主義と思う。綜合的の觀念の意味と思うが、しかしそれは一つの客体を把握する概念で、歴史観としては国民主義がそれではつきり成り立つかどうか。

風早 僕は成立つと思う。国民主義は一定の歴史的民族的段階における行動原理だと思う。国民が創り出されるのでなく創り出すことです。

林 それは僕もそう考える、例えば国民が全面的に政治に参加するというようなことは、又日本の政治の歴史的段階がそうあるのだということなのでもあるが、そう考えることは決して非理想主義的ではない。

穂積 だから理想主義とはつきり言ったらどうかと言うのです。

風早 理想主義というのは唯物主義に対立する概念であるが、行動政策の原理は、両者を統一したものでなければならぬ。

記者 大変遅くまでも有難うございました。

底本：『中央公論』1940.6

戦争・政治・文化

昭和十五年五月十四日夜

於 星ヶ岡茶寮

細川嘉六

三木清

益田豊彦：1900～1974、福岡県出身、東京帝大卒、

朝日新聞社、戦後は朝日新聞社代表。

矢部貞治

板倉進：1900～1956、秋田県生れ、早稲田大学政

経学部卒、東京日々新聞でパリ特派員、戦後は毎

日新聞大阪。『パリ特電…「奇妙な戦争」の記録』

記者

白蘭作戦¹後に、ドイツがどこまで戦闘を拡大
するかに就て、最近欧州から帰朝された板倉さん

に……。

1 ベルギー・オランダへの侵攻。

板倉

私が発ちます前までのフランス軍事専門家の意見では、ドイツが、大戦の時の前例に倣って、オランダ、ベルギー方面に其の出口を求めて、フランスなり、イギリスなりへ攻め込んで来るだろう——予想がずいぶんありました。が問題になった時に、今度はドイツはそういう作戦に出ないだろう。其の前に、ドイツが屢々オランダ、ベルギー方面の国境に兵力を集中して、そのためにオランダや、ベルギーが余程緊張して、或は動員したり、それから又復員したり、其の都度問題になったが、要するに嚇しである。嚇しておいてオランダや、ベルギーに英仏側の封鎖破りの便宜を得よう——とする一種の宣伝戦だと見られておりました。フランスの軍事専門家の純然たる軍事的見地からの予測に依ると、今度は来ないだろう。理由は、マゼノ線が延長され、これはベルギーのあの再中立宣言以来ですが、ベルギー、フランスの国境がや

はリマヂノ線と同じ様な要塞線で防備されてお

る。結局オランダ、ベルギーを席卷して、フランスの国境にドイツ軍が進んで来た時には、マヂノ線の要塞線にぶつかるとし、又進んで来るまでに、多かれ少かれドイツ軍の勢力は多少の抵抗を受けるのだから殺がれる。其の疲れた兵でもつて、要塞に拠つたフランス軍と戦わなければならぬ。それよりライン河とモーゼル河の間を進むほうが疲れない兵隊でぶつかつてゆけて、有利なんで、その方面は、純然たる作戦上の立場から云えば、常識として出て来ないのが普通ではないか——と観測を下しておりました。しかし、戦争だから出て来ない、とは断言できないので、フランス側としては、もし来られても十分な用意がある、結局それが所謂専門家の予想を裏切つて出て来たわけ

1 実際は強固な要塞は築かれていず、この座談会の頃ベルギー経由の進攻をされていた。

です。

もう一つは、両方の要塞線で対峙膠着したのが、動けばバルカン方面から動くだろう。これも相当に可能性の在る問題のようでしたが、今日では結局ドイツがオランダ、ベルギー作戦の方へ出て来たので、以前の予測は問題にならない。仮りにドイツ軍がベルギー、オランダの占領に成功した場合、次に何処へ行くか——が問題になるでしょう。今度の作戦が、フランスのマヂノ線を突破して、フランスの国土に侵入する目的でやつていいのか、或はイギリスに対する空襲の新しい根拠地を獲得する目的か——その二つのどちらであるのか、或は両方であるのか、問題でしょうが、ともかくベルギー、オランダへ入つて来れば、ロンドン空襲の距離が非常に短縮され便宜になる。今までドイツがイギリス乃スコットランド方面まで何回か爆撃を試みているけれども、余り大した

効果を挙げていない。やはり相当の距離を飛ばなければならぬし、爆弾を沢山積むことができない、殊に大型の爆弾を積めないのが効果が薄かった。殆ど試験的に飛んで行つてみた——と申しますが、今度は相当效果的の爆撃を行えるようになる。と同時に、フランスにたいしても、マゼノ線を陸上から突破する作戦でなくとも、確かパリとブリュッセルの間が二百八九十キロだと思ひますが、それがもつと国境の一番近い処からはパリへの距離は、殆どこれは二〇〇キロ以内、百五六十キロの処がある。国境線のすぐ側に航空基地を造るわけにも行くまいが、とにかく二〇〇キロ以内に短縮されて、従来の独仏国境からする空襲よりか、余程有利な条件に恵まれているから、今のところドイツの其の目標は、どちらに在るか——は端倪すべからざるものでしょう。しかし、常識的に判断して、一応ドイツがオランダの占領に成功

したならば、英仏聯合軍が国境を越えて反撃して来る。それを追い払う意味で、フランスにたいしては側面的に空襲などをやつて牽制しながらイギリスの攻撃に此次の目標を置くんではないか——が、穏やかな想像ではないか。と同時に、白蘭占領によつて、英仏海峡が陸上からの砲撃の射程内に在つて、仮りにドイツ軍のイギリスへの敵前上陸を考えれば、非常にその点では有利な条件に恵まれる。ドイツ軍がイギリスにたいして、単にパラシュート部隊許りでなく相当に大きい部隊で敵前上陸をやる——可能性が在るんぢやないか。これは軍事専門家の領分で、何とも云えませんが、でも、可能性だけを考えれば、そうなるんぢやないか。如何なものでしょうかね。とにかくドイツとしては、イギリスとフランスの両方に、同時に戦うよりは、どっちか一方を一つ宛つ倒して行く——ほうが都合が好い。もう一つ

は、仮りにイギリスが弱音を挙げた場合には、フランスは、当然独力で戦う程の決意が無い——とドイツ側は観測しておるんじゃないか。フランス

も相当な戦意はありますけれども、実際問題としてもしイギリスがまいつてしまった場合には、フランスは其後を独りで引受けて戦えることは戦えるが、戦うことが有利であるか、不利であるか——となつたならば、フランスも考えなければならぬ。今日までは尠くともフランスは此前の大戦の時のように、自分の国土を侵害されてないから、なんでも敵軍の鉄蹄の下から祖国を救え！とわき立つたような空気は無い。一応政治的に妥協することも、仮りにイギリスが弱音を挙げた場合、筋道を押せば、そういう結論も出て来るんじゃないか。従つてドイツの作戦としては、まずイギリス攻撃に主力を置くんじゃないか——勿論ドイツの作戦が非常に順調に進んだ場合です。

記者 ドイツがイギリス攻撃をする場合、各国の経済的な問題はどうなりましょうか？ 白蘭にドイツが進駐した後。

益田 やっぱ板倉さんの言われたように、ベルギーとオランダにたいするドイツ側の積極的な軍事行動は、イギリス、フランスにたいする武力戦を徹底的にやるという目的からやつてゐるんじゃないか。それはベルギー、オランダに行つても、ドイツの経済を非常に有利にする——とは考えられないからです。成る程、ベルギー、オランダ、ルクセンブルクなんかには鉄などがずいぶんありまして、例えば一昨年あたりのドイツの鉄鉱の輸入額を見ますと、ルクセンブルクから六十万^ト匁位、オランダから三十五万匁位、それからベルギーから四十三万匁、合計百四十万匁位の鉄鉱を輸入しておる。それから例えばオランダの酪農産物とか、ベルギー辺りの重工業とかを旨く活用するのも考

えられるが、これは戦争の破壊的な作用が一応済んでしまわなければならない。一方でぶち壊しながら、一方で資源の開発とか、生産設備の活用とかは一寸難かしい。もう一つ、ドイツは海上封鎖でずいぶん物資が少くなつていましようけれども、それでも従来ロッテルダムとか、アントワープとかが相当の役割を演じていたであろう。現に此前の戦争の時にもロッテルダムを活用したのですね。仮に、去年の六月頃の統計によりますと、アントワープはそれ程でないが、ロッテルダム辺りに入つて来る貨物の七割位までは唯々通過するだけの貨物です。それから去年の上半期の統計によると、ロッテルダム、アントワープのこの二つの港に出入する船舶の六三パーセント位はドイツの船です。そういう点から見ても、ロッテルダム、アントワープ——殊にロッテルダムは海上封鎖の今日非常に重要だったのではないかと思われる。

今度の作戦の結果、それがどういう風になるか判りませんが、恐らく英仏側の封鎖がロッテルダム辺りにも十分およんで来るわけでしょうから、折角開いていた窓を塞ぐことになりはしないか。

どうも経済的には、例えばノルウェー¹なんかの場合と多少違つて余り得にならない——と考えられる。ですからどうしてもやはり板倉さんの言われた武力戦の活潑化が主眼ではないかと思う。差当りイギリスが先きになるのか、フランスが先きになるのかハッキリ分りませんが、とにかく武力戦を活潑にする方針で行つておるんじゃないか。

フランスは、食糧は殆ど自給自足できるような状態——。九五パーセント位は確か自給できる。と

1 1940.4.3ドイツ軍、ノルウェーを急襲、6.10ノルウェー軍降伏。

ところがイギリスは食糧が非常に足りない。三〇パーセント位の自給自足率ではないでしょうか。これは少し誇張でしょうが、三四年前に確かサイモンか誰かが、もしイギリスの海上輸送路が遮断されると、原料不足でイギリスの工業は僅か一ヶ月位しか保つてゆけない。しかしそんなに入つて来なくてもいいんだ。——というのは、一ヶ月経たない裡にイギリス人がみな飢死してしまう（笑声）と言つておりました。これはイギリスにとつて海上輸送路が、非常に重要だと強調するために言つた誇張でしょうが、少くとも原料資源においては、或は食糧においてもイギリスには相当の不安があるわけですからもしドイツ側の今度の作戦がある程度イギリスの海上封鎖を打破するまでに作用するとイギリスの経済力は相当痛手をうけるんじゃないか。

細川 私も白蘭の方へドイツがはいったのは、英国、

フランスに対する、両面か、或は一方に対して活潑に戦争をする意図であろうと思うが、その場合に飛行機だけでは、ドイツはそうイギリスに対して敵前上陸をやるとか、そういう目的には不十分でないか。もう一つは、ドイツの海軍力がどれ程までにノルウェー戦争で傷んだのか、イギリス側はかなり傷んでいるように言うけれども……。

益田 それは薩張り分らんですよ。どの位ドイツの海軍の損害があつたか——しかし例えば、オランダや、ベルギーの海岸辺りに空軍、海軍の根拠地をもし獲得できれば、潜水艦の活動やなんか相当活潑になると考えられる。今度の戦争では、潜水艦の活動が割合に近海だけです。海軍の人に聞きましたが、ドイツには今のところ大型の潜水艦は無い。それで遠方までは行けない。そうなつて来ると、イギリスに近いオランダ、ベルギー辺りに海軍の根拠地がもしできれば、小型の潜水艦でも

相当働けるんじゃないか。

細川 そうすると、空軍は、ドイツは勝っているという話だが、それに潜水艦がベルギー、オランダの海岸からイギリスを攻撃するとする……。

益田 それは恐らく可能じゃないか——。

細川 そういう場合にドイツ軍がイギリスに敵前上陸をやる、やらぬよりも餓死の危険に瀕させることによつて……。

益田 うまくゆきさえすればその方が早いかも知れませんがね。

細川 イギリスに対する効果は大きいでしょうね。

記者 ドイツの海軍力の痛手は分りませんか、板倉さん……。

板倉 ノルウェー作戦の時は船の中でしたが、大体、ドイツ側の勝った、というのも相当大げさで、主力艦が爆撃で沈んだような話も問題ですね。三十秒で沈んだというのですがね。それで私の乗つて

いたフランス船の船長などは、どんな粗末な戦闘艦でも、近代の主力艦が、何発爆弾が命中したか知れませんが、三十秒で沈むとは、想像できない、嘘だ——と云っていました。ドイツ側がイギリス側を傷め付けたことにも非常に誇張もあるでしょうけれども、自分の方の犠牲も相当あつたろう。ドイツの海軍力は、戦争前の潜水艦は、ノルウェー作戦の前にもう殆ど半分以上減っている、——それはフランス側の言い方ですが、全海軍力の——この間のノルウェー辺りの海戦の犠牲を加えて五六パーセントとかいう計算があるんだからそれが一つは、今度の白蘭作戦を余儀なくされた原因だとの話もある。それで結局いざ——という場合に、海軍力を使ってイギリスへの上陸を海軍で掩護することは、今でもイギリスの海軍が優勢ですから、殆ど絶対に望み薄になったわけですね。それでこの戦争が持久戦の形で永引いてゆくと、自

分の方の条件が段々不利になる。だから殆ど拾身の戦法に出たんぢやないか。

フランスの軍事当局としては、封鎖だけでドイツがまいるだろう——とは考えていない。永引けば英仏側の準備ができる率より、ブロックケード【blockade 封鎖】によるドイツ側が補給する率がずっと少い。従つてドイツが困りはする、けれども、そうかと云つて半年や、一年の間でまいりもせぬブロックケードだけで——兵糧攻めで成功するとは今でも考えていない。戦争そのものとしては、いつか一度は決戦が行われる。決戦が行われる前に、いろいろな政治、外交的な解決があるだろうが、しかし、軍人はそういう決意をもっている。これは私共附合っている少壮軍人の常識になつてゐる。参謀本部もそれとそう違つた考えはもつてゐないだろう——と云つてゐます。

もう一つは長く対峙している間に、ドイツの国内

に何か起きるだろう。これも起きないかも知れないけれども、われわれはそれを企図して永引かしっているんじゃない——と云つてゐますね。起きないものという建前で軍人はそうしておるんだ——と云つております。これも二年も、三年も続いて国内の困窮が酷くなつた場合には、可能性もあるでしょうけれども、こゝ半年や、一年では、恐らく、ナチスの青年の一種の信仰的なものは非常に強いので、その点をフランス側の軍部は相当に重大な要素のように考えていますね。結局は勝負は腕ずくでやるんだ。それには十分にこちらも用意してできるだけ犠牲を少くして、此前の大戦の時のように、勝つて自分が疲弊しないような、十分な余力をもつて勝ちたい。そのためには三年、四年かゝろうとこちらはその覚悟もあるし、可能性もある。果してその様にゆくかどうか、それは別としても、態度の問題として、そんな気構えをもつ

ておるようです。だからドイツを決して見縊つてはいないんですね。

細川 私も軍事知識はないんですが、やはり英仏としては、腰を据えて準備を急ぐ方針らしいですね。

板倉 そうですね。

細川 それだから、白蘭戦において、ドイツが一堂々成功しておるように云っているが、それは余り誇張して考えてはいかんだろうと思いますね。

記者 政治機構としての強さでは、ナチと英米とどっちに分があるでしょう？

矢部 機構の形態から云えば、ドイツはつまり正に戦争をするような機構でできているわけですね。だから、体制そのものはドイツの方が有利だと謂えるでしょう。けれども、ドイツ的な形態の一つの困難はあらゆること、ある一人に依存しておることですね。だから仮りにその人に重大な故障が起ると、非常に根本的に崩れる惧れはあります。

ですね。その点は、イギリスでチェンバレンが駄目になつたらチャーチルが出て来る。チャーチルが駄目になればまた誰か出て来るのとは余程違ひうでしょう。

もう一つは、非常に独裁的な集中的な政治体制がドイツの強味なんです、こういう形態には全国民がどれだけ結び付いておるかがよく分らないんですよ。

益田 この頃歸つて来た人の話の受売ですが、ヒットラーに対する国民の信頼は、従来戦争しないで、着々として対外的に成功する点にあつたので、戦争を始めてしまつては、ヒットラーの後光は非常に薄くなる。これは確かだといいますね。ですけど、今度の戦争においては、此前の世界戦争に負けて、非常に惨胆たる目に遭わされた記憶が残っているのですから、ヒットラーがどうであれ、とにかく戦争には石に噛り付いても勝たなければ

ならないという意識が非常に強いと言っていましたね。今のところはかなり結束が堅いように観祭をしている人がある。

細川 やつぱり政治機構の強さは、ドイツはそうでしょうね。

矢部 正しく戦争形態ですからね。

細川 ただ問題は、物質が欠乏しないで、民衆に生活の不安を与えぬという問題ですね。この点については、ソ聯とバルカンですが、あの方の關係が主になるんですがね。

矢部 そうですね。だから、問題は政治機構だけの問題ではないんだな。もつと広い、要するに総力戦だなア。

板倉 政治機構の問題ですが、デモクラシー国家は、戦争になると、独裁国以上に軍中心が独裁的に行われて、デモクラシーは、全く行われぬようですね。今度の戦争ではフランスは戦争を切掛けにし

て、国内的に不利なようなことはすっかり清算したのでですね。

細川 それはそうですね。一般に民主主義国は弱い弱いという考え方があります。弱いような顔をしておつてね、段々段々と民衆を納得させながら引張つてゆくところから見ると、弱そうで終いになつて強くなるんですね。ところがドイツは第一次欧州大戦の際には、初めは強そうな態勢であつて後へ行つて崩れた。そこでやつぱり民衆を納得させたかどうか——のボロが出るんじゃないか。

矢部 そうなんですな。大体まア一般の法則として内外の危機が迫つて来れば、政治形態はどうしたつて物理的に云つて独裁的になるんですよ。それは民主主義の国だつてそう変りないのです。そこで問題は、その独裁的になつた国家權力に全国民がどれだけ魂で結び付いているかですな。政治形態の面から云えば、僕はそこだと思ひます。併

し問題はそういう形態だけにあるのではないので、戦争になれば、こいつはみんな同じ様な傾向を採るのですから、もつと根本の要するに総力ですなア。

細川 つまりなんですな精神的に結んだということ。

矢部 それと物質的な豊かさだなア。

細川 豊かさ。

益田 物質的には、やつぱりもし英仏側の海軍が健在である限りにおいては、英仏側に余計余裕が有りましようね……。

板倉 それはもう殆ど争う余地がない。たゞしかしそうであるからと云つてドイツがいま戦争をするために、三月や、半年分しか弾丸や、ガソリンの数が無いとは考えられない。ドイツは、弾丸や、ガソリンは戦争できるだけの余裕は有るでしょう。けれども、国民の日常生活のための物資の豊

かさは英仏側に劣るのではないか……。

細川 そこで私考えるのですが、そうすると、ドイツは、ソ聯とバルカンをどうしても自分の味方にしなくちゃならぬことになりますね。ドイツは、ソ聯からどれ程に物資の供給¹が得られるか？

益田 それは問題でしょうね。ソビエト聯邦は計画経済の国ですからね。盲滅法に生産するんでなくて、需要と生産を大体睨み合せて生産する。外国貿易の占める部分が、ソ聯の、一ケ年間国家経済のパーセント位にしか統計によるとなっていない。だから、輸出貿易は、ソビエトの方から云えば、どうしても国内にない物を買うためで、何も外国に物を沢山売るためにやっているんじゃないと考えられる。すると、ドイツの方から、何を寄越せ——と云つても、そう右から左に寄越すような

1 1939.8.19 独ソ通商条約、823 独ソ不可侵条約、928 独ソ友好条約、1940.2.11 独ソ通商協定調印。

ストックがないんじゃないか。現に石油やなんか、一九三二年頃から八年頃までの間に、産額は一倍半に増加しておるのです。ところが、輸出額は、六百万吨から百万吨へ六分の一位に減っている。銑鉄は、同じ期間に二倍以上になっておりますが、一吨も外国には輸出していない状態で、ドイツの方から、此れ、此れの物資を寄越せ——と云ったところで、ソ聯の方でそれを寄越す気になつても、生産の拡張ということが先決問題になつてくるんじゃないか。石油が在るから掘ればいいじゃないか、鉄が在るから掘ればいいじゃないかと云つても、生産設備をまずしなければならぬ。ですから将来は別として差当り非常に大量のものをドイツに供給するのは、公平に見て困難ぢやないか。もう一つは、ソビエト聯邦で従来開発されておるのは欧露の方が主で、これは帝政時代から殆ど欧露に限られて、そっちの方の資源が段々少なく

なつてゐることは事実だ。だから新しく生産を拡張するとすると、シベリアまで来なければならぬ。そうすると輸送が相当に困難になつて来る。従つて、石油なんか月十二、三万吨位だろうと云うのでハッキリわかりませんが、おそらくその程度しかドイツに供給する力は無いのではないでしょう。

それからバルカンの方もやはり大体似たような觀察ができるんじゃないか。バルカンで一番有力な農業国は、ユーゴスラヴィア、ルーマニア、ブルガリヤ、ハンガリーだそうですがね。従来その四国の食糧——農産物ですね。農産物の余剰を全部一緒にしても五百万人位しかない。これはアメリカの経済専門家の計算です。そうしますと、ドイツの全人口が約八千万人として、ドイツの食糧自給率は八十パーセント位だと謂われておりますから不足の二十パーセントというと千五、六※【百】

万人分ですね。そうすると、バルカンの方からすっかりいろいろな農産物を買って来てもまだ足りない。それから沿バルチック諸国とか、ソ聯辺りからも来るが、バルカンだけを切り離して考えると、どんなに旨くバルカンの物資を手に入れることに成功しても、それだけでドイツの食糧問題は救われないような気がしますね。それからルーマニアの石油やなんかでも、埋蔵量が、四年か、五年か前にマコヴェイ¹とかいうプロフェッサ²が計算したところでは、せい／＼一億吨位な埋蔵量なのです。そのうちアメリカの石油の専門家が踏査して、アメリカ辺りで普通に使っている生産設備で掘り出せるものは、大体に二割か、二割五分位で、二千万吨から三千万吨となる。ドイツの戦時における一ケ年間の石油の消費量は大体二千万吨位に

¹ macovei gheorghe、1880～1969、ルーマニアの地質学者。

なる。現在ドイツとルーマニアとの間に成立している一ケ月十三万吨、一年間百五十六万吨の石油の供給は続けられるかも知れませんが、ルーマニアの石油を非常に目当てにすることはやっぱり困難じゃないか。それと、英仏側の切崩しが、かなりあるのも考えなければならぬ。勿論ソビエト聯邦とか、バルカン、イタリア方面がまだドイツに対してある程度開放されておることとは、此前の世界大戦の時に比較して、ドイツの経済力にとつて非常な強味に違いないが、と云つて、ソ聯、バルカンの物資が非常に大量にドイツに入つて来て、ドイツの戦時経済力が後顧の憂いがないように十分になるとは、一寸云えないんじゃないか。

細川 まアそうだと思いますが、この状態が続いても、ここ二年そこらは保つでしょう。ドイツは？
益田 例えば、石油消費量を見ますと、一九四〇

年に於いて戦争をやつていなければ、大体六百五十万噸というところに推算の一致しているのです。ドイツの国内の人造石油と天然石油とを一緒に合せると三百五十万噸、だから平時の不足数は三百万噸位になるわけですが最近数年間の輸入額は遙かにこの不足額を越えている。だから貯蔵は余程あるでしょう。が、その貯蔵量は勿論ハッキリしません。今後何年その貯蔵で持ち堪えてゆけるのか、それは分りません。

細川 ともかく、その状態では、ソ聯とバルカンに対するドイツの依存は強くなるわけですね。

益田 強くならざるを得ないと思いますね。

矢部 どうです、細川さん、ソ聯は一体何を考えているのですか。

細川 僕も明確なことはわからん。

益田 ソ、レンがわからんです。(笑声)

細川 バルカンでは、私は聾瞶敷におるんだから分

らんですけれど、ソ聯、ドイツ、イタリアは、相当気を合せてやつておるようですね。争うよりも気を合せておる様子でないですか。

益田 そのところはわからんですがね、イタリアとソ聯の間が旨く反が合いましようかしら……。

板倉 ちょうど私がローマにいた時分リッペンロップが、突然ローマにやつて参りましたね。

益田 三月の初め……。

板倉 その時、それまでどうもイタリアとソ聯の間が余り旨く行っていないのを調節に來たんだと専らの説でしたが、それから後、どうもそんな風な形跡が段々と現れて來ていますね。

(三木清氏出席)

板倉 それで一番先にソビエトと仲良くしたのはやはりイタリアでした。スターリンとムツソリーニ

一 Joachim von Ribbentrop 1893 - 1946、ヒットラー政権下の外務大臣、戦後死刑。

のことですから、ソビエトとファシスト・イタリアは、いろいろな主張の点は別ですけど、国際政治の上で絶対に両立できないものでもないだろう。最近面白くなかったのは、やはりバルカン問題なんでしょう。その間を調節して、多少まア調節されたような様子は見えて来た。バルカン問題で、何か相当な取引だが、妥協があったかした結果ではないか。

細川 あのソ聯とユーゴ・スラヴィヤとの最近の接近ですね。あれはドイツが仲介したと新聞に謂われておったのがありますが……。

板倉 それも従来、ユーゴ・スラヴィヤにはイタリアが専ら接近していたのですけれど、それをソ聯の方とも少し宛つ領け合おうというような訳なんぢやないんでしょうか。それからルーマニア¹辺りを、いきなりベッサラビア¹に出兵するようなこと

1 Besarabia 現在のモルドバ共和国辺り、この当時はルー

をして攪乱しないとか、バルカン問題で、イタリアとソビエトとの利害の衝突を調停するために、ドイツが仲に這入て、ある程度まで成功しておるのもこれは有り得る。

矢部 しかし、ユーゴにソビエトが出たらイタリアが承知しないでしょう。

細川 そこはバルカン問題は、ソビエトにとつても、ドイツにとつても、イタリアにとつても喧嘩してはいけなくなっているんじゃないですかね。喧嘩しては英仏に乗じられる。

矢部 それはそうだけれど、ユーゴにドイツが仲介になつてソビエトを引張り出す——という手はないでしょう。

細川 僕は、内情はわからんけれどね、どうもイタリアと芝居を打った。ユーゴにソ聯が這入るこ

マニア、その以前はロシア帝国領でソ連は 1940.6.26 割譲要求し、すぐ占領する。

とは、そこにドイツの仲介が相当に有利に展開したのではないか。利害を相調和するについて斡旋があつたんぢやあないか。

矢部 もしそれが事実とすれば、僕は不思議に思いますね。

細川 どっちにしても表面的な見方ですが、どうも彼処で三国が喧嘩してはドイツは危なくなる。ドイツは物資を求めなくちやならない地位に在るのですから、危なくなると英仏を凹ませようとするイタリーにしても、ドイツと相互援助条約をやっているソ聯にしましても目的を達しなくなる。まあ私の考えはそういうようなところから来ておるのだね。ソ聯にしても、イタリーにしても英仏にある程度譲歩をさせよう。まあそれだけドイツに有利に戦いを展開させようという建前ですからね。

矢部 確かに最近の情勢では、独・ソ・伊間には、

何か謀略同盟があるような気がしますね。

板倉 そんなような空気ですね。勿論狐と狸の瞞し合いみたいに。

矢部 とにかく戦争がこうなつて来ると、やるところまで遣るんぢやないでしょうか？

益田 もう引ツ込みが付かないでしょう。前はムツソリーニあたりが、平和の提唱、斡旋みたいなことをやつていましたがね。ここまで来たら、一寸問題になり得ないんぢやないでしょうか。ムツソリーニが平和の斡旋をしようとしたのは、結局戦争後の事態に処する強力な発言権を握るつもりだったのでしょうけれど、それにしても其の頃まではまだ本格的な戦争にならないで、ボヤで済みそんな可能性が幾らかあつたからやつたんだ。しかし、今となつては一寸それは難かしいんぢやないか。

矢部 どうもそう思うんだが、ノルウェー作戦が始

まるまでは、いつ好い加減なところで手を打つかわからん——という気がしていたけれど、もうここまで来ると、好い加減のところでは手が打てないですね。

益田 イギリスやなんかだつて、喧嘩屋のチャーチルを引張り出して、民主主義の国でありながらインナー・キャビネットを拵えて、相当覚悟は決めている。

矢部 ここで相当徹底的に戦争するとしますね。そうすると、その後どうなるでしょうか、——三木さんが来られたから……。〈笑声〉例えば、欧州の文化だな、文化と云つて悪ければ文明でもいいですが、どんなになるんでしょうね？

三木 そうですね。ともかく徹底的に戦争すれば、勝つたにしろ、負けたにしろ、非常に疲弊するこ

1 内閣の運営を少数の有力閣僚による小内閣で行う。第1次大戦でイギリス内閣で行われた。

とは事実だろうと思います。これに注射を打つのは、ヨーロッパに近い処ではソ聯、それからアメリカですね。その注射の仕方および注射がどう影響するかが大きな関係をもつでしょう。ヨーロッパの文化は、そういう意味においては亡びはしないと思いますね。たゞ自力更生の力は無くなるかも知れません。他から注射を打つことが必要になつて来るのでないか。従つて文化の性質もこれまでとはかなり違つて来るでしょう。尤も、その注射が旨く効くか、どうかだつて問題です。

いつたい今日世界一般に漲つている一種の戦争熱は、オラティミズム楽天主義に立つている。つまり何かそこから新秩序が創られるというオプティミズムがある。しかし、これはまだ証明されていないことで、その点については、もつと深く考えてみなければならぬことがあるかも知れない。前の世界戦争の後には、ヨーロッパではペシミズムの時代が来

て、それから本当に起ち直つて新しい生々とした文化創造にまだ向わないうちに、また今度の戦争になつたのを考えてみると、少くともヨーロッパだけについて云えば、そんなに簡単にオブティミズムが信じられるかどうか。たゞこれに注射を打つものが、どういう仕方です打つか、どういう風にそれが影響するかが問題だな。

矢部 しかし、ソビエト辺りから注射を打たれたら……。

益田 アメリカの注射となると、針が余程長くなければ……。 (笑声)

矢部 それはまア、ソビエトの文化も、アメリカの文化も本質的な意味では、やっぱりヨーロッパ文化の流れでしょうな。そこでそういうものが残るとすれば、ヨーロッパ文化が亡びることはないと言ひ得るかも知れんけれども、しかし、ヨーロッパそれ自身は已に文化の中心ではなくなる——と

は考えられるですね。

三木 そうなるだろうと思いますな。同じ国がそういつまでも栄えるということは、歴史にはないのだから……。ヨーロッパ文化は既に前の世界戦争の頃から地方的存在になつていますね。

矢部 そうすると、アメリカとソビエトの文化が、とにかく少くとも相対的に力を強めて来るとしますと、それと東亜の文化が、対立するような状態が必ず来ますね。所謂太平洋時代というものが、やはり来るんだらうと思う。

三木 アメリカとの関係においてはそうであらうけれども、ソビエトとの関係を考えなければならないので、いつたいロシアを、現在のソビエト文化は別として、考えてみるとロシアは、純然たるヨーロッパではないと思うのです。何か東洋的なところがある。ラッセルは支那と印度とロシアとは一つだといっているが、ロシア民族は半分は東洋的

ですね。現在のソビエト文化はヨーロッパ文化の系統であろうが、それが變つて、此のロシアの民族性が、もつと純粹に自由に生かされて来ると、そこに一種の東西文化の綜合のような、新しい形が出来てくることも不可能ではない。これは将来支那とロシアとの關係を文化上から見てゆく上に重要なことだと思ひます。

アメリカ文化は、これは何と云つても、純粹にヨーロッパ系統のものだが、そこにやはり特殊性がある。アメリカ文化はヨーロッパ文化よりもつと世界的な文化だと思ひます。何處へ行つても通用するような性質を有つてゐる。アメリカ文化に較べると、ヨーロッパ文化は探さはあるかも知れないけれども、現在では地方的なものになつてゐる。その点からいつても、ヨーロッパ文化は、衰退するといえるでしょうね。

矢部 何んですか、アメリカ文化の世界性というも

のは？

三木 つまり純粹に近代科学の上に立つてゐる文化……。

矢部 科学文明！

三木 しかしまたアメリカ人には或る理想主義的なところがある。ピューリタニズムから承け継いだ理想性がある。そこが面白いところだ。

矢部 だけど、それは、やはり根本において欧州の近代文化だね。まあ一つはピューリタンの自由です。自由と、それから人道的な理想主義と、それからやはり近代の科学文明、或は技術文明です。もう一つは、非常に大きな資本主義文明です。こういうものに永い将来があるのでしょうか？

三木 アメリカ文化も将来は變るだろうと思ふけれども、ヨーロッパ文化は、アメリカ的な形においては世界的な規模においてまだ生かされて来る可

能性がありはしないでしょうか。ともかく将来変るにしても、世界文化の一つの重要な要素になるのではないでしょうか。

矢部 僕も、アメリカ文化はひどく若いし、それからアメリカの繁栄はまだ将来に在ると思うけれどね。やっぱり根本に流れているのがヨーロッパの近代主義文明だということは、既に何か一つの運命をですな、ヨーロッパの実情から見て示されておるような気がする。

三木 そういうところもありますね。

矢部 だから僕は、そこで東洋の文化が、適正に指導されて行くならば、アメリカ文化よりもっと将来性があるような気がするんですがね。

三木 しかし、東洋の文化の中へ、何と云ったって、近代的な文化が這入らなければならぬ。そういう意味において、新しい形態の文化はやはり東西文化の綜合の形を取つて来ると思う。その形がいつ

たい何処から——どの民族が指導的になつて創つて行くかが問題です。我々はそれを東亜の民族に期待したいですね。

板倉 将来の傾向の問題としてはいろいろ考えられるが、今度の欧州戦争が、その直接の契機になるか、どうか。それは一つの契機になるだろうが、直後に問題が起きて来るか、まだ却々いかない。

三木 それは勿論そうですね。

板倉 その場合に、所謂東洋文化西洋文化のどちらが支配するかになると、要するに政治経済的な力の問題だと思うのですね。例えば、仮りに日本が、本当に東亜の新秩序を確立するに政治的に成功してヨーロッパが戦争の疲弊のためにうんとともすんとも云えぬように抑え付けられて、ある程度英帝国の勢力までも東洋から駆逐する状態になれば、これはヨーロッパ文明は、既に棺桶に足を突ッ込んだことになる。今度の戦争の結果、ヨーロッパ

が疲弊してしまい、その後完全にヨーロッパを抑え付けるだけの勢力に東洋が飛躍を遂げ得るかが分岐点ですね。

矢部 必らずしも戦争直後にそうなるというのではない。相前に永い将来を考えてですよ。

板倉 最も近いところを考えてみて、相当そこにわれわれ日本人としても欧州の戦争を真剣に考えるべきものがある。

三木 我々としては特に、支那とソビエトとの将来に注目しなければならぬ。

細川 日本人はね。八紘一字の理想を掲げるが、どうも自分の国以外の事を余り見ない。動もすれば見ないことがいいような考えを有っている。現に支那の辺境の新疆とか、カザクスタン【Kazakhstan カザフスタン】だとか、あの辺りに何が起きておるかを能く理解しないのですね。更に支那事変が、イランや、印度辺りにどんな影

響を与えておるかも考えなければならぬのです。が、そういう事は閑却しておるようですね。

板倉 全く日本人は、自分の国ばかりしか見ないが、こいつはある程度何処の国でもそうです。他の国を見ることは少ない。例えばフランスなんかそれこそ井の中の蛙で他の国は知らない。自分の住んでいる井戸が素晴しく立派だと思っている。たゞ日本人の場合は、自分たちの住んでいる井戸が果して素晴らしいか、どうか、それを自覚しないといけないのです。従って外を見る必要があるんじゃないか。その点で、イギリス人は、やっぱり国民として非常に世界的な国民だ。だから外交を考えても、直接の利害関係をイギリスは全世界に跨って持つておるんで、外交でも規模が大きいけれど、フランスの外交となれば、大外交家タレーラン¹以

1 ナポレオン時代の外交官・政治家。

来、最近にはブリアン¹みたいな外交を出しているが、非常にローカルな性格で、ドイツと自国の事しか考えていない。非常に規模が小さいですね。そこはやはり国民としてなり、国家としてなりの実力の問題で、要するに、日本は、非常な出来事があつたために世界的に大きくなつたような感じがするけれど、それは錯覚もあることを自覚してかゝらなければいけない。それでやはりわれわれの東洋文化も本当に支那民族の将来にも期待をもつ。これは理智的に考えた挙句の果てで、感情的な希望としては、東洋文化の自分を中心に置くことを知らず識らずの裡に希望しておるのであつて、将来の文化にたいしても、日本人は自分を忘れ兼ねている。そこを離れて考えないといけませんね。結局実力の問題で、器量相応に段々に伸ば

1 Aristide Briand 1862 - 1932、フランスの政治家、外交官・首相。1928パリ不戦条約締結に尽力。

して行くことを考えないと、他所の国の出来事でもつて、自分が本当の実力がなくても、いい地位に置かれるチャンスに恵まれたために、過ちを仕出かすことがないとも限らない。これは偏狭な愛国心でなしに、もつと実力に即して文化の問題も考えなければならぬ。

細川 日本人は、日清戦争、日露戦争、或は欧州戦争にそういう点恵まれておりますね。

板倉 恵まれている。

益田 要するに、此の事変を契機として本当に試練の中から起ち上るかどうかが根本の問題だ。

板倉 英仏側もドイツ側も勝つことを予想してその前提の下に云い合っているのですね。フランスにしても、イギリスにしても、自分の方から謂わぐ仕掛けた戦争の形になつて、ドイツのヒットラーの帝国主義に対抗して、それを防ぎ止めるためだとは云っているけれど、自分たちも結局は帝

国主義なんで、帝国主義の所得を護ろうとするための掴み合いなんですから、非常に危急存亡の瀬戸際に立った程押し詰められていない、だから今度の戦争目標が余り具体的でない。随って戦争を理由附けるために、将来に新しい秩序を建設するいろいろ議論がなされている。此前の大戦の後で出来た国際聯盟について、イギリスにもフランスにも相当議論があつて、何のために、戦うかについて、フランスなどでは、ドラディエ首相の時に、二十五年毎に戦争の危機に見舞われることからヨーロッパを解放する——と、言うよりしか仕方がない。随って戦争の後のヨーロッパの再組織、むろん文化の問題も入って来るけれど——それを盛に云っています。ナチズムを倒す前提にして云っているわけです。一方ヒットラー総統のほ

1 Edouard Daladier、1884～1970、フランスの政治家、首相、対独宥和政策を取る、開戦時は国防相。

うはこれもやはり自分が勝つ前提の下に、将来のヨーロッパをいろいろ云っている。その中で、ラウシュニング²という、前にダンチツヒの上院議長をしておつた人が、一頃ナチスの幹部としてヒットラーあたりの本音を聞いた時代である。それがフランス語では“Il m'a dit”[＃邦題「永遠なるヒットラー」]として刊行された。それはヒットラーが政権に就く直前から、其の側近の幹部連中にたいていして本音を打ち明けた。あらゆる機会に云つたのをノートに取つておつたのを整理して出版した。それが一つは英仏の逆宣伝にも利用できるのですが、とにかく、非常に読まれています。「マイン・キャンプ」[＃邦題「我が闘争」]以上のヒットラーの本音はこれだというようなことを云っております。それに依るとドイツ民族が最高の民族であるというので、非常に広範囲に互つて、ヨー

2 Hermann Rauschning 1887～1982

ロツパ全体を幾つかのグループの聯邦に分けて、其の支配権の全部をドイツ民族が握りクリスチャニズムを、猶^{ユダヤ}太人を一切排除した後のヨーロツパにドイツ民族の支配権を確立することによつて再生させるんだと云つております。両方勝つことを前提として勝手なことを云つている。

三木 そうですよ。先程云いましたように、現在ハッキリ考えないで、オプティミズムといいますが、或はむしろ見栄といいますが、そういうものがありますね。

板倉 あなたの仰つたことは確かに當つている。いまいうヨーロツパに一種のオプティミズムがあるのは事実です。だから頭には、いい気なものだと思ふような、見栄がある。それは多少皮肉だけだ、なお當つてゐるような気がしますね。

三木 しかし、その見栄は、ヨーロツパだけのことでありません。どこにもありますね。

板倉 あるかもしれませんね。

矢部 しかし、ヒットラーのオプティミズムとか、イギリスやフランス側のオプティミズムでなくとも、とにかく徹底的に戦つた戦争の後で、ある種のニュー・オーダーが出て来るのは当然でしょう。

三木 それはそうです。

矢部 彼等が主観的に考えた新秩序が出来るということはなくとも、その後へ客観的に何か新しい秩序が出来るだろう――。

三木 しかしそれは結局は、只の地図の塗り変えですまない、もつと内面的なものが出て来なくては。

矢部 それも必ずしもある個人が考えたものではなくともこれだけの大きな人類の運命的な戦いがあつた後では必然的に内面的な変化があることも考えられる。だから新秩序はどういうものだろうか――と考えることは、僕は無意味ではないと思うのです。

三木 その点において、問題になっているH・G・

ウェルズの聯邦案なんかでも、やつぱり現在のヨーロッパを前提とした、ただその少し違ったコンビネーションのようなもので、本当に内面的に変つてきた形ではない。そこに問題があるのですね。

矢部 そう。

三木 だから、それは国際聯盟なんかとは違つたようであつて、結局その一つの変形で、根本的に違つたものではないと思う。随つて将来ヨーロッパ聯盟ができるとしても、ウェルズなんかが云つているのと、全く違つた意味内容のものにならないければならない。

矢部 一つは、真に客観的な新秩序ですな。そういうものの中で一つの重点は民族主義の問題で、もう一つは資本主義の問題だと思う。細川さん、どうですか、その民族主義は、戦争の後でどうなり

ますか？

細川 はア——。ちよつと待つてくれ給え。

矢部 つまり今までのようなウイルソンの民族主義を基礎にした聯邦になるのか、それとも民族主義が、もつと本質的に何か変質するのかですな。

板倉 ウイルソン風な民族主義は、もう成り立たないんぢやないですかね。今度の戦争で殆ど意味のないことはハッキリしたでしょう。海の無い国家

だとか、僅かの人口の小国家を創つてみたつて、何か一つの大きな中心的な国の動きがあれば、もうまるで罌粟粒みたいにな、存在の意義も何も無いものになつてしまふ。そいつの組合せをいくら創つてみたつて駄目だ。戦争の前の空氣ですけれど、ベルギー辺りの青年層の相当インテリーの間に、『変な板挟みになつて、毎日不安な日を送るよりかは、国家の独立はどうでもいいから、ドイツなり、フランスなり、どつちでも結構だから、

ハッキリ合併されてしまつたほうが気が楽だ。』と云う非常に捨て鉢な云い分を一人や、二人でなくききました。少し誇張しておるけれど、本当にそうだと新聞記者連中も云う。ある一つの事を暗示しておるのぢやないか。

三木 とにかく世界の単位が大きくなるんですね。

矢部 それは真実だ。

三木 それはそうならなくてはならない。

矢部 それは僕もそう思っているのです。南北アメリカ大陸とか、ソビエト。それからヨーロッパは一つになる、遅かれ早かれ。それから東亜。色々の小国は、碁を打つて、段々駄目が詰つて来るように、無くなる傾向は、あると思う。この事は、戦争技術の発達からも謂える。つまり封建社会の群雄割拠が、近代的な銃砲火薬の発明でもって統一されたのです。こいつは戦術とそうして新しい戦備ですね。巨額な財政が統一を促しているんで

すね。その同じロジックを、もし現代の戦争に当筈めてくれば、つまり、一国でもつて戦争ができないんです。必ずこれは軍事同盟とか、国家ブロックとか、或は経済ブロックを背景にしなければ近代戦はできない。段々地域の単位が拡大して来る。ところが、民族が、そういう傾向とどういう関係になるか。それは専門家の細川さんに伺いたいものです。

細川 専門家というわけでもないが、さつきから言われるところは、僕が繰返して言うまでもなく同感ですがね。あなたの心配している東洋民族ですね。大きく云えばアジア民族というか。それがヨーロッパにしたつて、アメリカにしたつて、それに並行して、アジア民族が結束して協同体と云いますが、それを成すか、成さぬかは、日本から云えば日本の態度に在る。日本が支那事変をいかなる方法において解決するか、それに関っている。そ

の日本の支那に対する態度は、大きいのは印度、これが見ていますね、とにかく小さなアジア諸国も視ておるわけです。それで、私は日本人として樂觀ができないのは、日本人が考えておるように、それ等の民族は、日本に好意を有つておるかどうか、それは一に係つて日本の支那問題処理にあるだろうと思うのです。まアそれは前提として、あなた（矢部氏）の問題にされる民族は、御存じの通り人種を同じくするし、風俗習慣も同じくする。それから同一の經濟組織を有つてその集團的存立と自由とを願つてゐる。で、そういうようなところから、或は印度だとか、支那だとか、タイ国だとかが視ておるわけです。此の大きな戦争の過程に於いてそれ等の民族は、大国に併呑されたりするでしょうが、それ等の民族の有つ思想だとか、習慣だとか、信仰だとかは、どうしたつて政治的には何とも解決できないものでしょう。尠くとも

初期においては。——永い過程においては変化があるだろうけれど……。そういう民族は、さつき問題にされたように、伸びるか、縮むか？伸びも縮まりもしないものでしょう。たゞ問題は併合され、或は同盟したそれ等の民族が、政治的經濟的にどういふ扱いを受けるか、——の問題は残るけれどね。民族という觀念からは伸びも縮みもしないでしょう。たゞそれ等の諸民族をいかにして日本なら日本が、其の理想の下に結合するかですね。

矢部 それはまア何も日本とか、支那とかに限らずに、つまり戦争後の全世界の民族問題として、僕はさつき問題を出したんですけれどね。つまり民族は、伸びも縮みもしないで、ちゃんと在るものだ。……併しながら、拡大された地域でその民族がある民族と結合する。その場合ですね。戦後に本當に三木さんのさつき言われた、内面的な質の變つた一つの新秩序が出るとするならば、すごい

う諸民族の間の結合関係はどういう風なものか。今までの通りの、独立民族の間の聯邦だとか、それでなければ或る民族が他を同化するとかいう風な往き方より他にないものか。伸びも縮みもしないとして、そういう民族の新しい秩序に於ける協同関係ですな。それについて、一体何か新しい方式はないか、どうかですね。僕が問題にするのは……。

細川 新しい方式は、一つはソ聯の民族政策に現れていると言つていいでしょうか。

矢部 それはどういふのですか？

細川 それは共同の敵に当るために各民族の協力の上で政治的に融合する。

矢部 融合？

細川 一つの政治権力を構成する。外交も国防も一つになつて行く。一つの中心に集成する。それからもう一つは、経済的に大きな組織に結合す

る——のですね。そうしてそれと同時に、各民族の特殊な地方的な行政、固有の文化、広い意味の文化ですね。それを各民族に自由に享有させる。或は干渉しない、こういう建前でしょう。

矢部 ではロシアには指導的な民族はないのですか？

細川 指導的な民族は大ロシア人です。併ながら、これについては、大ロシア民族のツァー時代のショーヴィニズム【Chauvinism 排外主義】を増長させたのでは、尠くとも六十種を数える多くの民族、それ等を結合することはできない。できないばかりか土崩瓦解の危険があるので、ツァー時代に執つておつたショーヴィニズムを抑える。これはソ聯がその存続上解決せねばならぬ最大任務の一つでしょう。

矢部 それは旨く行つていますか？

細川 それは夫々の見方が違ふようですが、私の見

るところは——日本で公開されておる資料だけですがね——それ等を通観してみても失敗しておるといふことは断言できないようですね。しかし、成功したという程に確定的なところまでにゆかない。今過程だから。併しながら、成功する要素をより多く有つておると見られるようですね。そこでさつき三木さんが云われたように、ロシアは、あなたの言われる東洋民族の今後の発展においてかなり大きな役割をなさないか——ということですね。その点は、日本の大陸政策が、余程胸を大きくして、能く観て、それに劣らぬ政策を樹つべきでなからうか。

世界の文化については、これは三木さんの専門だが、私はやつぱり新たな文化が世界的に芽生えて来る——時運に世界史が入っているんじゃないかと思うのですね。それはさつきも話があつたように、此のヨーロッパ戦争がヨーロッパ戦争とし

て局限されるか、或は世界戦争に発展されるか、いずれにしても、そうして其の戦争の窮極においてペシミズム時代が来ましても、それは当面の一つの変化であつて窮極の方向は変りはしない。

矢部 しかし、直後には相当反動が来るでしょうな。

細川 反動が来る処と来ない処があるでしょう。

矢部 しかし、戦争が全世界に亘れば、大体全世界に反動が来るでしょう。

細川 そうとは断定できないでしょうね。

矢部 そうですか。

細川 つまり反動主義をもつて利益とするものは反動主義を執る。

矢部 反動主義ではない。反動ですよ。それは大変な間違いですよ。(笑声)

細川 それぢや取消そう。併ながら、反動が来る処と来ない処があるでしょうね。今後の発展は複雑であろうと思うのです。

矢部 それは複雑だ。

細川 それは第一次大戦とは違うでしょうね。

三木 蘭印問題はどうです？

記者 矢部さん、如何ですか。

矢部 卒直に云えば、日本の所謂生活圏ですな。そういう意味から云えば、蘭印というものは、あらゆる点から考えて日本の生活圏に入れておかないと、日本の生存が困難なことは明瞭だ。たゞそれを今武力に依ってやるかどうかが問題だと思ふのです。武力的にやるとなれば、当然アメリカ乃至イギリスと戦わねばならぬ。アメリカやイギリスが先手を打って来ない場合にまで、日本の方が進んで彼処まで武力的に出て往くかどうか問題だ。

三木 その可能性はどうです。

1 オランダ領インドシナ・インドネシア

2 1940年、第2次近衛内閣は武力行使を含む南進政策を決める。

矢部 極めて常識的な觀察から云えば、もしイギリ

スカ、アメリカが、蘭領東印度を保護するとか、保障占領をするとか、保管するとか、になったならば、日本としてはやはり行かざるを得ないだろう。其処まで向うが出て来なければ、恐らくこつちも行かないんじゃないか、僕はこう思っているのですけれど。そこで蘭領東印度の問題が、ある意味では、日本が欧州戦争に介入をするか否かの、一つのポイントだとも思う。益田さん、どうですか。イギリスなり、アメリカなりが彼処に出て行く可能性はありますか？

益田 そうですね。今のところそこまでは行かないんじゃないかと思えますけれどね。例えば、もう西印度の方には行きましたが、オランダ当局の説明によると、彼処には武力も何もない。しかし、東印度の方にはそれがあるから保護して貰わなくてもいいというんですね。オランダが、従来国防

的に、殊に東印度の国防の上でイギリスにリンクしていたことはこれは事実だ。何処にも保護を頼んだことはない。今後も頼まないと云っているが、実はイギリスの方に頼っていた。しかしだからと云つて、ヨーロッパで戦争が發展して、仮りにオランダがドイツに支配されるようなことになつても、オランダが必ずしも、イギリスだの、アメリカだのに積極的に保護を頼むという結論は生れないだろうね。だとすると、イギリス、アメリカの方でも頼まれもしないのに、彼処を勝手に保護占領するという手は。

矢部 向うが行かなければこちらも行かないのではないか。

益田 英米がいかなければ日本の方でも行かなくてよいわけだ。

矢部 そうなれば戦禍の太平洋への波及は、一応阻止される。

益田 僕もそう思いますね。

矢部 ところが、向うが出て来ると介入になる。そこがどうも境目ですな。

細川 それはしかし、リーズナブルに考えての見方です。

矢部 それはそうです。

細川 しかし、此の世の中はリーズナブル許りに考へてはいけないようですね。

三木 現にそういうものがあるんじゃないですか。

細川 聾栈敷にいるからわからんけれど、従来リーズナブルな考えは皆引繰返つた。一応のリーズナブルの逆に考えなければならぬようなことになっているようです。

三木 場合によつては出て行かなければならないかも知れませんか。私は必ずしもそうリーズナブルな論のみを考えている者ではないが、いずれにしても日本の国内体制を整えなければどうにもなら

ない。それを整えないで出て行くことは余りに冒険だ。

矢部 国内体制と同時に支那事変の処理ですね。これがちゃんとした目鼻がある程度付いてからでないとい無理でしょうね。

三木 支那事変処理も、国内体制が整えば、ある目度がつくわけです。何か目度を付けなければならぬ段階に達しておる。

益田 現在の政府の方針も大体そうではないんですか。例えば二月九日の外務大臣の衆議院予算総会の答弁でも「南の方には経済的には進出したいと思ふけれど、領土的野心は有つていない」と云つていますし、それから最近の声明の応酬なんか見ても、やはりそう云つていますね。尠くともわれわれはそう理解している。

三木 イギリスが最近日本に接近しようとしているという噂がありますが、それはどの程度のもので

しょうか。

益田 そうですね。一般論としては、あんまり突きまわして日本をドイツ側の方に追いやるようなことがあつてはいけないという、懸念から来ているでしょうね。

矢部 併しアメリカの牽制が利いているから、中々そこまでは行ない。ゆこうと思つても……。

益田 イギリス自身がアメリカに牽制されておる。それもありましょうね。

矢部 イギリス自身の立場では、僕は相当の程度まで妥協する考えがあるのではないかと思ひます。

益田 差当り事変処理に積極的に協力はないが、尠くとも無暗に邪魔をしないんぢやないか。それと同時に、今まで日本との間に、いろいろの蟠まりの原因になつたものを逐次解決するように努力しようとして行くことも事実だろう。アメリカの場合、それと余程事情が違つて来るけれどね。

矢部 どうですか、これも百年単位の話ですけれども。イギリス帝国が、今度の戦争の後でどうなりましょうか？

益田 それは矢部さん御自身のほうが……。

矢部 僕はさっきのヨーロッパが一つになると云った点から言つてね。イギリスが何かヨーロッパ大陸に於ける一つの異分子である間は、ヨーロッパが一つになることは、不可能だ——と思う。従来だつて、欧州が一つに成ろうという努力は、凡てイギリスが叩き壊しているからね、ところが、それはどこに原因が在るかと言えば、やはりエンパイアというものがあるからだな。イングリッシュ・チャンネルが在つて、大陸から離れていて、軍事的にも安全であるからとも、今までは言われたが、これは初めにお話にあつたように、今ではイギリス海峡は、軍事的な意味でイギリスの安全を必ずしも保障するものではないのですね。そういう風

な意味から、イギリス本国はヨーロッパ大陸と一つになるのが運命だ。それと同時に、ブリティッシュ・エンパイアは別個の単位に属して行くようになるんじゃないか。

益田 ただその場合、戦争の結末がどうなるか、英仏が勝つか、或はドイツが勝つかによつて、かなり条件が變つて来る。

矢部 それはそうだ。

益田 仮りにイギリスが負ける。足も腰も立たぬとなると、印度だつて、その他いろいろな自治領とか、植民地とかが、今日のようなまゝの形では残り得ないかも知れん。ですから、戦争の結果がハッキリしないと、戦後どういう風な国際的なブロック、何かそういう形のものできて来るか、それも一寸見当が付き兼ねる。

三木 イギリスがヨーロッパにたいして異分子であることの一つの原因は、いま仰つたように、広大

な植民地を有つておることにもよるだろうが、一つは歴史的に云つて、アメリカと非常に密接な關係があつて、アメリカはイギリスを簡單には見殺しにはできない。アメリカ大陸の方のブロックに属すべき加奈陀、加奈陀が印度の独立するような意味でイギリスから独立するかどうかは、問題だと思ひますね。随つてイギリスは、地理的にはヨーロッパと密接な關係があるんだけど、同時にアメリカの方にも牽かれてゐる關係があるために、一種の異分子になつてゐる。

矢部 それはあるでしょうな。イギリスが、何とか変らぬと、世界がさつき云つたような大きな地域単位に變つてゆくことにならぬ。

三木 数学的に云えば、イギリスがアメリカまで引込むといふ。アメリカ大陸まで引込んでゆけば、或は纏まりが速いかも知れない。

細川 僕は一寸違ふんだが、それは寧ろ印度が独立

したほうが早いんじゃないか。印度を失つたイギリスは、どうしても向うの方へ押されてゆくだろう。

矢部 向うというと、どつちですか？

細川 欧州、アフリカの方……。

細川 イギリスの世界政策の中心点は印度でしよう。

矢部 それはそうでしょうね。

細川 だから印度人も大分強硬に出ておるようだが、やはり印度人としては此の際を逸してはいかないでしょうね。今までイギリスのために散々欺されて来たのだから、今度は腰を上げなくちやならない。

三木 其の方向に於いてソビエトは相当積極的に出て来るでしょうか？

細川 それは印度人自身による革命運動がイギリスの手におえなくなるほど強くなつてくれば積極的

に出るでしょうね。それまでは外で考えられていように、積極的に出るとは考えられない。

板倉 しかし、どうですか。印度独立の可能性は、どの程度にあるものですか。これは日本は、東亜の盟主だけれども、印度の独立は、やっぱり百年河清を俟つの類いでないですか。

細川 私は、そうは見られない。十九世紀末から印度の知識階級は、イギリスに対してテロリズムまでやって、ずっと続いて来ていますからね。それと欧州戦後、労働者、農民層が、国民会議派を中心としての運動に引込まれている。それと印度の労働界に共産党ができて以来、其の労働運動に対して相当酷い弾圧をうけておる。飛行機や、大砲で大分酷い目に遭ったらしい。その試練は深く浸みておるだろうと思うのですね。最近国民会議派が強力に出るのも、それ等の点があると見なければならぬ。ある人の話に、カルカッタか、ボン

ペーかの大学ですが、去年か今年ですか、大学の学生が赤化して、大学を閉鎖しなければもってゆけないようになった。まア印度の青年、労働者は、アフガニスタン辺りから入ってロシアの学校に学んでおるということです。それは印度に限らぬ、新疆でも同じようです。だから思想的にも相入っているんじゃないか。

矢部 ドイツが印度にはたきかけておることはないんですか？

細川 聞いたことがあるんですが、それは多少何かやっているんですか。とにかく印度はイギリスをとつての危ない処ですからね。

板倉 しかし、どうもわれわれの見たところでは、アジア民族の中で、将来性を有っているのは、日本人と支那人だけのよう気がしますね。本当に生活にたいして勤勉に真剣に生活をしておるのは、此の二つの民族だけのようですがね。あとは

どうも頼りにならないような感じがしますがね。印度人は、上流の知識階級とか、日本辺りに亡命して来ておる人はちがうかも知れないけれど、一般の民衆は、過去に一役果した民族である。全く文明に取残された人々のような気がしますがね。

細川 旅行者の感ずることは、どうも印度人はイギリス人に酷くやつ付けられている姿が船着場なんかで見てもまぎ／＼と映りますね。

板倉 それは非常にありますね。

益田 あるけれど、あるから——と云つて、例えば独立することが實際的に可能か、どうかは別問題ですね。

三木 少し言い過ぎかも知れないが、印度民族は、他所の国が力を籍せば立直ると思いますが、しかし自力更生はどうですか。

細川 しかし、その場合に、印度民衆のうちで、資本主義の発達が勤労層にどういう影響を及ぼして

おるかということも考えなければならぬね。三億余りの人口に対して三百万代の近代産業の労働者が在る。労働者運動の勢は相当に支配者を脅かしつつあるということがありますからね。そういうことなんかも、印度の近代工業化と関聯して考えなければならぬ。支那だつて四億の民衆と云つてもプロレタリア的なものは、やはり四百万代でしょう。それが国運の将来に対し、一個の重大な勢力となつていくのですからね。

益田 独立は知識階級の人が非常に希望しているけれど、問題はその指導をどこに仰ぐかですね。

細川 印度人は、日露戦争で日本を非常に崇拝して、東亜に於いて独立するためには、提携し得る先輩国だと思つていた。これが一九二八年までその考えが続いておるのですね。しかし又日本の態度を疑う考え方も印度人の中にないではなかった。それがね、殊に満州事変以来一般的となつたらしい

ですね。現に去年の秋、ネルーが、印度国民会議派の決議に従って重慶に來たのですね。そして各方面の歓迎をうけ、ラヂオ放送もやった。医療隊も印度から贈られて來た。——そういうことを考えなければならぬことです。

益田 これもやはりネルーかと思いますが、印度人は独立したい。だけど、ある他の力に頼って独立したんでは、イギリスの羈絆を脱して新たな主人の従僕になるようなもので、これはちつとも欲しないのだと云っていましたかね。

細川 それは印度人の感情であるようですね。
益田 そうですね。

細川 だから、さっき私が云ったように、日本のアジア民族政策を、深く顧みる秋だと思いますね。アジア諸民族の信望を得ることほど大切なことはない。

板倉 日本はアジアの盟主たるに恥じざるよう反省

が必要ですね。

益田 盟主はいゝが、問題は口先だけでなく実践的にどうして盟主になるか、ということですね。

細川 所謂徳を以て化するのですな。
記者 それぢや、このへんで……。

底本：『改造』時局版7（1940.6）

文政革新の方向について

文部大臣・橋田邦彦：1882～1945、鳥取県出身、
東京帝国大学医学科卒、生理学者、医学博士、文
部大臣（1940.7.22～1943.4.20）近衛から東條ま
で三次に渡る）

三木清

（文相官邸にて）

（1）自然文化両科学の協調

重要国策科学振興に就いて

三木 私いろいろ文政の事について御意見を伺いに
参りました。まず最初に新内閣の重要国策の一つ
となっている科学振興についての御意見を……。

文相 今まだ内輪の様子を知らないので、どうしよ
うという具体的なものをもっておりませんが、私
個人の意見がないことはありません。私の任官し

ない前から科学振興委員会というものがありまし
て、この間その特別委員会が開かれて一応の成案
を得たようですが、更に総会が八月に開かれる筈
です。そういう方面の成案が出て来れば、大体の
方針が決まると思います。その方のことは新聞に
ざっと出ているようですが、それと同時に、私が
科学というものについて考えているのは自然科学
だけの問題ぢやないのです。この頃自然科学の振
興ということが非常に叫ばれております。これは
勿論振興しなければならんですが、同時に文化
科学の方面がネグレクトされやしないかという心
配があります。それで科学といえ、自然科学と
文化科学を一体にした建前で行かなければならな
い。ということだけは大体の方針としている訳で
す。

科学する心、両科学の一元化

三木 その点私も非常に重要だと思います。今日は大体科学と言えば自然科学のことになっておりますが。

文相 自然科学だけしか考えていない。これは是正しなければいかんと思うですね。

三木 それはちやうど政治と軍事とが一致しなければならぬというのと同じような意味で、自然科学と文化科学とが並行して発達しなければいかんのだかないかと思つてゐるのですが。

文相 自然科学、文化科学というのは便宜的に必要な名前でありますけれども、並立とか対立の意味ではなく寧ろ一つのものとして発達するという方針で進んで行きたいという念願を始終もつてゐる訳です。今度も、科学教育の非常に重要な部門であり、そののみか「科学する」ということに於いて国民道徳的なものも同時に培われる所まで科学教育は進まなければならぬという事を話して置いた

のです。科学と道徳とを対立させたり、離したりするのは、科学も科学でないし、道徳も道徳として本当の意味を成さないということを不断から考へてゐる訳です。

三木 要するに科学精神というものが国民の間に普及し、養成されて行くという方向に教育が向わなければならぬと思うのですが。

文相 全く同感です。この頃頻りと科学精神ということを言うけれども、少し抽象的に考えすぎるようだから、私は「科学する心」と言いたいのです。
三木 それからこれまで科学が生活の中に入つて行くということが少なかつたように思いますが

中、小学校へも重点を

文相 そう、それが非常に少ない。それから科学振興ということを高専専門学校に向つてだけ鼓吹する傾きがあり過ぎる。もつと中学校、小学校に於

教学刷新の方面について

(2) 学生と政治の問題

教師の再教育

いて「科学する」ことを教えなければならぬ。それは科学の一事の事実のようなことは寧ろ解らなくても「科学する」ということがどういうことであるかが常識になつて欲しいというのが私の念願です。それには従来の科学教育のような観念的といひますか概念的といひますか、ああいうのぢやいかんように思います。

三木 それは是まで我々は外国から科学を採つて来たので、自然国民生活から倣き上つたものになつて、上層の人間だけしか知らないというようになつた訳ですね。

文相 学校教育を受けたという人だけがもっている特殊なものになつてゐる訳ですね。そういうようなものでなくしたいと思ひます。

三木 今度の科学振興ということとは、大体国防というものと結びついて重要に考えられております。今日の大きな問題は研究者の不足ということではないかと思ひます。予算は多く取つても肝腎の研究者が不足してゐてはどうにもならないのではありませんか。

文相 それは根本の問題です。研究者の問題、或いは今の研究者がどういふ心構えにならなければならぬかという方向の定め方も一つの問題です。

三木 その点は国民学校の問題でも、学制は變つたけれども、教師の方は一向に準備されてゐない、適当な先生がいなないということが大きな問題になつてゐるのぢやないかと思ひますが。

文相 その通りだと思います。文部省でも再教育と

いうことを頻りに考えておったようですが、あれについても、私の従来考えている再教育のやり方から見ると、足りないのぢやないかということもありますがね。その辺の所は何れ新しい教育方針に従つての再教育的なものが必要だと思ひます。それを適當にしないと拙いことになります。

三木 去年あたりは、理科の方に行く学生が少なく、法科とか政治科、経済科の方に行くのが割合多かつたというようなことを聞きますが。

文相 それはまだ統計をよく見ませんからよくわかりませんが、学校は増えますし、また方々の学校で収容人員を増したのですから、高等学校などに入ってくる者が散らばつて行きましたね。それで高等学校はすこし少なかつたという程度ではないかと思ひます。減つたということぢやないと思ひます。一高などに來たのは従来と殆ど變りはない。

文政革新の方向について

三木 その点から考えましても、これは文部省と直

接關係がないかも知れませんが、技術者の社会的地位といひますか、或いは官庁なんかに於ける地位の向上ということを深く考えなければ、科学振興ということも目的を達しないというようなことは……。

文相 そういうことは必ず問題になつて來ると思ひますね、今のところ閣議も根本方針が大体決まつたというだけで、まだ具体的な問題に入つていないのですが、恐らくそういうことも必ず起つて來ると思ひます。閣僚の方々はみな大抵そういうことはよく理解されている人ばかりらしいですから。

学生と政治の問題

三木 次にお伺ひしたいのは、学生と政治という問題ですが、それについてどういふ風にお考えに

なっておりますか。

文相 私はこの前話したように、政治というものが本当の正しい姿をとっておるものなら、それは日本人全体が参加しなければならんことなんだから、学生が学生の領域に於いて参加するということについては差支えないと思う。併しながら正しく行われていない政治に参加するということは学生としてはいけない。学生が政治に参加することがいいか悪いかという抽象的な問題では、いいとも悪いとも言っちゃいかんという立場であります。それで政治形態が建直つて来るのを目指してか、或いは建直つて来る傾向がすっかり明かになれば学生はその方向に向いても差支えない。これからどうなるかわかりませんが、従来のような政治なら私は学生は参加させたくない。

三木 私なんかの見聞によりますと、現在政治的に活動している学生は、学校の成績なんかは余り思

わしくないというのが多いですが、かような状態が変らなければならんかと思ひます。

文相 それは甚だ面白い傾向だと思ひます。学生の本分というものがやはりあると思ひますので学生の運動は、ひとり政治運動に限らず、その学生の本分を阻害するようなことはやつちやいけませんと思ひます。

三木 大体これまでの政治は、政治というものが国民生活から浮き上つていて、各国民が自分の職能を通じて政治に参加するというような考え方が足りないのぢやないかという氣がしますが

文相 どうもそうらしいように思ひますね。政治は、政治家というものが別にあつて、専門的にやつてゐる仕事だという傾きがあつた。それは本当の政治ぢやないと思ふ

三木 現在政治的に活動している学生には、やはりそういう古い型の政治観念に囚われているのが多

いのぢやないかと思えますね。

文相 そういう古い形の政治観念に囚われておつて政治運動をするということは私は不賛成だ。

文政革新の方向について

(完) 学制改革問題

教育の刷新

三木 そういうことから考えまして、教学の刷新ということ、これは歴代の内閣が言っていることだし、今度の内閣でも重要国策となつていますが、その点についてどういうようにお考えでしょうか。

文相 教学の刷新ということは根本の問題で、刷新

文政革新の方向について

というのか、徹底というのかわかりませんが、日本というものがどういふものかということをはつきり「体験」させることが刷新だと思ふのです。ですから私は国体観念の徹底という言葉は嫌いで、観念だけ徹底するということはありませんので日本人が日本人として働ける所まで来れば、そこで初めてその人は国体観念というものはつきりもつことになるのぢやないか。それを観念的なものとして注ぎ込もうというだけではいかんと思う。従来は併しそこまで考え及ばなかつたから、まず観念が観念として叫ばれたのも当然かと思ひますが、これから先は、観念だけでなしに、具体的な「行」に移すという日本人の建前をもたせるということの意味に於いて教学刷新は進めらるべきだと思つて居ります。

三木 そこで教学の刷新ということもやはり国民組織の問題と…

文相 聯関して一本にならなければ。国民の生活態

度その他ほかのものは少しも変らないでおつて、学生層に向つて教学の刷新、刷新というようなことを言つてみたところで、それでは片輪ですから壊れて行きます。それぢや意味がないので、全体になにか国民が「日本人としての自覚的生活態度」というものに向つて行けるような新組織といひますか、そういう体制が現れて来れば、教学刷新の本当の趣旨に行けるかと思ひます。そして教学という場合に、それが科学の外にあるという建前はとらないように私はしたい。教学の刷新ということも、科学生活「科学する心」というものの中に織り込まれた教学ということではなくちや、私の考へでは意味を成さないと思う。

科学的なレベルの低さ

三木 日本では政治学が遅れていますね。他の学問

よりよほど遅れているのでないでしょうか。それで最近のように政治的な空氣が出来てきても、何かあふなげなものが感じられますし、思想問題としても必要な摩擦が多すぎると思ひますね。

文相 そういうことはありますね。そういう点でも

科学の振興ということは大問題で、日本の科学研究者が今までのようなやり方でやつておると、骨折った割に得る所が少ないという結果になるのぢやないかと思つています。勉強する、努力するということはみな相当にやつているのですが、何か物足らないように思うのは、やり方に拙いところがある。それは結局国民一般の科学的なレベルが高まらなければ、幾ら科学者が奮闘してもほんとのものは出来ない。

三木 そうだと思ひます。例えば今度のドイツの

勝利につきましても、ナチになつてから急に科学が発達したかのように考えるのは間違つています

ね。

文相 それは長い歴史があつて、国民一般の科学的レベルが高いですからね。それで又科学に対する関心というものが日本の人と較べて、私が外国に行つた時ですら数段違つていましたから。下宿屋の内儀などが自分の所に宿している人が何で学位をとつたというようなことを知つていて、いろいろ話していますから。日本の下宿屋の内儀だったら、あの人は毎日ぶらぶらしているとか、毎日家にいるとか、そんなことしか分らない。よほどレベルが高いと思いますね。

学生と兵役問題

三木 次にこれは最近国防国家の建設というようなことから大きな問題になつていゝと思ひますが、学生と兵役の問題です。日本では学校におる間は兵役猶予を認めており、学校を出れば兵役の義務

を遂行することになつておりますが、そうすると学校を出てから直ぐ三年とか四年という間は、大部分のものが兵役の義務に服するということになつて、そこにいろいろ学生としても落着かず、社会としても不便を生じているのぢやないかと思ひます。それでそういうのを何とか改めまして、学校におる間に、並行的に兵役の義務もやつて行くというような風に改める必要はないでしょうか。

文相

それは多くの人がそう考へてゐるようですがね、唯兵隊の覚えなければならぬ事柄などがずんずん進んで来つたので、以前のような兵隊ぢや勤まらなくて大變技術的なものを覚えなければならぬ。そういうことが陸海軍の方から要請されるので、並行的にやつたのぢや足りないということも大きな理由らしかったです。教育審議会などの様子ではそういう話を聞きました。

三木 例えば一年兵役をやつて、一年学校をやる、或いは半年づつやるとかというような方法も：

文相 それも一つの方法ですね。

三木 これは別に学生と限つた訳ではありませんが、青年の体位の低下ということ、これは兵役の問題にも関係があると思いますが。その根本的改善についての御意見は：

文相 国民の体位低下ということについてははつきりしない所が私にはありましてね。これは、こういう地位になつたからいろいろ陸軍なり海軍なりに、どういふ統計的の調があるのかももう少しよく検討し、科学的の根拠に立つて、實際低下しているかどうかということをはつきりさせてから問題を考究したいと思つていますがね。いくら向上しても差支えないから体位向上ということを非難するわけではないけれども今悪いから向上させるといふのと、向上しつつあるけれどももつと向上さ

せるのだというのでは、国民の意気込みが違ふと思う。そこでどういふ問題があるかということ一つ考えて見なければならんと思つています。

記者 どうも有難う御座いました。

底本：『読売新聞』1940.8.1, 3, 4

新政治体制

有馬頼寧：1884～1957、東京生れ、東京帝大農科卒、政治家、立憲政友会、第一次近衛内閣農林大臣、初代大政翼賛会事務局長。

三木清

記者（有馬氏に）先生、これからお忙しくなるんじゃないんですか？

有馬 忙しくなるかならないか判らない。（笑声）——今度の政変は、雑誌（綜合雑誌）の締切に間に合わなかったですね。この間も雑誌の締切と政変とを考えてやらないとね、非常に迷惑をかける——という話をしたのですよ。（笑声）殆ど一日違い位でしたね。ちょうど締切の前位だった。実は前の日に雑誌に書くようにと見えた人があつ

たがね。まア大体決まっていたのですがね。それがわからないから、もうこの辺で打ち切ろう、——と、締切が来てしまったから、どうにもならない、というわけだった。ハッキリしないことは、わからんことは云うわけにいかんですからね。

三木 新聞なんかずいぶん早くから判つてたようですね。

有馬 友達であるから書けない。新体制々々と云うものだから、新体制のほうばかり出て来て「あの謎がわからないんですね。普通の人には……政変の事を書いていても、その道の人にはわかるが、田舎のひとが読んだって新体制がえらく問題になつてるように思う。「そうでない」「そうですか」と言っている。きのう（七月二十二日親任式の日）も近衛さんとして、あんなにしまいのところへ来て、緩慢になった。どうしたかという日が悪いのですね。日曜日は仏滅かなんかなんです。

仏滅の日に組閣した内閣は潰れるのですって。前

にそういうことがある。(笑声)それで一日延ばして引張ったんだ、という話がある。又、中には近衛さんは釣を愛している。つまり余り速く釣つたら面白くないから、大いに愉しんでやったという人もあるしね。(笑声)

記者 先生、いま仰つた、新体制と内閣を引ッ掛けたような新聞の書き方というものは、ずいぶん誤解されておりますね。本当の新体制運動に……。

有馬 どうもいかにですな。

三木 政党なんかの動きはどうなんでしょう。政変に伴つて、まだ何も現れていないのですか？

有馬 現れていませんけれど、中島派は非常に躊躇しているですね。どうも、新体制なんか、余り本気に進められそうもない——という見透しぢや

1 1934年5月分裂した立憲政友会の一方、中島知久平を総裁とする。

ないんでしょうか。

三木 はア。

有馬 組閣が出来たら、解散するとか言つていましたがね。どうも今の所ではそういう気配は見えませんがね。できて、九月頃まで、それ迄はまア様子を見て——というような……。

三木 しかし、此の機会に、新体制運動を押し切らねばいけませんですね。それを延せば絶対駄目だ、と思うのですな。ますく遣り悪くなるし、それから今度始めても却々国民が蹤いて来ないと思うのですがね。

有馬 それはまア、組閣出来るまではですね、なんです、もうあゝいう風になつて、政変が来てしまつたんだから、新体制が出来なければ組閣をやらんということ、そういう事はできませんから、どうしたつて組閣が先きになるんですが、出来てしまつたら、進めなければいけません。もし、

近衛さんが自分で独断的にこう、やるのが困難なら、夫々の機関を創つて進めて行かれ、ばいいのですから……。きのうも話したのですが、われわれ、そちの方面で騒いでいる連中が、近衛さんが、まだ当分できない——というなら、俺達で行こうぢやないか、というような話もあるんです。ですけれど、これは近衛さんと引き離しては考えられない問題で、近衛さんが組閣したということが、此の新体制ということが主たる目的になつてゐるのですから、それにお介意無しに遣るなん、ということとは意味無い。そういう民間の運動をもし我々が遣るとすれば、あつちにもこつちにも同じ様なものが出来てしまつて、どれが本物だかわからないものになる。近衛さん自身が遣るか、さもないければ、近衛さんの采配のもとにやらなければいけない。

三木 早く準備会というようなものが出来て、大

体の方向が示されないといけない——と思いますね。まア是まで相当に関心が昂まつて来ているわけでしょうから、それが政変というものによつて、一部分では——もうこれだけで終るんぢやないか——というような疑惑をもつて来るし、また実際尠くとも後れるという危険が起るのですね。或はそれだけ遣り悪くなると思うのですね。

有馬 私も近衛さんに接近しておるからわからなかつたが、始めた時分には、何やら、こう新体制というものを土台にして組閣されているんでなく、尠くとも少し軽く見られているのぢやないか、という心配があつたものですから、少し言わなければならぬと、周りから突つかせたのですけれども、でも、おわりの方へ行つて、多少そういう匂いが出て来たし、満更その熱意が無い、ということはない、ずいぶんあると思います……。

三木 そこはなんでしょうね。またこの政府中心に

新体制運動が進められて来ると、つまり従来のですね、官僚——官吏組織の運動のようになって来る傾向が非常にあると思いますね。そこは僕は非常に難かしいところだと思うのですね。

有馬 今度の運動は、例えば、軍の人も、官僚のひとも一緒になつて行く、という建前になつているのですから、当然一緒に遣つてゆく筈なんですけれど、いまお話のように、政府が遣るということになる、一寸官製になる虞れがあるのですね。どうも国民精神総動員でも改組して、「精神」だけ抜いて、それで進むというふうなことになるつてしまう惧れがある。(笑声)ある人がやつぱり、「精神」を除いて、国民総動員という風なものでもつて行けばいいぢやないか——といつていた。けれども、それは国民総動員には違ひないでしょう。違ひないんだけど、目的は新体制に在るんだ。総動員そのものは目的でない筈なんで、総動員に

は違ひないけれど、総動員して、そうして何を遣るのか——と云えば、新体制を遣るんだ。其の辺をハッキリしなければ困る、というようなことを云つたわけですがね。新体制というものはどんなものなのか、ということの方々から訊かれるのだけれど、こつちもまだハッキリしたものが決まつていないんで、訳がわからないから、頗る困つてゐるわけですけれど、あなた(三木氏)なんか、どういう風にお考えになりますか、つまりね、いまこの話は二つあると思うのですがね。二本建で行こうというのと、一本建で行こうというのと二つある。二本建というのは、つまり政治団体として、政治結社即ち新党というものを創る。それは既成政党並に革新政党其の他のものを入れて、それに政治運動(新党関係の)を遣つて来たものを集めて一つの新党を創る。これは近衛内閣の与党みだいたものです。それとは別個に、今まで政治運動

を遣らない、職能団体というものの、そういうものを集めた集団を創つて、——それは政治結社でない——それは所謂新党の推進力にもなるし、基礎的な団体にもなるし、——という、そういう二本建で行こう。こういう考え方ですな。その団体から代表者を新体制にやはり出して行くのですね。自然に旧勢力を新党から押し出して行く。その基礎的な団体が政党の方に喰い込んで来て、しまいは一本になるけれど、はじめは二本建で行かなければならぬ。しかし、それを遣ると、しまいに、どうにもならなくなる。はじめから一切行つて、どうにもならなくなる。はじめてから一切合切一緒に置いて行こう。こういう二つがあつて、どつちかと云えば、若い連中は一本で行こう、という気分が強いのですけれど……。

三木 私は、やはり新党運動とそれから国民組織運動とは別個に考えて行つたほうが實際的でもあるし、却つて旨く行くんじゃないか——と前から

思つていますがね。ですからして、ほんとを云えば、つまり新党がですね、国民再組織の運動の推進力にならなければならないわけですけれども、現在謂われているような新党では、それは勿論でない筈ですし、ですから、此の新党を段々本当の、まあ謂わゞ指導者の党のようなものに変えて行くことが必要なわけですね。それはまあ選挙法の改正とか、或は新しい選挙の場合におけるいろいろな作戦——と謂つていいですか、そういうものを通じて遣つて行かなければならないのでしようが、しかし、それははじめから遣つてゆくと、混乱が起るのですね。又、既成政党を無用に硬化させて、摩擦を変にする。つまり、摩擦もそれが正面衝突ならいいけれど、非常に消極的摩擦という風な、殊に地方の農村に対して有っている勢力地盤というものを考えてみると、既成政党というもの、現在直ぐ無視して活動できないと思うの

です。そういう意味において、之を利用して行かなければならないから、所謂新党というものと、国民組織というものを別個に考えて行つたほうが、現実的に旨く進行して行くんじゃないかと私は思っているのですがね。

勿論一番重要なのは国民組織であり、其の国民組織というものが、軀^ぐては基礎になつて、それから新党のほうにも其の勢力が及び、また其の新党から内閣の組織に、すなわち政府の方にも及んで行くようにならなければならぬでしょうけれども、しかし、今の処は、やはり新内閣というものと、それから新党というものと、新国民組織というものは別個に考えてゆく。しかし勿論有機的な関聯をもつて考えて行くというほうが、正しいんじゃないかと思うのです。それでないと、例えば新内閣と国民組織というものを一つにしてさえば、今申上げましたように、官僚的な官製組織に

なつてしまふ惧れがある。だから、そこは聯絡が有りながら、別個のものとして動いて行く方式を考えたほうがいいぢやないか。政党と国民組織の關係がやはりそれと同じものでないかと思ひますね。

有馬 私は、はじめは二本建のほうがハッキリしていいと思つたのです。どうも一本で行こうという人は、それはまずいんだ、という考えが大分多数を制しているようですがね。それはつまり、例えば、代議士に例を取つてみますと、代議士の人は、一体団体が一つになつた場合はどういう格式になるのか。ところが、その代議士の人は、代議士として其の組織の中に存在するんじゃないで、こういうことを言うんです。例えば、中央に三十人なら三十人の一つの中央組織を創つてそれから各府県に支部を創り、それから町村に創りというように、数を殖やして創つてゆく。その人達がどう

いう働きをするかという、つまり上意下達、下意上達の実行をするんですね。斯ういう際なんだからね、政府の決めた事を、本当に国民に徹底させるのには、其の中間に繋がりをする、実際の働きをする人が無ければならぬ。国民精神総動員が、却々本当に効果が無いというのは、途中まで行つて消えてしまう。下まで届かない。其の届ける役

目をする人間が必要だ。それから下の方の實際国民の希望というものは、上の方まで本当に届いていない。其の役目をするものを、途中で地域的に沢山選抜してゆく。いろいろな団体における代表者、それには農家の人もあろうし、町村会の人もあろうし、産業団体、文化団体、いろいろなものがある。そういうものの中に、所謂代議士も一つの国民のうちの、そういう何んといえますか、仕事の出来る人として入れるだけなんで、今度は、議會に於ける行動はどうなるか——と云えば、そ

の中から出て来た所謂代議士の人が便宜上その議會行動のために一つの倶楽部みたいなものを創る。それは今お話しした大きな組織のうちの所謂議會行動のための一つの塊りというものであつて、それは党として分離しないのだ——という考え方なんです。

三木

しかし、まアそういう風にするということとは、實際問題として、大へん難かしい問題であると思ひますが、そういうんでなしに、やはり例えば、經濟會議のようなものを創るんです。そうしてそういう国民組織の新しい賛成の人達を創つてゆく。或は職能議員を加えて貴族院の方へ入れるとかいうような方式のほうが實際的でないかと思ひますね。それでないと、やはり外国の全体主義のたゞの模倣に近づいて来る。それは、数は多くても効果はないんじゃないか、實際から云えば、其の新党と国民組織というものが、一つに段々

融合してゆくことが理想なんですかね。

有馬 それはそうですね。

三木 しかし、それまで行くということが、それを遣って行くということは、かなり革命的な現在の情勢だと思えますね。

有馬 たゞ二本建で行きますと、こっちの国民組織というものは、ある年数をかけてしつかりしたものになれば、これから出た代表者が新党の中で既成政党の人に十分に対抗する力が有るわけですが、ね。今新党を創りますと、既成政党の連中の方が、数から云つても、多いし、力の上から云つても強いです。こっちの国民組織は出来ていないから、仮りに代表者が出ても無力になる虞れがある。新党は出来たけれど、要するに結果から見れば、既成政党の離合集散みたいな恰好になってしまうのです。ある人は、それで行くなら選挙を一年延ばせという。一年延ばしている間に組織を創って、

それが有力なものになったときに、此の新党を創るなら、それは既成政党の力と対抗し得るようなものを出せるかも知れない。こういうことを言う人もある。

三木 そういう場合に、議会の解散とか、いろいろな方策が有り得ると思うのです。ですからして、先ず必要なのは、成るべくそういう議員が出ないようにするわけですからね。その為に国民組織というものを創る。と同時に、もつと国民の間の啓蒙宣伝ですね。そういうものについて、もつと力を入れて、そうして新しい人が出て来るように、選挙的な方面に於いても、国民組織の方の活動を進めてゆく。主として政治的な啓蒙宣伝を努めて行くということを活潑に遣らなければ、たゞ経済的な協力団体というだけではいけないのですね。

有馬 近衛さんがね、私なんかは、既成政党というものを、今こゝで全然無視してかかつては事変問

題として困難だし、一応認めてかかろうと、こういうのですな。一本で行かうという若い連中の考え方によれば、そんな既成政党というものは全然無視してかかろうというのですね。それはまア考えとしては、僕等も共鳴するんですけれどね。どうも實際運動としては、そう急速に、所謂躍進するわけにはいかないんじゃないか。

三木 その躍進しないところに、生ぬるいところに、そこに今度の新体制運動の特質性があるんじゃないか。本当は下からの運動、ナチ党が段々下から擡頭して来たように、擡頭して来るのが本当ですが、しかし、今度のはそうでない。そこに新しい遣り方がある。まア無理としては最初の意図とは違つたものになるのですね。そういうものを全然デマだと、やはり純粹な民間運動として政治的闘争をして出て来なければ駄目だ——というなら、これは別ですがね。しかし、今の新政治体制運動

というものの構想というものは、そことは違つた最初の出発点を有つてゐるのだから、そこを生かしてゆかないと……。

有馬 闘い——と思つてゐる氣持が非常に強いのですね。ところが、今の日本の現状に於いての新体制の運動というものは、国内に於いて相剋摩擦をやつてゐる、闘い取るという主義ぢやないのです。はじまりがね。そこにかなり喰ひ違ひがあるんだ。——と僕等と思うのですがね。

三木 結局闘わなくぢやならないのですね。

有馬 それはそうです。結果から云えば……。

三木 しかし、はじめから、闘争を宣言してスタートするのでなしに、内部に入つて、おのずから、力によつて闘つてゆく。

有馬 闘いの對手は外にあるんだ——とこういうのですね。その人は。だから、此際国民の間のそういう既成政党とかいうものとの摩擦はやめて、そ

うしてもう闘いの目標は外に置いてゆく。すると、そんなものは張り合いがないというのですな。(笑声) 相手方は内になくちや遣り場がない。——と。

三木 却々大した、元氣ですね、だが、なか／＼向うは(既成勢力)降参しません。

有馬 それは、敵は外に在る——という建前で行ったつて、どうせ中の喧嘩をするんだから、相手は無くなる心配はないから、いいというのですがね。既成政党というようなものを、はじめから目標としてかかろう——というのはね。

三木 しかし、そこはね。この間の県会議員なんかの選挙においても見られますよ。かなり既成政党と云ったつて、地方の地盤というものは強いのですね、それから又そういう人達は、選挙関係もあるかも知れないけれども、とにかく地方の為にある程度は尽しているのだ。かなり尽しているから出て来るのですね。そういうものを無視してやれ

ば、国民の却つて反感を買う虞れがあるんですからして、それぢやいけないのですから、その他もつと啓蒙宣伝というようなものによつて——うんと新しい者を出して来なければならぬけれども、同時にそれを無視して軽く視てゆくと却つて遣り損うんじゃないかね。

有馬 近衛さんが、この間新聞に話していられた、三投とか、四段とかの段階がある——と謂われたのは、最後の——最後でないかも知れないけれど——先の目標というものは在るんだ。しかし、それにすぐ一遍に到達するということは困難だ。だからそこに一つも二つも段階が在つて、最初に出来るものは多少不満な生まぬるいものが出るかも知れん。しかしそれは段階であつて、最後の目標は此処に在るが、遣ることは一足跳びにゆくんでない——とこういう意味で段階が在る、ということを言つておられたのですね。

三木 たゞそういう段階を考へる場合に誤謬に陥

る。段階があるのはいいが、先きの見透しなしに
はじめて行くとき動きが取れなくなる。目標はハッ
キリ理論的にも掴み、国民に其の目標をどこまで
も教へて行くということではなければならぬ。しか
し、現実の政策としてはそこまで問わないのが、
此の新体制運動の特色だと思つてゐる。

有馬 ところで若い連中は、そんな段階なんか要ら
ない。別に選挙民を有つてゐるわけでないんだか
ら……。で、私はこんなことをべら／＼喋つては
いけないけれど、私はこういう誤謬があるんぢや
ないかと思う。私なんか、之を始めたときには、
とにかく、今の世界の情勢に於いて現在の日本の
立場というものを展開して行くという為にこれが
必要なんだから、これは恒久的なもの——という
よりはむしろ応急なもの。ただ応急ということの
年数はわからない、あるときは長いかも知れない。

決して間に合わせという意味ではないけれど、そ
うその日本の永久に動かない一つのことを創ろう
という意味ぢやない。こういうことを私は言うん
ですがね。そんなものは困る——という、こうい
うんです。(笑声) そんな急場逃れみたいな、そ
んなものぢや、まず我々賛成できない、という人
があるのですがね。私は、そんなに先きの情勢が
どう変わるか分からないのに、憲法ぢやあるまいし、
そんな動かすことの出来ないものを創つてみたつ
て、寧ろ自分達のほうが動けなくなつてしまふ。

三木 だから、新政治体制運動だつて發展してゆ
く。そう変らないものが出来て来るわけでないか
ら……。たゞそういうものは、どうせ變つてゆく
ものだけれど、變つてゆく動向というものはハッ
キリ掴まなければいけないですね。

有馬 それはまアそうです。新党運動というやつに
も、まア私も悩まされて、やつとこゝまで来たん

だけれど、近衛さんがまア出てくれるようになり、既成政党が解散してくれるようになったというわけで、第一段階だけは来ているわけです。こんなことは、誰がやったというわけでない、時勢が造ったんでしょうが……。

三木 文化団体なんかは、新体制運動において、どういう風になるのですか。

有馬 今の二本建で、凡ゆる団体、文化団体でも、例えば文芸家協会のようなものにも協力を求めます。この間、ある映画会社の社長さんが見えて、今度は劇とか、映画とか、そう云ったようなものの方面にも、一つの新体制を創る——ということだったが、苟くも新体制運動に協力して貰って効果のあるものなら、入って貰うのがいい。凡ゆる方面に出てゆくのがいいと思うのですがね。どうも軍人とか、官僚とかいうものを入れることのできないようなものを拵えると、非常に運行が悪く

なる虞れがあるんです。やはりそういう人達も入れるために、所謂政党というような形でないものがほしいのです。そうしませんが、どうもその邪魔される——というと語弊があるが、邪魔にもなるし、又、向うがそれを別に遣るというような気持も起すしね。

三木 まア純粹の政党運動であれば、今の処、官吏も軍人も入れないわけですね。

有馬 えゝ。しかし、何んですね。今度は、官吏とか、軍人とか、そういう人の中にもずいぶんそういうことに熱心な人が出て来つつあるようですね、中堅どころには……。

三木 そこがやはり、つまり政治、新党運動とそれから国民組織の問題と離して考えたほうがいいということですね。実際問題として、やはり比の新党運動というものは、何も政権ということを問題にしない政党というものは無い、と思うのです。

いろいろなことを言いますけれど、政権を目標としないなら、何も政党を創る必要もないわけです。随つて、そこに新党運動というものが出来れば、結局政権獲得運動として必然的に繋つて来ると思うのです。これは当然だと思つて来るとしては矢張り上許り見ている。これまでの政党の遣り口が残つて来る。しかし、重要なのは、やはり下の方を向いて、そうしてどこまでも下の方へ這入つて行く。国民の方へ這入つて行く運動でなければならぬ。其の点から考えても、政党運動と国民組織の運動と別にしたほうが、今の処却つて旨く行くんぢやないかと思ひます。

有馬 国民組織運動というものは、国民の、何んといひますかね、非常にこう熱を挙げるという点において弱いという感じはないんですか？やっぱり一つの政治運動だ、政党と云つたような運動ということはハッキリ出さないと、単に国民組織と

云つた風なものは、何んとなく刺戟が少いんぢやないですか、そうでないですか？

三木 それは刺戟も少いこともありましようが、そこに停まるものではない。目標は、やはり新党であり、又、新しい政府である。其の三つのものは一つに繋つて行かなければならないという、そういうことは、どこまでも目標に置かなくちやならぬのですけれども、そこを今直ぐ混同させるということは、一つに考えてゆくということは、却つて運動を混乱させてゆく。又、無用な障碍を造つて行くようになりはしないかと思ひます。それで許りでなしに、今度の運動が従来のと違つて、下へ這入つて行かなければならないということを通じて、上へ向いて行くということになつて、所謂従来の政治家の間の動きだけになつて、国民とは全然関係のないものに成り易い傾向がある。さもなければ、要するに官製の組織みたいなもの

になつて来るんじゃないか、と思いますね。

有馬 やつぱり下との繋がりとということが、一本建の場合でも、二本建の場合でも、その点が非常に重要だということは、考えていることは考えているのですけれど、其の新体制の運動をやつて行くのに、どうも二本建は、何んといいますか、旗幟が鮮明でない、ということを言うのですね。どうもハッキリしない。国民組織運動と、新党運動とが何んだかわからないというのですがね。

三木 だから、私は、そこに所謂三位一体の理論——つまり新政府と新党と新国民組織というものの三位一体であつて一体である、という理論を創らなければいけないのぢやないかと思ひますね。そう何もかも一つに成るべきものでない。

有馬 無論、そうですね。

三木 寧ろ分化しておつて却つて機能が發揮できるのであつて、新党と政府というのを直ぐ喰付けて

しまえば、これは一国一党みたいなものを作つて、全く融通の利かないものになつてしまふ。そうすれば右翼なんかが反対しているような、日本の国体に反する——というような議論も出て来ると思ひますね。ですから、そこはやはり別個なもので一つだ——というように、三位一体的な理論および運動の方針というものが要だ、と私は思うのですかね。

有馬 どうも、これは私は直接聞いたわけでもないが、えらく新党という風なものでは、どんな強力なものが出来たつて、別に大したものぢやないが、国民組織の方は、これが非常に所謂理想的に出来るとですね、それが必ずしも慶ぶべき現象でない——という風な見方なり、考え方をしているような人が有るようですね。それだけ其れが旨く行けば、實際の効果がある——というように謂えるでしょうが、新党なんかの側に就て考えてみて

も、寧ろ各政党が解散して全部そっくり這入つて来る、ということは、これからの運動の進展に却つて困るですね。そうなると、変な——変なと云つてはおかしいが、妙なものが出来上る。

三木 そこは政府としては、議会の解散とか、いろいろな遣り口はあると思うのです。

有馬 そう皆んな賛成したら、解散の仕様もない。
(笑声)

三木 しかし、凡ゆることに賛成しないでしよう。新党へ這入つて来る者でも……。

有馬 だから、そうなつたら、迎も承知をしないような案を出すというのですよ。(笑声) そうすれば、きつと何人が反対するから、挙国一党というものにならぬ。(笑声) ならないようなものにしなければいかん——という意見もあるようですね。しかし、永い間、既成政党というものが問題になったが、とにかく半分なり、何分の一なりがバラバ

ラになつちやつたのですがね。これは裸にしたものはずいぶん罪があるのです。それから裸になったものを出家をせよというのですから……。

(笑声)

三木 尠くとも既成政党の解党というのが先きに来たような形では、之れを無視して始めるということは、大へんな問題になるでしょう。

有馬 解党した人を無視するんぢやないんですよ。

三木 しかし、人というものは個人ぢやないわけですからね。やはりいろいろな関係をもつて、一つの閥とか、繋がりをもっているわけでしょうから……。

有馬 まア、近衛さんの苦心しての組閣の顔触れなんか見て不満を云う。それと同じことですね。

三木 しかしね。例えば、これまででもね、我々もそうかも知れないが、文化人というようなものが、批評して、積極的に協力しない——ということを

能く謂われているのですがね。しかし、これはですね。やっぱり、そういう組織の中へ入れないからだと思うのですね。入れなければ批評するより外に仕事が無いわけですから……。〔笑声〕そういう組織の中へ入れてくれゝば、積極的な協力をするようになるだろうと思うのです。

有馬 それはそうですね。

三木 ですから、新しい国民組織の、まア一つの分野として文化人というものが組織されゝば、やはり積極的に働くようになると思うのです。

有馬 これはまア望むわけでありませんけれども、ドイツとか、イタリーみたいに、あゝいう風に迫り詰められた場合ならば、国民に所謂世界に対する我が国情を説いてもピンと来るんだけれど、どうも日本の場合は、そうでないのですからね。ですから、非常に遣り悪いですね。こういうことが、まア今のヨーロッパの情勢を見て、われわれもボ

ンヤリして居つてはいかん、対岸の問題でない、我々自身の問題だ、と云つても、どうも話としては聴くけれど、本当にそういう気持ちには成らないんですね。だから、そこでこういうものを遣ろうたつて、非常に力が這入らないのですね。

三木 ただ然し、いろいろな国内の経済問題、社会問題なんというものは、相当困難に直面して来ると思うのですね。ですからして、国民としては考えざるを得なくなつて来る。それを何とか早く組織しないと、社会不安というものが余計どこへ行くかわからない——というような方向で現れて来る。で、勿論国民はこれからは楽はできない。皆な苦勞しなければならぬということとは、やはり或る一定の方向と組織をもたないで、そういう社会不安のようなものが出て来ると、これは非常に危険だと思えますね。で、それに対して遣り得ることは、要するに弾圧だけなんですけれど、し

かし、それぢや却々収まらない。殊に積極的に国民を国家の発展の方向に協力させることはできないわけですからして、国民組織というものは、それ程のんびり構えていることはできない客観的な要請もあるんじゃないかと思ひますがね。

有馬 そうすると、新体制でもって採り上げられる問題というのは、国民生活に直接影響のある問題、そういう問題が採り上げられてゆくと、割合にピンと来るでしょうね。

三木 私は、それはどうしても採り上げなければならぬ問題だと思ひます。

有馬 たゞ、外交問題というものは、所謂インテリの方から云えば関心はもてるけれど、一般国民から云えば、それ程大して重大な関心がもてないんです。例えば、農村で云えば、肥料の問題とか、都会で云えば、米の問題とか、木炭の問題とか、そういう現実の生活に係のあるものが採り上げ

られて来れば、割合に関心がもてるんだが……。

三木 それは確かにこれまででも、要するに、東亜新秩序とかいうようなことを言われたけれども、国民にピンと来ないのは、現実生活と繋がりが分らないことだと思うのですね。ですからして、現実の生活はどうなるんだと、又、どういうことを目標としているのだということを、もう少しハッキリ国民に知らせれば蹤いて来ると思ひますね。

有馬 それで最初にお話した、つまり聯絡を取ることですね。上の政策を行う場合に、それを一番末端の個人にまで——とこういう意味で進むんだということをはッキリ知らせるために、そういう組織が必要だ。同時に下の方の希望が何処に在るかということをはッキリ上の方に分らせて、上の方がそれを採り上げて十分に会得することが必要だ。だから、そういう組織は非常にいいと思ひますね。それが無いというと、一方で政府が遣つて

ることは政府の遣つてゐることであつて、たゞ上から下の方ばかりへ向つて行つて、實際下の方の声というものが、現実の上に現れて来ないのですね。現に農村関係のことですが、この間も誰か政党の人が話をして、外交上の問題を言いましたら、聴衆の中から立ち上つて、「僕等はそんなことはどうでもいい。一体肥料はどうなるか、その話を聴かして下さい」——と云つた。（笑声）お前、そんなボンヤリしておつてはいかん——と言つてみたつて大して反響はないのですね。

三木 やはり外交問題とか、又東亜の新秩序というようなものでも、もう少し国民生活というものと近づけて説かなければいけませんですね。そういう全体的な考え方がないんじゃないかと思ひますね。例えば、国民生活の問題になつて来ると、すぐ節米しろとか、いうことになる。今度は新秩序というものとう関係があるのか。そういうのを

引つ括めた一つの思想というか、理論というようなものが、国民の前に出て来なければならぬ。

有馬

ですからね。新政治体制と言わないで、「政治」を^マ除ろうぢやないか。新体制は必ずしも政治許りでない。（笑声）凡ゆる方面に亘つての新体制が必要だと云つてゐるのです。ところが、経済の方の問題は、余程準備が出来、組織が出来ていないと、下手に手を着けると、これが国民生活に直接に響く。政治ならば、例えば選挙法を変えても、その打撃をうけるのは代議士であり、代議士候補者の範囲に止まるのですからね。経済組織の方は、一つ間違つと、国民生活にじかに響いて来ますからね。そこで政治だけを初めに採り上げて行こうぢやないか、という話が出たのですね。今になると、それぢや満足できない——という声が大分あるんですがね。

三木

それは経済、政治、文化、全部一つに括めた

ものでなければならぬでしょうね。

有馬 何をやっちゃいかんとか、かにをやっちゃいかんとか、禁止命令ばかり出ている——という生活は愉快ぢやないようですね。（笑声）何故、そうしなければならぬということが、本当にわかつてやるならいいけれど、そいつは教えないのだから。いったい一部の方面では、必ずしもそうぢやない——ということが分つていると、なお不愉快ですな。

三木 いろいろ、これまで文化団体に御関係になつてゐんですが、その経験から云つて、どういう感想がございますか？

有馬 そう。私は、日本の政治というものがですね。政治家だけで遣つて来たということが間違ひであり、所謂政治家なり、官僚なり、そういう指導的な立場に立つ者が、一切合切を自分達の手で遣ろうとしたことが間違ひであつたと思うのです

ね。私は、「農民文学懇話会」というものを創つた。そしたら、どうも政治に文学を利用するなんということは、文学の神聖を汚す——という非難を承けたのですがね。私は、文学でも、音楽でも、スポーツでも一切のものが協力して行かなければ、政治というものはできないんだと思うのです。政治家だけに政治を委しておけばいい——という考え方が、一般の方でも間違ひであり、同時に政治家の方面の間違ひである。利用できない——利用できないものはない。利用でなく、正しい意味において利用ということは両方が僕は考えていい事だと思ふのですね。少し何かこうお役所の方から声をかけて、文学の人に集つて貰つたりすると、方々から文句が出て、（笑声）墮落して、役所から金を貰つて旅行したとかすぐ始まるだから敵わんでですね。（笑声）

三木 そういう場合に、文化人の方にも意気地が無

いところもあるんじゃないですかね。

有馬 さア——。

三木 つまりもう少し何か主張すべきものはハッキリ主張して行く、というようなところがもう少しあつてもいいんじゃないか。

有馬 私もそれはそう思いますかね。

三木 ですから、例えば、今度の新体制運動というものが声が挙げれば、文化人としては、一体文化人は新体制運動についてこういうことを要求しているのだ——ということを積極的に表現してもいいんじゃないか。

有馬 それはいいですね。

三木 そういうことが足りないんじゃないかと思えますね。ですからして、結局上から呼び掛けて来る。そうすると、批評する者は、そんなものは本当に、要するに官製で駄目だ、其処へ行く奴はだら幹みたいなことを言うようになるですからね。

寧ろ積極的に、一体新体制運動というようなものに対して、文化人は、こういう要求を有っているのだ、又どういう見方をしているのだ、ということをもう少し積極的に表現する——ということが必要ぢやないかと思ひます。

有馬 私、自分の方からこういふとおかしいけれど、今までのこういう風な政治運動について考えると、今度ぐらい文化人という方面で関心を持たれたことはじめてだと思ひますね。それだけに此の運動というものをどうしても完成しなければならぬと思ひますね。尠くとも、今までの政治運動にたいしては、文化人というものは、まるで白眼視しておつた——と僕は思ふね。それだけ世の中の情勢が、日本の情勢があるところまで来たからでもありますね。

三木 それから同時に政治というものが、職能というものの、そういうものと段々結び付いて来たとい

うことが判つて来たんぢやありませんかね。これまでの、所謂職業的政治家というものは、国民生活の上での職能というものと全然離れた存在で、つまりあつたわけでしょうね。しかし、もう新体制運動というものになれば、政治というものと職能というものがともかく結び付くということが皆なわかつて来た——ということから、興味をもつて来ていると思いますね。ですから、此の職能というものの考え方というものは、やはり進めてゆかないといけない。それで国民も興味をもち、それから文化人なんかも興味を有っているんじゃないかと思ひますね。

有馬 所謂細胞組織というものを全国的に創つて行く上に、地域的にそういうものを創つて行くという意見と、職能的に創つて行くという意見とが大分あるのです。しかし、皆な話合つてみると、結局は両方を組合せて創つて行かなければならな

い——ということになるのですがね。職能的だけに重きをおいて組織を創ろうとすると、どうも統制がとれないのですね。これはやつぱり地域的にも、——行政組織でないけれども——現在ある人の組織の型というものに当嵌めてゆかないと、どうも纏らないようです。例えば現在で云えば、地方長官とか、県会とか、町村で云えば村長とかなんとかいうものをやつぱり考えの中に入れてゆかないと、たゞ職能団体の代表者みたいなものだけでやつて行つたんぢや、どうも纏まらないのですね。

三木 此の地域的ということですがね。其の点において、明治以来の遣り方というものは、中央集権の方向——中央集権というものは勿論いいですが——それが劃一主義的な遣り方になつて来ている。日本では、有馬さんなんかのお関係になつている農村の方を考えてみても、もう少し地方文化

ですね。地方文化ということに、重きをおき、新体制運動というものも、やはりそういう意味ぢや、新国土計画といひますか、そういうものと睨み合せて考へて、今後地方文化というものに非常に重きを置いてやつて行く必要があるんぢやないかと思ひますがね。其の点において日本では、余りに劃一的に都合主義的なものになつてゐる。其の弊害を寧ろ此の新体制運動は矯めてゆくんだという意味においては、もう少し地域的な考へ方というものをに入れて行く。殊に此地方に特殊な中心を創つてゆく。夫々のもう少し中心というものが多くなつてゆくという方向に組織してゆくことが必要でないかと思ひますがね。つまり文化という方面から云いますと、やはり日本の文化というものゝの弱さというものが、地方文化が無いということでないかと思ひますね。

有馬 それはそうですね。

三木 まア学校なんか見ても皆東京に集つてゐる。いろいろな文化機関ですね、美術館其他劇場とか、総べてのものが皆な東京に集つてゐる。これでは農村が文化的に貧弱になるのは当然である。そこで少しでも文化的なものを求める者は都會へ集つて来て、随つて地方農村に人が残らないというようなことは必然的に起つて来る。之れを変えてゆくことが、やはり新しい国民組織の遣り方なんでしょうから、そういう意味において、もう少し地方尊重ということとはしなければならぬ——と思ひますね。

有馬 今のお話のようにね。総べてが中央集権的に行き過ぎるといふことも良くないことなんですがね。私は、政治の新体制ということも悪いことぢやないですけれど、其の基本が科学的でないといふことは、非常な一つの欠陥だと思ひますね。そういう一つの現れから云へば、いまお話になつた国

土計画なんですね。私は、国土計画というものが、

純然たる科学の上に樹たなければ嘘だと思えます。例えば、東京市なら東京市と云ったようなものを造って行くのに、何等科学的の基本の上に立った計画というものが、全然ないんですね。都市計画というようなものが成っていないのです。其の基本になる国土計画というものがあつて、そこにはじめて都市計画というものも生れて来る——と云つたところが、都市計画の連中にえらく恐れられたのですがね。たゞ都会に地方の青年が無制限に集まつて来るのを放つたらかしておいて、都市が無暗に膨張的に大きくなるという都市計画は良くない。例えば、一例を取つてみれば、水道の問題にしたつて、科学の上にちゃんと都市の計画が樹つてあつたら、あの問題は起らないんです。実際日本の政治にしても余り科学を離れている。僕等自分が技術者だから言うんぢやないけれども

……。

三木 確かに、酷いですね。ですからして、やはり其の場限りのことですね。間に合わせの事しかできないんですね。

有馬 水道なんぞの水の断れる¹ということは、科学者から云えば、当然のことですね。あゝなるのが当り前だというんです。当り前のことを平気でやっているんだから、ずいぶんどうかと思うのです。(笑声)

三木 この間の雷で中央官庁が焼ける²ということとは、あゝいうことは外国に絶対²にない。

有馬 外国人が笑つたといひますね。雷で家屋が半分焼ける、電信柱が焼ける²ということはあるけれど、一体どういうんだ。雷が違ふんだろう。お役¹「水の断たれる」か?この頃、東京では頻繁に断水した。2「SONO」夜、航空局新館2階に落雷、周囲に延焼し、東京市が消防車を総動員し消火に当るも、大蔵省、企画院、中央気象台本館など10棟あまりを消失させた。重要書類は運び出し概ね無事だったということだ。

所に落ちる雷は少し格がいいかも知れないけれども（笑声）ガソリンの在る処へおっこつたというのが一つの不運ですね。其処を狙つて落ちたわけでもないんだけれど……。

三木

あゝいうことも、其時は喧ましく言いますけれど、もうすぐ忘れてしまうのですよ。そういうところへ行けば、結局国民の教育とか、そういうところまで変えてゆかなければならない。

有馬

皆んなに關聯するんですがね。

——いつか「改造」の編輯者から、『改造』の論文みたいなものを大臣が読むでしようか」という質問を受けたことがあるんです。私は、「読んでいる人はないでしょう」ということを言つたことがある。あれはね、私は、何んとかして——ずいぶんそういうことは不慮に申上げるのだけれども——総べての人がそうだとはいいませんよ。しかし、實際政治に當つてゐる国の首脳部の人です

ね、大臣みたいに實際政治をやつてゐる人達に、学者なり、評論家の方々の書かれるようなものは、平易に頭に入るように何か方法をお講じになる必要がある。どうもあの『改造』の論文をそのまゝ読んだのでは、今實際政治に就いてゐる連中には、何んというのですか、難かし過ぎるというか、政治家には解からないのですよ。片一方が進み過ぎて居つて片一方が後れ過ぎてゐるかも知れません。（笑声）ただ論文でおわるのではなく、實際の政治の衝に當つてゐる人達を教え、そういう人達に理解され実行に移し得るような書き方なり、取扱ひ方なりをされる必要があるような感じがするんですがね。

三木

そこはですね。つまり日本の評論家というようなものは、何も政治組織というものと全然結びついていない存在である。政党との関係もないし、何にも關聯がない。文化人にしても、やはり政治

組織というものに全然関係が無いから、いくら實際政治のために尽そうとしても尽せないわけだと思ふのです。ですから、そういう新しい国民組織のようなものが出来て、政治と文化——学問というものが融合して来れば、おのずから評論というものとは實際性を帯びて来るし、指導性を帯びて来ると思ひますね。我々の方から逆に言えば、もう少し文化人が政治にも入り、実業界にも入つて行くようになれば評論の進歩はない。遊離した地位に評論家が置かれてゐる限り、實際がわからない。

有馬 書かれる方もそうだし、読む人もそういうところに関係の無い人許りが読むんです。

三木 ですから、学生とか、インテリが読んで居つて、それは政治にも何等発言権も無ければ、権力も無い者が読んでゐる。折角書いたものが、従つて政治の上に効果が現れない。いろいろな知的な

水準から云えば、又新しい面から云えば、そう我が国の評論は外国の夫れに負けないと思ひますね。それがどうして効果が無いか、その文化というものと、国民生活というか、政治組織が結び付いていないということ、そこに新体制の問題というものがやはり文化人との結びつきの上において非常に大きな意味があると思ふのです。此の新体制というものが確立すれば、もつと文化が国に対して指導力を有つて来るということが出来るんぢやないかと思ふのですね。ですからして、日本に思想が無いということを云いますけれど、私は思想が無いんじゃない。思想はいくらでもある。あるんだけど、其の思想が思想として本当に指導力を發揮する組織が出来ていない。組織と結び付くことによつて思想というものが固まつて行き、又思想というものが現実的になつて行く。また実践を通じて思想も段々内容も有つて来るわけ

ですから、能く抽象的な議論をするとか謂われるけれど、それは組織とは離れた人間を創つておいて、そいつに要求したつて駄目だと思いますね。そういうものは、まず組織する方法があつたらば、おのずからそれがそういう風に変つて来て、そして文化というものが、本当の国に対して指導力をもつようになるんじゃないか。

有馬 今の近衛さんみたいな、あゝいう教育をうけ、あゝいう思想を持ち、本を読みですね、文化人の人達と接近している。あゝいう政治家が終始出て来るなら割にいいのです。ところが、そうでない人がずいぶん日本の政治を支配する地位に就くですからね。その時に組織が一方に在つて、今お話のような其の指導になるべきものが生きて使えるようになればいいですけど、まるでそのところとは隔離してしまつてゐる。国民の方ともそういう關係に在るんじゃないか。

三木 そうです。

有馬 上の方にも働かなければ、下の方にも働かない、真ん中の処に出ているような屹立した峯が途中に在る。誰も登らない山が在るといふような風です。

三木 だから思想というようなものでも、其他芸術その他の文化でも、要するに何も目的無しに生産されて、誰が使うんだか、誰が享受するのか、作品なんか書いたつて、それが本当に国民に読まれ、国民の中の力になつて行くのだといふ意識なしに出来ておるのです。こういう状態が無くならないければ、本当の健全な文学にもならぬのぢやないかと思ひますね。

有馬 日本の政治家というものが、いわゆる本当の純粹な職業的政治家であつて、今までそういう文化、文芸というものを考えていなかったのです。今でもそうですね。まるで民衆の生活と縁の無い

存在ですね。私は、近衛さんなんかは、その点は一番解る人だし、一番やらなければならない責任があると思いますがね。今度の政治体制なんかにしても、やつぱりいわゆる既成政党内の革新政治家とか、一部の革新論者とかいうものがね、之を弄ぶんぢや困るのですな。

三木 危険なのは、所謂革新政治家の集りだけになつてしまふ、これがいけないのです。どうしたつて、現実に物を創り、働いている人間——国民と結びつかなければ駄目ですね。つまりそういう意味における政治觀念の变革というのですかね。政治というのが、国民生活から抽象的に存在して、政治というものがそれだけであるように考える様なそういう考え方が無くなつて、誰でもが、要するに自分の活動を通じて政治に係属しているのだ、という考え方に立つてゆかなければならないと思いますね。

有馬 それは能く女は政治には関係が無いと謂うのですがね。赤ン坊は政治に係が無いかと云えば、實際から見れば、皆な政治の影響をうけているのですね。赤ン坊がスフの入つたおしめをしなければならぬということとは、やはり政治の影響をうけているというのですがね。そこまで云えば、成る程そうだとは思つても、それなら何んの発言の機会があるのか、どこにわれわれの主張が容れられる余地があるのか、そう言われると困つてしまふ。どこにもそういう繋がりが無いのですから！。そこに意見が上の方にも通じるようになり、上の方でも下の方に滲透する必要がある。それだから新体制が必要なんでしょうが……。

三木 同時に、逆の方から言いますと、やはり此の新体制運動というものに、一部の政治家に関心というものが強くなつて来たのですがね。それが前の抽象された政治家的関心で、職能というものを

離れて、前の政治家と同じような遣り口をやる人間が続出しやしないかと心配がありますね。結局新しい政治家というものは、職能というものと結びついているもので、自分の日常の生活というものと離れてあるものでない。そこから飛び出してしまつて、前の代議士連中がやつたと同じ様なものが出て来ますと困る。

有馬 政治家が入れ替つただけぢや詰らないんです。しかし、そういう嫌いは相当ありますね。時こそ来れ——というのがあるんですよ。（笑声）それは既成政党に代つて俺達が出るんだ……。

三木 そういうのがかなりあると思うのです。今の、殊に今の様な情勢で新しい選挙に臨む場合には、そういうのが飛び出して来て困る。既成政党より悪い。

有馬 こういふのがあるのですよ。新しく共鳴している人の中に、ほかのことは要求しない。選挙

法の改正だけ要求する。今の状態では自分が出られないのだ。だからそうすると、自分が出さえすればいい——ということに結論はなる。それは自分の思想を実行し、新しい体制を創つてゆく上には自分が出なければならぬという意見も、たゞ聴いていると、とにかく今のやつをぶち壊してくれ、ばいい。自分達さえ出られ、ばいい——という風に取りれるのですね。

三木 そこが危険ですね。所謂インテリゲンツΙΑなんかも、結局飛び出して来るやつはそうなので、本当にいいのは出て来ない懸念がありますから、そこはやはり新体制運動のリーダーなり、音頭取となつて遣られる人が注意して、ただ飛び出して来るやつがいいんじゃない。むしろじいつとして構えているやつを、そういうものを手繰り込んで引き出して来る姿勢をとられるほうがいい。が、やはり飛び出したがらない連中もいる。

有馬

ところが、其の方は、近衛公の今度の組閣の場合もそう思うのですが、隠れたる人というものは實際困るのですよ。本当に隠れたる人でわからない。(笑声) やはり出て来るやつは、どうしたって名刺を貰えば、此の方は名刺をもつて来た、ということになる。ところが、往來で擦れちがつた人にどんな豪い人がいるかわからない。そういう隠れたる所謂野に遺賢無いようにする方法があるといいのですが、きのうも私の処へ訪ねて来て、新体制の事を聴きたい……と。その人が曰うには、「われわれ仲間で真剣でやっていますが、私が東京へ行くと言ったら、お前名士なんか訪問するな、名士を訪問するような墮落した奴は仲間に入れないッ！って言うのです。然し、来た序にあなたにお目にかかりに来た。」……と。ところが、そういう真剣な人が在ると云つても、何処にそういう人が在るか見当が付かない。何故、あゝいうのを

拾わないか——と云われても、こつちは知らないから手が付けられない。

三木

そういうことは、私大分前から、よく言つたのですけれどね。つまり物資動員についてはいろいろな調査をしますが、人間の動員を遣るのに何等調査をしない。そんなことでは駄目だ。人間動員を遣るならば、人間調査を相当に骨折つてやらなければいけない。飛び出して来るやつだけ拾つておつてはたいへんなことになる。

有馬

たゞ、実行方法ですね。今、日本人の体位が非常に低下して悪いが、農林省が馬を良くするために、ずいぶん金を費い、骨を折つて馬が非常に良くなつて来た。ところが、人間のほうは薩張り遣つていない。馬許り良くなつて、人間のほうは悪くつて、そんな馬鹿なことがあるものか、人間のほうが大事ぢやないか。ところが、人間の体位の向上については、馬ほどに纏つたものが無いの

ですね。それと同じ様に、今お話の如く、豪い人がいると言うんだけど、雲を掴むようなものだから、側近の者というようなものだけ出て来るのですね。

記者 雑誌の編輯をするにもそれですがね。

有馬 どうも困ったものです。今の国勢調査みたいにして、人物の調査をする必要がありますね。ところが、今の組織で遣ると駄目です。上の人が勝手に選ぶから……。

三木 官僚なら官僚の組織を通じて遣れば駄目なんです。そこに新体制運動のリーダーが独自の見解をもつて……。

有馬 一つの組織を創ればいい。

三木 組織を創って、それから始めてゆく。

有馬 朝日新聞の遣っている、全国の健康児を選ぶ、あゝいうような型で、全国の優秀な人間が調べ上げる。組織があるといいのですが……。

三木 それは遣るつもりなら、できないことはないと思いますね。つまりスパイなんというものはもつとえらいことを遣っている。

有馬 外国のスパイですね。

三木 スパイの逆手を使えばいい。

有馬 しかし、いい、悪い。——悪い方を探すのはいいけれど、いい方を探すのは難かしい。新聞だって、雑誌だって、人の善い事を書けばタネが無くなってしまう。悪い事を書いているから、新聞が毎日タネが切れずに続いている。——褒めるんだつたら、一遍褒めたら済んでしまいます。人間というものはそんなに沢山褒めることを持つていないからね。(笑声) いい人間を探し出す何かいい方法があるといいですな。国民精神総動員なんかは、そういうことを本当に遣つてですね、まアある意味において遣っているようなものかも知れないが、非常な善い事をしている、善い人間だ

という、所謂善行者というようなものはやつていますね。が、政治的な人物という意味においちゃ遣っていないのですな。

三木 しかし、村でも、非常に人間を見る目があつて、彼奴の言うことであつたら相当に聞くとか、動けば蹤いて来る。そういうものはある。そういうのを調べ上げることは左程困難でない。それは必ずしも老人でないかも知れませんがね。

有馬 それはあるですね。

三木 そういうものを調べて来ればいいんじゃないかと思ひますね。

有馬 そうですね。お役人がやつちやつては一方に片寄つてしまふからいけないが……。

記者 新政治体制というものは、下への働きかけは相当遣っているのですか？

有馬 いえ、まだそういう方へは這入つていません。形の上では、つまり何んと云いますか、職能団体、

組織を有つたものから代表者みたいなものが参加しておりますが、其の団体自身が下の方へすることは遣っていない。ですが、事が決まりさえすれば、各団体が自分の方の団体の組織を通じてずつと下へ行く。我々の方の例えば、産組なら産組でもいよいよ上の方でそういうものが決まつたとならば、自分の方の組織をずつと下へ下げるようなことになつてゆく。それは横へは出ませんからね。各団体がそういう風に行けば、相当下へ入つて行きます。人間がみなダブつていますから。

三木 既成団体の統合というようなことも同時に行わなければいけませんね。

有馬 そうなんです。まア一番難かしいのは、あれでしょうね、上の方の、今の内閣についても、近衛さんが決心をしても、たゞそれで閣内が一致して行くかということを考えると、かなり難問があると思ひますね。

三木 それから、日本に於ける特に官僚のセクシヨ

ナリズムですね。これは却々近衛さんの、所謂襖を外してやるということは、弱い政党はやったのですけれど、他のところではできない。

有馬 今は政党の方が弱いですから、官僚の方は却々出来ませんね。しかし、一番摩擦が酷くて困り抜いた処から片附いてゆくです。農林省と商工省と多年やって、両方が手を上げちゃったのですね。それでまア今度大分話し合いが付いたようなものですがね。しかし、何んです、私なんか産業組合に関係して居つてずいぶん悪口を言われるが、悪口を云っている人が産業組合を識っているのかという、殆ど知らんですね（笑声）これはまア評判のいい方も、悪い方も御同様のこともあるんですが、実際にわかつておつて、悪く言っている人は極く僅かです。評判は恐ろしいもので、一つ悪くなると、皆んな意味なく遣られるものです。

三木 日本というものは、大体人間を育てない処で

す。やつ付けるほうが酷くて、少し上へ出れば人間を育てて行くということはしない社会ですね。

有馬 誰かの話にあつたが、国民の思想は、電車に乗るときとか、あゝいうものに小さく現れている。学校の教室では公衆道徳を教えるが、門を一步出て電車に乗ろうと思えば押し退けなければ乗れない。社会教育というものを、現実のほうは壊してゆくんですね。教室では教えるんだけど……。

——私なんかは技術関係者として、日本人が科学思想が無いということを始終感ずるのだが、やはり小学校の児童からもう少し科学思想を涵養しなければ駄目ですね。永田秀次郎さんのラヂオの放送を聴いて、非常に私の畑を褒められて気をよくしたのですけれども、全く日本人で自動車に乗つ

1 1876～1943、兵庫県出身、官僚・政治家、三重県知事・内務省警保局長・貴族院議員・東京市長・鉄道相など。

たつて、金を払って乗れる人はあるですけど、

一つ機械に故障を起した場合に、降りて手伝いの
できる乗客なんというものは恐らくない。ラヂオ
にしたつて、ラヂオが壊れて、自分独りで修繕で
きる人というものは、これも少い。電気のヒュー
ズが飛んだつて、始末のできる人は是亦少い。そ
ういう日常生活に關聯しているもので科学に關す
るものは全然手が出ない人のほうが多いのです。
兵隊に行つて、いかに機械化部隊が進歩したつ
て、それではどうにもならぬ。機械化されたもの
を実際に使うのは兵隊ですからね。小学校の教育
から、もう少し直してゆかないと。軍で右向けッ
左向けッは覚えられるけれど……。

三木 もう少し日常生活の中へ科学も這入らなけれ
ば駄目です。科学と云えば、何か特別なものに考
えているのですね。

有馬 それはそういう専門家の人がいて、そういう

人がやる。こういうわけですからね。

記者 今度、近衛さんが関西へお降りになった其の
間に、有馬さんなどが、新体制で第一声を挙げら
れるということを聴いておるのですが、そうです
か？

有馬 そんな話があるんですか。（笑声）僕が第一
声なんか挙げるなら、近衛さん、旋毛（つむじ）を曲げてし
まつて、やらない。（笑声）

三木 もう準備会なんか出来るわけですか？

有馬 私、關係しているのです、促進方を要望に行こ
うか——と云つていのですがね。余り外交問題
ばかりに氣を取られて、こつちがお留守になつて
は……君等で遣れ——と云われ、ば遣りますが
ね。こいつはね、政府が遣らなければ、俺達が遣
るといふ種類のものでないから、一寸ね。

三木 しかし、それがまア出来ることは、ある意味
では内閣強化の方法でもあるわけですね。ですか

ら、内閣としても何とか遣らなくちゃならないと思いますね。

有馬 だから、一番急所々々を総理が遣つてくれて——何も総理がいち／＼一から十まで世話を焼かなければならんということはないのですからね。もうあれだけの声明をして出て来ているのですから、今更途中で、どうするこうするということはどうにもならないわけですからね。——しかし、まアね。遣らなくて済むならやめてほしいというような意向は相当ありますね。(笑声)

三木 そうですかね！

有馬 イヤ、一般ではなくて……。

三木 それは有りましたよね。

有馬 一部には相当ある。どつかの実業倶楽部で、「新体制というものはわからんが、あれが出来たら僕達はどうなるんだ？ いいのか、悪いのか」と訊いた人があつたそうです。「まア悪いほうでしょ

うねえ」と云つたら、「それは困るねえ」と云つた。(笑声) そういう人許り多くなつたら実に困る。

三木 新内閣が出来たので、新体制が有耶無耶になりはしないか……と私かに喜んでいる人があるかも知れませんよ。

有馬 たゞ本質から云えば、政権を取つて遣るということは本当ぢやないかも知れませんが、しかし、今の場合としては、そう行くほうがむしろ効果的でもありましょうし、その弊に陥ちなければいいわけですから……。

三木 この間、何か技術家の聯盟ですか、出来ましたようですね。団体が……。

有馬 えゝ、えゝ。

三木 あゝ、いうものは、新体制運動と関係が有りませんか？

有馬 まア表面は関係が無いですがね。しかし、学界に呼びかけるという声があつたのです。そうい

う場合に、学界というものがバラ／＼ではいけない。団体を創っておくがよいだろう——と。あれは自然科学の方だけです。自然科学の方は学校別になつていないのです。学会が、つまり何というのですか、学問の種類によつて分れているのです。例えば、医科の方面では、耳鼻咽喉の学会であれば、帝大だろうと、慶大だろうと全部入っている。ところが、法文科は別になっているのです。だから、これが却々集まらない。

三木 それは雑誌一つでも、皆な学校で出して居つて、法科なら法科の雑誌というものは無い。

有馬 だからそつちへは呼びかけない。お遣りになるならお遣り。我々自然科学の方面だけ二十団体が、長岡半太郎氏を会長にして行こう——とやっているのです。

三木 法文のほうだつて実際そうしなければならぬのですね。そうなれば、政治体制の問題を離れ

ても、学問としたつて非常に意味がありますよ。今学閥とか、学問の閉鎖主義ですね。教授でも自分の学校の出身者でなければ採らない。ああいう弊害が實際無くなります。それは新体制運動の方でもう少し働きかけてそういうことを遣つていただければ、学問の為にいいと思いますね。

有馬 まア私なんかの方の科学の技術方面は、今まで——現在でもそうですが——非常に下積みになつていたものですから、非常に結束も強いし、活気がありますね。それにこのドイツの機械化部隊の威力が有り、（笑声）戦争の關係なんかあつて、時こそ来れ——とこれもその方で、此の機会に押し出せ、僕等もケシかけるものだから余計、意気が荒い。

国防技術委員会というものを拵えたのです。国防は軍人許りの専門ぢやない。我々皆んな科学をやっている者は、いろいろな意味において国防に

参画するんだ。遣れーッというので、皆んなで料をすつかり分けて、今月の末位までに声明を出すでしょう。はじめ軍の方では喜んでいなかったようですが、途中から賛成して、できるだけ智慧を出してくれることは有難い、というようになった。これは会社にいるものでも、官庁にいるものでも、何んでも技術関係は抑えられているものから、自分の本当の技術というものは出していない。出しても採用されていないでしょう。だから死蔵しているものが非常にあります。例えば、特許なんかですね、日本の各会社が皆外国の特許権をてんでんバラ／＼に買っている。一つの会社がある特許権を買うでしょう。そうすると、それに対抗したものをまた他の会社が買う。くだらない、何の価値のないものをずらりと並んで買っている。特許品は買っているのですから、どの位あるかということは、みな向うにわかっている。生

産力はどの位あるかということも皆な向うにわかってしまった。政府が却々技術関係の管理をしない。特許権のある会社が買ったら、それを政府が抑えて、他の同種の会社に使わせる。その代り其れについての或る割合は会社に払わせる。特許が一つですから、外国に洩れるのは其処だけ。それから利用されている部分は分らない。何故、技術の国家管理をやらないか——と我々仲間が言っているのです。そういう技術者の意見というものは実に容れられないですね。法科万能で、何かやるとそれは特許法が許さんとか——特許法と云ったって、日本の物動計画とどっちが大事だ。生産力拡充が必要なら、特許法なんかどん／＼拡充せよと云っているのです。僕等も技術関係として、そんな苦い経験を嘗めさせられて来て腐つていますね。物動計画と云ったって、一体、石炭がどうしたら出るのか、鉄がどうしたら出るのか分らな

い連中でやったって、解りやせんぢやないか——と云っているのですね。

三木 官吏制度の改革によつて、法科万能主義を変えなければいけないですね。

有馬 今度の内閣でも、技術者を重んじて貰いたいと思つていのですが、近衛さんも法科出だからね。（笑声）技術者としてもそれは欠点はありませんよ。技術者というものは、非常に見る世界が狭くてね。しかし、それは上に立つ者が其の狭い知識を綜合して生かせばいいんですからね。鉄のこつばかりしか知らない人間を其処らぢゅうへ持つて行つて、何んでも遣らせようということはそれはどうかと思いますがね。各々其の人はいるんですから……。我々が集まると、皆な不平ばかり言つてゐる。（笑声）今に見ろ、あんな事をして居つて行き詰るとか、——少し評論家と同じ立場に置かれてゐる。（笑声）例えば、発送電の出来

る時ですね。元来昇り坂になつてゐるときは統制というものは遣つちや駄目。日本の電氣が、どんどんどんどん發展して行きつつある時にそれを統制するということは、總べての生産を停めてしまふのですね。統制というものは、下り坂になつた時にやる。そうすれば、各会社が喜んで服するから、何んともなくできる。各々仕事が発展してゐる時だから統制しようとすれば非常に無理が生じる。ある程度發展すれば詰るんだから、詰つて下り坂のときに統制する。そうしないで、昇り坂のときに統制を遣つたから、生産力の伸びるものは停まつちやつた。あの時に、野放しでもつて、どんどん拡張させて、伸びるだけ發展させておいて、それがある極度まで行けば詰るんだから、詰つて来た時に抑えてしまふ。それが技術家達の云つてゐる統制方法ですがね。

それがそういうことには何等考え無しに、頭の中

で考えて、無暗に統制を遣りたくて堪らない人が何んでも統制してしまえばいい——というので遣るんでしょう。だから、事業の方は算盤でゆくんですから、バタツと停まつてしまうのですね。

米の統制でもやはりそんなようなことがある。

三木 何とか、早く新政治体制運動をお遣りになつて、こゝで腰を折つたらおかしいものになります。

有馬 腰は折らない。

記者 研究会を創つて、真面目に研究するのがだんだん出てますね。

有馬 研究されて出て来たときに、たゞ批評家の立場に廻られたら困るですからね。何とか聯絡をつけて、意見があつたら言つていたゞいて、できるだけ衆智を集めてゆく——ということですね。

記者 裏附ける一つの思想というようなのは必要でないんですか。

三木 まア全体から言えばね。ところが、其の思想家なるものがやはり組織と結びついていないから、非常に難かしいですよ。組織と結びついてるのは、何んです、右翼などは一番それかも知れないけれど、対立ばかりして、纏まらない。

有馬 ハッキリとすれば、又攻撃の一つ的にされる惧れもあるわけです。

三木 思想というものは、正面にハッキリ出しているかと思ひますね。寧ろ組織を創つて、組織の中へそういうものを織り込んで行つて、其の組織の中で結局思想が醗酵してゆく。

有馬 外交方針と同じで、英米依存を云々とか云わないで、自主的外交で日本の為になる外交を遣るんだ——とそういうことで行くよりほかに仕様がなない。

三木 リーダーは、もちろんハッキリした思想がなければならぬがね。それをたゞ思想として初め

から持ち出すということは却々難かしいですよ。
思想というものも、組織を通じての思想に行
かなければならないでしょうね。

文責 編集部

底本：『改造』時局版 9 (1940.8)

新党運動の国民的基礎

三木 清

鈴木東民：1895～1979、岩手県出身、東京帝大卒、ジャーナリスト、読売新聞、敗戦後は同誌の幹部の戦争責任を追究。

尾崎 秀実

伊藤好道：1901～1956、愛知県出身、東京帝法学部卒、中外商業新報社の満鉄調査部。戦後は日本社会党から衆議院議員。

尾崎 いったい、きょうの中心の話題は何ですか？

三木 尾崎さんに話を聴いて、われわれは時々茶茶を入れる。（笑声）

鈴木 尾崎氏にものを訊く会だね。

尾崎 イヤ、それは三木さんだ。——この頃ドイツの電撃戦の勝利。イタリーのそれへの便乗という

ようなことを見て、そのバスに乗り遅れては大へんだというようなところが一般に見えますね。

三木 私は、そういうことで周章^{あわ}てることはないと思いますがね。

尾崎 もつと落ち付いたら、よさそうなものです。

三木 そうでしょうね。

尾崎 最後の瞬間に飛び乗った幸運国を見てだね。

しかし、実際不介入の姿勢自身からは、勝利のモメントは発見できません。自分の体制を整えた上で、機会を俟つというなら、それは形の上の不介入でも意味があるのだけれど、この不介入は、何もしない姿勢なんだからね。一定の方式も無ければ、決意もないし、そうして内はバラバラというのでは、乗ろうたつて乗れないです。

三木 それは、そう簡単ではあるまい。

鈴木 怪我をする惧れがある。この間も僕は、東京駅の前で、飛び乗りしようとして怪我をしたのを

見たがね。急援車が来て持つて行つたがね。

三木 飛び降り、飛び乗りは危い。

鈴木 国家の場合は、急援車というものが無いから……。

三木 尤も私にも飛び乗りの経験がある。ドイツではじめて旅行した時に、停車中にパンを買いに降りたんだ。すると、みんながワイワイ騒いでいる。あちらの汽車はベルを鳴らして出ない。パンを買って悠々としていたら動き出した。どうしていいのかわからない。しかし、これはどうしても乗らなければならんと思つて、パンを抱えて夢中に乗つたが、みんなが喚いていたのは僕のことだったのが乗つてしまつてからはじめてわかつたほど夢中であつた。

尾崎 しかし、乗る才能があつたということは大したものですよ。

三木 あの頃は若かつたから、一本氣だつた。

尾崎 フランスなんかひどく焦慮つてもいるんだろ

うけれど、仏印¹なんかでは妙な手を打つて来よるですな。自分の方から進んで……。

三木 すべての問題を大局から、即ち欧州戦争の最後の結末、つまりロシアやアメリカの勢力關係をすっかり加えての上の計算に立脚し見てゆくことが大切であると思う。

尾崎 日本としては今、内部の体制を一本にして本當の力を湧き上らせる。そうして方向付けをするにしても、そういうことをよく睨んでやるよりほかに仕様がなない。それをしないで、バラバラにね、眼前のものに動かされて、変な策を用いるのはみつともないし、危険率も多いですな第一、……

三木 その通りですな。

1 フランスが1884年から1945年まで領有したインドシナにおける植民地・保護領のこと、現在のベトナム・カンボジア・ラオスおよび広州灣租借地を含む地域。

世界情勢について

記者 それについて三つの問題があると思うのですが、一つは将来の日本の国内問題、第二は日支国交調整の問題、それから最後の問題は、日本の外交問題です。

で、先ず三木先生から、世界の新しい局面の概観というようなものを……。

三木 それは僕の専門じゃない。誰かに話して貰って、然るのちだ。

尾崎 (鈴木氏に) 鈴木さん、一つ国際情勢を……。
鈴木 国内問題から出発することになって、尾崎さんにお願します。

尾崎 イヤ、ははは。

伊藤 さつき何か話があった……。。

尾崎 イヤ、あれでおわった積りです。——實際国内問題としては、とにかく目紛^{めまぐる}しいくらい外でいろいろな事件が起きて来るんですね。そいつへ眼

を奪われて、何かしなければいかん——という気持が可成り強いと思うね。そうして一方にはムツソリーニ首相のように、上手に最後の瞬間¹に飛び乗ったというようなことを見て羨ましくて仕様が無い。それで外交問題なんか、今更不介入方式を樹てたのが怪しからぬ、ああいうものの責任を糾弾しなければいかん——というような議論が、東方会²での最近の決議なんかハッキリ出しておるのですね。そうしてそれは一般に国民の感情としてもあると思いますね。だけれど、それは素々そういう用意も無かつたんだから、今更バスが向うへ行くのを見て、焦慮^{あせ}つてみたって仕様が無いのだから、遅いようだけれど、結局自分自身の体制をハッキリ創る。まア本当の政治勢力と云ったようなものを創り上げて、然る後、まア時

1 ムツソリーニは、の二フランス政府がパリを放棄する寸前、英・仏へ宣戦布告する。
2 中野正剛の主催する政治団体

間的に云えば、同時であつてもいいわけだけれど、ハッキリした態度で外の問題に対処するということになっていいじゃないかと思うのですがね。今の新政治体制の問題というものは、そういう意味で確かに意味があると思う。外側でのいま言つた猛烈に、急転回する事情と云つたようなものは、確かに新政治体制を促進している一つの根本的な理由だと思うのですね。その仕事に従事したり、そいつをやつてゐる。つまり新しい組織運動をしてゐるそういう連中、そういう中心勢力というものは、まだどつちかというと弱いと思うのですが。われわれの知る範囲では……。しかし、にも拘らず、此問題は、とにかく熱心に取り上げられてゐる。ということは、結局国民的な関心がある。つまり客観的なそういうことだと思ふのです。だから、僕は、どういう形で推移するかということは、一寸まだ予想できないものがあるのですけれど、

旧い政治家たちの間で起つた新党運動なり、解党運動というものは、その狭い範囲だけで決して止まらないということだけは事実だろうと思ふのです。

僕等のやつぱり目下関心を有つてゐる問題は、さつき三木さんの言われたように、終局においては国際関係、世界の関係、それが全体的にどういふ風になるかということをはッキリ見極めるといふことが大事なことで、つまりその中に日本自身の態度も大きく決定されるということになるんだと思ふのです。私自身としては取敢ず興味があるのは日本自身の問題であり、そういうことが、いま端緒として上つて来たということは、これは是れまでにあつたいろいろな形の上で似た問題と大分違つてゐると思ふのです。そういう風に確信してゐるのですね。

三木 介入にしても、不介入にしても、国内体制が

整わない限り、結局日和見主義にならざるを得まいと思うのです。ともかく今日はもう客観的な情勢から、日和見主義のいけないということが段々わかつて来た。わかつて来たけれど、いま急に周章でたつてどうにもなるものではない。やはり欧州戦争の全般的結果ということについて見透しをもつことが肝腎なので、途中の出来事に心を奪われてしまうのはいけないと思う。そしてその問題になると、ソビエトとか、アメリカとかに注意しなければならぬ。それからもう大きく見れば印度の問題というようなものが重要になってくるのではないかと思う。その場合に、印度の動向というもの、日本にとつても大きな問題だと思われる。仮りにソビエトがこの方面に進出するような可能性があるとすれば、これは非常な問題であるし、そういう事までも広く考慮した上でやらないで、——途中で、一時の情勢だけを見て、動く

いうことは危険であると思うのだ。もちろん決定的な見透しというものは、却々難かしいかも知れないけれど、そこまで考慮して行かなければならぬのではないか。どうも日和見主義者というものは、だいたいその時々的情勢によつて動かされ易いからね。その日和見主義を脱却するためには、一方においては主体を整えると共に、他方においては認識を広くすることが必要なのでこれがないと自主的にやつた積りでも、客観的に見れば、結局日和見主義であつて、窮極の見透しをもつてやつたのではないということになりますね。

尾崎　そうですね。

ナチズムと日本

鈴木　そうですね。国内の問題でもそうだと思ふな。国内の新政治体制とかいうものもね、国際情勢の発展というものにたいして、ハッキリした認識を

有っていなければ、たとえ近衛さんが出て、いわゆる新体制が出来上ったところで、外交政策をどう行かうということになると忽ち行き詰るだろうと思う。全体主義的なものが出来れば、それで忽ち国家も強くなるし、それから戦争にも勝ち、外交政策でも勝利を占めるといような、単純な考え方は非常に危険でないか。

尾崎 その点は非常に賛成だな。もつと深いものでなければいけない。

三木 全体主義でも、外形だけを真似るのはいけない。例えば、ドイツがあれだけになるまでに、ヒトラー総統が大眾を掴むのにどういう風なことをやったか、大衆の政治教育および精神教育にどういうことをやったか、それから例えば、科学というものが、いかにドイツの伝統のうちに力強く存在したかというような、そういうことを全部考え

1 この座談会の一ヶ月後第二次近衛内閣。

ないで、形だけ真似て全体主義になるのは非常に危険であるし、ドイツのような力も出て来ない。むしろ力を弱めるかも知れない。

ナチズムというものは、思想的には、非科学的なところもあるし、また科学主義に反対しているかも知れないけれど、しかし、ドイツ国民の中には科学的教養の伝統というものが非常に強く在ったと思う。それが在ったから、ナチは之を利用して国防というようなものも強化し得たし、今度の戦争の勝利を造ることができた。いまそういう風な伝統が無い処で、同じようにやろうと云ったってできないことだと思う。ただ形だけを持つて来て、材料の違い、内容の違いを考えないと、とんだことになる。ドイツを真似するにしても、もつと根底から真似してゆくということにならないといけない。

鈴木 日本では、ナチがみんな創ったように考えて

世界における日本

記者

いるけれど、例えば、政治のほうだつて、プロイセンの優秀なる官僚組織が無ければ、ナチがはじめからああいうものを自分で創つてやるということになつたら、それは逆も簡単に行く筈なものではないな。そういう土台が出来ていたところへ、その土台の上にナチの政治が行われたから、僕は旨く行つたと思う。それは終局的に云えばどうか知らないけれど、今のところではね。

尾崎　そうですね。

鈴木　そういうことを考えないで、なんでもナチの

真似さえすれば強くなると思うのだね。相撲に適さない体格なものが、どつかの部屋に入つて稽古すれば横綱に成れると考えるのと同じでないか。

(笑声)

尾崎　それはしかし、それ程浅薄でもないよ。

鈴木　——なければ幸いだね。

三木

日本は現状打破の勢力であるべきことは当然だし、又それが理想でもある。しかし、その現状打破ということは、何を意味するか——それについて余程考えなければならぬと思うのだ。例えば、現在ナチの考えていることが、もし伝えられる如く、植民地の再分割であるということであれば、これは日本が、支那事変は帝国主義戦争ではないと云つたイデオロギーと、どう結び付くかというようなことについて検討しなければならぬと思う。それでなしに、ただ新秩序というような

三木　日本は現状打破の勢力であるべきことは当然だし、又それが理想でもある。しかし、その現状打破ということは、何を意味するか——それについて余程考えなければならぬと思うのだ。例えば、現在ナチの考えていることが、もし伝えられる如く、植民地の再分割であるということであれば、これは日本が、支那事変は帝国主義戦争ではないと云つたイデオロギーと、どう結び付くかというようなことについて検討しなければならぬと思う。それでなしに、ただ新秩序というような

ことを云つたつて、——新秩序ということはナチでも言っているかも知れないけれど、それは植民地の再分割だと差当り疑われる節があるともすれば、そういうことに日本がすぐ賛成し得る立場に在るのか、どうか、殊に東洋に於てそのプリンシプルが行われていいか、どうか。是れまでに幾度か、支那事変は帝國主義戦争に非らずとか、又現在の半植民地的状態から支那を解放することが、此事變の世界的意義であるとかということを声明して來、またそれを支那の民衆にたいしても宣伝してきた日本としては、ナチが勝つたからと云つて、すぐナチの真似すべきか、どうか——余程考うべき問題だと思ふ。そういう点について、今度のドイツの勝利によつて、反省が薄らいで來たということがありはしないかと疑われる。その点について、思想的にもつと考へ直すべき問題があると思ふ。今度のヨーロッパ戦争の世界的意

義というものは、結局、植民地の解放ということ でなければならぬと思ふのだ。われわれが、イギリスの勢力の衰微を意義があると思ふのは、詰りそれなんだ。イギリスの勢力が弱まることによつて、世界の植民地の解放が促進されるということ に大きな意義がある。しかし、もしナチが、ただイギリスに代つてやるというならば、われわれは夫れに全面的な支持を与え得るか、どうかということとは問題だと思ふ。またそういうことであれば、今度の欧州戦争というものは、窮極的なものにならないで、復た新しい世界戦争への契機を作ることになる。つまり前のヴェルサイユ体制と同じことを繰り返すに過ぎないと思ふのだ。その点について、もしドイツが本當の世界の新秩序とか、少くともヨーロッパの新秩序というものを考へるならば、もう少し深い考へを有つてゐるのが当然だ。或は有つてゐるのかも知れんが、少くと

も現在はまだそれが現われていない。

そこで、日本の立場としては、やはり道義というものに立つた本当の新秩序について考えてヨーロッパの戦争の結末がどうなるうとも、そういうものを東亜において創つて行く、そこに、日本の本当の進歩的意義がある。その点で日本は世界をリードしてゆかねばならぬ。そういうことは、是れまで謂われて来たけれども、ドイツの戦勝によつて、そういう反省がともすれば薄らぐ惧れがあるようだ。

尾崎 何かドイツが競争对手を叩き伏せる。そうして欧州の中原に覇を唱える。そういう極く原始的な要求なり、主張なりの他かに、あなた（三木氏）の言うように、当然そうでなければならぬと思うのだが、そういうものが、是れまで出ているものとしては何か在るだろうか？

三木 私は、どうもよく知らないけれど、是れまで

にそういう大きな、例えば植民地問題をも含めてのナチのプランというものを見ないのですが、鈴木さん、ありますか？ 新秩序のプランですね。

尾崎 それがなければ、勝利だけに眩惑されているのはナンセンスだからね。

鈴木 しかしそれは、何とかいうものがありますね。いま、「国外独逸民族主義の同盟」という正確な団体があつて、その団体で説明しているところによれば、数は忘れたけれど、約三、四千万人のドイツ人というものが、南米にもいるし、世界の到る処にいるのだ。之を本国にいる人口と国外にいるものと全部を包括したところの大帝国を創つてだね。そうしてこの全人口を養つてゆけるだけの合理的な国家を組織するということを言っているのだがね。その国家ということになれば当然植民地というものが含まれて来ると思うが、そういうことは、植民地再分割ということを暗示している

といていいと思うのだ。ドイツ国内だけにそれをみんな収容するんでない。それを収容して且つそれを豊かに養つてゆけることのできる合理的な地域をもつ国家を組織するというのだからね。そうすると、それは植民地分割ということが当然考えられると思うのだね。

三木 その植民地にたいする民族問題および民族政策というものは何か新しいものがありますか、つまり従来の帝国主義的支配という以上に、新しいプリンシプルがありますか？

鈴木 それは聞いたことはないね。そんな新しいプリンシプルなどあるはずがない。

三木 そこが問題だと思うな。

対内政策と対外宣伝

伊藤 今度のヨーロッパ戦争で第五部隊¹の活動を聞

1 諜報活動・内通者などスペイン内戦に由来する言葉

きますね。あれが単にあれだけのものでなくて、やはりベルギーにも、イギリスにも、フランスにも多少ナチの同情者、ナチに近いような勢力があつたような話も聞いているのだがね。そういうようなのは、普通謂われているナチズムの自国だけのことを中心にする遣り方、主義から云うと、各国にそれと同じ様な同情者が在るということ、——どうもハッキリ僕等は素人でよくわからんですが、そういうようなことは、ただドイツ人が少し其処にいるからというだけであるか、或はナチのやつていることのうちに、そういう諸国にも相当興味を有たせ得るような要素がある——というように見えるかどうか、そういうことが、新しい指導原理かなんかの何か芽生えになる——といつてはおかしいのですが、そういうような点がありますか？

尾崎 このごろ、ナチが、フランスやイギリスにた

いしてハッキリ言っている、高度の資本主義的な寡頭勢力ですね。そういうものが、デモクラシーの名により、偽装によつて支配してゆく。国内支配ばかりでなく、世界的な支配をするということにたいする反撃だ——という意味の点ですね。あれはどうですか。その問題は、宣言なんか出ていますね。

伊藤 それが果して具体的にいかなる点で金融寡頭政治を打倒するような方策をもっているか、どうかは別として、宣言に現われた限りでは寡頭政治を打破するということをハッキリ言っているわけですが、それが全部の政策をどう貫通して、新しい指導原理として盛り上つて来るかということは問題だが、部分的にいくらか出ているところがあるように思うのですかね。

鈴木 それは対外的に言っているだけでないか。ナチスのは、今の戦争はだな、英仏の資本階級が自

己の利益の為にドイツにたいし挑戦してるのだといい、それと戦争している——と云っている。だけれど、国内ではこの問題に触れようとしなね。寡頭政治を打破するとか、金権支配を倒すとか、なんとかいいうことは言わないのだ。それはナチスの政策というものは、常に対外的なものと結び付いて行われて来た事を見ても明らかだ。

三木 そのナチの国外宣伝だね。第五部隊その他の各国にナチズムを扶殖してゆくやり方というのは、共産党の戦術と似ているんじゃないか。そういうやり方というものは、新しい政治のやり方の一つだと思うね。だから、日本が、支那にたいして、どういうプリンシプルをもつて行くにしても、やはり同じことをやらなければならないのではないか。僕は之を新しい中世という言葉で表わすのだがね。つまり中世の教会組織と同じなんだ。一種の権威主義で、オーソドックスの宗教的な色

彩をもっている教義があつて、一つの中心があつて、世界各国に教会を創るんだ。そうして伝道師を派遣して、その所々に其教義を弘める、然もそれが同時に政治的意味を有つ、中世の教會的組織と非常に似ている。共產党がやっているのはそういう事で、ナチも根本に於て同じことをやっているのではないか。だから、日本と支那との關係にしたつて、結局僕は、日支を貫く政党組織で、一種の教義宣伝によつてやるのがよいような気がするんだ。

伊藤 その例えば、宗教的な要素と仰いますね。そういう宗教的要素と謂われるうちに共通した、何かの新しい一つの思想のテンデンシー【tendency 傾向】というような——それが生れて来るような傾向はキャッチできないでしょうか？

三木 それは要するに、個人主義に対する全体主義とか、自由主義に対する權威主義というような、

そういう方向にまア在る。一般的にいつてそういう方向は、自由主義者が欲すると、欲しないにと拘らず、世界の新しい統一の方向としてどうしても来るんじゃないか。

伊藤 それよりはもつと具体的な……。

三木 具体的というと政治的？

伊藤 政策の大綱ですか。

三木 そういうものについては、漠然としているんじゃないですか。例えば、資本主義に対する關係で、ナチがどれだけ資本主義を根本的に革新することを考えているか、の問題でしょうね。ともかくナチがそういう權威主義を打ち樹て得たというのはやはりドイツが前の世界大戦に破れてどうにもならないという國民の絶望的な氣持をとらえて出てきたからだね。そういう權威主義から熱というか、ファナティズム【fanaticism 熱狂の誤記か】というものを創り上げている。それが強味である

し、逆に云えば弱味になるかも知れない。

伊藤 今度のフランスとの媾和の内容というものはよくわからんですけれど、きょう（六月二十日）あたりのあなた（鈴木氏）の新聞（読売新聞）に出ていたのでは、軍事的占領を続けて行くという立場に限定して、この次に来るべき新しい政治体制とか、或いは植民地の帰属の問題をどうするか、ヨーロッパの地図をどうするとか、そういうようなことには触れていないようですね。新聞電報の一番新しいやつは、専ら戦争能力を維持拡大するという態度に出ているように見られる。ああいう対策に現われている限りでは、——やはり独伊としては、今後の新しい態勢にたいする何等かの今までと違ったものを出さなければ積極的意義が無いし、それから新しい支配を続けて行く上に問題が起るのぢやないか、とも思うが、これはそういう考慮をしたという風に謂えないのですよ

うか。

三木 私は、それは主として外交政策上の問題でソビエトおよびアメリカその他の勢力に対する顧慮でないかと思うのです。窮極的な問題を先に出さずして、とにかく一応イギリスを攻める態勢を整えるということに必要な条件を出しているんじゃないか。だからヨーロッパの新秩序について果してどこまで考えているか、われわれに窺知することとは許さないけれど、尠くともこれまでナチの言っていることだけは想像できないですね。

尾崎 それは反対の側から見てね。英仏側には新しく興っている時代の要求ですね。そういうものに対処する適当な方針というものですね。そういうものを何も準備していないということは英仏の弱さだと思えますね。……

鈴木（尾崎氏に）準備していない——というのは？
尾崎 つまり外から迫って来る圧力にたいして、た

だそれを揜ね退け？自分の国を護るということだけで、いまの世界資本主義の要求というものが新しく出て来ている、まあそれにはいろいろ違つた質のものも入っているし、過ぎたものもあるかも知れんけれども、猛烈な勢いで上つて来る要求ですね。それにたいして応える正當な、強力な指導原理なりなんなりを持ち合せていないということとは、非常に弱い点だと思ひますね。

三木 それは弱い点だね。結局イギリスでも、ドイツ側でも、欲せずしてここまで来た。ドイツもここまで拡大するとは思ひなかつた。イギリスでもこうなるとは思ひなかつた。そういう意味で思想的な用意がなかつた。ドイツにおいては軍事的な用意はあつたけれど、世界の新体制ということにたいする思想的な用意はなかつたのではないか。

鈴木 イギリスでは、ヨーロッパ聯邦組織案というものが、論議されたことは論議されたね。最近

……。

尾崎 しかし、それはむしろ応急措置と云つたようなものですね。

鈴木 そうして非常に内容も珍奇なものであり、実際に適さぬようなユートピア的なものであつたのではないか。いろいろな案が出たけれど。

尾崎 そうすると、ソ聯とか、ドイツとかいふものが、何か一つの新しい主張をもつてゐるということとは、主張の内容自身は姑く措いても、それはやはり強味ぢやないですかね。

記者 (尾崎氏に) 新党というものは、そういう意味で新しい国民的な基礎を創ろうというところに、一番大きい動機があるんじゃないかと思ひますが。

新党運動の基礎と方向

尾崎 僕は、日本が、別にそれだけハッキリした意

識をもつていた筈ぢやないけど、何というか、大きな力に抑されて、支那とのこういう戦争状態に入つて、猛烈にバタバタやつている——ということから、その中に全部眼を奪われてしまうということになり勝ちだけれど、それと同時に、その中からずっと眼を開かざるを得んという関係があると思うのです。僕は、協同体論とか——これは一九三八年の下半期にはじめて一般的な意味で採り上げられた問題だと思ふのですが、こういう問題は、その実践の中から出て来ているんだ、ということに意味があるんじゃないか。然もその経過を視てみると、はじめは、まア理想的なものを本當に考えているものがあつたにしても、多くの場合、支那を日本が一方的な方式で押し付ける。そして正直なところ支那の犠牲においてだけやつてゆく、という考え方というものが基調だったのですね。だけれど、それは、そういうわけじゃい

けないもので、つまり日本は、日本自身の大きな問題をもつてゐるわけだ。それで日本自身の問題を考へてみると、日本は、自分の内部的に集結した力も方向も有たんで、外側にそういう一定の方式を掲げて、支那をその中へ押し付けてゆこう、という考えじゃないのだね。それは實際力の上でもいけないところへ来ている。だから、とにかく——これは一般的な考え方でないかも知れんけれど、私等ははじめからこいつは不可分なものだと考へておつたのですが——日本自身を何とかして纏めてゆく。それは支那側を抑え付けて行くために力を出してゆく、というような意味じゃなくして、新しい大きな時代の中で、東洋——一応東洋という足場を固めてゆくために、又もう一つ前提である日本自身を何とかして纏めてゆく——という様な点から発足すべきだ、という考え方ですね。

三木

結局ヨーロッパだつて、今はまだね、結論的なことは言えないけれど、やはり新秩序というところを、どちらがどうなるにしても、考えねばならなくなる。それだから日本としては、折角云い出した東亜の新秩序というものを、どこまでも真面目に追究してゆくということが、一番進歩的なことだし、又世界的に意義が有り、世界をリードし得ることなんだと思う。新党運動だつて、それと根本的には不可分の問題で、僕なんかの考えから云えば、新党運動というものは、日本だけであるべきでなくして、支那を含めての新党運動でなければならぬ。新党運動が発達し、基礎が出来れば、単なる日本の政党でなしに、東亜的な規模における政党にまで発展しなければ、日支関係というものは新しい関係として規定されないと思う。ただ独立の国家が、従前のように条約において結んでいるという、それだけでは新体制でない。そ

の独立の国家を繋ぐ、然も政治的な力を有った政党組織というものにまで発展しなければならぬ。

鈴木

そういう意味では、新党運動の指導者は、具体的問題としてハッキリした綱領を発表すべきだね。例えば、内政問題についても勿論必要だけれど——差当つてこのアジアの問題だね。仏印のことなんぞは当面の問題になつてゐるけれど、今まで欧米帝国主義というか、そういう諸外国の帝国主義の桎梏の下に在つたアジアというものを、どういう方針の下に処理してゆこうとするのかという日本の立場と政策というものをハッキリさせる必要があるんじゃないかね。ただ部分的に蘭印の問題とか、仏印の問題とかいうものを処理しようとしても、その事は非常に不徹底に了る惧れがあると思うな。アジア全体としての問題として之を採り上げて、そうしてアジアにたいする日本の

政策はどうか、というようなことを、ハッキリと綱領を定める必要があるんじゃないか。

三木 だから仏印とか、蘭印の問題というものは、支那の問題と不可分でないか。これは要するに植民地問題をいかに解決するか——という日本の根本的な態度と関連して考えなければならぬ。それは結局印度の問題に繁つて行くのだね。それまで含めた植民地問題をどう解決するかというハッキリした方針が定まらなければならぬ。ただ仏印、蘭印に進出したところで、それで支那の大衆を搞むことができるかどうか、それを摘まなければ、結局五年なり、十年なり、二十年なりの先のことを考えれば、東洋の安定というものはないわけだ。そういうところまで考えてやらなければ、此事変を聖戦と謂い、道義的な戦争と謂い、又世界的的な意義を有っている戦争と云った顔が立たないと思う。君子豹変するのいいけれど、世界史の動

向は変らないと思うのだ。(笑声) われわれは論理ばかり言っているんで、いつも空想家だとか、理想主義者とか、抽象論者とか謂われるけれど、しかし、一応はそこまで考えた上で、然る後に、現実の政策としてはある妥協も必要だが、そこまで考えを突き詰めないでやつて貰うのは困る。現実には妥協も必要だし、いろいろな方策も必要だけれど、やはりそこまで考えて貰いたいのだね、我々の希望としては……。

鈴木 今までの日本には政策の基調となるべきものはなかった。出たところ勝負で……。

伊藤 尾崎君は、実際の動きを問題にするんだけれど、例えば、いま三木さんが、日支両方で相提携した一つの政治運動の組織というのが考えられれば本当にいいけれど、そうでなければ駄目だと云われた。そういう理想的な形態ではないけれど、例えば新しい政治運動というものは、近衛さ

んあたりが中心になるだろう。そうすると、支那には近衛さんに共鳴して出来た新政権が在り、その下にも一つの政治運動が在るわけだね。だから今後は、遣り方如何によつては、そういう意味では、理想的な形態とは可成り違つてはいるだろうけれど、一つの方向としては、今までよりは前進した過程というものに這入り込むんじゃないか。東亜新秩序という形態に進んでゆくために則るような、それはコンクリートな形の政策ではないが、考え様によつては、ドイツでは、どの程度有つているかわからない。實際事態が非常に急速に、お互いの予想を裏切つて進展したということは逃げ口上にはなるかも知れないし、そういうためでもあるんだけど、一応新しい政治運動というものは、そういう点を考えればその方向だけは今言われた方向に進む一つの過程として見れば、非常に積極的な意味があると思うのだね。どうだね、

尾崎君？

尾崎 それは一番理想的な形で發展した場合、これはあなた（伊藤氏）の云う通りだね。恐らく真面目な人達はそう考えているだろうと思う。ただ日本だけに興つて今迄行われつつある新党運動、殊にその発足点に現われたそのものの中には、非常にもう混雑があるし、例えば所謂新党というものと国民再組織という、その組織とそれから権力の中枢である内閣との関係というようなものです。ね。夫れの中の内部の組織、それ等の内部での連関というものを、新党運動者自身が十分掴んでくるか、どうかかわからない。一番先に現われて来ているのは、いま殊に新聞の上なんかで興味をもたれている新党運動は、旧いものをまで寄せ集めた単一の政党を創るということの問題に集中されている感があるのです。ね。そういうことでは、いま三木さんが云われたことは、その着手点としての

問題であつたが、あなた（伊藤氏）の云われたように大きな一歩前進というようなことも怪しい、ということをおわれわれ考えるわけですがね。そういう意味では、何よりも根本的で重要なのはやはり国民組織というようなものです、新しい脚ですな、党なり、内閣の乗る、そういう組織に先ず全力を挙げなければいかんだろう——という考えを有っているわけです。

三木 これまでの日本の政治家にとっては、官僚出身の政治家にしろ、その他政界出身の政治家にしろ、貴族出身の政治家にしろ、結局自分の周囲に集つた少数の間人だけが問題だったので。つまり政党のぐるりに在る政党员、院外団というようなものだね。

鈴木 地盤。

三木 本当に地盤ならいいけれど、選挙の事務長、そういうものが対象だった。国民全体を対象とし

てものをお考えると、ものを言う習慣は全然無い。しかし、新党運動というものは、自分の周囲にいる若干の人間の動向とか、思惑とかを考えないで、直接に国民というものを問題にして出立しなくてはならぬ。と同時に、広い意味における国民再組織の基本方針というものを示す義務があると思うね。

尾崎 ただ現在のところでは、そこまでの準備も地盤もないのだからね。それだから、僕は、一生懸命にやつても却々そこまでゆかんとするのだな。仮りにそれが今いろいろな形で出た場合、進み過ぎて出たりすると、上の旧くからの連中が、尻込みしたりする問題が起るのだね。

三木 それは現実の問題として相当に……。

尾崎 それは却々なかなかデリケートのところだと思ふのだ。それからとにかく此の国民再組織の問題に対して、偶々たまたま近衛さんという個人の占めている位置

というものが可成り日本の特殊なものであるわけですね。だからそこにも非常に大きな問題があると思うね。それは夫れの有ついい面というものは、十分に伸ばさなければならぬと思うのだけれど、またな近衛さんのみに頼ることだけになつてしまつてはならないと思う。近衛さん一人に頼りすぎて、それによつて動いているものがとにかく動かなくなつては困る、という点はあると思う。

二木 現実のポリシーとしては、それはいろいろなことをやらなくてはならぬと思うのだけれど、しかし、やはり国民というものを対象として反省しなければならぬということは、齢くとも僕等の見聞するところによれば、新党運動が現在のところそれ程国民的な関心を呼んでいない。これは何とかしなければ、新党運動の発展について大きな

問題だと思ふ。国民的な関心および国民的な魅力をもつような新党を創らなければ十分でない——ということとは謂えるだろう。

尾崎　ただその点の難かしきはね。永い間一定の主張をもつて猛烈な闘争をして来て創り上げて来た勢力でないからね。今の新党運動の中心になつてゐる連中にしろ、本当にいいことを考えてゐる連中だつて、やはりそういうものでないからね。そういう意味の弱さは十分あると思うね。しかし、とにかくそれにも拘らず、ここに問題が採り上げられ、あなた（三木氏）の云われるようにまだ深い関心は呼ばないにしても、とにかく一定の方向に動いてゐるということの意義は、やはり時代的な要求に切羽詰つた客観事情というやうなものが、何かしらとにかくいいことを考え、いい組織を創るなら、それへ協力して行こうというところまで来ている、僕は証拠だと思ふのですね。

三木 その要求はあるね。あるけれども、現在の運

動が、国民的な魅力および関心をまだ呼び起すに至っていないということは事実だね。

鈴木 事実だね。実際問題と遊離しているな。将来どういう発展を見るか知らんけれど、それは事実だね。

尾崎 それは運動者自身がその遊離しているのを、いかに沈潜させてゆくかということだね。

鈴木 もともとヒットラーの運動にしても、これは非常に以前は貧弱なものであったけれど、しかし、国民とこんなに遊離してはいなかったと思う。つまり微弱ながら国民の間から擡頭して来たと思うね。ところが、今やっている日本の新党運動というものは、こう、こう、行き違っているという意味じゃない、方向はどうなっているか知らんけれど、離れている。国民と遊離して、何処かこう雲の上に於て行われているような感じを国民に与え

ているように思うな。

尾崎 そいつは一番大きな問題だ。そいつを打破してかからなければ……。

三木 従来の政治的取引という風に見られては駄目だと思う。しかし、齡くとも現在のところでは、政治的取引としか普通には思わないのじゃないか。

尾崎 しかし、その政治的取引がね。やっている連中は、割合に問題を見えていたんだね。それはしかし客観的な要請が大きいだけに、はじめは行き詰ったというのだけれど、それが問題が少し広くなつて、上の方にはそういう行き詰りがありながら、問題は少し下の所まで入つて行つたという風に僕は見ているのだけれど、しかし、それが十分大きなところへ、或は深いところへ根を下ろすというところまでは、これはまだ行っていないと思うのだ。

伊藤 しかし、例えば、これから新党の運動が遣り方によっては、上の運動によって、そういう点のギャップを埋めるということの可能性はどうか？

尾崎 僕は可能だと思うのだ。

伊藤 日本に於けるこういう情勢を背景にしての政治運動の急速な発展ということを考えるときに、例えばナチの運動を下からの運動とすれば、こちららは上からの運動であるから、若干そこに変った形があり、従ってその場合には理想的にゆかんだろうけれど、そういうギャップを埋め合せてゆくということとはできないことはないんじゃないか。

尾崎 着手は上からであつたことは事実である。それは日本の特殊な事情だろうと思うのだ。しかし、結局日本自身として大ききをもつためには上からだけじゃ駄目。上からの着手であるにしても、やはり下からの運動でゆかなければもう意味はないと思うのだ。それは外から一般的に見れば、そ

の可能性というものは相当問題になるだろうと思うのだがね。(笑声) しかし、それをやっている人達は、そういう心懸けではいけないわけだね。幕^{まっしぐら}地^じらに下からの運動に結び付いてゆくという積りで展開しなければいけないだろうと思うのだな。

鈴木 それまでにいろいろな段階を経なくちゃ駄目だね。

尾崎 或は運動自身が木端微塵に失敗するということも一つの過程かも知れないと思うのだ。それでもいいと思うのだな。しかし、一步前進し得るかな。

鈴木 今のままで上と下と結び付くということは難かしいと思う。ギャップを埋めるには、まだいろいろな過程を経なくちゃいけないと思う。どんな形になって現われるのか僕は知らんけれど……。

新党組織の方針

尾崎

ただね、いろいろの動機もあるだろうけれど、それをやっている上の方の人達の考え方の中でも、とにかくこの儘抛っておけば、日本の直面している事情が事情だけに大変なことになるんだから、之をとにかく根本的に切替えなければならぬということを考えて、その切替の方式を考えているんですな。新党運動というものが十分に有効かどうかということは、これは又別の問題だと思うのだが、そういう考えから発足しているということとは、一応事実だろうと思うな。それすらできなかった、というに至っては困る。

鈴木

それを埋めるために、国民の協力を求めるという一つの方針を定めなくちゃいけないな。ただ騒いで声明などばかりやってるんでは駄目なんので、何かそういう道を拓くというか、ことをしなければ、何時までもギャップは埋まらないんじゃないか。

ないか。

三木

新しい国民組織の問題は別としても、現存のいろいろな組織だね。労働団体、その他の組織とどれだけの関係をとろうとしているのか。有馬さんは産業組合を有っていると謂われているのだけれど、それが果して本当に握られているか、どうかということについては、我々はまだわからないけれど、しかし、農村ならそういう方面において、労働団体から労働団体の方面において、地盤を獲得しようとしてあるのか、獲得する方式というようなものについて何か意見があるのかしら。(尾崎氏に)それまでまだ行っていない？

尾崎

イヤ、何か僕が新党運動者みたいにいわれるね。(笑声)

鈴木

いくらか参画しているんじゃないか。

尾崎

いやいやそれは非常な間違いです。下からの勢力という場合ただ産組なりそういうものを簡単

に考えていたもののあるのは、有馬さんが産組の代表者である、指導者だということから、そういうものと機械的に結び付けば、それでもつて下から、所謂下からの勢力というものが結び付くものだという風な考え方ですね。そういう考え方だと思うのだ。しかし、今の段階となつて来るよね。そういう形で、その労働者なり、農民なりのある程度組織を有っているそういう既成の組織だね。そういうものを機械的に結び付けただけでは駄目なんだ。そういう機関の中に埋もれたものの中の勢力の総意というものを、下からの主張というものを無視する方向では駄目だということに判つて来ているようですね。だからそれを具体的に、例えばそういうものの代表を集める集め方という場合にも、それからそれ等の主張なりなんなりを組織するにしても、従来とは変つた方式が相当考えられているのじゃないかと思うのだ。上

の方の主だったところを、どうか政府の組織の顧問とか、アドヴァイザーとかの形で引張り入れると云つたようなことでは問題にならない。所謂国民組織の重要な部分に職場を代表して這入つてゆく、というような形にならなければならぬ。

三木 最初新聞に伝えられるところによれば、政党の外、財界とか、学界とか、新聞界の名士を集めてやる。これはね、滑稽なことだと思う。名士なんていうものは、何でもないのでよ。（笑声）我々も名士か知らんけれど、そんなものを集めたつて何もできない。僕はそう思っているのだ。我々のようなものをいくら集めたつて駄目なんだ、もつと国民の中へ入つてゆかなければいけない、ということをや肝に銘じてやつて貰いたい。（笑声）そうしてね、知識階級だつて甘いものもあるが、何か知識階級らしい匂いするものを少し集めればそれでいいと考える連中もいるけれど、しかし、少し

ものを考えている人間はそんなことでは満足しない。知識階級の共感を得ようと思えば、名士を参画させればそれで新党がいきなり出来上るなんという考えはやめねばならない。知識階級だって、国民大衆というものを考えているものは考えている。いずれにしても、国民組織というものの中に新党の基調を置く必要がある。

鈴木 国民の総意を獲得する途ではないな。名士政策は……。

尾崎 それは違うね。

三木 出発点ではそういう考えがあつたんじゃないか。

尾崎 大臣をどういう人物を出したらそれで財界が付くだろうとか、新聞が喝采するだろうというようなことを考えている人もある。

鈴木 例えば、近衛さんでなければならぬという考え方が、もう既にそれだからね。

尾崎 そうだよ。

鈴木 政党親分や政界山師どもが動いたりなんかすると、だいたい国民の総意は去るね。(笑声)

尾崎 (話題を変える意味で) まア一つ伊藤、鈴木両氏から、国際情勢について、或は日本の経済情勢について伺いましょう。

戦時経済の問題

記者 戦時経済の問題について……。

三木 我々素人は、いくら気焰を揚げたつて駄目だから……

尾崎 快気焰になるだけです。

記者 例えば、利潤統制とか、そういうものは、非常に笠さんの再編成論以来問題になつて来たようですが……同じ再編成と云つてもいろいろ考えがあるようですし、いったい経済問題は、どういう風にしたら、東亜建設の線に沿う方向に進み得る

のですか？

伊藤 それじゃ、僕が、卑近な目先の考えですが。

まア日本の今までの戦時経済というのは、何と云つても、事変の方が思わぬ方向にどんどん進んで行つてしまつて、實際の情勢に引き摺られて行つたということが多いと思うのです。だいたい法令を發布して、形式的に云うと、法令で運用を掌つて行くということが重点だつた。従つて法令が施行される対象たる経済界自体の組織をどうするかということは、法令を施行する最小限度に限つて夫々行われた。積極的にそういう方向が進まなかつたと思うのです。このことはまた別の面から、別の表現でもそういう説明はできると思うのですけれど、法令とか、機構とかいうものを対象として考えてみると、そういう風に見えるんじゃないかと思うのですがね。ところが、最近では、それより一步進めて要するに機構自体を問題

として、それを整備しなければならないというやうな情勢になつて来ているし、また事実そういうことを可能にするやうな事情にも可なりなつて来ているんじゃないかと思うのです。で、所謂機構の整備ということは、結局僕は一口に云えば、経済を組織化することでないかと思うのですけれど、その組織化する条件というものは、いろいろな形で出ておるやうな気がするんです。それは例えば、事変以来非常に国営或いは半官半民の特殊会社というものが、いろいろな方面に沢山出て来ましたし、それから工業組合の組織も非常に整備して来ましたし、所謂カルテルとか、経済団体というものも相当いろいろな方面に組織が出来て来た。それに加うるに、非常に大きな要素としては、銀行がある。従来の間銀行というものは、個々バラバラに金融していたが、それにたいして此頃は、非常に国家的に統制するとか、そう

いう形が非常に進んで来て、特にまア興業銀行辺りが中心になって、相当産業金融も本当の意味で統制をやるといふような状態になって来たから、従つてそういう方面からも全体的な組織化の可能な条件が出て来ている。それからもう一つは、外国貿易上からも非常に統制する必要があるというし配給機構というような面からもそういう問題が起きて来ている。だからもうこれは遣り方如何によつて、組織可能な条件もあるし、組織化する必要は無論あるわけですから、ここに組織化ということが実現する氣運に漸次なつて来ている——と云つて差支えないと思う。ただその際に問題は、それを為すについての理想的な型というか、指導原理であつて、これはいろいろ夙に言論界において謂われていることであり、今お話の笠氏あたりの意見も夫れだと思ふのです。それはそれで大変結構だと思ふのですけれど、問題は、その理想型

なり、或は指導原理、原則というものの所へ持つてゆく過程を、どういう過程で持つてゆくかといふことが非常に問題になるんじゃないか。というのは、政治もそうだと思うのですけれど、特に經濟の場合には、そういう過程にいろいろな混亂が起きるとか、障礙が起きる。これは非常に厄介なことである。その摩擦なり、混亂をできるだけ除去してそこへ進めて行くということが問題です。いいかえると、障礙や、摩擦がある、現在の經濟界の当面している問題を解決して、理想的なところを持つて行くということが一番中心の問題です。

それについては、だいたいいま二つの方向がある。一つは、民間の經濟団体の——それは可成りドイツ辺りのを真似たようなものだが——自主性、そういうものを強調する考え方。もう一つは、役人の間に非常に在るところの、民間は駄目なんだから役人だけでやつてゆく——という考え方が可成

りあると思うのですね。が実際の過程というものは、その二つの総合といえますか、折衷といえますか、絡み合ったような恰好で実際はゆくんじゃないかと思うのです。それが事実まあ已むを得ないところじゃないかと思う。それでは理想から云うと、可成り遠いわけですし、又実際に現状をその儘維持しようという側から云えば、それでも困るというような具合なんですけれど、結局事実の過程というものは、その両者の抱合といえますか、抱き合った形でやってゆくより途はないんじゃないかと思うのです。事実またそういう方面に少しづつ来ているような気がする。

もう一つ、これと並行して、産業省の整備調整ということがあるんでしょうけれど、これは無論政治問題で、経済だけの問題ではないんでしょう。

記者 将来の恐慌の問題ですが、インフレーションがずっと発展して、だいたい世界大戦が片付いた

場合のことですが大仕掛の恐慌が起るといような可能性はないでしょうか？

伊藤 それは戦争の今後の発展の如何によっても非常に違つて来ると思います。世界的に非常に問題になつて来るんじゃないかと思ひますけれどもまあ当面の日本について云えば、機構の整備といひますか、再編成ということも問題です。と共に一つはやはり日本が新しい東亜——必ずしも東亜に限らなくてもいいですが、を中心とした場所に於て新しく発展した重化学工業といひますか、そういう方面の、普通の経済の用語で云えば、市場を確立する。従つて今まで軍事用とかその他に使われておつたものを、その方面にたいする輸出によつて、ある程度生産力を維持してゆくというようなことは非常に大きな問題じゃないかと思うのです。またそういうことによつて、極く経済の範囲内だけに限つて云えば、新しい東亜の結合の一つ

の基礎的な場面が其処に出て来るんじゃないかと思うのです。夫れの指導原理を、どうするかということは別問題としまして、経済だけについて云えば……。

記者 事変以来日本経済の資本構成ですね。相当変っているんですか？

伊藤 非常に変っていると思いますね。

記者 その変っているということがですね。将来恒常的な形になり得るという意味で変っているか、一時的な——一時的なと云っちゃ悪いが、つまり戦争が了ればまた元のような状態に戻るというようなそういう意味で変っているか——という点ですね。

伊藤 それは大きな問題で、それを決定するファクターとしては、やはり東亜の政治、経済的結合がどういう形になるかということによって非常に違うと思うのですが、もしその際に日本のそういう

大きい東亜の結合が出来れば資本構成が変り、大いに発展した重化学工業ですね、その維持ということとは、やはりその時の情勢によつて、それを例えば後進国に送り出して、その経済開発を図るなり、そういうようなことが可能だということになれば、それは僕は維持できるものでないかと思うのです。

それから又其の際における全体的な生産力の発展の程度如何によつては、今は非常に異常でありまして、その異常なものを支えてゆくだけの背景に生産的な能力というものがあれば、そういう風に経済力が大きくなれば、それも維持し得る一つの条件になると思います。しかし、そういうことがあるにいたしましたが、戦時状態というものの平時状態というものに転換する際における経済上のいろいろな摩擦といいますか、整備の必要といえますか、それは僕は不可避だと思うのですが

ね。

記者 そういう点で、僕等の考えでは、資源とか、市場の関係で、経済がアジア単位になるということが要請されるということが考えられるのですね。

新秩序のアジア的基礎

伊藤 もし経済の面で、日本がアジアにおける大きな意味で、支配——という言葉を使つては悪いかも知れんが、まあとにかく日本を中心とした一つの体制というものが考えられれば、無論日本の最近の所謂戦時経済の、少しアブノーマルな発展も、そうそれがアブノーマルという状態でなしに、過し得るようなことは有り得る。その際の産業の指導精神をどうするか、機構の結び合せの方式をどうするかということ、少し問題になると思いますけれど……。

尾崎 その場合のアジアというものは、無論普通の

狭い意味のアジアでなくして、南洋なりなんなりを含むものだろう……。

伊藤 そういう意味です。そういう考え方も実際の政治にあるんじゃないかね。

尾崎 あなた（伊藤氏）の仰言つた点から説明すれば、政治的な一つの新しい体制を支持する為めにも、そういうことを必要とすると謂えるわけだと思ふんだが。

伊藤 外交政策を問題としよう。経済は細かすぎるよ。

尾崎 細かいと云つても、それは重要な問題だけれど、いまそういう外廓を描かれ、或は問題を指摘されたことを実行しようとする意味でもね。これはやつぱり政治力というものが必要を感じますね。それがいまわれわれが漠然と普通に思つているようなものじゃ全然駄目だということは謂える

と思うのですね。

伊藤 むろん政治力から出発すべきでないんですか。最初は……。

尾崎 例えば、経済再編成の方式にしろ、いまあな
た（伊藤氏）が挙げられたような、違った方式と
いうものとは当然摩擦があるんだからね。そいつ
を折衷的な案としてゆくとしても、それを折衷せ
しめ得る政治力というのは、どうしても必要に
なつて来ると思えますね。

日本経済の弾力性

三木 あのね、経済力の問題ですがね、日本の経済
の弾力性という問題はどうか？ 相当に高く
評価していいのですか。

伊藤 さア僕は、そういう話を突然聴いて何と答え
ていいかわからないですが、僕の考えとしては二
つあるんです。一つは、何と云いますか、日本の

経済が後れているといえますか、可成りまア商業
化されてはいますけれど、日本式の農業というよ
うなものもありますし、中間的な配給機構という
ようなものもいろいろありますし、それから又事
業が独占的な大きなものばかりでない。その挙げ
られている日本の経済の特徴というようなもので
すな。そういうような点は、非常に例えば近代的
に資本主義的に完備した産業経済を有っている国
に比較をすれば、大いに弾力性のある一つの要素
だと思ふ。それがまた他方では、経済を弱くする
弱点にもなりますけれど、今の弾力性だけについ
て云えば、そういうことも一つのポイントになる
と思います。それからもう一つは、現在の国民生
活の状態ですね。無論外国の事などはよくわから
ないので、それと比較してどうということは謂え
ないし、それをどういふ風に視ていいかわからな
い点もあるが、まア日本の国民生活の状態という

のは、弾力性を得るような事情があるんじゃないかと思いますがね。例えば、日本人の、——非常に常識論になるんですが、——生活は、家にしても簡単なものである。ただほんとうに食べるということを中心とした、最低限度の衣食住というものに限定したとすれば、それはやっぱりヨーロッパ辺りとは違った意味の弾力性の一つの基礎があるんじゃないか。ただ非常に欠乏した戦時生活に慣れないという点、それから政治的な戦時の訓練といえますか、教育というようなものをもたない点、そういうような点は、非常に逆にマイナスになると思います……。

三木 そういう意味の弾力性は、根本において支那の有っている弾力性と方向は同じなんでないですか。ですから、そこにもやはり問題があるんじゃないか。弾力性という意味が、それだけのことであればやはり問題があるんじゃないか。もう少し

他かの方面において、こういうところは弾力性だということはないですか？

伊藤 それは問題が、経済というようなものでなくして、もう少し政治とか、思想とか、国民の習慣、伝統とか、そういう事をも含めた上の全体的の考え方の上に生れて来るべきものでないんですか。そうだと思いますがね。ハッキリ僕には結論がわからないんですが……。

尾崎 それは三木さんの領分だな。僕は、もう一つの要素は、外交政策の舵のとりようにあると思うのだね。

伊藤 うんそれはそうだね。

尾崎 僕は、支那と日本との関係は、とにかく今晚み合っているやつを、本当に解らせるところへ早く持つてゆかねばならぬと思うのだ。現在の状態では、お前の方でも成立たぬし、俺の方でも相当大きな圧力を受けている。殊に戦後の、欧米の東

亜にたいする圧力というようなものを考えれば、本当に腹から日支提携して行くよりほかないということを解らせる工夫だと思いますね。その前提

としては、或は非常に現実的な言い方だけれど、支那をある程度追い詰めて、こっちの腹を決めて、自分の方としてはこれだけのところまで追いつめて来たんだけど、後は自分のほうで大きな犠牲をこの上払う心算ならお前をやっ付けることはできるんだが、しかし、われわれは、ドイツがフランスをやっているような態度でお前のほうに決して望んでいない——ということをはからせる工夫が当然あつていいと思うのです。それは事実そうであるべきだと思うのですが、それは僕は支那に解ると思うのです。そういうことは、やはり日本自身が一本になったというときに、ハッキリさせ得る問題であつて、その一つになったところから生み出されて来るところの力を利用して、向う

を叩き伏せる——というとドイツ流になるから、そこところは……。

鈴木 ドイツなんかよりもっと酷いと思わせるようなことがあつてはいけなないね。

外交方策と事變の解決

伊藤 そういう点で、あなた（鈴木氏に）この間「大陸」に書いていたじゃないか。あれに新しい日本の外交政策の一つの基本的方向というようなものが出ていたですね。

鈴木 編輯者から責められて一枚宛書いた。

尾崎 えらいな、その努力は……。

鈴木 どうです。今の生活を下げることによつて生ずる弾力性は、ヨーロッパ諸国の方が多んじゃないかと思えるんだが、つまり外国人は、バラツクへ住もうと思えば、今の生活を本当に切下げ得られるのではないか。その切り下げうる率は日本

より余つぽど多いからね。日本では、われわれの生活を切下げようたつて切下げ得ないところへまで行っているのだね。バラックへ入いれたつて、はじめからバラックへ入いつているものをどうするのか経済の弾力性ということとはもつと積極的な方面で考えられないものだろうか。

尾崎 それは各々係数が違うね。

鈴木 今の経済の弾力性という場合、外交的に云々ということとは、ソビエトというものが非常に考慮にのぼつて来るんじゃないか。ソビエトの経済力を利用するというようなことは、例えば日本と英米が戦争するということになつて、日本の経済力を維持することになつた場合には、差当つて、このソビエトとの経済的提携というようなことが考えられてもいいのじゃないかな。

尾崎 アメリカに依存する率から云つてね。しかし、それは東亜を組織してゆくということならそれで

もいいんじゃないかね。アメリカと戦争するとか何とかいうことになればなんだけれど……。

鈴木 日本の執つている方向はそういうことになるんです。例えば、仏領印度支那の問題を解決するという場合でもそれらは必然にアメリカとの衝突が来て、徹底的に解決しようとするれば、アメリカとの戦争というようなことは準備しなければいけないのじゃないか。平和に進めるというならば、それは又別だ。平和的にアジア問題を解決するということも必ずしも不可能ではないだろう。しかしよいよの場合は戦争になるのだということを覚悟してかからなければなるまい。

記者 仏領印度支那をやれば介入ということになりますね。

尾崎 介入、不介入の問題は、消し飛んだ筈ですよ。
三木 そういうことはどうでもいい。言葉の問題でどうでもいいけれど、しかし、要するに支那事変

処理ということと關聯なしに、仏印でも、蘭印でも考えちゃいけないと思うんだ……。實際チャンスとか、アジアの問題を解決するチャンスであることは確かだと思うのだね。しかし、それは日本にとつて適当なチャンスであるか否かということになつて来れば、日本のアジアの問題を根本的に解決するということにたいする政治、經濟、軍事凡ての方面に互つて準備というものが、出来ているか、いないかということによつて決せられるのだ。出来ていなければ、チャンスはいくらあつても、それは日本に取つての適当なチャンスでないと思ふのだね。

尾崎 それは絶対正しいですね。

三木 チャンスであると同時に、前に云つたように、やはり蘭印とか、仏印とかいうものは、結局支那および印度の問題に対して附属的だと思うのだ。だから、日本としては、支那をちゃんと、日本の

味方に付けて、そうして新しい体制を整えてゆく。できれば印度までが日本に信服するという風に導いてゆくという体制が整わない限りは、東亜の安定ということはあり得ない。

鈴木 蘭印なり、仏印なりを獲りさえすれば、そこから日本の力が奇蹟的に湧いて来ると考えるのは非常に危険なことだ。

三木 資源獲得ということからやるにしても、そういう形式で獲れば、すぐには利用できないでしよう。どうです、伊藤さん？

伊藤 それは難かしいでしょうね。

尾崎 尤も仏印の場合、そういう資源的なことは別でしょうね。やつぱり支那事変処理の方向として考えている人たちの主張でしょうね。

伊藤 實際問題として、仏印というものは大した役割を演じていないのか？

尾崎 援蒋ルートとして……。

鈴木 ルートとしての役割は余りない。彼処から入っているものは殆んどないと言う人もいるようだね。

尾崎 そうでないでしょう。

鈴木 雲南方面へ新しい発展をみたために、それで蒋介石は助かっているのだというような話も聞くとが……。

尾崎 それは云い過ぎだろうな。それは全体として非常に外との繁りが細々となつて来たために……。

鈴木 それはどちらでもよろしい。僕はしかし援蒋ルートだから云々というのではなく、仏印もアジアの一環としてアジア新秩序の建設のためにフランスの主権から解放さるべきだという建前でゆき

1 蒋介石政権に対する諸外国からの物資支援ルート、仏領インドシナから雲南を経て重慶へ。

たいね。

尾崎 そういう大きなウエイトをもっている仏印も仏印自身の民族的要求というものを、やはり十分考慮し生かした上でないと問題にならない。

三木 支那事変の解決の為に必要なら、僕はやっていいと思うけれど……。しかし、支那事変解決の根本方針が決まらないでは、支那事変解決の手段も決らないわけだと思うのだ。だから、その根本方針というものを、もつと具体的にハッキリさせる必要があるのです。

記者 どうもありがとうございました。

(六月二十日、於嵯峨野)

底本…『尾崎秀実著作集』第5巻

底本の親本…『大陸』(改造社刊) 1940.8

底本からデジタル化し親本で校正する。底本は新字に換えているだけでなく誤植の訂正、振り仮名の追

加をしている。おおむねそれに従ったが、いくつかは親本の表記に戻す。

新文化の発足

豊島与志雄：1890～1955、福岡県生まれ、東京帝
国大学仏文学科卒、法政・明治大学教授、小説家。

谷川徹三：1895～1989、愛知県生まれ、京都帝国
大学哲学科卒、哲学者・評論家、法政大学教授。

岸田国士

三木 清

現実の圧力

日支文化交流の課題

記者 はじめの計画では、四人の方々から、大陸と
国内との事情に於いていろいろお話をお伺いしよ
うと思っていたのですが今度岸田さんが大政翼賛
会の文化部長に就任されましたので岸田さんから

色々御抱負なり御意見なりを伺い、皆様からも御
意見をご提出願って、紙面の上でも大政翼賛運動
の一助にでもなれば大変幸いと存じます、三木さ
んに一つ進行係をお願いします。

岸田 向うも広域新体制なんだから向うの話も混ぜ
ようぢやありませんか。

三木 豊島、谷川両氏は支那へ行つて来られたし、
岸田さんと私とは満州へ行つて来たのですからと
もかく大陸の文化問題、大陸の文化政策というよ
うな事から話して戴けば自ずから日本の文化政策
というものも問題になつて来ると思いますが、それ
は現在広域経済というような言葉があるように
文化政策というものもこれまでとは大分違つた、
もつと大きな見地から、広域的な見地からやつて
行かなければならない、従つて大陸の話をしなけ
れば内地文化政策に入つて行けないと思います、
先ず今度支那へ行つて来られた豊島、谷川両氏が、

どういうことを一番痛切に感ぜられたかということをお聞きしたいものです。

豊島

とにかく、支那に行くとな、現地の人達は、政治工作言い換えれば当面の問題となる治安工作は、十年、廿年計画だといって居ります、それに伴う文化進出の問題は、所謂日支文化の交流というものとは違った点に置いてかからなければいけない、今、支那のインテリの優秀なものは大多数奥地に逃げ込んでしまっているし、残っているものは質の悪い者ばかりということになるので、結局優秀な文化人を引っ張り出すということは治安工作に伴うことだから治安工作が十年計画廿年計画ということになって来ると、日支文化の交流などはなかなか困難になって来るし、先ず此方の方から出かけて行って引っ張り上げてやらなければなりません、このことは日本文化の問題を同時に東洋圏全体の問題に押し広めてかからねばならん

ということになりますね、そこで実際の具体的工作は困難になると思います、それも皆で考えなければならぬ問題だと思っています。

岸田 豊島君はどっちの方へ行つたの。

豊島 青島、済南、北京だ。

三木 谷川君、感想はどうかね。

谷川 僕も青島、済南、北京ですが、今、豊島氏の言つたことは大体賛成です、實際現実の實際を見ると非常に悲観すべき材料が多いんです、しかしそういう現実の悲観すべき材料に引っかかつていては何も出来ない、十年、廿年でも僕は出来るかどうか判らないと思うんだが、もつと遠い未来というものはどうしても考慮に入れなければならん、だからそのためにはそんなに性急に効果が挙がらなくとも後になつて効果の挙がるようになつたり色々な捨石を今のうちに置かなくてはならんと思う、その捨石を置くことを未だどうも日本人はしてい

ないような気がするんですがね、文化工作というものでもその捨石をするという気持ちで一見無駄のように見えることでもつとどんどんやらなければならんように思うんです。

岸田 それも余裕がなくて出来ないというよりも、気がつかないから出来ないという方が多いんじゃないですか。

谷川 僕もそうだと思います。

岸田 余裕がないというだけならわれわれは黙っていてもいいことなんだからね。

自信と信頼

わびし過ぎる表情

谷川 そういうことは非常に卑近なことで沢山あるんですよ、勿論よく言われるように人間の問題でもあるし色々な問題でもあるけれども、いつまで

も人間の問題だといっていたって仕様がなかったので日本人をそんなに急速に変えることは出来ない、色々な時局の認識によつてその心構えなり覚悟なりを変えられるように見えてもその範囲は知れている。

豊島 僕はその点意外だったのは、青島に行つても北京に行つても、比較的文化面に働いている人達が日本の内地のことばかり心配している、それがね、後顧の憂いという気持ちだろうけれども、話をしたり座談会をしたりしてもそういうことの心配が非常に多過ぎる、先ずその青島や北京でどうするかということよりも日本のことをより多く考えているんじゃないかと思う、その点満州なんかはどうなっているかね。

三木 これは満州で色々な人に会つて云つたことの一つであるのだが、満州国は新体制で始まったんだ、今の日本の新体制というものを気にして内地

の方ばかり見ていては駄目だ、だから我々の話を聞こうということなどはあまりしないで、自分らは寧ろ新体制の先駆者であるという自信を持つて進んで貰いたいということを皆に話したんだ、ところが満州国建国当時の人にはその意気込みもあるが、後に行つた連中はやはり内地のことを気にしているね、内地の方ばかり向いているんだ、それと調子を合せて行くという自信のないところがあるね、その自信の無さが結局いけない、そして内地のことを言えば、日本も外国の方ばかり見て外国はどうしているかということを考へて本当の自信が足りないように思う、そういうわけでインテリの場合にすればインテリは周囲ばかりを見ないでもつと自分達の使命というものに対して自信をもつてやるということが非常に必要だと思ふね。

豊島 要するに日本の国から出た人達は日本の方ば

かり見て日本の国内では外国ばかり見ている、その喰い違いを是正する必要があるね。

岸田 やはり今のインテリもそうだけれども、日本人が良い意味で自信を持つということと、それからお互いに日本人が信じ合うことが一番根本だと思うんだ、それは満州から日本を見ている人達がどういう気持で見ているかという、必ずしもこれを模倣しようという気持ばかりでなくて、やはり巧くやつていくくれるかしらということもあるかも知れないし、また殊に場合によると満州で仕事をしている日本人が自分達が信用されているだろうかという危惧の念もあると思う、これは国内に於いて皆が協力して行く上に非常に障害になっているし、まあ現実的に切実な問題ですね。

豊島 日本という国は何しろ太平洋の中に浮いている一艘の船のようなものだからね、その船から大陸に上がると淋しいだろうね。(笑聲)

三木

日本人は何処にいても結局日本人なんだからね、お互いにもつと信頼し合うということが必要だと思う、その点に於いてどうも遺憾なことが随分あると思われるね。

谷川

それを僕はもう一步進めて支那人の達をもつと信頼するということまで行つて欲しいと思うんだ、色々な点でもつて支那人と日本人とは生活も風俗も考え方も違つてゐるし、色々な点でまだお互いに理解し合つてゐないところがある、併し究極に於いてはやはり我々は人間だという立場に立つて支那人をも信用する、こういうところが僕は非常に必要ぢやないかと思うんです、相手を信用してかかつて相手に欺されたり背負い投げを喰わされたりする話をよく聞くんですが、向うでもつて実際の仕事をしている特務機関関係とかその他の人の話を聞くと、大体に於いて長い間仕事をしている人は三段の境地を通過していますね、

初めは此方が真心をもつて行けば必ず向うに通ずるところがあるという考えで行く、ところがこれが事毎に喰い違いが出来る、これはもう駄目だ、コン畜生、支那人という奴は度し難い人間だと考える、そこで、今度は頭から抑えてかかろうとする、そうすると益々いけない、結局また元のところに帰つて来るんです、長い間やつてゐる人はこういう風に大体三つの段階を経てゐるんです、私の会つた範囲では殆どそうでした、それでない人はこの第二の段階でやめてしまつてゐるんですね。

よく支那人に欺された話を聞くんですが、その多くの場合実は此方が向うを信用してかかつてゐるように考えても実は向うを本当に信頼してゐない、真心をもつて対さなかつたんで、本当の真心をもつて居たらお互いは人間なんだから向うも本当の真心をもつて対してくると思います、ギリギリのところは結局ここにあるので、ここを本当に

掴むかどうかが大きな問題です。

威厳の喪失

打算性と日本的性質

岸田 それは色々な場合もあるだろうけれども、その問題についていえば結局信用しないから欺かれるということも屡々あると思う、殊にですね、支那人に限らないお互い同士のことだけれども日本人がやはり人の心理を読むことが未だ非常に足りなくて、これが外国人を相手にすると非常に喰い違う点がある。

その問題に關聯してわれわれは相手に好意を示すという、その示し方が、好意を好意として示すことが下手で、日本人同士ならばそれもあり通じるんだが外国人だとそれを親切という形、或はサービスという形でなければ示せない、これは相

手をして乗ぜしめることになって来るんで、相当考えなければいけないと思うね。

三木

向うを信ずれば妙に甘くなってしまうて、威厳というものが無くなる、これは日本がスパイに乗ぜられ易いということにもなると思う、そういうところがあるんだ、或意味に於ける威厳だね、威厳というものの本当の意味が日本では理解されていないのぢやないか。

谷川

それは日本人がね、外国人と接触がなくてお互い日本人同士が直ぐ何でも以心伝心で解り合うという生活態度をして来たからね、そこから個人文化が充分発達しなかったんです、個人文化は日本のように割合に楽な協同生活の出来るところでは比較的発達しないね、その点からいえば支那人は社会はあっても国家がないという国だから個人文化という面が発達して来て居るんです、日本人は個人と個人とが相対した場合支那人に押される

場合が多いですね、そういうところから三木君の云った威厳という問題も出て来ると思うんです。

支那へ行っている日本人がどうも支那人に馬鹿にされる、延いては日本人全体というものが軽く見られるようなことは結果として出て来る、その個人文化というものが日本では充分発達していなかった。

豊島 しかし日本人の気の短さにもあるんだろう、お互いに信用をもつて真心をもつてやっていれば長い間に分つて来てうまくゆくね、支那人は実に気が長いからね、アリス・ホバート【Alice Tisdale Hobart】の「支那ランプの石油」という小説にはその点がよく出ているね。

三木 満州を旅行して感じたことだけれども、満州の田舎に行くときと遠くへ行く汽車は一日に一本位しかない処がある、旅行していると時間の都合で三時間とか四時間とか停車場で待たねばならぬこと

があるが、支那人は実によく待っているね、何等屈託しないで待っているんだ。

僕等は三時間もあると焦々して来て駅を出てブラブラ歩いてみたりコーヒーでも飲むところはないかと考えるんだ、その点彼等と我々との間では時間の觀念がとても違うんだね。

豊島 そうそう、北京の中央公園のベンチね、彼処でも支那人はコーヒー一杯で二時間、三時間は平気で座っているが、日本人はコーヒーを飲むと直ぐ立ってしまう、だから日本人は最初は沢山いても直ぐ居なくなってしまう。

三木 それが怖いね、満州でも支那でも日本人は長くやらせれば参るというように考えているかも知れないんだ、そこを余程考え直して行かないと向うにやられてしまう危険がある。

谷川 支那人と較べてばかりでなく他の国の人に較べてもそうだね、イギリス人が支那で巧くやつて

いるのは他の点では、大きな違いはあるけれども、テンポののろいという点で支那人とよく合う、そういうことを林語堂¹も云つてゐるが、日本人が支那で巧く行かぬのはテンポが合わないところもたしかにある。

豊島 これはどうなんだね、イギリスのような文明国では時間はやはり金だからね、日本人にとつても時間は金だ、ところが支那人にとつては時間は金ぢやないんだ、金で換算出来ないんだ、日本人は時間を只で使うことは考えられないだろう。

谷川 日本人が気が短いというのは時間が金だという問題とは違うんだ。

豊島 イギリス人にとつてもタイムイズマネーであるのに、而もイギリス人は気が長いが日本人は気が短いということになる……

1 1895～1976、中国の作家・言語学者、外国人向けの中国紹介作品で有名。

岸田 日本人から見れば気が長いんだけれども向うに云わせれば適當なんだね。

三木 それは充分打算してのことでもあるね、日本人はその打算が出来ない国民なんだ、その点綺麗なんだね、算盤を弾いてみれば結局気長くやる方が有利だということはイギリス人には判るが日本人はやはり其処が綺麗なんだね。

岸田 打算的なつもりでいても何処か日本人のは違うんだね。

三木 打算的なつもりでもその実決して打算的ぢやないね。

文化性の貧困

語感が全然通じない

豊島 日本人は色々忙しい時でも時間を有効に使っていないね、時間の利用という点ではやはりヨ―

ロッパ人には叶わんだらう。

三木 支那の宴会というものはいわゆる長夜の宴で、三日間位徹夜で飲むでしょう、そうでなければ本当に御馳走した気持ちにならんというのだから大変だよ。

豊島 日本人ならばその間に何遍もやるね。(笑声)

谷川 支那人が歩いているのを見ると実にゆつくりした歩調で歩いている、日本人ではとてもあれば真似出来ないね。

豊島 然し支那の若い女性はずく歩いているね、それに外股で歩いているが、あれは我々から見てもおかしいね。

谷川 支那人は日本人より欧米人に近い、生活でも何でもそうだ、初めて支那へ行つて感じたことは日本という国は特殊な国だということだったよ。

三木 同時に支那のインテリと日本のインテリとはあまり違わないのではないか、だからインテリと

インテリが話し合えば早く通ずるところがあると思う、また支那の政治家には現在大体汪政権の方にしても蒋介石の処にしてもとかくインテリが多い、そういう事から考えれば日本もやはりもう少しインテリを働かせるということをしたら相当効果が挙げられると思うんだ。

岸田 日本と支那との関係を見ると、日本から選ばれてこれが一番支那に向く人間だと自分も認め人も認めている人間が、案外支那には一番向かない人間だったと思うね。

三木 それはありましようね、ともかく日本のインテリももう少し自信をもつて立ち直らなければならぬ、支那に対する関係だけに於いても日本のインテリが本当の自信をもつて立ち直らなければどうにもならないところがあると思うね。

豊島 支那の政治家は昔から一流の文化人だからね。

三木 それは日本の武士道というのもそうなんだ、

武士道とは単に武を練るということではなくその時代に於ける最高の文化人になるということであつたろうと思うね、やはりそういう意味に於いてもう少し政治と文化とが結びつかなければ日本の国の充分な発展は望まれないね。

豊島 同一の言葉をいっても語感が通じ合うということが少ないんだ、語感の通じあう人達を支那でも日本でも動員して一緒に物を考えるようにして行かなければいけないね、大政翼賛会なども語感の通じ合う人達だけでしつかりやらなければいけないね。

岸田 それは確かだね。

三木 感覚というものは大切だね、感覚が違つていたらどうにも行かんからね。

谷川 寧ろ大政翼賛会は語感が通じ合うように日本全体を地ならしする運動だと思いますね。

岸田 運動としてはそうでしょうね。

三木 ところで大陸に於ける文化政策というようなものは、これまでいろいろ言われているけれどもそういうことでさしあたつて最も必要な根本的問題というのは何でしょうか。

豊島 やはりそれは、日本文化という意味でなく言葉を変えていうと東洋文化と言うものの振興に對するスローガンを掲げることだと思うね、支那の優秀なインテリを此方に向かせ、一緒に働かせるということについて、その引つ張り方が治安工作、政治工作と共同しなければならぬから、却々困難だろうけれども……

谷川 同じことを云うことになるかも知れないけれども、狭い意味の日本文化を押付けようとしてはいけないと思うんだ、日本の色々なこと、例えば住宅にしても日本の住宅形式というものは日本の風土にはじめて発達したものであつて、日本人に

とつては日本に於いては住みよいけれどもこんなものを大陸に持つて行つても住めない、それと同じことで日本という特殊な風土、国柄に於いて発達したものをそのまま持込んではいけないということ、それを日本の文化工作に關聯して色々な場合に痛切に感じますね。

岸田 而もそういうものが悉く純粹でなくて所謂インチキなものである場合は殊にそうですね。

谷川 殊に一部の人達が日本古来のものと信じているのがその実江戸時代にやつと形作られたもので、疊だつてこんな風に部屋全体に敷かれるようになったのは、江戸時代ですからね、日本の昔はそうぢやなかった、江戸時代の文化は温室文化です。

こういうものを殊に風の荒い大陸に持込もうとしても無理で、その点で日本の文化を再反省して日本文化の如何なるものが世界文化に寄与すること

が出来るか、如何なるものが世界的に成り得るかということのを再反省してよいと思う、江戸時代的なものを未だに神武天皇以来の日本的なものと考えているのが沢山あると思うのです。

文化への信賴

理想国家の政治目標

岸田 文化というものの本当の科学的な研究へ其処から入つて行くんだが、そういうことを一つ大いにやる部門を作りたいですね、文化部の内には出来ませんが文化部に接觸した機関で作れる、いいと思います。

谷川 ぜひ必要だと思ひますね。

岸田 それは大陸に於ける日本の文化政策ということに繋がるんだと思う、大陸での日本人の生活というもの——これはやはり大陸に適しているかど

うかということと日本人として誇るに足る生活であるかどうかということとを根底として、大陸に於ける日本人の生活の基礎を作りたい。

それには先ず国内の体制を整えなければいけないと思うのです。

谷川 日本文化、日本文化ということを書いていますが、根本的に反省されて居らんとします。

三木 日本のインテリは西洋崇拜だといわれるけれども実はやはりどこまでも日本人だと思う、日本のインテリが西洋的だといっても西洋人から見ればおかしくつてしようがなからうと思う、そこで俺達は日本人だ、俺達のやることは日本的だという自信をインテリが持たなければいけない、人からインテリは西洋崇拜者だとか、欧化主義者だといわれると直ぐ自分でもそうぢやないかしらんと考える気の弱さがいけない。

自分達は本当の日本人だ、日本精神を本当に実践

している者だという自信を持たなければいけない、そういう自信がインテリにはどうも足りないのぢやないか。

谷川 実をいえば明治以来我々は欧米の文物を取入れたがそれによつて我々は一層日本的になつたんですよ、實際ああいうものを受け入れて今日まで来た我々はこれによつて日本のポテンシャルな力を実現して来たと思います。

岸田 そういう確信はあつていいね、それと同時に国民の多数が、特にインテリと云われる層が西洋崇拜であるとか西洋風なものを好むとか云われ、更に時代の動きに対しても、これが積極的に乗り出すことを躊躇する風が見えたのは、その原因を僕はこういうところに置きたいんですよ、つまり日本が西洋に較べてまだ現代文化というものを樹立していないということに引け目を感じてでは決してない、現在の日本に所謂文化政策というもの

が確立していないからだと思います。

そこでインテリは自分の住んでいる国土の中に物足りなさを感じるんだと思う。

理想国家の美しい一つの目標を与えられ、文化政策が政策として示されて、それが着々、或は徐々にでもよいから進められていたならば、これは日本というものに非常に大きな希望を持ち自分達も協力する熱情を十分振立たせていたろうと思います、これをこの際僕ははっきり云いたいんだ。

三木 それは重要なことですね、インテリばかりでなく大衆に対しても政治の新しさというものを感じさせ、そしてこれ迄の政治とは何か違うところがあるということを思わせることが出来、而もそれほど困難なしに出来るものは文化政策です、これが出来れば政治に対する文化人の信頼を繋ぐことが出来、更に日本を愛する気持を文化人の間に一層強く作ることが出来ると思いますね。

そういう意味に於いて大政翼賛会に於ける文化部の仕事は重要だと思うが、その仕事が出来れば唯文化だけでなく政治全体の転換になり得るようなモメントを掴むことが出来ると思います。

谷川 その基礎を何処に置くかという日本人に対する信用に置かなければならんと思う、日本人が何千年来養われてきた我々の心感情生活はそう早く変えられるものぢやありません、僅数十年西洋の文物を受け入れたからといって変わるものでは有りませんから、其処に信用を置いて行きたいと思いますね。

精神的動員

社会人としての訓練

三木 日本人は大体島国にぼつんと離れて一緒に共同生活をして来たんだ、それで今インテリが外国

文化というものを吸収したといつても外国へ行つて生活が出来るかというところは出来ないんだ、ところがドイツ人やイギリス人、フランス人は国を追われても何処へ行つても生活が出来る、日本のインテリは西洋的だとかいつても外国へ行つて生活出来ないんだ、そういうことから考えても日本のインテリの本心はやはり日本を離れないと思う、そういうことを本当に現在の政治かが理解して「インテリも真の日本人也」と考えて、まあ悪くいえばインテリを使うようにして貰いたい。

ところがこれ迄インテリは批評的、懐疑的であると言われたが、批評したり、懐疑したりするより他にどうにも仕様がないうちに置かれていたのだからね、この点を政治家がよく考えねばいけない。

岸田 懐疑や批評をするということは畢竟悉くこれまでの政治に文化性がないということに起因しているのだ、その点に政治家は目覚めて欲しい。

谷川 ともかくどんなに西洋化してもギリギリのところへ行くと日本人の気性を出すんだ。

これは我々の生活の實際に於いても現れているが、おかしい位ですね。

岸田 その点日本人は強気であると同時に弱気であるということを考えて、日本から離れられないために日本を愛するということと満足してはならぬ、そういうところにつけ込んだら間違いで日本人は何処へ行つても住めるような日本人にしなければいけないことを考えてやらなければ駄目だ。

三木 支那や満州に於ける日本人の状態を見て感ずるんだが日本人は国を離れても独立して行けるだけの生活の必要な技術を備えなければ発展しないと思いますね、ところが日本人は有難いことに国家の力が非常に強かつたので国家に頼つてばかりいて自分で独立にやつてゆくという考え方が欠けていたと思いますね、そこで故国を離れてもどん

な世界に行つても生活が出来るような技術才能を獲得するというのが必要だと思います。

岸田 それが決して日本人の愛国心を稀薄にするこ
とでは絶対にないという信用を日本人がお互いに
持ちたい。

豊島 僕はそういう信頼をもっている、日本人位日
本の血の濃いものはないと思うんだ、日本人は俺
は日本人だということを一先ず忘れる位な覚悟を
持った方がいいね、何時も何時も日本人ではいけ
ないのだ。

三木 それはそうだよ、例えば自分の家のことを考
えるのはいいんだけど家庭のことばかり考えて
いては却つて発奮出来ない、家庭を忘れる位でな
ければ仕事は出来ないと思う、日本は家族なんだ、
家族を忘れて働くような人間でなければ外に充分
発展出来ない。

岸田 当たり前のことを道徳的な価値があるかの

ように教えることはいけね、愛国心というこ
とは当たり前のことなんで、愛国心があるとか
ないとかやかましくいうことはいけねと思うん
です、あんまり道徳と結びつけ強制するようなこ
ろがあるね。

三木 日本人で愛国心がない奴がいたらお目にか
りたいといいたいね、最後の点をつきつめれば凡
ゆる日本人は愛国心を持つてゐるんだから……

谷川 僕はこの二、三年来繰返して言つてゐるんだ
が、国民的訓練というものは日本人には充分出来
てゐるんだからこれからは社会人としての訓練を
もつとしなければいけない。

ところが未だに社会人としての訓練を留守にし
て国民としての訓練をしようとしている、現在も
日本人に国民としての訓練が足りないと思へば、
それは社会人としての訓練が足りないところから
来ている国民としての訓練の足らなさだ。

岸田 だから僕は前にも云つたことがあるけれども、国民精神総動員¹という言葉が出た時に、国民精神は総動員しなくてもよい、動員は出来ている、国民精神は動員しなくてもよいが、国民の精神的動員をしなければいけないということを言つたんです、これは換言すれば知識層を協同の目的に向つて動かさなければいけないということで、今度やつとその機運に向つて来たことを欣んでいるわけですが、それでなければ国民を本当に引張つて行くことは出来ないと思うんです。

制度の克服

中世を再検討すべし

三木 何といつても、これはインテリの自惚れで

¹ 日中戦争を始めた近衛内閣が始めた運動、後には物資の動員も求め、国家総動員法へ続く。

はなく、インテリは国民に信用されているよ、それだからインテリが本当に立直つてやれば国民はきつと随いて来ると思う、これはまたインテリの弱味かも知れないけれどもインテリは良心的なんだ。

良心に納得出来なければ進めない、その代り良心に納得出来ればインテリだつて相当に勇敢にやると思う。

豊島

戦地の第一線の場合でもインテリの強さが初めて判つたんだろう、立派な戦闘をするということがね。

岸田

インテリが立派な戦争をするということのため、またひとつ誤解がふえた、これまで国内でインテリはだらしないようだったけれども内面的には立派な戦争をしているのだということに気がつかないで、戦争に出すとインテリは強くなるというように考えること……これも日本人的な

考え方だと思うね。(笑声)

その考え方を直さなければいけないね。

豊島 何しろ徳川三百年の鎖国主義が気持の上で相当たたっていると思うね、あれを打破するということが封建主義を打破すると同時に文化運動にもなるね。

岸田 そこでその封建主義の打破だが、僕等は封建主義というものに対して色々な悪口を言つて来たんだが、最近或ところでちよつと口を滑らせて封建主義の打破ということをしたところが、

「いや封建主義の復活である、封建主義に反対するものは自由主義である、共産主義だ、怪しからん」

ということをいわれたんだが、その時に僕は咄嗟にその落ちをつけるためにいったことは、いや封建主義の反対は自由主義、共産主義ではない、封建主義の反対は立憲主義だと逃げたんですけれど

も(笑声)しかし我々の中にある自由主義的なものを捨てたら我々は木偶坊になってしまふんだ、我々の教養は自由主義時代に養われたものでそれを働かせて今の時代のお役に立とうと思つてゐるんだが、それが自由主義といつて悪ければそう言わなくてもよい、それに代るべき名前をつけられよい、国防国家の建設の役に立たせようとしている我々の精神的拠り所だね、これを何とか名前をつけたいと思つてゐるんだ。

三木

我々は協同主義といつてゐるんですがね、なるほど封建主義はいけない、併し現在の世界の情勢を見ると色々な意味に於いて新しい中世というような形が随分あると思うんだ、近代というものにはルネサンス即ち古代の復活ということで始まつた、古代の復活といつても、むしろ古代がそのまま来たのでなくて新しい形で古代を生かしたのだから、現代には同じような意味に於いて中世の復活

ということが考えられると思う。

岸田 それはエスプリとしてはあるね。

三木 そういう意味に於いて従来は全く暗黒時代と考えられていた中世社会のうちに自分達の新しい精神を盛つてアイデアを捉えて来るということが必要だね、例えば現在の経済に於ける職能という考え方は中世のギルドの精神に似ている。

しかしそういう封建的なものに似て居りながら封建的なものを脱却するには自由主義の長所を生かして行かなければならん、だからただ還つてはいけない、けれども同時に我々はこれまで余り中世というものを軽蔑し過ぎたということもあるんだね、本当に真面目な反省をしてそこからアイデアを取つて来ることにについて考えなかったということもありますね。

岸田 結局一つの制度というものは弊害を常に伴うもので、我々は封建制度の弊害に対して戦つてい

るということが言えるんだ、そういえばハッキリするね。

三木 現在の隣組というようなものも昔の五人組制度のようなものだ、それを新しく生かして行く、そこに一つの協同意識というか、協同生活の思想を養つて行くということは良いことだね。

岸田 いまあなたが封建的と中世的なものを区別されたのははつきりしているが、中世的なものとはこれは僕はやはり封建制度と区別しなければいけないと思うんだ、それは封建制度の特色が何処にあるかということをはつきりさせればよいわけで、そもそも抑々群雄割拠ということがその始まりさ。

三木 全く新しく生きるためには一旦死に切らねばならぬ、そういう意味において中世の復活ということも考えられねばなりませんね。

岸田 中世というのはポエチック【poetic】でよいですよ。

現代の宗教

国体に科学的基礎を

豊島

中世の復活ということも結局生活意識の問題ぢやないかね、現代では我々の意識が變つて來た、個人の生活というものを同時に公の生活と見るんだ、私即ち公、私というものと公というものとを一体にする生活意識が非常に重要なんで、意識の持ち方が根本の問題なんだ。

岸田

つまり封建時代には私の生活がなかった、或意味に於いて主人達の生活しかなかったということであるけれども、今日の私というものはその時代の私とも違ふし今日の主人もその時代の主人とは違ふんだ、形に於いては似た形であつて、これを一つの中世的精神といつてもよいが封建性ではない。

谷川

現代は現代としてどこ迄も独自の時代だが、しかしロマンティック時代——フランス革命後の何十年かの時代に色々の点で較べられるね。

あの時代も神話や伝説の復活の時代、歴史的探究の時代で、文化形態の上からいうと現在と非常に近いんです、しかしあの時代が既に封建主義の復活ぢやなかったんですからね。

岸田

まあ歴史的に見ると西洋の色々な時代が日本では一時に來ている形もあるしね。

豊島

要するに私と公を一緒にする生活意識が今の協同体に必要なものであつて、これは感覺であつて理屈ぢやないから困難だけれども、そういうところを三木君あたりにはつきり理論的に説明して貰うといいんだがね、我々は感覺的に考えるだけなんだから……

岸田

僕はその點頭のよい人に一つ考へて貰いたいことは、今日の時代は云わば中世から今日マイナ

ス宗教ぢやないかと思う、またその宗教に代るものが私と公を結び、或は一致させる上に絶対必要なんぢやないかということなんです。

三木 中世は宗教的時代ですね、そして現代は或る意味において中世の復興だとすれば、そこに現代には現代の新しい宗教が必要なんです。

ソビエトとかナチなんかでは中世のスコラ哲学と同じようにマルキシズムもナチズムも絶対権威化されている、これは中世的ですが、日本ではこれと違つたものを出して来てしかも一種の宗教的な味合いを持たせることが必要だと思ひます。

東洋文化というものはやはりそういう一種の宗教的な味合いを持つてゐるね、それから西洋の中世と東洋の中世を比較してみると東洋の中世にはヒューマニズムが濃厚にあるんです。

西洋の中世は絶対権威主義なんですが東洋では宗教上から見ても一種の信仰の自由があつて神道も

信仰すれば仏教も信仰する、仏教でも各宗各派が対立しておつて矛盾がなかった、これは支那に於いても孔子教の信者は同時にクリスチャンであつたが、かようなことは西洋人には考えられない、そこには一種のトレランス【tolerance寛容】の精神があつたんだね。

そういう東洋のヒューマニズムは一種の自然主義で、人間の自然、人間性を尊重するといふところがありますね、中世的であり乍ら一種のヒューマニズムがあつたんだ、それを自覚すれば東洋文化の復興の大きな動力になるのぢやないかと思ひます。

豊島 僕も東洋のルネッサンス運動を起こさなければいけないと思うね、大きな意味の文化的なルネッサンス運動が必要なんだ。

三木 その動力をどこに求めるかが問題で、僕はそれを東洋的ヒューマニズムと考える。

谷川 日本に於いては国家神話が今日も生きてい

る、それが信仰に代るものになるんですね、現在も民衆に対して宗教的権威をもっている、之が今日の日本のこういう非常時にあっても一つの支えになっている。

三木 いずれにしても国体についての科学的な基礎をはつきりさせる必要がある。

そういう科学的探求を認めなければいけないね。八紘一宇の精神を本当に世界に光被するには、それに科学的な基礎を与えなければならぬのだ。

岸田 それと同時に八紘を宇となすというこの言葉は一つの宗教的な厳粛さを持っているんだ、これを誰も彼もが使うために宗教味が薄らいでいるので、これに気がつかないのは現代の政治家の欠点で、¹ 1940.7.26 第2次近衛内閣閣議決定の基本国策要綱で「¹、根本方針 皇國の國是は八紘を一宇とする肇國の大精神に基き世界平和の確立を招来することを以て根本とし、先ず皇國を核心とし日滿支の強固なる結合を根幹とする大東亜の新秩序を建設するに在り」

だと思えます。

三木 それはラジオ放送が悪いのですね、文化部あたりでもラジオの指導をやつて貰いたいね。

封建的残存

臣道実践の具体指示

岸田 八紘一宇という言葉も確信を持っている人がいえばよいが、確信を持つて居らんでカモフラージュして言ったり、他を陥れるためにそれを使ったりする、つまり悪用されているね、それではないのであつてインテリの立場としてはやはり今迄あいうものに触れることを厭がつて居つたんです、しかし現在ではこれはいけないので、ぢや² 1940.10.12 近衛文麿の誕生日に行われた大政翼賛会の発会式に於いて「宣言綱領を私に表明すべしといわれるならば、それは『大政翼賛の臣道実践』ということであり、『上御一人に對し奉り、日夜それぞれの立場において奉公の誠をいたす』ということに尽きると存するのであります。」

どういう風にするかが問題です。

三木 宗教的な味合いのある言葉でも毎日ラジオで聞いていると我々が人に会えば「今日は」「お早う」というのと同じような意味のものになってしまふね。

岸田 あれはクォーテーションをつけなければいけない言葉なんだ。

豊島 あれは先ず日本の国民的宗教の奥にしまい込んで置くものであつて、あれをもう一つ通訳するものが要ることになるんだ、つまり通訳して皆に判るような言葉にするんだね。

三木 それは大政翼賛会についても言いたいのだが、臣道実践というね、臣道実践は自明のことなんで日本国民は皆臣道実践をしていると思う、国民が知りたいのは現在何をするのが臣道実践であるかということなんだ、それを示すことが大政翼賛会の仕事なんで、臣道実践は現在に於いては

こういうことをすることだということを具体的に示して貰いたい、その意味で大政翼賛会が綱領を持たないことは遺憾に思うね。

豊島 非常に、立派な通訳が必要だね。

三木 そこでこれまで大陸の文化政策については意見が出ただけけどそういう大陸の文化政策と関聯して逆に内地を見た時一番必要なことはなんだろう。

豊島 僕は一つの言葉でいえば本当の意味の通訳だね、まず通訳が必要だと思う、それはね、僕はこういうことを感じたんだ、支那では本当の近代意識に目覚めたインテリと農村大衆との間にはギャップがとて有る、そのギャップが嬉しいことに日本ではそれほどない、両方が余程接近しているんだね、農村にしっかりとしたインテリが出来

一 宣言文が有るのだから持たずとは言えないが、単一政党と構想されたはずが宣言にはなく、翌年政治を行わない結社だと近衛が方向転換したように、曖昧なものであった。

ている一方、都会に愚図愚図したインテリが層をなしているし、次に秀れたインテリの層がある、こういう連続層の全部に通ずる一つの言葉を考え出してくれる通訳者がほしいね。

三木 そういう共通の言葉を求める場合に、何時でもただ無難な誰も反対出来ない言葉、例えば大政翼賛、臣道実践というような言葉だけが出て来ているね。

谷川 どうしてそう言う言葉が持出されるかというその地盤が問題なんだね。

三木 良心的なインテリがそういう言葉を口にすることを躊躇するというのは、日本主義とか日本精神とかを商売にする人間が居つてそれを専売特許にしようとすることによるんだ、国民が皆それを持っているのに自分の専売特許にしようというのがいけないんだ。

谷川 然らばどうしてそういうものを存在せしめて

いるかという事の根拠なんだが、どうだろうか。

三木 それはやはり日本に於ける封建的残存ということになるね、そういう意味に於いて岸田さんが前に言つた自由主義のために戦うということの重要性が出て来るんだ。

豊島 そこに一つの、今日の自由主義が在来の自由主義と違うということを示す言葉が求められてるわけだね、これは解釈の言葉をはつきりさせればいいんだ。

岸田 言葉が非常に不正確なんだよ。

三木 共通の言葉を持たないんだね。

豊島 まあこれに共通の言葉が出て来れば大した文
化運動なんだよ。

三木 例えばナチを見てもその主義とする
ところはナチオナル・ゾチアリスムス
【Nationalsozialismus】なんだが、あれをドイツ主
義といったって誰もついて来ないね、ところが日

本で日本主義といっているのは、ドイツに於いてドイツ主義というのと同じでそれをナチの国民社会主義というように現代的に新たに規定しなければ本当の魅力は出て来ない、日本主義ということが何か特別のように考えられているんだからおかしいんで、そこに文化の欠陥があるんだね。

文化部の任務

宗教政策の重要性

豊島 日本主義ということが通用するのは日本文化の欠陥なんだ。

三木 それは主義ではあり得ないんだからね。

岸田 この間或会合で今の自由主義という言葉がない時代にその概念を日本では何という言葉で現していたかという問題が出たんですよ、僕等は無学

で判らなかつたが、尾佐竹猛¹さんがそれは誰とかの説によると「活然の氣」だと説明して居った人があると云つて居つたよ。(笑声) ちよつとおもしろいですね。

谷川 成程、おもしろいですね。

豊島 「活然主義」だね。(笑声)

岸田 日本の所謂封建時代の特に売れた政治家——これは各藩にいる者ですが、やはり善政と思われる政策の中には自由主義的なものがつたんですね。

谷川 そういうものを僕はヒューマニズムの精神と呼びたい。

岸田 裏表で出て来た思想だからね、しかし、自由主義に拘る必要もないし、まだ自由主義という言葉が悪い意味の日本語になっているんだから變つても異議ないね。

1 1880-1946、石川県生れ、司法官、歴史学者。

豊島 文化問題に關聯して日本の經濟界の富豪連中

に教養が足りないということも日本の欠陥ぢやないかね。

三木 それは政治家も同じで、だから通訳が要るんだ。

豊島 支那の紅卍字教を見ると大変なものだよ、三百万人の信者を持つているんだが、その母院を見ると百廿万円で大変な殿堂を作っているんだ、その中に道院というものがあつて

そこは本當の修養をする所だ、紅卍字教の會員は金持ち連中だから百廿万円の母院を建てるのに直ぐその費用が信者から集まつて來ているね、金持ち連中が支那ではそういう風に社会救済事業と同時に修道を大切にするのをちゃんとやつてゐるんだよ。

1 1916年中国山東省兵馬役人などが神託を仰ぐなどすることから始まり1921年宗教組織化（＝道院と呼ばれる）、翌年その下部に救済組織として作られた。

三木 日本の天理教だつてそういう点では大したものだよ。

豊島 しかし天理教では修道ということは薄くなるんだろう。

谷川 そんなことはないよ、それは天理教もあるよ。

三木 僕は天理教ではない、けれども紅卍字教位のこととは天理教にだつてあるね、満州あたりへ行つてもともかく本願寺やほかのところで出来ないことを天理教はやつてゐるようだよ。

岸田 ただしかし天理教にはエゲツない一面があるね、その点紅卍字教の方が立派だと思ふね。

三木 宗教の問題は現在の日本の文化政策でも一番重要な問題で是非手をつけなければならぬものだと思うね、併し大変な仕事だよ、文部省あたりの宗教政策にもいろいろ問題があるね。

豊島 文芸なんかは放つておいてもどうにでもなるし、それよりも宗教の問題が大切だと僕は思つて

いるんだが。

岸田 ウン、ウン

三木 文化部でやるべきことは特に教育、科学、宗教なんだ、それが現在一番大切なんだ。

谷川 それはそうですね、重点は其処なんで、総てがそれに関聯するからね、それは考えて居ります
が却々面倒なことですよ。

三木 科学よりも教育の方はもつと難しいね、それよりも宗教は更に難しい。

岸田 しかし強権というやつを使えば宗教が一番楽なんだ、恰度逆になるね。

そうなるとやはり難しいのは科学だね、その関係は却々面白いんですよ、しかし強権は用いても宗教はこの際やるべきだと思ふね、強権をよい意味で発動すればね、だから言葉は悪いかも知れんけれども宗教が一番病状が重く教育はそれより幾分軽い、治療が内科的な治療で済むとおもうが、宗

教は非常に大きな外科手術が必要ですね。

権限と使命

文化部の組織と運用

豊島 実際宗教は第一の問題だよ。

岸田 今度の戦争なんかで宗教家の無力さが齒痒くて仕様がななんだ、兵隊さんの戦死者を拝むことも重要だけれどもこれは一種の業務だからね。

三木 満州へ行つてみてもロシアの寺院と日本の寺院とは全然比較にならんね。

豊島 日本の国体そのものが宗教なんだからね。

三木 国体は宗教以上のものなんだ。

岸田 しかしその関係は話は違うけれども帝政時代のロシアがそういう関係だったんだがね、それでいて宗教はちゃんと活動しているんだ。

豊島 結局下つ端の所謂宗教屋が問題なんだし……

三木 それの問題であると同時に妙な哲学的宗教も問題なんだよ。

岸田 さつき神話というお話があつたけれどもこれはやはり宗教という形でなくて何かの形で生かしたいですね。

三木 つまり日本の国民協同体の中核であり結合原理ですよ、この結合原理は必要ですね。

豊島 無くするわけでなく本来に生かすということなんだ、ただ変に利用していると何をどうするかということの問題なんだ。

岸田 それはね、本当にその中にその思想が入って行けば大丈夫ですよ。

三木 我々インテリは臣道実践の模範であるという確信をもって大政翼賛会の中に第一線の土を送り込む、本隊は後ろに控えて居って一人や二人倒れたってよい。

岸田 その積もりで送り込まれたんだよ。(笑声)

記者 岸田さん、文化部はどういう組織でやってゆかれるのですか。

岸田 今のところ大体の大綱だけ決まった程度ですから実際に運営することとなれば変更する場合もあり得るし又元々この組織は官庁などと違うのですから時宜に応じて容易に改変出来るのですが、内部に部長副部長の下に事務局を置き、この事務局には総務班、調査班、企画班、連絡班、指導班、地方班、事務班の7班を置きます、外部からはそれぞれの専門家を糾合して専門委員会及び特別委員会を構成し、この両委員会の各代表者に依って綜合会議というのをやります。

専門委員会は科学・技術、文学・芸術、教育、厚生、宗教、弘報（新聞、雑誌、放送等）出版の七つの委員会、特別委員会は国語問題、児童文化、婦人問題、学生問題、生活文化、対外文化宣伝、東亜文化研究（地域文化研究、都市・農村・郷土）

の八つの委員会に分け、その委員には各種の学術、文化団体に於ける知能的な推進力というような意味での代表者——之が従来の団体の公式的な代表者や長老というのと実質的に異なる訳ですが、これに委嘱し、之等の委員によるそれぞれの委員会ではその専門の議題に付いて十分の討議検討をしたいと考えているんです。

そして総合会議に於いては既に各委員会に依つて討議を得て齎されたものを、決議という形ではなく意思を承るといった仕組みでやろうと思ひます、そして内部機構の外に各界の若いエキスパートに嘱託を委嘱し、部長と外部の総合会議との間にあつて多少責任ある仕事をして貰いたいと思ひています。

記者 文化部の権限はどういうことになりますか。

岸田 大政翼賛会そのものが元々民間の意思を纏めて之を上達し又上意の存するところを正しく国民

に知らせて国策に協力せしめるという点にある訳ですから、文化部も又広く文化に関する事に付いて官と民との間に立つて上意下達、下意上達することにその権限と使命がある訳です。

記者 具体的に発足する時期は何時頃になるんですか。

岸田 まだはつきりしませんが近く各方面の専門家に集まつて戴いて準備会を開き委員会の構成等についても十分諮つた上で愈々実現に移ることになる筈です。

豊島 岸田君も注意したまえ、一段落ついたら病氣と称して、チヨイチヨイ休むんだね、土曜日曜は定期的に風邪をひいたりして健康に注意するんだね。(完)

底本：『都新聞』1940.11.2～12「文芸欄」

【参考】「ラム大波小波」(1940.1.11)

一抹の淋しさ

昭和研究会の解散

▼新体制運動の進行過程でいろいろな団体が自発的、或いは他動的に解散されたのであった。昭和研究会という文化団体の解散もその一つと云えばそれまでだが、これはちと惜しい気がする、それというのが、他の団体は多く解散しても名のみの変更であって実体はそっくり保存されているのであるがこの会の場合にはほんとうに散つてしまったことである。

▼百数十人の現代日本の最もすぐれた学者実家が十余のグループに組織されていた。そしてその各グループが自由に内部で研究題目を決定し、研究方法を進めて行くという形式であった。何等特別の報酬を受けるのではなく、自分たちの研究会合自体に興味をもつての集まりであった。その会合研究の自然の結果が自らの一つの業績をなすシステムであつ

た。従つて会の性質は極めて純粹なものであったといふことが出来る。

▼それだけにまたこうした時代の荒波にぶつかると極めて弱いものとなる欠点もあつたのである。会全体としての結合力は弱く、会長後藤隆之助氏との結びつきも意外に稀薄であつたことが実証されたわけである。

▼だが一部の人々の嘲るように之をもつてインテリの同志的結合力の弱さなどに帰することは誤ちである。始めから同志組織でもなかつたのだし、後藤氏のやり方も全然そうした行き方ではなかつたのである。たしかにこの研究団体から一つの政治的団体へ転化する可能性が無かつたわけではない。翼賛運動の初期にはつきりとそうした方向を示して会全体を引っ張つて行く機会があり得たと思われるのであるが、その点は惜しまれる。会そのものがあまりに後藤氏の個人的なものであつた、従つて結局後藤氏個人の都合によつて解散されるに至つたことは当然で

あるが何か遺憾な気がするのである。

▼この夏以来昭和研究会に対するデマがしきりに飛ばされた。我々はこれら闇打ち的なデマを放つ方面の卑怯なやり方に義憤を感じかえって昭和研究会存在の時代的意義を感じたのであったが、遂に自発的な解散にいたったことは一抹の淋しさを感じしめるものがある。(X)

底本：『都新聞』1940.11.11

鼎談 満州国

石原純：1881～1947、東京出身、東京帝国大学理
科大学卒、理論物理学者、著述家。

岸田国士

三木 清

記者 最近「満州国は一大転換期に当面していると
観られるのですが、これは固より政治、経済、軍
事凡ゆる点で密接な聯関のもとにある日本の最大
な関心事でなければならぬと信ずるのです。そこ
で先ず最初に、多くの日本人が満州へ行つて政治・
行政に参与したり、或は開発・開拓事業その他に
従事しているが、そういう日本人の現下における
活躍、それから民族協和の実態などについて、お

氣付きの点から話を始めていただきたいと思います。
す。

三木 それでは私が話の緒をつける意味で先ず話し
ましょう。

満州も建国以来相当の年数が経つて、現在では日
本との関係が非常に密接になつて来ている。殊に
今度の欧州戦争後の世界の情勢に影響されて、経
済的な点から云つてもますます日本と密接な関係
になつて来ていると思うのです。そこで、現在満
州国が置かれてゐる状況というものは、いろいろ
な意味において日本と非常に類似していると思
うのです。ちょうど日本において改革とか、新体制
とかいうことが謂われていると同じように、満州
国においても、大きな転換が必要な時代になつて
いると思うのです。転換の必要なのは舊に日本ば
かりでなしに、満州国でもやはりその必要がある

1 1932.3.1 建国宣言から8年。

のではないか、と思うのですが、それは又、實際、現に満州にいる人で、建国当時から本当に満州国の生長発展の為に働いて来た人が痛感していることであるということは、いろいろな人に会って話を聞いてもわかる。そういうわけで、近頃の流行の言葉でいえば、要するに満州国にも新体制が必要であるという状態になっているのです。そういう意味において、満州国でも、日本の新体制というものがどういう風になつてゆくかということに非常に大きな関心を有っているわけなんです。

しかし、實際をいえば、新体制というものは、満州が日本に先き立つて始めたことなんで、満州国というものは、元来新体制でもつて肇まつたものなのです。その新体制で始まつた満州国が、今日の日本の新体制に興味を持つということは、一見おかしいようなことなんですが、実は先程言つたように、満州国にも大きな転換が必要であるという時

代になつていると思うのです。そしてまた日本において新体制ということを考える場合に、満州国で行われて来た是れまでの実験を能く検討して、それを生かしてゆくということも必要であろうと思う。

で、今後満州国の新体制というものがいつたいういう方向に嚮^{むか}わねばならぬかということについては、いろいろ意見もあるでしょうが、兎も角、満州建国の当時から働いて来た真面目な人々の間では、もう一度満州建国当時の氣持に還ることであるという意見が強いようです。つまり今日満州建国当時の精神というものが失われている、或は段々衰弱している。そこでもう一度建国当時の精神を復活させ、活発にするということが、満州国に新しい転換を与える道であるというようなことを言っている。そういうのが満州建国当時からいる人の意見である。

もう一つは、だいたい新しく満州国に働いている、つまり日本の官吏であつて新たに向うへ行つて満州国の官吏になつたという人の間では、日本の新体制と睨み合せてやろうというような、日本依存的ともいい得る氣持が割に濃厚ぢやないか、とこう思うのです。

そういう二つの潮流があるわけなんですが、われわれが視て来たところによつても、兎も角満州国に、今大きな轉換が必要になつて来ているということは、謂えるだろうと思ふのです。従つて、現在の満州国の問題というものは、決して唯満州国だけの問題ではなく、日本の問題でもあり、日本がどうやつてゆくか、ということ、満州国にも非常に大きな關係があるという事態になつてゐる——と私は思つてゐるのです。

記者 そういう点で、新しい段階に達したという氣運は相当あるわけなんですか？

三木

本当にそういうことを、満州国に行つてゐるすべての日本人が自覺してゐるかどうかということは、疑問であると思ふのです。これはもう少しそういう自覺を満州国においても起さなければならぬと思いますね。しかし、満州国で真面目にものを考えてゐる人は、兎に角現在大きな轉換が必要であるということを痛感してゐると思ふのです。その轉換というものは、要するに、建國当時の氣持に還ることだという風に一部の人は言つてゐるんです。

それからもう一つは、比較的新しく満州国に行つた官僚あたりでは、むしろ日本の新体制と睨み合せて、日本がどうやるかということによつて、それに調子を合わせてゆくかうところが、割に濃厚ぢやないか、という風に私は観てゐるのです。

記者 以前に満州にこつちから行つた人の氣分と、最近行く青年なんかの氣分が非常に違つてき

た——ということを聞くのですがね。建国当初は向うへ行つて大いに仕事をするという氣持をもつて行つたのですが、今は内地にいても仕様が無い、満州へでも行つてみようかというようなことでゆく。そういう点で開きはあるのですかね。

三木 その開きというものは相当あると思いますね。満州建国当時の人は、一種の理想主義的な氣持をもつていたわけですね。それから後の、出来上つたものゝ上に倚りかかつて働いている人との間に開きがあるのは自然のことだと思ひます。最近行く人は、建国当時のような理想主義というものをあまり持つていないだろうし、それにやはり日本の官僚なんかの持つているのと同じものを満州へ持つてゆくということになり易く、日本流の官僚主義というものが、最近満州のいろいろな処に露れて来たという風に、建国当時の人は感じているんじゃないかと思うのです。

われわれが満州を歩いてみて感ずることは、田舎には非常にいい人がある。これは建国当時からいて、本当に満州国の為めに、満人の為め、民衆の為めに、いわゆる王道楽土というものを創ろうというような氣持で働いている人なのです。ところが、中央辺りには、段々新しい人が殖えて来る。それから中央と地方との交流というものは次第に少くなつて、新京にいる人は新京ばかりで、つまり同じところでぐるぐると転任して上へ昇つてゆくというような傾向が相當に現れているようなことを言つておりますね。私は、それを調べたわけでないけれど、そういうことを話している人がある。官吏の転任ということが段々烈しくなつて——転任というのは、つまり榮転で、転任しなければ、出世できないわけです。しかも、その転任が中央にいる人は、中央だけで転任してゆく、という傾向が現れて来ている。これはもう日本に

もあることだと思うのですが、そういうことが可成り出て来ているんじゃないか。同じポストに居つて、何年も仕事をしてゆくというようなことが無くなつて来ておる。田舎にいる真面目な青年官吏なんかはそれを非常に残念に思つて、自分達は動きたくない、尠くとも三年は同じ位置に居つて仕事をしたい、というようなことを言つていますね。そういう人々は實際尊敬に値すると思うのです。新京辺りの官吏では一年位で段々變つてゆくということになる傾向ができておるんじゃないか。こう云うことは満州ばかりでなしに、日本においても大きな問題なんだろうと思うのです。日本の外交官なんというものもしょっちゅう變つてゐる。しかし外国ではそんなに變らないんですね。永い間同じ処にいて本当に其土地に親しみ、其土地の人間を識つてやつてゆくということにならねばなりませんね。

記者 やはり非科学的だったわけですね。多少……。(笑声)

石原 地方へ行くと、其処の満人なんかに密接に接しなければならぬ境遇にあるんでしょう。だけれど、新京なんかにいる人は、そういう人民に接しないんです。それはお役人に成つてゐる満人はあるから、そういう人には接してゐるけれど、同じ仲間だけであつて、そう民衆に直接にさほど接しないのぢやないか——と思うのですね。そういうような傾向があるでしょう。

記者 開発したり、統治したりする一つの方向に、可成りはつきりしないところがあるんじゃないんですか。そのために途中でもつてやつぱりそういう悪い結果ばかり強く出されてしまうという……。

石原 そうです。もう一つは、段々年数が経つといふと、いろいろなことに形式が出来てしまつてね。

いろいろな地方の人たちは、その処々の事情に応じたようにしたいのだけれど、一般に中央の形式的な命令が来るものだから、そいつがうまくゆかぬとか何とかいうことを云つていた人があるですがね。

記者 実際満人とタツチするのは地方のわけでしょう。新京にいてはあまり……。

三木 新京にいる官吏などではお役所で満人と一緒に仕事することはあつても、彼等と私的な交際をしている人はまことに少いでしょう。

石原 新京あたりでは住宅の場所だつて、割然と区別されているようで、こつちだけは満人の家、そこらは日本人の家——と分れているので、お互いに接することは殆んど無いわけですね。買い物にでも行つて接する位がせいぜいです。

三木 民族協和ということのためには、ただお役所でだけでなしに、日常生活においても交際ができ

て来るということではならぬんです。お互にお役所の仕事以外で交際するということが、新しい官吏層には足りないんじゃないかと思ひますね。

その一つの大きな原因は、例えば満語ですね、満語というのは実は北京官話なんで、つまり支那語なんです、それをもつと日本人が話せるようにならなければならぬ。すなわち語学をもう少しやらなければならぬのですが、そういう努力が足りないんじゃないですかね。日本語のほうはずいぶん満人に学ばせている。それは結構ですけど、日本人のほうでは、もう少し満語を学ぶということが必要である。実際に現に本当に満州国で仕事をしている人々は、満語が話せる人なので、それであれば、本当に大衆に接触して仕事ができないわけです。官庁においても、お互いに腹を割つて仕事をするには、それではできないわけ

です。そういう努力をもつとしなければならぬ
と思うのです。

記者 そういふ満語を習得したいという気運は、最
近官吏なんかにあるわけですか？

三木 それは古くから満州にいる人は大衆に接触し
ているし、満語なんか話せる人なのですが、最近
新しく行つた人にはそれが少ないようです。民族
協和といいながら日本人は日本人だけで交際して
いる。

石原 地方にいる人は大体満語が話せるようです
ね。又話す必要があるのでしょうか。だから、大概
の人は満語を知っている。新京辺りにいる人は殆
ど知らないでしょう。

三木 われわれなんかだつて、自分で恥かしい話で
すけれど、われわれはドイツや、フランスや、イ
ギリスへ行つたほうが、もっと自由に行動が出来
たんだらうと思うんです。というのは、多少でも

それらの外国語の素養があるわけです。ところが、
遺憾ながら満語、支那語を話せないために、われ
われは大衆に接触ができないんです。田舎辺りへ
でも何処へでもポンポン行つてみようと思つて
も、言葉ができないためにゆけないのですよ。そ
ういふ意味において満語を勉強するということは
必要だらうと思うのです。

岸田 日本人の外国語に対する觀念ですね、外国人
に日本語を教えればよいと云う考え方が、最近一
方で強まつて来ているようです。これは勿論、民
族的自尊心が云わせるのだと思うのですが、そう
云う精神は、軽んずべきでない事は云う迄もない。
然し、實際問題として我々は日本人の精神能力を
信用しさえすれば、外国人が百の日本語を知るよ
りも、我々が百の外国語を知っている方が、より
以上に、意志を疎通させられると思う。そういう
意味から云つても満州人に限らず、他の民族と接

触する上からは、少なくとも、その民族の言葉を知っていることは、絶対的要件だと思うのです。之は、その意味で一つの例になるかどうか、判りませんが、言葉の問題に関係があると思います。僕が、三河地方の白系露人の農村を見に行くときの事です。自分がロシア語をやらないので、通訳を伴って行くと思った。ハルビンでその事を人に頼みましたが、いろいろロシア人と接触しているうちに、通訳としては、日本人でロシア語の出来る人や、ロシア人で日本語の出来る人は、適当でないと感じました。結局少し無理な注文ですが、フランス語の出来るロシア人を伴れて行く事に決めました。この人のフランス語は、中々達者なものであったけれど、僕のおぼつかないフランス語でも、ロシア人の気持を正確に知る上には、間に日本語をはさむよりも、ずっと有効であったと信じているのです。

記者 官吏の再教育機関というようなものは無いのですか？

三木 再教育機関は、大同学院¹というものが在って、其処で官吏の再教育をしているのです。日本からゆく官吏は、だいたい一年間総べて官吏見習、試補みたいな形で大同学院で再教育されて、それから官吏になるわけです。

石原 彼処では、しかし、満語なんか教えないのぢやないですか。

三木 やっているだろうと思いますがね。しかし、それに力を入れているか、どうかは、分りません。

記者 政治教育が主なんですか？

三木 つまり満州国建国精神を把握するということが主な仕事になっているようですね。

記者 民族協和に含まれる民族の指導方針について

1 三木も行つてここで講義をしている。

て、最近の協和会の方針なんかどうですか？

三木 日本民族が他の民族を指導するということがあつて、その点において問題はないと思いますね。指導する本当の実力を日本人が造る——ということが問題なんだと思います。日本人は、だいたい民族的偏見が少いのです。新京の公園辺りへ行つても、日本人も、満人も、朝鮮人もみんな一緒に遊んでいるのですよ。イギリス人なんか、「支那人と犬とは入る可らず」——というような立札を立てた、というようなことは、日本人にはできないんですね。これは非常にいいところだと思ふのです。日本人のいいところなだけけど、今度、は外国人にたいする本当の実力による威厳ですね。威厳というものを有っているか、どうかとい

1 1932.7.25に石原莞爾等によつてつくられた「満州国協和会」で、政治活動を封じ込められた「満州国」に於ける唯一の政治「組織」といえるものとして一時在った。大政翼賛会の先例。

うことになる、これはもう少し考えなければならぬと思ふのです。異民族にたいする偏見はなく、つまり良い心構えを有っているのだけれど、それにこの実力による權威というものがなければならぬのです。ところが、その代りに只の武力になつて了つたら困ると思ふのです。だから結局問題は、自分が本当に実力を創る。東亜の指導者になるべき実力を持つということなんだね。その指導者になるべき資格、条件として、どういうものを具えなければならぬかということについては、もつとよく反省して、そういうものを養成することなんだろうと思ふのです。

記者 科学者の立場から、日本の科学というものは、現在どの程度になつてゐるんですか。満州のいろいろな開発事業などにはたらき掛けてゐる日本の科学の力ですが……。

石原 それはある程度でございましょう。科学におい

てはかなりな点まで指導できるわけです。唯しかし実際に仕事をするのに、さつきも言ったように、機械なんかで日本で出来ないやつがあるんでね。それが困るですよ。そういうものが無いようにする迄に日本の科学と技術とが発達しなければいけません。現在は他処の例えばドイツ辺りから機械が来なくなったら仕事ができん——というような有様なんだから、何と云ったって、いろいろな仕事は結局できないことになるのですからね。

記者 満州国の文化政策一般に対してはどうですか？これから新しく文化を創るわけですからね。今まア芸術方面においては「文話会」なんかの運動があるし、満映のような大規模な国家経営のものもある。また大陸科学院だとか、建国大学というものも設けられていますかね。そういう文化教育という点ではどうですか。

石原 建国大学のことは知らないですがね。大陸

科学院なんかはいろいろな仕事をやっているのです。満州に関係したようなもののいろいろな研究もやっているわけです。そういうものももう少し進んでゆけばいいと思うのです。彼処には相当いい研究者が行っていますから……。

岸田 それは文化政策と密接な関係があると思いますが、新しく満州国の民政部の中に、文化科という部門が出来たようです。これは厚生司の一分科で、つまり、私の知る限りでは、主として文学、芸術の統制が仕事のように思われました。この仕事のひとつとして、例の「文話会」の改組が最近行われ、満州国の文学、芸術に携わる職能人の組織的一元化が、形の上では非常に行われたようです。大連、奉天、新京、ハルビンの四ヶ所で、僕はそれぞれこの会の支部の人々に会いました。そして、いろいろ活躍の様子をききましたが、要するに、文学、芸術の各部門の横の連絡と云う事

が、極めて自然に行われる状態を見て羨しく思いました。

各職能団体としての独立した組織がなかったところだけに、その結成も容易だったとは思われるけれども、又、それだけに将来この組織の運用にもいろいろむつかしい所があると思いますが、兎も角、文学、芸術の畑だけでも、それぞれ孤立した形で存在しないで、共同の目標に向つて、お互いに力を合わせて行く、と云う行き方は、理想的なのではないか、と思ひましたね。

記者 日本で今科学者がお互いの領域でもつて、今までのセクト的な傾向を排して一元化しようという方向に來た、と思うのですけれど今のお話の様にその点満州国なんかはやりいいんぢやないですか、これからやるわけでしょうから……。

石原 そうです。

記者 そういう点は、どうなんですか、新しい科学

的精神の摂り入れ方というものは？

三木 問題は日本と同じですよ。そう日本と変らないと思うのです。満州国は、新しい開発のために技術者が非常に必要なですね。それでそういう技術者養成ということが大きな問題になつて、鉦工技術員協会というものが在つて、技術員を養成しているのです。これは下級技術者といひますか、大学出の技術者というようなものでなしに、もつと下級の技術者を養成する——そういうことが必要でやつてゐるのです。開拓移民のほうは非常に喧ましく云つて、日本に宣伝されているのですが、そういう技術者の必要なことは、それほど宣伝されてゐないと思ひますね。向うで鉦工技術員協会の座談会があつたときに、開拓移民のほうに押されて、技術員の必要ということが、一般に宣伝が足りないんぢやないか——ということを私は言つたのですけれど、現業に本当に従事する人間が必

要になつてゐるのですな。

記者 現地養成はできないわけですか。

三木 現地で養成もやつてゐるわけです。内地でも秋田とか、九州辺りで、高等小学校出位のものを養成してゐるのですが、唯そういう養成において、これはまア開拓移民の場合でも同じことだらうと思ひますが、もう少し科学的技術的知識というものに重きをおかなければいけない。訓練ということが、一種の精神主義、觀念主義に流れて、そういうほうばかりの訓練になつて、實際の学問的な技術的な教育ということが足りないんじゃないか——と私は思うのです。これは農業移民の場合にも謂えるでしょうが、殊に技術者の場合に、精神主義というようなことにならずに、もつと技術とか科学とかいうものを深く教えてゆくことが必要だと思ふ。これは日本の現在の教育全般についても謂えることだと思ふのですが、要するに、

學問尊重ということの觀念が、もつと強くなつてこななければいけないと思ふのです。というのは、何といつても、現在日本が東亞において優越してゐるということは、日本の文化がほかの諸民族よりも先へ進んでゐることに依るのです。それによつて日本が現在の位置を保つてゐるのだから、そういうことをよく考へて、今後もその点において大いに進歩し、向上してゆくということを考へなければならぬ。日本民族の優越性ということをとただ觀念的に考へるのではないと思ふのです。

石原 そういうことまでは、余り深く教へちゃいかぬ——という説もあるのです。之は反語のようですがね。(笑声)

記者 満人自身もそういう風な意味で教育されてゐるのですか？ そういう方向に導かれるようになってゐるのですか？

三木 大体満州国の学校の精神から言えば、日本の

中学にあたる向うの国民高等学校などの教育方針というものは、実業教育を重んじているのです。

すなわち農業を主とする国民高等学校、商業を主とする国民高等学校、工業を主とする国民高等学校というように分れているんですね。それは私は非常にいいと思うのですが、ただ日本と同じ様にそういう実業的なことをやるということを軽んじて、すぐサラリーマンになりたがるという傾向が満人にも多いようです。だから農業学校を出たって百姓するということを考えないで、どつか口があれば、サラリーマンになるというような風ですね。

記者 彼処には伝統的な文化というものは全然無いわけですか？

三木 伝統的文化というのは、吉林辺りは相当古

い町ですね。ずっと前から云えば、渤海国時代の文化があり、東京城¹辺りはそれだし、それから輯安に高句麗文化の遺跡²があるのです。だから古い文化は在るわけです。しかし、現在生きている文化としては、やはり新しいでしょう。だいたい清朝時代に山東辺りの人間がどんどん満州へ入って来て出来たんで、殊にハルビンから以北の方へゆけば、まだせいぜい五〇年位しか経っていないんじゃないですか。

岸田 満州でも、満州文学とか満州文化とかが、一時論議されたようですが、僕は如何に統制ばやりの現代でもああ云う形で、異民族がそれぞれの生活の根を下ろしている所では、早急に統一された文化が生れる筈はないので、満州に於ける満州人の文化、ロシア人の文化、或は日本人の文化と云

¹ 黒龍江省寧安県渤海鎮東京城に上京龍泉府と呼ばれる首都があった。

² 吉林省集安市にある都城遺跡群

うものが、それぞれの特色を持つて並立し、而も

そこに満州という土地と、政治形態とに應じる共通性があれば、その方が却つて満州と云う国の面白さになるのではないかと思うのです。お互の文化が、相互に相手をいためつけ合うと云う現象に

対して寧ろ為政者は注意すべきであろうと思うんです。

記者 満州国の国定教科書¹というものは、あれは満人を対象としているんですか？

石原 満人相手のものもあるし、朝鮮人相手のものもあるし、それからロシア人もあるし、蒙古人もあるでしょう。

記者 それぞれの国語で拵えたわけですか？

石原 そうです。

記者 内容は同じなんですか？

石原 内容も多少違うでしょう。各々程度が違います。

1 石原・三木はこの件で渡満してきた所、後記。

すからね。

記者 学校は同じなんですか、満人もロシア人も……。

石原 別になっています。例えばロシア人にはロシア人だけの学校があるというように。

記者 義務教育制みたいなものにする積りなんですか、そうじゃないんですか？

石原 そいつはどうですか。義務教育とまでは行っていないでしょうね。

三木 現在三十四五パーセントじゃないんですか。それを七十パーセントにまで上げようというのが、今の満州国の教育の十ヶ年計画というものらしいですよ。兎も角修学心というものは相当盛んならしいので、学校は足りないようです。

石原 交通の不便な処から来ている生徒なんというものは、夏休みに帰省したりなんかすると、水が出たりして、学校が始まってもまだ来られない。

一ヶ月も後れて来るといふものがいくらかもあるらしい。それで交通が途絶えて来られなくなつてしまふ。

記者 その教育方針なんかでも、徒らに偏狭な日本的な方針が執られている嫌いはないんですか？

石原 さアそれはどうですか……。ただ日本語を覚えさせるということは、非常に骨折つてやっていますがね。そのほかにさほど偏狭であるとは思へられません。

記者 やはりロシア人にたいする指導と、満人にたいするのとは違ふでしょうね。

三木 違ふでしょう。

記者 白系露人の第二世は、相当適齡期に達しておるでしょうが、新しい満州国に対する信頼の念が違つて来たというようなことはないんですか？

三木 白系露人の青年というものは、だいたい駄目だということです。

記者 駄目ですか。

三木 というのは、親たちは兎も角、ロシア革命にたいして反革命の立場に立つて闘つて来て、いろいろ苦労しているわけです。その子供たちは親たちが逃げ廻つてゐる間に育つて来たものだから、従つて彼等青年は完全な教育を受けていないのです。しかも親たちはソビエトに対して敵愾心を有つてゐるけれども、子供たちはそんなものは有つていないというわけで、駄目なんでしょう。だからむしろもつと小さい、今の小学校辺りで教育されている連中がこれから問題だということです。

石原 ロシア人は、しかし、大体に生活が苦しいでしょう。それだからその方で困つてゐるらしい。

三木 尤もロシア人でも農民はそうではありません。苦しいのは、ハルビン辺りにゐる人間なんです。

石原 ハルビン辺りはずいぶんいるでしょう。

三木 ロシア人の乞食も多いですな。

石原 ハルビンへ行くと、自動車の運転手というものは、大体ロシア人ですね。

記者 (三木氏に) 協和会の大会に傍聴なすつたのですか？

三木 えゝ。

記者 あゝ、いう一種の下意上達の機関みたいなものに、翼賛会をしなくちゃならぬ——ということはどうですか？

三木 さア満州には議会が無いんですから。日本では兎も角憲法によつて議会が在るのですから、これは大分違うでしょうね。

記者 協和会では、会員が積極的に発言しているわけでしょう。

三木 満州ではそういうものになっているけれど、日本では議会というものが別にあるんですから、

そこに問題がありますね。議会と大政翼賛会というものとの関係がどうなるか。大政翼賛会だつて、下意上達の機関になるためには、下部組織のことを考えなければならない。ところが、上ばかりの組織が出来て来る傾向がありますね。下までの組織を考えないで上の組織を考えると、頭だけ出来ても手足が揃わないことになる。

(話題を換えて) まアわれわれが満州に働いている日本人に希望したいのは、徒に日本の真似をしないことだと思ふな。つまり満州は新体制を日本より先にやつたんだという本当の自覚を有つてやつて貰いたいと思ふのですよ。どうも最近の満州国において遺憾に思ふのは、建国当時の人は自分たちのやることに自信を有つていたと思ふのですが、最近ではそれがなくなつて日本の方ばかり見ている傾向がありはしないか。日本でどんなことをやっているだろうとか、自分たちは日本に後

れやしないだろうかというような、そういうことばかり考えているのではないと思うのです。だいたい日本の中にもそういう処があるようだ。つまり地処ばかり見ている。外国で何をやっているだろうかということばかり考えて、本当に自分で自信をもつてやることできないんです。外国文明の輸入ということだつて、本当に自分に自信をもつて必要なものを撰つてくるというなら非常にいいことだ。ところが、そうでなしに、何を向うでやっているかということばかり気にしていは駄目だ。それと同じように満州国と日本の関係だつて、日本は何をやっているかということばかり気にしていは駄目だ。そこで建国当時の精神に還れというのも意味があるので、自分たちは、尠くとも新体制では日本より先だ、満州国は東亜新秩序の先駆者である——という自信をもつてやる。そういうことを希望したいのです。ところが、

最近往く人には、そういうところが少くなつて来ていはしないか。つまり日本人が外国を気にするのと同じ様に、日本の事を気にするというようなところが多いんじゃないんですか。

石原 それはしかし、経済的には日本に依存しているのだから、そういうことは難しいんじゃないですか……。

三木 依存し過ぎてはいけませんね。満州国においても、重工業と共に、生活に必要な産業の発達に意を用いてゆくことが必要ですね。

石原 本当に満州国固有の産業は農業ばかりですからね。

三木 それで最近重農主義ということが叫ばれていきますね。

記者 それは対ソ関係などで急速に工業化の必要もあつたわけですね。

三木 広義国防という見地からは、重工業も生活

必需品産業も計画的にやらなくちゃならぬのですが、それには現在の段階に即したやり方をしなければなりませんね。地についたことをやらなければ……。

石原 機械なんか日本で拵えなければ駄目ですね。

三木 尠くとも日本の需要に応ずるだけだね。

石原 今は資本主義を超越しているのだから、利益にならないでも国家に必要なものはどんどん造って貰いたいのです。

三木 兎も角、私は、観念的なことを云つても仕様がないと思うのです。現実を認識して、それを正直に視て、その最大能力を如何に發揮すべきかということを考えてゆかなければならないと思うのです。科学振興ということがこの頃流行語になつてしまつて、来年の春になると通俗科学書が氾濫するらしいが、それで科学が振興するかといえばそんなものでない。そんなに簡単にできるものでな

い。ドイツなんかだつて、現在の科学はすべてナチが創つたんでない。永い間に創つていたものをナチが利用したに過ぎないともいえるのです。日本はもう少し地道にゆかなければいけない。

石原 科学振興なんといつたつて、そう一年や、二年でできやしない。何十年と経たなければ出来てゆくものではないんですからね。

三木 何しろおつちよこちよいでは困る。科学振興というと、皆んながわあつとゆく。本当の科学振興のためには何をしていいかわからないで、ただ、わあつとゆくだけだ。もう少しこつこつやつてゆくようにしなければ駄目だと思うな。近衛首相が、新体制とは何か？己れ己れの職域において自分の分を盡すことだと云われたが、それでなければならぬ。自分の遣るべきことを忘れて、他人のこゝとばかり喧しく云つて、流行のテーマをみんなを追つかけ廻しては仕様が無いと思いますね。

石原 科学教育は進んでいるのです。進んでいるけ

れど、まだまだ足りないということなんだ。全体としてはそれは進んでいますかね。しかし、機械なんか、あるものは出来てもあるものは出来ないというものがあるから、そういうものを無くする程度にならなければ駄目です。どんなものでも手数さえ掛ければ出来る——という程度になつておれば、それは困りやしない。重工業にしたつてそういう風になれば困りやしない。そういう点でまだまだ全体が並行して進んでいないのです。

三木 それは無理もないんです。日本は非常に短い間にやつて来たんですからね。そういう点は無理もないんだけど、しかし、自分たちの足りないところを本当に自覚してやらなければならないと思うのです。何んでも日本は世界一だということよなことを云つて、自己反省を忘れて、何が足りないかということをも本当に真面目に考えなくなるこ

とが一番危険だと思うのです。足りないことは、これは急速に日本が進歩して来たんだからむしろ当然です。

石原 しかし、そういう非常な精密な機械なんというものは、それを拵えようたつて、今日では儲からなければ造らないというので、そういうものの研究が全然無いのです。それがいけないのです。これは政府が当然ウンと金を出して研究させておくべきであつたけれども、そういうことを絶対やらなかつた。ただ資本家に委しておつた。資本家はそんなことはやりやしない、儲からないから……。彼等は外国の特許権を買つて来て真似をしている程度ですね。そういうことに今日気が付いて、これからやることになるのでしょうか、それも併し、一年や二年で出来るものでないのですよ。従来何故そういうことに気が付かなかつたということとは、そいつは問題ですけれど……。

記者 日本と比較して満州のいい面はどういうところですか？

三木 いい面というのは、兎も角満州には、いい意味における理想主義者——ヴィジョンを有った人間がいるということです。これも段々少くなっているかも知れないけれど、ヴィジョンを有っていることは好いことです。

石原 これも地方にいるような人に多いと思います。地方には何かしらやろうという気構えを有っている人がある。人に接するとその気分が見えて非常にいいですね。

三木 だから、そういう人間をニヒリズムに——もう何をやったって駄目だというようなニヒリズムに陥らせないことが必要だと思いますね。

記者 日本も新体制でヴィジョンがどの位まで生かされますかね。

三木 新体制というものが本当のヴィジョンを有つ

て欲しいと思うのだ。ヴィジョンの無い官製組織になることが心配だな。新体制は、如何なるために何をやるのだということをハッキリ国民に知らなければいけない。組織だけが出来てゆくのでは仕様がないますからね。本当に国民にヴィジョンを有たせるような新体制でなければならぬ。

岸田 つまり、新体制は一つの日本の含みを持った国民運動で、いろいろの対立した政治的立場と云うものが、実際はそれ程違ったものでない結論を引出す論理的過程だと僕は理解しているのです。だから、その論理が正確に進められて行くに従って、日本の理想と云うものが、一つの国民的表現を持つて来る訳で、つまりヴィジョンが、段々国民の一人一人の目にはつきりうつつて来るのぢやないか、と考えるのですよ。

記者 石原さん、向うのいい面というようなことについて？

石原 そうですね。中に非常に真面目な人がいるというところが一番頼もしく思います。極く小さな事柄のようだけれど、私が扎蘭屯¹という処へ行つた

ときに、其処の町から三里程離れた山の上に小さな農学校があるのですよ。其処は山に取り囲まれて、見渡す限り何も無い、その小さな建物がチョビッと在るだけで全然その外には家なんかない。そういう処で日本人の教師が二人蒙古人の生徒を教えているのです。蒙古人の生徒が、十九人とか云っていました。兎も角それに農業をやらせているのですよ。真ッ黒な顔をして出て来て、そうして、「かういう処へ来てやつてゐるのは、実に愉快だ」——といってね、全然何も無い処ですが、実際に農業の実習をやらせて、牛なんか飼つたりしてコツコツやつてゐるのですよ。本当に昔の寺小屋みたいなもので、ところが、そういう仕事か

1 現・内モンゴル自治区ジャラント市。

実に愉快で堪らんといつてゐる。そういう人たちを見ると、實際感心するですね。

三木 満州国にそういう人がいるということは、それは強味ですね。そういう人たちの希望を失わせないようにしてゆくということが、満州国の政治の任務です。

石原 十分にこういう人たちを認めてやらなくちゃならぬですね。それがどうも問題です。其処の学校なんか幸いに学校の用地が非常に広く取つてゐるのです。それだけの処を十九人の生徒だけでは出来ないからして、まだこれしか開拓してゐないとか言つていましたがね。作物が造つてゐるのは極く一部分で、全体を拓いてゆくには中々大変だ——といつていました。しかし、それをコツコツやつてゐる。そういう人は、最初はかういう処へ来て、どうしていいかわからんと思つたけれど、暫くいると、其処にゐることが愉快だ、町な

んかへ出てゆきたくない——というのですよ。

岸田 満州国のいい面、悪い面と云う事は、誰だつて一通り気付くでしょうし、又、それを云うことは容易ですが、僕一箇の考えでは、仮りに、悪い点が非常に目立つとしても、それを知っていると云う事が大事なので、それがあると云う事は、当然なのだと思うのです。当然だと云うのは、まだあれだけの事件が起つてから。たつた七・八年経つたにすぎないのだから、そう云う処がなければ、之は奇蹟以上で、僕などは、正直云つて、現在の満州国の姿はいろいろの点から見ても、此処迄来たと思つてゐる位ですよ。中には、すべての方面が、若い者の支配下にあつて、それが危つかしい様に云う者もあるけれど、そんな事は絶対にないと思ふし、それより寧ろその若い者たちが、年寄りを取りになつてくれなければいいかと思うのです。

記者 娯樂施設なんかも足りないようですね。

石原 えゝ、足りないですね。

岸田 それは實際考えねばならぬ問題で、元來娯樂施設と云うのは、やつぱり、それが求められる処に出来るのだと、僕は思うのです。日本人は満州へ行つてゐる人許りでなく内地でさえも、自分たちの本當に求める娯樂が何かと云うことを知らないようですね。従つてそこに愚劣な商業主義の乗ずる隙間があるんです。その娯樂を求める事は、決して自分の生活の外に求めるのは自然ではないのだ。生活そのものの中に、仕事と娯樂の要素とを持つてゐる事が、一番健全な生活なので、そう云う点の訓練が、今非常に我々には欠けているんじゃないか、と考えるんです。喫茶店がなければ、各自が集會所をつくれればいいのだけれども、そういう要求が、現実の問題として起きて来ない。之は財政的に余裕がない事とは全く關係のない事だと思ふんですが……

三木 その点は、まア日本人の一つの欠点でしょう

ね。新京辺りへ行つたつて、氣持好くお茶が喫める処はないのだから。ハルビン辺りへ行つても、氣持好くお茶が喫める処はロシア人が経営している喫茶店ですね。だから日本人も其処へ行く。金は自然其処へ落ちてしまう。店でも、満人の店へ段々日本人が往くようになって、金は満人の店へ落ちて、日本人の店の経営は段々苦しくなるといふ傾向がありませんか。これは満州事変以前に見られたことだが、その失敗を繰り返す危険がある。

石原 すべて日本人の店というのは、日本人しかお客にしていらないのですからね。そういうことは非常に問題ですよ。

三木 満人の店へは、日本人も往けば満人もゆく。

石原 ところが、満人のほうが遙かに人口が多いでしょう。だから、満人を顧客にするように商売だつて経営しなければ合理的でないですよ。日本人ば

かり相手にしてやっているのだから、無暗に高い金を取る。物の値段ばかり高くなつてしまつて、その高くなるということが、また満人に影響して満人がそれについて非常に不平を言うわけでしょう。経済的には向うの人のほうが強みを有つているですね。

記者 土着資本なんか相当動員されているのですか？

三木 それを如何に動員するかということが大きな問題です。あの彩票「#宝くじ」ですね。彩票でやろうとしているわけです。がそれだけでは本當の大きな資本は出て来ない。それでハルビン辺りでは、満人の取引所を造っているが、これも土着資本を動員しようという一つの施設でしょう。兎も角土着資本を動員しなければ満州国は發展しない。日本から金を持つて行つて、無限に注ぎ込んで満州国を開発するということはできないのだから

ら、どうしたって土着資本を吸収しなければならぬ。殊にハルビン辺りの満人の有っている資本というものは大へんだね。

記者 満州国が質においても、形においても強靱になるには、満州国文化というのが、健全に発達していかねければならない——ということが謂われるわけでしょう。そういう場合に、先生なんかの有つていらつしやる満州国の文化の今後の方向ですね。

三木 要するに、日本文化と大陸文化との綜合というものが、彼処に新しく出来ればよいのだと思いますね。

記者 大陸文化という場合は、専ら……。

三木 差当つて支那文化だけれど、それがもっているような大陸性を、本当に日本文化が有つことによって発展するという方向をとらないで、唯日本文化を彼処へそのまま持つてゆかうというのは、

危険ですね。——危険というか、生長の見込みは少いと思いますね。

石原 向うへ行っている日本人が、内地的生活そのままやっているのですからね。これは大いに問題です。

記者 生活様式まで本当はこつちを向う化してゆかなければいけない。

石原 向う化さなくても、兎も角氣候や、風土がまるで違ふのですからね。それに適当した生活を工夫してゆかなければ嘘だと思うのです。内地の生活に向うへ行つてそのままやろうというのは無理なんです。最初は慣れないから仕方がないとしても、少し年数が経つたら考えて、満人の生活のいい所を採り入れるとか何とかして、其処の土地に適應した生活を創めてゆかなければならんのですね。

岸田 僕は実はそう云う問題に、一番重点をおい

て、今度満州を見て来た訳ですが、そのために、主としてハルビンで、ロシア人や、日本人、満州人の生活法と云うものを、少し比較して見たんです。一口に云えば、日本人は自分の生活を余りに大事にしていることが、すぐ判った。第一このままでは能率に関係すると思つたのです。次には、久しい年月が経過する間に殆ど例外なく健康を損うだろうと思ひましたし、第三には之では国民の品位が保てまいと云う気がしました。勿論特殊な例外もあり、ハルビンだけの話でもないのですが……。生活を快適にすると云うことの第一条件は、生活法を合理的に先ず工失する事にあるのだとしてみじみ思つたのです。

三木 満州里の小学校の先生が言つたのですけれど、満州里の日本人の子供は能力が割に低い。どうしてかという、其処に居る日本人の女が土地に適應した生活をしないから、又、子供にさせな

いからぢやないかといつておつたけれど、それはそういうことがあるかも知れないね。ロシア人の女は、頭に風呂敷みたいなものを被つてゐるね。あれは寒さを防ぐために必要なんです。しかし、日本人の女は出る時は何も被らずに出るのです。

石原 寒くなると、日本人の女やなんか殆ど外へ出ないというのですよ。それだから、みんな健康を悪くする。家の中ばかりに閉じ籠っている。家の中は窓の縁をすっかり目張りしてしまつて、殆ど換気が無いでしょう。そういう処にばかり閉じ籠っているから、自然呼吸器を悪くする。向うの人はいくら寒い時だつてある時間だけは外を歩く。殊にロシア人なんかそれを非常に規則正しくやつてゐるのですね。そういうことが是非必要なんだけれど、それをやらんからして、一年にならぬ間に必ず呼吸器を悪くしてしまふ。齊齊哈爾^{チチハル}へ行つた時に、彼処の視学官が話していました。

小学校の教員が家族を呼ぶと、家族が必ず病氣を出す。自分なぞは、近頃は毎月どっかへ香奠を出す位にまでなっている。それはね、やはり来たばかりの人には解らんけれど、其処の土地に少しいる人の話を聞けば解るのですから、そういうことは力めてやらなくちゃいけないと思うのですが、それをやらない。

三木 それは移民村なんかについても謂えるでしょうね。満州移民は、二十ヶ年間に百万戸を入れるということをやっているのですが、現在入植している日本人の繁殖率ということが大きな問題だと思ふのです。そういうことを研究したものがあるかということを読いたら、無いらしいのだ。最近厚生省の、その方面の人が行つて、そういうことをやはり問題にして、ちやうど、私が樺林へ行つた時に、民生部からその調査に行つていた人に会つたのですよ。調査はまだ二、三ヶ村やつただ

けのようです。子供は割に生れるらしいのです。しかし、死亡率が非常に高い。これは衛生設備のこともあるかも知れないけれど、土地に適応する生活法というものを考えないからぢやないか、と思ふのです。医療施設ということが、開拓村で大きな問題になつてゐるけれど、日本内地の農民で病院へ行つたり、医者にかかったりするものはあまりいませんよ。そう考えれば、やはり開拓移民としても、医療設備はこれはもちろん結構だけれど、それと共に必要なことは、土地に適応した生活方法を工夫してゆくことであらうと思ふのです。

それから問題は、殊に女の服装でしょう。男は洋服を着てやつてゐるけれど、女の服装ですね。モンペを穿いてやつてゐる者もあるが、男の洋服を着てやつてゐる者もありますね。しかし、これとても美的感覚から云つてどうかと思われる。何

か新しいものを工夫しなければならんでしょう。

これは大分問題になっているらしいよ。

記者 満州は地方へ行つても皆んな協和会服を着ていますか？

三木 これは非常に普及している。これは第一経済的理由から来ておるのだね。洋服ならば一着その当時百円近くしていた。ところが、協和会服なら三四十円で出来た。それを着れば経済的である——ということから非常に流行したのだね。そういうところから普及したけれど、現在は協和会服も非常に高くなつて来ているわけなんです。この協和会服にしたということは、ある意味では劃一主義の悪いところもあるけれど、同時にいい所は、満人でも、日本人でも、朝鮮人でも、協和会服を着ると一様に見えるということです。実際協和会服を着ると、われわれには満州の田舎などにいる日本人と、満人とが容易に区別できない。

そういうことは、つまり民族融和という点において功績があつたんじゃないか、と思う。

記者 女にも協和会服みたいなものを作るといいですね。

三木 女でも、協和会服に類したものを着ているものもあるけれど、これはみつともないから、もう少し変えなければいけない。もう少し美的にしなければならんね。

記者 満州国を視察していらつして、日本の新体制の、科学教育について結論を云つていただきたいと思ひますが…。

石原 満州なんかでは科学教育をウンとやれば非常に違ひですね。農業なんかにしても、殆ど普通の人たちには化学肥料の知識などまるでないでしょう。だからちよつと化学肥料を使えば、今の農産物なんかすぐ倍位になつちやうのですね。それが全然無い。今までの在り来りのことばかりやつ

ていてね。帰りがけに私は熱河の方へ行つては見ましたけれど、あっちなんか実に酷いですね。土地が痩せてしまつて、作物なんか作つてはいるけれど、碌に伸びてもいない。それというのは、昔樹が在つたのを皆んな伐つてしまつたでしょう。昔は匪賊の關係なんかもあつたそうですが、ともかく樹を伐つて全然無いんですから、雨が降ると、水が一時に出て上の、つまり良い土を皆んな流してしまつて、下の痩せた土地ばかりになつてしまつている。その地方へ行くと、山のずつと向うのほうから、ボカンと水でもつて深く掘られてしまつてゐる。そういうのが到る処あります。非常に深くて、どの位ありますかね、何十米ありましようかね。そういう深さに掘れてしまつて、其処へ水が流れている。そうして上の土を流してしまふ。そういう風な土地になつてしまつてゐるの

ですから、だからそこらの人が云つていましたけれど、百姓なんか、今年は此処へ作つても、来年は同じ場所では出来ないから、どつか別に空地を見付けて其処へ作る。それだから農産物だつて殆どいくらも獲れないでしょう。そういうことを少し改良して、肥料なんかやつて土地を肥せば非常な違いです。

記者 農事試験場なんかずつと在るのですか？

石原 それは在りますね、そういう処では研究してゐるのだらうけれど、一般人民にまるで知識が無いのだから話になりません。それは一つは土地が広いから、此処で出来なければ、こちらで作る——ということができるといふこともあるんです。

記者 ではこの辺で……。どうもありがとう存じました。

【参考】1940.7.27 読売新聞記事

満州国教科書の監修に、石原・三木両氏渡満

満州国民生部では従来の不完全な中等学校教科書を増補修正し国情に適合したものたらしむべく今回教育司長田村敏雄氏より左記五氏に夫々担当部門を決めて委嘱するところがあった。石原純（理学）三木清（国民道德）小倉金之助（数学）山本有三（文学）恒藤恭（法学）このうち石原氏は既に新京にあり三木氏は八月五日出発、他の三氏は日本にあつて満州国より送られたテキストを点検する筈である。

検討会 国民性の改造

橋樑しりせき：1881～1946、大分県出身、ジャーナリスト、

中国研究者、中国に渡り実地に中国を研究し、満州国を夢見た一人。

三木清

永田清

小松清：1901～1962、兵庫県出身、評論家、フラ

ンス文学者、ジード、マルローなどの訳本を出版、戦中はベトナムで独立運動に参加。

津久井龍雄

菅井準一

十月七日 於嵯峨野

記者 ちょっと御挨拶を申し上げます。今日はお忙し

いところ有難うございました。

兎に角、こういう時局になり、歴史的転換も必然

と考えられますし、この際に当って、一応国民性の反省から、更に進んで、今後の日本歴史の志向に相応するような国民性の改造といったことが、非常に重大であり、且つまた、その真箇の国民性の改造なしには、あらゆる施策も殆ど行われないのではないかと考えますので、今日はその点について、国民性の改造というテーマで、いろいろ御意見を伺いたいと思います。

この前本誌の六月号で、三木さんがお書きになりましたから、三木さんから先ずお話し下さいませんか。〔#「国民性の改造」三木全集第十五巻収録〕

三木 この春支那に行つて、支那を見て感じたこと、それに関連して、国民性の改造ということについてちよつと書いたんです。今度また満州に二ヶ月ばかり行つて、いろいろ見て来て感じたことも、根本に遡ると、やはり国民性の改造ということになつて来ると思う。支那や満州に行つて見ると、

日本の現在やっている仕事が多きな仕事であるか、同時にまた、それがどんなに困難な仕事であるかということがつくづく感ぜられるので、この仕事をやって行くためには、日本があらゆる方面に於いて、確りしなければならぬが、現在日本人のいろいろな活動を見て、その根柢に、いつもその国民性という問題が含まれている。それは殊に、大陸という違つた環境におかれるとはつきり出て来る問題であるが、翻つて国内を考えて見ても、やはり同じことが問題であるのではないかと思う。新しい政治というものは、国民性の改造を基礎にして行かなければならないので、ドイツの如きもその一つの例であらうと思う。国民性を改造して行くには、どういう国民を作るかという目標がなければならぬ。この目標はもちろん政治上の目標と繁りがあるので、政治上の目標がはつきり決らなければ、国民性の改造の方向

ということも決らない。最も重要な問題はそこにあるわけであるが、そういうことを考えなくとも、もつと日常的問題から考えても、国民性の改造ということが大きな問題であらうと思う。新体制というのは新生活体制でもなければならぬが、新しい生活というものも、国民性の改造という問題に關聯して、始めて根本から考えることができる。随つてこの問題は極めて卓近な所から高度の政治目標にまで關係している、甚だ大きな問題であると思う。この問題を取上げることは、我々自身の、また我々の民族の性格について反省して行くわけであるが、そういう自己批評というものは、これは甚だ大切ではないかと思う。最近、批評でなくて建設でなければならぬということがよく云われるが、しかし批評と建設とをそのように抽象的に分離して考えるのは間違つたことで、批評と建設とは結びついたものである。批評のないとこ

ろに真の建設もない。ところがこのごろ兎角批評と建設とを抽象的に対立させて考えるような風がある。そういうような考え方からは国民性の改造ということも真面目に問題になってこない。国民性の改造ということは現実の国民性に対する批評から出立しなければならなのであって、その批評が一定の目標に向つて同時に建設への途を進まなければならぬと思う。

そういうことと関聯して、先ず独善的ということとを問題にして戴きたい。との独善ということとは、異民族に対する場合はつきり分るように思う。例えば日本人は満人——実は大部分は漢人であるが——或は支那人に対して独善的な所があり、彼等をよく理解した上でやつてゆくという態度が足りない。少なくとも彼等に対して日本人は独善的であるという感じを与えているのではないかと思われる。この独善的な所を改めないと、やること

が地につかないで、観念的になつてしまふ惧れがある。観念論というものは私は強ち排斥しない、それは一種の理想主義として大きな意味を持つていると思うが、そういう理想主義的のものでなくて、独りよがりというのでは困る。肩をいからせていることが、如何にも時局的なことであるかのような感があるが、こういう態度がそのような独善の現れであるというような場合が多いのではないかと思う。そういう態度は、異民族に対してばかりでなく、国内に於いても見られる。この点を余程考え直して行かないと、異民族に対してうまく行かない、そこで独善性ということについて、先ず御意見を伺つて、国民性の改造という問題を論ずる端緒にして戴きたいと思うのです。

独善性に就いて

記者 津久井さん如何ですか、独善性の検討を一つ

……

津久井 独善性と反対なようなことで、日本人はまた、非常に外国の文明とか、或は他の民族の長所を取入れたり、模倣したりする才能があると云われているのですが、それはちよつと見ると、独善と非常に反対のように見えるが、實際は、根本の所を叩いて行くと、日本の国民性の根本的欠陥の二つの形の変つた現れぢやないかと思う。他の文明とか、他の民族の長所とかを取入れて行くことも、日本人の場合中途半端な点が多いんぢやないか。逆に云えば、非常に飲込みが早いようなところもあるが、そこが結局中途半端で、十分にものごとを咀嚼するとか理解するとか、徹底したところがないぢやないか。最近の時局では、今までの外国崇拜ということをやめて、日本本来の面目に還れということが、非常に強く叫ばれておるけれども、今までの外国を学ぶという学び方も、本当

に正しい学び方をしていたかどうか。例えば、個人主義とか自由主義とかをいけないと云うのが、然らば本当の意味の個人主義とか自由主義とかいうことが、よく咀嚼してそれを取入れていたかと云えば、必ずしもそうでもなくて、非常に上つ面などところだけ取入れていたのぢやないか。それが今度は反対に、全体主義というようなことを云うと、まだ全体主義とはどういうことであるか、よく深いところは分らないけれども、何か一つの合言葉のような形で、全体主義全体主義ということが流行をなしておる。新体制ということでも、皆お互いに飲込めないところが多いんだけれども、しかし新体制ということや、何かものごとが非常に簡単に浅いところで動いておる。そういうことがどうも日本人の非常な欠点ぢやないかと思う。それが形を変えれば、一種の独善性という形で出て来ると思う。

一体国民性というものが、改造ができるものであるかどうか、僕は最近疑問に思つておるので、個人の場合でも、三つ児の魂百までと云うて、なかなか欠点を改めるということは難しいのだから、そういう欠点到に触れないで、長所の方を先ず發揮するような考えで行くことが、實際としてはいいこと——というより、そういうことより外に仕方がないと思う、しかし日本がこれから益々國際的に乗り出して、現在日本が東亜の指導者になるとか、八紘一宇の理想を布くとかいうことになれば、やはり欠点は欠点として、はつきりと見凝めて、これをどうしても直して行くということが、必要ではないかと思う。それには国民性ということもあるが、今までの知識階級が、国民に対して外国の思想とか文化とかを取入れて国民に伝えるという態度にも欠陥が多いんじゃないかと思う。日本の知識階級は態度が少し浅くて、外国で流行った

思想などを、直ぐ右から左に国民に取次いだ。それで一時自由主義とか個人主義とか云えば、非常に簡単に取入れられた。これは国民性が浅薄でもあろうが、知識階級の外国の知識の取入れ方が、少し深みを欠いておつたんじゃないかということも考えられるので、そういう点は、やはり、今日知識階級というか、指導者階級というか、そういう方面がもう少し深みのある態度を取つて、日本をはつきり見凝めて、そうして取入るべきものは取入れ、排すべきものは排するという態度を取つて、国民を指導して行くことも、非常に必要なことぢやないかと思う。

橘

独善ということは、私も大陸でよく経験してあるが、独善にもいろいろあるんだ。朝鮮が一番濃厚ぢやないかと思う。その次は満州、それから北支那、それから上海で、中支那辺に行くと、もう支那の商人あたりと、別に民族意識などなくて交

際っている。北支那などは、国民生活に於いては、日本人で彼処に生れた連中があるが、これ等は、支那語を知らないで恥にする。それで一生懸命やっておるが、なかなかうまいのがある。言葉ばかりぢやない、生活様式なども、支那服を着て見たり、支那靴を穿いて見たりして、独善でない方に近寄っておる。ところが一步出て大連あたりに行くと、がらりと變つてしまう。識者の慨歎するような独善振りである。もう少し東から西に寄つて、白んぼの所に行くと、一も二もなくこつちが頭を下げるね。今度は独善どころでなく先方が独善だ。だから独善を独善だけ取上げると分らなくなる。津久井さんの云われるように、日本民族は、一面に大きな立派な精神を持つておる。ところがその立派な精神に似合わない卑屈な面がある。やたらに崇拜し、やたらに盲従する。そこに日本人の薄っぺらな、容易に救い難い欠陥があると思う

けれども、これは何故そんな風になったか、原因を突止めなければならん。そうして応急及び恒久的な救済の方針が樹てらるれば、何もそんなに惶てることはないと思うのだ。そんな風にして、僕は独善の問題なども考えたらいいぢやないかと思う。

三木 いろいろな場合に感ずることだがどうもオツチヨコチヨイのところがある。随つて、地ぢについていない。満州なんかを見て、あの広い何も無い所に、親子何代も土の中で生活して来たような人間の持つてゐる根強さは、日本人にそういうものを要求することは無理かも知れないが、それは必ずしも日本人の先天的の欠陥だとは思わなければならない……。

橘 そうともそうとも。

三木 やることが、もつと地につかねばならぬ。最近どうもオツチヨコチヨイみたいに見えるところ

が多くはないでしょうか。やることが根強い統一を持つていないところが多いのではないかと思うのです。独善の原因にもいろいろあるでしょうが、

例えば満州では民族協和ということを理想としている。これは満州ばかりでなく、東亜新秩序というのは、民族協和に立脚するのですが、満州あたりの日本人を見ても、満州事変前から長い間生活している人は別として、新たに満州建国以後殊に最近入つて来た人は、満人と殆ど交際していないようです。役所の仕事の上で、或は何か業務上の必要から交際することがあつても、私的交際というものは殆どない。日本人同士だけが交際しているが、これではほんとの民族協和はできない。それから異民族に対する礼儀を知らない者が多いのではないかと思う。日本人は礼儀正しい国民で、日本人同士の間では礼儀がやかましいが、異民族に対する礼儀には欠けている。満州にいる人でも

この点を非常に慨嘆しているものがある。ともかく従来他民族と接触する機会の少なかったことが独善のひとつの原因になっている。

橘 オッチョコチョイの薄つぺら、それを何とか作り直して行かねばならんと思うね。

独善と模倣——歴史的条件

永田 その点が独善と模倣の由つて来る所以で、その一つとして、日本の歴史的条件といったものを考えることも、一つの問題だと思う。

橘 殆どそれが全部でしょう。

永田 まあ仮に歴史の転換期を取つて見ると大化の改新というものは、やはり支那の文化を一つの目標として思う。そうしてあの変革が起つた。

橘 必要以上の模倣をやつた。

永田 明治維新のモデルは西洋文化だ。
橘 これも必要以上の模倣だね。

永田　そこでこのモデルを絶えず持つていたという

ことは、善いことと悪いことの両面があると思う。

一面に於いて日本人個々の性格を失つて行く。そうして西洋文化のモデルを持つことは、模倣ではあつたが、そこに分裂が来ているぢやないかと思う。その分裂の証拠として、国民性は日常生活の上に出て来るといふお話があつたが、例えば汽車とかバスとかに先を争つて乗るといふ日本人の性格、一面には西洋が個人主義で怪しからんと云いながら、西洋では秩序正しく乗つて行くのに、しかも日本では先を争つて乗る。こういうことは、普通云われているのと逆の現象だ。それはどこから来るかといへば、やはり個人の完成といふことが十分でなかつた。歴史的條件でいへば、市民の社会的の完成が十分でなかつた。しかも今日の変革期で私は根本的に云へば個人の発見から国民的國家の自覚への推移だと思ふ。そこへ持つて来て、

個人の完成が十分でないところに、国民的に統一しなければならんという間に、まだ幾段か経過しなければならんことを、飛び越えて来ておる。そこに先程津久井さんのお話になつたような模倣とか独善も出て来ると思ひます。

橘

一方に自由主義、他方に洗煉されないエゴイズム、一方には愚劣なるリベラリズムがはびこつておる。その点津久井さんの云われた通りだと思ふ。その原因は永田さんの仰つた通りだと思ふ。だから日本人の歴史的條件に遡るといふことは、その方面から改造のメスを下せば、そんなに困難な、長い期間を要することではない。ただ今お話の中の個人の改造完成、國家の完成には、少なくとも西洋人の取つたコースを日本人は飛躍したといふ話ですが、それはその通りに違ひはないが、他のコースもあり得るといふ風に私は思ふ。

永田　他のコースとは？

東洋社会——その自覚

橘

それはこれまでの日本人や支那人が持つておる

ゲマイニシャフト

社会は、私に云わせると共同社会、これは歴史的

には個人のイニシヤティヴ【Initiative】を認めない。

極く特殊な場合に認める。だから個人の地位は非常に低い、或は無い、こういう風にして来ておる、個人の完成ということは、問題にせられなかった。今日のように社会の情勢が、環境の方が進んで来て、遅れた東洋の社会が反撃を起した時分に、個人の地位が始めて動いて来る。その時分に西洋のコースは個人の完成、個人主義ですが、個人主義の関門を通るべきか或はそれを通らなくても社会国家の完成ができるかどうかという風に考えて来ると、そこに私は問題がないぢやない、あると思う。第二のコースがあると思うが、そいつはまだ非常に雑駁なものに過ぎないけれども、事実か

ら云うと、東洋人はこれは仏教の經典などを読んでもわかるが、兎に角、東洋社会の文化の進んだ民族の間には、古くからあったことであるが、優れた個人がある。優れた個人には注目すべき社会的自覚がある。支那でも日本でもいくらも例はある。就中、誰にでも分りやすい例は、宋時代の大儒、陸象山、この人が二十時代で発奮して云つた言葉に「天下の興亡匹夫も責あり」というのがあるが、これなんかは、今の東洋社会の識者の胸に芽生えた社会的自覚の最も分りやすい表現ではないかと思う。こういうことはどこの国だって沢山あることだ。そこでこれまで共同社会で至つて軽く考えられた個人のイニシヤティヴも環境に迫られて重要視され、随つてそれを研ぎすすむような時世が生れて来るぢやないかと思う。結局は三木君らの主張される協同主義です。あの方の結論を目標として進んで行くものと思われるが、今ま

でのところでは東洋社会は——西洋社会もそうですが、まだそこまで到達しておらん。そいつを目標として、つまり団体の中での個人の完成という風なゲマインシャフトの原理に進んで行くことが、東洋人としては可能な道ぢやないかと思う。

三木 東洋の社会というのは、大体これまでの觀念によれば、封建的の社会と考えられているのですが、西洋の封建社会と違つて、東洋の封建社会の中には、ヒューマニズムがあると思う。例えば個人の完成ということが、そういう意味に於いて考えられておる。儒教なんかの思想にしても、やはりただ全体主義でなしに、自分の人間を作つて行く、個人として人間を作つて行つて、文化的にも完成した人間になるという考え方があると思う。これが西洋の封建時代の思想と違つた、いゝところだと思ふのです。

橘 その通りだ。

三木 そこをもつと生かして来なければならないと思ふ。

橘 僕はいつも社会的原因を、階級關係に求めたらいゝんぢやないかと思う。例えば西洋では、地中海時代からいろいろな民族、種族的階級の殺伐な闘争が行われた。その結果、奴隸と一方に貴族、平民、支配階級というものの、階級闘争のけわしい關係が出来て来た。東洋ではそうでない。インドでも支那でもそうだ。広茫たる平野の中に大きな河が流れておる。そこに有畜ですらない、單純な小規模な農業、極めて変化のない生産業が生れた。随つて、その中で行われる闘争にしても、そんなに激烈なものになり得ない訳だ。激しい闘争がないから、奴隸もできるけれども、そこに奴隸生産の時代ということを劃するだけの分量の奴隸はない。だから支那の歴史を仔細に見ると、日本なんかと同じように、氏族の組織というのが、奴

隸、氏子、生産者に分れておるが、奴隸及その所有者、截然たる階級対立という関係にはなり切れない。戦敗者によつて奴隸はできるが、それがやがて生産に入つて行く、そうすると氏子に対する対遇に準じたものになる。性質上奴隸には違ひないが、待遇や配分条件から云うと、必ずしも奴隸というほどに、はつきりした差別はない。これは日本も支那も同じことであります。それがため大きな、激烈な階級闘争が起るような社会が生れなかつた。そこに温情というものが残る余地があつた。それがあなたの云われるヒューマニズムです。西洋のヒューマニズムとは違ふけれども、やはり似たような、早期発生の社会的原因があつたのぢやないかと思ふなあ。

宗教と共同精神

永田 共同精神の問題ですが、私はぼんやり考えて

おることですから、間違つておれば訂正しますが、今日のお話のように、ヨーロッパの場合には、階級関係が非常にはつきりしていたので、そこにも共同精神が生れた所以はあるが一つは宗教だと思ふ。小さな村でばつと教会の燈りがつくと、村らしくなる。教会が實際中心をなしております。東洋の場合は、これは経済学的角度か知れないが、水田耕作と結びついた家族制度が、共同精神の一つの地盤だつた。

橘

たしかにそうですね。キリスト教や西アジアの回々教でも、そのお寺というのが生活の中心になつておる。回教は現在でもそうです。東洋——日本、支那は家族制度ですね。

三木

私、最近満州を歩いて特に感じたのだが、ロシア人が北滿を始めて経営した時代に、到る処に教会を造つた。ハルビンなんかには教会が沢山あり、ことに非常に大きな墓地を造つて、そこで安

心して死んでゆけるような準備がある。ところが満州に出来ている日本の寺などを見ると、まことにお粗末で問題にならない。お葬式をやるだけの宗教では意味がない。

永田 日本の形式ですな。

三木 今そういう究極の生活の抛り所を、国民が持っていないのではないか。最近には神社崇拜を非常に奨励して、満州あたりでも到る処に神社を造っている。これは生活の一つの中心になるという意味で善いことであろうが、その神社の造り方を見ると、皆高い山の上に造っておる。なかなか毎日そこに行くことができない。遠くから遙拝するほかない。ところが従来日本の農村を見ても、いわゆる鎮守の森は、そこに子供が毎日行つて遊ぶ。相撲も取れば、盆踊りもお宮でやり、浪花節が来ればそこでやるといふので、一種の公園のような所があり、非常に親しみがあると思う。とこ

ろが最近の満州辺に於ける神社を見ると、そういうものとは離れている。これは考えなければならぬことだと思う。宗教というものも、もつと生活に近づかなければならない。すべてのやり方が、何でも遠い高い所に持つて行くというのが、最近の傾向になつていはいしないか。人民と繁りのないところに持つて行き、親しみが無い。新体制でもそうで、山の頂上にぼつと建てるというようなことがあつてはいけない。

橘 確かにそうだ。山の上に、官閥が真中におつてね。これは適切だ。

記者 小松さんは、特にフランスの文化人と旧い関係がおりますから、日本の文化の取入れ方に就いても、相当御意見があるのではないですか。

小松 僕は近代の日本文化は、半植民地的な性格を、多分に持つておると思う。その以前にあつた徳川時代の文化は、先刻三木さんの云われたよう

に、極めて独善的な、モノローグ的な、主観的な文化形態である。其の後に来た明治文化、大正文化にしても、外国から受入れ方に於いて、徳川時代の文化的性格を、多分に受け継いでいると考える。用いた^マ。ところで今日の日本は、政治的な文
 化的な意味なり、国際的な推移の事情から云つて、はつきりと植民地的な性格を脱却しようという時に、在来^マの国民性——国民的性格に大きな反省を加えて、新しい出発をしなければいかんと思う。この時に新しい国民性を作り上げる基本は、僕はやはり二元的な考えで、第一は道徳^{モラル}刷新の問題、第二は社会的政治的改革の問題にかかつておると思う。国民性の改造といつても、個人性の改造と二つ並行的にやつて行かねば、その何れが欠けても、日本の伝統ということを考え、日本の国民精神という点を考えて、非常に偏つた、不具者的なものになるのぢやないかと思う。

外国にいたころの、日本人に対する印象ですが、日本人はまだ小国民だ、大国民ぢやないという印象を強く受ける。例えば西洋人の前に行けば、何だか西洋人が非常に優れておるように考え、自分が卑屈になる人があるかと思うと、今度はその逆に、西洋人などは頭から毛唐呼ばわりをして相手にしない人達がある。日本精神とは如何なるものかという知的な自覚、批判なしに、原始的な神がかりというのか、そういうもので突つ張る。こんな二つの傾向の日本人が多いと思う。これからの日本が、国際的な大きな地位を作つて行く、或は大陸にグングン伸びて行く時には、こんなことではどうも通用しないぢやないかと思うのです。

国民性——大陸性と海洋性

三木 私はこのことを考えているのですが、これ

は国民性を如何に改造するかということとも結び付くことです。世界の歴史を見ると、文化の最初の起源はちよつと分らないにしても、兎に角大陸から起つたらしい。それからギリシャ時代の地中海文化が現れて、近代文化の一つの先驅をした。

中世の文化は、これは大陸文化であると思う。それから後に、近代社会になつてから、イギリス、オランダなどの海洋的、商業主義的の文化が起つて来た。ところが今度の新しい時代は、大陸的の性質を持つ文化が力を得て来るように思われる。例えばドイツにしても、ソビエトなんかにしても大陸文化といえるでしょう。

橘 大陸文化というと？

三木 言葉は適切でないかも知れないが、文化の大陸性という、新しい文化の性格をいうのです。日本の文化がこれから発展して行くためには、大陸に出て行つて大陸性を獲得するということが、ど

うしても必要だと思う。日本が持つておつた明治以後の海洋文化的の性質を脱却しなければならぬと思うのです。

橘 海洋文化の価値を含めてですか。

三木 決して単に否定するのではない。歴史の順序に於いて、新しい大陸的の性質の文化が、前面に出て来る。それで勿論海洋的の文化が、意味がなくなる訳ではなく、新しい大陸的な文化は却つてこれを自分のうちに含んで、高い綜合の上に立たねばならないが、現在の日本の文化については大陸性ということをもつと考えなければならぬのではないか。

橘 民族にしてもゲルマン、フランク、スラヴ、支

那、インドという大陸民族、アングロサクソンというような海洋民族が後退して……。

三木 いや、必ずしも民族が後退するのではない、その文化の質が変るのです。

橘 文化が後退するとして、例えば日本の場合でも、

これまで海洋文化であったのが、大陸の方に行かねばならんが、けれども両方が合致して行く時代が来ておるとも云える。

三木 新たに合致しなければならぬ訳ですから、従来の海洋的文化の質だけでは、いけなくなっている。日本の文化にしてもそこに大陸性というものを持たなくては発展することができない。随つて、国民性の問題でも、大陸的な性格をもつと作つて行かなければならないと云えるのではないか。

橘 面白いね。しかし歴史の場合に問題になるのは、大陸性の文化と民族、海洋性の文化と民族というものが、そうはつきり分けられるかどうか。大陸性文化は持つとしても、それと或民族とが必然的に一致するものであるかどうかということについての実証が、相当困難だ。

三木 それは象徴的の表現なのですから。文化の海

洋性とか大陸性とかが一つの民族に結びついて、決定的であるとは考えられないけれども、文化の質を象徴的に現せば、そういうような変化があるのではないかと思う。中世の文化というものは、大陸的であつたと思う。日本の中世だつて、海洋的でなかつた。つまり今後は新しい中世というものが大きな問題だ。丁度、近代が古代の復活から始まつたように、今度は中世の復活ということから始まるのではないか。無論中世が再びその俟来る訳ではなく、そこに新しい形のものが出て来るけれども、しかしその切つ掛けになるものは、一種の中世的の形であるという風に考えると、そこに従来単に封建的として排斥されてきた東洋文化というものが、非常に大きな意味を持つて来ると云えるのではないかと思うのです。

日本の文化にしても昔からいつも海洋的のものであつたとはいえないので、海洋的の性質を持つて

来たのは、足利時代に海外発展をした頃からで、そこに西洋文化も入って来た。しかしこれは徳川時代に一旦中絶されて、明治時代になって再び海洋の性質を持ったので、元来は日本文化は東洋文化圏の中のものであった。

橘 それは「大海原に棹梶乾さず……」と祝詞にもあるので、日本は著しく海洋的の性格の部面を、多分に持つておった。それが平安朝以後に中絶して、足利末期に復活しかけて直ぐ潰れて、明治になって海洋の性格が発揮されたという勘定でありましょうね。非常に大きな問題でちよつともてあますわい。(笑声)

三木 歴史を単に時間的にばかり見ないで、空間的地理的に見る必要があるのです、ともかく今後の日本の文化の性質なり、国民性なりについて大陸性

1 延喜式祝詞「白雲の壁坐おひあひかき向伏むかひふす限り、青海原あまの原は棹梶さか干ぬさず、舟の艦かべの至り留まる極み、大海原に舟満ち都都た氣きて、」

ということとは深く考えなければならぬ問題ではないかと思ひます。

科学と日常生活

橘 中世へのルネッサンスというんだね。ヒットラーなんかもう云つておる、口ぢやね。ファツシヨは少し違ふようだ。

それから今まで話された模倣とか盲従という問題は、日本国民の実生活に、科学思想、科学精神を深く注込むことによつて、余程なくせられるぢやないかと思う。今の日本人も、一世紀間に、相当西洋で発達した科学を持つて来たけれども、これが模倣でない、確りしたものが、思うほど現れて来ないのは、科学というものを生活してないからぢやないですか。科学を教科書で受けていて、それを試験管や教室の中だけで取扱つてゐる。そうして自分の主婦おかみさんや子供の日常生活には、

ちつとも取入れない。日本人は昔から、医者^のの養生、紺屋の白袴で、科学を自分の身につけることを嫌うでもないでしょうが、何か他^{よそもの}者扱いにする傾向がある、それで折角今日自然科学という

ものが盛んになったが、これを日常生活に実践しようという精神が、非常に欠乏しているね。

小松 それは逆ぢやないですか。日常的な功利性という意識からばかり科学を見、それに役立つ学問と見ていては科学の独創性は生れない。科学というものを一つの立派な芸術創造というか、そこまです引上げる精神が欠けているのぢやないですか。

橘 私の云ったことはそれと矛盾しないのだ。私が云うのは、主婦さん達が日常生活を科学で以てやっていない。科学でやって行くという精神があれば、その精神が土台になって、高い科学の創造の花が咲くことが、西洋ではあるが、日本では科学の創意を台にして花の咲く素地がない。教壇の

学問だ。その科学の創造性を身につけて行かないので、模倣になり、オッチョコチョイで、自信のない生活態度があると思う。

菅井 私は皆さんの仰しやることを、尤もと思つて聴いているのですが、橘さんの御意見は面白いと思つております。先刻津久井さんも仰つたと思いますが、ここで科学というのは自然科学でしようが、やはりそれが生活化されていない、抽象的のものとしていつも受取られたので、今日の模倣をやつて行くことになつたと思いますが、日本に何故独創的の科学ができないか、独創々と云つてもちつとも独創でないぢやないかと、いろいろ云われるので、科学者の側も大変困つておる訳ですが、しかしそれは非常に忙しく、科学文化を、この中には技術も入る訳ですが、取入れなければならなかったという、差迫つた要求があつたことも、同情して戴かねばならんと思います。その場

合にもやはり科学者の心構えに一つの欠点があった。外国で云う独立の科学のための科学は非常に意味のあることですが、日本に受入れられる場合の、科学のための科学は、非常に実生活と隔離された科学という形式であつた。そういう意味で、日本の学者の受取り方が抽象的で、バラバラである。というよりも、寧ろひどく混乱状態で受入れられた。そういう点が非常に問題になるのかと思います。目先の実用ばかりということを小松さんが仰つたのですが、日本の科学は目先の実用から、本当に優れた学問性というものを樹てて行くだけの素地が出来ていないということになるぢやないかと思う。これからそういう意味で、自然科学に限らず、橋田先生の科学する心とでも云いましうか、そういう心構えて、ただ是々の知識を覚えておけば、是々に役に立つということではなく、アインシュタインの相対性原理がどうか、量子論

がどう発展したということを、いろいろの本で覚えるということだけでなく、本当の意味で秩序立った生活の建設ということをやつて行く場合に、科学的の見方が非常に役立たされて行くというように、これからの科学を建設して行くのが本当ぢやないかと、私には考えられる。そうするためには、やはり研究所を沢山作るとか、学校をいろいろ殖やすということも必要だが、具体策としては、橘さんから学校教育についての文句がありました、学校教育自体が科学が身につくような制度に、小学校からずっと大学まで再編成せられなければならん。そういう風にして行けば、仰るようなことも、かなりだんだんと実現されて行くぢやないかと思ひます。

国民性の改造に役立つ科学

三木 科学の基礎にも、一つの哲学がある。科学的

の考え方、ものゝ扱い方を成立させている哲学があると思うが、その哲学をのみ込んでいる科学者が少ないのではないか。だから小手先だけの仕事になる。

菅井 よく科学的という言葉を日本で使うが、ただそれが科学的であるか問題だと思うのです、知識をある方法で覚えるということは科学ではない、生活をどう整理し、処理するかというその根本に科学性があつて、初めて生活自体が豊かになるという意味で科学性が主張されなければならん、私はそれがいま非常に欠けていると思う。

橘 国民性の改造に役立つ科学はそれでなければならん、それをこの頃流行の隣組の消費生活の中に持ち込んでお嬢さんを教える、するとこれは儲かるとか便利だとかいうことを身にしてみて感ずるようになる、そこに彼等の生活に科学の光を差し込ませる契機があるんじゃないか。

菅井 内容を通して本当に深いところを教えて行かなければならん。

橘 小松さんの言うように、目先も目先、徹底したもので以て、お嬢さんの洗濯一つにも科学の光を与えて行くことが必要です。

菅井 ところが日本の新聞や雑誌に書かれる科学の概念は、そういう場合にはこうすべきだと指令するだけで、洗濯でもスフはこう洗うべきだということだけです。それは一つの命令であつても、科学的に考える素地を与えることにならない、これが問題だと思う。ただ技術を教えるだけです、例えば瓦斯でもいろいろ用い方によつて違うのに、使い方を教えないで瓦斯の穴をどうするというようなことばかり言っている。健康に就ても、ビタミンが身体の組織全体の中にどういう風に織込まれて1 人絹ともいわれるステープル・ファイバーの略、戦前のこの人工繊維は着心地が悪くその上すぐ破れるので、代用品であった。

行くかということを教えて初めて意味があると思うのです。非常にその点断片的で、元に繋がっていないのが多いぢやないかと思うが、そういう意味で、断片科学は批判されて宜いと思うのです。

津久井

我々にしてもそういう嫌いがあるが、生活に対する考え方がぼやけているんじゃないだろうか。人間は何の為に生きているか、ということは、非常にむづかしい哲学上の問題になるんですが、西洋人の考えではもつと生活はつきりしている。だから学問とか科学とか云つても、やはり今言われたように、生活と密接な関聯のあるものとして受取られている。僕等は代数や幾何を中学で教わったが、それは実生活に一体どれほどの必要があるか、今考えて見てもそれほど必要ではないというようなもので、あゝ、いうものの教え方でも、もう少し何とか呑み込めるように、即ち実生活とか人生とかに対してどういう関係があるとい

うような面から教えて貰えばもつとよく分ると思います。ただ無闇に公式ばかり教えられても何にもならない、苦しむだけです。殊に僕は数学は不得手で、今でも時々代数の試験の夢なんか見ますがね。(笑声)

日本人は生活を楽しまず

三木

外人や支那人などと違つて日本人には生活を楽しむということに就ての考え方が足りない。そういう欠陥が満州に行つて見るとよく分ります。ロシヤ人や満人なんかと違つて、日本人には生活を楽しむやつて行くという態度がないから、やることが生活から離れたものになっている。従つて長い間其処で落着くには欠陥が生ずる。矢張り生活を重んじ、生活を楽しんで行くという態度が出てきて初めて移民なんか成功すると思う。

橘

それは私も感ずるが、朝鮮人は違ふでしょう。

私は廻つて見て知っているが、露人と、支那人には、たしかにその日くを、自分の現状を楽しむことを知っている。なかなか感心ですよ、何にも分らないような奴がびつくりする程内容の豊富な生活をしているが、朝鮮人と日本人が一番がさつなようです。そうして裏でぶつぶつ不平を言う。朝鮮人が一番不平を言うが、日本人も不平と不安は盛んに言っている。

三木 自分の生活に落着けないからぢやないでしようか。

津久井 社会生活の規範というようなものでも、日本人に於いては、上からの命令で来るか、或は倫理道德の形をとるでしょう。即ち、命令でなければ道德の強制となる。そこで交通道德で言えば、結局交通道德を守っていると何か損でもするようには考えられるが、それが生活と結び着いて来ると、結局道德を守った方が、お互が好いのであるから、

今後もつと愉快にバスや電車に乗り降り出来るんだ。

橘

命令だから窮屈なんで、同じ事を自主的にやれば宜いんだが、自主的にやる余地がない。

それから話が少し違うが、これは国民性改造の上に重大な問題と思うが、国体ということをよく言いますね、たしかに国体問題は私は重大だと思う。しかし重大であればある程もつと嚴格に取扱つて貰いたい。もう少し科学性を持たせて、歴史的なり社会科学的に明徴にする必要がある。今迄はある点から見ると却て不明徴にしておるのぢやないかと思う。尤も国体を宗教的、情意的に把握して満足するものもある。それは勿論それでよろしい。併し、現代人、青年層の多数は恐らくそれでは納得できないのぢやないか。即ち国体の明徴でも、科学的解明の必要なる所以であります。とも角新体制をやると近衛さんが言うからには、少なくとも

もその心構えを示して貰いたい。物騒な問題が起らない程度に於いて、もう少し掘り下げて見るという気運を作って貰いたいですね。

知識階級の粘り強さ

三木 知識階級はもつと粘り強くなければ駄目だ。

記者 どうして一般に粘り強くないでしょう。

橘 まだ感激が乏しいからでしょう、俺達でなければ国は救われないという。

三木 自分達は本当に指導的立場にある人間だという確信をもつと持たなければいけない。

橘 しかし原稿や演説の中では、相当持っているようだよ。(笑声)

菅井 直ぐに白眼視してしまう傾向が多い。

三木 お互が共通の使命を有って結び付いているという親和感が、知識階級には足りない、そういう

点では悪い意味に於ける個人主義で、ばらばらになつてゐるから力が弱い。

小松 昔のヨーロッパでは知識階級は聖職者クラリクと云つ

て、神聖な職能の人々であると言われておつた。日本の知識人もそれ位の信念をもたなければいかんと思う。そうでなければ永遠に、日本の一般大衆と日本文化の融合ということは考えられないと思う。

三木 知識階級というものは良心で生きているのだから、自分の良心に納得出来ないことには本氣になれないんだね。

津久井 しかし大分この頃は考え方が變つて来つたあるようだ。四五日前集つてた人達の考え方も、もつと確つかりしなければいけないという風に、大分の空氣が一致して来ていたようだ。少なくとも第三者的、批判者の立場ではなくなつて来ている。矢張り時局の刺戟を受けていますからね。

三木 ただその中に所謂時局便乗があつてそれが積極的のような外貌を呈するのは困るね。

菅井 やはり知識階級は、本当は何時もある距離を置いて、絶えず批判を以て見ているのぢやないでしようか。

津久井 同じ便乗と云つても、知識階級の便乗は、僕等もよく攻撃はするが、たかの知れたものだよ。実は便乗までも行つちやいない。こういうことを言つちや使乗と言われはしないかと、その方を氣にしているので、その心配は僕はないと思う。(笑声)

小松 そこでこれから大いに日本の文化人によつて貰いたい大きな仕事は、国民性の改造ということ、も関係しているが、日本文化の歴史的、科学的研究を総合的に遂行して貰いたいことです。今迄の日本人は、絵画で例えて言えば、水絵とか墨絵とか云つた比較的主観的のものばかり描いておつたようなものだが、今日ではそういうものを

突破して、もつと大陸的な性格をもたねばならぬと思います。少なくとも在来のままでは大壁画などは描けない。

菅井 日本文化を研究して、同時にその大きな欠点となるところをはつきり客観的に示すことも必要ぢやないか。それも色々世間で言われているような面のみでなく、もつと正確に実証的にやつたら面白い結果が出て来るのぢやないか。僕は今、ちよつと昔のサイエンスを調べて居るんですが、普通に伝えられている以外になかなか面白いことや、或は参考になることも出て来ます。仮令資料が不充分でもそれを通して日本の国民性自体を分析してやることはいけないことぢやないと思う。欠点が明かに見えたら、それで国民にもつとはつきりした自覚を与える材料になると思う。

小松 日本文化の中には印度的のものや支那的のものも勿論あるが、それ以外に日本的のものも儼然

と存在している。而も印度や支那のようなあんな大きな文明をもっていた国が、殆ど中世期になるやならず文化国としては亡びているのに、日本にあつては民族的にも、文化的にも、これだけの永続性、これだけの発展性をもっているということは、一つの奇蹟ではないかとさえ考えられる。それを掘下げで行くと、大陸のもの以外に日本独特の性格、血肉としての海洋的なものがあるのではないか。その海洋的なものをさらに改造しつつ、その上に適当に大陸的な性格を持たせることが当面の問題になると思うのです。ギリシャやローマの海洋文化にしても、ぽこつと出て来た訳ではない。エジプトやアッシアの大陸文化を吸収し、孵化し、観念化して出て来たものと思う。日本人の性格の中にある感覚的、直観的なものと、大陸文化の特色である観念的なもの、この二つのものを調和することは実際可能でもあり、今まで

多分にそういうものが存在して来たと思う。だからこの調和とか、或は模倣とかいうものも、一面日本人の文化能力の中に非常に貴重な役割をしていると思うのです。模倣を考えないでは日本文化は考えられないし、又多くの文化が向うから入つて来たことは間違いないとしても、吾らの祖先が恒にそれを創造の段階に移して行つたことこそ、文化人の本当の信念でなければならん、これを誤つては何事も出来ないですね。

日本民族の創造力

橘

全く日本も模倣から創造に進んで行つた例は沢山あるが、聖徳太子の頃仏教が入つてそれから五六百年過ぎて鎌倉時代になると法然、親鸞系統の浄土教が出てくるし、それから間もなく、禅宗の方には道元等の日本色が出てくる。これなんか相当のものです。儒教は仏教よりもっと早く

入っているが、千年位たつてから、封建時代、徳川期になって初めて日本のものになりかけた。これは最初はあの通り社会情勢が儒教を理解し得なかったが、理解し得るようになると、早速活潑な運動が起きた、併し十分本式にこなされないうちに、日本固有の神道が起つたが、これもよくこなされないうちに、明治維新となり、続いて西洋文化が入つて来て、今日の混沌たるものになった。そういう風で日本だつて本当の意味で外国の立派な文化をこなし得ないのぢや決してない。

殊に私は少しばかり支那の文化を調べて見たが、その中で禅宗は実践的な仏教として支那で始まっている。それが支那から日本に来て立派に日本の禅宗になった。又浄土教も支那で相当発達はしたが、とうとう未成熟に終つてしまつた。現在でも念仏するような浄土系の仏教が支那にあるにはありますが、それは実になつていないまるで迷信

です。それが日本に入つてはじめて、ああいう法然、親鸞のような徹底した純粹の他力仏教が起つているが、これなんか素晴らしいものです。日本民族だつて、生活力も創造力も十分有つてはいるが、余りどんな外国から矢継早にいろいろ入つて来たものだから一時面食つた形ですね。

菅井　そういう点で、外国から来たものが何故十分に消化し尽されず、また独創も中途半端に終らざるを得なかつたかということも、ありのまま見せることも将来の対策上意義がある。

維新当時の国民性の反省

記者　明治維新当時も歴史的に国民性の反省が相当なされたでしょうね。

橘　されましたね。

三木　近年になつて一時そういうことは忘れられてしまつたが、明治時代にはずっとその伝統はあつ

たでしようね。

橘 余り西洋がいろいろ違ったものを持つて来たからね。併し最近いくらか消化力の反省も深刻になつて来たようです。

それからさっきの三木さんの話だが、国民性改造の目標は、国民性全体として考えとるなかなか大問題で、私は時節が大変良い問題を提出されたと喜んでおりますが、余り問題が大き過ぎるので、一席の座談会で出来るものではない、もつと我々に御馳走をうんと食わしてくれないと出来ぬよ、(笑声) 今度分析を済ましてから座談会で続けるとか、或は何かの研究機関にお委せするとか、或は個人に原稿を割充ててそれを発表するとか、いろいろな方法で分担してやる外はない、迎も大した問題ですよ。

三木 東亜民族の比較研究も必要ですね。

橘 政治的の意味での国民性改造ということは、

さっきは途中で切っちゃつたが、国体の科学的明徴と食附いてそれに集中してやれば宜いと思う、是はとても広汎な問題だから皮切りとしてはこんなところでしょうね。

永田 明治時代の国民性の反省もして貰いたいが、徳川末期の先覚者がいかに西洋文化を吸収しようとしたか、その努力には驚歎すべきものがあると思う。例えば杉田玄白の蘭学事始、あゝいうものから考えても、模倣というよりも努力の結晶を評価しなければならぬと思う。福沢諭吉の書いたものを読んでも、あれは決して単なる模倣ではない。**菅井** はつきり自分のものを出して居りますね、ああいう点が大きいのですよ。

橘 明治初期の改革派の気魄というものは大したものですよ。

批評の責任

記者 最近特に目立つが、日本人はお互いに他人の悪口を言うようですね、これも相当国民性として問題になると思う。こういうことは今後の建設的な仕事の面に於いて目に見えない無益の障碍になると思う。軍や官僚の批評も民間ではかなりやって居るが、それなら民間にどれだけ批判に堪え得る良い面があるかといえば、これも問題でなし、そう考えるとこれは悪口の堂々廻りで、結局日本自体の問題になつて来る。そこで、他人の悪口を言う前に先ずお互いに自己反省が必要で、自己反省とともに、更に日本自体を深く省察してみる必要がある、と思うのです。

三木 悪口も組織的に言えば、建設的の一つのものになるが、今のは思い付とか、感情とかで言っているのが多いね。

菅井 全く本当の批判でなく、単なる悪口が多いよ

うですね。歴史的に人間はどんどん変つて行くのに、昔の失敗とか言説などを持つて来て、直ぐレッテルを貼つてしまうというようなことも、お互いに非常に傷け合うことになりますね。

三木 またそういうものを喜ぶ彌次馬が相当に多い。随筆なんかを好んで読むのと同じで、つまり無責任なんだ。

橘 御一新の時にも悪口は盛にあつたが、悪口は是で（刀で刺す身振り）やつた。そうしてそれを乗り越えて行つた。その気魄がなければ駄目です、生命懸けの悪口なんだ。またそれで悪口位屁でもないということにならなければ駄目です。悪口なんかに頓着して居る間はまだ天下泰平なんだ。（笑声）

小松 批判でもそれが行為となり、行動となるものでなければ駄目ですね。でなければ批判の責任は

取れない。やはり日本の知識人に責任ある行動を取らせるように、政府が仕向けて行かなくてはならん。何にも行動をさせないで置くから、どうしても第三者になつてしまふ。

三木 もう少し責任ある地位に就かせたらインテリだつてやりますよ。

橘 僕にも一つ辞令を呉れんかな。(笑声)

津久井 新体制でもそうだが、役人なんかでも持込が自薦他薦大変なんだ。だから政府の方でもその沢山集まつて来るのをどうしようかと困つて居る位だから、遠くの方に居るインテリなんかにはなかなか眼が届かないのだ。(笑声)

三木 文化人には人間的結び着き、情愛というものが少ないのではないかね。

津久井 矢張り自由主義的なんだね。

小松 女性的であり過ぎる。もつと男性的の結び着きがなければいかんでしよう。

日本国民性の特徴

記者 日本の国民性として最も特徴的な点はどういう所にあるでしょうか。今迄言われたことは外国人の場合でも多少ともある訳でしょうが。

三木 私は日本人は根本において善良な、正直な国民だと思ふ。従つて策略でも直ぐ分るような策略しか出来ない。直ぐ怒つたり、直ぐ昂奮したりするのは、日本人の人の好いところですね。

菅井 直線的であつて、曲線がない。

津久井 僕の友人で台湾に行つて居るのが、生活力でも、繁殖力でも本島人には敵わないと言つて居た。是からは支那や、満州でもそういう現象が起きて来ると思ふが、その敵わない原因として数えて居ることの一つは、本島人も日本人も家族主義だが、本島人の家族主義と、日本人の家族主義は違ふ、日本では親が一生懸命働いて子供を甘やか

す、親は貧乏しながら子供は大学に入れたりして、子供を非常に大事にする。本島人の場合は、子供の時代は一生懸命働いて親に尽す、親父は酒飲んだり道楽したりして居るが、それが子供の務めとなつて居る。だから日本人の場合は、年を取った親が大体働いて、一番働き盛りの二十台の子供が楽をして居る、台湾人の場合はそれが逆で、働き盛りの者が一生懸命稼いで、年を取った者は遊んで居る。こういう点で、生活力で敵わないということ。もう一つは日本では親が酒を飲んだり、道楽したりすると、兎角子供や女房にも好い思いをさせてやらなければならないというような思いやりがあつて、それで家中駄目になつてしまふ。支那人は親が道楽しても平気なんで、親は楽しても宜いという風にはつきりして居る。それは家庭内だけでなく、社会的にも外の人が贅沢したり、道楽したりしても、あの人は働きがあつてやるのだ

から、あの真似は出来ない、俺達は違ふと諦めて居る。西洋人は西洋人で個人主義ではつきりして居る。併し日本では誰かが悪いことをすると、皆それに倣つて悪いことをし合う。また悪いことをする人も、自分が悪いことをすると、人にも一緒にするように仕向けて行く。こういう二つのことが、台湾で本島人に日本人が負ける原因だと言つて居つたが、これも一つの国民性を語つて居るものぢやないかと思う。

菅井 それは家族主義の良い面と、悪い面をちゃんと現して居ますね。

青年、学生、教育

橘 橋田先生の教育の新体制というようなものがあるが、教育の新体制、科学する心も無論結構だが、青年の自主性を認めてやらなければ駄目だよ。自主性の科学でなければ何にもならない、試験管

だけ押付けても何にもならない。それに就て先日橋田さんの下で初めての高等学校長会議があったが、あの人も元高等学校の校長だった人だから、相当期待を以て新聞を見たが、あれでは駄目ぢやないかね。生徒を学校の庭に引張り出して訓示して居るのと同じで、實際を考えない科学政策なんか何にもならないと思う。農村の部落常会でも、また都市の産業報国会でも、総て生産者の實際生活を考えない限り、保安のお巡りさんの手足で済んでしまう。それと全然同じに行くかどうか知らないが、学生、殊に高等学校以上の学生には、自主性を与えなくては熱は上がらない。あれでは全然駄目ですよ。

菅井 国民学校の要綱を見たが、あれにはかなり自主性を重んじて書いてあるようですね。指導する場合でも教師が詰め込むのではなく、子供達が自分から問題を掴んで来ることを通して漸次導いて

行くとするような基本方針はあるようです。それが果してペーパーの上だけでなく、本当に実践されるのが問題なんで、それが実践される迄にはやはり教師の問題があり、学校全体のシステムの問題もあり、なかなかむづかしいと思う。従来の長い習慣もあつて、直ぐ生徒の方から自発的にという訳にも行かんでしようが、併しそういう点を設けたことは宜いと思う。

三木 満州あたりでも感ずることだが、もう少し日本の学校教育に於いても、その他に於いても学問を尊重するという風がなければ駄目だと思う。東亜の指導者となるには学問を尊重してゆかねばならぬ。人間を作るといつても、最近では学問を通じて人間を造つて行くという考えが段々なくなつて来るように思われる。是では五年なり十年なり先になると、知的能力の低下というものが見えはしないか、恐いことだと思う。

永田 学生の質の落ちて行くのは相当注意を要しますね。

今後の教育大綱

記者 国民性の改造と関聯して今後の教育方針は非常に重大な問題だと思います。国際情勢の今後の動向や支那事變の終結の仕方などに關聯して曲折はありましようが、兎に角、三国同盟によつて日米の進むべき歴史のコースは儼乎¹として定められ、それを完遂すべき歴史的な使命が国民に負荷されたのですから、そこに客觀的な、日本の歴史的志向に照應した国民性の改造、それを基本にした国民教育の革新がなされねばならぬと思ひますが、その点に就て具体的な方策を最後にお願ひします。

三木 とも角広域經濟というようなことが言われて

1 底本では「儼乎」とあるが誤植だろう。

居るように、日本人の生活が、政治、經濟、文化に於いても広域的になることは事實と思ふ。従つてそういう広域的な國民を作つて行くことが必要であつて、是は今迄言われた言葉で言えば、大陸的という性格を作つて行くことになる。そこで、例えば非常に粘り強い、芯のある、根氣の好い國民を作つて行くこと、同時にものを広く見て行く、従つて独善的でなく、世界的なものを見て、その中から自分の自主的に進むべき所を発見して行くという、そういう考え方を、もつと養つて行くことが必要でしょう。

特に東亞に於ける日本の指導的地位ということから考へて見れば、その指導者の資格が必要なんです、その指導者の資格に就ても、もう少しよく考へて見なければならぬと思ふ。此の頃指導者ということがよく言われて居る。併しその指導者の資格とは一体どんなものかということに就ては十

分考えられて居ない。学校の教育に於いても、日本ではこれまで指導者教育というようなものは殆どやって居なかった。大学なんかも要するにサ

ラリーマンを作る所で、指導者を作る所ではなかった。最近になつてそういう点は大分變つて来たようですが、やはり眞の指導者というものの資格が、問題になると思う。指導者の資格としては色々あると思うが、本当の意味に於ける確信を有つことが必要で、是は指導者として迫力のある人間を作つて行くことになる。今日指導者として現れて居る人は景氣の好いようなことばかり言つて居るが、是で日本はやつて行けるといふ確信を本当に有つて居るのかどうか、本音を叩いて見れば直ぐ弱音を吐くような連中では困る。同時に指導者の資格として、知能的に他の者の上に立つて行けることが必要なんで、殊に東亜に於ける日本の現在の地位は、何と云つても日本が知能的に他の

民族よりも先に進んで來たことが、大きな原因になつて居るわけだから、此の点を考えても知能的の教育を忽せにしてはいけないと思う。

そういう点に於いてもつと大きな人間を作らなければならぬのですが、ものの考え方、生活のしかたに於いても、余りこせこせしないゆとりのある人間を作つて行く。生活に於いてもそうだし、ものの考え方に於いても、人に対する態度に於いてもゆとりを有つようになる。それがはじめて人間の大きさを作つて行くのですが、それがまた指導者の資格なんです。今は余りにゆとりがなさ過ぎる。ゆとりというのは、なにも経済的に贅沢が出来る身分にあるからゆとりがある訳のものではない。心のゆとり、生活態度に於けるゆとりというものはどんな所にも作つて行くことが出来ると思う。そういうゆとりがどうも欠けて居るようです。殊に今の轉換期は、二年や三年位ではどう

にもなるものではないから、もう少しゆとりのある氣持を有つてやつて行くという所が欲しい。肩を怒らせてこせこせやるのが真面目で、熱心であるかのような風潮が余りに多過ぎる。がさつというか、大きな仕事をやるには、これではどうも不適當ではないかと思う。

橘 趣旨は甚だ結構ですが、そういう教育を効果的にやつて行くにはどうするのですか。

三木 それには国家全体を一つの教育機関と見て、あらゆる場所、総ての活動が教育であるという風に考えて行かなければならぬと思います。教育というとは非常に狭く解するが、あれではいけない。お互いの集まる所に教育がある訳で、総てそういう心構えが出来て来なければいけないと思う。昔の武士でも僧侶でも修行にはなにも特別の所を考へて居ない、生活のあらゆる所が修行の場所であると考えて初めて修行が出来たと思う、生活に結

付かない觀念的の修行では何にもならない。修行とか訓練とかいうことを形式的に考えないで、生活全体と結び付けて考えねばいけない。

新体制と国民性の改造

橘

是はさっきの高等学校長會議の記事を読んだついでに考えたことですが、農村生活では生産も消費も同じ場でやられるから部落常会、都市は消費と生産が分れるから、一方はおかみさん中心の隣組、又は町の常会、一方は亭主の職場の産業報国会という風に分ける、すると今は新体制の運動の中途で、そういう国民組織というか、下部構造はぼやかされて訳が分らなくなつて居るが、之をぼやかすのは絶対にいけない。之をぼやかしては新体制の意味がなくなつてしまう。それを明かにする為に今言つたことが現実になると思うが、その場合学生、青年も放つて置いてはいけないと思う。

各クラスで自治的の訓練を彼等自身に持たせるようにする。国旗掲揚式という風に改まらずに、自分の生活自体の中に鍛錬のチャンスをも十分に与えることと、もう一つ大事なことは自然科学的、社会科学的精神を一呼吸の間でも生活させて行くような仕向け方をする、そういう風にして行ったら、私は三木さんのお話のことが稍特殊の場を得て具体化すると思うのです。それを学生の自主性を奪つて、科学よりも神憑りの方の行事に引張るようなことになつては逆効果しか得られないと思う。こういう事を言つても直ぐには出来ないと思うが、その心構えで新体制を指導して行つて貰わなければ駄目と思うのです。

菅井 その場合学生を指導する教師とか、或は一般の社会人、そういう人の間に一つの相当の決意がなければむづかしいのぢやないでしょうか。ただ上から命ぜられた通りやるというのではなく、それ

を本当に生かして、而も学生の本当の気持ちに応えながら、高い所を見さして行くというようなことが、いま足りないように思うのです。

橘 今日の学生は殊に信用が薄いから指導しなければ駄目ですよ。だから新体制がある程度まで具体化すれば、曲りなりにもいま言つたような組織が出来ると思う。

菅井 学生の持つて居る疑問を知らないで教育して居るが、あれから直して行かなければならん。

永田 学生を強力に指導しなければならんというような話があつたが、学生の質が低下することを虞れる教師の立場から見ても、今の学生の置かれて居る場は非常にまずい。それは学生だけの責任ではありませんよ。

橘 それは全くみじめですね。前の大戦後の時なんか大分好かつたが、今は本当にひどい。之を何とか生かさなければ駄目ですね。自主性を養う足場

を全く奪われて居るのですからね。

菅井 現れるところは変のようでも、内面的には非常に問題を有って居る学生が多いじゃないですか。

永田 それは、学生としては非常に悩んで居ます。

記者 学生の政治的関心ということが大分問題になつて居ますが、是はどうですか。

橘 無論やつて貰わなければならんが、今急にやれと云つても駄目です。何とかして場だけ作つてやることですね。今の新体制の音頭取りがその氣になつてくれたら出来ると思うが、一高の自治制を潰したりして居るがあれぢやいかん、あゝいうものは生徒で出来るのだから作らなければならん。

記者 今回はこの辺で終り度いと思えます。どうも有難うございました。

底本：『中央公論』1940（昭和15）年11月号

文化問題を語る

岸田 国土

三木清

津久井龍雄

一、宗教はどうなる

岸田 先ず宗教の話からでも始めますか。宗派をどうするとか、宗教団体を再編成するとかいうことについては、実際の事情を一寸も知らないから何も考えて居ないのですが。現在、宗教心——所謂宗教的感情というものが日本人には非常に少い。これはやはりなくちゃならないものだと思う。そういうことに就て今の宗教家などにどういう風な考えを持つて居るでしょうね。或る宗教を信仰させる、詰り伝道するということはそういうことが

眼目なんですか。僕は宗教的感情を植付けるということは、宗教教育の外に、一般教育にも何かありはしないかと思うのです。国体或は皇室というようなことに触れて、そういう教育が行われるものであると思う。僕の言う宗教的感情というものは、もつと素朴な、原始的な、思想的な問題から一応離れたことが問題なんです。一体日本人は外の国の人間に比べて、宗教心と言うか、宗教的感情というものはどうなんでしょう。支那人は確かに稀薄だということが分る。これは非常に現実的だということと何か関係がありますかね。

三木

一体宗教心というものの性質が、西洋のキリスト教の場合と東洋の場合とは違うのぢやないかと思う。ですから西洋人の考えから言えば宗教的でないと見えるような所にも、一種の東洋的な宗教心というものがあるのぢやないか。支那人は確かに非常に現実的な国民である。それから日本

人なんかとも一種の現実的な国民である。併し支那人なんかでもやはり一種の安心というものは持つて居ると思う。例えば死ぬる場合に非常に安心して死ぬるというようなこと——これに今度の戦争の場合でもよく話されて居るし、又その他の場合でもよく言われて居ります。そういう所はやはり一種の宗教的な気持というものがあると思う。元来キリスト教というものは東洋で生れた。それがどうして東洋へ来ずして西洋へ行つて西洋で栄えたかというようなことに就ても色々問題があると思うのです。その一つの理由として或る学者が言つて居るのには、西洋の文化というものは大体ギリシャ文化の系統なんだが、そのギリシャ文化の中には一種の神学的な觀念というものが発達して居る。そういう神学的な觀念というものがキリスト教の信仰というものと非常に結び付き易かつた、斯ういう風に言つて居るのです。東洋に於て

はそういう意味に於ける神学というものがこれまではなかった。それでキリスト教のような思想が入つて来なかった。随つて宗教と言つても、そういう神学主義的な宗教ではなくして、西洋的な言葉で言えば一種の汎神論的な思想、或は又宗教的な意味に於ける自然主義というようなものが、割合に長い間伝統として流れていたのだが、西洋に於ても本當の神学主義的な宗教というものが出来たのはやはり宗教改革が因だと思う。それから宗教というものが非常なハッキリした形で現れて来た。詰り内面化された形で現れて来たと思うのですが、そういう意味に於ける宗教改革というものがまだ東洋にはないと思うのです。東洋には例えば日本に於て、明治維新後に於て仏教の革新というものが行われて、村上先生なども随分仏教の統

1 仏教の統一論ということなので村上專精（1851 - 1929）東京帝大インド哲学教授、仏教史学者。

一ということを言われて居るけれども、そういう場合の仏教統一論、或は仏教革新論にしても、実は西洋流の啓蒙主義なんです。随つて宗教をただ倫理化してしまふというような啓蒙主義的な考え方というものだけしか入つて居ない。そういう状態で来て居るので、今の宗教というものは実に漠然とした觀念になつて居る。詰り前からのようなものではやつて行けなくなつて居る。何か革新が心要なんだが、その革新の方向というものがまだハッキリ掴まれていない。それでともかく日本の明治仏教というものはそういう啓蒙主義的なもので新しい傾向を取ろうとしたのだけれども、併しこれは宗教としては榮えないで、ただ一種の道德論、宗教論のようなものになつてしまつて、それが現在までズツと来て居つて、どうも宗教的な説教というものは道德的な教訓と殆ど違わない。坊さんがやつて居るのと違わない。それ以外なこと

は非常にプリミティブな所謂地獄極樂式に過ぎないと思う。勿論古い伝統として例えば禪宗のようなものがあつて今でも一部には行われて居るけれども、これは近代化されていない古い伝統で、これがこのまゝ榮えて行くということは出来ないだろうと思う。そこで今の宗教というものをどういう風に改革すべきかという根本的な問題について何等ハッキリした見透しがないのぢやないか。だからそれなしに教団の統一とか合同とかいうことを言つても、ただ外面的なことになつてゐる。それを今現在妨げている最も重要な理由は主として經濟的理由だと思ふ。つまりそれぞれの教団というものは、經濟的な關係を持ち又經濟的な利害の対立がある為に、容易に一緒になれない。その信仰に於て対立しているとか何とかいう問題ぢやないが、これを本当に統一させる為には、本当の宗教教団の革新というものが出て来なければ出来な

いのぢやないかと思う。

岸田 宗教改革がなかったというのは、日本では比較的早くから実際の政治の上に於て政教の分離という形が行われていたからでしょう。だから宗教が対社会的に害毒を流すようなことが割に少なかった為に、改革の気運というものが段々ズルズルに延びて居るといふ点もあるのぢやないか。そういう意味での新しい宗教理論というようなものはどういふ風にして出て来るか。

津久井 日本人は大雑把に言つて非常に現実的な傾向があると思う。だから日本の神に対する考え方はキリスト教のそれとは非常に違つた所があるように思う。随つて仏教にしても日本に来ると非常に現実化されて、今日で一種の祖先崇拜、祖先の祭りということと同じになつて来ていると思う。今日ヨーロッパでもキリスト教というものが宗教的な信仰としてどの位皆に把握されて居るか

ということとは甚だ疑問である。そういう宗教というものは段々衰えて来るといふのが一般の傾向であると思う。例えばコントなどの言つたように、優秀な人間の生活の段階が次第に進んで、宗教的から形而上的になり、それから科学的になるといふことですが、そういうことに当嵌るかどうか知らぬが、今日一番素朴な元の原始的な形に於ける宗教が段々衰えて、非常に現実的なものが支配している。日本では例えば本居宣長なんかでも、現実的な何か非常に不思議な力を持つたり、變つたりして居るものが神なんです。それで最近の信仰新体制というのは、天皇宗教、国体宗教で行かうという考えなんです。今度の日本評論の巻頭にも書いてあるようですが、詰り日本の宗教といふか、信仰といふか、それだけでいゝのであつて、キリスト教とか、仏教といふものは、教義としてはいゝが、信仰としては間違つて居るといふこと、

これは決して正しいとは言えないけれども、そういうことが非常に強力に唱えられて来るのではないかと思う。それに対してそれを積極的に説伏する根拠が外の宗教にあれば別だが、なければそういう考え方が段々支配的になって来て、外の宗教というものは日本では行われなくなってしまうのではないかという気がする。国体というものが一種の信仰の対象になるということは僕等の考えにもあるのだが、そういうものだけで僕等の宗教的要求というものが全幅的に充たされるものであるか。そうでなくてやはりもっと広いものが必要なんぢやないかということは非常に難しい問題だと思ふ。

三木 国体と結びついたものが本当の神道である。併し神道にはまた宗派の神道がある。宗派の神道というのは、やはり仏教と同じように一つの教団組織を持つて居る宗派神道である。そういうもの

が国体というものと関係なしに存在して来て居ると思う。それから又これまでの場合を見ても、吾々の家でもそうだが、神棚を祭つて居るけれども、併し又一方に仏壇もあるという風に、日本人の場合例えば国体というものを一つの宗教にしなければ吾々の宗教心が徹底しないというような、そんな気持では決してないと思う。西洋人のキリスト教の考え方から言えば、信仰は一つである。外のものに異端視されて相容れないのだが、日本人又は支那人の場合に於ては、信仰は同時に色々なものの信仰になる。そこに結び付いて居る宗教的な感情は何か共通したものであるかも知れないが、兎に角現実の形としては、やはり国体というものに対する宗教的な感情という一つの日本人共通の絶対的なものの外に、他の宗教というものが存在して来たと思う。そうして今後もやはりそういうものが存在し得るので、詰りそれにはもつと

広い人間性と言うか、仏教的に言えば、年を取ったり、死んだり、病気をしたり、別れたりするとうような、色々な苦痛或は人生の無情とうようなものに根ざした一種の強い宗教的な解決を求める気持とうものは、これは別にどこまでも存在して居るものだろうと思う。そういうものがないければ、やはり人間はどうしても宗教的になれない、宗教的に生きて行けないとう所があるのぢやないかと思う。だから仏教なら仏教を全部国体信仰に変えてしまふとか、キリスト教を国体信仰にしてしまふうような行き方は、それは少し行き過ぎであつて、それでは本當の信仰とうものは得られないと思う。殊に田舎の農村などに行つて見れば、天子様を拜むとううようなことは、もつと自然的な感情として根ざしていると思う。併し同時にお寺詣りをするに何等の矛盾を感じていない。そのお寺を無くするとううか、これを全

く今までのものと違つた形にしてしまふとううことになれば、やはり大衆の宗教心とううものは満足されないと思う。そうでなくして現在宗教の新体制として必要なのは、やはり私は一種の宗教改革に依る教義の進化とううか、或は革新に依る宗団の統一とううようなものが現れて来なければならぬのぢやないかと思う。そういう方向に行かずに、これを全部国体宗教に向つて統一してしまふとううことになれば、余程問題があるだろうと思う。

津久井 明治維新の時にはさういうことをやろうとしたのでしようね。それで成功しなかつた。

三木 現に、ロシヤの場合でも、それは形は違ふけれども、一種のソビエトとううものに対する宗教的な信仰に依つて、従来のキリスト教、ギリシヤ正教を全部追ッ拂つてしまおうとううようなものだったろうと思う。併しやはりそれは成功しなく

て、結局徐徐に昔の民衆の宗教を何等かの形に於て認めて行かなければならなかつた。だから日本に於ても現在の宗教新体制の問題に就て考えなければならぬ大きな問題があると思う。

岸田 キリスト教は今日相当根強く一種の文化的使命を植民地あたりでも果していると思うが、日本の仏教のお坊さんとか、神道の神主とかいう人達は、そういうことを今まで一寸もやっていない。これは僕は信仰のあるなしということよりも、人間的に宗教的感情というものを持つているかいないかということの違いぢやないかと思う。キリスト教の宣教師の仕事を見たり、本で読んだりして見ると何か、日本の宗教家が持つていないものを持つてゐる。兎に角宗教家として何か信仰の質が違ふ。殊に今度のような事変が起ると、そのことが痛切に感ぜられるのだが、今後の宗教教育にしても——或は一般教育にそれは依るのかも知れない

いが——此の点は余程考うべきことであつて、どうも今の日本の宗教的感情には、吾々が生きて行くこの人生の生活の中で、何かしら敬虔な気持というものが非常に足りなくはないかと僕は思う。例えば學問に対する場合でも、或は芸術に対する場合でも、一応それを尊敬するし、それに情熱を傾けもするのだが、何かしらそれに対する敬虔な気持というか、自分がその中で安心立命を得るといふような気持が日本人には欠けているように思う。これを作るということは、果して宗教家の宗教の力に依るのか、或は教育の中に盛らるべきもつと別な力に依るものかそういうことを僕は少し知りたいと思う。

三木 それが非常に重要な点で、色々な問題が考えられると思うのですが、現在の日本の風潮を見ると、悪い意味に於ける個人主義は兎も角として、主観主義というものが非常に強くなつて、自

分を超えた客観的なものに対する信仰というものが非常に少くなっている。これが詰り色々な思想的混乱と言うか、統一のない大きな原因であると思う。西洋に於ても近代のプロテスタントに対する大きな反対というものは、要するにそれが主観主義、個人主義になつて、客観的なものに対する信仰がなくなり、随つて社会的な統一というものが維持出来ないということが喧しく言われ、そこにカトリックなどが復活すべき理由があるというように主張されているのだが、それと同じように、日本に於ても今は非常に全体主義とか何とか言うが、これは今あなた（岸田氏に）の言われた或る自分を超えた客観的な大きなものを認めてそれに敬虔な気持で頭を下げて従つて行くという気持ではなくて個人主義的な主観主義である。ですから自分を超えたものに対する敬虔な物の考え方というものは、それは学問から言つても、真理という

ものは自分がどうすることも出来ない客観的なものである、自然の法則というものは吾々の勝手にすることの出来ないものである、斯ういうものには頭を下げなければならぬという所に依つて立派な科学心が出来、教育が出来ると思うが、そういう所が非常に今足りないと思う。これはやはり宗教から言つても非常に重要な契機になつていていると思う。それから今一つ、満州や支那に於ける日本人の有様と、外人殊に宣教師あたりの活動の仕方が違ふという点に就ても、色々な理由があると思うが、やはり日本人には自分の国を離れて生きて行ける安心というものが足らないのぢやないか。その安心というものをキリスト教は与えていると思う。自分の国を離れても安心して働いて行けて其処で死んでもいいというようなものを与えていると思う。日本人は有難いことには政治的に言つても国家の力が非常に強くて、それに頼つて行か

れたこともあるのですが、それと共に反面自分の国を離れて来ると、やはり一人では行けないような、落付けないような弱い所がある。これを与えるということが、大陸に於ける日本人の活動を考えても、宗教の最も大きな仕事でなければならぬと思う。そういうことを現在の仏教などでも本当に自覚して考えているかどうかということが私は問題だと思う。

岸田 どうかすると、今あなたの仰つした日本を離れて安住の地を見出すことが出来ないことは日本人の弱味だということとは反対に、それが却て強味であるかのように考える考え方が一方には相当強くないかと思う。そういう点で宗教教育という問題も一つの矛盾に打突かるのではないか。又自分の国を離れて他処に安住出来るということがキリスト教の強味であると解釈するよりも、寧ろ日本の国家にとってはそれが反国家的なものであ

ると考えられ易い、そこが非常にデリケートな所である。

三木 それはデリケートな問題であるが、兎に角西洋の場合に於ては、そういうキリスト教徒の気持というか能力というか、それを政治家が利用して、それに依つて自国の発展を図つたのである。それ自身としては自分の国家というものを忘れてしまふようなことになる危険はあるにしても、そういうことを政治家が利用して行くということも出来る訳だし、又そういうものがなければ、どうも海外に於ける自国の発展ということは難しいのではないかと私は思う。それにはどうしても一つには現実には於ける仏教の教団の統一、詰り宗教改革ということが必要だと思う。満州あたりに行つて見ても、所々に分村して来た村がある。そういう所では各人の家の信仰が非常に違つてゐる。浄土真宗の者もあれば、真言宗の者もあり、禪宗の者

もあれば、日蓮宗の者もある。そうするとお寺を建てるにも建てようがない。随つて止むを得ず——と言うとよくないかも知れませぬが、結局お宮を建てる。従つて仏教に根ざした伝統的な宗教的感情というものは可なり間隔のあるものになつてゐる。だからそこに果して安住しているかどうかということは私は疑問に思う。そこに大きな問題があると思う。今はそういうものを仏教の革新に依つて与えなければならぬと思う。

岸田 今まで何か宗教政策というようなことで、そういう相当大きな方針が政府から与えられたことがありますかね。明治維新以降何かありますか。

津久井 宗教団体法案というようなものが問題になつたことがある。今はどうなつたか知らぬが

……。

三木 大体日本の明治時代の教育は西洋の所謂自由主義教育であり、宗教なしの教育として始まつた

のでしようね。所がそれから以後宗教の必要が感じられて來たのですけれども、それではどれを今度やるかということになつて來ると、或る地方なんかでも問題を起すことがある。或る一つの宗教をやる。そうすると反対の宗派の者は直ぐ反対を唱えるというようなことになつて、事實上宗教教育をやるうにも今の教団が対立して居る間はやれない。併しそれでは本当に根本的にそういう対立というものが一つの深い教義に根ざして居るのかと言つと、私は必ずしもそうではなくして、寧ろ現実の教団の持つて居る經濟的關係、檀家の關係、そういうものに非常に囚われていると思う。そこに教団の革新というものが行われなければならぬと同時に、それに應ずる教義の革新ということがなければならぬと思う。

岸田 宗派というものは相当古い歴史を持つて居るだろうし、儀式にしても、檀家の種類にしても相

当長い歴史があつて、中々どういふ風にするかということは難しいことだと思ふ。

三木 吾々から言わしても、私なんかは元来自分の

家は浄土真宗ですが、西洋の學問をやつた關係上、キリスト教などにも興味を持つて、昔から大分本を読んだり研究したりしている。併し自分が死ぬる時になるとやはり浄土真宗で死ぬるだらうと思ふ。(笑聲) そういうものであつて、宗教というものとは伝統が非常に必要なんですから、それを無視することは出来ないと思ふが、其の伝統の革新が今非常に必要になつて來ている。だからそこに宗派の統一ということをしなければならぬ。

津久井 そういう問題が起つた場合、教義というようなものでも、一応は根本的な詮索あるいは検討をして行かなければならぬ。そうなつて來ると、やはり種々の事情があつてなかなか難しい事情がそこに湧いて來る。そこで結局余り難しくこねな

いで説いて行こうということでズツと來ているのだと思ふ。

二、科学と宗教

岸田 確かに近代の科学心というのが一種の反宗教的なものとして動いて來た事實はこれは認めなければならぬ。又そういうことが確かに西洋でも十九世紀の頃に再批判されている。一つの信仰というものと科学というものとの關係に就て色々考へたりした人もある。今日になつて、既に十九世紀に西洋に於て議論済の科学論宗教論というようなものを蒸返すということは要るまいと思ふが、そういう一つの指導精神をハッキリさせる必要はありますね。

三木 これは實際を言えば、本当の意味に於ける科学と信仰という論争がよく分らなかつた。そこが弱味になつて居る訳です。同時に国體の問題もあ

るのだが、やはり国体も科学的に国体に関する思想を導いて行く。そういうことをやらなければならぬ。それを出し抜いて宗教とか科学というものを一致させることは出来ぬと思う。

岸田 現在新体制というものは詰り合理と非合理との世界観を一致させるところにあるというようなことを言つて居る人がある。合理と非合理ということが果して反対を意味するかどうかは別として、何か別の言葉で言えば科学的信仰と言つてもいいのぢやないかと思う。そういう点で一つ紛糾を起さぬようにハッキリした一つの途をつけて貰いたいですね。

三木 其の点は哲学者の一つの大きな責任だと思う。所が日本の哲学の事情から言うと、日本の哲学は昔から来た古い形而上学の段階であつて、西洋に於けるが如く科学と哲学、詰り形而上学と科学が闘争をして出て来た哲学ぢやない。そこに一

つの哲学の弱味がある。ですからそういうものを深く探つて行かなければならぬし、又能力を持つて行かなければならぬと思う。

津久井 先刻岸田さんの仰つしやつた宗教的な敬虔な気持というものは、宗教でなくても、ヒューマニズムというような考え方からでも出て来ることはないですか。

三木 それは教育家のペスタロッチ¹という人が代表的なものだと思う。ペスタロッチは宗教と言つてもヒューマニズムというものを掘下げて行つたようなものだと思う。

岸田 唯ヒューマニズムというものは、これは分析も出来るし、合理化することも出来る世界ぢやないかと思う。そこには倫理の理解というものがある。そういうものを含めてのヒューマニズムとい

¹ Johann Heinrich Pestalozzi 1746 ~ 1827、スイスの教育実践家。

う問題を取上げれば確かにそこまで行くべきものだと思う。唯ヒューマニズムと言うと、これは科学の対象として宗教に結び付いたものとして今まで規定されたのだが、やはり宗教に一步踏込んだヒューマニズムというものは、恐らく今の話のよ
うな敬虔という一つの世界であつた。そこで宗教か、或はヒューマニズムかという境界がそうハツ
キリして居ないぢやないか。

三木 詰り新体制での宗教問題というものは大変難しいと思う。教団の統一と言つても、中々これは簡単に出来る問題ぢやない。

三、教育について

岸田 先に教育の話が出たが、教育のことで何か御意見はありませんか。僕は斯ういうことに気が付いたのです。この前子供の本を見て、対話で書かれた文章がどの位あるかと思つて調べて見た時に

偶然読んだのですが、尋常四年の本に「五作ぢいさん」という課がある。それは貧乏な老人が村役場で税を免ぜられる。そうするとその爺さんが役場へ行つて、どうして自分だけ税を免ずるのか、外の者は皆納めているのに、何故自分だけ納めないのか、と言つて、どうしても自分は納めると言う。すると役場の吏員が、お前は収入も少いし、不幸続きだから、今度は役場でも可哀想だと思つて税を免じたのだから、その好意を受けたらいゝぢやないかと言うが、どうしてもその爺さんは承知しないで税を納めると言う。役場の書記が困つて、それでは村長さんに相談して置くからと言つて爺さんを宥めて帰すという話がある。それを読んでみると、それは納税を奨励する為の文章ですが、そういう趣旨を国民に徹底させるのに選んだ人物という者が、如何にも自尊心と言うか、我の強い人間で、又これを教えている先生もそのお爺

さんにそんなことを言わないで帰れと言いたくなるようなお爺さんであり、子供もそれを見てどうもおかしなお爺さんだなと思うようなお爺さんである。(笑声) 単に税を納めるということを奨励

する為に一人の模範的な国民をそこに取上げた積りであろうが、それがどうもこれでは逆も国民同士が旨く行かないと思われるようなお爺さんである。斯ういう例は僕は日本の教育の中に色々あると思う。これを一体どうしたら教育の当事者に本当に気を付けて貰うことが出来るかということです。僕が若し教師だったら生徒に屹度何か一言言わないではいられないと思うのです。例えばこの爺さんに子供がいるとすれば、屹度欠食児童だろうと思う。税金を免除して貰ったら子供に何か旨いものでも買って食べさせてやった方が国民としてはいいのだ、ということを一言付加えずにはいられないような爺さんである。そういう精神が

今の教育の中に殆ど無意識の間に瀰漫して居はせぬかと思う。これは国民を健全に育て、行く上に非常に害を流すと思う。

三木 そこは今出たヒューマニズムの問題だと思う。根本に於ては——。そのヒューマニズムの一つの面として、ヒューマニズムというものは一つの人間の理想的な型、タイプというものを求めている。所がそういうタイプというものが、スッカリ大抵の者の中に入っていないと思う。詰りどういふ人間が本当の人間であるか、どういふ人間が本当の日本国民であるかという完全な人間の像が眼の前に置かれているのだろと思う。そういう氣運が、私から言えば要するに人間を全く機械的に、何かの或る目的に従属させてしまう。例えば納税なら納税ということだけに従属させてしまつて、あとは人間でなくても何でもいゝというようなやり方、考え方が非常に多い。ですから全体觀

とか何とかいうことは近頃喧しく言われているが、そういう全体的な人間の像というものが一寸も浮んでいないと思う。

岸田　ですからそういう人間が若し教育の根柢にありとすれば、今新体制の指導に当たっている者が、新体制でありさえすれば人間でなくても宜いという事になつては大変だということを僕は非常に感ずるのです。これを少し突込んで皆様に考えて戴きたい。一体にどういふ人間を作るかということに就て、教育は最も考えなければならぬ筈だが、併し案外浅い所で止つてゐるのぢやありませんか。

津久井　私はその問題はその問題として十分に追究して行かなければならぬと思うが、ただ国家の機関が何かやるということになると、必ず一種のそういう形式的な不具的な、何か生命の通わないものになつて来る弊があると思う。これは外国でも

恐らくそうだろうと思うのですが、日本は殊にその弊が強いのではないかというような気がするのです。だから僕が何時も官僚主義というものを排斥するのはそういう所からも来ているのだが、新体制でもあれが一種の半国家的な機関になると、そういうことは今よりは良くなるし、又良くしなければならぬと思うが、實際やつて見ると結局大した変り映えがしない傾向が非常に多いと思う。そういうものを補つて来たものは、僕は今までの文芸だとか芸術だとかいふものであつて、そういうものに依つて学校で教えられない本当の生命のある、ヒューマニズムというような精神の通つた人間というものが教えられて来たように思うのです。そういう点でこれから凡ゆるものが統制されて来るということになると、今までそういう役割を果して居つた者も非常に制限されるということになつて来る嫌いがあるから、そこで教育なんか

も根本から改めて貰って、そういう風な傾向にならないようにやって貰う必要があると思う。

岸田 そこで、教育という問題に土台を置くとすれば、国民としての自己完成ということを先ず第一に掲げるにしても、どうしても茲に一つ人間的反省に基く、人間的反省を基礎とした国民的自己完成という風にハッキリとそれを出さないとけないという気がする。国民というものは人間に違いないのだが、更に「人間的反省に基く」ということを此処で強調しなければならぬように思う。

記者 国定教科書などを見るたびに、そういう気がします。

岸田 感心な人間を書こうとする、または感心なことをしたことを書こうとする。所がその感心なことをした人間が必ずしも感心な人間ではないということがある。

三、政治の文化性

三木 現代の文芸なども段々そういう傾向が濃厚になつて行きつつあるのぢやないかと思う。併し本当の政治家という者はそういう者ではない。やはり国民はどういう人間であるかということを全体的に掴えている者が政治家でなければならぬと思うのだが、そういう点に於てはやはり東洋には、昔の儒教などというものも一種の政治思想だが、完成した人間というものはどういふ人間かという一つのアイディアがあつた。それから政治が出て来ている。だから昔の政治にはやはりそういうものがあつたと思う。所が最近になつて来ると、まるで国民というものをただの道具として取扱うということになるから、或る一つの目的の為に、皆それぞれの目的に応じて従属してしまつて、全体的な生きた人間というものが掴まれていない。

1 「四」となるべき所だが、底本のママ、以下同様。

岸田 現在は国防国家に必要な国民を作るという方向に総てがなっている、それは無論必要で、それ

に対して各専門部門の者はこぞつて協力しなければならぬが、そればかりを追っていると、今言つたような隙間が段々広くなつて行きはせぬかと思う。この隙間を守るということが、やはり国防国家の為に非常に重要なことではないかと思う。その隙間を守る任務として、僕は今仰つしやつたような文芸とか文学とかいうものを一つ加えたい。これをラヂオでこの間も話したのだが、文学の側衛的任務……。

三木 側衛的ではない。最も基礎的な任務だと思う。例えば科学というものは、これは實際国防に必要であつてまた役立つものなんだが、併しそういうものを発達させた、やはり真理なら真理に対する愛、そういうものがなければ科学も発達しないと思う。そうするとそういう真理に対する愛という

ものは、直接に国防ということとは関係がない。併しそれが結局国防にも役立つのだと思う。ただ国防と言うとそのことばかりを考えて、真理に対する愛というものがなければ科学が研究され発達され得ないものだというような方面がスツカリ閑却されている傾向が非常に強いと思う。

岸田 ですからそういう方向に氣を付けてそれを守るのがこの際自分の任務だということを確信している人達、そういう人達の存在を許さなければいかぬ。僕はハッキリ公認しなければならぬと思う。

津久井 私は国防国家という名前は、そういうことを強調する上からは必要はあると思うのですが、併し日本主義という立場から見ても、国防国家というような呼び方は誤解もありますし、非常に消極的で余り感心した言葉ではないと思う。寧ろ真理国家であるとか、詰り世上の真理なり、理想なりを遂行する国家が日本であるという風に言つた

方がもつと大乘的でいゝと思う。国防国家と言う

と、何でもそれに非常に卑近な眼先のものを総て持つて来るという誤解を起し易いと思う。

三木 やはりそういう点に於て、現在日本主義とか、日本精神とか言つても、本当のいいものが出て来ないと思う。今言われたように、仏教的な言葉で言えば、現在やつて居ることは総て小乗的で、大乘的な所が一寸もない。もう少し大乘的な精神というものが現れなければ、本当に日本が所謂道義国家として発展することも出来ないし、東亜の新秩序、或は世界の新秩序の指導的な役割を果すことも出来ないと思う。

岸田 大乘的な積りでいる人が、指導者の中にも随分いるでしょう。

三木 併し国民に向つて言つてゐることは総て小乗的ですね。

岸田 それは小乗的だということを理解させる必要

がある。

津久井 初めは大乘的な所もあったのだが、段々苦しくなつて小乗的になつて来たという点もあるね。

岸田 そういうことに關聯して、僕はまだ政治家や官吏諸君とは余り話して居りませぬけれども、僕等の言葉の表現がどうも通じないような気がして随分不安なんです。一つそういうことで何か教えて貰いたいのですが、文化ということでも、僕は文化部で斯ういうことをやりたいということを一寸書いて見せたんだが、これで分るかなあと云う。それは決してこちらがえらいことを言つてゐるというのではなくて、何でもないことでも、斯ういう言い方で分るかなということが大分ある。例えば僕は政治に文化性を持たせたい、政治に文化性を与える——これは分るでしょう。

三木 それは非常に大事なことです。

岸田 所がこれが中々通じないのだ。僕は先ず文化部面——と言うと非常に範囲が広いし、それぞれの専門に分れているが、併しそれぞれの専門部門の機能を發揮して日本の文化を向上させるとい

うような仕事をしようとするにしても、その土台になるものはやはり政治に文化性がなければならぬ。それだけが独立して政治から離れていゝ、というのではない。どうしても今までの政治に文化性がないということを先ず改めて行かなければならぬと思う。今までの政治が民衆から離れていることの一つの大きな原因は、政治に文化性がないからだということを言うのだが、それがどうも通じ難くて何も言えなくなつて来る。

三木 そこを何回も繰返して言うことが、岸田さんの仕事ですよ。

津久井 それが実行されるということは難しいこと
1 大政翼賛会の文化部長としての仕事、を指すのだらう。

かも知れないが、繰返して主張するということが必要である。

岸田 それを成程と分るように言う方法は色々あると思う。それを教えて欲しい。

三木 政治の文化性ということは色々あると思う。現在国防の為に色々な物資が不足し、物が乏しくなつて来ているのだから、そういう乏しい生活に耐える為には、心を豊にするということが非常に必要だと思う。それでは如何にして国民の心を豊にするかということを考えなければならぬ。物が乏しくなつたから心も貧しくしなければいけないというようなやり方が少しでもあるとしたら、そういうやり方は避けなければならないと思う。この場合、そういう心の豊かさを与えるものが文化だと思ふのです。

岸田 今まで政治に哲学がないとか、或は文学がないとか、色々なことをそれぞれの部門の人は言つ

ていたと思う。つまりそういうことが全体として

政治に文化性を与えよという声だったと思う。例えば代議士が非常に下品だとか、或は役人の言うことが拘子定規だとか言われることは、何れも政治に文化性がないという所に帰着出来る訳なんだが、どうもこれは其の原因がどこにあるかということになって来ると、銘々個人々々に向つて、あなたは明日から改めなさいと言う訳にも行かないし……。

三木 どうもお上から出る文書でも、達してもピンと来ないですね。そういう表現一つだけでも変えて行けば余程違ふと思う。

岸田 民衆心理というもののから離れているということもある。政治に文化性がないと言うと、それでは文学には政治性があるかというようなことになって来て、どうも向うへピンと響かない。その文化性のない点に就て、もう少し啓蒙的に話して

戴きたい。

三木 これは政治家の教養の問題でもあると思うが、同時に日本の社会に於ける一つの欠点は、これまで政治家は政治家、軍人は軍人、文学者は文学者、科学者は科学者同士という風に、全く孤立的に交際して居たと思う。それで政治家と軍人、文学者、科学者というような者が一緒に集まつて、公のことを議論するということでなしに、日常の交際をしながら楽しく色々な話をして行くその間に、お互の気持も分り、思想も交換が出来るというような有意義なる交際の様式というものがなかつたと思う。これが出来て来なければ私はいけないと思う。だから今後はやはり政治家が学者とか、芸術家とか、思想家とかいうような者と進んで一緒に話をする。ただ考えとか意見を聴くということだけでなしに自分もザツクバラに話をする。向うからも話して貰うというような、そう

いう場所なり機会なりを作って行くということが非常に必要だと思う。日本の学校でも、例えば総合大学などと言っても総合大学の实がないという

ことが能く言われるのですが、社会生活そのものに於ても、余りに自分と同好の者ばかりが交際して他との交際が足りない。例えば同じ文筆の仕事をしている者でも、文芸評論家と政治経済評論家というものは全く孤立した存在である。一所に集まってお互に理解し合うというような機会が少なかった。今後はそういうことをやるのが文化部の仕事として非常に大事な仕事だと思う。そういうことに努力して戴くと、向うも啓蒙されこちら

も啓蒙されて非常にいゝと思う。目的のない交際というものが必要である。所が官吏でも人を集めれば何か初めから目的を以てやる。だから本当には成功しない。そういう意味に於ける交際が発達していないということが、日本の社会に於ける大

きな欠陥です。これが色々なものがイビツになって、ふうわりしたものが出て来ない大きな原因ではないかと思う。

岸田 そこへ行くと、新聞や雑誌の方の人は一番交際範囲が広い訳だね。

記者 まあそうかも知れませんね。ある意味では一番社交的でしょう。他の社会では實際縁なき衆生が多いようです。しかも知らないくせに陰口を利く人が多い。AはBの陰口を利き、BはAの陰口を利く。それでは本当に自分が裸になつてやれるかと思うとやれない。お互いに理解がないのですね。

三木 陰口を利くというのはお互に理解しないからである。私はザック balan に話をすれば案外に一致する所が多いと思う。何か公の文書とか何とか公式にばかり拘泥わつて居るから、非常に窮屈になつて一致しない。

岸田 文書などを読むと実際の肌触りが悪いからね。

三木 それは又日本の言葉の欠陥でもある。話す言葉と書く言葉に非常に懸隔があり過ぎる。その為に書いた物だけでは中々通じない所がある。

四、国語の問題

記者 そこに問題が随分ありますね。先刻の五作爺さんのことに關聯するが、小学校で作文を作らせるのに、うちのお父さんが斯う仰つしゃいました、姉さんが斯う仰つしゃいました、と書かなければいけない。言つたと書いてはいけないのです。併しどうもお父さんが仰つしゃいましたでは氣持が通わないと思う。

岸田 第一自分の親父のことを余所の人に対して仰つしゃつたなどと言うべきものぢやない。国語問題なども方々で色々篤志家が研究して居るし、

無論専門家も研究しているのだが、これは放つて置けば一層混乱するばかりだから、寧ろ早く統一したがいゝのぢやないか。

三木 フランスなんかでは始終アカデミーでやっている。そのアカデミーには、軍人も政治家も、色々な人が入つてやつている。一体此の問題は今までの国語専門家だけでは解決出来ないと思う。そこには軍人も入れ、政治家も入れ、学者も入れ、文学者も入れるというようにして、初めて解決出来ると思う。所が国語問題と云うものは、段々国語問題の専門家の方に移つてしまつて……。

岸田 移つたけれども、誰もそれを取ろうとはしなかつた。それについて僕は、いずれは各方面の人に委員になつて戴いて、国語問題の研究を一応して見ようと思つてゐるのです。

三木 それは非常にいゝことですね。實際斯ういう座談会なんかが日本で流行るということも非常に

象徴的ですね。というのは余所の国では斯ういう座談会は始終やっていると思う。所が日本では斯ういう座談会を態々開かなければ、例えば吾々三人が斯うやつて集まって斯ういう問題に就て話す機会も持てないのぢやないか。

岸田 先刻も言ったのだが、雑誌にただ喋ったことを出すというだけでは僕は進んで出席する気になれない。やはり此処へ来て誰々と話したいという気持が起るから来るのである。

五、思想と指導

津久井 日本は小さい国で非事に特殊性というものがあらゆる方面に多いと思う。何か訳の分らないような力と言うか、そういう存在がある。私は今度の新体制なんかでも、先刻の政治の文化性を増すということが非常に貢献すると思つて居るし、又そういうことが非常に大きな任務だろうと思つ

のだが、段々見て居ると、必ずしもそうでないような所が出て来る。近衛さんあたりでも初めは非常に文化的だったのが、段々變つて来たような気がする。

岸田 近衛さんは、やはりあの人は政治に文化的なものを注込むだろうという期待が相當大きな魅力になつて居ましたね。講演などを聴いても、そういう点で大衆に受入れられるということは面白い。

記者 少くとも分り易いという感じを持つたんじゃないですか。今までの政治家のように難しいことを言うのでなくて、易しい言葉で言つて呉れる。

三木 所が此頃近衛さんも段々難しくなつて来たね。

岸田 どうも易しいことを言つたと揚足を取る者があつて危ないのだね。分るから危ないというのは困るが……。

三木 もういゝ加減で揚足取は止めなければならぬと思う。そういうことをやって居つては統一が出来ないし、積極的なものが一寸も出て来ない。

岸田 思想というものは、所謂絶対思想というものから見れば多少不純なものを持つていても、その人が心の中で色々と思ひの闘いをしてつある人だとすると、たま／＼その持つてゐる思想に多少の不純さが目についてもその苦しんでいるという誠実さによつてもつと日本の為になるという人がある。思想というものはそういうものだということはどうしてもハッキリさせなければならぬと思う。

三木 人間的に信用の出来る人ならば用いるという風にしなければならぬ。人間的信用というものを全然度外視して単なる符牒としての思想となつたのでは困る。そうなればそのレッテルを早く貼つた方が勝たぬ。人に妙なレッテルを貼られるよりも、

俺は斯ういふ思想だと言つて早くレッテルを貼つたがいゝということになつて来る。

岸田 兎に角或る一つの事に對して一生懸命情熱を傾けてゐる人が、今までの習慣とか興味とかいふことで、どうしてもそういう言葉を使わなければ自分の思想が現せないというので使つた言葉を直ちに取上げて、危険な或は不純な思想をその人が持つてゐるといふ風に考えるとこれは日本にとつて今一番損なことだと思ふ。

三木 一番危険なことは、新体制の機構そのものが官僚化して行くことだな。

岸田 官僚ゴツコになつては大変だ。

津久井 そういうやり方では迎もうるさくて仕方がないと思う。そういう氣風を打破して行かなければならぬ。少し氣が付いた人間はそういうことに近付くのが嫌です。少しでも真実味のある、人間味の籠つたことを言つては攻撃されたり、揚足を

取られたりするというのはやり切れない。そういう点に於て役人は自然可もなく不可もない者になるという風になつてしまふ。

三木 言葉の上だけでは、敵を愛せよとか色々な善い言葉があるのだが、どうもうまくゆかない。何と言つても今のこの難局を切抜ける為には、国民の総力を借らなければ出来ないのだから、色々な意味に於て力のある人間が協力する必要がある。その綜合された強い力を旨く使うというのが本当の政治家だと思ふ。段々段々自分で外の者を排斥して自分を弱めて行くというようなことは、貧すれば鈍するといふ場合に吾々にもよくあることだが、これでは自分から落目になるより仕方がない。もつと榮える時には外の者も容れて行かなければならぬと思ふ。

岸田 僕は思想そのものの影響力というものよりも人間の影響力の方がズツと強いと思ふ。立派な思

想でも人間が詰らなければその思想を殺すようなものだし、逆に仮に個人としてはまだ自由主義的な考えを持つてゐる人間でも、兎に角今自分は国家の為に尽さなければならぬのだという氣持を強く感じ、そういう情熱を奮い立たせるならば、その影響力というものは、その人間の自由主義的な思想の力よりも、一層民衆を奮い立たせる力になると思ふ。そういうことが僕は政治家に分つて欲しいと思ふ。

三木 つまり人間的信用というものがあつて思ふ。そういう人間的信用を政治家は利用してゐない。直ぐ杓子定規に札を付けてしまふ。

岸田 經濟の方で言う自由主義といふ言葉と、一般の哲學等の方面で使われている自由主義といふ言葉とこれは一緒にしてしまつていゝのですか。

三木 自由主義という言葉は、岸田さんなんかの使つてゐるのは非常に広い意味なんだが、普通自

由主義と言えはやはり歴史的に限定されたことを言っている。例えば個人主義であるとか、或は經濟に於ける營利主義ということを言っている訳です。ですからそういう点に於ては一定の歴史的

思想としてはやはり自由主義というものは變つて行かなければならぬでしょう。併し個人主義の持っていた個性の尊重であるとか、人格の尊重であるとか、或は個人的創意、獨創性、斯ういうものは生かして行かなければどうにも發展の仕様がなない、元來そんなに突然に新しいものが出て来る訳のものではないのですからね。

岸田 そこなんです。今までと全く違つた思想がこゝに考え得られるかどうか。今までの有ゆる思想の中で、本当に日本の進歩に役立ち、又實際國家の發展に役立つ思想の力というものを考える場合に、その考え方は自由主義的考え方とか、或は個人主義的な考え方だということ、一切の思

想を片付けてしまつていいものかどうか。そういうものをすっかり排斥したら、一体どんな思想が出来るか、その可能性を僕は考える。

三木 そこに符牒の問題というものがある。つまりスローガンの問題です。闘う為にはスローガンが必要である。斯ういうものがある。斯ういうものもあるというのでは闘えない。詰り自由主義反対とか、何々賛成とかいう一つのスローガンに依つて初めて闘えると思う。所が例えば西洋に於て、中世から近代へかけては全部否定で来た。中世にはヒューマニズムはなかつたというようなことから検討して、自然主義はなかつたとか色々なことを言っている。併し今日客觀的な観点から言えば、中世の中にも脈々としてヒューマニズムがあつた。又自然を重んじている思想があつた。そういうことから近代まで来た。然し闘う場合には、中世反対ということを云わなければルネサンスが出

て来ない。ですからそこに中世反対ということを書きながら、併し同時に実際にやっている人は、意識的にか無意識的にかこれまでの善いものを自然に生かしている。言う所は一面から言えばどこまでも絶対的な否定でありながら、同時に自分のやっている現実の行為は肯定しているという人間が初めて成功もし、歴史的な役割を演ずることも出来るのだと思う。例えばナチなどを見てもそうだ。ナチはボルシェビキ反対を唱えて居りながら、実際やっている所を見ると、スターリンなどのやっていることを非常に取入れていると思う。ですからそこに必然的な非連続性、理論的連続性と言うか、そういう微妙な兼合いがある。

津久井 やはり今言ったようなことが非常に問題になるのです。何か運動をやるうとすると、少し無理であっても何でもスローガンを掲げて進まなければならぬ。或る問題が起きると、反対か賛成か

ということを決めて掛かなければ運動というものが成立しない。私は實際運動家と思想家、思想家、評論家と一致しない点はそこにあると思う。思想家とか評論家は非常に豊かな気持で、あつちの方にもこつちの方にも思いやるということが必要だと思うが、實際運動に於てはそれが出来ない。そこで僕は何時でもギャップを感じて居った。だから僕が此頃書くことなんかが前と違うというのは、そういう立場が違ったということもある。そういうものを実際に調和して行くということは中々難しいことです。

三木 本当の実践家というものは、そういうスローガンを掲げながら、実際やっていることは前のいゝ所を生かしている。それに依つて初めて成功している。或は生れながらに前のものを具えて居つて、自分は知らずに前のいゝ所を生かしているというような人がある。所が反対というスロー

ガンを掲げて、その額面通りやられては困る。そういう形式主義が日本ではないけない。だから反対ということはあつてもいい。併しやっていることは形式的に自由主義なら自由主義全部を排斥するのではなくて、自由主義のいい所は飽くまで生かして行くということを見せなければならぬ。そこがつまり政策だと思う。所が日本ではそうは行かない。これまでの悪い所はやはり形式主義的に否定される。

岸田 だから明治時代に日本の過去の善い伝統まで無くしかけたという点もある。欧化と言うと、日本をスツカリ捨て、しまうように考えたことがある。

三木 明治時代の本当に偉い日本人という者は、文学者でも、政治家でも、或る一種の日本的な風格を持つてゐる。併しその時代に於けるスローガンは、一種の西洋主義と言うか、欧化主義で。鵠外

などは代表的な例だと思う。非常に欧的でありながら、而も日本的なものを持つていた。併しその為には鵠外が直ぐ日本主義というものを唱えては発展しなかったと思う。そこなんです。だから今日日本主義を強調するのは宜いが、併しそういうことを強調する余り、つまり西洋的ないゝもの或は科学的的精神を忘れてしまつて、政策に於ても取入れないし、やり方が全く形式的にそういうものの排斥になつてしまつてはいけない。今日の本当の偉い人は、或る意味に於ては自由主義反対を言いながら、自由主義を本当に身に付けて実行している人、日本主義を言いながら本当の西洋の善い所を身に付けて実行している人ではないかと思う。

岸田 そういうことが本当にピンと来なければ、政治的魅力がないと思う。實際額面通りにやられるという感情を民衆に与えることは非常にいけないと思う。

三木 然しこれは政治家の人間味に対する信頼性だ
と思う。人間的にあの人ならばこんなことを言っ
てもやらないという一種の安心と云うか、信頼と
いうものがある。その反対にこの人はと言えば屹
度顔面通りやるから困るというような場合もあ
る。

三木¹ 外交というものは額面通りにやるのでは駄目
だ。外交の行詰りはそういう所にあると思う。

岸田 併しこれなんか所謂国民組織が出来て、推
進力になる人の意見というものが出来て来れば何
か動くんじゃないかと思う。その間にバラバラに
なつて居つたんでは逆も駄目だ。

三木 要するに指導者政治というものは、やはり人
間的な政治ですから、人間的な政治の出来ない人
が指導者政治ということは出来得ないと思う。近

¹ 三木発言が連続するが、津久井の誤記か三木の連続か
は不明。

頃は指導者、指導者と言うが、指導者とは何かと
言うとは額面だ、それでは人間味のある指導者はあ
り得ないと思う。

記者 ではこの程度で……。 (了)

底本：『日本評論』1940.12

明日の科学日本の創造

毛里英於菟：1902～1947、福岡県生れ、東京帝大

法学部卒、国家官僚、満州国官吏を経て、興亜院・

企画院課長等を歴任。この当時は興亜院經濟部第

一課長。

三木清

科学技術の世界観的転換

三木 一体、主題は何んというのですか。

毛里 雑誌の方では「明日の科学日本の創造」と云うことを考えているようですが……

三木 何か毛里さんにいゝ御考えがありませんか。

毛里 いや、フリーハンドですよ……。私の考えが間違つて居たら三木さんどうぞ……

三木 いえ、どう致しまして、私の方が教えて戴きたいので来たような次第です。

毛里

実はさきほど学生に講演して来たのですが、その時にも言つたのですが、支那事変を通じて日本民族が実現すべきものを考えて、若い青年に對して特に僕は強調する点は、日本民族の空間意識の問題です。今までの世界構造におきましては、民族の空間、或は生活空間というものが具体的に意識され、把握されていなかった。それは世界の構造、自由貿易という十八世紀的な世界構造の中に於いては、空間意識というものが、具体的に、はつきりと把握されてなかったと思うのです。然し、日本民族の今確立しようとしている新しい世界構造を処理するためには、日本民族の空間意識に非常な革命が為し遂げられねばならない。私は、民族の生活空間のデメンジョン【Dimension】を外延的にも明確に把握すると共に、その空間を充実すべき民族意識を明確にしなければならぬと思うのです。空間を充実するものは、民族の綜

合的な文化であつて、民族の創造性に非常に大きな

新しい衝動が起らなければならないと思うので

す。日本民族が空間意識を具体的に把握すればす

る程、空間を充実すべき文化力、或は民族のエネルギー

が総合的に、全体的に高揚されて行くことを

追求する。この場合に、日本の科学技術という

ものが、新たに非常に大きな問題となつて現れて

来ると思います。科学技術が従来 of 如く、経済の

補助者としての地位から、もつと高い文化地位と

いうものを持つて来る。何となれば、空間充実の

意慾は、空間の自然法則を具体的に把握した科学

の所産によつて、高度に充される可能性を有つ

らである。

それから、繰り返すようであるが、自由貿易の

世界構造の下に於いては、民族の空間は、経済的

にのみ把握され、従つて非経済的な空間は、無価

値なものとされ、自らの空間を全般的に把握され

ていなかったと思うのです。

科学技術の日本的性格

毛里

日本の科学技術は近代的な科学技術に覚醒

した瞬間から、それが経済との闘争に終始してい

るに過ぎない。或は経済の従属物としての科学技

術に過ぎなかった。即ち、科学技術は形而下的存

在としてあり得たに過ぎなかった。然し今や、科

学技術は民族の生活空間を充実するための民族エ

ネルギーの表現創造として規定されなければなら

ぬ。科学は民族の生活空間の中に存在する天地人

の全エネルギーを全部的に發揮するために、自然

の法則を把握する追求であり、所産であると思う

のです。然し科学の場合には結局、民族の生活空間

間であつても宇宙の一部分ですから、生活空間の

中に於ける宇宙、又は自然の法則の認識も全宇宙

の法則の認識と共通であらねばならないのは勿論

です。従つて科学の所産は人類に對して、そういう意味に於いては普遍的であると思うのです。

欧州が、近代科学というものに覺醒した瞬間、それは御承知の通り宗教と熾烈な闘争がなされた。宗教との熾烈な闘争は、又、大自然と取組んでその熾烈なる闘争の所産によつて克ち抜かれたのである。そこに欧州の科学技術の何んと言いますか、大きな歴史的性があるように思う。然し日本の科学技術は、さつき言つたように近代のそれに覺醒した瞬間から經濟のための闘争であり、又、經濟との闘争だつたのです。だから依然として科学技術の闘争態度が經濟との闘争に墮して行くならば、こゝに科学の従来的意味に於ける振興があつても、民族的立場から言えば、欧米科学に對して後進性を持ち続けて行かなければならなくなるのではないのでしょうか。だから我々は、科学者、技術者、或は科学、技術の問題に對して、この民族

の後進性を本当に克服するためには、大自然との闘争という民族的大転換を行わなければ、今言つたように世界の科学技術に對してまた遅れ続けるという感じがするのです。そういう意味から言つても、民族の生活空間というものを具体的に民族が把握すればするほど、その空間を充実にして行くための自然との闘争意識が盛り上つて来ると思ふのです。そして科学者は民族の、自然との闘争の尖兵としての地位を獲得し、技術者は尖兵の戦果を地上の果実たらしむべき充実者となる。そうでない限りは、日本の科学技術は依然として、地上に於ける經濟闘争の成果以上のものを齎らし得ないであろうと思います。

プラंकは宇宙は拡大すると言いましたが、運動と共に宇宙は拡大する。民族の生活空間も亦、民族の活動力と共に拡大する。しかして今日まで日本民族の空間意識は、永く自由貿易の世界構造の

中に停滯していたと思うのです。自由主義の世界観の下に於ける空間意識は、経済的であり、平面的であり、普遍的であり、抽象的であつたと思うのです。しかし新しい世界構造に於いては、民族の空間意識は文化的であり、総合的であり、立体的であり、固有的であり、具体的になつて来ると思うのです。日本民族の空間意識も支那事變を通じて革命されつゝあると思うのです。民族の活動力が日本民族の宇宙を拡大しつゝあると言ひ得るでしょう。そこで私は日本の科学技術に対するスローガンの一つは、「日本の科学技術は新なる空間意識を獲得せよ、しかして自然と闘争せよ、そして吾等の空間を充実せよ。」少くともそれが一つの追求であつて欲しいと思うのです。

三木 今お話になつたことは非常に面白いと思います。科学や技術はお話のように自然に対する闘争というか、自然を征服するというか、そういう課

題を持つて居るのですが、そういう科学や技術は経済的な結果を齎すものであります。自然に対する科学的、技術的支配の結果、人間生活は経済的に發展するということになるので、そこに科学や技術の経済的意義というものがあるのです。ところがそういう経済的結果ばかり考えて、科学や技術がその方面にばかり利用されることになると、科学や技術の發展が却つて制限されるようになるのです。そこで科学や技術は、そういう制限から離れて、そうして自然に向へといわれるのは、私共も重要なことだと思ひます。殊に日本の科学や技術の場合は、最初から大体経済的目的を主として考えられたので、^{つま}竟り日本の経済的發展の必要から、西洋の科学や技術を学んだのでありまして、自然科学の根柢にある根本的な世界観的變革、哲学的變革というようなものは深く顧みられないということに、自然なつたのです。特に自

由主義經濟のもとでは、實際の問題としまして、会社なんかでも、科学者、技術者の創造的な活動を奨励するという方向に向わないで、寧ろ外国で出来上った技術を手つとり早く持つてくる、例えば外国のパテントを買うとか、機械を買うとかというようなことを考えたのであります。それが今日まで日本の科学や技術の進歩に対する一つの制限となつていたのでありますから、そういう意味で今毛里さんの仰つたように、自然科学が成立する根柢をなしている世界觀的變革の意義を、その經濟的意義から一応切り離して認識し、自覺することが、今日大切であろうと思います。そういう意味で科学の自主性というものの取返されることが、日本に於ける科学や技術の發達にとって必要であると思うのです。

このごろ科学振興ということに就て、たゞ応用だけでなく、基礎理論の方も行わねばならぬという

ようなことがよく言われるのですが、これはもちろん正しいのですけれども、然したゞ応用が發達するためには理論の發達が必要だというようなことでは根本的な轉換はなか／＼考えられないので、そこに自然科学に於ける世界觀的變革というものゝの意義が、自覺されることが必要であると思います。

これは西洋に於ける近代科学の發展の歴史を見ると明かなことで、近代科学は中世的な考え方に反對して、直接に自然に向つて、自然の法則を認識するという客觀的な、実証的な態度から生れたもので、中世的世界觀に対する一つの世界觀的變革というものが近代科学の根柢にあつたのです。ところが日本に科学や技術が輸入されて來た過程は、そういうところよりは寧ろ經濟的利用というようなことから來たので、今もう一度そういう根元にまで遡つて考えてみる必要があると思ひま

す。

科学技術に於ける民族性の問題

毛里 だから私は、科学の所産は世界に対して普遍性を持つているけれども、その民族が大自然と闘争して、宇宙の法則を汲み取るという熾烈な闘争態度は、民族が生活空間というものを具体的に把持して盛り上って来るのだから、そういう意味に於いて、科学を振興するというためにも、結局、民族の空間意識が新しく把握されて、その基礎から出発すべきだと思うのです。かくして科学技術が民族の全般的エネルギーに連なると思うのです。民族の世界観というものがはっきり確立しなければ科学というものは振興しない。こういうように考えたのです。

しかし、技術というものは、もつと民族的にストラギッシュ「#Strategisch（戦略上）の積りだろう」

の性格が横溢するものだと思うのです。客観的に見ますと技術というものは善でも悪でもない、凡ゆる技術の所産というものは善でも悪でもない。

その価値を倫理的に決定するものは民族の意志だと思うのです。だからその民族的意志というものが前提となつて、技術の所産の国家的価値、民族的価値というものが決定される。従つて技術というものを民族的に生かすためには、民族の意志というものを決定する世界観が基底をなす。それによつて初めて技術の性格というものも民族発展のストラギッシュな性格を有つと思うのです。

だから、そこで考えられることは、今仰つたように、所謂技術の所産というものを今までは文明だと言つて居ると思うのです。けれども、文明というものと文化——文化は、所謂精神的の所産、文明というものは形而下的所産だ——こういうようにまア一応の考え方があつて、文明というものと

文化というものを分けたと思うのです。然し、今のように考えると科学技術というものゝ所産も、結局は民族体に於けるガイスト【Geist 精神】が所産するものである以上は、もう文化と文明という概念の区分はなくなつて、共に民族的ガイストの表現として評価されるべきだと思うのです。

三木 科学や技術が民族の生活空間の充実というところから出発するというのは、結局、科学というものも実践的な意欲から出て来るということの意味だと思います。科学も元来実践的な意欲から出てくるもので、その実践の主体というものを民族と考えるわけでしょうが、そういう場合に、この生活空間というものの把握の仕方が問題になると思ふのです。科学は民族の生活空間の充実という実践的な意図から出てくるにしても、その空間の把握の仕方に、科学には科学としての特別の把握の仕方があるのです。民族の生活空間というもの

は各民族にとつてそれぞれ特殊なものです。科学は、そういう特殊なものから出発するにしても、その空間、言い換えると自然というものを見て行くに当つて、それを単に多様なものとしてでなく、「一つの空間」、「一つの自然」として、即ち一般的な法則に従うものとして見て行くのです。勿論民族の生活空間というものが現実の問題として科学の生れて来る実践的な動力になるということは認めなければならないので、そういう意味に於いては、どういう理論もその本を考えると、実践と結びつき、従つて技術的課題をもっているのですが、しかし科学が成立するためには、一旦そういう実践的立場を否定し、それから離れて、いろいろの特殊の生活空間でなくて一つの空間として、一つの自然として見て行くところに科学というものが成立するので、従て科学は民族に拘らない普遍性をもっているのです。

かように科学が一旦実践的、ないし技術的立場を否定して、純粹に理論的になるということは、それが却つて、真に実践とか技術とかに役立つことになるのです。民族の生活空間の充実にいうナチス的な考え方は、科学が技術的ないし実践的課題から生れたものと考えことに於いて正しいのでありますが、科学の本質そのものの証明として、は不十分であると思います。

然し、技術になると、それは科学の普遍性とは多少違ったものを持っています。技術というものは、結局、具体的ものを造るということが目的なことで、例えばこの茶碗というものは自然に於ける一本の木、一本の草と同じように具体的なものでありまして、こういう具体的な個々の独立したものを造ることは、普遍的な法則を探索する科学とは違ったところがあると思います。そういう技術は、生活空間或は自然の特殊性及びその民族の持つて

いる特殊な意志、意欲というものに制約されるのです。こういう点から考えると、そこにそれ／＼の特殊な技術が、それ／＼の民族の生活空間の特殊性に應じて発達し得る可能性が考えられるし、また実際にそうであると思います。

ところが従来の世界観に於いては、科学の普遍性というようなことをのみ強調して來たのです。そしてそういう科学の出て來る実践的な、技術的な課題というものと、科学との具体的な結びつきを忘れて、技術というものを哲学的に見てゆくことが殆どなかったのです。そこで今日「技術の哲学」というものが新しい哲学の問題として現れているのですが、実際に必要なことは、科学と技術との關係を正しく認識することだと思ひます。科学は元來、技術的な課題から生れてくるので、そして民族は、その生活空間に於いて一定の歴史的段階に於ける諸条件によつて制約された、一定の技術

的課題をもっているのです。しかし科学はこの特定のものから出発するにしても、一旦その実践的立場を否定することによって、普遍的のものになるのです。しかし更にこの科学をもう一度技術と関係づけて見て行くことが必要なので、科学の立場と技術の立場とを区別しつつ、しかも統一的に見て行かなければならないと思います。こういう見方が世界観の基鍵にならねばならないので、単なる科学主義の見方も、単なる技術主義の見方も共に抽象的であると言わねばなりません。

毛里 もう一つこういうことはしないでしようか、新しい世界観の中には民族の相対的存在というものがあるので、科学の所産及び追求それ自体には普遍性があつても、政治的に、或は民族的立場から普遍性ある科学を政治的に閉鎖する場合がある。従つて、他の民族の齎したところの科学というものを、そのまゝこれを自己の民族の生活に汲みと

ることが困難になるということも一応考えなければならぬで、そのことは或は過渡的な政治現象かも知れない。そうなれば科学それ自体に普遍性があつても、科学それ自体は民族が自らこれを獲得しなければならぬ。また、科学は常に宇宙の因果律を認識するものであるが、宇宙の一角に因果律の革命が起つても、民族の生活の意志と感情の上にそれを把握する力がなければ、民族の科学たり得ない、又その因果法則の解釈とは為し得ないので。

科学技術観の史的変遷

毛里 人間の科学技術に対する態度を歴史的に回顧して見ますと、マヌファクチュアの時代は、技術は頭と手とのハーモニッシュの結合であつて、それが人間の頭脳の創造性が、この手と頭との調和を破つたのである。その創造性から近代科学が発

展し、それに伴って近代的の技術が発達した。近代的の技術というものはクレフトマシーンとアルバイトマシーンとの機械的な結合によって出来た機械文明である。この新しい近代的機械文明の発展によって、マヌファクチュアに生活危機が来て、生活的にこれを否定する生活闘争があった。それから、第一次欧州大戦の経験から近代的の科学技術というものが、所謂民族の生死を決定するものだという深刻な把握があった。然し欧州第一次の大戦が済んで、先ず敗戦国から起った、あの大恐慌を通じて失業者が非常に出て来た。そして各国の人が一応機械文明に対して大きな一つの疑惑を持って来たと思う。第一次戦争後に於ける色々な評論、論文等を見ると、その傾向が非常に濃厚であった。これは寧ろ、その時代に於ける経済生活、

1 おそらへ「Kraftmaschine」動力と「Arbeitsmaschine」作業機械、とていつちもうたう。

国民の生活が所謂、経済恐慌という形に於いて歪められ、人類の近代科学技術に対する疑惑だつたと思うのです。今度の欧州戦争を通じて再び近代的の科学技術が民族の生死を決定するということを本当に、更により深刻に、より具体的に把握されて来たのみならず、独逸の失業者の消化と科学技術の発達と両立せしめた政治形態は、経済からの科学技術に対する疑惑を解放した。而も所謂、自由主義的、普遍的な文化精神というのが凋落して、新しい国民文化的な、或は民族文化的な段階に入りつゝあるとき、民族それ自体が科学技術の自主性を持つて行かなければならないと云う追求が、次の時代の指導者の任務、或は担任者としての民族の追求として、旺盛になつたと思うのです。

三木 今お話になつた問題は、歴史的に思想史的に見て行くと、近代科学の発達の結果ヨーロッパに

起つた大きな出来事は、産業革命なのです。産業革命は、一方に於いては近代科学に基いた近代技術による生産の飛躍的な発展を齎したのですが、同時に他方起つたのは、いわゆる社会問題なのです。そこに種々の社会悪が生じたので、科学や技術に対する呪詛さえ現れました。そういう社会問題を如何に解決するかということが新たに問題になって、社会科学というものの重要性が生じたのです。そして科学というものが、たゞ自然科学ばかりでなく、社会科学もなければならず、また技術というものが自然科学を基礎にした技術ばかりでなく、社会科学を基礎にした社会技術、つまり政治というものも重要であるということになりました。その場合に従来の社会科学は、丁度、前に言いましたように、技術から抽象して科学の普遍性のみを考えるとというような、抽象的な世界観に立っていたのです。

科学技術の現階段的規定

三木 それが最近になって民族の問題というものが重要になって、一つの思想的転換が生じたのですが、この場合にもやはり同じ問題があると思います。竟り今日科学技術と言われているものには、自然科学及び自然科学を基礎にした技術の問題と密接にからみ合つて、社会科学的、政治的問題というものがあるのです。そこに今日の科学問題、技術問題の複雑さがあるのです。その新しい解決を求めて行く、竟り自然科学的な見方と、社会科学的な見方というものを如何に一つにして行くかという問題、それらを統一した世界観というものが要だと思ふのです。そういう点において従来のマルキシズムのような考え方は、十九世紀の自然科学主義的な考え方をとつて社会科学を考え、また技術的生産というものを重んじて居る点に於

いても、自然科学と結びついて社会科学を考えようとしているといえるのですが、それに対して新しい見方は寧ろ逆に歴史というものの本質を究明して、そこから自然科学をも考える立場をとらねばならぬと思います。ともかく、科学とか技術とかの本質を新しく把握しなおして、そこに社会科学と自然科学との統一的な見方が作られねばならないと思うのです。従って自然科学や技術の本質についての考え方も、大きな転換が必要になって来て居るのではないかと思います。

毛里 今の科学自体の段階から言っても、マルクスの考え方というのは、いわゆる十八世紀の原子論に立つ、唯物論的、機械論的な見方に過ぎなかった。今日は科学それ自体が量子論を通じての宇宙観を把握しつゝあると思うのです。量子論に立てば十八世紀的な機械論的宇宙観、機械論的、唯物論的科学観に革命が来ているのであると思うので

す。量子論それ自体がもう今までの機械論的なものではなく、形而上的なものと形而下的なものを綜合しつゝある。いわゆる演繹的因果律自体も不確定の原理観が発展しつゝあり、一方において、例えば、物質の本質は、微粒子と波動によって成立するものだと言われつゝある。微粒子は、極小のマスであり、波動は極大の宇宙のエネルギーである。この帰能【帰納】的存在と演繹的存在の二元的なものからなる認識は、この二元的なものより高い立場に於いて綜合する認識となりつゝあるように思う。

私が科学と技術の問題になぜ興味を持ち出したかと言えば結局、量子論的な科学的な見方と、いわゆる形而上学的認識と一致し、それが日本的な、全体主義的な世界観に矛盾しなくなつたように思うからである。今までは精神文化の基礎になる形而上的認識と、科学的認識論がかう一致する段階

に入りつゝあると思うのです。量子論の段階に於いては、科学の綜合性それ自体を完成しつゝあり、この点も全体主義的な世界觀に共通のものであり、同じ立場だと思ふのです。

新世界觀の確立と科学日本の創造

毛里 こう考えますと、日本の科学技術を真実に躍進させるために一つの政治的断想があると思ふので、この断層をどうしても科学者技術者と吾々が協力して充填して行かなければならない重要な点があると思ふのです。だから、そういう意味に於いて日本国民、我々官僚の感覺というものが、依然として法学者流の把握、綜合精神しかない、そこに非常に大きな問題がある。それは、日本に於いては、特に従来科学に対する国民の認識が形而下的なもの、唯物的なものと考えられ、従つて精神文化の下に科学の地位を置いていることで

す。そこで、科学は国民生活に対して二次的な地位に置かれていと思ひます。

それは、国民の科学觀が依然として、十八世紀的な原子論に立つ、機械論的宇宙觀に停滯しているためであり、又、科学者、技術者自体の科学觀が、それに停滯している限り当然であると思ひます。この国民の科学觀の停滯と科学者自体の科学觀の停滯を革命して、初めて科学技術が政治的にも、国民的なもの、民族的なものになつて来ると思ひます。最近日本に於いて科学技術の問題が如何に盛んになつて来ても、それが本質的にこの停滯に規定されている限り、前進はないと思ふのです。吾々官僚——科学技術者でない——の追求も、今や綜合性の追求だと思ふのです。我々が生活感覺として創造性を追求することも我々自体の生活の中から、それが出て来るのです。結局、今までの官僚というものは法学者流に、いわゆる国

民生活の法的規則、或は解釈運用ということで国民に臨んで来た。しかし国防国家の建設は、他人に頼らぬ独立精神と自己のエネルギーの綜合性の追求となつて現れて来る。かくて官僚が国民生活に対する受動的なコンサルティングエンジニア【consulting engineer】としての役割はなくなつて来つゝあると思うのです。綜合性を追求するといふことは、受動的の立場に於いては出来んと思うのです。従つて、我々自体がこの国民生活の前進過程に於いて進歩的の役割をするためには、コンサルティングエンジニアからクリエティブエンジニアとしての立場をはつきり把握しなければならん。そういうようになれば国家自体の権力的の機能というものも、民族全体のための能動的機能をはつきり持たなければならん。従つて国民生活に対する国家の態度というものも、自由主義の時は受動的であつたが、今の段階に於いては能動的な、

創造的な機能を持たなければならん。これと同様に日本の科学技術も、綜合のためには、民族の生活空間の全的把握が必要になつて来ると思ひます。我々事務屋も、科学技術者の感覚も緊張したクリエティブなものでなければならぬのです。最近のドイツを調べても、矢張り技術者が法学者流の官僚に対して、或は企業体の中に於いても経営者に対し、技術者が第二次的な立場に置かれてゐる事実があるようです。科学技術というものが經濟の從屬物として、經濟に從属してゐる世界觀にある限りに於いて、結局、法学者流が技術を不当に支配することになるのです。だから技術者の水平運動という政治的な、現象的な追求では、科学技術者の勝利は来ないので、国民文化の上にそれが輝かしい地位を獲得する為には、彼等自体の科学觀を十八世紀的なものから解放し、国民の科学觀をそれから解放する闘争が要る。即ち、日本

民族の世界観というものが、全般的に変つて來た段階に於いて始めて科学技術が、国民生活の前面に押し出されて來ると思うのです。

ドイツに於いての文献を調べると、これは最近の雑誌ですが、ドイツの經營的な立場に於いても指導的立場をとる者は依然として法学者流の者が多い。その法学者流の者は、結局、地主、或は金持の子弟というものが法学的な立場に於いて指導的の立場にある。然しドイツの科学技術自身の新しい世界観が確立されるに従つて漸次、科学技術は国民生活の前面に登場して來ている。だから、私は科学者、技術者の個人の政治的立場に於いての水平運動である限り、それは時代的役割はないと思うのです。だから科学者、技術者それ自体が、民族的の世界観を把握して、その世界観の追求としての運動であるならば、それは極めて進歩的な役割をするだろうと思うのです。

科学と東洋的世界観

三木 私は量子論の問題について論ずる資格はないのですが、ともかく今日の科学が機械論的な考え方ではなく、全體的の考え方であるということとは、一般に言つていゝことだろうと思います。ところで今日、日本の科学などといわれる場合に注意しなければならぬことは、科学に於ける綜合的な見方というものは何処までも分析を含んだ綜合なので、分析なしに、一躍して何か綜合的な直観に立つというような考え方が危険であるということです。東洋と西洋とは、西洋において近代科学が生れるまでは、東洋に於ける技術も西洋に劣らず進歩していたのに、どうして東洋では近代科学のようなものが生れなかつたか、ということについて、反省してみる必要があると思うのです。それから政治というものは綜合的なもので、またそ

うでなければならぬということは、私どもも絶えず言っているのですが、たゞ同時に起る危険は、官僚というものが、自分が総合的なものになってしまつて、専門家、これは分析の立場に立つつというように比喩的に言えるのですが、その専門家というものを重んじないで、自分が全体であるかの如く自分で何んでもやつて行くというような風ができて来て、それが色々に非難されるところであらうと思います。尤もこれにも理由があるので、逆に見ると、これまでの専門家というのが単なる専門家で、総合的な見方が欠けておつたということもあるのです。そこで専門家自身が自分を越えた総合的な見方に立つ、例えば、技術と科学との關係にしましても、科学者は直ぐ理論々々と言う、技術家は技術家で技術々々と言うて居たのでは何時まで経つても結びつかないの
で、技術家が科学者の立場を理解し、科学者が技

術家の立場を理解するという、一つの総合的な見方をもつて自分を越えて行かなければならないと思うのです。そういう点で、今日の総べての人が一種の世界觀的變革を自分に於いて實現するというようになって行かなければならないと思います。日本人の考え方は総合的だと言われて居るのですが、それは確かに東洋のいいところなんだけれども、今日では、そういう総合的なところが西洋人よりもむしろなくなつてしまつて、非常に局部的な考え方になつて来てはいはしないかと思うのです。つまり単なる直觀でなく、分析を含んだ綜合が必要なのです。今日全体主義と云つても依然としてセクト主義というようなものがあつて、本當に全体の立場に立つところがあるが足りない。このセクシヨナリズムというものは、いわゆる全体主義を非常に主張している官僚諸君の中でもないかなか抜け切らないので、そういうものを先ず克

服するということから初めて綜合的の世界觀、全体主義というものの実践が出て来なければならぬと思います。

毛里 だから量子論的科学体系に於いては先に言つたように物質は微粒子と波動から成立する。この二元的のものが物質の実体だとすればこの微粒子は、極小だと思うのです。けれども、それ自体からは物の本体は把めない。もう一つ、全体的存在としての波動というエネルギーを、より高い立場に於いて綜合する科学的立場が出て来るのである。それは、全体主義、計畫經濟と云うようなものであり、こういうものは、結局、劃一的な、一元的なものに論理的に統一することではない。多元的なものを、そのまゝ肯定しながら、より高い立場に於いて綜合するものだと思ふのです。だから今言われたように、いわゆる全体の立場を持つということは、国民生活の中に、或

は、民族の中に——殊に東洋に於いては東亜共榮圈の中に於ける民族というものは沢山ある、その生活的の機能というものも非常に多元的なものである、また民族自体も非常に多元的である、その多元的なものを一元的なものに揚棄するということではないと思う。それから殊にこの民族の問題になれば、民族それ自体というものは、相對的關係に於いて常に不合理な存在としてあり得る。その不合理な存在、多元的な存在を、より高い立場に於いて秩序づける、それが民族の問題だと思ふ。それと同じように、綜合性は、国内に於いても、計畫經濟は多元的なものを一元的なものに統一することなく、多元的な不合理な存在を、政治的の技術としても否定すべきではなく、非合理的なものを肯定して、肯定した立場に於いて高い秩序に持つて行くこと。ですから指導者の地位に於いて、自己の主觀に於いて統一するものではなく、

より高い民族的の世界観に於いては非合理の存在を非合理の存在として肯定し、より高い立場に於いて統一して行く、そう云う東亜の民族的新秩序が可能だと思ふのです。

今、私は自分としては、外国の本を一冊読めば必ず日本の古いものを一冊必ず読んでいる。それは、結局、人間を忘れないためにです。天地の間に於ける人間というものを本当によくこゝで把握する。この人間というものを把握せずして外国のいろ／＼の本を読んでも、結局、読めば読むほど人間というものを忘れてしまうという心配から、自分はそうしているのです。こゝで大きく世界観を本当に確立するためには人間、天地に於ける人間の地位というものを、はつきり把んですネ、そうして民族、或は国民の概念を充実に行くことが必要だと思ふのです。十八世紀的な、機械論的な人間の認識から解放されねばならんのです。

三木 新しい科学的な考え方の変化はいろ／＼のところから言えるでしょうが、こういうことも一つあると思ふのです。それは物理学なんかに於いても、新しい物理学では場という考えが重要である

と思ひます。心理学なんかを見ましても、古い心理学は矢張り心というものを抽象して考えて、それからその働きを考えて行くというような風であつたが、最近の形態心理学では心理的の場というものを考えて、その場の中で心の働きというものを考えて行くというようになってゐるのです。大体、東洋的な世界観の持つてゐる良いところは今言つたようなところにあるのだらうと思ひますが、人間というものから考えて行かないで、矢張り場というものの、東洋の自然というものはそういう場の意味をもつたものなのですが、自然の中に於いて人間を考えて行くという、場の考え方ではないかと思ひます。そこに東洋の道義的な考え方

の特色も出てくると思うのですが、民族というものを考えるにしても、自分から考えて行くのではなく、場から考えて行く、従つて或る意味では自分をなくして考える、単に無くしてしまうのではなく、自分をなくすることによつて却つてほんとに自分を生かして行くという、これが東洋の道義的な考え方であると思うのです。西洋の人間主義、或は人間中心的な考え方に対して、東洋の考え方はそうでなくて、場の考え方を持つているという特色があるので、その点、ドイツあたりの民族主義でも矢張り、人間主義的な考え方と同じように自分から出発して考えていると思うのです。東洋的な考え方は、そうではなくて自分を大きなものゝ中に捨てゝ、これによつて自分が本当に生きるという考え方であつて、これが東洋的な自然観の大きな特色で、これがまた今日の科学の考え方、竟り場の考え方と合致している、面白いところで

はないかと思ひます。従つて民族的エゴイズムとは違うので、その違うところを今言つたようなところから考えて行くと、そこに新しい民族観というものが確立されて行くのです。そうでないと民族主義と言つても、矢張り結局は個人主義というか、自己中心的な、西洋流の考え方が抜け切れない。それを抜け切るところに西洋流の人間中心主義とは違う、東洋的な人間観というものゝ大きな特色があると思ひます。これがまた科学なんかの考え方と合致する良いところなので、そういう意味に於いて、東洋的な考え方が生かされて来ることが必要だと私は思うのです。つまり東洋的な道義という一つの考え方を、新たに科学的な哲学思想にまで高めて行くということが大切であらうと思うのです。

科学国家創造方策

毛里 だから、この科学技術の問題がですネ、国民生活の全面に登場する段階に於いて、国家の具体的な政策部面に於ける表現は、結局、国土計画というものに於いて科学技術の新しい性格が教育されなければいかん。だから国土計画というものでも、今まで申したような世界的な把握に於いて見るので結局、法学者流の事務屋が、これをやれば、その新しい世界観の中に於ける科学技術の地位というものは出て来ない。従つて国土計画は従来のな、既成計画の相乗船になつてしまふと思う。けれども、僕は国土計画というものは自然力、例えば気象学的な諸構成、或は地質とか、或は地下水とか、或は伏流水とか、こういう一つの自然力の構成、それから、その次には資源力ですネ。資源力というものを、例えば地下埋蔵資源の構成、或は地上に於ける農業生産性の現在構成、そういう

うあらゆる生活空間の中にある自然的の、潜在的の、或は現在の条件を科学的に綜合して、その把握によつて、利用のための民族の聰明——科学技術の企画が即ち国土計画だと思ふのです。従つて、自由主義経済の時には、私は支那大陸の奥地に在つた石炭というものを、自己の生活空間の中のものとして把握しなかつたと思ふのです。結局、支那にあつた鉄とか、その他の自然的資源力も非経済的存在として、生活には無関係だつたと思ふのです。だから結局、自由貿易の構造下に於いては、一番世界のはずれからでも、それが安くて経済的ならば、それ自体を需要して行く、従て自己の生活空間にある具体的エネルギーを民族自体の生活と結びつけて考えなかつたということがあつたと思ふのです。

それから又、各民族の生活空間の中に於いて、自然的の資源力というものの永續性というものを、

世界に対して考えなければならんと思う。アメリカの石油があと何年あるか、そういう問題について、各民族の持つ自然的資源力というものの、相対的の永續性を維持して行く追求も必要です。従つて、いわゆる国防経済、国防国家というものの、経済的な考え方というものは、出来るだけ生産を極度に拡大するということではない。民族の悠久な生活というものを世界に対して、強く維持して行くための節制ともいふべきものだと思います。そう考えますと、結局、国土計画というものは自分の生活空間の中にあるエネルギーの条件を全部的に把握しながら、それを民族の永久生活の発展のために如何に利用して行くか、そういうことも国家意思としての計画性の中になければならないと思います。

私はドイツの四ヶ年計画局というものは、日本で考えられているような生産拡充それ自体の機構で

はない、今言つたような世界觀的な把握に於いて、結局、ドイツ民族の持つ生活空間に於ける資源の存続力と、世界の資源力の存続力を考えて、原料革命をやるものだと思うのです。世界の石油資源が、こゝ何年続くか、それは世界全体の消費から考えれば大体三十年と、こう考えれば、その三十年後に於いて、ドイツ民族が世界の生活に於いての用意を持つために、今から原料革命をやっているのが液体燃料の四ヶ年計画です。だから毎日々々今日の生活のために科学技術を役立てるためでなく、民族の悠久な發展性というものを他の民族に対して相対的に、大きく維持するためには如何にすべきか、自己の生活空間に於いて必ず無くなる、或は世界全体として無くなる、これに対して民族の生活を強くするためには如何にすべきか、というところにその世界觀的基礎があると思う。民族的世界觀は悠久な世界觀、従つて經濟に

対する見方、生産力に対する見方、自然力に対する見方、科学の追求に対する見方と云うものが、日本の代用品なんかと云う觀念とはまるで違ふと思うのです。無いから代用品を使うというのではなく、この代用品こそが民族の生活のための本当の所産だと、こういうように見る世界觀が必要だと思ふのです。だからドイツの今日やっている四ヶ年計画の基礎は、生産力拡充という經營的な組織ではなくして、原料革命の世界觀的使命を實現しているものと思ふのです。今からの經濟の要素は民族のガイストだと思ふのです。従つて民族の意思というものの、或は知性というものが、いよいよ問題になつて来る。で、こゝでそういうように考えると、一つの一つの小さな問題かも判りませんが、私が一万円の保険に入つて居るとする。それと私の生命が一年でも二年でも延びるということゝ無關係です。然しこれを見たとした場

合には國民の死亡率が1%でも2%でも減つて、國民全体の國家に対する奉仕力というものが1%でも2%でも増加するということは大きな經濟力だと思ふ。また國民の生命エネルギーを高度化するために、住宅或は色々の保健施設で國民の勞働生産性を國家が高めて行くことが現實の保險だと思ふのです。そういう意味から言つても、どうしても國民の、そういう生産性を高度化するための國家の態度というものが全體的に、綜合的に、必要になつて来る。これは國民に対する強制保險だと思ふ。國民の保險であれば、これは今の保險制度と違つて毎年々々の掛金を資金的に運用して、その利子によつて給付して行くという考え方から脱却して税になるのです。毎年々々税として國民保險が入つて行くと、それを物とか、住宅とか、舗道施設とか、保健施設とかというものが國民生活の全面に出て来て、それが國民生活の一つの実

質的の賃銀として給与される。そのことをなぜ考えるかと言へば、将来の東亜共栄圏の自給自足的な構造を造つて行くと、そうすると自由貿易の時から、一時は結局、コストが高くなると思うのです。コストが高くなるということは、他の世界に對して弱い生活ということを意味する。民族的の立場をとる時はそうであつてはならないので、如何に高い原料、コストのものを使つても、相對的には強くしなければならぬ。自由主義の場合にはそのコストを下げるという經濟的の追及が何に現れて来るかと言へば、一つは國民の生活程度を下げるということだつたと思う。一つは科學技術によつて生産性を高度化して相對的にコストを下げて行く、こういうことであつたかも知りませんが、今後に於いては私は三つの行き方があると思うのです。一つは、民族の生活程度を相對的に下げる。この場合、下げるということは國民生活の

全体の無駄を省いて、合理的に、實質的に上げて行くということでありうる。それから大陸經濟に於けるコストを下げるためには、大陸それ自体を海洋的に構成して行かなければならぬ。従つてドイツ、ロシアの最近なしている運河は大陸經濟の立場に於いて出て来た文明で、そういう一つの綜合的見地から矢張りコストを下げて行くという技術が生れて来た。それからもう一つは如何に高い原料を使つても國民の持つ生産性が非常に高度である限り、そのコストは相對的に低くなつて國民經濟の強さを増すことになる。この三つが今後の日本國民經濟の指導精神であり、日滿支或は東亜共栄圏の空間編成のシュトラギー【Strategie 戰略】であると思う。

そこでいよいよ問題になつて来るのは國民生産性の高度化は何によつて行われるかと云うことであるが、それは國民の科學技術の高度化によつて行

われる。従つて、それが停滯すれば東亜共栄圏構成は弱くなる。民族全体の立場から断じてその停滯を肯定し得ないと思う。従つてそれを克服するためには科学技術が国民生活の全部に浸透しなければならんし、またそれは浸透させ得ると思うのであります。

三木 今お話になつたことに就いては別に意見はありませんが、国民の生産性を高めて行くには科学や技術が大きな役割を演ずるということは明らかなことです。そういう科学や技術を国民の間に普及して行くのに、どういう方策をもつてやつてやつたらいいかということが、現実の大きな問題になっていると思います。これは今科学技術の動員というようない一つの形で現れているよりも、もっと大きな問題であろうと思うのです。それは広く言えば国民の間に如何に文化を普及させて行くかという問題になる訳ですが、この問題につい

て、国土計画的な考え方というものが、もっと追求されて行かなければならないと思います。竟り科学や技術を国民の間に普及させて行くためには、国民というものを、抽象的に考えずに、それぞれの地域に生活する国民というように、考えて行かなければならないと思うのですが、そういう点に於いて、地方文化の開発ということが非常に大きな意義を持つていると思うのです。

科学国家の建設と新文化形態

三木 大体、非常に一般的な考え方から言つと新しい世界の形は、近代の自由主義の遺産を継承しながら、現れて来る形としては中世的の形、新しい中世という形になるのではないかと思います。今旺んに言われているアウタルキー【Autarkie 自給自足経済】というのも、経済の中世的な形で、それが新しい内容をもつて現れて来たものと

いうように見ることが出来るのです。そういう見地から言いますと、近代的な世界の一つの特色であるところの中央集権主義的な文化形態というのが、地方文化の発達というものによって逆に分割されて行くというか、国土計画的に分割されて行くという形が出て来ると思うのです。ドイツあたりの持つて居る文化の強味というものは、フランスあたりの中央集権的な文化の分布に対し、ドイツは各地方に文化の中心が分散的であつて、そして、夫々、特色あるものを持つて居るところにあると思うのです。

そういう点から言うと、日本の経済或は工業の発達の状況を見ても、同時に文化の発達の状況を見ても、中央集権的の色彩が濃厚で、これは現在狭い意味に於ける国防的見地から言つても大きな問題になつて居ることで、この点が徹底的に改善されて行かなければならないのです。科学や技

術の綜合化といつても、それが中央集権的な綜合化という方向をとつて来て、地方文化の発達というような逆の方向が、まだ十分に考えられていないのではないかと思います。この点について、今後、統一ということは分化があつて初めて統一があり、綜合ということは分析があつて眞の綜合があるのだという関係、そういう関係をよく考えなければならぬと思うのです。今日例えば官僚統制というものに対して言われて居る一つの非難も矢張りそこにあるので、そのために統制というのが劃一的になつて、地方の実状に即さないことになる。殊に日本の経済なり、文化なりの状況を見ますと、西洋諸国の場合よりもつと複雑な、多面的な要素を持つて居るので、例えば中小商工業者の数が相対的に非常に多いというようなこと、これは一つの著しい特色ですが、そういうものを巧みに処理して行くということが必要なので

す。ともかく地方文化の発達ということがなければ、国民的な科学や技術の向上ということも難しいのではないかと私は思うのです。科学技術の動員ということでも、消耗的になつてはいかないので、これはドイツの計画経済はたゞ生産力拡充ということを問題にしているのではないという、あれと同じ考え方にならねばならないのです。たゞ消耗的に今ある力を使つてしまふというのでなくして、同時に蓄積して行くという方向から、科学技術の動員ということも考えて行かなければならないと思います。

毛里 今言われましたことはその通りだと思うのですが、いわゆる国土計画というのはフランスではこの前の第一次戦争の時に完成期に入つたのです。それはレジオナリズム【Régionalisme】いわゆる地域主義、一つの新しい郷土主義ですね、この地域に編成する計画というもの、そのスローガ

ンは「パリの脳溢血症状を救え」という。パリを脳溢血症状としてある限りに於いては、パリ自体が破壊された時はフランス全体の文化自体が崩壊する時だ、従つて、そのパリの脳溢血症状をもつと地方的に分散して脳溢血症状から救えという。東京も脳溢血症状に來ている訳ですネ、だから僕は日本の今の府県の編成というものは封建時代の徳川時代の藩の編成の上に立っている、従つて、その間に明治以後に於いて起つた経済の實質的の變化にも拘らず、なお依然として封建的の藩を基礎にした地域は、もう今の経済単位としての職能を持ち得ないと思うのです。もつと国民生活は複雑になり、有機的になつて來た。だからこゝで新しい経済管轄を全国に、十なら十に分割して、一つの経済管区を構成すれば、その地方民の生産歴史を通じて經驗的な、自然との闘争の条件が相当よく判ると思うのです。今まで国民の歴史的所

産、或は生産技術を通じて、一つの新しい文化形態が出て来ると思う。フランスのレジオナリズムを見ますと、芸術も郷土芸術、金融にしても郷土金融、そのレジオンにそのまゝ即応した、遊離しない、いわゆる国民の生活にそのまゝ合った形態で新しい文化形態が出て来るのです。精神文化にしても、自然科学的の所産にしても、そういうようにやって行けば、例えば日滿支でも一つのレジオン的に見て行く、そうして農業の問題とか、技術について考えてみると、日本の農業の技術は亜熱帯の農業技術である、それで蒙古の果てに米を作るというような技術的の追及は、新しい世界觀的の基礎に立っていないと思うのです。むしろ蒙古なら蒙古という自然法則を科学的に把握して、そうして、その自然の条件に、一番適合するものを作らして、それに新しい科学技術を加えて国民生活の現実の、生活のための、或は民族生活のた

め、空間充実のために新しいものを造りあげる。こういうことでなければならぬと思うのです。そうでない限り、矢張り日本の技術というものを、そのまゝ大陸の何処へでも持つて行くということ、は、技術の發展でも何んでもない。たゞ蒙古人が蒙古という自分の生活空間の法則を科学的に把握し得ないところを日本人が科学的に把握して、その法則に従つて蒙古で一番適切なる、天の理をそのまゝ実現する。そうして、その出来るものも最も高い技術で生産性を加える、そういう追求でなければならぬと思うのです。

(了)

底本：『科学主義工業』1941.1

新体制運動と国語の統一

国語協会主事 石黒修：（修治）1899～1980、愛

知県出身、愛知第一師範卒、国立教育研究所員、

国語協会理事、エスペランティスト。

慶大教授 加田哲二：（忠臣）1895～1964、

慶応義塾大学卒、社会学者、経済学者、評論家。

慶大教授、戦後は日大教授。

翼賛会文化部長 岸田国土

文部省図書監修官 曾野憲司：不詳

放送協会告知課員 小川和夫：1909～1994、東京

出身、東京帝国大学卒、NHKロンドン支局長・

報道局長、ジャーナリスト・英文学者。

評論家 長谷川如是閑：（萬次郎）1875～

1969、東京生まれ、東京法学院卒、大阪朝日新聞

社員、ジャーナリスト。

国語審議会委員 保科孝一：1872～1955、米沢出

身、帝国大学国文科卒、文部省嘱託として50年間、
国語政策に関わった。

評論家 三木清

本社・高橋主筆、清水文化部長

翼賛会の方向

国語の基礎工作

高橋主筆 ちよつと御挨拶申し上げます。今晚は「新

体制運動と国語問題」というようなことについて、
皆様のお話しを承りたいと思つてご多忙中おいで
を願つたわけでございますが、日本の国語を将来
どうするかということについてはいろいろの問題
があるわけでございます。国語純化という問題も
ございますし、何分、日本の文字は漢字を使つて
おります。そこへ明治になってから英語が入り、

更にドイツ語が入り、その他言葉の上にもずいぶん混雑が起っております。随つてそれらなるべく統一する事、又文体にしてもいろいろある文体をなるべく統一するという問題もございます。更に外国語の訳語を国語化するというか、標準化するとか。そういう必要もございます。こういう問題と新体制運動と関聯して、権威ある皆様のお話を伺いたいと思います。

清水文化部長 会の進行につきまして、この問題の練達の土石黒さんに進行係をお願いしたいと思ひます。

用語の統一

石黒 私、こういうことには不慣れでございますけれども、ご指名に従ひ進行係を務めさせていただきます。

最初に「各種用語の統一と整理」の問題につ

て伺いたいと思います。昨年の二月に陸軍では兵器用語の簡易化を行われましたし、標準用語関係では電気用語も統一をされました。又医学方面では医学用語、放送協会では放送用語の調査をやっております。この用語の統一、整理ということは実に大きな問題で各方面により同じものに対して用語が違つたり、同じ方面においてそれぞれの人によつて用語が違ふのが随分あります。中には用語が違ふために別な意味に考えていたり、甚だし

い時は、読んでゐる時に原語とか外国語を想起して、この言葉は恐らくこの外国語を訳されたのであらうと思つて意味を理解して行く様な場合さえあります。これをどう統一整理するかという問題であります。岸田さんのその方面について翼賛会文化部としての御意見を。

岸田 翼賛会としては国語問題を第一にとりあげるべき問題として今その準備に着手しております

が、さしあたり私一個の考えとしては一般文化の問題と同様、遠い将来の事を考えて一種の基礎工作をしなければならぬ面と、当面の解決を急ぐべき面とがあるので、その二つの面からこの問題をとりあげたいと思います。

国語問題は随分古くから各方面の權威によつて夫々意見も発表されております。いづれも理論的には傾聴すべきものだと思ひますけれども、些細な点で意見が合わないために根本の点がどうにもならず、そのままになつてゐるというようなこともあります。

この根本の点はいずれもひとしくそうならなければならぬという点で意見が一致しているにも拘らず、ただ技術的な部分でどうしても一致点を見出せないというものは、夫々の方面の協力によつてこの際一致点を見出し、その解決に向つて邁進したいと思ひます。たとえば漢字制限とか仮名遣

いとか或は横書きの場合は左から書くか右から書くかという問題などがこれです。

哲学用語の歴史

長谷川 どうです**三木**君、昔井上哲次郎博士が哲学用語を統一するというよりは、定める運動をされましたナ。明治十年代だったが。

三木 井之上先生らは哲学語彙の辞典を出されておりますネ。

長谷川 そうそう明治十四年に。

三木 あの頃の言葉と現在使つてゐる言葉とでは、いろいろ違つて来てゐます。

長谷川 あの時は支那の文献を主にして哲学の用語をこしらえた。

三木 今でもあの頃訳されたもので用いられてゐるものもありますが、最近では訳す場合になるべくやさしくしようという傾向が強くなつて来てゐると

思います。然し用語を統一しようというような運動は今のところ起っていないと思います。法律なんかの場合は六法というものがあるために自然に基本的な言葉が統一されて来るだろうと思いますけれども、哲学とか、他の文化科学の場合には、なかなか統一が出来ません。又これを統一しようという運動も、まだ現れていないと思います。

石黒 大体やさしくしようという傾向だけは、今日全体的に見られるようですネ。

三木 言葉がむずかしいというのは、外国から取入れた学問がまだほんとうに日本化されていない、学者の身についていない、そういう関係もあるうと思います。外国の学問をやつても、それが身について来れば、用語も自然にやさしくなるのが普通で、そういう意味でこれからは自然にやさしくなろうと思います。

石黒 一番困るのは「観念」とか「思想」とか「理念」

とか「理想」とか「想念」とかいうように「イデア」と「イデアル」に対して、それぞれの人がそれぞれの立場からいろいろなまぎらわしい言葉を使っていることです、それらを何とか統一して……。

三木 なかなか頑固な人がありましてネ。例えば「アムモニヤ」と書くべきだ、いや「アンモニヤ」と書くべきだ、そういう物理学者と化学者が対立して、なかなか譲らないということです。(笑声起る)

それから哲学のほうで言葉に統一がなく、むずかしいというのは日本では多くドイツ系統の哲学をやつてきた関係もあるうと思います。大体、ドイツの哲学者は、自分で新しい言葉を作ることを好むのです。随つてそれを区別して訳すことになると自然に言葉がむずかしくなるのです。

長谷川 明治初年にそういう言葉を翻訳した方が漢字の素養のある方だったから、みんな漢語に訳し

てしまわれた。そのため非常にむずかしいものになったんじゃないかな。原語を見ると、そうむずかしい感じがしないのでも、訳語になるとむずかしい。

用語と術語の問題

石黒 私の知っている教育学の畑の人が、ドイツへ行つて驚いたというんです。街を歩くとむずかしい言葉が沢山使われてある。どうしてドイツ人はこんなにもむずかしい言葉を日常使ってるんだろうと驚いたというのです。しかしこれは自分が哲学や教育の用語として習ったドイツ語の訳語がむずかしかつたのでそう感じたので、ドイツ人には日常語だったのです。

三木 術語というものをなるべく日常用語に近づけて欲しいですね

長谷川 けれども哲学用語なんかは哲学者が個人個人で別な哲学的の意味を考えているんで、どうしても哲学者は造語する必要があるらしい。観念内容が違うから言葉が違って来る。ところが、日本のは内容の意味は外国人のいうのを採つて、日本語の名前だけが違つたりするので変テコになる。どこが違つてるんだか、おんなじなんだか判らない。日本でも自分の哲学が出来たら造語をしてもいいと思うんですが。

三木 学問が国民の生活から遊離しているから、用語が自然にむずかしくなつて来るので、学問がもつと国民の生活の中へ入つてゆけば、自然にやさしい文字を使うようになるでしょう。

学者と用語

長谷川 ところが、学者は国民がふだん使わないよ

うな言葉を使おうとする（笑声）医者なんか、普通は「骸骨」というのを「骨骸」というでしょう。

何もわざわざ倒さまにしなくてもいいと思うんだけれども、素人のいう「骸骨」とは観念が違うんだから倒さまにするんだという。だから、それはまだいい。ところが「材木」を工学者は「木材」というでしょう。これなんか内容は何にも違ったものぢやない。

三木 ところが学者が意図する言葉のほんとうの意味は、説明しなければ判らないので、説明して判らせるものなら、わざわざ「骨骸」といわずに「骸骨」でもいいではありませんか。結局、むずかしい言葉を使わなくても、思想は言い現せると思います。

長谷川 日本人は何うもむずかしい言葉を好む癖がある。「ためらう」というのを、わざわざ「躊躇」

なんていうでしょう。言葉もむずかしいが、字もずいぶん画が多くてむずかしい。

三木 それは漢字の影響でしょう。

長谷川 それもあると思うが、難かしい言葉を使いたいという心理もあるですネ。よくいえば普通の人が使わない言葉によつて、芸術的な感じ、科学的な感じを出そうという気分があるんじゃないか。その原因は和歌なり俳句なりにもある。その方面ではそういう文学をやるギルド的ないろいろのサークルが出来て、それがギルドだけに通ずるような言葉を使う。それがため歌俳句を作ろうとするものは、どうしてもそのギルドに入らないわけに行かないようになる。そんなことから来ているんじゃないかな。

“用語”を“術語”とする事

岸田 用語という言葉を私は術語といいかえて、術

語という意味に使えば、これは學術の進歩につれて日々増えてゆくものなのですが、結局はこれを国語の標準語として公認するかどうかということの問題にすればいいので、従つてそれを公認する国家的機関が必要なんです。そうでなければ個人個人が新しい言葉を作ることを禁止する法律を作るより他し方がない。然しこれは實際問題として不可能でしょう。

ただ専門家が専門的な研究を発表するために一つの新しい觀念を新しい言葉に盛るということは当然許すべきことだろうと思うけれども、その必要のないものがただそれが新しい言葉なるが故に、これを得意気に使うという悪趣味を排撃するのは今の日本ではかなり必要なことのように思う。さっきの「理念」という言葉をやたらに使う如きはその一例なのではないか。

石黒 加田さんの御専門の方面では、そういう問題

はいかがでしょう。

加田 経済学の方面では、日常の經濟生活と深い關係を持つているものですから 用語の場合は理論的な方面の論争では、今まで割合に問題が少ないのです。實際問題の場合には、例えば「リンク制」だとか「バーター制」だが、うまく翻訳出来なかつたりする場合もありますけれども。

清水部長 新聞は、なるべく外語そのままを使わずに日本語に訳して大衆に判りいい言葉にするという事を原則としておりますけれども、学者の書く文章の中には、一般の人が読んでも判らない術語がかなりあると思います。それは専門書になる程多いのですが。

加田 地方などへ行つて講演すると「インフレーション」とか「クレヂットを設定する」というような言葉は、何のことが判らないで、聴く人は困つてしまうのです。ところが「クレヂットを設定す

る」というのは、ちょっと日本語にうまく訳せないですナ。

三木 それは国民の文化的水準の問題になりますネ。学者ばかり責めないで、一方ではこの水準を高めることを考える必要がありますネ。

加田 「インフレーション」を「通貨膨張」という言葉で現しても、又これを理解してくれないんです。「通貨」という文字の觀念が、一般的に理解されていないといってもいいのではないかと思っています。

清水部長 全体主義經濟の方向に向かってから、何か新しい言葉が出ておりますか。

加田 あんまり出ていませんネ。

三木 ゴツトル¹あたりを紹介した經濟学者の言葉には、普通の人には判らないかなりむずかしいもの

もありますネ。

加田 經濟を構成体として考えるというようなのは、ちょっと判りません。ゴツトルは特殊の用語を用いますから。

漢・洋、訳語の問題

機械その他放送用語の場合

機械名の訳例

石黒 今お話になった、どういう言葉をどう訳するかということについて、保科先生一つ。

保科 従来、訳語を造る時に漢字に頼っておったということとは、術語を非常にむずかしくしたのだと思います。併し、訳す時に漢語を使うと非常に便

¹ Friedrich von Gottl-Ottlienfeld (1868-1958)、ドイツの政治・經濟学者、ナチスの御用政治經濟学とも評される。

利であります。というのは、漢字をはめればちよつと急場の間に合うのですナ。併しその多くは純正な日本語にならない憾みがあります。そういうのが今までの學術用語には沢山あります。例えば蒲鉾なんかを造るのに使う機械は「攪拌摺機」と申します。併しあの掻き廻す機械を「攪拌摺機」と字音のままには誰も言いません。つまり、字音の通りに発音しては日本語にならないからです。漢字をはめたものが綜合して、一つの言葉になると

いいのですけれども、言葉にならないものが非常に多いのです。「ピストン・クーラー・オイル・ポンプ」これを「吸鍰冷却油唧筒」と訳しております。ところが誰も「吸鍰冷却油唧筒」とは申しません。普通には「唧筒」とは言わないで「ポンプ」「吸鍰」はピストンと言っております。また「ミシン」を陸軍では之まで「縫綴機」と訳して使用しておりました。「縫い綴る機械」ですナ。

（笑声）ところが、みんな「ミシン」と言つて「縫綴機」とは申しません。第一、語呂が悪いし、聴いただけでは、どういう文字か殆ど想像もつきません。「シリンダ」は「汽筒」と訳しておりますけれども、普通にはこれを「きとう」とは申しません。字では「汽筒」と書きながら、読む時は「シリンダ」であります。（笑声）こういうことが今まで沢山ありまして、これが學問の發達を非常に害しております。

漢語で訳語を造るということは、つまりバラツク建築と同じ様なものです。ちよつとの間に合つて便利であるが、しかし言葉としての生命は殆どないのです。漢字には一つ一つ固有の意味があります。元は同じ意味のものでも、自然に分れて来ます。例えば「総合」と「綜合」の如き、區別して使う必要のないものですが、近頃は糸偏に宗の「綜合」の方が學問的に偉いように思われており

ます。支那では「総」も「綜」も同じように使われております。即ち「總統」とも「綜統」とも用いますし、「総覧」とも「綜覧」とも用いています。漢字で訳語を造りますと、非常に理解が困難なものになって参ります。「甘しょ」という時に、艸冠の下へ「諸」を書いた「諸」を当てるのもあれば、警察署の「署」を書いた「薯」もある。これでは同じ物か違う物か判りません。海軍でも陸軍でも軍の威厳を保つために殊更にむずかしい漢語を使うという思想で兵器の名称を拵えました時代があります。けれども、今は出来るだけ容易な言葉を使うということになって参りました。いずれにしても、漢字で訳語を造るのでもいいのですが耳で聴いて判るような言葉にしないといけないと思います。

放送用語の場合

石黒 そういう方面は前から放送局もよほど考慮してやっておいでになるように聞いておりますから、小川さん、それについて一つ。

小川 それでは私の考えていることを、ちよつと申上げたいと思います。

放送局では聴かせる対象が一般の何百万という人ですから、その中で高等教育を受けている人は何割か、或は何厘にしかならない。まず小学校の教育程度が多いのです。ところが放送局で取扱っている材料、ニュースにしても、政治、経済に関する材料にしましても、内容それ自体が非常にむずかしいもので、例えば「議会の協賛を乞う」というような言葉は、いくらやさしく言おうとしても、「協賛」という言葉がある以上、どうしてもある程度の政治的な知識を持つてないと判らないんです。つまり大衆を目当にするにも拘らず、ある程度のむずかしさを持つている言葉を言わな

ければならない。そこにヂレンマがあるんじゃないかと思います。

外来語も日本語に換えられるものはなるべく換えるというような方針でやっておりますけれども、既に民衆の間に行き渡ってしまった言葉は今更換えるわけにゆきません。野球の用語にしましても、どうしても「ワン・ストライク」「ワン・ボール」であります。「正しい球が一つ」「悪い球が一つ」というようにはやれません。野球の「ストライク」という言葉が職工なんかの「ストライキ」というのと同じ語源だから……ということも、こういうのが野球の「ストライク」であつて、こういうのが職工の「ストライキ」であるということが判つていればいいのであつて、外来の言葉であつても、片仮名で書くから悪いということはないと思います。それよりも、それを強いて漢語に当てはめるとこのほうが放送用語としては

いけないんじゃないかと考えております。そうして私共としては早く統一した方針の下に平易で美しい言葉が出来て、それを使用させていただきたいと待つてゐるわけでございます。実は放送局が世間から離れて一步進んで言葉を作ることとは出来ません。音だけで伝えるものですから、新しく言葉を造るわけにゆきません。どうしても世間がそういう風に向いて来ないと仕方がないと思います。

三木

今のお話と関係するわけですが、きいてわかる言葉をなるべく使うようにしなければいけないので、これまでの訳語は殊にそうですが、字を見なければ判らない。学校で先生が教えるにしても、一々黒板へ字を書いてやらなければならない。話す言葉を重んじ、それを基礎にしてゆくことになればよくなつてくると思います。

依頼し過ぎる漢字

頻繁に使用される「理念」「揚棄」

目の言葉と耳の言葉

保科 つまり目の言葉を耳の言葉に換えるというこ

とが必要であると思います。

海軍では機械水雷を取片付けること即ち掃除することを「掃海」と申して居ります。ところが揚子江方面の場合には「掃海」ではおかしいから「啓開」という新しい熟語を用いて居ります。然し「ケイカイ」と申しますと、その他に警しめるという「警戒」があつてそれと紛れ易いのです。例えば「ケイカイしつ江を遡る」というラジオ・ニュースを聴いたとすると文字を見ない以上、どちらの「ケイカイ」か判りません。

それから外務省で近来よく使います「妥結」という言葉があります。こういうのは非常に誤解を招きやすいと思います。ちよつと普通に考えたと「妥協」して「締結」したという意味に考えられますが、外務省ぢやそう考えられては困る、「妥協」して「締結」したのではない、「妥当」に「締結」したのだから、（笑声）そう諒解してくれといつて居ります。けれども、普通ではそういう意味に考えられません。こういう例は非常に多い。これは漢字に依存して新しい言葉をいろいろに造つたからであつて、もう少しこれを整理していく必要があると思います。殊に新聞社がよく新しい言葉をお造りになりますが、（笑声）もう少しそういう点に注意していただきたいと希望致します。

理念という言葉

清水部長 新体制以来特に「理念」という言葉がよ

く使われますが――

三木 誰が使い初めたか知りませんが、比較的新しい言葉でしょう。朝永（三十郎）先生当りが初めではないでしょうか。大体、大正になって、カント哲学が流行するようになってから、つまり新カント派の時代から一般に使われるようになったと思います。「理念」というのは、「理想」と区別しているのです。「理想」はドイツ語でいえば「イデア」ですが、「理念」のほうは「イデエ」です。それを区別するために「理念」という言葉を作ったわけです。

加田 ドイツ語でも、哲学的な話でない普通の会話でも「イデエ」とか「カテゴリー」という言葉を使いますネ。日本にはそういう哲学と両用に使えりような言葉はないですかナ。

三木 もし日本語でいえば「イデエ」でも「イデア」でも「考え」なんでしょう。

加田 こういうことがあるのです。福沢諭吉先生の書かれた本に「帳合いの法」というのがあります。す。「ブック・キーピング」つまり今の「簿記」なのです。それを誰にも判るように「帳合いの法」としたところが、あんまり通俗な言い方なものですから世の中には行われなくて、今では却って「簿記」ということになってしまったのです。

三木 物理学者は割に普通の言葉を使っていますネ。例えば「歪み（ひずみ）」というような言葉を使っています。

長谷川 土木工学か何かでは「曲げ応力」という言葉を使っている。「応力」はおかしいが「曲げ」というような言葉を術語に使うのはいいと思いますね。物理学で Work を「仕事」と訳しているが、こういうのがいい。

保科 「歪み」とか「曲げ」というのはいい言葉だと思いますナ。ところが、日本人は通俗的な言葉

を使うのを嫌いまして、何でも人の使わないような言葉を使おうとする傾向がある。(笑声) これを直さないうちは駄目だと思います。

揚棄の用法

三木 それは先程長谷川先生がいわれたように学者のギルド的な観念が抜け切らないせいでもあると思います。

高橋主筆 この頃「揚棄」というのが流行りますね。あれは「止揚」というのと同じでしょう。

三木 「揚棄」というのは、マルクシズムが流行った時代に、福本(和夫)氏あたりが盛んに使った言葉です。それまで哲学のほうでは「止揚」というていたんですが、それから後は「揚棄」というほうが一般に使われるようになりましたが、この頃では官吏なども使っているようですネ。

高橋主筆 「理念」ぐらいはマアいいとしましても

「揚棄」なんていう動詞は、もう少し日本人の耳に入りやすいような、判りいい言葉に換えられないでしょうかと思いますネ。

三木 「揚棄」というのは、ヘーゲル哲学の「アウフヘーベンAufheben」という言葉を訳したもので、それには三つの意味があるということです。第一には無くするという意味、第二には上へ揚げるという意味、第三には保存するという意味、この三つの意味を弁証法的に統一して「アウフヘーベン」というと説明しているので、それを「揚棄」としたんです。

長谷川 「揚棄」という言葉が悪いんぢやなくて考え方が悪いんだナ。

三木 一定の考え方でゆくと、どうしてもそういう言葉を使わざるを得なくなるので、だから、考え方を変えてゆけば、そんな言葉を使わなくても済むともいえるでしょう。だから、言葉の問題は思

想の問題でもありますネ。

用語の区別

—何が適訳か—

石黒 要するに、漢字、漢語というものに頼って、

新しい言葉を作つていたり、翻訳したりすることのために、そういう弊害が出て来たと言えるのでしょうネ。そのため固有の日本語そのものは今日殆ど造語力を失つて居ます。そしてこれは自分の言葉で物を考えているともいえます。

三木 そうです。それと同時に、そういうむずかしい

言葉を使わないでも済むような考え方をしようという努力が足りないと思います。

石黒 そういう問題になると、それこそ根本的なこ

とですが、音声言語ついて申しますと、今度の国民学校の教則に、今までの読み方、書き方、綴り方の外に、話し方を加えられました。これはつまり口言葉、耳で判る言葉の教育ということに、当局が力を入れたのだとも私共は考えます。

學術用語と一般用語との区別

曾野

私は學術用語と普通一般に使つてゐる言葉を、一応区別してかかることが必要ぢやないかと思うのです。それで學術用語については、まずそれぞれの学会に於いて整理統一して、更に今度は学会と学会の間で聯絡してだんだん統一してゆく。これが必要なことだろうと思います。そうして、それが一般民衆の使う言葉になるかどうかということが第二の問題として出て来るわけですが、国民の文化がだんだんと進んで来れば、自然に學術用語が普通一般の言葉になつて来るのではないかと

思います。現在の日本に於いては非常に学問をした人と、そうでない一般の国民との間に、相当懸隔があつて、言葉の上でも非常に具合が悪いことになつて居ります。

學術用語も大部分は欧米の學術を入れたために、訳語の問題が起つて來ました。そうしてその訳語に漢字を当てたということが一つの問題になります。漢字は一つの文字で一つの意味を持つていて、訳す場合に非常に都合がいいから使つたと

思いますが、國語で訳そうとしますと動詞や形容詞や副詞をいろいろ使わないと表せない。非常に長くなるんです。そういう煩雜さを嫌うと、どうしても漢字を使う。漢字はそういう特長が一つあると思います。それから國語より漢語の方が響きがいい、非常に偉そうに感じるんですネ。そういう語感というものもかなり加わつて、だんだんと漢語訳が行われるようになって來たんぢやないか

と思います。

もう一つは、目で見ることばかりが考えられて、耳で聴く方が割合に等閑視されている。そういうような欠点もあるのではないか。學者の方でもだんだんと出来るだけ判りやすい言葉を使つてゆく。民衆の方でもだんだんと文化的水準が高まつて来る。そういうことになる、自然に學術用語と一般の言葉との隔たりが少くなつて来るのではないか。私はそういう心持ちがするのです。

何が適訳か

先頃、東日の夕刊に「適訳」というのが出て居ります。あの趣旨は私は大変結構だと思ひますけれども、あれを見ると、やつぱり今申しました傾向がチャンと現れて居りまして、殆どすべてが漢語の訳です。私はもう少し「やまとことば」で訳すことを考慮に入れるべきぢやないかというこ

とを考えて居ります。例えば「ラッシュ・アワー」というのに対して「殺到時」という訳をつけてあります。(笑声) これは殺到時には違いないと思いますけれども、ちよつと耳に聴いただけでは、何のことか判りません。そこで私は、これはまだ熟さない考えですけれども、「混みあい時」というような言葉を使いますと、誰が聴いても判るのではないかと思います。

石黒 それなら判りますネ。しかし一体に「やまとことば」は前申した様に今日造語力が弱く、迫力が欠けていますから今後はこれを補強することが大切です。

用語の統一と

語感の貧困

曾野 言葉というものは、従来は目で見る方が非常に重んじられ、国語教育は文字教育という具合に考えられておりましたけれども、最近では耳で聴く「はなしことば」の訓練が非常に重要であるということが痛感されて来て先程言われた話方が加えられるようになったのだらうと私は考えております。

然し反動的にただ耳に聴くことばかりに走るということも考えものであつて、目で見える文字と耳で聴く言葉とシツクリ調和するようにすることが国語純化の一方面だと思ふんですが、如何でしょうか。

用語の統一

石黒 今日物を少し考えている人ならば誰でも整理統一の必要を賛成しますけれども、さてどうい

ように整理統一してゆくかということになると中にはこれは自分が造った立派な言葉だから、これを廃められるんぢや我慢が出来ないというようなように主張する人が出て来たりします。そうなると、統一ということは到底出来ません。だから国家的な強力な国語の統制機関が必要です。この点は大政翼賛会でも積極的に考慮していただきたいと思っております。しかし一般の問題としては、やはり新聞やラヂオが大きな力ですから新聞に書く方がもう少し考えて書いて下さるということ。ラヂオでは、話す方がよく考えて話して下さいことが必要だと思ひます。

ラヂオで講演をする時に或る言葉を使つて、それはかういふ文字を書きます：なんていう人が時々ありますが、これは最もまずいことだと思ひます。用語の統一ということの必要は今日強く考えられておりまして各方面とも統一の方向に進んでい

るようですが、これが全体的に統一されるためには、それを推進実行させてゆく力が加わらなければならぬと思ひます。例えば従来国語審議会などでいろいろ国語問題が審議されており、例えば漢字の字体整理案というものが発表されておりますけれども、現在は実行の点において不十分な様に思ひます。即ちそこで発表されたものが少くとも国定教科書に全部使われるということにでもなれば、非常に積極性を持つといえますけれども、現在はそういうことがないのです。何とかもう少し積極性を持つような方法はないものでございましょうか。

現代標準語辞典の製作

三木 私は大きな力のある機関で現代語の辞典というものを造るのがよいと考へるのです。今の国語の字引は実に乱雑であつて、非常に古い言葉も

入っておれば又あまり耳慣れない、ふだん使わな
い言葉も入っている。実に雑多なものが入って居
ると思います。そこで専門家が集まって、現代の
標準語の辞典を作る。その際には、例えば国語が
いろいろあるとその中でこれが最もいいというの
を決めてそれをその辞典に載せるといいうようにし
てゆく。国語の整理統一のためにはそういう辞典
が必要ではないかと考えるのです。

フランスあたりではその点かなり注意していて、
例えば或る新しい言葉が出来ると、アカデミーで
審議して、それをアカデミーで作っている字引に
入れるべきかどうかを決めているようです。そこ
には軍人もいれば、政治家もいる、いろいろな人
がいて、そこで決めているのです。そういうよう
な企てが必要ではないかと思うのです。ほんとうの
標準語辞典というものを作って貰いたいのです。

日本人と語感

長谷川 ところが、それを作る人の語感だの理論だ
のが出来ていないで、いい加減な人が集つていい
加減のものが作られたら、かえって困るんぢやな
いか。フランスのアカデミーでも、そうなるまで
はずいぶん研究があつたらしいから、辞書を作る
にはそれだけの研究が出来ていて、どういう方針
でやるかということ、まず先に決めなければなら
ないでしょう。どうも今日専門家が集まっても、
現在不適当な訳語を作っているような傾向がある
んだからネ。(笑声)

會野 字引というのは最後の問題でしてネ、その前
に国語問題が一定の方向に進んで行かなければなら
ないと思うんです。それが出来れば字引は必ず
出来ます。送り仮名が決まれば、送り仮名辞典が
出来なければなりませんし、標準語が決まれば、
標準語辞典が出来なければなりません。

三木 勿論、理論なり調査なりが必要ですが、どうも理論倒れになってしまふ傾向がありますので。

曾野 長谷川さんの仰るように、根本の方針が決らないと何事もやってゆけないと思うんです。そこで根本の方針をどう決めるかということが非常に大切なことなんで、国語は非常に必要なものですから、その方向がちよつとでも狂うと、国家的に非常に大きな問題を起こすようなことになると思います。これを立派に正しい方向に向けて一つの根本方針を作れば、それから先は人手と多少の時間があさえすれば、どんどんその問題は片付いてゆくと私は信じています。

国語対策問題としてのの

海外への普及

共栄圏への国語対策協議

清水部長 用語の混乱、不統一は、この頃盛んにいわれている国語の海外普及とか、進出には障害ですネ。

石黒 そうですね。大きな障碍です。それは用語ばかりでなく、今日国語問題、国字問題としてあげられているものは皆そうです。発音やアクセントの統一、漢字制限、カナモジ専用、ローマ字採用、仮名遣いの改正、送り仮名の整理、文体の口語化、標準語の確立など、皆国語の海外進出に必要なことです。昭和十四年六月に文部省主催で第一回の国語対策協議会が開かれた時、内外の関係参加者一同が大臣に出した希望決議の第一は、国語の調査統一機関の設置ということでした。言葉をかえると日本語の調査統一ということです。これは国内にあつては論議していてもよいのですが、国外

では論議を許されない問題です。海外外地の日本語教師が速急な解決の必要を切実に感じていることです。国語の混乱、不統一は国語の権威にもかかります。

それで国語問題の解決は国語の海外普及の先決問題だという人があります。日本語がこんな状態では海外普及は結局失敗する、絶望だとさえいつて国語の簡易化を叫んでいる人もあります。しかし外国人が習いやすいように国語を整理改善しようというのは本末顛倒で、国語はどこまでも国民中心であるべきです。外国人だけがむずかしいというのならそう重要視する必要ありません。しかし事實は日本人にやさしいものは外国人にもやさしく、外国人にむずかしいことはまず日本人にもむずかしいのです。だから日本語の整理改善、即ち国語国字問題の解決には、外国人に対する日本語教授の経験ということを大いに参考としてよ

いと思います。

ついでながら、日本語の難易ということでも、もう一つある誤解は、国語運動において、日本語を簡易平明にすれば海外に普及するという単純な考え方です。一体国語が世界に進出するということは、やさしいからし、むずかしいからしないというものではありません。問題は国力です。国力とは軍事的な力ということも一つですが、その国の文化、経済、政治、教育などが他よりすぐれておることです。フランス語、イギリス語が世界に普及したのもそのためです。日本語が近頃海外に進出し出したのも日本の国力の発展の結果です。

海外への教科書問題

清水 国語の海外発展に伴う実際的な問題として教科書の編纂とか教授法の研究とかいろいろありますネ。

石黒 支那に対する教科書は文部省で一昨年委員会

を設けてやっており、もう最初が出る筈です。

教授法とか教師の養成ということに対しては興亜院で昨年あたりから支那派遣の教師にやってる様です。現地でも昨年九月、北京に中央日本語学院や華北日本語研究所などが出来て大いにやっています。これらは皆結構ですし、大切なことです。日本語普及のためにはもつと文化工作が必要だと思います。殊に日本の理想とする新東亜の建設とか、今日唱えられている東亜共栄圏の確立というこのためには、ぜひこの文化工作が必要です。そして共栄圏内の諸民族に日本語学習の必要と意義をさとらせるのです。

もつと具体的にいうと、イギリス語などより日本語を習った方が彼等が有利であることをわからせ又恩恵を受けるようにしてやるのです。そして共栄圏の文化語、共通語として日本語を習うよう

にしむけるのです。それにはただ教科書をこしらえたり学校を設けたりするだけでは駄目です。それは要求をまつてもおそくありません。それよりもその要求を感じさせ、起こさせること、即ち文化工作が大切です。それについてそれに対する国語政策の確立が大切です。このことについては又皆様の御意見もいろいろおありのことと思いますし、私も多少考えておりますが、今日の座談会は国内問題を主としてお話願う予定でしたので、ここでは私のお喋りだけで別の機会に何うことにいたしたいと思います。要するに国語問題の解決は国内問題としても重要なことですが、国外に対する国語政策、日本語の海外普及という点からみてもぜひ一日も早くする必要があると思います。

仮名遣いと文体

制限は漸進主義で

仮名遣

石黒 仮名遣いの問題もずいぶん大きい問題です。

あの平安朝の仮名遣いを昭和の今日でもそのまま全部を使わなければならないかどうかということ
は今日の国語政策の立場から検討してみる必要がある
と思います。これは勿論仮名遣いを発音式に
せよというのではありません。発音と正字法とは
ある程度の差はあるのがあたり前です。しかし現
代生活を標準としてこのままでよいとは思いま
せん。

先程からお話のありました漢字の問題にしても、
大体どこの国の言葉でも、文字というものには限
度があります。ところが日本の文字は、片仮名と

平仮名は数が決まって居りますけれども、漢字は
限度があつてありません。例えば小学校の読本に
これだけ出ているといつても、それだけで用が足
りるかという、実際にはなかなか用が足りませ
ん。

こういういろいろの問題をどういう具合に整理統
一してゆくか。現在としては、むしろその方法が
大きい問題ぢやないかと思うんです。

曾野 方法というよりは、根本的イデオロギーがま
ず決まらなければいけないと思うんです。

石黒 そして調査研究が必要です。

三木 言葉というものは結局思想の表現なんです
から、言葉の問題は思想の問題を離れて考えられ
ないと思います。ところで、われわれの遺憾に思
うのは、新体制になつてもむずかしい言葉がいろ
いろ出て来るといふことです。これは困ります
ね。例えば「大政翼賛」といふ言葉ですが、この「翼

賛」という字が普通の者にはちよつと書けないのです。その字の意味もちよつと判らないと思いますネ。新体制というのだから、その点をもう少し考えて、なるべく誰にも判るやさしい言葉を使うようにすることが必要だと思います。

石黒 まったくですネ。

解決は漸進的で

曾野 私は国語の問題を解決してゆく一つの態度としてこういうことを考えます。

国語問題を解決してゆく場合には、人事とか制度とかを改革してゆくのはよほど違うということをや、まず考えなければいけません。そのためには、やはり一挙に改革するようなことは不可能だということを知らなければなりません。話すことにしても、書き表すことにしても、なかなかむずかしい問題ですから、漸進主義でゆくことが必要ぢや

ないか。そういうように考えます。

そこで漢字なども、万人が見てあんまり見慣れないという字は、次々に抹殺してゆくというようなやや消極的と思われるかも知れませんが、そういうようにして漢字の数をだんだんに限定してゆくという立場も、私は一つの行き方ぢやないかと考えております。

仮名遣いにしましても 例えば字音仮名のようなものは、なかなか憶えていられない、字引を一々見なければならぬんです。

つまり国語問題については、どうしても漸進主義とでもいうような立場で、しかも現実をハッキリ見てやつてゆくことが必要です。私はこういうように考えて居ります。

石黒 全くそうです。この点現在の国語専門家がもう少し目覚めて下さるとよいと思います。

文体と著作家への注文

三木 さきほど見る言葉よりも話す言葉というお話がありました。これと同時に考えなければならぬことは、日本の著作家の多くは読者というものをあまり念頭に置いていないのではないかということ。その点、外国の著作家はもつと読者というものを念頭に置いて、誰がこれを読むかということを意識して書いているのではないかと思えます。ともかく著作家が、これは誰に読ませるものかということを書いて書く、そういうことが多くなれば、言葉もよほど変つて来るのではないか。そういうように考えるのです。

石黒 ただ今のお話に關聯して、文体の問題が起つてくると思います。これは丁度今日の話題の一つにはこの問題もあげられて居りますが、日本では今日世間では文語体は特別な場合に限られ、口語体が主に使われるようになって参りました。最近

裁判所という宣誓の言葉が口語に改正されました。しかしお役所の届け書などは、殆ど全部が候文で、政府の声明書などは、新体制に關するものでも文語体といった様に、まだずいぶん文語体が多く使われているように思いますけれども、これを口語化し簡易化してゆく必要があると思えます。

岸田 事務的な文章に色々な文体があることは非常に馬鹿げたことだと思えます。大体御役人や政治家の文章が妙に堅苦しい漢語調なのは、恐らく威厳を整えて民衆に政治の有難さを示すつもりでしょうが、そういう子供だましみたいな風習は一掃されなければなりませんね。

新聞への注文

實際上の困難

外人に読めない新聞

保科 今、文体のお話がありました、外国人が日本語を習う時に、一番先に要求することは、日刊新聞を読めるようになりたいということです。われわれが英語を習った時も、やはり早く新聞を読んで見たいと思いました。外国人が日本語を習う時も、早く新聞を読めるようになることを望むのです。ところが、外国人が日本語を習いまして、半年は愚か、一年経つても、二年経つても、新聞が読めないのに非常に失望します。なぜかという、新聞の文章というものは、日常使っている口語とはまるで違ったもので書かれて居るからであります。今、三木さんのお話になりましたように、読む人というものをもう少し考えて、判りやすく、

簡易に、通俗的に、しかもきれいな文章で書くということに、新聞社の方が努力して下さらぬと困ると存じます。

それで、文語体は四角張った時にずいぶん使われておりますが、口語文でも少し注意しますと、文語文に比して優るとも劣らぬものが書けます。一体普通一般の国民に判るような口語文であつてこそ初めて口語文の値打ちがあるのだと思います。が、現在の口語文は、多くはほんとうの口語になつておりません。政府の発表するもの、或は声明、或は祝辞というようなものを見ましても、まだほんとうの口語になつていない。大体は文語であつて語尾のところだけ口語にする。そういうやり方になつております。

高橋主筆

外国人が読めないというのは、一つは漢字に災いされるんじゃないでしょうか。日本の新聞は短時間の間に組むもので、ルビが完全でない、

そういうことが関係するんじゃないでしょうか。

保科 それもありますけれども、いいまわしが日常の会話とよほど違った形になるからです。

高橋主筆 然し新聞としましては社会面は勿論ですが、政治面でもなるべくむずかしい言葉は使わぬように、女子供にも読めるようにという方針で書かすんでございますがネ。

加田 現在印刷されたものの中では、新聞なんか一番やさしいと思うんです。例えば大学の教師などの書いた文章には、到底読むにたえない文章が多いのですから、それより新聞の文章の方がましです。

保科 書いてる人も判っていないような文章がありますね。(笑声)

新聞への注文

石黒 新聞の中でも家庭欄は随分判らせよう判らせ

ようという努力をしているのが見えますネ。こんなにくだくいわなくてもいいのに……と思うほどのものさえあります。あれは書く人が家庭欄は知識の低度の女の人が読むときめて書いていられるからだろうと思います。

それに反して最もひねくれた文章は社説です。殊にこの頃はあるまりハッキリ言つてはいけないということもあるのでしょうか、読んで見ると、こうもとれる、ああも考えられるというのがあります。日本人が読んでもそうなんですからさつきお話の様に外国人にはとても読めないと思います。

高橋主筆 それは社説全体でなくて、小説でもむずかしく書く小説家があるのと同じで、むずかしい文体の人があるんです。ところが、そういう人はそういう文体を書くことによって名を成しているのです。(笑声) その文体で、これはあの

人が書いたということが判る。そういう人があるわけです。

曾野

文体を簡易で判りやすい、そうして美しい口語体に近づけようということは、私も非常に賛成ですが、放送局に対する希望を申しますと、話し言葉のいい影響を一般国民に与えて貰うように努力していただきたいということです。

それから新聞社と作家、いわゆる文芸界、操觚界の方面には文体の確立、つまり非常に素直な口語文体を確立してゆくということに努力していただきたいと思います。

又われわれの関係する文部省と致しましては、当然国語の教科書に於いてその両面を盛ってゆかなければならないと思います。

そういうように各方面が努力してゆくことによって話し言葉も非常に純化され、文体も確立されてゆくのではないかと思います。

語感と音感

明治時代と同一傾向

文体の基礎は語感から

長谷川

私もあまり文章を語る資格はないが、理論として考えると文体、殊に国語文体というのは、話す時の感じが基礎だと思ふんです。だから、文体の基礎をよくすることは、日常語をよくすることなんです。文句に書いた文体をよくすることは、それを話す語感がよくなることが第一だろうと思う。そうすると、今の人は何分にも語感が失われている。根本的なものがいけないんだといえる。どういふものが日本語の感じとして最も洗練された言葉であるかという語感が、いまの人には足り

ない。だから、トーカーとか新劇とかの言葉というものは、どうも芸術的の言葉になつてないのでしよう。脚本に書いた時は、成つてないことがあまり判らない。喋らして見ると、語感の欠乏がハッキリ判るんです。語感が欠乏しては文章を書いて

も名文は出来るわけがない。そうすると、名文が書けるということのためには先ず語感がよくなるということが先決問題なんです。今日は問題はまだ語感のところで停頓しています。

岸田 その通りだと思いますけれど一方からいうと、せっかく普通の語感で物をいつても一般にはその効果が一寸も伝わらないというような悲哀もあるわけではありませんか。

長谷川 ところが、明治の初期と今日と、ちやうど似ていると思うことがあるんです。明治の初期には、それまでの古い語感を棄てました。意識的に棄てた人もある。そうして新規な漢語を使って新

しがろうとした。ところがそれが新しい語感を伴わないので、ひどい文章が出来た。

曾野 刺戟を求めるんですネ。

明治時代と現代

長谷川 求め方がまずいのです。翻訳文が難解なもの、訳された日本語がむずかしいということもあるが、もともとそういう訳し方をする人に日本語の語感が足りないのです。西洋語の語感——ぢやない、文感だナ、そのほうが日本語の語感よりもその人にはピンとくるのです。つまり日本語の語感が乏しいために、西洋文の感じに引きずられる。

曾野 西洋語で感じているんです。

長谷川 それをまずい日本語で出そうとする。維新当時古い語感を棄てた時も、その頃は漢文の語感で、まだ西洋文の語感是十分呑み込んでいな

かったのでその為に起った語感の貧弱さというものが甚だしかったので、それがその時分の文体に現れて甚だしい「名文」が出来た。例えば名前をいつては悪いが、尾崎行雄さんが小説を書いてますがネ、今なら中学生だつてあんなものは書きません。最もああいふ風に漢語を使う力もないが。当時の最新知識の人がそういう文章を書いているのです。それは必ずその時分の話している言葉がやはりそんな風な語感の悪いものだったからなんです。明治十年の言葉をつつしている二葉亭（四迷）の「浮雲」の中で、二葉亭はあの時代の女の言葉を書いているけれども、実に面白い。今も覚えていますが「千年の旧慣を破るのですから、多少の艱苦は已むを得ません」（笑声）まあこんな調子で、それが若い女の言葉ですよ。

1 「浮雲」から「二千年來の習慣を破るんですものヲ、多少の艱苦は免れツこは有りませんワ」

二葉亭は江戸っ子で相当の語感を持っていたでしょうからそんな言葉を喜んでいたので何でも無い、その時代の言葉の写実でしょう。そんな言葉を使っていたとしたらそういう人が決していい文章を書くことは出来ないでしょう。それで私は今の日本人に正しい語感を与える方法がないものかということ、考えているんですがネ。

會野 今度の国語読本には、語感の養成ということが考えられているようです。

保科 今まで語感というものが全く忘れられておつたのですね。

會野 訳語の場合殊にそうです。

石黒 どうも、語感と同時に字感・音感というのが一般に少し欠けているのではないかと思ひます。例えばこの間、厚生省でしたか「女工」というのは言葉が悪いからといって募集して当選したのに「業女」というのがありました。「女工」が「業

女」となって、どれだけいい言葉になったか。よくなったとしても「業女」では耳で聴いて判りません。

曾野 改悪ですネ。

音感

三木 今日ではどういう文章が模範的な文章なのか、文章の模範というものが混乱して、今の人は判らなくなっているのです。

曾野 模範的な文章を作らなければいけないと思いますネ。

高橋主筆 同感です。

曾野 そこで望みたいことは、まず新聞の社説を書く人が、自分が模範文を書くという意気込みで書いていただく。そうして模範文章は新聞の社説を見る。(笑声) そういうようにしてゆきたいと思いますが、今の社説は……。

石黒 むずかしい見本ですねエ。

長谷川 タイムスは、自分の新聞の英語はいわゆる「王様英語」(キングス・イングリッシュ)で模範的なものだといっていましたネ。

曾野 そこまでゆきたいですネ。

三木 私は文章について議論する資格はありませんが、今の著作家の文章がまずいのは、推敲が足りないということもありますネ。それは一つには商業主義の影響で書き過ぎるんですネ。同時に、自分の書いたものに永遠の生命というようなものを持たせようという、これは野心とも言えますけれどもまた文化の永遠性を信ずる一つの信念、そういう信念が次第に失われているということもあるのではないかと思います。

岸田 なるほどそういえば文章に凝るとか、或はスタイリストだとかいうことが幾分非難の意味に使われ出したのもう最近のことではありません

で、結局下手に凝った美文調などの反動が相当今日の結果を生んでいるともいえるでしょう。

生活と推敲

付、朗読と放送の場合

漱石の文章

保科 日本人は外国人に比べて音楽に対する教育が足りないために、音の感覚を殆ど無視しているのぢやないかと思えます。文章を書く場合には、これを読んだ感じがどうかというようなことは考えずにただ文字を列べてゆく傾きがありますまいか。

長谷川 無論推敲は必要ですが、推敲といつても、感じの乏しい人がいくら推敲したつて駄目なんで

(笑声) その根本はいい感覚をもつことですが、いい感覚は、いい生活によつて得られるのですから、文筆をかく人の日常生活なり、日常生活の言葉なりがよくなければならないが、それがよくなっているかどうかということが問題なのです。それは生活が洗煉されているかどうかということなんです、たとえば夏目(漱石)氏の文章のいいのは日常の言葉から態度から、すべてが比較的洗煉されて一種のスタイルをなしていたから、それがああいふ文章になつて現れた。――「虞美人草」なんかは気取つていて、全く他所行きのスタイルだけれども、あれはあの時だけのものでネ。――今の人達のような生活をさせておいて、文章だけいいものを書けといつても無理でしょう。殊に新聞なんか無理ですヨ。一枚書くと同時に工場へ渡すんだから。(笑声)

三木 それは勿論そうです。然し文章を推敲すると

いうのは一つの生活態度で、そういう態度がない
というのです。

長谷川 それはそうです、一体ふだんの生活に於いても、自分の生活を推敲しようという気持ちがない。

保科 昔は文語体だったから、まだ隠せたけれども、今は日常語でやっていこうとするから、ハッキリ判つてしまう。

朗読と放送

三木 西洋では朗読ということを非常に重んじて、家庭に於いても、晩めしを食う前などに子供に詩や文章の朗読をさせるといふような風があります。日本でもそういうことをやらせては如何ですか。

曾野 学校に於いてもそれを採り上げてやらなければならぬという声が、近ごろ大分出ております。

石黒 放送局でもやっていますネ

小川 非常にやっております。

長谷川 明治廿何年かに、坪内(逍遙)先生、関根(正直)先生などが、朗読を奨励すべしということを大に主張したんですけれども、実現しなかった。

保科 朗読はよほどよく考えないと、取扱いがむずかしい。

小川 ちよつと諸先生のご意見を伺いたいんですが、放送局が言葉だけで聴かせて文字を見せない場合に、日本語は簡単な事実を伝えるのにも、妙なところがあると思うんです。例えばニュースで「何々氏は今日横浜に着いた何々丸で帰朝しました」といふような簡単な文章でも、節みたくないものが出来て来るんです。これが英語ですと「何々氏は着きました、今日、何々丸で横浜へ」といふ言い方ですから、ニュースのロジックの進み方と聴取者が考える心理の進み方が一致してゆくのか。

ぢやないかと思うんですけれども、日本語の場合はどうしても聴取者の心理に摩擦を起すような組立てになつてゐるんじゃないかと思うんです。これはどういふものでしょうか。

もう一つは、一番いけないのはニュースを送つて来る通信員が非常に曖昧な言葉を使うんです。例えば「何々部隊が何々へ着いた」という言い方なんです。ちよつと考えると何でもないうですがいざ放送しようということになると、何々部隊の全部が着いたのか、一部が着いたのか判らないために具合が悪い。直そうと思つても現場を見ないんですから直せません。これには困ります。

三木 それはわれわれとしても大きな問題です。正確に表現しようとするれば、文章がだんだんむずかしくなつて来るのです。

小川 放送は音が流れて行くだけですから、聴く方は非常に疲れるだろうと思います。

會野 論理的な方面と心理的な方面との矛盾というのは、どういふことですか。

小川 つまり「何々氏が」と言つた時に、聴いてるほうは、ああ何々氏がどうしたのか……と思うでしょう。ところが、その次に聴こえることは、それとまるつきり関係のないことなんです。「今日横浜へ着いた何々丸で」と来るでしょう。その次にやつと「帰朝しました」と言うんですから、こんな簡単なことなら、まだいいんですが、ちよつと長くなると、聴いてる人が整理するのに疲れるんです。

日本語の論理性

—文法の確立を—

音声・言語による語感

長谷川 日本語はどうも文章になると組立や「てにをは」に曖昧がある。先刻自分でいった「私もあまり文章を語る資格がない」という言葉の「私も」

の「も」でも「自分は他の人と同じように文章が下手だから、それを論ずる資格がない」というのだと謙遜の意味になるが、もしその「も」が「犬も歩けば棒に当る」の「も」と同じ「も」だとすると「私のように文章の上手なものでさえ、文章を語る資格はない」という高慢な意味になる。又「あまり」という語も「文章について あまり多く語る資格がない」というのか、又は「文章を語る資格があまりない」というのか頗る曖昧です。話せば語感で意味はとられるが、語感の出し方が悪いと、誤解される虞れがあります。

保科 聴きながら纏めなければなりません。

曾野 しかし、普通のわれわれに膾炙している表現

だったら、聴いていてまごつくことはないと思いますネ。われわれは外国語を聴くとまごつきます

ヨ、ロジカルの方面でネ。正しい日本語の言い方ならば、日本人はまごつかないと思います。

小川 日本人がそういう正確な言い方をして来たのかどうか。

曾野 いや、日本語のロジックを以て、心理的過程に即して正確に伝えればいいんです。それが大切じゃないでしょうか。

加田 小川さんの仰るのは、文章を読んでいる場合のことでしょう。

小川 そうです。

長谷川 文感と語感の問題だな。話す場合は語感を音感で正しく出せば、論理も感情もはつきり受け取られるが、それを文章にすると音感がないのでやはり曖昧になる。

石黒 今、小川さんが指摘されたように、日本語自

身の表現が乱雑であるためでしょうが、正確にそれを聴き取ろうとして聴いていると、よけい判らなくなる様な気がします。軽く一応のニュースとして聴いていれば聴き取れますけれどもネ。これは今まで文体とか、表現に対して、注意が払われず、シッカリした標準がなかったせいでしょう。

三木 それは一つには科学的な表現というものが日本の伝統には少いからですネ。

長谷川 日本の文章というものは音声言語の再現に近い話し言葉の文章なんで、音声言語の語感で判ることを音声を伴わない文章にしているんだから、文章が判りにくくなる。「源氏物語」なんかの難解なもの、古語のせいもあるが、一つは音声言語の語感による文章だから判らないのでしょう。あれはあの時代の話し言葉の感じで書いてあるから、それを呑み込めば、案外解り易いかも知れない。しかしあの時代の人が見たってただ文章

として読んだら、やはりちよつと判らないだろうと思うんです。しかしあれを言葉にして言えば当時の人にはよく解ったんだろう。ですから、日本語が文章であるためには、話し言葉の再現のような文章というもののほかに文体の言語いわゆる文語です、そういうものが別に発達する必要があるのぢやないか。

三木 その必要がありますネ。

文法の確立

曾野 私はそういうことから考えても日本語に即した日本の文法が確立されるべきではないか。西洋の文典に倣った日本の文法ぢや駄目だと思うんです。

長谷川 純粋な日本の文体論というものは、まだないんですか。

曾野 漸く緒についただけで、まだ西洋のものが基

準になっているようです。

保科 文法的に、論理的にいったら、日本語の文章は傷だらけだろうと思う。しかし論理的に明確に書き綴らずに曖昧に持つていくのが日本の文体の特徴でありますね。悪いことだけれども、そういう傾きがあります。

石黒 そうですね。それで今日盛んに出される声明書などを見ると内容のドッサリありそうな、非常に大きな偉そうな言葉を使っていながら考えてみると、実は何にもないものが少くない様です。これは今日までそういうのが日本語の美文であり、今まで日本の修辞学というものは、そういう教える方をして来たためです。

三木 それは漢文の影響でしょうね。

保科 私共、試験の問題には一番苦心するのですが、つまり曖昧に解釈されないように書くこうとすると、非常な悪文になります。学生が文法的にも

論理的にも迷わないように書くこうとすると、殆ど文章にならないことがあります。日本文はそこをそつと通過して行く、そこに日本的なものがあるのですね。

日本語の論理性

曾野

日本語は論理性は相当持っていると思うんです。ところがそれが西洋のように分析的ではない、そこに所謂曖昧さがあると思うんです。その曖昧さは西洋の語法を学び、これと比べることによって、初めて感ぜられることなんです。しかし論理性そのものが欠如しているとは言えないと思うんです。

長谷川

昔、日本人が漢文から離れて、純粹の日本文を作る時にはずいぶん苦労したんだろうと思われまう。語感是非常によく出ていますが、妙な文体になっていますね。「土佐日記」の書き出

外来語と

外国語の問題

外来語と外国語の別

しのようなことになる。「男もすという日記というの女もして見んとてするなり」という文句の「す」「する」「して」というのは、漢文でも西洋文でも「書く」というべきだが「する」としたのは、日本文は話し言葉の文章だからでそんな風に漢文を離れて、日本語式の文章を創造したところが偉い。しかしあれなんか外国語に文字通り訳したら変なものになるでしょう。

保科 現代の文学の中から中等学校の教科書の教材を採ろうとしても、そのまま採れるものは殆どありません。文法的に間違っているか、論理的に曖昧であるかでそのままでは教材としては採れないのです。ところが、それが非常な名文なのであります。こういうことは将来大いに考えなければならぬところかも知れません。

石黒

では次に外来語と国語の問題に移りますが、外来語と外国語との区別がハッキリしないために妙な国語化が行われている様に思います。その結果却って国語を混乱させて行くことになるのではないかと思います。例えば「パン」を今さら「麵包」と書くようにしたところで「パン」と読むなら元々ですし、「めんぼう」と読ませたら判らなくなる。以前「ビール」を「麥酒（ばくしゅ）」と書いて「麥酒は酒にあらず」という広告を出して、嗤われて引つ込めたビール会社がありましたけれど「麥酒」と書いて「ビール」と読むなら元々ですし「ばくしゅ」と読むとすると、一応ビールで通用してい

るものを、もう一つ麥酒という言葉を加えることになって、ただ国語を複雑にし混乱させるだけです。それを最近はどうも外来語を日本語に置き換えて見ることが新体制だといった様に考えられている嫌いがあると思います。

それから今日の様に英米との関係がまづくなつて参りますと、英語を語源とするは敵国の言葉だからやめよという様な考え方もある様です。それと同時に学校における語学教育にも英語をやめてドイツ語をやれ、シナ語をやれ、最近はマレー語もやれというような論も出ております。こういう問題についてお考えを伺いたいと思います。

三木 その問題は外来語と外国語との区別だと思ひます。外来語というのは起源は外国であつても、既に国語として一般化されているもので、これと単なる国語とを区別することが必要です。外来語として既に国民の生活の中に入っている言葉をわ

ざわざ訳する。それもほんとうの日本語に訳すのならばいいけれども、結局これも外来語である漢語に訳すというのは考えものだと思ふのです。外来語はすでに国語であつて、もはや外国語ではないのですから。例えば煙草の「バット」をやめて「金鶏」に変えるとか「チェリー」を「さくら」にするとかしましたが、それでは「たばこ」というのはどうするか。「煙草」と書いて「たばこ」ですが、これを「けむりぐさ」とも言えないだろうし、「えんそう」とも言えないでしょう。やつぱり「たばこ」でいいんです。「ラジオ」もそうです。どういう訳語が出来ているか知りませんが「ラジオ」というのは世界的な言葉ですから、それをわざわざ訳する必要はないと思います。

古いものは既に日水語

曾野

賛成です。私は外来語というものは既に日本

語になりきっているものと考えていますから、直す必要はないと思うんです。ただまだ来たばかりで国民一般に行き渡っていないものがあります。これは出来るだけ早く適当な日本語に直して普及する必要があると思います。例えば「ロータリー」というのは「円交路」とすることには賛成しかねますが、何とかよい訳を見つけたいものと思えます。というのは、都会の人はたいてい知っているでしょうけれども、田舎の人は知らないんですからね。

石黒 そういう国民の言語指導をもし翼賛会の文化部あたりでやつてもらえると大変よいと思えますね。最近も宮崎県の或る町では、喫茶店で使われる英語を全部国語に直せという運動が起ったところが解決してくれる人がなくて、結局警察署へ持って行ったそうです。そして「コーヒー」の訳語として「洋茶」「チキンライス」は「かしわ飯」

と訳したそうです。(笑声)

保科 その限界がむずかしい。

石黒 指導者が出来たらいいと思うんです。指導機関が必要だと思います。

加田 山登りに場合は、大抵ドイツ語を使うのです。おかしいと思うことは、散歩する時に持つのは「ステッキ」なのですが、山へ行くと、これが「ストック」となるんです。(笑声) 山で食べると「ケーゼ」で、銀座あたりで食べると「チーズ」なのです。

曾野 知識層あたりが存外国語を軽視しているんですね。

保科 日本には昔から「面目」という立派な言葉があるのに、何を苦しんで「面子」などというのか実に国辱だと思う。

加田 外国語を使うという一つの風習があるのではないですかね。ドイツも、あんなにドイツ語化運動というものをやっているほどですから、外国語

が好きらしいですネ。外国語の辞典の大きなものがある。ハイゼのような。

石黒 妙ですよ。三国同盟をやった、イタリアが外国語が好き、ドイツが好き、日本も好き……。〔笑声〕それは私の外国旅行をした時の感想でしたが、一方イギリス人は英語を世界語だと思っているし、フランス人なんかは英語を喋べると馬鹿にしますが、ドイツ人は喜んで、他の人にも聞こえよがしに英語で応待するものが相当ありました。

保科 日本人もそういう傾向があるナ。

曾野 外国語を日本語に消化するという立場に於いては、新聞も放送もそうですが、やっぱり学者も一役買わなければいかんと思うんです。例えば翻訳して漢字が当ててあつて、その横に外国語の振仮名がある。こういうのは心すべき事だと思うのです。そういうことをするのに、何かインテリらしき誇りを感じるんですね。そういう態度が一般

の人々に大きな影響を与えているのではないかと
思われます。

清水部長 ではこの辺で、どうもありがとうございました。

【参考】読売新聞コラム「漢字」という言葉

森口多里

◇…「仮名」が頻りに問題になっているのに「漢字」という言葉の是非が一向に取上げられないのはおかしい。そこで私は思い出を語るが、かつて一欧人にフランス語を仲介として日本語を教えていた時、「漢字」の意味を聞かれたことがあつた。あつさり「支那の文字」という意味だと説明したら、日本では未だ支那の文字を使っているのかと反問され、気のせいかその語勢には多少軽蔑の気持ちが含まれていたように思われた。日本人にとっては何でもない事で

も、異国人には一々遠い過去に遡って説明してやらねばならぬ事柄は厄介でもあり億劫でもある。

◇…「仮名」の名が対外関係の場合にも面白くないというなら「漢字」という言葉とても同じことである。絵画の方では「漢画」という呼称は明治時代にさえ用いられること少なく、今では殆ど廃語になっている。「仮名」ばかり攻めるのは片手落ちというべきであろう。

底本：『読売新聞』1941（昭和16）年1.14～2.1

政治と生活 読者応募座談会

司会 三木清

出席者

徳丸光之助（埼玉県四一歳常会指導員）

高松泰三（東京五六歳医学博士）

久武育朗（東京四二歳郵便局長）

坪田利雄（福井県三四歳工業組合職員）

佐藤信一郎（東京四一歳弁護士）

平野 宗（横浜市二八歳機械工）

今野圓輔（東京二四歳慶応大学学生）

大川秀雄（東京四二歳自由労働者）

播 久夫（東京二八歳商業指導員）

黒澤 肇（市川市二九歳会社員）

伴 埋治久（埼玉県三四歳自作農）

記者 ちよつと御挨拶申し上げます。本日は、お忙し

いところを態々^{わざわざ}おいで下さいまして有り難うございました。

こんど私の方の雑誌で、今まで雑誌界で試みたことのない、読者ばかりの座談会という企画を発表いたしましたところ、数日にして百数十通の応募がまいりまして、みな熱心に、国民生活と政治に関する希望や、批判を続々と送って来られて、私ども編輯者一同非常に感激いたしました。その中から厳選に厳選を重ねまして、きょう御出席いただきました十一人の方々においてを願ったのですが、遠くは福井県や埼玉県からも馳せ参じていただき厚く感謝している次第であります。

今晩は、皆さん国民各層の代表といつては語弊があるかも知れませんが、国民生活の種々様々な生活分野に働いておいでになるのでありますから、そういう生活分野の具体的な実情を聴かして

いたゞいて、その実情から滲み出る政治への積極的且つ建設的な批判、要求、希望等を忌憚なくお話していただきたいと思います。

それで、三木清氏に司会をお願いいたしました始めてゆこうと思います。先生はまだ皆さんをよく御存知ないと思いますので、簡単に皆さんの略歴を自己紹介していただきたいと思います。それは徳丸さんから御願います……。

徳丸 私は徳丸光之助と申します。生れは東京なんでございますが、只今は浦和のぢき側に住んでおります。学校は東京商科大学でございます。最近大政翼賛会の運動が始まりまして、町内会、部落会の何か指導員をやるようにというお話で仕事をやっております。

久武 私は、生れは静岡県であります、中学を出まして、ちょうど日本大学で社会科というものが出来たときに、社会科学とか、社会批評とか、そ

ういう方面に興味を有つておつたものですから、早速社会科へ入りまして、それを卒業しまして、十年ばかり時事新報の記者をしておりましたが、家庭の事情で親爺が実は郵便局をやることになったところが、親爺では郵便局が認可にならぬというわけで、結局私が引受けさせられましたので、自分のやつた学問とは違う郵便局をやつています。

高松 高松泰三でございます。職業は医者でございます。私は、いろいろな言い方がありますが、社会衛生とか、国民衛生とか謂われて居りますものに非常に興味を有つております。二十数年前から、そういうものに関して時々小さい論文なんかを発表いたしておつたのであります。大正九年から三年ばかり欧米に遊びましたが、それも主に目的は、社会衛生施設を覗くようなことであつたのであります。その後社会衛生研究所という、

名は立派でありますが、自宅でそういう看板を掲げまして、「社会衛生」という小さい月刊雑誌を創りまして、主幹として満五年の間経営しております。その後思うところがあつて廃刊いたしました。社会医学の立場から国民生活を考へている一人であります。

大川 私は、大川秀雄でございます。生れは北海道。

少年時代から、まだ世間で認められない下積みの労働者でございます。その方面へ政治意識を普及させてやりたいと思ひまして、お伺ひいたしました。よろしくお願いいたします。

平野 私は京浜のある時局産業の機械工をしております。どうぞよろしく。

伴 私は、昭和九年に慶応義塾の法学部を出て、その当時身体がどうも悪かつたので百姓になりました。一町八反の自作農であります。ところが、百姓に成りたての時は、なんだか薩張^{サツバ}りわからな

かつたが、どうやら三年経つ裡に、技術も普通の百姓並みになりました。今は洋服こそ着ているけれども、精神においては普通の百姓と同じなのでございます。どうか百姓の事について、いろいろお訊きになりたいことがあつたら、知つてゐる限りはお答えし、御意見なども承りたいと思つております。

今野 私は今野でございます。慶応大学の文学部で国文学を専攻しております。只今二年でございませう。学生について若しお訊ねがあれば私なりの観方で私流にお答えいたします。どうぞよろしくお願いいたします。

坪田 私坪田でございます。私は福井県の生れでございまして、それから小学校から大阪の天王寺商業という学校を出まして、藍野という大きな薬屋へ住み込み奉公に入りました。傍ら関西大学の夜学に通つておりました。が、五年間で暇をとりま

して、東京へまいりましたが、結局、失業と病気を負って田舎へ帰りまして、それから運送店員、新聞記者、保険の外交というようなことをやっておりますが、その後福井県は人絹王国と謂われております通り、人絹織物の産地でございます、其の工業組合へ拾い上げられまして、現在統制事務に携っております。どうぞよろしく……。

黒澤 黒澤でございますが、私は、高等学校時代は、文芸部の仕事などしております、文化的な方面に関心を有っております。将来はまア新聞雑誌方面の仕事でしょうかと思っておったのですが、いろいろな事情がありまして、大学を出ますと、ある時局産業の会社員に成りました。人事の方面、労働の方面をやっております。宜しくお願い致します。

播 私は播はりといいます。日本大学の商科を出しましてから、東京市に始めて、商業経営指導員養成所

というものが出来、其処の第一回を出まして、麻布区役所の経済課に勤務致しております。東京市商工課との兼務になっておりますが、元来生家が商人の為に、学生時代から中小商業者の問題に興味を持ちまして、ずっと現在までその方の仕事をやっておりますが、指導員と申しますと主に商店並に工場経営一般ですが、現在は転業関係まで扱うことになっておりますので、そのほうもやっております。その関係で、中小商業者のために皆さんから御意見も承りたいし、又業者の立場からもお話してみたいと思ひまして、この会に出させていだいた次第であります。

佐藤 私は、職業は弁護士であります。学校は明治で法科を卒業しまして、それから高等試験を合格して弁護士に成った。その頃私は、いろいろ弁護士の仕事について多くの世間の人と接触する場合に考えたことは、一番なんとしても政治が良くな

らなければ多くの者が救われないのだということでした。そういうことなら、むしろ仕事のほうよりも政治的に発言権をもつ、或は影響力をもつようにありたいという考から、そういうほうに心を寄せておつたのであります。

国民の協力

三木 私 は三木であります。

こういう座談会が、非常に今日有意義なものであるということとは申すまでもないと考えます。現在の日本が有史以来の未曾有の重大な時期に在るということは、既にいろいろ言われていることであります。そういう場合に、最も必要なことは、国民の協力である。国民全部が丸となつて力を協せてゆくことであります。国民と申しますのは、何も官吏にたいして国民とか、或は軍人にたいして国民というものがあるのではなくして、官吏も、

軍人もその他、代議士もみな国民なんです。とかく国民というと、何か官吏にたいする国民、軍人にたいする国民というような考え方がどうもあるんじゃないかと思つてあります。しかし、国民というのは、ともかく全部が国民なのであります。そこにはじめて大政翼賛というようなことが考えられるのであらうと思う。今日の時局を切り拓いてそうして日本の国の発展を図るためには、今申しましたような国民全体の協力が必要なんであります。そういう場合に、特に官吏とか、或は軍人とか、或は政治家とか、代議士とかいうような、そういう人々とは違つたいわゆる国民というものの、そういうものの協力が大へん必要なわけであります。この協力ということにつきましては、どうしても国民の理解を得、又、国民の意思を尊重してゆかなければならない、ということは申すまでもないことであらうと思ひます。で、こ

の大政翼賛会のようなものが出来ましたが、実はそういうような国民の政治力を集中して、一つの大きな力にするというようなことが最初の目的であつたのではないかと思うのであります。そういう意味におきまして、今晚国民——いわゆる国家のいろいろな場面で働いていらつしやる皆さんがお集りになつて、そうして夫々の生活部面におけるいろいろな現在の問題について伺い、又、その際に有つていらつしやるいろいろな体験、また批判、それから希望或はどうすればいいか——というような計画などについてお伺いするということは、大へん有意義なことであらうと思うのであります。こういうことがとかくこれまで十分行われなかつたというように、日本の政治に悩みもあつたのであらうと思います。で、幸にこういう会が催されたのでありますから、どうか腹藏なくいろいろな話を伺いまして、そうして少し

でも日本の国の政治が良くなるようにいたしたいのであります。

そこで政治と申ししましてもいろいろな問題があるのであります。今晚は特に国民生活の問題ということを中心にして話が進められる予定になつてゐるようでありませんが、司会者としては何も申上げることはありません。一番いい司会者は、黙つていて、そうしてその会がうまく進行するといふ風になれば、最もいい司会者であると思つております。どうか皆さんの間で御自由にお話下さつて、司会者の手を余り煩さずに、この会が有益に進行しますように希望したいと思ひます。

今晚お話を伺ひたい問題はいろいろあると思いますが、まず最初に国民生活のいろいろな方面にいらつしやる皆様のおのの場面において、どういふことが一番問題になつてゐるか、或はむしろ問題にして欲しいか——という、そういうこ

の問題の在りかというようなものからお話を伺って、それから段々いろいろな問題に分れてゆきたいと思うのであります。

これは順序を立ててやるわけでありませんが、誰方からお伺いしてもいいわけでありますが、最初の一人だけを私の方から指名しますから、あとはそれを承け継いで自由に話していただきたいと思います。はじめにきょう最初に御紹介いただいた徳丸さんに、どういことが今一番問題にされなければならぬか、しかもそれが看過されているのではないか——というようなことについて、御意見を伺いたいと思います。どうぞ。

疑問いろいろ

徳丸 では、只今三木先生から御指名でございますから、僭越でございますが、私から申し上げます。最近翼賛会運動が、精動へ逆戻りする気味が甚だ

多い。しかし、精動がよろしいのならば、何も大政翼賛運動として特に大げさな今回のような運動をする必要はないんじゃないか。それならば今までの国民精神総動員で差支えないのであって、今度の場合になつたのは何かというと、精動ではやり切れない。精動では解決できない。もう一步その先きの事、要するに国民生活の内容までも全然やり変えてゆかなければならないだけの必要に国家が直面しているということから出発したものでなければならぬんじゃないか。その点において、現在の中央の空気が、果して精動へゆくのか、それともこれが大政翼賛会のはじめの声明通り驀進してゆくのかその点について、真相をお伺いしたい。

それからこれは先日、中央から来られた指導者にお訪ねしたのでありますが、その時に私はこういうことをお訊ねした。これも五つ六つ列べて質問

したのでありますが、その答が極めて簡単でもハッキリいたしませんでした。第一番にお訊ねしたのは、現在世界の金は、アメリカに九割あつて、あとの一割を爾余の何十ヶ国で分けておる。日本は何十ヶ国の一国として分け前に与つてゐる。日本は世界中のほんの何千分の一を預つてゐるにすぎない。そうなつて来ると、金の国際通貨としての値打というものは大へん違つて来るぢやないか。従つて日本としても、通貨政策の将来についてもつと何か根本的な行き方を考えなければいかんぢやないか。——ということをお訊ねしたところが、その指導者のお答には、自分は経済学者でないからよく分らぬ。然るべき人に訊いて貰いたいと逃げてしまわれたので、どうもハッキリいたしませんでした。

その次にこういうことをお訊ねいたしました。現在国会議員から村会議員までいろいろあるとそれ

は今度の新体制になつて、一応辞めて貰うことになるか、どうなるかとハッキリ訊いた。この点は、これは任期まではその儘権利があるのだから、その間において自発的に辞める人は別問題だけれども、他は辞職を強制するわけにゆかんという話だった。これは割合ハッキリしていましたが、何分辞めて貰いたい人は辞めないし、辞めて貰いたくない割合に時局を認識している人はとかく引き退りたがる氣味があつて、そのところの具合が何か割り切れない問題が出て来る。

次の質問は、今地方でいろいろな会合があるというのと、一番苦しむのは町の幹部、次に各部落における区長とか、郡長とか、隣組の組長とかいうものが一番骨が折れます。それ等が骨を折り頭を使い切つてしまう。からだを使い切つてしまうということになつたら、しまいには全体が困つてしまふんぢやないか——ということをお訊きしたので

す。どうもその点も余りハッキリしたお答はなかったように考えられます。それからもう一つ、現在公益優先ということをいろいろ謂つております。しかし、それについては、すべてのひと、一億の人が悉く最高理念だけでもつて問題を解決しようとしても、却々^{なかなか}それだけぢや動いてくれないぢやないか。それについては、経営経済学で言うところの私益奨励制度というものになるか、或は軍隊で手柄のあつたものには、部隊長から感状を授与する。傷痍軍人には徽章或はメダルを授けるといふような奨励策を講じなければ、みんなが働かんぢやないかと訊いた。その点については、そういったものをやりたいと考えているということとを申されました。

まアだいたいそういった点について何かハッキリしたことをお教え願いたいと思います。

三木 いま、お話になつたことは、みんな大へん日

本の現在において問題になつてゐることであろうと思ひますが、結局要するに、いろいろのスローガンというか、標語というものは出てゐるけれども、しかし、果して額面通りに受取つていいのか、どうか。つまりものゝ真相を知りたい。本当の事を知りたいというような希望であらうと思う。そういう希望は、多分国民の間に相当広くあるのぢやないかと思ひますが、その点について、どうか皆さんの御意見を伺いたいと思うのであります
が……。

大川 まアそれは有識階級の人や、上層社会の人には分つておりますでしょうけれども、下層社会のまたその下に住んでゐる、生きてゐるひとぐにもつと、この現在の翼賛政治というものの趣旨が、何んであるか——ということを普及する方法は、何か無いものでしょうか。

三木 そういふ、ともかく、いつたい現政府が何を

考えておるのであるか、日本の指導階級が何を考

えておるのかというようなことについて知りたい要求というのですか、そういうものは相当に烈しく労働しておられる方の中に湧いておりますか？

大川

いや湧いていないのです。それは何故かという、政府がそういう指導方法を執らないからです。だから執って欲しいのです。とにかくこの飯場などに寄食している漂泊労働者、家の無い者、家庭の相剋の為に家へ帰れない、そういう者の数は、とても莫大なんです。これを精神から指導、活かし導いて行つたら、非常に人的な新工夫ができるだろうと思います。

私自身が現在そういう漂泊労働者でありますから、彼等の立場を皆さんに懇えて参考に供し、彼等を救つていたゞきたい——と思うのであります。

見透しが欲しい

佐藤

今の両君からのお話などとちよつと関聯があるのですが、私は、いまこういうことを考えるのですが、一番われわれ国民間の悩みというもの、いろいろな苦みとも闘つてゆき、いろいろな艱難とも闘つてゆきつつあるが、とり分け一番大きな悩みは、先への見透しが与えられていないことだと思ふのです。それにはいろいろ原因があり、いま両君が申されたように、種々な点について在来の秘密主義からそこに何か真相が隠されているのだというようなことにも原因すると思ふのです。随つて許される限り、もつと真実を、政府は国民に知らせているのだ——という信頼の念を国民に与えると同時に、上層部がもつと一元化されなければならぬ。何か政治指導部が、右顧左眄している。それと又一面、いろいろ経済的な窮屈さなどにたいしても、遣り方が、まあわれわれ素人

考えからすると、もつと巧妙に上手に国民の心持の上にハリを与える。こうくう窮屈さに何年耐えてゆけば、その暁にはこういう明るさに到達する。又欠乏は、どういう原因から起つて来たのである——と。

これは例えば、相当常識ある人でも、米が無くなつた。或は砂糖が少くなつた。いったい何からそういうことが起つて来た。そうして又それはどれ位そういう窮屈さに耐えてゆけば、そういう困難さが解消されるのであるか——ということ、ハッキリと即座に言い得るような見識は有つていないと思うのです。私は、国民に、何というか、先きの明るさを与える。光明を、或は見透しを国民に抱かしめる——ということが、今のいろいろな苦難と闘つて生きてゆく上において極めて必要なぢやないかというように考えるのです。

坪田 私も、その点で申上げたいのですが、実にね、

この福井地方は、雪の深い処で、御承知の通り陰惨な処ですが、南京の一番乗をやつた脇坂部隊は福井地方の出身の者が多いので、国策に殉ずる覚悟は十分有つているのですが、どうも政治の遣り方がわからんで、非常に苦勞しているわけなんです。現在私は、中小企業の合同問題を扱つております。金が無い無いというておるが、台湾のタツキリという処から金がウンと出る。金問題は解決するといわれたが、その後何処出たということ、聞かない。實際旨いことを言うのですが、とにかく福井県の人間というものは、御上の仰しやることは何んでも蹤いてゆくけれども、安心して蹤いてゆけるようにして貰いたい。

私の処へ来るある機屋が、「新体制というのは、新しい体制でなく、真の体制の真体制に建て直して貰いたい」と、こういうことを言うておるのですが。（笑声）これは何処の名士の座談会でも、

真の体制というのは聴いておりませんが、そういう具合に政治をやつていつて貰うというとな非常に私共は助かる——と思うのです。

中小商業の立場から

幡 先程、政財の方針が頼りないとお伺いしましたが、確かに商業者の方でもそんな意向があるんじゃないかと思う。例えば、最近問題になつている企業合同。あれは先般来企業合同を進めて民間の方が事実反対の空気が強かった。そうすると、強ち無理に進めるんじゃないと旗色を変える。先般決りました経済新体制要綱においても「中小企業はこれを維持育成す、但しその維持困難なる場合においては自主的に整理統合せしめる」という意味のことが書いてあります。

先般の経済部長の指示事項の配給整理要綱、あれにも整理しないということが書いてあるのです。

業者として合同していいのか、悪いのか、政府がピツタリ決らないから迷っているのが多いのぢやないか。

それで将来、物資が不足だ、不足だから合同する。この先物資が豊富に出て来た時はどうなるか。又元の形に還るんじゃないかという心配をもっている。ですから、むしろ仮りに以前の通り物資が出ててもこの高度体制によつて配給の機関を整理するんだと強い決心を示してくれば、業者が参加するんです。

黒澤 将来の見透しというやつを上層部が示さない、という不満は同感ですが、ひとつはこれは将来どうなるか、ということとは、これは恐らく誰もわからんからぢやないか、と私は思うのです。ですから、そういう場合に、分らないからなまじつかのことを言うと、後になつて変つて来た場合に困る。そういうことで黙っているから、いよく／＼

国民の誰もがどうなるか薩張り分らぬようになってしまふ。そこで一応具体的な見透し、例えば日支事変処理というような問題にすれば、大東亜共栄圏の建設という抽象的なこと以外に具体的な見透しというものを示して、そうして実際に、ある時期が来て、具体的な見透しが中らない、情勢の変化で變つてゆくような場合があつても已むを得ない。とにかく一応は見透しをつけて、その見透しの間違つた原因情勢の変化を説明する。絶えずそういう風に指導精神が變つていつてもいいから、具体的に国民に示されていなければならぬ。そういう風に示せば、具体的な見透しも示すことができるんじゃないかと思つてゐるんです。つまり現段階における指導方針というものを示すべきであらうと思うのですね。

労働者にも政治意識を

三木

いつたい、この見透しを示せという風な話があるようですが、見透しを示すということは、実は非常に困難だろうと思うのです。というのは、現在のいろいろな情勢というものは、世界的な關係をもつておるのであつて、却々そう簡単に見透しを示すことはできないでしょう。が、しかし、見透しを示せという要求が出て来る、というのは、実はこの事變の特色でないかと思う。これが全く防禦的な位置に立つて、他所からどん／＼攻められて来たというならば、別に見透しなんかなくて、ともかく勝てばいいんだ。ということで、非常に団結が簡単に出来るのですが、それが、そういうことでなしに、積極的な日本の政治的な意図というか、つまり、いわゆる大東亜共栄圏の建設というような、一種の、消極的に防禦する立場でなしに、積極的に何かやろうというような、そういう立場にこの事變があるというようなことか

らして、そういう見透しについての心配というようなもの余計出て来ているぢやないか、と私は思う。随つて、見透しを示すというようなことは實際はできないんじゃないかと思うのです。要するに、それはできないとすれば、結局指導階級が、現在どういうことになっているんだという——眞実を示せという要求だろうと思う。

坪田 そうです。

三木 そしてそういう風になれば、われわれも一肌を脱いで、できるだけの協力をしてやつてゆくという覚悟が極る。何か本当のことが、裏にあるんじゃないか——というようなところから、もう一つ本気になれないというようなことが多いんじゃないか。

大川 やはり見透しをハッキリせよということは、国民として、とにかく維新下の国民の団体を組織することが大切です。『上層社会』とか、『下層社会』

とかいう文字は、現在の翼賛政治家の字引から抹消してもらいたいのです。だから下層社会のわれわれにも十分に政治意識を普及し、土方、放浪者、そういう者にも、日章旗のもとの赤子であるぞ！という深い自覚を有たさなくてはいかぬ。それには指導員を派遣するのです。その指導員は洋服を着て行つても駄目ですから、袴纏を着て、みずからそういう労働者とともに働いて、よく彼等の内生活を知つて、そうして自然に指導してゆく。どんな立派な建築物でも、地盤が弛んでおりますと、建築物は弱いですからね。この社会の一番下の地盤からまず固めてゆかなければならないと思います。

工場労働者として

平野 ちよつと、私は、工場に働いておるので同じ労働者なんですが、土木とか、建築とか、或は沖

仲仕とか、そういう労働者と違つて、時局下において、産業報国運動というのが政府の方から捲き起されて、その渦中に置かれて、一応この時局の中に産業を通じて奉公をしなければならぬのだという呼びかけをやられている。その点は、土木労働者や、仲仕とは違つていると思うのです。それだけ時局に接近していると思いますが、しかしながら、産業報国運動というものが起されて、これは非常にいいんですが、今しかし本当の意味において日本の難局に産業報国運動が即しているかどうかという問題になりますと、産報は、従来の労働組合運動をぶつ潰すという性格をもつて実際上は飛び出して来たのですから、却々全般的な産業労働問題までにはまだく及んでいないわけですから、産報報国運動、或は産業報国会というものが、何と云いますか、たゞ産業報国会をやっている幹部連中の運動だけぢやなくし

て、産業報国運動というのは、全労働者、全産業人の運動なんだ。そういう風な広い意味に私たちが考えて、これからどうしなければならぬかというところでやっているわけなんです。実際から申しますと、例えば、最近産業界というものは賃銀が下つて来ている。或は住宅が無い。鼻を貰いたくても、アパートでは子供を産ましてくれない。或はアパートを貸さない。六畳の間に八人入つていて、夜業と昼業と交替で勤めに出るが、その間に寢床の冷えるようなことがない。そういうような住宅状態の中に置かれている。或は交通網を見ましても、朝甚だしいやつは栃木県から臨港鉄道に乗換えて芝浦製作所へ通つておつた。或は夜業（つまり夜勤）をやつておつて、帰りに藤沢辺りで寝込んでしまった。沼津で気が付いて、三時何分かの急行でまた帰つて来て工場へ勤めたというようなものもある。そういうような問題や、工場の賃

銀が安いために、他へ移動しようとする者があれば或は工場の中で面白くないから変ろうとする者がある。そういうようなことから、生産費が高まつて来て、最近盛んに産業問題の研究をやっている方面から危ない危ないということを言われているのだと思う。しかし、そういう状態だからといっても、私たちはこの中に居つて、ただ、危ない危ないといつてゐるんぢやなくして、まだ産業報国会は、たゞ踊りをやったり、唄を歌わせたり何かしておるのだから、これだけを希望してもどうも始まらぬ。例えば、ドイツの一例を引きますと、私の前大島さんの講演をある処で聴いて質問したのです。「ドイツでは下意上達ということはどうなんですか？」と訊いたところが、「君、それは馬鹿げておる。そんな質問をするな。ドイツではヒットラーという男は、一番下層から叩き上げて来た。上達しなくたって彼は知っている。日本

の下意を知らん奴に、いくら上達したつて始まらぬぢやないか……」と、私は成る程と思つた。いくら芸者遊びをしている重役に、労働者が食えなくなつてゐるということをもいつても始まらぬ。結局 天皇陛下の赤子として本当にやつてゆかなければならぬという自覚を有たしめるよう指導することの資格あるものがない。

大川 われわれもそう思うですね。

見透しは決つてゐる

平野 又、先程から皆さんより聴きますように、大政翼賛会の講習会で、ある人に質問したら、先程申されたような回答があつた。私はなんとこの筈棒へらぼうな話だと思ふ。大政翼賛運動を指導する責任者が、中途半端の報告をしていいか、どうか。国民は何処へ帰一し、信頼して行つたらいいか。だいたい日本の現在の難局というものを知つてゐる

のか、どうか。そういう点をハッキリ言いたいのですね。私たちは嘗て革新運動の中に居りました頃に、盛んに三木さんの『新日本の原理』というものを読ませていただいたものです。私そういうものから教えられておりましたが、現在の日本の立っている世界的な難局、これを翼賛会の連中はハッキリと歴史的に掴まなくちゃ駄目ぢやないか。何故かといえば、現在の日本の困難というものは、どこから起きているか、という点をハッキリしておつたならば、決して右顧左眄する必要はない。現在の時期は、単なる国内問題や、欧州問題でなくて、一世紀を劃するような世界的な変革期なんだ。この変革期の次の世界史を支配する日本の思想、日本の政治、そういうものを創らなくちゃならぬ。今まで世界を支配したところの英国の基調は何であつたか。近代産業革命をやつた英国の技術、英国の資本主義的な産業と、それから

それに附属するところの自由主義思想、民主主義政治、これが現在まで世界を支配して来た基本的なものでないか。そうすれば、之を突き破るのは、英国的な産業革命でなくて、産業革命よりもつと高いところの技術、一世を劃するような、次の時代を劃するような技術、それを裏付ける思想、産業組織、政治、それに裏付けられる強い人間を作り上げなければならぬ——という、ハッキリ見透しは定まつている筈である。

坪田 異議なし。

平野 これにたいして断乎としてゆかんければならぬ。実に馬鹿々々しい工業統計を当てにして、アメリカから機械工作機をバラツとやられたらどうするか。それにたいして資本家どもは儲かればいい。いんだら、旋盤、ミーリングを造つたりしているのにはいいものは出来やせぬ。三木さんに希望するのは、本当に新しい技術——英国人の産業革

命、それに附属するところの自由主義思想、民主主義政治、これが現在まで世界を支配して来た基本的なものでないか。そうすれば、之を突き破るのは、英国的な産業革命でなくて、産業革命よりもつと高いところの技術、一世を劃するような、次の時代を劃するような技術、それを裏付ける思想、産業組織、政治、それに裏付けられる強い人間を作り上げなければならぬ——という、ハッキリ見透しは定まつている筈である。

ぬ。

農民の自覚について

伴 私もそれは賛成します。今、農業者は、段々工場の方が給料がいいとか、なんとかでそっちへ行くようになっていますが、これはどうも収入がいいからそっちへ現在は行くのであるから、百姓の収入が他に比して悪いならばそれを直さなければいかぬ。がそれと同時に、百姓は百姓としての自覚ですね。つまり百姓の本身、そういうもの、にたいする自覚が近頃の百姓には段々薄らいで来ているから、農業者が段々他所へ遷つてゆく。これは本当の昔ながらの農業精神を、忘れていたのを自覚せしめねばいかん。しかし、たゞ自覚々々といつても駄目で、やはりそういう精神的なものと同時に、百姓は百姓としてやってゆけるような政策が欲しいと思います。そうすれば、百姓もそ

命、ドイツ人の産業革命の上に立った技術、その技術の上に立った産業組織、その産業組織の上に立った思想、そういうものを一体とした、新しい世界観というものを打ち樹てて、その下に国民を集中したらどうか。私は、翼賛会がそこから出発してくれなければ困る。われわれ自身は、死んでもやる筈だ。今は、医者が、バタバタしてあゝだ、こうだ、と診断をする時期でない。医者は診断することをやめて、自分の血を抜いて、民衆に輸血する決意をもてッ。あゝだ、こうだと診断はする必要はない。こういう立場で、総ての人が真剣になつてやつたらいい。僕はこう思うのです。

伴 (平野氏に) 自分の職分にたいする自覚ですか?——その自覚があればなんでもやってゆける。いや必ずやってゆく。こういうことですね。

平野 そうなんです。その基礎の上に立つて、その政治形態を創つて、肩を並べてゆかなければなら

う余り都会へ都会へと奔らないで、自分の職分に真ッ直ぐに真面目にやってゆけるだろうと思つてゐるのです。

大川 しかし、昔の農民と違つて、現在の農民は、都会人に比較して食糧が自給自足することができから、それに甘んじて少し安心している傾向が無いんでしょうか？ むしろ私はね、イヤ、現下の農民に対して、声を大にして、『現下の農民よ、祖先の労苦を思え、祖先の労苦を偲べ』と言いたい。

伴 しかし、ただ祖先の労苦を偲べとかなんとかいうことだけだったら、自分の生活が第一、問題ですからね。食うということから離れては駄目ですよ。それは立派に自分で食べてゆけるだけのものは与えて貰いたい。それと同時に、又精神的な、いわゆる文化的な、百姓なら百姓としての自覚を促すような、大きい意味の指導精神というものが

欲しい。

大川 やっぱし政府直属の指導員を派遣せしめたほうがいいですね。

伴 それには国の方から偉い人というのが見えられるが、それが百姓の事を知らないんです。自分の実感から滲み出るというか、そういう指導なら納得できるのですが、たゞ、やれ、やれぢや、百姓は納得しませんね。

徳丸 実際俺たちは、これだけの労働をしてやつてゆくには、普通の人比べて、三割増だけしか米をくれないならば、それだけではわれわれのかたけの分の米である。五杯も六杯も飯を食わなければ働いてゆけない。それをなんとかして欲しい。フラ／＼になつて働けないものを、無理に働けといったつて働けない理屈です。米は普通の人の三割増しか食えないけれども、麦については無制限に食つてもいい。それなら腹いっぱいになる。

ところが、麦は実際はなくて挽割にする程残らない。それなら代用食の饅頭なり、小麦を食べ。しかし、それ等の代用食は、米を食うより大部高つくのです。従つて生活費が高くなる。もと／＼日本の農民生活は、せいじつぱいのところまでやっているのです。ほんのちよつと生活費が嵩むと、農家の経済は赤字になつてしまふ。やつてゆけない。米というものは必需品だから、足りなければ、農家のやつてゆける程度の値段で国が買上げてやる。売る時は、買上げた値段で売つては悪性インフレになるから安い値段で売つて、差額だけは国家が損をしてやつてゆく——ということにしなければいかんぢやないかと思うのです。

農家に食糧は不足してない

1 米の不足を補完するために白で荒く挽き割つた形にして煮えやすくしたものを麦飯や粥、雑炊などに調理した。

今野 実際農家の食糧問題がそんなに逼迫しており

ますか？

伴 食糧は農家に不足していない。

平野 小作では米を売つてしまつて、六月、七月になると買つて来なければならない人と両方ある。

伴 今の状態では、小作だけでは食つてゆけません。

今の小作というのは、百姓すると同時に、長男とか、娘が工場とかその他へ必ず出ております。その方面で生活費を得てやつている。それで段々金を余計取ると、どうも百姓はつまらない。そんなことだったら、百姓を廃めてそつちへ行つたほうがいい。そうですね。そういうつまらない、というような気持ちを起させないように、百姓としての自覚ですね。そいつが今百姓にとつちや一番欲しいところぢやないかと思うのですがね。個人々々の百姓は……。

公益と私益

黒澤 それは例の公益と私益との問題になるんじゃないでしょうか。今のところは、私益は悪く、公益はいい。こういうのであるが、いいとか悪いとかの問題でなく、現実において、われわれの生活が、いったい個人の責任においてやってゆかねばならぬのであれば、一定の私益がない限り生活ができないんです。ですから、結局統制経済といったものの眼目は、私益というものを公益というものに合致せしめるということが目的なんではないか。昔の資本主義の上昇期においては、抛つておいても公益に合致した。しかし、こういう時代においてはそういうことは求められない。そこで、大政翼賛運動とかいろいろなことが起つて来たが、実は私益を公益に合致せしめるということは問題であつて、いいとか、悪いとかいうことは第二の問題である。むしろ自然と私益が公益に合

致する途を発見することが中心問題でないかと思う。

平野

しかし、米の問題は、農村の問題だけぢやなくして、工場方面は一層切迫しておるのです。そして農村の労働よりも工場に於ける製鉄労働とか、製造労働とかは一層激しい労働ですね。それにたいして例えば一人一日二合一勺、農村もそうである。工場でも二合一勺では堪りやしない。こういうのです。あんなのほうの百姓も堪りやせんという。両方がそういつている。こつちからとこつちからと追い詰めてゆけばどうにもならなくなるんじゃないか。結局現在のようなバラ／＼の配給組織では駄目であつて、国民経済の立場から配置して貰わないとやれなくなつてゐる。

例えば工場で、少年工を採る。どうもはじめは米の飯が食えると思つてやつて来る。ところが、私たちの方では一週間に三回鰻鮓を食わしている。寄

宿舎では大抵の日は鰻鮓を食わせる。そこで田舎へ小遣錢をせびつて買い食にする。結局公益とか私益とかいっても、そういう問題が問題ぢやなくして、僕はむしろ本当の国全体の計画的な配置ですね。経済の配置をやらなければならないのであつて、その配置計画を本当に推し進めてゆくと公益が優先であり、私益が次だ。こういうことが言葉によつて表現されるのである。

今野 それぢや、本当に米を国で二合一勺でやつてゆかなければ仕様がないうことになつたら我慢しますか？しないのですか？

平野 我慢するのではなくて、工場の人間を農村へ返せばいいんです。

今野 返したつて米は出来ません。

平野 半分に切つて田舎へ返す。そうして四合二勺の米を食わせて働かせたらいい。

今野 本当に米が無ければ我慢しなければならぬ。

平野 それは政策ですからね。優先的な手を打つて……。そこが政策ですよ。国民経済全体を考へて外国との交渉ですね。或は支那との問題、東亜共栄圏の問題に積極的な手を打つてゆくのが政策であると思うのです。

大川 私は、でかい弁当箱にウンと押し詰めてゆくが、それでも一時間か、二時間働くと腹が減つてしまう。(哄笑) しかし仕方がないと思つてゐる。われわれ鉄道の従業員は諦めてやつてゐる。しかしその諦めを、現在の大政翼賛会が、諦めを辛抱がいいということで見過してはいかんと思ひますね。

伴 私の言うのは、今の状態で足りない、というのは、この前の不作——一昨年ですが——あの不作のせいだと思ふのです。今は間に合つてゐるのです。普通の状態であれば、みな麦飯か、代用食を食へば米の方は心配はない。

が、これから先、農業の労働力が足りなくなると
いうか、都市へ集中される。そうになると、そいつ
が恐ろしいと思うのです。ですから、百姓は、今
もう已に労力というものは低減の傾向に来ていま
す。これをそれ以下というか、これ以上百姓とい
うものを減らしたくない。減らさないようにする
には、やはり百姓に自覚と同時に希望を有たせる。
そういうようにして貰えば、百姓も自分の仕事を
本当にやれば、このまゝで労力は足りないながら
も、どうやら皆さんが食つてゆける位のもは間
に合つてゆくと思いますね。

久武 米の問題がありましたから、米から申しま
すが、結局先程から言われているように、見透し
とか、政府が真実を語れば結びつけてゆくんだと
思います。これとても、それはどういう風になつ
ているから米が無いので、もう少し経てば出て来
る。そういう先が分つておれば心配しない。全然

分らないから国民は不安を有つ。そこに無駄な心
配を国民にさせている。もつと真実をいえば、二
日三日米が無くても、三日目に出て来ればいい。
出なければどういう風になつていくから必ず出
る、——と、真実を語つてゆけば、国民はやれる
ところまでやつてゆく自覚を有っている。これは
先程三木先生のお話がありましたが、見透しが絶
对でない世の中である。すべて国際情勢でゆく
のですから、明日の情勢が分らぬ。見透しを語れ
といつてもこれは無理かも知れないが、上層部が、
こういう風にやつてゆくぢやないか——と腹を
示せば国民はやつてゆくぢやないか。

国民は真実に従う

久武 ですから、それが例えば南進論にしても、果
してどこまで南進して、どういう風にしてゆくか
という位は、それをすべてハッキリ全部語るとい

うことはできないでしょうけれども、こういう風な方針であるというところまで語れば国民はついてゆくと思います。

武力をもつて飽くまでやるのか、向うがある程度高圧的に出てくれば日和見するのか、ハッキリしない。従つて国民も日和見的な態度になつて迷うのぢやないか。

三木 そういう迷いが出て来るということも、一つはこういう問題に関係していないでしょうか。例えば、言われていることは非常に理想的なことが言われている。しかし、実際は、政府の言つていような理想的なことをすぐ出来るんだけれど、しかし、その遣り方が悪いから出来ない——と。

平野 そうなんですな。

徳丸 いろいろ質問してゆくと、その辺でやめておいてくれ。その先は言わないでくれ——と言われている。そうすると、何か痛いところは触らないでく

れといわれているように思う。

播 例えばこういうことがありますね。鉄工所の有限会社法による合同をやった。その時に、省のある課長を招いて座談会をやった。

「合同した場合に、配給をどうしてくれる」と、業者としては切実な要求に基く質問した。すると、其処でもつて、どうぞ話があれば本省の方へ来てくれ——とこう仰しやる。その人がちよつと一月も経たない裡に他のポストに行かれる。

エキスパートが経済統制をやるその場合にいない。一年、二年の裡に全然他の地位にゆく。地位を変えなくても栄達するような組織にして、業者がしつかり突ツ込んでゆける行政機構にして貰いたい。

力強い政治力を

坪田 私、三木先生の最初にお出しになった、問題

在処という話題に還りますが、問題の在処については大分納得がいったと思いますが、この力強い政治というものがハッキリしていないところに、国民の諸々の悩みがあるんであつて、或は政策も悪いし、統制経済、計画経済というようなことを言いながら、それもハッキリしないところに、凡ゆる層の国民というものは幾多の悩みを有つておる。こゝに私は、政治と国民生活の重大問題があるんで、この問題を解決するのは、力強い政治力というものの在処をハッキリするところにあるんじゃないかと思ふのであります。

一切合切、自分たちの頼る政治的な力が無い——ということをして、私はこちらへ参りまして、前の関係の友人に逢つて聞いているのですが、職場の人がみなそう言っているのです。この際力の強い政治力を結成することが必要なんです。力強い政治力というと、何か近衛さんが、本当に新体制を

やつて、大政翼賛会をもつて国民を結成され力強い政治力の中心体にするといわれるならば、それをやつて貰いたいと思ふのです。

私の町でこの間こういうことがあつたのです。近衛さんが玉の海に何か書いてやつたのです。それを新聞が大きく書いておつたのです。ところが、ある人が、伴が支那事変で戦死したその石碑を近衛さんに書いて貰いたい——といつて頼みであるけれども、一年経つがまだ来ない。相撲取にはすぐ書いてやるが、南京一番乗りをやつて戦死したのものには書いてくれない——と親爺さんが言っているのです。近衛さんなんかは、もうちよつと、玉の海に書いてやるよりも、本当に東亜共栄圏確立のために犠牲となつて死んだ人の墓碑を書いてやつたほうが、そうして而もそれをジャーナリズムが取上げてやつたほうが、どれ程人は満足するか分らないと思ふのです。

私は、この前の二千六百年の式典に、全国から五万いくらという、殆ど日本の各地方における有力者が集つて来た。あれにたいして、近衛さんはどういうことをしたのか、私は、近衛さんという人が新体制の確立をもつて自分の政治的生命、或は使命だという覚悟をもつておられるなら、あの全国から参集した大衆を、日比谷公会堂なり、軍人会館なり、青年会館なり、国技館なりに集められて、俺は今こういうことを考えているから、諸君も一緒にやつてくれと、何故そう言つた政治的な発言をやらないか。ムッソリーニなり、ヒットラーが、今日あれだけ国民の希望を集めている所以のものは、一国の最高の政治家が民衆の中へ躍り込んで、信念のあるハッキリした態度を民衆に見せて、国民的な信頼をかちえているのである。

黒澤 日本の政治が何か弱いということは、日本は国体というものからして、一党をもつてする強力

な政治体を創るということが、憲法に違反するということのようなことがあつて、そのために、近衛さんの声明にあつたように、一党は部分であつて、部分をもつて全体と見ようという風な考はそれはいけないという解釈があつて、その事が、誰か積極的な人物が出て来て、俺が政治をするということにたいする気兼ねというようなものを作っているんじゃないかと思うのです。それは万民翼賛という風な意味を非常に窮屈にとっているために、そう言つた気兼ねをする、その結果人物が出て来ないということになつて、非常に弱体政治という風な悪い半面だけが出て来る。余計な気兼ねをしないで、万民翼賛ということを楽しんで、まあ大いに偉い人物が出てやつてもいいんじゃないかと思うのがね。

個人の衛生と社会の衛生

高松

私の考えていることは、政治と国民生活というものについて極く大雑把に考えてみますと、とにかくにもおのおのが満足のゆく生活のできることに、又各自の有つ性能を十分に發揮し得ることが立派な政治ぢやないでしょうか。政治というのは、おのおのが処を得て、十分に愉快に気持ちよく仕事ができる。それ以上に、われわれの要求もなし、不満もない。しかし、われわれが自覚すればいいというお話があつた。農民は農民、商工業者は商工業者、官吏は官吏、すべてのものが自覚して、持ち場持ち場で最善の努力を盡すことができれば、これは申し分のないことです。

けれども、いくら個人が熱心になり最善を盡しましても、それだけでゆかないことがございます。極く卑近な例でありますけれども、まづ蠅というようなもの、これは今は寒い時ですけれども、病気の媒介の原因になる。その家一軒だけが塵箱や

お便所をよく清潔にして、蠅を造らないようにいたしましても、それは駄目なんです。それも隣も全部がやつてくれなければ駄目。いくら個人衛生が発達いたしましても立派な衛生生活は出来ないのです。ですから、

勿論個人の養生、摂生が必要でございますけれども、社会の全体の衛生ということが非常なことです。この点において、当面の問題として、大政翼賛会には岸田君が文化部長になつてゐる。結構なことです。けれども、われわれの一番大切な健康の為に健康部長というものが出来ていますが、保健部長というものが出来ていますか、いやしない。

本当に大政翼賛会という新時代を劃するということのようなものに、そういう重要な人間の本当に立派に生活する基をすることの衛生に関する部署が置いていない、これは実に日本の伝統なんです。昔

からずつと政府の遣り方を見ても、後藤新平¹氏は台湾にまゐりまして、これは実に立派に台湾を統治いたしました。まず道路を造り、水道を造り、下水を造り、衛生研究を造りという風に非常に立派な衛生上の施設をしました。それから満州に行つて、関東州をよく治めた。が、その後藤新平さんが内務大臣になつて何をやったかといえは何かもしやしない。ところが、歴代の内務大臣で一番偉かつたのは安達謙蔵²氏です。

これは日本の癩³問題を解決した。これは熊本の本妙寺⁴に南無妙法蓮華經の信者の患者が非常に集るから先生刺戟せられたのかも知れませんが、とに

1 1867～1929、台湾総督府民政長官。満鉄初代総裁。

2 1864～1948、熊本県出身の政治家、若槻禮次郎内閣で内務大臣。在任中「1931癩予防法」の制定

3 ハンセン病の以前の呼び名。

4 明治以前から本妙寺参道には患者が喜捨にたつていたが、194079本妙寺事件、熊本県は、九州療養所の協力の下、本妙寺周辺にあったハンセン病患者集落から157人を強制収容し、全国の療養所に分散した。

かく安達さんは癩撲滅の端緒を招いた。百年経つと癩病者が無くなる。これは安達氏のお蔭です。もう少し内務大臣をやつておつたら結核問題をも解決したろうと思う。結核では毎年十五万人位実に立派な人たちが死んでおります。

又結核のためにその家庭が破壊されるということは申すまでもない。今日尠くともたくさんの結核患者がある。が、それを収容するどんな設備がある。東京の江古田に二、三千人容れる療養所があり、各府県にも夫々ありますけれども、それは問題にならない十分の一にも、二十分の一にも及ばない。又病院があつて、病人は其処へ入れても、後に残つたものは困つてしまふ。結核問題の解決、本人の入院以外に後の家族を助けることから考えてゆかなければならないのだから、非常に問題が大きい。

播 それと同じ様なのは転業問題です。職業輔導所

を創つて、業者の失業した家族に生活手当を与え
るといわれているが、それで果して生計を維持す
ることが出来るか、恐らく涙金程度でないかと思
う。

漫画「大和一家」

坪田 それでは私は、きょうの議題が「政治と国民
生活」であります、大政翼賛会宣伝部監修で大
和一家という例の漫画がジャーナリズムに動員さ
れて出ているのですけれども、あの人は中等学校
の先生ということになっていますが、収入が幾ら
あつて、（笑声）どういう生活をしているかとい
う実体が明かにされていないのですが、あの一家
が一人も病人になるようなことは出ていないので
すが毎日新聞や雑誌に翼賛一家が出ているのです
けれども、あれだけ暢気にあゝいうことをやつて
おられるのは、（笑声）果して収入状態はいくら

あるか、家の経済とか、そういうことがどうなつ
ているか分らない。

高松 それは書いてない。

坪田 炭がどうなったとか、米がどうなったとか、
そういう統制経済に触れていない。そういう翼賛
一家がジャーナリズムに踊っている有様自体が、
日本の政治がいかに国民生活と切り離されている
かということを物語っていると思うのです。

あれが、この人の家庭は財産は幾何あるんだか、
学校の先生として高等官何等の待遇を受けて、年
功加俸は幾何受けているか、そういう国民生活と
結び付いた漫画を宣伝しなければならぬので
す。とにかく、日本の政治は、現在の真相を語ら
ない。唯し観念的にスローガン、標語を押しつけ
て、なんだ合点のゆかんことを言っている。翼賛
一家の正体を暴露して欲しいのです。（笑声）

生活環境に触れる政治

平野 三木さんの言われたように、東亜共栄圏の確立とか、臣道実践とかいうことは、これは日本人の悠久通ずる理念だということになるんであって、政治というものは、もつと具体的にそういうものによつて根拠付けて国民を引つ張つてゆくもの、そういうものが本当の政治だと思ふのです。その点佐藤さんどうです？

佐藤 確かに政治としては、私もそう思うのであります。もつと具体的に国民の胸に響かすようにゆかなければならない。スローガンや、標語を掲げたつて何もならぬのでしょうか、根本は、しかし歴史的必然として、そういう日本が辿つてゐる、或は辿るべき道というものをもつともつと国民に把握させなければいかんと思ひます。その上に立つてはじめていろいろな困難と闘う氣持が湧いて来るだろうと思ふ。

先程政府が見透しを示さないということが論議の中心になったのですが、見透しということとは、私共の考えるのは国際的な蘭印問題はどうかとかという政治的なことぢやなくて、国民の経済活動に關する範圍において、こういう努力、こういう我慢、こういう辛棒をすればどうなるかというよな、生活環境にたいする一つの見透しとか、安心、或は希望を与える。それが私は、由つて以て原因となつて、政治への信頼性というものが湧いて来るだろう。

そうすれば、東亜共栄圏の往く道がどうなるか、というよな、遠大な、高度な政治的なことにつては、国民は訊かずして、あなた方に委すんだという氣分が湧いて来る。その氣分を湧すために、根本の問題として、生活環境について、或は経済活動の範圍において、尠くとも国民に希望を与え、見透しを与えるということを私は要求したい。根

本は、先程誰方が極めてよく表現せられたが、全く政治力の弱さでしょうね。政治力というものが強いものになって、今言うたような施策を行つて、そうして国民をして政治への信頼を与える。それで率いてゆく——ということに問題があるんじゃないか。個人々々の生活に関わる点についての希望とか、見透しを与える。それによつて政治の信頼を湧き上らす一面において、日本の往くべき歴史の必然、新体制への、何というか、協力の度合というものについては、まだまだ遺憾の点があるだろう。それは翼賛会の手段も及んでいない点もあるだろうが、しかしながら、やはり政府が、客観的現実を国民に把握させておらんから、それが現れぬだろうと思う。が、往くべき道は、大政翼賛会を強力化して、そうして国民がそこに一億一心といふか、とにかく一億の心を集める行き方ではないかと思ひますね。

その方法としては、先程言われたいろいろな部の指導員の派遣ということも必要でしょうが、それはひとつの統制経済とか、それ等に関連する方法論であつて、根本というものをもつと確立しなければいかんだろうと思うのです。

黒澤 経済新体制なんということにたいしては、国民一致の強力な機関が要望されていいと思います。例えば、会社経理統制令なんか、大分財界のほうには評判がよくないようですが、あゝいうものは、何も民間側で無理に反対している意味では決してない。それは民間側でも、全然統制経済というものをやらずに来たら、どんな悲惨な結果になつていくかという限界も解っております。ですから、そういうところに民間側の協力といふか、予め相談するとか、何かそういうた機関を設けて民間側に立案をせしめるということにしたらどうか。そうすればいろいろな経済関係の法令も、民

間の協力によってうまく運用されるんじゃないか
と思うのです。

士族の商法

播

七・七禁令¹、あれを出すには相談なんか全然無かった。あれなんか士族の商法ぢやないかと思う。国際情勢がこうなっている。例えば日本贅沢品を停める。いわゆるロスを外国へ売り出そうというのですが、日本のロスを外国が買う、という国際情勢であつたか、どうか。現に生糸が二千六百円から二千三百円台まで下つているということは事実である。

あれは士族の商法です。商売人に捌かせたらもつともつと旨く捌いたと思うのです。

平野

民間に相談しない。しかし、今の民間人に相談規則¹「貴金属・宝飾品の製造を禁止、服飾については細かく値段を規定する。」

談したら、先ず第一に自分が儲けることを考える
だろう。

佐藤

反対運動が囂々^{ごうごう}と起つて……。

平野

日本の往く道を本当に自覚した形において経済をどうするか——という考がなかったために、今までの政党や労働組合幹部に現在の政治の指導権がとれなかった。政党は、党利党略を事とし、日本の生きてゆく道を忘れておつた。労働組合の幹部は、今の日本の産業をどうしなければならぬいか、日本の今やらなければならぬ使命、その力となるべき産業をどうするか、そういうことは第二にして、まづ労働者の問題、労働者の賃銀をどうするかというようなことをやつておつたために、そこに指導権を失くしたのです。現在民間がいくらバタ／＼したつて駄目だ。本当に日本の往く道をハッキリして、自分自身まず日本の指導者に成るんだという自覚と信念が無い民間に相談し

たら、忽ち闇をやつて大儲けをする。労働者の統制令だつて、民間に相談したら、早速統制令が出る前にバタ／＼と移動してしまふ。

そうして日本がやらなければならないと意図したものととは、全然反対のものが出て来る。そこに結局官僚というものが正しく引張つてゆかなければならぬ点がある。しかしながら官僚自身がやれなくなつて来ているところに、民間の側からも、古い皮を破つて、新しいものが出て来なければならぬ事態になつてゐる。

坪田 私は前の三木さんの言われた問題の在処に還りますが、問題の在処は、とにかく政治が弱い、技術が下手だということになる。ウンと政治を力強くして、技術を上手にやつてゆけば国民はついてゆく。東亜共栄圏の確立ということは、親鸞の西方十萬億土とだいたい似てゐると思うのです。理屈で見透しを言え、結果を言えというものでな

くして、国民が信念として感知すべきものである。これを東亜共栄圏の問題を、十萬億土の極楽浄土の上に感知せしめるだけの政治がない。又、宣伝の仕方において政治的な技術が下手だということに結論がある。こゝから国民のもろもろの悩みが出て来るんじゃないか。私はこういう具合に考へるのであります。政治力を強くする。その技術をうまくやつてゆくと日本の国民生活というもの結び付きがハッキリする。こういう風に考へてゐるのです。

伴 政治の弱さという話がありましたが、今の政治は理想に奔つてゐるような気がするんです。農村なんぞの問題としては、適正農家を創れといわれているが、適性農家を創るには百姓の数を減らさなくちゃならないんです。それには減らして、満州へ分村するといふわけになるんでしょうが、實際問題として、百姓は、自分の祖先伝来の土地を

棄ててまで、よう却々満州へ行くものでないのです。それをやろう、やろうと、理想的なことばかり言っているが、それよりもつと現実の農村なら農村の真の相というものを観る。余り理想に奔りすぎてしまつて、足下が暗いような点がある。一番本から立つてゆかないから腰が弱い。そういう風になるんじゃないか。

店主の転業はむずかしい

播 それと同じ様に、商工業者の転業問題にしても、余り騒ぎ過ぎやしないか。従業員と店主と家族従業員、三者ほぼ等しい数に近い。そうしますと、店主というのは、だいたい現状維持を希望することは強い。面子の關係を特に重んじますから……。それと店員のほうはこいつは転業が割合に楽なほうです。ですから、むしろ店主はそのまゝにして、店員の方へ国民徴用令を旨く活用して、

いわゆる徴用という名譽の感激を与えて、国民勤勞訓練所なり、職業補導所に入れて転業の道を講じたらいいと思います。しかし店主や、家族の従業員者には、適当な家内工業なりなんなりに転業するよう指導したらいい。

それでだいたい企業と謂われておりますけれども、中小商工業者は、企業でなくてむしろ生業でないかと思う。この特質を知つていて、十分に政策を樹てられるならば、もつと旨い方策が考えられると思います。

中小商業者の内容を知らない。八割五分は、店主と店員二名以内のいわゆる零細の業者が多い。資本的に考えると企業といわれない。生業である。それを企業と同じ様な政策をもつて律するところに、中小業者にたいする無理が出て来るんじゃないか——と思う。

学生の喫煙を禁じて欲しい

高松 今の橋田文部大臣が、科学する心ということ
を言われるのは、却々気の利いたことと思つてい
ますが、私はひとつ疑問をもっている。それは橋
田さんは、生理学者である。私は、酒は飲まない
から、ビヤホールへ行かない。が、話に聞くと、
学生が——こゝに今野さんが居られるが、これは
個人攻撃でないのですが——喫茶店でビールや、
お酒を飲む以外に実に煙草を喫うそうです。学生
の喫煙は凄いものだそうです。学生時代に、青年
にニコチンが有害であるということを橋田さんは
知らない筈はない。

今野 そういうことは、政府で禁止すればみな廃め
ます。

高松 だから、何故あの橋田さんが、弱々しい青年
にニコチン毒を与えて黙っているか。これは命令
して廃めさせなければいかん。未来の大国民を創

らなければならぬ重要なことです。自分で働いて
いるならともかく、大川さんは、働くから酒でも
飲まなければ遣り切れないと言われる。これは同
情する。家にストーヴがあり、絹布の蒲団があり、
紅茶、ココアがあるのでない。

学生と政治

今野 学生、青年の問題ですが、文部大臣は、学生
は学問しておればいい、という。しかし、学生が
打ち込むだけの学問を大学で教えていない。大学
というものは、学問を通じて教育する処で教育を
通して学問させる処でない。で、これについて、
学生がどうしなければいけないということは又話
が違いますけれども、政治と国民生活に関して申
上げたことは、大学生を半年も遊ばしておくとい
うことは勿体ないと思うのです。そういう風に
大学自身が、大学生が打ち込むだけの学問を授け

る教授が少いのです。(笑声)

優秀な教授に就いた学生は幸福ですけれども、一般の学生というものを見ますと、学問に打ち込めないです。それでいろいろ考えられていますけれども、やはり学生も生きていますから、政治問題とか、生活問題とかに関心をもちます。それが青年としての情勢ですね。若き、そういうものの捌け口も一つもない。学生生活はつまらない。その捌け口をどこへ持つてゆくか。結局もつて行き場所がない。ですから、勢い無気力な、ちつとも役に立たない青年が学校を出てゆくわけです。何の為に半年以上の休みを置くかわからない。この学校で授ける知識が少いから、休暇の間に勉強しろというのかも知れない。が、全然勉強しない、働いてもない。何万という大学の人的資源を遊ばしておくのです。これは大陸へ持つてゆくなり、或は休みの間の集団生活をもつと政府が利

用できやしないか。非常に勿体ないような気がする。今大学においては、学問を授けておるといっても知れませんが、団体訓練なんというものは絶対しない。そんな喜びながら集団訓練の労働奉仕をさせることを僕は望みたい。あれを大陸辺りへ連れてゆけば、半年なら半年、今年三年が行つて、来年は今の二年の人が同じ処に行くというようにして、ドイツのアルバイト・ディーンスト Arbeitsdienst 的にさせれば、喜びながら勤勞奉仕する。そうして学校へ歸つて来ては、いままでよりもつといい内容の学問を授ける。

そうすれば、学生というものは、喜んで政治に参与できる。自分たちも国民の一員として、国防能力の増進に参与しているという国民意識が生れる。そういう団体の中で愛国心を叩き込めば、学生だから学問しているんだというのでなしに、積極的に私は学問していることが一番いいんだとい

うことをハッキリ自覚して来ると思う。

佐藤 大学の教授の講義というものは、殊に味わいの薄いものである。僕等は法律をやったのかも知れないが、大学の先生の講義というものは、これは試験の前にプリントを買って読めば試験は済むのだ——と、タカを括られる程度のものであるところには癌があるんじゃないか。（笑声）もつと大学の教授というものは、講義を聴かすように魅力をもつようにしなければいかん。これから学生が学問する主体に——学問を愉しむという主体にならなければいかん。今までは教育を授ける、教育される客体になっている。それは学問をする主体にならなければならない。

議会に何を希望するか

三木 大分いろいろお話を伺いましたが、最後に、大政翼賛会にはいろいろな希望が出ましたが現在間

もなく開かれようとする議会にたいして、議員は国民の代表だというようなことを定義的に謂われているわけですが、そういう議会をどうお考えになるか、或は議会にどういうことを希望するかというようなことを、此処で皆さんに御意見を伺えば、日本の政治に対する一つの参考になるんじゃないかと思います。そのことについて、誰方かひとつ御意見を述べていただきたいと思います。

久武 今度の議会は翼賛議会である。政党というのは解消されて、一旦政党というものは無くなつたのですが、しかし、その中に盛られている人というものは、やはり大部分が職業政治家であつて、正直に言えば代議士に成るために政治をやる人であつて、政治にたいする、極端な言い方ですが、信念とか、実行力というものは殆ど無くて、自分が職業政治家に成ろうという意識で代議士に成っている人が大部分であろう。そういう風なものを

出した国民に罪があるわけでしよう。結局罪は国民にあるのでありますが、こういうものを改めて、再発足しなければ、議会にたいしてあまり期待は有てんと思つてゐる。

高松 私、議会に望みますことは、議会というものは、たゞ代議士だけでなく、政府委員がありますので、先ず内務省の政府委員、政府当局者に望みたい。戦時下で国防上作戦上いろいろな差障りもありましょう。それに支障を来さない程度で、こゝでいろいろ申したり、伺つたりしておりまして、日本に有るがままに議会で報告して貰いたい。

それから代議士諸君は、われわれの言わんとするところを、われわれの聴かんとするところを、やはり要求を有ておられると思うのです。それを大胆に卒直に議会において質問して貰いたい。しかし、余程これは困難なことです。ですから、

これは本当に一死報国というような念で、固い覚悟でもつて立たなくちゃならぬと思うのです。それを私は議会に要求します。そういう代議士にたいしてわれわれは本当に死力を盡して後援を惜しまない。

黒澤 そういう議会の再発足ですね。やはり政党というものが無くなつて、これからの時代になりますと、どうしても職能別に議員が出るということにでもならないと、非常に何んといひますか、悪くいえば、烏合の衆のようなものになつてしまつて、結局国民の意見が具体的に反映できないことになるんじゃないかと思ひますね。例えば選挙の場合においても、そこに立候補した候補者なるものは、われわれの生活と意思を反映しなければならぬのだけれども、バラバラでは一般的にわれわれの意思を反映するということは、それは選挙なんかで非常に抽象的な項目を十位列べて演説

しておるのですが、具体的に意思が反映されるということは殆ど期待されないですね。それが議會へ出て行つて、しまいにどうかへ消えてしまうという風なのが従来もあつたし、又これから政黨というものが無くなつて、そういう限定されたスローガンというものの発表が困難になつた場合には、どうしても職業別に候補者というものは、具體的なスローガンというものを限定をして議論をしてゆく。そうしてそれをわれわれが支持してゆく——というような方法が一番いいかと思うのですね。

坪田 僕は今度の議會は、形の上では翼賛議會として再出発という風になっていますが、今度は政府の方も、議員さんの方も余程しつかりして貰つて、國民が帝國議會を信頼していいか、或は翼賛會を信頼すべきか、或は政府というものを信頼すべきか、國民がどこへ頼つてゆけばいいんだということ

とをハッキリしてくれるように旨くやつて貰いたい。こういう具合に考えておるのであります。

平野 例えば、中央協力會議が招集される前に、近衛さんが、従来國民は、四年目に改選される議員を通じてだけ政治に参与していたが、これからは日々直接自分の中から議員を出して政治に触れるということになるんだ——と言われた。それがどうなるのかと見てみると、結局選挙法の改正ですね。あれの改正でもつて、段々議會というものは國民から遠ざかつてゆくのです。現在の戦争というものを考えてみても、頻りに國家總力戰ということ言っているのですが、國家總力戰というのは、戸主だけでやっているのではない。政治、軍事、思想、經濟一切のものが國民によつて担われている以上、本当に國民の上に立つての政治機構でなければならぬ。もつと國家總動員の趣旨に沿つて、現在の國の使命というものの遂行を

担つてゐる全国民、女工にしる、或は又青年にしる、すべてのものを、この議會にたいして、或は一般政治にたいして参加させる機構、そういうものが必要なわけなんですがね。

さて現在の議會は、直接労働者の問題を取上げて話しますと、今度の議會に労働者の年金法案というものが出る筈です。それから産業報国団法案、労務官制度というものが法制化される。それ等が提出されるわけです。結局それにたいして、現在の議會は、全産聯と結んで、この官僚法案を握り潰そうとしている。官僚がイニシアティブをとつて立案した法案は、健康保険法であれ、退職積立金制度であれ、最近の一切の労働者に関する法案というのは、議會において握り潰されて来た。そうなると、議會というものは、官僚から出される労働案にたいして協賛を拒否してゆく、権限を狭めてゆく傾向にある。むしろ議會としては、本當

の意味において労働問題を取上げなくちや駄目ぢやないか。

播

又、職能代表も本當の下から出た代表でなければいけない。今の職能代表者は、都会においては一流メーカーか、問屋であり、農村においても、地主階級が中心になつて農村問題を論じている。商工業者の問題にしてもそういう上層の人が論じているのであつて、果して眞の相を把握しているか疑問だと思ふのです。この間の中央協力會議に出て来た方々が相當な論議を為さつておりましたけれどもこれとても現在有名な一流会社の代表です。ですから、本當の組合なんかの下から代表を引つ張り出す、組織を創つていたゞきたい。

坪田

それから今度は出来ることなら相撲の放送を廃め、東新、鐘新も廃めてしまつて、(笑声)帝國議會の尠くとも総理大臣にたいする質問と、予算總會の質疑、応答はぜひひとつマイクを通じ

て、他の放送を打ち切つてもいいからやつて貰いたい。こういう希望を有つてゐる。

思想指導について

三木 最後にもう一つお伺いしたいのは、今選挙法の改正の問題について平野さんからお話がありましたが、そういう選挙法の改正というようなことも、今度の改正主旨の中には、思想的な、イデオロギー的な問題が入つてゐると思うのですが、そういう現在のつまり国民にたいする思想指導といひますか、イデオロギー的な指導というようなことに ついて、何か御意見なり、御希望があつたら、この際一つお話ししていただきたいと思うのですが……。

坪田 それで今三木先生の言われた思想の問題ですが、今は思想が無いから、いろいろの矛盾が出て来るんだらうと思う。もう少し国民の納得がゆく

思想というものをハッキリして、選挙権の問題でもその他いろいろなことを考えてゆくと政治力が強くなるんじゃないか。こういう具合に私は思うのであります。常任総務の諸君がイデオロギーで政治をやるのか、力で政治をやるのか分らないのですね。もう少し選挙法の改正、帝国議會の問題に關聯して、イデオロギーで政治をやつてゆくのか、或は力で政治をやつてゆくのか、そのところをハッキリ示して戴きたい。

佐藤

一つだけ尚申し添えておきたいのですが、国民の体制を新たにすることも必要であるが、いたい政治力が弱いというが、政治についての感觸——すなわち政治について国民が感ずるのは、官僚の挙措によつてでしょう。官僚の挙措がいいとか、悪いとかいうことで感じるんである。又、統制經濟から計畫經濟への完成と段々進まなければならぬでしょうが、そのいろいろな立案は

官僚によつて為されるので、官僚の良き悪さというものが、殆ど政治の運命を決するだろうと思うのですが、官界の体制の一新ということを、ぜひもつと突き進んだ方法において政府が断行しなければいかならう。そうしなければ政治というのは生きて来んだらう。私はそう思うのです。

私は一年ばかりですが、支那などを歩いて、先方の人たちと附き合つて歸つて来て、まず新聞で見たことは、向うでいろいろと官僚にたいする不平や、不満というものを耳に胼胝^{たじ}が出来る程、聞いたのですけれども、いったい新しき体制を樹立する官界というものではどういうことを考えているか。はじめて知ったことは、官吏が満州国政府、或は支那の新政府へ入るといふような場合に、後から歸つて来た時の用意に、恩給年限は通算するとか、或は内地で勤務していると同様に見積るとか、或は内務省を立案して、樞密院に廻した。私は、

今の日本の行く手にたいしても、官僚というものが如何なる程度の意気込みをもっているのか疑わざるを得ないので。

播

いわゆる天降り人事ということはあるが、天昇り人事ということは聞かない。だが、天昇り人事をやつて民間から企画院次長に住友から来られたように、これからどん／＼経歴に関係なく拔擢して、天昇り人事をやつて貰いたい。役人は、係りが殖えれば収入も殖える。委員会へ出れば手当が貰える。転業問題を一つ扱うにも、現在国民生活指導部でやるし、内政部でもする。経済関係の役所でもやるし、中央物価統制委員会でもやる。商工会議所でもやるし、商業組合中央部でもやる。一つの問題にたいして凡ゆる関係がやつてゐる。しかもそれ等の顔触れを集めてみると、同じものだ。むしろそれよりも一元化して強力なものにしたらいいかないかと思ひます。

平野

しかし、天昇り人事というけれども、現在の官僚体制というものと同時に、日本の国民性というやつですね。日本人というものはまだ歴史的に政治を国民的なものにする経験をもっていないと思うのです。だから天昇り人事なんか主張すると、米屋のあんちゃんが、いざ共販所なんか出来る、早速自分が役人に成ったような気になつて威張つてしまう。(笑声) それだから天昇り人事というけれども、問題はそういう末梢的なところになくて、根本的な国の歴史的な改革をやらなければ駄目だ。人間を敲き直さなければ駄目だ。

播

近頃業者が、「配給で威張り出したか小商人」という風流な短冊を戴いた。が、今までは余りに低く過ぎた。顧客が御用聞から借倒して逃げたものですが、それで消費者も食つてゆかれたのが不思議だ。消費者も、配給者も打つて一丸とするところに、日本人的な性格があると思うのです。

平野

大改革をやる必要があります。三木先生の言われる、人間の歴史的な倫理革新をやらなければ駄目だ。

国民全体が反省すべきだ

三木

それは確かに今の政治家なり、又官僚なり、その他にたいしていろいろ註文が出ましたけれども、結局政治家も官僚も皆国民なんですからね。やはりそれが悪いというのは、国民に何か欠陥があるんだと思うのです。ですからして、そこから直してゆかなければ、結局誰かが官僚になれば、——今官吏を攻撃しているものもすぐ官吏振りを発揮する。已に大政翼賛会というものは、純粹の国民の政治力の結集というようなことから出発しているわけですね。役人に成ると、すぐ国民とは違った官風を吹かせるというようなことが出て来るのです。そういう昔から謂われている官

尊民卑の風というようなものが未だ残っているのですね。そういうようなところから考えてみても、国民全体が良くならなければ、政治というものは良くならない——という風に考えなければならぬと思うのです。

今晩はいろいろとお話をお伺いいたしまして、大へん有難うございました。今晩のいろいろ皆さんから出来ましたお話は、非常に有益なお話でありまして、之を政治家も官僚も、それから大政翼賛会も、議会もみんな参考にしなければならぬと思うんです。

最後に申上げたいことは、実際におきまして、そういう連中が、実は折角例えば「改造」にいい座談会が出てきつと読んでくれないだろうと思うのです。そういうことがなくなるようにしたいと思うのであります。実際われわれが雑誌に書きまして、何か無駄なことをしたように思うのは、

そういう風に実際に衝に当たっている人がちつとも、読んでくれないので、影響が殆どないというようなことだろうと思う。その点につきましては、恐らく皆さんも同感だろうと思います。まあ私がそういう意味におきまして、もう少し雑誌なんかに携っている人が、積極的にそういう連中に読ませるような何か新しい方法を講じてゆく——というようなことを、主催者側であるところの改造社の諸君にお願いしたいと思います。どうも大へん有難うございました。

記者 ではこれで閉会します。どうも有難うございました。

底本…『改造』時局版 1941 年 4 月号

社会科学の新方向

三木清

永田清

岸本誠二郎：1902～1983、岡山県出身、東京帝国大学卒、理論経済学者、京都帝国大学教授、京大経済研究所初代所長。

戸田武雄：1905～1993、経済学者、駒澤大学教授。

研究所の現況

三木 この頃は、東亜研究所というようなもの、また大学附属の研究所のようなものも大分殖えたようだが、仕事の実績はどうですか。……大阪商大の研究所あたりでは辞典を出しているけれど、ほかには何か……

岸本 実際辞典位のものぢやないのですかね。

三木 あそこでは何か特別の問題を研究しているのか、それとも経済一般……

岸本 経済一般だけれども、大阪だけに遠くから見てみると綿業などの研究に特長をもっているんじゃないかと思えますね。そういう様子が一時あった。最近は……

三木 年表を出していますね、世界経済年表。実質的な調査ではやはり満鉄ですか、そういう意味で良い仕事をしているのは。

永田 やはり研究所というと、あの位、金をかけないと不可んでしょうね。

戸田 横浜専門学校、彼処も研究所があるんですよ。

三木 どういう種類の研究所ですか……

戸田 アメリカの研究所で、横浜で貿易方面のことを……

三木 アメリカの研究所は立教大学にも出来たね。

岸本 やつていますね。

三木 よい指導者がいないということが研究所の活動の成績のあがない所以だと考えられないかな。大体政治上でもそうだけれど、指導者に乏しいようですね。実際指導者になる才能や資格をもつていても、そういう人はみんなが落してしまうというようなことがある。これは政治の場合でもそうですが、学問上に於いてもそうぢやないかと思うんです。

岸本 結局学問に伝統がない。

永田 そうですね、結論は。

戸田 研究所については森戸辰男さんが岩波に書いていますね、「教育」に。

三木 大原で「科学研究所論」というものを栗田書店から出していますね。

¹ 大原社会問題研究所、当初大阪で設立され、1937 東京に移り、戦後は法政大学大原社会問題研究所。

イデオロギーの問題

戸田 今みたいに科学ということが非常に謂われる時代に、社会科学のことにしてももう少し考えてもいいと思う。

永田 そういうように思いますね。科学というと、みんな自然科学と思っているんでしょう。

三木 社会科学の方は直接イデオロギーの問題にぶつかって来るから、なかなか難しい。しかしイデオロギーも重要だけれども、イデオロギーに関係なく研究出来る部分がたくさんある。そういう資料的な、実証的な研究というものが大切ですね。

戸田 それによつて政治上の綱領ということが考えられる。これが自然科学に非常に好い影響があると思つている。

三木 思想とか世界観とかの問題も大切だけれど

も、しかしそういうことでなしに、もつと実証的な研究を深くやってゆくことが必要で、そこからかえつて新しいイデオロギーが出て来ることになるだろうと考えるのです。

永田 そういう意味でアメリカの制度学派の研究態度は日本では旨く発展しないものでしょうか。

岸本 社会的に併行して行くことは出来ませんね。日本の今では……

三木 アメリカあたりのあゝいう考え方は結局実証主義とかプラグマティズムとかを基礎としているのでしょうか、そういう考え方はすべて物を機能的に、関係論的に見てゆく、ところが日本では物を実体的に考える傾向が強い。人間を見ても直ぐ善人だとか、悪人だとか、愛国者だとか、危険思想家だとか、そういうように絶対的に決めてしまふんだね。ものの考え方が総てそういうようなんだね。

永田 実証主義は出て来ない、日本ぢや。

戸田 それはどういうところから来るんでしょうね。結局考え方が形而上学的だということでしょうか。

三木 そうでしょうね。自由主義というものが充分発展しないうちに転換期に入ってしまったから、そこから来ているんじゃないかと思うんです。

岸本 いろいろな要素が錯綜している。或る特定の段階というものがない。

永田 二重にも三重にも交錯している。

岸本 自由主義という時代がなく、それかと云つて保護主義という時代もなく、それらが同時に出来た。だからイデオロギーの問題でも、英国流の思想と、ドイツ流の思想が並び行われている。

三木 そういうような意味に於いていろいろの学問の間に交流がない。たとえば哲学はドイツ的な哲学が入つて来て、ほかの学問はそうぢやないとい

う場合には、交流が行われない。

岸本 そうですね。

社会科学と日本の性格

永田 日本ぢや「社会科学」という言葉は何時頃から使われたものでしょうね。

三木 一般化したのはマルクス主義が流行した時代でしょう。しかし「社会科学」という言葉はそれ以前にも使っていたでしょうね……

永田 あった筈ですね。

岸本 「社会科学」という言葉は相当古い頃から這入っていた。例えばヨーロッパ大戦頃進化論がずい分喧しく言われた。あのような場合の「社会科学」というものは、相当広い意味に使われている。

戸田 「交際学」と言っていますね。

三木 福沢諭吉先生などが「交際学」と云っているようだね。これはなかなか良い言葉だな。ソシア

ル・サイエンス【Social science】の意味でしょう。

岸本 「社会」という言葉よりも、ファンクショナル【functional】の性格をもっている。

戸田 ウーゼ【Leopold von Wiese】なんかの言うように、先へ先へという……

岸本 そうですね。いろいろな要素が錯綜して発達して来るから、転換というのが転換らしくない。一向に転換という感じを与えない、文化の蓄積がない。

永田 前のが成熟して、ほかのものに代ってゆくというのではなくて……

三木 それは一種の日本の性格だね。一つの説を樹てて、それに反対があるうが、何処までもそれでやってゆくというようなことは日本の学者には少ないですね。

岸本 経済学では、外形的にはそれと反対なゆき方をしていたのではないかと思うんです。今まで

は大学の講義科目は徒に細分されて、財政学、社会政策、工業政策というように徒に細分されて来た。ところが現在の段階になってくると、非常に大きな転換をしなければならないという必要に迫られて来た。もう一ぺん全面的な反省をして出直す必要がある。だから財政学をやる人も、経済学の一般理論をやり直ししなければならない。理論を研究するものも政策問題を取上げてゆかなければならない。もう一ぺん勉強してやり直さなければならぬという転換が経済学などに最近出て来つゝあると思うな。今までの部分的の問題からして……

戸田 大学の科目は今までのドイツあたりののをそのままもって来ているんじゃないんですか。

岸本 講義のコースはアメリカじゃないですか。

永田 ドイツはもつと一般化されていますね。

戸田 しかし起りは……

永田 そうでしょうね。

岸本 プロフェッサーが何十人も居るということは……

永田 それから今仰つたように計画経済とか、全体主義ということが問題になってくる場合に、従来の経済学とか、社会学とか、そういうものがイデオロギーは別としても必要になってくるんじゃないか。

三木 転換するには一つの総合的な立場からゆかなければならないが、同時に一つの特種問題をどこまでも深く追究することによつて却つて全体的な転換が生ずると思う。総合ということにばかり囚われると、結局折衷に陥つて何も新しいものが出来来ないということになる。

岸本 そういうことは言えますが、実際の問題にぶつかつて、不自然な行き方に反省を与えるというにすぎないが……

三木 そういうことは言えますが、総合的立場というものに囚われて、そのために一つのものを深く考えてみることによってかえって全体的な新しい学説が出て来る可能性があることを見逃してはならないと思うんです。

永田 その点、ヨーロッパの経済学的发展を見ると、初めは論策という形で現れ、それが総合されて経済学の建設に進むということになり、更にこの総合されたものが分科してゆくという形をとっているように思うんです。日本ぢや総合されたものが分科されることなく、論策のままに社会科学というものが現れて来たように思われます。

三木 要するに社会科学というものはジャーナリスティックな問題から出て来るんでしょう。ジャーナリスティックな問題を学問的に深めてゆくことが大切なんだが、これは決して簡単なことではない。純粋な理論にもならないし、それぢや現実の

問題に突込んでいるかというのと、そうでもない。その途中のところを間誤々々しているという場合が多い。つまり学問がほんとの専門にならないで、高等常識というものになる。その常識的というところが或る意味では日本的なんです。理論の構成には仮説の追究が必要なんだが、そういうことが日本の学問には乏しい。それが現実的な、実行的な日本の性格なんだね。

永田 しかし同時にそれは部分的になりますね。

三木 仮説的に追究してゆくことがないから大きな理論は出て来ないが、それだけ実際問題を無理なく処理してゆく点では便利かも知れない。

岸本 或る特定の考察をもつて徹底的に押してゆくというようなことは出来ない。これは日本の社会生活から来るんですね。

戸田 どの職業についても非常に専門家というものは少いね。

三木 ほんとうの専門家というものは少ない。大

学で何の講座をもっているかということが専門であつて……

永田 大熊信行さんが言っているように、日本では学科別専門になつています（笑声）。

三木 学者として専門家になつて安心が出来るとか、純粹に仮説を追究して安心が出来るとか、そういう安心の仕方というのは日本的な安心とは違ふんだね。

戸田 分析をしないで……

三木 キリスト教なんかの考え方は或る意味では抽象的であるが、そこに何か近代科学の精神と共通なものがあるんじゃないかと思う。ところが仏教なんかには、そういう抽象性がない、それだけ具體的で良いところがあるけれども……

戸田 そういう意味でマックス・ウェーバーやジムメルなどの考えというものは或る意味で必要で

しょうね。

永田 必要でしょうね。

岸本 今まで日本に輸入された学説というものは充分消化されないで、すぐに次のものに移つてゆきますね。

戸田 外から日本人自身がほんとうの問題を考えるというのでなしに、外国から攻められて、その問題を取急いで解決するということに理由があるんじゃないか。

三木 そういう意味ではジャーナリスティックな問題、つまり現在我々が直面している現実の問題から出発しなければならぬと思うんです。それを輕蔑する者が實際何をやっているかという、世界各国で流行している学説とかテーマとかを追っている。ジャーナリズムを輕蔑しながら、結局他の種類のジャーナリズムに陥っている。

岸本 それは現実がもう少し逼迫してくると自ら取

上げられざるを得ないということになると思うんだ。まだそれまでに余裕があるんだね。

事変後の方向

三木

その点今度の支那事変以来多少変つて来たと思う。ともかく東亜とか、支那とか日本とかの問題を研究する者が多くなつたがそういう場合に政策的な問題を追究しながら一つの理論をつくつてゆくという、そういう学者的なゆとりというものがない。

岸本

学問的な修養に於いて日本は未熟な点が多いね。

永田

しかし要するに今度の事変になつて、そういう反省は非常に強くなつたでしょう。社会学なら社会学という言葉にしても、あれはマルキシズムが代表していたという考えから、もつと前進して来た。そうした追究の仕方をしている。もつと専

門的にならなければならぬという日本の学問的な考え方、研究の仕方に対する反省が行われていると思うんですが……

三木

一種の政策論になつてしまつて、つまり新体制論になつてしまつて、それを学問的な追究に轉換してゆく情熱というものがまだ足りない。

岸本

実際大きな変化で、学問の方から動いてくるということは一般的には言えないけれども、この事変でどの方面から一番速く動いてくるでしょうね。例えば哲学とか、或は経済学、経済学でも金融の問題、財政の問題、いろいろあると思うんです。

三木

ともかくもつと自主性をもつて研究しなければならぬので、そういう自主性というものが出て来るということは、ほんとうに大人になることだ。その大人になつた学者というものがまだ割に少ないんじゃないか。

岸本 それには相当の年月を要する。

三木 それはそうですね。

岸本 一つの例としてアメリカという国は後進国だ。この前のヨーロッパ大戦の頃までは、ヨーロッパの経済学をそのまゝ容れていた。丁度日本人がヨーロッパに留学して向うの経済学をもつて来るのと全く同じなんです。それがヨーロッパ大戦後からアメリカにはアメリカ独自の経済学というものが発達して来た。その中心がさっきのインスチチューションナリズム【institutionalism 制度主義】なんだね。今日ではもうヨーロッパに留学はしない。アメリカだけで勉強してアメリカらしい経済学を打樹てている。日本もこういうようになってゆくべきだと思うがまだそこまで至っていない。

三木 この事変は日本の学問にとつても大きな転換期になるだろうが、それはやはり学問だけの問題

でなく、政治でも外交でも自主性が確立されて来なければ、学問もそういう風にならないと思う。

永田 それを確立することが、いま最も必要でしよう。

戸田 今仰つたようにアメリカでもやはり、アメリカらしいことをやっておりますし、イギリスでも、ロシアでも、他の国では独自のやり方で歩き出しているのに日本もなんとか、これに対してその問題を解決しなければならぬと思うんです。日本ではその点が非常に遅れていると思うんです。一般の考えとして、もつと積極的にならなければ解決つかないのではないかと思います。

岸本 これは日本の政治、或は経済の指導者が学問に対する注文というか、その態度というものが、その点に対して制約されて来ているのではないかと思う。ほんの当面の問題解決ばかりを要求し、それからまた自分の現在遂行しようとする政策ば

かりを突進めて、それを一般的に考え直してみるという点が不足している。

戸田 自然科学にしても、その科学の奨励ということを言っておりますが、……役に立たぬ浅薄な実用主義ということとはよくないと思いますね。

三木 政治家も、軍人も、実業家も、もつと学問的にならなければならないだね。……明治以来の日本の社会科学で、古典的な価値のあるものはどんなものだね、日本人の書いたもので……

岸本 古典的という言葉がよくないが、啓蒙的というものは比較的多いと思うな。古典的というものは経済史の方面にある位ぢやないか、日本の経済史の方面に。横井時冬さん、内田銀藏さん、瀧本さん【瀧本誠一か】、他の方面では例えば左右田（喜一郎）さん、福田（徳三）さん、そういうような人が経済学関係にもいるんじゃないか。

戸田 明治二、三十年頃の外国貿易の問題を書いた、

古典というのではないが、実際問題についての……それはさつき仰った科学ということではなくして、実際政策というものになるらしいけれど。外国に有名なものは左右田さんの……

永田 哲学はどうですか。

三木 哲学は、例えば現在は西田先生なんか……

岸本 古典が一面古典らしくないということの一つの証拠として、自分達が勉強する場合に日本人の書いた古いものは読む機会が少ない。読みたいという要求が比較的起らない。

三木 はつきりした理論を出している人に乏しい。経済史の方は実証的研究だから、それだけ業績が出ているけれども……

戸田 そういう意味から云えば、法律の場合、法制史にはありますね。

岸本 古典に貧弱ということは、日本の現在の経済学に大先輩が非常に少いということですね。

三木 福田さんの歿後なくなつて了つた。

岸本 特に挙げれば帝大の山崎寛次郎先生三捕新七先生。慶応は此頃若くなつたので、そういう元老は少ないね。経済学を勉強している人は非常に多いのであるが。そういった元老というところに坐る人がないね。

三木 哲学の方面でも科学と密接な関係をもつた哲学が出て来なければならぬ。そういう意味で日本の哲学も、まだ大人になつてないと思う。哲学青年のための哲学に止まっているところが多いね。

永田 ということは？

三木 それは日本の哲学がまだほんとうに成熟していないことなので、哲学が科学によつて一度侵略される必要があるともいえる。歴史的な順序から云えば。

岸本 科学によつて侵略されるためには哲学が社会

に侵略する態勢をとらなければ……

三木 そうも云えるね。

永田 宗教と科学の闘争ということは日本ぢやないぢやないかな。

岸本 宗教も水準が低いんじゃないか。ヨーロッパの中世のキリスト教と違つて……

三木 現在の人達が宗教的な関心をあまりもたないんじゃないか。有るかも知れないが気分というものだな、結局。

永田 三木さんの哲学なんか、大いに読まれているけれど、気分で読まれているのか（笑声）。

学問的指導性

岸本 哲学にそういう傾向があるか、どうか知らないが、経済学の方から考えて、殊に最近のこういう変動のはげしい時に学問的な指導性をもつていないということは行動に対して後手ばかり打つ結

果となつてゐる。一つの政策が出て、それを何とか後から理由づけることに追われているというところが学問を非常に無能にしているのではないかと思う。

三木 どうして指導性が出て来ないかということが大きな問題だね。我々はやはり科学というものを信頼するね。転換期というけれども、長い目から見れば結局科学の示す通りになつてゆくと思う。

今の世界の大きな動乱にしても、予想外のことが次から次へと現れて来るようでも、やはり合理的に理解出来るような事件ぢやないかと思うね。解決しなければならぬ問題が複雑になるに従つて結局科学の重要性がわかつてくる。例えば日本資本主義の分析などもつと掘り下げてゆかねばならぬ問題だと思ふんです。

岸本 今はそれほど必要を感じないのだからけれども。

三木 今後いろいろ困難な問題に打つかれば打つかるほどその分析が必要だということが分つてくると思ふんです。

戸田 今まで過去に起つた事実を、ああいう考えが起つたということは、誰にも帰属しない原因で、その条件というものが何処にも帰属しないということが多かつた。そういうことを考え直さなければならぬと思う。

三木 僕は結局ほんとうにものをつくる立場に立つて考えることが必要だと思うのですが、ものをつくるには法則を知らなければならぬ。もちろん法則だけでは足りないが、法則を無視してもものをつくるわけにはゆかない。例えば支那の経済をどう指導してゆくかという問題でも、今までの研究だけでは不十分なんぢやないかと思う。もつと科学的な調査というものが必要ぢやないかと思う。満州の経営にしても、いろいろ過去の手違いとい

うものは要するに実証的な研究が足りなかったということに依るのぢやないですか。

岸本 それは差当って論証出来ないし、また駁論も出来ないとして……

三木 科学を知って科学を使う立場に立つというところがほんとうだけれども、科学を知っている人は科学に使われるし、科学を使わねばならぬ者は科学を知らず……（笑声）。

永田 そうなんだな。

三木 だから一方合理主義者は偏狭な合理主義になって、科学に対する見通しがつかないし、片方は科学を全然無視してしまうということになる。

岸本 日本人は非科学的なところが多い。これは今までの経験をあげるようだけれども、例えば物価政策というようなものを取上げる場合に、今までにいくつもの経験を持っているのに、これを無視して次の手を打つということが非常に多い。健忘

症だね。

三木 忘れ易いんだな。何度も同じことを繰返して、同じ段階に止まっている。その点哲学でも文学でも同じだ。一度流行したものが再び流行することがあるが、その場合前の時のものが蓄積されていない。

永田 蓄積資本がない。

三木 つまり流行を無視して自分は自分でやってゆくという経済的な条件がないからだな。

岸本 そうですね。学問もその点に於いて学問だけが伸びようとしても無理だね。

戸田 日本の学者として立つてゆくのに特に難しい事情が他国に比較してありますか。

三木 派閥というものの力が強くて、純粹に学究としてやってゆくことが困難だし、それから国語の通用範囲が狭いということもあるから。その点大東亜共栄圏が出来て、日本語が広く通用するよう

になつて本が読まれると、学者の生活も少しは楽になる。そういう意味でも大東亜共栄圏は賛成だな。

科学と政策

岸本 その点で最近外国から本が這入らないけれどもこれは目先はもとより困るが、長い目で見てどういふ影響をもっているか。

三木 この際日本の学者がほんとうに本氣になつてやれば、それは却つて良い影響をもつかも知れないが、それだけ好い加減なことをやつてすませるという危険もある。つまり小規模になつてしまう。日本的なものをつくるということは非常に良いけれども、世界的の水準を忘れてはならない。西洋の科学について、その知識だけでなく、科学的精神というものをもつと学ばなければならない。新刊書を追っかけなくても、我々のもっている本を

読めば充分だ。みんな読みきれない位に本は買つてもっているんだから（笑声）。現在向うにしてもそう新しい本が出てゐるわけぢやないから、それほど輸入しなくてもいいけれども、近代科学の精神というものはもつと学ぶ必要があると思うね。

岸本 極端に云うと、或る程度輸入しない方がいいということも言えますね。反省という点では。

三木 本を自由に読ませる組織が必要だね。図書館の公開とか各人の持つてゐる本を集めて新たに図書館をつくるとか……

岸本 それは非常に必要だ。

戸田 たゞ外から学ぶという気持の問題を忘れないように……

永田 日本人はもつと日本語の本を評価していいと思う。

三木 それもあるね。日本人の書物を読み、そして

公平に批評するということがなければならぬ。しかし日本ではいろいろ差障りがあつて公平に批評することは殆ど出来ないという状態だ。それほど日本では派閥というものが強い。

岸本 大きな意味で学問が転換しようとしているんだから、もっと積極的に科学政策というか、科学に関する政治を日本の指導者が取上げる必要がある。

永田 先だつて或る人が、今まで経済学、政治学というものが多すぎた、そういうことを言つていた。

三木 学生の数から云えば文科系統のものがやはり多いね。これはいけないと思う。日本人にはまだ一種の官僚気分というものが頭にあるんだね。社会の改造の実質的な基礎になるような学問に対する興味が少ないんじゃないかと思う。

三木 社会科学というものに対する関心がマルキシズム流行の時代よりは一般的には減じてはしない

ですか。社会のいろいろの問題に対する科学的な追究がもっと一般に強くならなければならないと思う。

永田 そういう追究が強くて、マルキシズム的なものから一步出なければならぬ。

戸田 それは事変で大分出て来たと思う。

岸本 現在の日本の社会の行き方としては社会科学という形で問題を取上げることが非常に急で、もっと直接的な国家的な意味とか、国家的な形で問題を取上げようとしているのではないかと思うな。

三木 それは戸田君の言つたように法則的な科学の追究がなければ、国策というものもほんとは樹たないわけだ。科学と政策との関係をはつきりする必要がありますね。

永田 戸田さん、どうですか、大いに意見がありそうですね（笑声）。

戸田 社会科学というものは所謂現実というものに役に立たなければならない。それを直ぐ習慣的に解釈してしまう。あれは非常に欠点だと思いますね。

三木 政策ということは技術だと思うんです。自然科学に於ける技術は、自然科学に於ける政策だとも言える。つまり一般的法則を認識して、具体的条件の下に国家の意志を具体化してゆくという技術が政策だと思うんです。政策というものを自然科学に於ける技術と同じように考えてゆけば、もつと科学性というものの要求が出て来ると思う。

岸本 指導精神というものは、そういった方面から強く出て来ると思う。

戸田 それと日本の社会というものを考えるならば、政治というものが直接直ぐに人間に対立して、社会性が対立していない。従つて防災科学という

ようなものでも、道徳的一点張りで、自然のものとして……

永田 自然科学はそれだけ発達したので……

戸田 それで、自然科学のもっているものが、もつと政治と結び付いて来なければならない……

三木 諸技術の段階というものを考えると結局社会科学が自然科学を使うという立場にあると言える。もちろん自然科学とその技術の独自性を認めなければならぬけれども、そこに諸技術の間の秩序というものがあるので、そういう意味で自然科学を使うのはやはり社会科学的技術、つまり広い意味での政治だと思うんです。

戸田 日本の鉱山の問題でも、解決の仕方が社会というものを考えていないと思うんです。事変になつて、人間の手が足りなくなつて、自然の災害というものが多くなるのではないかと思うんです。そういう意味では、天候、水とか、饑饉とか、

田の収穫の問題とか、関西方面の水害の問題とか、そういう責任を自然にもつてゆくことはいけな
と思いますね。

三木 自然科学的技術から発生する問題は社会科学
的な解決に俟たなければならぬ。勿論自然科学
によつてやつて行くべき部分もあるけれども、そ
れだけでは充分に解決出来ないと思うんです。

岸本 日本には自然科学的な技術も余り発達してい
なかつたんじゃないか。

三木 こちらで結論としようか（笑声）。結論は要
するに学問を大いに尊重し、発達させるといふこ
と、これは我々人民が考えるばかりでなく、政府
当局者がしつかり考える必要があるということに
なる。

記者 どうもありがとうございました。

底本：『知性』第4巻7号 1941.7

実験的精神

三木清

小林秀雄

小林 三木さんは昔、パスカルの事を書いたね。

三木 うん、今もパスカルは離れられないね。

小林 僕は昔あれを読んで、こんど読み返そうと思つたが、本がなくて読まなかつたけれど……モンテーニュは段々つまらなくなるね。パスカルは段々面白くなるね。

三木 モンテーニュは昔は愛読したけれど、このごろ読んでみると案外詰らないね。

小林 詰まらないね。

三木 あれは西洋のあゝいう教養の系統の中で読めば面白いので、われわれがぢかに読むとそれほど

でない。

小林 やはりずいぶん洒落れたところがあるんだね。僕等にはよく解らないが……。

三木 つまりモンテーニュは「教養」の上で書いているのだ。ところがその「教養」というものが問題になる時があるね。

小林 パスカルというのは面白いや。ものを考える原始人みたいなところがある。何かに率直に驚いて、すぐそこから真つすぐに考えはじめるというようなところがあるよ。いろいろなことを気にしないで……。だけど、三木さんの文章はちつとも変らないね。

三木 そうかね。

小林 僕が、あなたの書いたものを最近読んだのは、「中央公論」の『学問論』だけれども、変わらないね。

三木 君、このごろは『ドストエフスキー』はやらない？

小林 やる、この夏。

三木 あれは面白かったね。『ドストエフスキーの生活』というのは。君の書いたものゝ中で傑作だと思うね。

小林 しかし、やつぱりむつかしいな。僕は、続きも殆どもう書いて了つてあるのですよ。だが段々考えが變つて来るでしょう。僕みたいなのは殊にそうだけれど、そうすると、段々昔書いたものが駄目になつて来たりなんかして巧く書けないのだよ。

三木 今に、またドストエフスキーなんかが流行る時代が来るかも知れないね。

小林 うん。どうもやつぱり、あゝという人の困つた問題というものは永遠だからね。

三木 人生の謎というものはいつも同じだね。

小林 やはり同じ処に立ち復つて来るのだな。

三木 人間というものは進歩しないね。科学が発達

すれば戦争が無くなるとよく人が言つていたが、そんなことは嘘だということは、今度の戦争で証明されたわけだ。何しろそういうものだな。進歩の思想は人間を浅薄にする危険があるね。

小林 だから僕なんか、パスカルをまた読み直してみても新鮮で面白いというのはそうなんだよ。つまり人間が正直で率直でいればいつも起す疑問というものだけを考へてをる。つねにそこから考へているのだよ。その処が実に新鮮だね。まあえらい思想家というのは、だいたいそういうものだからな。

三木 うん。教養とか文化とかいつているものが無意味になつて来るぎりぎりのところがあると思ふ。

小林 つまりあなたの言う形而上学でしょう。

三木 ところが現在そういう問題をつかまえている文学者は少いのぢやないか、そうでもないか？

小林 少いね。やはりどうも惰性で書くのだ。考えてみれば何も小説を書く必要も必然もないのだよ。どいつもこいつも小説を書くだらう。おかしいことだ。人間と生れて文学をやるなんということは、ずいぶん不思議なことなんで、それをなんの不思議でなく書いているということは実際不思議だよ。会社員でもなんでも成ればいいぢやないか。

三木 というのは、今日教養といっているもので、本を沢山読んでいるとか、ものを沢山知っているというところが特別のことじゃなくて、なんでもない当りまえのことになってこなければならん。そういうものがほんとの知識人でないということがわかってこなければならんと思う。ところが、今ではまだそれが何か特別のことのように考えられているんだね。

小林 そうだな。だけど、青年というものは皆そう

いうものは有つていっているという気がする。真の教養なり思想なりの芽生えというようなものを持つてゐる。持つてゐるが、それが育たない。芽が伸びないところがある。大人になるといろいろなこと で摘んでしまふね。小説家になつて摘んでしまふ。詩論家になつて摘んで了う。哲学者になつて摘んでしまふ。それからまた俗人になつて摘んでしまふ。そういうところがあるよ。

三木 結局、一番欠乏しているのは実験的精神だと思ふ。

小林 実験的？

三木 うん。というのは、つまり本を読むことが学問することであるといった考え方を破つたものが近代科学なんだ。

小林 ああそう。

三木 近代の科学者は教養人というものと違う。読書が学問であるという伝統を変革したところに近

代科学の豪さがある。その精神は教養というものとは違うもつと原始的なものなんだな。そういう精神を、科学ばかりでなしに、ほかのものにおいてももつと掴まなければならないのぢやないかと思う。

小林 原始的という言葉は面白い。

三木 それが君のさつき言つた原始人的な驚きとか、その驚きからぢかにものを考えてゆくことなので、そういう精神が今日の文化人には失われているね。

小林 僕もそう思うけれどね、だけど、そういうふうな病弊はどういうところから来たのかね。

三木 それはいろいろあるだろうが……。

小林 そういう病弊を日本独特なものと考えるかね。

三木 日本独特のものではない。近代の文化人に共通のものだろうね。

小林 近代人の全体にある弱さかね。

三木 近代人の弱さというのは、新聞を読むね。新聞に出ていることで自分に関することはたいいてい嘘が書いてある。それなのに、ひとの事が出ていると誰でもそれを信ずる。そういうところに近代人の欠陥がある。ものにぶつかつて究めるといふことが少ないわけなんだね。

小林 どういうところからそういう論を立てるのかね。

三木 それは今言つたように世界共通のものだが、特に日本人の欠陥でもあると思う。というのは、本を読むことが学問だと言うような觀念がなかめけきらないのだね。昔から支那のことをやるにしても支那に行かなで支那の本を読んでやる。全然西洋を觀たことのない人間が西洋の本を読むだけで西洋について論じる。アメリカへ行つたことがない人間がアメリカ文学の専門家で通る。そ

ういうところがあるね。知識というのはそういうものだという考えがあるから、逆に言えば日本の現実について研究しなくても済む。詰まり知識は主として読書から得られるので、事実につかつてそこから出てくるものでないのだね。学者が日本の研究を怠つていたということも、一つにはそういうことに原因があると思う。

小林 感覚の鈍りだ。はつきりものを見ないのが根本だ。

三木 その見ているところから、ものを考えるということが実験的精神というものぢやないかね。

小林 そうなんだよ。

三木 とこがその実験的精神というようなことでも本でやるのだな。西洋でこういうことを言っているが、これが実験的精神だというふうに、ひとごとになつてしまつて、自分のことにならない。そういうことが今日のインテリゲンチヤの欠陥だ

と思う。

小林 僕も前に福沢諭吉の事を書いたことがあるけれども、福沢諭吉は『文明論之概略』の序文でこういう事を言っている。現代の日本文明というのは、一人にして両身あるがごとき文明だ、つまり過去の文明と新しい文明を一つの身にもつておる、一生にして一生を終るが如き事をやつておる、そういう経験は西洋人にはわからん、現代の日本人だけが持ったということは、われわれのチャンスであるというのだ。そういうチャンスは利用しなくちゃいかん。だから俺はそれを利用し、文明論を書く、と言うのだ。西洋人が日本を見る時にはどうしても空想的に見るけれども、日本人は一身で西洋文明と自分の過去の文明と二つの実験している。だから、議論は、西洋人より確実たらざるを得ない。そういうチャンスを利用して俺は『文明論』というものを論じる。そういう立場から論

じているだろう。あの人は……。そういうのが実証精神だろう。

三木 そうだ。

小林 実証精神というのは、そういうものだと思うのだがね。何もある対象に向つて実証的方法を使うということが実証精神でないよ。自分が現に生きている立場、自分の特殊の立場が学問をやる時に先ず見えていなくちゃならぬ。俺は現にこういう特殊な立場に立つているんだということが学問の切掛けにならなければいけないのぢやないか。そういうふうな処が今の学者にないことが駄目なのだ。日本の今の現状というようなものがある方法で照明する。そうでないのだ。西洋人に出来ないある経験を現に僕等はしているわけだろう。そういう西洋人ができない経験、僕等でなければやれない経験をしているという、そういう実際の生活の切掛けから学問が起こらなければいけないの

だよ。そういうものが土台となつて学問が起こらなければいけない。そういうものを僕は実証的方法というのだよ。

三木 その通りだ。精神とか態度とかの問題だね。

誰でも自分だけがぶつかつてゐる特殊な問題がある。そういうものを究めてゆくことが学問だ。ところが学問というものは何かきまつたものがあるように考えられてゐる。それは大衆文学というのはそういうものでないかね。つまり何かある一つの気持ちなり、考え方なりにきまつたものがあつて、それを書いてゐるのだね。

小林 うん、そう。

三木 ところが、純文学にはそういうきまつたものがない。だから自分の仮説を実証してゆくということになる。

小林 結局言つてみると、学問が社会に採まれていないところがあるのかな。

三木 そう。独善は官僚ばかりでない。学者独善であり、文学者独善なんだよ。社会に採まれるというのは実証的なことだ。

小林 ああいう福沢諭吉のやった様な真摯な、物に即した学問の方法が何処に行つて了つたかという事が不思議でならない。あなたは、ああいう実学の方法がカント流のヒューマニズムに蔽われてしまつたというようなことを書いておつたらう。それはどういふことですか、もう少し説明してください。

三木 大正時代に出てきた教養という思想だね。それが実証的な精神を失わせて、観念的に教養というものを作り上げたね、そうしても、のに対して或るポーズをすることが教養だということになつたんじゃないかね。

小林 そういう事になると、やつぱりどうもたゞ

1 「學問論」(三木全集第十四巻収録)

考えの問題をいうよりも人間の問題だね。どうもやつぱり福沢諭吉という人間が豪かつたというふうに考える。教養というようなものを、そういうふうに解釈してゆくというのも、要は人間が貧しいからそう解釈してゆくわけでしょうね。何もカントがそういう男であつたわけでないからね。それにもう堪えられないのだね。

三木 厳しさに堪えられないのだね。

記者 (三木氏に) 河出書房の『人間主義』【三木全集第五巻収録】という本のおしまいの方に、工作的人間ということを書いてありますね。あれはアメリカの行動主義ビヘイアリスム【Behaviorism】といったようなものとは違うわけでしょう。

三木 もつと広いわけです。人間の本質はものを造るにあるという考えなので、ものを造るということは、産業だけではない。すべての文化がそうだし、また人間そのものも造られるものだね。僕

は人間というものは小説的動物だと書いたことがあるが、すべての人間は人生に関して小説家だね。そういう意味まで含めて、工作的人間というものを考えなければならぬと思う。

小林 そういうふうなことは三木さんのこのごろの思想の中心だね。あなたの言う技術とか、構想力とか、このごろの三木さんのそういうものはよくわかるよ。非常によくわかるんだ。あなたに貰った本もみな読んだし、——そこで僕は非常に大きな疑問があるのだよ。それはかういうところで喋って喋れるかどうか知らないが、あなたは、あすこまで考えて来たわけでしょう。そうしてあんな文章を書いてはいけけないのだよ。そういうことだ、非常に簡単にいうと。非常に乱暴な言い方をしているらしいが、わかつてくれるでしょう。

三木 うん。

小林 論証するには論理でよいが、実証するには文章が要る。哲学というものを創るという技術は、建築家が建築するように言葉というものを盡くす必要がある。それを言うのですよ。考えるとは、或は見るとは創る事だという命題は、たゞ、ディアレクティック【Dialektik; dialectic 弁証法的】ではとけないのだと思う。

三木 君の言うことはよくわかるよ。自分でもそのことに気付いている。

小林 ヘーゲルは僕はドイツ語で読めないので仏訳で読むのだけれど、ヘーゲルという人は、あれはそういうものだね。凡そ思索というものが行くところまで行つてしまった形式というものを論証してみせた、そういう風に彼を読むのは、彼をまるでさか様に読んでいる様なものだと思うね。やつぱり、彼は眼の前の物をはつきり見て、凡そ見のこしという事をしない自分の眼力と凡そ自由自在

な考える力とを信じてやって行つたのだね。その揚句ああいうディアレクティックの太系が出来上がって了つた。逆に這入つて行くから彼のディアレクティックの網の中にまるめられて了う。

三木 それをどう切り開いてゆくかが今の僕の大きな問題だ。

小林 実践的でなければいかんということが、論理的に読者にわかつたつて仕方がないからね。僕はあなたの『人生論ノート』が面白いということをして以前から言っているだろう。あれは面白い。

三木 うん。

小林 話は違ふがどの位人間というものは、いろいろ夢を見たがるかということが、僕は近頃何となく判つて来た。齡をとると——齡をとるというわけでないけれど、死期が近付くと……。やはり死期というのは確かに近付いておるのだね。妙な事だ。そんなことは別に考えないけれど、やつぱり

死期というものはちゃんと近付いておるのだね。

三木 テスタメント【Testament】を書く、遺言状だね、遺言状を書くという気持は、今の作家にもないね。

小林 ない。

三木 これを一つ書いて了えば死んでもいいという。

小林 実際ないのだよ。

三木 僕なんかもこの頃よくそういうことを考えるね。これ一つだけ書いておけば死んでもいいという気持で書かなければ駄目だね。実際いつ死ぬかわからんのだからね。というのは、総てのものが現象的になつて、^{メタフィジカル}形而上学的なものが失われてしまったのだ。永遠というものを考えなくなつてゐる。

小林 そうだ。僕なんかそう思っているのだけれど。永遠の観念というものがなければ芸術もなけ

れば、道徳もないと思つてゐるのだ。そういうような考えは青年時代に懐いたけれども、僕はいろいろなことで自信がつかなかった。段々自信がついて来た。そういうものが一番本当だということが……。一番そういうものが確かだ。本当に空想ぢやなく確かだ。そういうことに段々自信がついて来た。

三木 進歩の思想に立つと、どんなことでも少しづつやればいいということになる。十あるもののうち今日は一つ書いておいて、明日また一つ書けばいいというような考え方が毒していると思う。これで畢りということになれば、十もつておれば十出さなくちやならぬ。これは生活態度においてもそうだと思う。

小林 そうだよ。例えば弾圧ということを言う。どうしてそんなことを考へて、自分が十五年先に死ぬということを考えないのだ。十五年先に死ぬと

いうことは大弾圧でないか。そんな大弾圧が必ず十五年先に来るのを知らないで、政府が何を弾圧したということの刺戟で何かの思想が起つてゐるのだよ。まあ言つてみれば、そういう風な思想の浅薄な起り方、それがいやだね。現代の思想は、いったん石器時代に戻つて、又そこから出直す必要があると言ひたいくらいだよ。

三木 ある人がいて、弾圧されるかもしれないと考えるだろう。その場合に、これ一つ書いておけば弾圧されてもいいと思つて書くか、或はまだま弾圧されないかも知れないというような氣持が底にあつて書くか、その点だね。弾圧されるということとを本当に身近に感じておれば、これ一つしか書けないと命懸けでものを書く。そういう氣持になつて来れば日本の文化も立派になるというのだろう。

小林 いや、そういう事よりもね、例えば、大政翼

賛会はどうであろうかと、出版文化協会がどう

かと、そういうところが凡そ現代思想の切掛けになってゐる。そういう切っかけで起つて来る思想が一番切実で現実的な思想だという考え、これがいけない。そんな事では文化改新も思想の革新も成らないと思う。これから先の日本の文化をどうしたらいいか、これは軍隊を強くして経済組織を強固にする。それだけだよ。皮肉ではない、大真面目だ。日本に差当たり大切な事は、それだけだからだ。凡そ思想上の問題で差当たり大切なものは何かなどと考えるのは止めたがよい。話がお目出度くなつて、議論がこんがらかる以外に何の益も断じてない。思想を創る人は翼賛会にケシかけられて創るわけではない。誰がなんといったつて創るわけだ。天才が創るのですよ。ちゃんと創る。

三木 結局便宜主義ではほんとの文化は創れない。

小林 あのディアレクティックというものは、やは

り非常に害毒を流しているな、哲学界に……。

三木 あれは探求心をなくさせてしまう危険がある。なんでもあれで一応片付いてしまふから、追求してゆく精神を失わせる。だから本当のところはディアレクティックかもしれないけれども、そこまでゆく苦勞というものがなければ意味をなさないものだと思う。

小林 例えば、道元をこのごろ読んでいるが面白いのだよ。そうすると、道元の思想を哲学者がね、ディアレクティックに翻訳するのだ、全く偽物なのだ。嫌になつちゃうような偽物だよ。ぽかんと金槌を持つていつて壊したいような偽物だよ、手応えがない。手応えというものは道元にある。道元は独立している。暮みたいに。偽物は違うんだよ、その感じがね。ディアレクティックというのは人に解らせるものだ。道元の思想はこういうものだということを解らせるものだ。処がそうで

ないのだ、思想というものは。やはり解らせる事の出来ない独立した形ある美なんだね。思想というものも実地に経験しなければいけないのだ。此処に墓がいるということを経験しなければいかん。

三木 哲学というものがただの職業になつている。

小林 哲学者というのは文章軽蔑派なのだ。ヘーゲルなんかは……

三木 スタイルで考えている。スタイルを抜きにして考えられない、ヘーゲルの哲学というものは……。

小林 なんて巧いんだろうという様な文章があるね。

三木さんなんていろいろな形式で書いてくれるといいと思うね。

三木 うん。これから大いにやりたい。(終わり)

現代の思想に就いて

大串兎代夫

大熊信行：1893～1977、山形県生れ、東京高等商業学校（現一橋大学の前身）卒、小樽高等商業学校、校のち官費留学、経済学者、評論家、歌人。

小林秀雄

三木清

現代を考える

記者 我々の直面する現在の日本というものは恐らく歴史上嘗てないほどの深刻なる危機に臨んでいます。そこに生きる我々は当然に我々の考え方をはつきり反省して、或はすっかり転換しなければならぬかと思えます。先ず現代とは如何なる時代かの究明をはつきりさせねばならぬと思えます。

小林さん如何でしょうか。

小林 今は非常時だと言うが、非常時という言葉には、非常に政治的な意味が強い。そしてそれはそれで確かに間違いない事だろうが、もつと別の意味で現代の性格というものを考えると、心が物にはるかに迫いこされている時代ではないのかね。物が烈しく動く、その後を心が息を切らして追いかける、そういう時代である事を、一方十分知って置く必要がある様に思う。やっぱり僕は、人間の心だとか精神だとかね、そういうものの秩序と、それから社会の物的な秩序とは元来、非常に違うものだと思うんですよ。前者が後者をリードするのが正当なものだと思うのです。ところで、現代人の考えかたには、物の秩序で心の秩序を律するという考え方が、非常に深く滲みこんでいるでしょう。心の秩序というものを、みんないろいろな外界の変化を映したものだというふうに考えるで

しょう。思想の改新时期だという様な事を頻りに言うが、そういう考え方は少しも改らないね。物の動きがいよいよはげしくなれば、いよいよ物に順じて心の方を律するという勢も強くなつて来ている、そんな気がするのだね。そういう根本の処の反省がなくては、思想の政新など口ばかりの事だ、そういう気がこの頃非常に強いんですね。

たとえば、自由主義とか、実証主義とか何主義とか言いますね、個人主義はいかんとか全体主義がいゝとか言うね。そういう事も何だね、心の秩序、思想の秩序というものを、やはり物的に考えて、すぐそういうことを言うのだね。つまり比処に煙草があり、マッチがあるように、精神の世界を実証主義とか、自由主義とか、そういうような形のあるものをすぐ考える、物の形と照して、相応したものであるように考える。思想の問題をなんでも、そんなふうに扱つて行く。そんな風にし

か扱わないのだな。何しろ物の方が非常な速力で変化して行くから、考え方の方でも歩調を合せるのにスピード・アップをやつてすつたもんだやつているのだ。

大熊 小林さんのお話はふだん、殊に最近のものを読んでいないと、ちよつと解りにくいですね。三木さん如何でしょう。

三木 僕は小林君の書くものをよく読んでいるわけでもないが、問題はわかるように思います。

心の秩序と物の秩序

小林君の言っていることは確かに近代の特色だと言える。その場合、根本の問題としてこういうことがあるのでないかな、つまり、昔と今と、いろいろ考え方が違つて来ている。昔の人は心の秩序というものを現象と区別して考えて、生活してきた。ところが現代では、そういう心の秩序と、

それに対する物の秩序というもののとの区別がなくなつた。これが現代の特徴であるのだが、そこで問題は、心の秩序と物の秩序とを二つにみるという、そういう考え方がどこから生じたかということになる。

そういう考え方はまづ第一に一種の現象主義だね、現象に引廻されて、物の形而上学的な意味というものについて考えない、心の秩序というのは形而上学的なもので、そういうものの觀念が失われると、現象主義になる。我々はそれに賛成できないけれども、そういう現象主義が今日の特徴であると思うね。現象の後ばかり追廻して、永遠の問題については考えないのだ。

しかし、現代において心の秩序と物の秩序とを一つに見るような考え方がどういうところから出て来たかと考えてみると、これは僕自身の解釈だけれども、近代において全面的に現れてきた技術

というものの考えから来ているのではないかと思う。技術というものは、物と觀念とを一つにしてゆく、客観的な物の秩序と人間の目的とを綜合し統一する。ところが昔の、心の秩序と物の秩序とを別のものに考えるというのはコンテンプレーション【contemplation】の立場、観想的立場に立っている、ものを見る立場であつて、ものを作る立場ではない。現代においては、人間というものの本質も、ものを作ることにあるというような考え方になつている。つまり「理性的人間」の人間学に代つて「工作的人間」の人間学が現れた。そこから物の秩序と心の秩序とを一つに見るような考え方が出てくる。これは大切な考え方であるけれども、そのために秩序という思想が全く失われて現象主義になつてしまふ惧れがあるね。技術というものでも、技術は客観的なものと主観的なものの、必然と自由との統一であるが、その技

術を更に手段とするというところに、精神の自律性がある。どこまでも技術の中に入りながら、なほこれを手段と化して独立のあるところにある精神の自律性がある。そういう精神の自律性が失われて、手段であるものが目的になり、精神を支配しているというのが現代の特徴だね。

大熊 心の秩序ということは、ほかの言葉でいうと、どういうことになりますか。

小林 僕の言うのは、理性だとか意識だとかいうようなものの秩序です。

思想以前の問題

大熊 なにか、最初にいわれたのは一応社会生活から自分を切り離して、自分の『心の世界』というようなものを考えた場合のこととは違うのですか。

小林 経済の動きにでも、政治の動きにでも、なん

でも、僕らにはどうにもならない物の動きというものがあるでしょう。そういう光景をいやでも強く見せつけられているのが現代だ。そしてそういうどうにもならない物の動きに追いつこう追いつこうとばかり、精神を動かしている。そういう現代の特徴を言つたのです。

大熊 どうにもならない必然というのは、具体的にいったら、国家というものの動きでしょうね。国家もまた世界全体の中で、世界全体をどうにもならないものと思っているかも知れんけれども、直接に個人についていえば、国家との関係において、そういうことが言えるのぢやないのですか。

小林 日本の国家を信ずる心というものは、心の秩序です。意思ですよ。信仰でしょう、そういうものは。

大熊 初め小林さんの仰っているのを聞いて、そういう話は心の秩序というものの中に、国家が入っ

た意味だったのかどうかしらと思つたのですよ。今伺うと、国というものが立派に入つて心の秩序なんですね。すると、さきに伺つたことの理解は誤つておつたのだな。もし、国というものを含めた意味の心の秩序であるとなると、また少し話が違つてくるんじゃないですか。三木さん、それではないのですか、あなたの先の解釈は。

三木 問題がすこし外れてしまつたね。

大熊 僕は、まだ国を含まないような、そのさきの、もつと本元的な、東洋的な心の秩序、とでもいうようなものを考えて来ておつたんだ。心が現実の動きの中に織込まれて、心だけあとに残るといふようなことのゆるされないような、それが現代の特色だといつておられるかと思つたんだ。一歩退いて考えてみると、しかし自分というものはまだ残っているのだな。自分という言葉でいつていゝかどうか分らんけれども。そういつたことが

問題にされたのかと思つたのです。例えば、さつき始まる前に、小林さんが山に行つてゐる時は一月くらい新聞を読まないという話が出ましたが、そういう境涯を考えた時には、やはりその中で国を考え、世界というものを考えていらつしやるとしても、確かに自然というもののふところに入つて、あるいは大自然に直面しておられるわけだから、そういう場合には心の底を動いてゐるものは、いつも社会生活の中で動いてゐるものとはかなり違つたものぢやないかと思われる、そんなことと関係があるのかと思つたんですよ。

永遠について

大串 僕は違つた意味で聞いたのだね。小林さんの仰つたことはよくは解らなかつたけれども、受けた感じからいえば、新聞なんか止めようかと思うという、それは一口にいえば、永遠というような

ね、そういう感じを受けたのです。

小林 それはそうです。

大串 つまり、私なんかのほうのことで言えば、さつき物の秩序と言われたけれども、物といったって経済だけではなくて、現代の国家生活、社会生活というものにちゃんとしまりきった一つの筋道があり、秩序がある。そうしてそれは、或る意味でオートマテックに動いている。魂の問題というものが直接そこに入っていない。それに対して小林さんが——僕を感じですよ——そういったものの波に動く時代が過ぎつゝあるのぢやないか、そういう意味ぢやないですか。山に行つて、新聞をやめて考えられる、そこに本然の秩序があり、魂というものがある、そういう工合に解釈したのです。現代ということの規定がはつきりしなかったけれども、どこから変りつゝあるのか、それとも現代というものは、小林さんの仰つたように、心の秩

序と物の秩序と一体たる所に特色があると仰るのか。僕なんかもやはり、これは感じだけの問題だけれども、一つの永遠というか、魂というか、今まであまりまともに出て来なかつた問題が今出て来た、また来なくちゃならん時期に来つゝある。そういう感じがするのですね。

大熊 だいたい社会生活に時代的な圧力がうんと加わつて来た時には、最後には、自然とか何とかいった所に行つてしまふんぢやないですか。或る一つの、こういう時代が長く続けばですね。事変後、妙に俳句なんかが流行つたということでも、その後どうなつてゐるか知らんけれども、長く続くと、一つの反動——反動という言葉も当らないと思うけれども、全然社会的でないものの、一つの抜け道みたいなものを求めるような傾向を一方に生むんぢやないか、そういう心理の問題を考えたことがあつたりしたんですがね。しかしそれは小林さ

んの今いつておられる心の秩序ということと繋りがあるのかどうか。

小林 つまり心の秩序の中に入ってしまった、孤独になつて社会性を失うという意味ぢやないですよ。

大串 なにも強制力を加えないで存在ある心の秩序ぢやないですか。

小林 僕は、たゞ現代人の心理的傾向を言つたのです。つまり、みんな新聞に夢中になつてゐる時代だ、簡単に言えばね。烈しい行動のうちにある人達は別だが。

大熊 株式が新聞を読まずにいられない、ラヂオを聴かずにいられないと同じように、もつと深い生活的な意味で、みんなが新聞に夢中になつてゐる時代ですね。これは我々が生きてゐる生活情況が刻々どんな変化をとげつゝあるかを絶えず見まもらなくてはならないという時代ですから、間断なき情況判断のために、絶対に必要なですよ。たゞ

物好きということでなしにね。

三木 ハイデッカーが講義の中でよく言つたことだけれども「人間というのに新聞を読む動物」だ。(笑声)まア、そういうのが現代なんだな。つまり君の言う「秩序」という考えが、もう解らないのぢやないかね。そういう觀念がもう既にないんだね。

小林 つまり、秩序というものを他人任せにしてゐるんでしょう。

現代人の心的傾向

三木 その秩序という考えが失われたということでは、近代の主観主義の行きついた所だと思ふのです。心の秩序というものは決して主観的なものではない、全く客観的なものだ。ところが現在では、心というものは全く主観的なものになつて、物だけが客観的な秩序になつてゐるわけだ。

小林 お説の通りだ。従つてこん状態が来ている。

現代人は一般にものを考える時に、考える対象なり問題なりが非常に曖昧になっているんじゃないかね。たとえば、昔の人は非常に丁寧に物を見て、自分の非常によく知っているものだけ、たとえば、百姓がお米のことについて考える、そういう考え方をしていたが、そういう考え方が現代人にはもうなくなつたのだな。たとえば、現代の思想家というものは、日本の運命も考えれば、ドイツの運命も考え、世界すべての運命を考えなければならぬ。考えようとしている品物があんまり数が多くてね。その関係が複雑になつたと言ふけれども、複雑になるといふことは何んでもないことで、元來はつきりしている品物のそれぞれの関係が複雑になつたのなら、思想というものは、もつと活潑に働くですけれども、現代ではその一つ々の品物が既に非常に曖昧になつてゐるのぢやないですかね。蘭印問題とか、仏印問題とか、經濟問題、統

制の問題、いろいろの問題がいくらでも出て来る。その一つくを、論ずるものがはつきり知らぬ。百姓がお米のことを知つてゐるような具合には全く知らぬ。そういう知らないものを、かき集めて、いろいろのことを考えなければならぬ、論じなければならぬというのだから、そこに本当に人を動かす思想というものが生れにくいところがあるのぢやないですか。

三木 それにはこういうこともないかね、現代人はものをすべてファンクショナルに、つまり關係論的に見てゆくのだね。

小林 現代人が？

三木 現代人の考え方なんだ。そしてまた實際、今日の世界は、これまでの世界と違つて、支那事變なら支那事變というものを考えても、世界に繋がつてゐるし、日本の經濟というものを考えても、アメリカと蘭印の問題と繋がつてゐる。昔の

人間の住んでいた世界は、そういう世界でなかった。彼等は自分の目で見ることで限定された世界に住んでいた。現在では、自分の見ていない無数のものに、自分の生活が繋がっている。だから自分というものがいろいろな関係の糸に曳張られて、中心がなくなってしまうんだね。自分というものも関係に分解されてしまう。函数的には限定されているが、実体的なものがない。これが現代の生活の特徴なんだね。

小林 そうなんだ。

三木 いま一番大切なことは、そういうところから更に一つの新しい実体的な考え方が出てくることだと思う。それが君のいう心の秩序の問題だと思う。

知られざる対象

大熊 そこで一寸、三木さんの説明で非常にはつき

りしたと思うけれども、小林さんのたとえば蘭印の事情を知らずに蘭印の問題を書かなければならなくなつたということね、これは思想の問題についての比喩ならば格別、それ自体を問題として論ずるのは具合が悪いのじやないか。政治の現実というものは思想までは行かないんだ。赤裸の政治というものは必要であつて思想ではないと思うんだ。

小林 それはそうです。

大熊 だから、蘭印のことでも、今は国民に十分分らなくても、これから段々解らなければならんという状態に置かれている。百姓が米のことを知っているという場合でも、三木さんみたいに解釈すると、また面白いことになるけれども、いま現代はどういう時代かということを論ずる場合には、我々の知らない事実が一つ自分に繋がったものになつてゐるという事例を挙げてみてもはじまらない。

いちやないかと考えるのだね。

小林 しかし、そういうことが気になる人がなければいかんでしよう、というんです。つまり、現代に常に抗して、負けても、遅れてもいい、百姓が米について考える様な考え方が本来正しいのであると、信ずる人がなければならぬと思うのです。そういう者を、やはり僕は、思想家、哲学者文学者というものに望みますよ。だから、あなたの言うように、それだけでは困るさ、そんな奴ばかりいたら……。 (笑声) 日本は滅びますよ。 (笑声)

大熊 僕はね、小林さんに結びつけていえば、あなたの特長、美点というものは、つまり文壇人や論壇人が、時々或は屡々忘れている常識というものを出すことなんだ。常識を入れるということが非常に難しいんだ、文壇の世界ではね。その常識を一つひねって、チラッと出すというのが、つまり小林秀雄なんだ。だからそういう意味で、小林さ

んの毒舌が如何にも必要なんだ。そこでそれ自分の意見と結びつけていうと、今の時代というのは、もう一遍、常識の全面的復活が必要な時代なんだ。小林さんの電光的な常識の閃きだけでなく、それが全面的な常識として押し出して来なければならぬ。常識の中に根を持たない思想、また常識との関聯のわからないような思想は、すべて贗物か借物だ。或は常識に翻訳されないような思想は思想ぢやない。そういう所に来ているのぢやないかと思う。だから、さっきからのお話でも、こういうように考えるとわかると思う。

大串 僕も、今のわからない部分がありながら生きているという話は、我々のほうでもそう思いますよ。実際その通りなんだ。あなたの専門の経済のことだって、新聞の経済欄も僕ら初めから読まないですよ。一種不可解なものがあつてね、どうせ仕方がない、そうなつて来るのだという感じだね。

殊に経済についてはそういう感じがします。或は自然科学のどうかした方面もそうだ。実際そういう場面が多くてね。昔の人がそうであつたか、よく知らんけれども、もつと人間として、自分の行為、生活について自意識をもつていたろうと思いますよ、現代人よりもね。そういう意味で三木さんのさつき仰つた、中心がないという、ファンクシヨナリズムになつてゐるという、それがやはり現代の特徴ぢやないですかね。

大熊 そうだな、特に日本はひどいんだな。

大串 日本ぢや、もう一枚悪いのだ、それだけでなく……

大熊 日本ぢや、科学とか思想とかいうものが、向うから来たものとして、対象として飛び出している。自分の中から出て来た手足でなく、自分の向うに坐つてゐるものとして、思想があつたり、学説があつたり、科学があつたり、技術があつたり

する。手足の延長として、目や心の延長として、思想があるのぢやない。目や心から離れた所に思想がある。技術なんかでもそうだ。実は、すべてのものが手足の延長であり、目や心の延長でなければならぬのが、——殊に思想というものは我々の心の延長でなければならぬのが、心から離れてしまつてゐる。これは日本で特にひどいんじゃないかな。それを心に引き戻すということが、つまり、さつきの常識論に戻るが、我々自身常識に還るといふことね。

現代の青年層

大串 それに、日本では言葉の問題というものがあつて、言葉というものが地につかないということがね。それは一つのファンクシヨナリズムだけでなく、自分達の実生活上の生活というものと理論というものと、まるで離れてしまつてゐる、板につい

ていない。自分が本当に理解しないで話しているということが沢山ある。

三木 しかしそれは日本だけじゃないと思う。西洋だって同じですよ。

大熊 しかし、程度の差についてはどうですか。

三木 たとえば、思想というものが、自分の生死にかかわる一大事でなくなつて、いわば純粹な抽象的な空気の中にあるというようなものであることは、西洋だって同じですよ。

大熊 そうかな、それとは少し違うな、それに程度の差はあるのぢやないか。

三木 程度の差はあるかも知れんけれども、しかし、これは現代の特徴だと思う。

小林 現代のいろんな文化批判をする人は、西洋の十九世紀後半から二十世紀にかけての思想の頽廃、病氣といえは病氣だな、困つたことになつて来たと孤独な大思想家が心を苦しめたところのも

のが、どの位日本に深く入つておるかということをあまり気につけないね、毒の廻りは案外浅いと安心してゐる傾向がある。

大串 しかしね、僕の言うのは、いま三木さんの言われたこともわかりますが、つまり、西洋も日本も同じだということもわかりますが。しかし、それはやはり在り方が違うんじゃないかと思うのです。言葉の問題でたとえば「自由」と言つても、西洋で考える場合の「自由」の問題というのと、それがいろいろ問題になるにしても、日本で「自由」ということを考える場合と非常に違うんじゃないかと思う。それで青年をみて、そういう毒が廻つてゐるかどうかということは、これは研究ものだけれども、しかし在り方がずいぶん違うしね。
小林 それはずいぶん違う。しかし違うけれども、根本に行くと、やはり同じように考えていたんじゃないかね。たとえば自由という問題もね。

三木 それだけ西洋のものが身について来たんだね、それはやはり自然に身についてきたんだね。
 (笑声) それは最近のことで、今の若い連中をみれば、そうだと思う。だから日本的とか東洋的とかいつても、観念的には解っているが、感覚的には我々から前の人のように解っていない。そこに大きな問題があると思う。

大串 そうぢやないところが問題なんぢやないか。

大熊 待った。 (笑声)

大串 そう言いきれないところが問題なんだ。そう言いきれ、ば問題はなくなってしまう。

大熊 今の若い連中といったつて、二十代も三十代も四十代もあるし、……それは例えば手漣の和紙なんか近年喜ばれているでしょう。ところがそれが異国趣味のものを喜ぶと同じような感覚なんだね、若い人のは。我々のは違うんだ。そういう意味では、三木さんの説はわかるけれども、しかし

果して今の学生が日本的なものに還つて行くというの、解らずに還つて行くのだというように簡単にはいえないと思うな。

大串 それは問題だと思いますね。

明治の偉大さについて

三木 観念的には解っている、それは観念として、たとえば、ナチスなどの民族主義とか全体主義とかというものの関係から解っているものであつて、感覚的にはそうでない。我々から前の人は思想的にはどれほど西洋的であつても、感覚的には日本的で、東洋的なんだ。ところが今の若い人はむしろ逆でないかと思う。感覚的には西洋的になつていて、たゞ一つ思想を与えられる為に、思想的には日本的になつている。我々の場合には西洋的には西洋的な訓練を受けたが、感覚的には東洋的なものを持つてゐる。

小林 そういう問題は確かにありますね。やはり明治人というものをみると、そういうことを考えます。

大熊 しかし二十才前後の日本人の感覚の内容については、論断しないほうが無難だぞ。(笑声)

大串 それは、三木さんの仰るような傾向は誰でも感じている。感覚的にうすらいでいるということ、それはわかつている。しかし、そう言いきつてしまえるかどうか。そういう形でこれは問題だよ。

小林 しかし、青年というものは非常に主観的だからね。だから自分でいろいろ誤魔化されているよ。

大串 たとえば、青年が来て、自分たちは感覚的には国体のことは解らないのだと言っても、それをそのまゝに受取るかどうかということは、よほどの問題でね。実際観察すれば、大きな傾向としては、その自分達は感覚的にわかつていないと言う

けれども、その自分たちということだつて問題ですよ。そういう見方をすれば……。

三木 明治時代の人をみると、当時の先覚者というのは、たいがい国家主義者なんで、西洋のことをずいぶんやつたけれども、根は日本的なんだ。

小林 そうだよ。

三木 隅外でも漱石でも福沢諭吉でも、内村鑑三でもみなそうなんだ。ところが今ではむしろ逆になりつつありはしないかと思うね。そこが今の日本の悩みなんだと思う。

大熊 今という和我々も入るね。

三木 我々は分岐点にある。

大串 それは、さつき話が出ましたが、あなた方のものの言い方自体がやはり秩序的なものに、型に はめて考えているのぢやないですか。(笑声) 同じ学生だつて今の学生はこうなんだということは無理なんで……

小林 それはそうだ。

大串 現代の学生だって、いろいろな種類があつて、我々とちつとも変らないのがいるし、変つているものもいる。

三木 それは程度問題だけれども、一般的にはやはり今いつたようになりつつあると思いますね。

大串 しかしその方向に行つたから行ききつたとは言えないですね。

三木 行ききつたとは言わないが……

大串 そこにまた繋がつて出て来るのでしよう、永遠というものがあるのでしよう。実際上はそう変りきつてしまわないからね。観察する場合には、この見方をしなければならぬ、それがものの必然だと思ふ、観念としては。

大熊 三木さんののは、なんぢやないですか、肚の中にはちゃんと全体の構図があるんだけれど、たゞ現在の状況がこういう風なんだから、いつも片方

を強調しているだけ……。 (笑声)

大串 実際そういう感じがしますよ。

大熊 やはり全体の構図をぐッと表面へ出して貰いたいね。

小林 だけれども、やはり日本国民というものは複雑で、偉いですね。

大串 僕はそう思いますね。青年を見て殊にそう思う。簡単に判断できないですよ。僕ら学校で青年に接してこうだと思つたら違ふし、あつちに嵌めようとしたら、また違ふし、そういう時代に来てゐるのぢやないですか。

日本人の複雑性

小林 日本のインテリゲンチヤは世界一だよ。非常に複雑だ。インテリ軽蔑思想など舶来の粗製品だよ。

大串 もう一つ、僕も考えたのだけれども、ラジオ

の普及ということですね。この影響が大きいですね。最近は殊に、インテリとよく言うけれども、国民は全部インテリのように思いますね。

三木 それは特に支那事変以後だね。事変後揉まれて来た国民の複雑さというものは大変なものだ。

大串 それは大変なものだ。そこに現実の政治のむづかしさがある。事変後は一般国民がインテリと同じような複雑さをもっている。

大熊 面白いね、これは、

大串 実際そうだと思う。

小林 やはり緊張したんだね。

大串 揉まれたのだ。

大熊 緊張だけではないな。心の動きが立体的になつて来たのだね。

小林 必要がそうさせたんだ。

大串 この頃のことは知らないけれども、僕の印象に残っているところでは、日本はドイツに比較し

て、問題ならん程こっちのほうが複雑だ、日本人の心理がね。

三木 それは、或る意味では日本人ばかりでなく、支那人もそうだね。支那人もやはり非常に複雑なものをもっていると思うね。

大熊 たゞさえ複雑なところへもつてきて……。

三木 そこが昔から日本や支那には理論が生れなかった理由なんだね。つまり理論できちんときめて、その通り行動するということは出来ないのだね。

小林 あまり人間が利口すぎてね。

三木 そして複雑すぎるのだね。

大串 生きる力が強いということもあるのだね。

小林 理論というものは馬鹿がやるものだから。(笑
声)

大串 無器用だから考えるということは確かにある。

大熊 しかし、およそ技術というほどのものは理論なしにはないだろうな。

三木 結局はやはり理論通りになるのだな、或る意味では。

大熊 技術という奴はすべて何であれ、ごまかしが効かないのだ。

小林 だいたい論文の理論というようなものは、本ものの、理論というものの誤訳だ。

大串 さっきの三木さんの、ナチスの影響というか、ナチスの考え方とあまり変らないような考え方のプロセスをとるということ、そういう言葉だったかどうか忘れたけれども、とにかくナチスというものとは日本との間が、殊に若い連中について共通性があるということを考えて、丁度今のことが当嵌まるのは、僕はナチスというものに接して考えてみると、やはり或る程度割りきれんんです。割りきれないとよく言うけれども、或る程度わかっ

てしまうんですね。こっちのほうが本物だという気がしますね。型としては同じような型をとりつゝあるけれども、どうもやはりこっちのほうが本物だ。そういうことは確かに感じます。向うにいたら、やはりなにかはつきりしちゃうものね。そうしてすぐ行動に出せるような、一つの形式になつて来る。

三木 日本の国民の現在の複雑さというものは、強力な政治的指導力がないということから来ている点もありますね。複雑ということは、強味であると同時に弱味ですね。

ナチスについて

大串 それから日本とドイツと形態、或は傾向としては似ていても、日本の方で今動きつゝある方向は、逆に社会化というと言葉は悪いけれども、横に繋がっていない、個人化していない人間がこの

事変で社会化して行く、同胞化といえど一層綺麗な言葉になるけれども、横の連絡のなかったのが今出来つゝある、そういう傾向は確かにあるのぢやないですか。

小林 それはある。

大熊 それは三木さんを初めとして近來說かれてゐる問題ですね。

大串 ドイツを自分達が思想で考えて、前の自由主義とか民主主義と、今のナチの全体主義とは全然違ふと思想的には言うけれども、所謂社会生活の実体としては變つていない。

大熊 變り得る訳もないね。前の大戦後からずっとドイツに行つてゐる人に若し聞いて見たら、生活の本質は變つていないというだらうね。

大串 ドイツ人に接しても時々そういう気がする時がある。例えば或るドイツ人ですが、話してゐると、その考え方なんか実に日本人に近いという感

じがする。ところがその社会生活とか、そういう部面に対する判断、或は国家の外交政策、そういうことになつて来た場合の判断の仕方になると、例えば今度の独ソ戦などにしても、吾々日本人であれば一応道義ということをやはり考えるですよ。ところが連中にとつては独ソ戦は当然のこととして、ちつとも疑われない。それを違ふと考えるのが無理かも知れんけれどもね。

大熊 そうだらうと思うね。

大串 大熊さんはさつき、そういう方面のことは国に依つて違ふと言われた。それはそうだけれども、やはりそういう所から見て行かなければ、自由主義とか何とか言つたつて本当ぢやない。そこが一番大事な所のような気がするんです。

大熊 しかしドイツとイギリスをとつてみても、昔からイギリスの方が行儀がよくて、ウエルヘルム・マイスタアの英詩なんかでも、一頁ほどの削除が

ある。何かというと女が主人公の寝室へ忍んでゆく場面だ。つまり、国柄による風習の違いではないかと思われる。

小林 この頃文化政策とかなんとか喧しく言うけれ

ども、あんなに喧しくいうには当らぬと思うね。

何をいつても、軍隊と経済の組織を強固に合理的にするということが根本問題だ。それが出来れば文化政策は九十九パーセントまで自ら片付く。後はラヂオの演説を何とかすること、雑誌の巻頭論文、新聞の社説、あれを何とかすること、それだけだね。何とかする事とはうまい演説をすること、とうまい文章を書くことだ。うまい理屈をこねると言う事ではない。それだけが出来れば日本の文化政策というものは成功だ。乱棒な話ではないよ(笑声)日本人である限りよ。何主義だっていゝのだ。こんな立派な国は何主義だっていゝんですよ。

大串 僕もそれは賛成だね、何主義だっていゝとい

う点はその通りだと思う。今までの何主義というのはみんないゝ加減なものですよ。さっきの現代と技術の関係ですね。それに付て三木さんどういう風に考えていられるのですか。

技術を支配する技術

三木

要するに心と物とが違った秩序のものだという考え方がどうしてなくなったかということの説明ですね。それを私は現代に於ける技術の支配という所から説明したのです。物と心、必然と自由とを統一するということが技術なんです。ところがそういう技術は同時に人間にとつては手段なんで、手段であるということは、人間は技術の中に入りながら、どこまでも自律的な、或は独立的なものであるということでなければならぬというわけです。ところが自律的な精神がなくなつて、技術に使われてしまふ、技術が目的になつて

しまうというところに現代の混乱があると思うのです。しかし技術は単なる手段ではない。それを単に手段と考えるのは抽象的な精神です。やはりどこまでも技術の中にいてしかも独立であるというのが精神の眞の自律なんだ。これからの世界観は技術の本質についての深い理解の上に立たなければならぬ。

小林 だけれども、そういう思想は片っ方から考えると非常に東洋的だよ。日本人は昔からそういう思想でやつて来たのですね。

三木 それはそうだ。だから僕は東洋の世界観というものは、技術的世界観だと思う。

大串 いゝ意味でね。しかしなんです、現代の技術というものの、例えば法律技術などというものはどうにも実に耐えられないですよ。実にくだらんものですよ。これは何とかしなければいけない。これを何とかしなければ、さっきの心の秩序だつ

て出て来やしませんね。

小林 ラヂオの演説以上ですか（笑聲）

大串 演説以上です。僕は自分の専門だから特別考えるのかも知れんけれども、いろいろな思想問題を論ずる場合、特に国家の問題になつて来ると、今の法律技術という問題をもつと重視しなければいかんと思う。この法律技術というものゝ持つ影響力は実に大きいですね。みんな経済のことばかり言うけれども、経済も実は法律技術というものを俟つた経済組織であつて、法律技術というものが非常に、思想的にも大きな力を持つてゐる。その点を問題にしなければいかんと思う。

大熊 三木さんの技術という題目は、やはり産業技術が中心になつてゐるのですか。

三木 そうぢやないのです。産業技術というものを支配する技術、そういう技術が現在の大きな問題なんだ。

大熊 つまり政治的な技術だね。

三木 そうなんです。近代の産業革命は生産技術、或は機械技術の発達に依る世界的な出来事であつたが、その後を生じた問題は社会的問題なんで、そういう技術を支配する技術というのが今問題なんです。

大熊 すると現代の技術問題というのは、一度技術に押されて、歴史が動いた後を受けて、人間が技術の主人になる為の技術ですね。

三木 つまり技術を支配する技術なんです。

政治哲学について

大熊 それで現代の技術というものは、例えば政治の技術について言えば、名前を言つてはいかんけれども、或る非常な決断力の強い政治家が出て来てがつとやれば、それで今の技術の問題の解決がつくかと、いえばそれはつかないと思うんですよ。

やはり今の技術を支配する技術になつて来ないと出来ない。技術を一遍抜かなければならん所に現代の政治の難しい所があり、一番大事な所がある。それを一応理解して掛らなければ乗り越えられない。ところがそれを理解しないで乗り越えるというような所がありますね。

三木 そこが問題なんです。

大熊 経済や技術のことは分らないというようなことを政治家が平氣でいう時代はもう去らなければいかんでしような。

小林 愈そうなるのぢやないですか。(笑声) だから技術を支配する技術問題というのはやはり純粹の哲学問題だね。

三木 その通りだ。

大串 それはそうですよ。経済のことは分らないという意味も、経済の実体そのものが分らないという意味ではなく、自分で動いているような経済の

技術が分らないという意味ぢやないかと思うけれども。

大熊 これまでの技術哲学などというのは三木さんの考えているのよりずっと狭いのだね。

三木 ずっと狭いです。

大熊 本当の意味の技術哲学というのは、むしろ政治哲学なのですね。現代政治の科学化という題目にしても、実は技術化ということに帰するわけだし。

大串 それは小林さんのさっき言ったあれですよ。

小林 哲学というものはみんなが娯楽の為に読んで呉れる様にならないといけないのだよ。(笑声)
みんな哲学者にはなれないからね。哲学というものはやはり一種の美術だから、みんなが観賞して呉れなければ困るんだ。値をつけて呉れなければね。(笑声)

大串 兎に角今の組織の問題とか、或は技術の問題

とかいうのを考えて感ずるのは、さっきの複雑ということにも、聯関するのだけれども、一時にどつと行けない。そこに集中してどつと行けないという、変な~~やもや~~したものがありますね。それは確かに今の複雑さというものとか、実際はそれ程複雑でなくて複雑に感ずるというのは、やはりそれが身に付かないというか、行動にまで行かないというか、そういう意味ですね。たゞ物が沢山あつてごちゃ／＼しているという意味ぢやなくて、物が浮いて板に着かないという意味ですね。そうぢやないですか。

三木 その問題は、この前の欧州戦後に現れた一つの問題で、或る人は戦争の後には宗教が盛んになるというようなことを言つただけけれども、実際はそうならなかったですね。やはりそういう宗教的な信仰が出て来ないというのは、現代の一つの複雑さぢやないかね。

小林 僕はそれは非常に疑問だと思う。これは座談

会に不適当だから喋らないが、僕はまでもう少しキリストの方を信じているのだよ。

三木 それは僕も信じない訳でないけれども今の現象を言っている訳だ。

小林 あゝそうか。現象をね。しかしまあなんでしょうかね。人間というものはいろいろ見たり聞いたり考えたりすることが、だんだん多くなつて来て、遠い将来はどうなるんでしょうかね。（笑声）例えば歴史家だけのことだけ考えても、今だってもう古本をしょい切れはしない。

大熊 兎に角歴史家は困るだろうね。

人類の将来

小林 その困り方はみんな同じですよ。今の国民学校の生徒を見て御覧なさい。僕等の小学校の時と較べてその知識の豊富さは驚くべきものだ。僕等

の子供の時の百倍位多いですよ。しかし人間というものは命にも限りがありエネルギーにも限りがある。これで人間が育つものかと思うようなものだね。（笑声）知識だつて目方がありますよ。目方がないと思つて、こたま注ぎ込むけれども、子供だつて重さを感じているに違いない。

大熊 何か外の方面で省けていないかね。この頃は僕等の時代と違つてお伽噺なんでものは読まないだろうな。（笑声）

小林 中には覚えの悪いのがあるだろうしね

大串 簡単にしなければいけないね。

大熊 だんだんに整理して行くさ。

小林 だから僕は人類は墮落するのだと思つてゐる。墮落せざるを得ないさ。

三木 というのは価値の秩序についての感覚がなくなつてしまつたのだよ。何でも同じ価値なんだ。政治でも経済でも音楽でも科学でも、みんな同じ

価値なんだ。そこに現代の混乱がある。

大熊 あれは新聞の発達の為だよ。活字がみな同じ大ききでしょう、政治欄でもスポーツ欄でも。いや、スポーツの方が大きいか。(笑声)

小林 だからドグマというものを持つていないね。批評というものはないのだよ。今批評が盛んだというけれども、そんなことは嘘だ。批評なんというものはありはしない。解釈と註釈ばかりだよ。

大串 今の簡単にしなければいけないという話ね。複雑ということゝ同じように面白いのだけれども。唯根本を捕えて考えないと複雑だ簡単だと言つたつて意味が違ふんでね。

小林 根本というと……。

大串 今日新聞に誰か書いていたけれども「文化」という言葉をなくしてしまえというようなことがあつた。そういう感じでものを言つていたら、何時まで経つたつて複雑ですよ。さつと切らないと

いかんのぢやないかと思う。

小林 いや、しかし随分大変な問題ぢやないですかね。こんなことを言うとき空想めいて来るけれどもね。チエホフが書いている。まだプーシキンの時はオネーギンは二十代でよかつた、俺の時には三十過ぎなければ小説は書けん。今は四十過ぎないと人間は一人前になつていない。だんだん書きにくくなる。何時まで経つたつて一人前にならないのね。(笑声) 文学界だつて御覺なさい。芥川竜之介は三十五で死んでゐる。二十四五の時は既に一流ですよ。ところが僕の所に来るやつなんか、誰も僕を一人前と認めない。尤もそれは僕の責任もあるけれどもね、時代の責任というものが六割方ある。(笑声) 人間が纏まらないのだね。これからは五十位にならないと、一人前にならない。その次は八十位にならないとスタイルが出ない。その次には死ぬまで駄目さ。将来どうなるですか

ね。(笑声)

三木 現代の物理学などでは二十代の人はずいぶん仕事をしている。そういう人の仕事はあまり長続きしないようだね。

小林 ハイゼンベルグがどんなに偉いのか知らないけれども、やはりニュートンに及ばないよ。

三木 それはそうだ。

小林 それはやはりごく小さい所に、精神を集中して、そこへ天才を嵌めこんでいる様なものだからね。やはりあれは墮落ですね。(笑声)

三木 科学でもプランクみたいな人はあまり出て来ない。

現代の生命観

記者 大熊さんの「現代」に書いていらした生死観について……。

大熊 あすこの所はほんの糸口なんで、あゝいう生

死観をしない為に、あとであれを避ける意味で、あれを前に置いたんですよ。バイコフ¹の小説ね。しかし、非常な勝手な概念を使つてやつてるから気がひけるのです。つまり生きていくということとは、生きられる条件と死滅の条件とを同時にもっているのだということね。死は生の終局にあるのぢやなくて、生きていくということは常に死と闘っていることだ。いつてみれば何でもないことだけれども。——たとえば御飯を食べる時に、例の集団勤労や修練道場なんかで、三度々々にか道場らしい作法があるでしょう。あれはどういう意味でしょうか。三度々々御飯を頂くのに、一々合掌したり、神仏を礼拝するという意味は、どういうところにあるのか、教を乞わずに、自分勝手に気になるので考えずにはおけずに、自己流に解

1 ニコライ・アポロノヴィッチ・バイコフ(1872-1908、ロシア人、革命後満州からオーストラリアに移る。野生動物を主人公とした作品で名高い。

釈してみたのです。するとやはり、物を食べるということは大変なことだということに今更心付いたわけですね。二度や三度食べなくても人間は死ぬものぢやないが、一般に食べないとなれば死ぬにきまつている。二週間も三週間も断食ができるということでも、その直前まで食べていたから、そんなことが出来るのですね。先に食わなければ断食もできないのですね。断食しても何日か生存を保つということ、体内のそれまでの蓄積がそれをゆるすのです。段々は消耗して行つて、堪え得られない時に死ぬのだろうと思うんです。今日の戦略というものでも、経済戦争ということが中心の方式のようになって来ている。これなども狙いどころは国民全体の生存を脅かすというところに目標があるわけですね。すると、国民の食糧の問題が最高の問題で結局は軍需品以上の問題にさえないかねない。食糧ということを交戦各国が今更再

認識しているような状態だと思ひます。それは他人^{ひと}の作つた米だから頂いて食べるというような社会倫理なものでなく、自分が作つた米であつても、食べる時にお辞儀するくらいは、甚だ人間らしいことぢやないかと考え出しておるわけですね。そんなことをあの文章には書いております。

それともう一つ、生活の理論というようなものを考へて来ているのだけれども、どうも生活の理論だけでは足らんで、もう一つ退つて生存の理論というところまで突つ込まなければいかんのだぢやないか。生の構造を考へるといふのには、そこまで考へないと落ちつけないようになった。生死の問題はだれしも考へておりますけれども、しかし生活全体の運命というものを自分のやつてゐる学問の内容として、正面から受け止めないと気がすまなくなつた。それでぼつぼつ考へておつたわけです。近年はそういうことに関したものを一

向読んでおらんものですから、最初から非常に我流で、幼稚な考えしか浮ばんです。殊にあの「現代」八月号の文章というものは、洵に未熟千万で、もう一遍書き換えまして、もう少し純化して、自分の目論見としては、国家存在の理論というようなのを、——田辺（元）さんのような行き方もありましようけれども、もつと事物に即した考え方で初歩からやってみたい。国家と申しても、ドイツのように民族と国家とを分ける考え方はしておりませんから、国家も民族も一つとして見る、そういう意味での国家ですね。国家的存在の理論というようなことを考える場合にも、僕のような学問をしてきたものは、やはり生きる為の働きということが最初に出て来ますね。一頃軍需官需民需というような段階をつけて、民需が一番終いにおかれていましたが、それがやがて反省されて来て、民需の中の特に必需というものは重視されて

来ております。僕はやはり論理的に、軍需よりも民需が先だと早くから思っていたのですが、究極的にいえば、民需こそは真先のものだと思うんですね。民需なしに戦争はできないですよ、何よりも民需を充たさないではね。もつと生存の論理というものを明らかにした上に立つた生死観が欲しいのです。

国体論と学問

大串 私は大熊さんのあれを拝見して非常に面白いと思ったのは、あなた経済学の方で、あゝいう問題に思いきつて入って来られて、しかもあの中には御自分でも不確かなような断り書きをしておられながら、思いきつて書かれたいうことに非常に共鳴を感じたのですね。また感激もしたわけですね。自分たちの今立っている運命というものは、やはりそういう今まで部分的なファンクシヨナリ

ズムであつたものが、それをつき破ろうとして努力しておるところに非常な共鳴を感じるしね。自分たちもそうしたいと思うわけです。自分の学問のほうでもそうしたいと思いますが、たゞこういうことを感じたのです。

大熊さんのあれの終いのところに、国体といつたかな、何かの問題で、今まで扱い馴れていない、政治の問題も十分検討をやっていないのだ、だからもう一遍書き直してみたいというようなことが書いてあつたですね。あれを見て感じたのは、これは問題の引出し方というのか、その所がむづかしいけれども、つまり自分で考えたことであれば、未熟なことだつて非常な価値があるのぢやないか。つまり自分で心の中から考えたことであれば、いくら未熟なことだつて非常な価値がある。大熊さんが生存の問題を本当に考えてお書きになったことに頭を下げますよ。僕はそう思う。決

してそういう問題に、ひとが分つてゐる、悟つてゐる、というようなことは心配する必要はない、自分が本当に感ずることが必要なんでね。そういう感じを持つたです。

大熊 そう仰られると一層恥かしくなりますが、それはつまり、私も学問の端くれにのつてゐる者として、おなじ問題に関するものを一通り読みもせず、識者の意見も聞かずに、——自分のメモならば構わないけれども、苟も活字になるもの、外部に発表するものとしては軽卒だとも思つたのです。しかし書きたいという気持が強かつた。それであれは一ヶ月前に頼まれて書いたのですが、掲載がおくれ、その後に近衛さんの愛国に関する放送があつたので、特にそれを後から校正を貰つて五六行入れたようなわけです。自分の考えたことならば、たとえば文学の世界で申せば、小林さんに伺へばきつと同じ意見だろうと思うのですが、

ひとが何千万遍言つたことであろうが、自分が感じたことは書く、しかも感じたように書く、ということが意味を有つていると思うのです。文学の世界ではそうだろうと思う。しかし少くとも理論的というような性質の文章ではそれはいかんのぢやないかというように考えて、それであゝいう断りを書いたのですがね。教えを乞いたいという気持があるのです。

大串 そのお気持はよくわかるのです。ほかに問題を持つて行くようですけれども、こういうことを痛切に感じているのは、国体という問題ですね。国体という問題を取扱う場合に、今まで取扱わないう問題に入つて行く、という見方をする人が非常に多いのです。そういう見方が誤りだということですね。つまり、国体というと「勤王」とか「御民われ」というような言葉を使えば解法をつく問題ではなしに、実は我々の生活の中にある問題で

あつて、国体問題というものを、もつと我々の生活の内容にし、普通のことになければ、解決のつかないところがある。たとえば、勤王ということを経た文章で仰つても、勤王ということは解決しない。それこそ現象的な物の考え方で、国体というものをそういう工合に考えるということが既に間違つてゐる。国体というのは、我々普通の生活内容の統一原理の問題で、現象的に最終に來る問題のように考えておるのがどうかしてゐる、こう思うのですよ。

国体論の位置

大熊 僕は現象的に最終に來るなんということはゆめ／＼思つていないが、やはり學問的に国体の問題に触れることは容易でないという考えが最初からあるのでこの考えが誤りであれば一つお叱りを頂きたいのです。曾て學界の或る長老と膝をつき

合せて二人だけで喋っている時に、国体の問題に触れた。その時にその先生がいわれるには、今校正中の著作の中に、国体という文字が一つあった。それを校正の際削ったということなのです。つまり、国体の問題になるとこれは信念の問題だから科学的な著作には入れない方が、という意味らしかった。自分はその時半分以上は同感、まあ半信半疑だったのですが、しかし、妙にその事が気になっていました。そして自分の気持は、国体の問題まで学問研究の上で行かなければならないという決心の方へ段々に傾いていった、だから、大串さんのいわれる現象論の一番最後に出て来る結論的な国体では決していけないけれども、学問研究の経過が偶々国籍のない経済学という分野から来たものだから、順序として最後に出るということは仕方がない。自分のこれまでの学問をきれいに捨てて、新しいスタートに帰る場合は別ですけれど

も、今度僕自身の著作集を拵えるにしても、最後の第四巻を国家論として予定したのですがね。それでその刊行の順序を第一巻の扉に書いたようなわけです。それは国家論についてすでに学問上の確信を持つているのぢやなくて、たゞそこまで行かなければならない運命を自分に感じて、自分を規定する意味で、そういうように配分原理の第四巻をやったのですけれどもね。それであなたの今仰った最終的なもの或は結論ということとは事情が違います。

大串 僕も大熊さんの仰る、国体の問題まで行かなくちゃう、そだという学問の中に学問を築きあげて行く立場ですね、これには同感だ。初めからおつ被せるように国体をもつて来て、それで問題が全部解決するということは承認しない。それはやはり一番尊い問題であり、一番根源的な問題だから、あらゆる思索を盡して考えなくちゃいかな

ということとは僕らその通りに思いますよ。しかしね、問題は国体というものを実感として、さきに三木さんの仰った感覚的に感ずる立場になつて来ればもつと広い問題になり、いろんな考え方がその中にあり、従来出ている国体論では解決できないような国体の問題の出し方もあり、現在またそうなっているのぢやないかと思う。従来 of いわゆる勤王とか忠君愛国だけでは解決のつかない、非常に進んだ国体の考え方があり、進んだと言うと語弊があるかも知れませんが、内容のびつたりした表現があるように思うのですね。

愛国心について

大熊 大串さんのこれまでのお書きものを順序立てて拝見すれば、そこへすで行つておられることが判るのぢやないかと思うのです。

たゞ、お話の中に出ました勤王ということですね、

それが今文壇の一部で論じられていますが、僕はこの勤王という言葉は、国家的或は個人的な危機に際した時の集中的な表現であつて、ふだん勤王というようなことをいうのは語感からいっておかしいのぢやないか。たとえば今日獄中の人が勤王の歌を詠むということは、やはり個人的な危機の状態と結びついたものではあるまいか。これは難しい問題だから教を乞わなければならぬと思う。小林さんどうですか、愛国ということと勤王ということ。

小林

愛国というのはつまり勤王ぢやありませんか。愛国という抽象的な觀念はどの国にもあるけれども、日本では愛国心をもつということと勤王心をもつということはちつとも違わないでしよう。

大熊

つきつめればそうさ。しかし心の顕れとしては、僕はやはり勤王というようなことは、或る危

機的な場合のものではなからうかというように考
えてみたので、愛国心という言葉と勤王心という
言葉と二つあるということも、たゞ無意味とは思
えない。愛国心と勤王心とを、事実上の顕れとし
ては二つに考えることもできると思われる。

勤王ということ

大串 問題をもとに戻せば、勤王ということですが
ね、同じく勤王と言つても、その中身がいろいろ
ある、このことだけは考えなくちゃいけない。

小林 やつぱり日本人の複雑性ですね。

大串 勤王ということを、一つの主張にしてしまふ
……。

小林 だから僕は、兵隊が「天皇陛下万歳」を叫
んで死ぬだろう、あれで沢山だと言ふんだ。だか
ら日本人というものは、どんな思想を待たつて
いゝと言ふのだ。僕の言うことは乱暴かも知れん

が、僕はこういう国に生れたことを実に有難いと
思っている。それだけです。

大串 そりや外に無いですよ。

小林 そのつまり有難さというものが、勤王心だよ。

大串僕は益々有難いと思うのは、現実の国体とい
うことを、一つの主張とか何とかいうことなく、
我々が実際その中で生き、その中で自分のあら
ゆる性質というものを出し、それからいろんな違
うものをその中に含みながら生きて行くことが出
来る、これは実に有難いと思いますね。

小林 そうですね。

大串 三木さんの哲学上の著作は、いづれ国家論の
ようなところに行くでしょうね。

三木 書きたいと思つているのですけれども、なか
なか大変ですよ。

大串 三木さん、あなたの哲学の立場からごらん
なつて、近年の日本の国家論的な動きというよう

なものをどうお考えになりますか。今までの哲学の発展からして、そこへ行くべきような筋道も幾らかあったのですか、或はなにか急カーブをとったようなことになりますか。

三木 これまでの動きとは大分変わってきたんですね。

大熊 行く(?)ということはなかったんですか。

三木 たとえば、新カント派の哲学というようなものから、現在の国家論というものは出て来ないでしょう。

大串 三木さん、私率直に言つて、哲学者の国家論を読んで感ずることは、実は現実の国家というものは、非常にいろんな、先程小林さんが仰つたように、制度をもち技術をもっているものですね。国家の問題は、我々の眼から見れば、実はそういうことに起っているわけですね。ところが哲学が哲学の問題として、国家の問題に行くという場合

と、我々が国家の問題をいろいろ問題とするという場合と、そこに開きがあるような感じがするんです。

三木 それはそうです。つまり今言つた、政治技術、法制技術というような技術的な問題ですね。そういう問題を全部抜きにした議論ですからね。そこで議論が抽象的になつている。

大串 たとえば、国家存在を論ずる場合に、一言も立憲政治に触れないというのは、非常なアブストラクトですよ、問題を問題にしていけないことだ。現実の問題にはならない。

三木 そう。

大串 国体の問題になると、現実の制度とか秩序の問題があるし、そこで初めて国体ということがあるのであつて……。

三木 つまりまだ本当に歴史性というものが捉えられていないですね。歴史性の問題は根本的に技

術の問題に繋がっています。

大串 小林さんのさつき言われた「心の秩序」というのは一寸面白いと思うのだけれども、国体という言葉で現してはいかがですか。

小林 いゝんですよ。つまり具体的な形式で、現れると日本人はそうなるんです。普遍性というものはそういう風にして得るものだと思うんですね、僕は。

信念について

大串 さつき大熊さんの話に出たことで気に懸るのは、国体というのには信念だという問題ですが……。

大熊 そういう考え方があるというので、僕自身は信念という言葉は使いたくないと思う。信念というようなものとは考えられない。信念とか、人生観とか、価値判断とか——殊に経済学者が信念と

いう時にはね、科学性を離れるという意味で、人生観という言葉も同じことで、双方すぐ置き換えられる場合が多い。だから信念という言葉は非常に困るのです。

小林 信念なんて言葉は馬鹿でも言いますからね。

三木 素りに使うべき言葉じゃない。(笑声)

大熊 それなんだ、最後の言葉だね。

大串 どっちにしても、国体という問題は非常に大事な問題であるだけに、あまり極限的にしないことを望みますよ。もつと生きた、我々の普通の知識とも結びついた生活とも結びついたものにないと……

大熊 生活と結ぶというよりも、あなたがさき仰つた、国体が生活の中にある、という言葉のほうがいい、もつといゝと思う。

小林 だつて、美はこんな煙草にだつてあるじゃないか、それと同じことじゃないか。何の端くれに

もある。そういうものでなければ美ぢやない、美学の先生の頭にあるのが美かね。

大熊 まあ、早くいうと、あなたならあなたが道で何をしておられようと、照らしているお月さんはお月さんでしょう、というような意味でね。国体というものはそういうものだと思う。ただ逆も大きい為に、あまり大きい音響は耳に入らないように、ふだんは生活意識の中に泛んでいないのですね。

小林 だけれども、僕には、国体というような観念はちつとも厳めしい観念ぢやないね。それはやはり日本の歴史というものを讀んだ、その懐しさだね。非常に平凡な懐しさというものが国体観念につながっている。そういう感情ですよ。非常に無智な民衆ももっている一つの懐しさですよ。

大串 僕の言うのもそうですよ、つまり情として……。情として考えることが必要だということを

言っているのです。一つ概念にしたり、フォルメルにしたりしないで、本当に感じるということですね。つまり日本人が誇りをもつということだ、ほかの言葉でいえば。

記者 ではこの辺で……。

底本…『文芸春秋』1941.9月号

国家と大学

司会 三木清

菅井準一

大河内一男:1905～1984、東京出身、東京帝大卒、経済学者、平賀肅学時は師の河合栄治郎と袂を分かち東大に残り、戦後は東大総長。

船山信一:1907～1994、山形県生れ、京都帝国大

学哲学科卒、唯物論研究会、戦後立命館大学教授。

本学側主幹 富田正文:1898～1993、茨城県生れ、

慶応義塾大学文学部卒、評論家、慶応義塾参事、福

沢諭吉全集編集。

学生三名

現代に於ける大学の性格

抽象教育への反省

富田 本日はお忙しい所を有難うございます。三田新聞の企画としまして「国家と大学」というテーマで先生方に一つお話を願いたい、こういう積もりなのです。いま丁度国家の非常時に当たって動もすれば大学の教育というものを軽んずるような傾きもあるようですし、学生なり或いは世間なりで大学というものをどう動かさなくてはならぬか。時局下ばかりでなくて、平常に於いても大学は如何なる位置にあらねばならぬか、というようなことに就いてお話願いたい、こう思うのです。それでは司会を一つ三木さんをお願い致したいと思えます…

三木 現在大学の問題は色々あるでしょうが、大きな問題は二つの方面から考えられはしないかと思うのです。第一には大学の使命ですか、国家の内

部に於いて大学がどういう地位を占め、どういう使命を果さなければならぬかという問題があると思う。第二には大学の使命ということと関係して、ともかく大学は学問というものと離れないわけですから、一体その学問というものの持つて

いる意義、殊に今日のような時代に於いて学問というものがどういう理念を持たなければならぬかということに問題があると思うのです。第一の問題は要するに大学が外との関係に於いて持つている使命であり、第二は大学が自分の内部に於いて学問に関して持つている使命、意義というような問題になると思うのです。で、そう言う二つの問題に就いてこれから色々御意見を伺って行けばいいんじゃないかと思うのですが、先ず第一に大学の使命の問題から話して戴きたいと思ひます。

大学の本质というものは大学令で決められているわけで、それに違ひないわけですが、もう少し今

日の状態に於いて具体的に現実の問題としてどういう使命を持つて居るか、ということを考えて見なければならぬんじゃないかと思ひます。そのことに就いてどなたからか一つ口火を切つて戴きたいと思ひます。

菅井 大河内君、一つ……

大河内 私は後で……（笑声）

三木 どうです、菅井さん。

菅井 僕はそういう点は誰かにやつてもらおうと思つて居たので、後で少し付け足りにやろうと思つたんですがね。船山君に一つ言つてもらつたらどうです。

船山 僕は傍聴に来たんだ、（笑声）やはり三木さんに……

菅井 三木さん、やつて下さいよ。

三木 そんなことをしては座談会にならないよ（笑声）まあ簡単に言えば、一体大学は社会に対して

どういふ人間を作り出して送らなければならぬかということになるだろうと思うのです。或いは学生はどういふ人間にならなくてはならないかということになるだろうと思うのですが、その点に就いてどうです。

菅井 いろんな方面で多少の違いはあるかも知れませんがね。僕は理科とか工科の方面に就いて少し僕の希望を申さして戴きましょう。昨日或る会社の工作機械の工場を見て来たんですが、その帰りに其処の幹部と会って色々話して来たんですがね。一体大学を出た科学者とか技術者というものは会社に入ってどうなんだということを聞いて見たんです。そうしたら今の大学を出た人は結局自分には役に立たないということを言つて居るんだ。その会社の人は、それはもう学問をやつて居るんだから実際に役に立たないのが当たり前だというような顔で言つて居たんですがね。私は多少やは

り問題があるんじゃないかと思うんですよ。まあ私がついこの間まで関係していた藤原工大¹などの目標が直ぐに役に立つ人間を作るといふことだったので、そのために努力して居られるんだそうですが、併しその役に立つといふのはどういふ意味でそういう風にやつて行こうかといふことを目標から判断して行かなければならないんじゃないかと思うんですよ。つまり直ぐに役に立つといふのは、例えば工作機械の工場へ行けば其処で直ぐに機械をいじくれる、そういうことだったら工場の中で大学程度のことをずっと養成した方が話がいんです。だから、本当の役に立つといふことはもつとやはり抽象的な真理探究といふものの深さを持たなければ僕は出来ないんじゃないかと思うんですよ。それと現場との接触は出来るだけ密

1 藤原工業大学、1936年開校、藤原銀次郎が私財を投じて設立、慶応義塾に寄付することを前提に運営が行われ、戦後慶応義塾大学の工学部となる。

にしながら、やはり普遍的な抽象的な問題に絶えず取り組んで居るという訓練がもつと必要なんぢやないか。それは法科、経済でも同じでしょう

が、製図をやるとか、或いは色々難しい数式をゴテゴテ並んで暗記するとか、そういうことは幾らやったところで、それで直ぐに社会に出て、いかにも役に立ちそうで實際立たない。併しそういうもののの中の一つの理論性を持つて居ること、理論的な物の考え方をはつきり掴んで居るということ初めてこの分らない世界に打突かって、それに取り組んで行くだけの一つの意気込みを持つて行くことが出来るので、今大学でやつて居る理論的な探究というものは本当の理論になつて居ないんぢやないか。つまり本当の理論というもの、三木さんも仰つたけれども、實際現場にもっと深くヴィヴィッドに役に立つようなものであるべき筈なんだ、それがそうでないということ

に大学教育のやはり一つの根本的な問題があるんぢやないかと僕は考えるんですがね。

三木 その点どうです、大河内さん。

大河内 同感しちゃつては具合が悪いですけども、いま菅井さんが仰つた点、實際言うと同感なんですがね。やはり直ぐ役に立つということの意味なんですがね。一般的に言うくと、どんな卒業生でも役に立たなければならんですが、唯そこで、大学卒業生と仮に、比較しては悪いですが、専門学校程度の卒業生の差異は何処にあるかと言えば、出て直ぐ機械がいじけるとか直ぐ簿記が記「#」「つ」けられるとか、直ぐ会社の事務が執れるという風な意味での役に立ち方もあれば、或いはもう少し見透しを持った仕事の勘所を掴まえて居られるような意味で役に立つ、そういう役の立ち方もあると思うんですがね。

若し大学教育というものに特殊性があるとすれ

ば、後の意味で役に立つような教育のシステムというものを大学自体が持つて居なければならぬと思うんですが、少なくともそういう点が何処か非常に大きな所で抜けて居はしないかという感じを持つんですがね。それで、丁度今仰つたと同じようなことを私よく聞くのですが、専門学校の卒業生は直ぐ役に立つ、ところが大学卒業生はどうも少なくとも数年遊ばして、現場見習いとかいったような割合フリーランサーのような職場に就かなければ第一線の仕事が出来ない。そういうことを言われるのですけれども、寧ろいい意味でそういう結果が出て来るならば其処にやはり特長があるんじゃないかと思うんですがね。唯危険なことは、そういう実際の仕事なり教養なりに就いての理論とか訓練を経ないで、漠然として大学を卒業してしまう危険が文化系統には割合多いと思うんですがね。

菅井 それは理科系統にも相当ありますよ。

大河内 物を見る眼という言葉が何ですけれども、そういうものを訓練するという訓練のシステムがやはりもつと厳格に作られなければいけないんじゃないかと思うんですがね。

三木 鍛え方が簡単に言えば足りないんですね。どうもやはり私なんかの見る所によれば少し甘えさせ過ぎてやしないかと思うんですよ。というのは、試験とか何とかいうことは厳密にやるかも知れんが普段の鍛え方が足りないと思うんです。まあ塾、慶応義塾の塾ではないが、昔の塾教育というものは今日直ぐ応用は出来ないけれども、ともかく鍛えたと思うんですね。近頃錬成という言葉はあるけれども錬成というと直ぐ要するに学問の方じゃない錬成を言つて居るが、本当の学問的な錬成ですね。それをもう少しやつて行くということが必ず要ぢやないかと思うんですがね。

新しく要請される

学制改革の方向は

菅井 僕はこの頃学生を見てみると、やはり突込

みが今の学生は足りないですよ。これは私だけの感想ぢやなく、帝大の私の恩師がやはり言うのです。君達の時はずぼらでもあつたが、相当に問題をつ突込んだ、そうして教師が提出した問題以上の問題までも探究してきた。ところが、この頃の学生は結局こつちが要求する通りの返事はしてくる、併しそれ以上は決してやらない。これは非常に問題だと思ふということを教授が言つてましたがね。私はその感じを色々な所で経験するんですが、やはり学問に即した、現実に即した錬成といふことがもつと必要なぢやないかな。僕はそう感じますね。

大河内 よく聞く話ですが、例えば法律などの講義

は、民法にしても商法にしても講堂で講義をしなからつまり解釈をやつて居るわけですね。それで以て十分解釈しながら教師と学生の間では法律的な考え方というものが練れるというのです。ところが例えば経済という風な問題になるとどうもそういう抛り所がないんですね。

唯バツと大きな講義を教壇からやるだけで、教師と学生がお互いに一つの問題を考え、練つて進めて行くという抛り所がない、つまり特殊な差があるといふことが※【禍】して居ると思ふんですが、特に経済などの方面で僕ら日常感じて居るのはそういう点での不安定性と言いますかね、錬成といふことに就いての不安定な気持ちこれは教師の側でも恐らく持つて居るでしょうし、学生の側でも持つて居ると思ふんです。悪くすれば極く平板な教師自身の個人的な感想を教壇で洩らす、或いは時局談に終るといつたようなことになり易いと思

うんですがね。それは非常に危険だと思うんです。

三木 それには、やはり第一学生にもう少し自信を持たせるような教育をしなければいかんと思うんですよ。

菅井 根本的にはね。

三木 ところが、自信を失わせるような点が多いんぢやないかと思うんです、社会の学生に対する態度が。ところが、現に近頃指導者理念とか何とか喧しく言つて居るでしょう。そうすれば、そういうことと当然関聯して、大学生というものは、俺達が指導者になるのだという自信を持ち、大いに意気軒高にならなければならないと思うんだ。ところが逆なんですから。そこにどうも日本に於ける指導者理念の徹底しない所もあるし、教育と社会情勢というものがまだびったりしない所があるんぢやないかと思うんですよ。そこにもう少し大学教育として考えなければならぬ大きな問題が

あると思うんですね。

菅井 つまり日本の大学の教育というものは、アラばかり言うようですがね。一面現実役に立たないといふことを極端に標榜して居るんですね。役に立たなくともいいいふことを標榜して居るんですね。それだけかという、現実直ぐに役に立つといふことを標榜して居る。この二つの両極端の間でやつて居るんぢやないですか。

三木 それというのは、これは学問論になるかも知れんが、つまり日本に於ける理論というものの考え方が違うよ。理論というつまり何か昔の学説を本で覚えることだといふような考え方があつて、実証的な基礎から理論を築き上げて行くといつたようなものが本場の理論だといふような、つまり現実から理論を築いて来るといふことが本場の理論的な態度だといふような考え方が足りないですよ。だから現実と理論とがしょつちゅう非

常な距離にあるわけですよ。だから役に立つという場合には現実には追隨してしまうし、理論的という場合には現実から離れた、何か昔からの問題をいぢくつて居ればいいというようなことになるのです。

菅井 どうも今学校のやり方が本末転倒して居るんぢやないかと思うんだ。概論から先に入るということは意味ないんだな。そうぢやないですか。僕は間違つてますかね。高等学校でも概論をやつて、大学に來ても概論をやる。實際の研究というものとは逆なんだ。スペシヤルな問題を突つ込むことによつて普遍性を獲得して居る。だから理論というものはそのう所に現場との繋がりがチャンと出て来る筈なんだ。經濟の問題だつてそこにあるんぢやないか。それをやらないで、普遍性の浮いたような問題を持つて來て、何十年同じような概論をやつてもそれで学生が本当にヴィヴィッドなも

のに實際に自分で作り出して行く世界というものを味わうことはちよつと出来ないんぢやないかというような感じがするな。

もつとクリエーティブな、例えば機械なら機械一つ造るというようなそういう製作を通してやる。或いは經濟なら經濟事象の一つの現象に就いて深く探求する。そういうことをかなりグループ的な作業でやらせるというような行き方を取つたら、もつと生き生きとしたものが出来るんぢやないか。

大河内 そうですね。

菅井 そのことを僕は非常に前から望んで居るんですが、今の大学ではちよつと無理かな。

大河内 法經關係は学生の数から言つてもちよつと無理かなと思いますけれどもね。併し今お話が出たような現場教育というようなことですね。それはやはり非常に必要だと思ふんですがね。社会科

学系統にしても、つまり一年で概論をやつて、段々特殊講義をやつて三年で卒業するわけでしょう。悪く言えば引繰返つて居るわけですね。ですから学生は興味を持たないんですよ。例えば経済現象なら経済現象でも興味を持たないで、第一何も知らない。

三木 ああいうつまり概論から始めて特殊研究に移るといふうなやり方は、第一に決まつたものがあると言ふことを予想して居るわけでしょう。つまり概論というものはチャンと決まつたものだというような：随つて暗記的になり、発見的探究的な精神というものをなくしてしまうんですよ。なくすように出来て居るんですよ。

菅井 そういう点はやはり学制改革などでも考えて、教授要目の改正でも考えて、もつと徹底的にそういうことをやらないと、やはり新しい大学のアレというのは出て来ないんじゃないですか。僕

はそう思うんですがね。

大河内 もつと現場を見せるということは広い意味でやる必要があるんじゃないですかね。例えば経済原論というようなものを一年で聴いても経済とは何かということはちつとも分らないですからね。例えば貨幣論というような講義があつても、貨幣現象というものは分らないです。

貨幣に関する学説はえらく頭の中に入つても、貨幣というものは實際どう動いて、現実にどういう機能を持つて居るかというところは少しも具体的に掴めないです。だからひどい場合になれば、銀行論という非常に単位の大きな講義があつても、小切手も知らなければ、為替なんというものも見たいこともないというような学生が實際調べれば非常に多いんですからね。取引所というような講義があるんですよ。取引所と見ることのある者は幾らもない。ですか

らそういうことはザラにあると思うんですがね。

菅井 理科関係、工科関係はひどいものですよ、物理なんというような講義などは何も現実を知らないでやって居るし、殊に機械とか、電気工学とかいうものになると、現場のことは殆ど知らない。唯模型とか五十年前の古い機械でやっている。ところが、工作機械の工場に飛び込んで行けば其処に問題は幾らだつてあるんですよ。其処に非常に総合的な問題があるんだ。

そういう問題を掴んでから、それと睨み合わせて教えれば相当生きて来るんですよ。これを実際にやって居るのは海軍ですよ。海軍兵学校、機関学校の教育というものは、僕は何時か推奨したんだけれども非常にその点よく行き届いて居ると思うんだ。その代わり教授の方が大変なんです。つまり軍人の方の必要な問題を提出する、それに就いて教官がまたその理論的なことを教える、そのや

り方は十分ぢやないですけどもね。絶えず現場と理論を教えるのが結び付いて居るんですよ、それですから話がびったりするんですね。例えば弾道学といつても黒板に書いて話をするのではなくて実際の問題がちゃんと出て来るんです、そうであつて初めて問題がはつきり掴めるんですよ。そうして居て愈々本格的な理論になるんですね。そういう味わいが、ちゃんと出て来る、そういうことが今の日本の教育に非常に足りない。何処でも同じことぢやないですか、哲学だつて唯の思弁の学だと思わないんですがね、どうですかね。

危機と大学

学生層の自主性の喪失

船山

哲学だつて問題はやはり生活とか現実とかから端緒を開いて行かなければ駄目なように思いますがね。哲学そのものは抽象的なものであり、そ

してそれは大切なものであるけれども、出発点はやはり現実にある。新しい哲学というものは現実から生まれる。逆に抽象的なものから出発すると、いくら現実の問題を扱ったところで発展がなく、新しい現実も古い哲学の中に包み込まれてしまう。

さっきの学問と生活というかそういうものを結び付けるといふ場合にそのための組織とか機構は何か今と別なものを必要とするように思うのですけれどもね。

菅井 今の制度だけでなく……

船山 つまり働きながら勉強する、ある程度学問したら社会生活に入つて、それから又学問に帰る、これは現状とは随分離れた考えだろうけれどもそういうことが是非必要ですね。

富田 そのやり方は軍隊ではやってますね。

船山 陸軍大学校だつてそうですし……。例えば勤

勞奉仕というようなことでも、学問と密接に結びついたものもあつてよいのではないかと考えられます。調査や技術的なことをもつとやらすべきだと思います。学問が仕事に結びつく半面、仕事そのものが知的であることが必要です。

三木 やはり現実の問題を学生に与えて居ないと思ふんだ。例えば今日の国家が当面している問題を、経済なり法律なり、哲学、何でもいい、与えて、そうして其の代わり決まつた答案を要求するのでなしに答えは自由でいい、どんなことを言つてもいいからと言うので、課題を現実から取つて与える、そうして自由探求の精神でやる。つまり今の教育は決まつた答えしか予想してないような、やり方なんです。試験というものは大体そうなんだけれども……。

菅井 始めから答えは決まつて居るんだ。

三木 そうぢやなしに、問題をいま当面して居る問

題から与えて、そうして答えを発見して行くといふようなやり方が必要だと思うんだ。

菅井 そういうことを一度やって置けば、どんなことに当たってもやって行けるんですよ。

三木 一体学問上の指導者というものは問題を発見し、問題を与える人なんだ、答えを出す人というよりもそうなんだ。本当の指導者のな大学教授というものは、やはり問題を学生にどんどん与えて行く人だと思うんだ、答えを教える人は本当の学問上に於ける指導者ぢやない。

菅井 やはり国家と大学とがどういふ関係にあるべきかというようなことを唯講義するんぢやなくて、そういう具体的な問題を通して発見させて行くというような行き方に行けば僕は余程学生が生き生きしてくると思うな。

三木 そういうことに就いては自分達で実証的に研究出来るんですよ。問題は幾らもあるし、又材料

を集めようと思えば簡単に材料を集めることが出来るんですよ。それがつまり何か決まった問題になればこれは昔から本を沢山読んで居るものが勝ちだから……。そういうやり方なんですよ。

大河内 今実際の学生の気持ちから行けば、自分等が一生懸命生き生き勉強することが国家の役に立つという意識が十分強くないんですね。邪※【氣】にならんように勉強するとか：

船山 学校に入つて居るのが何か悪いことのような感じを与えられて居るんぢやないかと思うんですがね。

大河内 確かにあると思いますね。

菅井 僕が昔教えた者で今大学の理学部と工学部に行つて居る学生に昨日会つたんですがね。やはりその感じを漏らして居ましたね。

三木 これは学生ばかりでなしに、一般の日本のインテリの状態なんだ。インテリが自分の自信を

失つて居るんですよ。これが非常にいけないことだと思ふんだ。国家に取つては非常に大きな損失ですよ。つまりインテリがやはりもう少し自分の仕事及び使命に対して確信をもたなければならぬ。学生ばかりでないと※【思】うんですよ。

菅井 全体として自主的な気持ちがなくなつたですね。自由主義排※【斥】もいけれども、※【自】分の個性というか、自主性というか、その喪失というものは恐るべきものですね。これは何とかもつと回復するようにしなくちゃ問題が片付かないと思ふんだ。

今のどんな問題でも、昨日会つた学生が、私は大学の理学部の学生ですが、理科で今度卒業する、そうするとどうせ教授達のセクシヨナリズムがあるから、私などは大学に残れない、それで街頭に出て研究も何も出来なくなる、こういう女のような気持ちなんで、私は、そんな自信のないことで

どうするか、君達の先輩でも相当そういう苦勞をした人間も居るのだ。それから国家の要請に依じて行かなくちゃならん人間も居るのだ。そういう人間が實際どうやつたかということを君達考えたことがあるかというような話をしたのですが、實際そういう自信が非常になくなつて居る。だから目標は自ら失われるんですね。それに対して又もう一つは教師がそういう自信をなくすような教育をして居るんじゃないかと僕は疑うな、實際。これは吾々にも言い聞かせなければならぬいんでしょうが、非常時というような意味をもつと徹底的に、何かこういう事実がこうだつたというのでなくて、身を以て現実がどういふ困難にあるかということを示せると思ふんだ。それだけの張切つた決意を以て教壇に立つ教師が居れば、そこで動かされる者は動かされると思ふんですがね。

三木 やはり本当の危機意識が足りないんですよ。

どういふ所から来て居るか知らないが、日本の国民全体が或いはそうかも知れんけれども、危機意識が足りないですな。

菅井 国家に徴用されると言うんだ。どうせ吾々は徴用されるんだからと。併しどうせ徴用されるという感じに僕は非常な恐れを持つな。實際徴用されるのは、徴用される中で問題を持つことが出来るか出来ないかが問題なんだ。それはやはりそういう学生を導く教師だけでなく、社会全体がそういう点で非常に意識が不鮮明なんですね。これは結局三木さんの言われるように社会の問題になって来たんだ。だから学生独りを責むべきぢやないんですよ。

大河内 それはそうですね。

菅井 それは翼賛会だつて戦わないんだから、戦わないで退却する。

三木 個人的な言葉で言えば積極的な戦闘精神とい

うものが国民全般に漲らなくちゃならないと思うんだ。そういう戦闘精神があらゆる方面に於いて弛緩してはいけないと思うんだ。ところが何かやはり弛緩して居ると思うんだな。

菅井 萎縮しているんだな、弛緩していると同時に。

三木 萎縮して居た奴なら緊張するかも知らないけれども弛緩した奴は中々緊張させることは難しいね、伸びちゃった奴は。(笑声)

菅井 両方ありそうだな。

大学院制度及び

再教育の組織に就いて

大河内 さっきの生活と学問との結び付きという点、あれはどうですか。再教育の組織というものを考え直すという必要はないでしょうかね。成人教育でも何でもいいですけども、職業に一度出てそれから一定の期間を経て又キッチンと規定を踏

んで元へ戻ってやるというシステムを作るんですね。

三木 一旦出て、会社なり社会のあらゆる方面に於いて働いて居る人間は、今度は実際に自分の才能を現実に証明するわけですからね、その時にその職場職場に就いて優秀者を再教育するというシステムはどうしても必要だと思うんですね。

菅井 総力戦研究所¹というものが実はそういう目標で出来て来たわけなんです。やはり優秀な人は相当進めるらしいんですね。その中で問題を突込んで行けるらしい。だからやはり陸軍大学或いは技術将校に科学学校というものがあるように、やはり先程もそういう話があったが、兎に角日本の中核体を作るにはそういう錬成は必要ですね。

三木 だから現在の大学院というものは研究所にすっかり附属さしてしまつて、別に今の大学院の

1 1940.6内閣に設置された

代わりに再教育の機関を作るべきだと思うんですよ。

大河内 今の大学院というものは確に文科と理科系統では違ふかと思いますが、従来は大学としては邪魔物扱いにして居たんぢやないかと思うんですがね。不景氣の時には失業予備軍ですね：（笑聲）：…いっぱい溢れて居つて、今みたいに幾らか景氣のいい時はカラッポですからね。彼処を何とか考え直して今三木さんが仰つた様な形に組替えて行くということですね。各会社や官庁で相当調査の専門の機関がくつ付いて居りますね。併しこれは色々な制限があるでしょう。それを寧ろ破つて、そういう所に入るべき優秀な者を大学院的なものの中に、もう一度連れ戻して、もう一度やり直すということが必要なんじゃないですかね。そうすれば教師の方もそれに圧倒されて又勉強が進むという事にもなると思うんですね。

三木 だからやはり教師だつて時々一年位遊ばして、責任を以て研究させるといような制度がなければ随いて行けないですよ。

菅井 それは高等学校の教師にはあるんですよ。あるんですけども、それを本当に生かして使う教師諸君は少ないですね。

船山 今もあるんですか。

三木 あります。併しそれは単に休養だと思つている。

菅井 そうして昔の古臭い大学と同じ講義を聴いて帰る。それぢややはり無意味なんでのどの部面でもやはり何か一つのテーマを以てやる。それは教員だけでなく、技術者にも大切ですね。今の技術者はやはり或る一つの会社なら会社に行くはずと其処で習慣性になつて、新しい問題が出ててもそれを突破だけの意気がなくなつてしまうんですよ。だからそういうのをもう一度盛り返すのには

やはり相当いい機関を作つて置いてやらなければならん、今の大学のシステムをその俣やつて行くということは僕はどうかと思うんですがね。

三木 だからつまり教授だつて結局今のような風にやられて居ればマンネリズムに陥るより仕方ないですよ。

菅井 大学の教授、助教授、そういうのを勉強させる所も必要なんだ。アメリカなどではアインシュタインやヘルマン・バイエル¹が行つて居る数学の研究所²があります。それへ大学の教授、助教授連が行つて勉強するでしょう。本当の意味の大学院制度が出来て居るんだ。

富田 アメリカあたりの大学では三年に一遍とか五年に一遍研究の余暇を与えるシステムがあるらしいですね。

1 Hermann Klaus Hugo Weyl (ヘルマン・ワイル) アメリカに亡命したドイツの数学者
2 アメリカのプリンストン高等研究所

三木 これはドイツ辺りでもやって居るでしょう。何処でも大抵やってますね。

富田 慶応義塾でも今までやりたくてそれがやれないで居たんですがね。最近大きな寄附があつて、その金をそちらへ使おうというので、これからやり出すことになるんです。あれも本当に必要なことですね。

三木 それでなければ新しい問題を発見することが出来ないですよ。これはつまり新聞記者が毎日論説を書いているようなもので、結局駄目ですよ。

船山 教授だつて一生ブツ通し教授をやらねばならない訳ではないでしょう。偶には学校から出て社会人としての生活を体験し、再び学※【問○園】にかえつて来ることも大いにいいと思いますね。

学問の効用と権威福沢先生の
学問論を中心として

三木 大分いろんな学問論が出たですが、学問論と言えば慶応ぢや福沢さんが学問論を書いて居るわけですがね。だから何かそういう福沢先生の学問論に關聯したようなことで少し話をして見たらどうかと思うんです。

菅井 福沢先生のは実学主義でしょうね結局。それはやはり先生の生活と学問との結び付きというものゝを相当深く考えられたものなんぢやないかと僕は思うんですがね。

富田 あの福沢先生の時分の所謂学問に対する考え方理念と言いますか、実生活から遊離したものが学問だという風に考えられて居たんぢやないですかね。

三木 それまではね。

富田 それを引繰返して、兎に角庶民の生活そのものに学問があるということを言い出したのが福沢先生の新しい学問理念の提唱だという風に……

三木 それはそうでしょう。やはり今だって学者らしいということはなるべく現実離れがして、役に立たないことをやる人だという(笑声)ことになってますよ。

菅井 これは常識としても、学者自身もそう理解してますよ。科学のための科学というようなことを主張するけれども、この科学のための科学ということは元来学問の自主性というものが問題だったので何も現実に関に立たないとか、そういうことを言うために持ち出されたんじゃないんだ。

三木 科学のための科学というような考え方を破ったのが寧ろ近代科学だと思うんだ。学問のための学問というのは古代のギリシャの有閑階級のメタフィジックですよ。それを破って技術とか実践とかいうものに結び付けた所に近代科学の覚醒的な所があるんですよ。だから理論というものを履き違えて居ると思うんです。なるべく現実から遊離

したもの程理論的だというような考え方が多いんじゃないかと思うんですよ。

菅井 それにやはり日本人は福沢先生の時代だけでなく今でも職工、職人氣質、或いは現場に行くというようなことが如何にも大学に残ってやって居るということより下だというような観念が多過ぎるんじゃないか。だから先の学生の話などもそうなんで、大学に残れないということが自分が学問から見離されたと考える、そういう行き方はどうしてもやはり打破らなくちゃ駄目だと思う。

三木 その点に於いてはやはり敵性国家ながらイギリスなんかは立派ですよ。兎に角イギリスあたりで自然科学でも経済学でもその他の社会科学でも、兎も角劃期的な仕事をした人はみな或る意味に於けるつまり銀行家とか何とか實際生活に入つた人ばかりですから、やはり私は実生活の中に立つ人が自分達も学問をやるのだ、大学教授位に負

けずにやれるのだという、寧ろ新しいことを自分達こそ発見出来るのだという信念を持つということが必要だ、そういう信念というものは学生の間から植付けて置けば、銀行に行っても何処へ行ってもそういう信念で勉強して行けば余程進歩しますよ。ところがやはり学問は大学に残った人だけがやるのだ、会社へ行つてしまえば自分達は関係ないんだというような考え方が一般にプリヴェール【prevail支配している】して居る。それがいいないんぢやないかと思うんだ。

菅井 そう。そういうことが又一面官学の尊重というようなことにも非常になつて来て居るので、私学と官学のことを少しやろうぢやないか、どうですか。これは非常に問題ぢやないかと思うんだ。

富田 福沢先生が学校を樹てて青年を教育しようという考え方ですね。従来の学問教育というものはそれを修めた者が常に政治的指導者階級になる或

いは官吏とかそういう風な政府の中に立つて仕事をするという観念があつた。それを先生は吾々の学問というものは被治者階級としての学問だということを言つてますがね。治者階級に対する被治者ですね。其処に立つて行くのが吾々の学問の理想だという風に言つてますがね。これはどうですか。

三木 まあ治者階級、被治者階級ということを決めるのは難しいかも知れんけれども兎も角どんな所へ行つても学問が必要であり、学問が出来る、又学問上の大発見をやり得るのだという、そういう考えですね。例えばメンデルの法則というのが有るが、メンデルというのは大学教授でも何でもなく、坊主をやりながらああいう研究をして自然科学に於ける大発見をやつたわけでしょう。そういうつまり向学心を養うということ、これが所謂科学する心を国民に植付けることだと思ふんです

ね。そういう風に誰でも学問が出来るのだという自信を学生に全部与えて社会に送り出さなければいけないと思うんですよ。

菅井 そうですね。それはもう一つの例を挙げれば、ロバート・マイヤーというのはオランダの東印度会社のお医者さんですね。エナジーの保存の原理¹、丁度今年で百年になるが……。それから同じ頃にやはり同じプリンシプルの土台を築き上げたイギリスのジュール、あれはビール製造業者ですよ。それがやはり金儲けしながら勉強をやったんだ。そういう面がやはりもつとあつてもいいんじゃないですか。働きながら学問それ自身を一つの使命として感じて居る。そういう態度が今足りないな。

大河内 同じことで経済学の方を引合いに出すと何

1 Julius Robert von Mayer (1814 ~ 1878) はドイツで、今でいう熱力学の第一法則。

ですけれども、例えば古典派の経済学の最高峰であつたといわれるリカードですね。非常に抽象的な書物を書いた人ですけれどもね。その商売は取引所の仲買人です。終生それで通して仲買人として非常に体系的なものを作り上げたということとは相当考えていいことだと思いますね。それから例のドイツのリスト、丁度今年本が出て百年目ですけれども、あれでも大学の教師を勤めたのはほんの一年か半年で後は虐待され通して、方々放浪しながら一種のアジターですね、その中から生まれ出たものが未だに生命を持つて居る。その後継者のドイツの歴史派の経済学者の連中が教壇に立ち籠もつて、プロイセンから教授の称号を奉られてから以後、歴史派の経済学は衰退する（笑声）という大体の成り行きだと思ふんですがね。

菅井 どうもそういう傾向がありそうだな。

三木 今日転換期とかなんとか言う以上は、つま

りそういう一つの気魄を国民全般、殊にそういう部面に働くインテリゲンチヤに植付けなければならぬと思うんですよ。だからそういう本当の差迫った転換期の意識というか、危機意識だね、そういうものが足りないんだね。何か転換期と言いながらやはり学問でも何でもこれまで通りのことをやって行けばそれで済むのだというような呑ん気な所があるんじゃないですか。

菅井 だから今学問がどうなければならぬかということなんだね。その考え方が割合少ないですね。やはり皆の考え方に習慣性が非常にあると思うんだ。転換期は常識を突破の時期なんでしょうな。

三木 どうだ、船山君、学問論でも一席弁じたら……(笑聲)

船山 ……学問論じゃないけれど、實際役人や団体の首脳会社の重役などは大体本を余り読まない。従つて下のものの勉強にも理解はなく遊んで居て

も何でもないが本でも読んで居れば敬遠される。従つて考え方の根本は学生時代のままで。いくら革新的なことをいっても、学生時代を自由主義の風潮の中に育つたものは根本の考え方は自由主義であり、いわゆる社会科学の洗礼を受けたものはやはりどこかにそれが残つて居る。之は仕方のないことであり、又自由主義やいわゆる社会科学にも採るべきことは色々あるのだから、それをもつて居ることはいいことであるが、根本の考え方は変らねばならぬし、又本当に勉強すれば変え得ることだ。然るにそれをやらない。考え方は昔のままでいいと思つて居る。学生時代に身につけたものをもう一度考え直して見ようとしなない。いつまでもそれをより所にして居る。それが駄目になればすつかり駄目になるような気がするんだな。もつと創造的に、古いものが駄目になれば新しいものを産めるような教育が必要ですね。

官学と私学とに就いて

私立大学改善の目標

菅井 今の私立大学の問題ですね。これは余程難しい問題だと思ふんですがね。

三木 これは官界新体制というようなことにも関係しますね。つまり、官界新体制を本当にやるためには、やはり大学の官私の区別をなくしてしまわなければならんと思ふんですよ。ところが、やはり今ぢやセクシヨナリズムとか、閥とか、官庁に行けば学※【閥】で抑えて居る、だから私学の者はそんな所には行かないという風になつて居るでしょう、ですから官界新体制というものをやることは官学私学の差別をなくする一つの大きな動機になると思ふんですがね。

菅井 面白いことに、非常時になつてから此の数年來、官界、特に技術官だけを僕は申し上げるので

すがね。その方では私学出が相当入つて来て居んですよ。そうして其の区別は全然なくなつてしまふ。今はそういう傾向が非常に出て来ましたよ。だから事務系統の方にもつとそういう点の新体制が【新体制を】布かなければならないと思ふんですね。つまり技術官系統は割合やり易い、足りないんだから。それが本格的に官界新体制として確立されれば、その点で学生の方にも一つの励みが出るし、勇氣も出て来るんじゃないかと思ふんだ。僕は何時もあるのは学生がやはり帝大というもの第一に置く意識が各私立大学に多いんじゃないか。慶応なんかには殆ど見られないが、一体そんな感じが非常にします。

三木 やはり何か一目置いたという気持ちで、卑屈な精神が私学の学生にあり過ぎる。これであつてはいけないと思ふんです。

菅井 例えば或る大学はチャンと大学と書いて、(手

真似で）ここに斯うなつて居る。それを隠して歩いて居るといふような意識が私はどだいおかしいと思うんだ。もつと自信が持てないだろうかといふような感じがする。自信を与えない社会も悪ければ、そういうことをやらしている学校も問題だと思うんだ。

三木 教授だつてもう少し自信を持つべきだと思うんだ。

菅井 最近の前に比較すれば進んで来たけれども、もつとその間の関係を解消するように出来るだけ早くしなければならぬ。

大河内 具体的例を出しては悪いですが、慶応とか早稲田とかの場合は割合にその学校出身の者が教師になつて居るでしょう。けれども他の私立大学は応援を頼んでますよ。その応援は何処から行くかという、帝大などから行つて居る。特に法

科などはひどい。高文¹ということも関係するんですがね。だからどうしても官学尊重といふようなことはそういうシステム自体から出て来ると思うんですがね。

三木 実際そうなんだ。例えば私立大学同士の教授を頼み合うといふことは殆どないでしょう。これは僕はもう少しやるべきだと思う。例えば法政の先生に慶応から頼みに来るとか、早稲田の先生に法政から頼むとかいふようなことは当然やつていいと思う。ところが私立は他から頼むとすればやはり官立から頼む、これでは励みにならないと思うんですよ。

菅井 やはり僕は私学の水準を上げる上に教授陣の整備ということにもつと苦勞して欲しい。それにはやはり待遇問題なども相当関係して来るし、理

1 戦前の高等文官試験、いまの国家公務員1種試験と司法試験のようなもの、合格者は東京帝大出が圧倒的だった。

科系統ならば設備の問題が関係して来るし、そうでなければ勢い掛持ちが多くなってしまうんです。それが結局官学の振興にもならないんだ。官学の人達が私立大学に内職に行つて居る。勿論官学の方の待遇改善も絶対必要ですよ。これは私は

調べたんですが、官立の方の大学助教授の平均俸給は千八百円、月百五十円ですよ。こんなことがあるものかと思うな。こういう平均の待遇でそうして学者に齒を食いしばつてもやれというのは無理だと思うんだ。清貧に甘んずるといふ美しい世界は勿論必要だと思うが、同時にやはり経済条件というものを相当裕にして、安んじて研究出来るという雰囲気を日本が作らなくては嘘だと思ふんだ。そういうことが官立が悪いと又私立がそれに影響されて、割が悪くなるんだ。これははつきり言つてもいいと思うんだけど、大体私の所で統計も取つてありますから……。これは私は重大な

問題だと思うんだ。パスツールなどはフランスのあの時代にそういうことを極言したんですね。内職は絶対に止めさせるといふことを政府に建言して居るんですよ。こういう勇氣を持つて建言する、輿論を起こすことが必要だな。

三木

そういうことを口にするのは福沢先生の精神とは反するかも知れんけれども要するにどんどんそういうことを言うのが福沢イズムだと思うんだ。ところが日本の学者は経済問題に就いては沈黙する、インテリの全般にそういう意識があり過ぎる。そのためにインテリの地位も向上しないといふのは随分あると思うんですよ。ですから大学の地位向上のためにはつまりインテリゲンチヤの自己主張といふことをもう少し全般的に社会的にもやらなければならぬと思うんです。

菅井

同時にインテリがこれだけのことが出来るといふ実践力を養つて行かなければ……それも必要だ

と思うんだ。

富田 根本的な問題として大学を国家の手でやる方がいいか、全然政府の手から切離してしまうのがいいかという問題はどうか。

三木 結局今は自由主義時代のような大学はあり得ないんだから、大学としては全部国立というか、官立にして、その代わり研究所というものは独立にやつて、これは全部私立でもいい位だと思うんですがね。

菅井 研究所のことが出ましたが、学校の方は全体として国家の大学としてはやはり官立がいいと思いますかね。研究所のほうはやはり三木さんの言われるようにそういうものから離すか、国立にしても相当自由な余裕を与えて置かなければ研究出来ませんね。例えば会計法規なんかありません。これには非常に縛られるんですよ。人事のやり繰りというようなこともかなり難しいです。

三木 研究費の捻出だって出来ないですよ。

菅井 そういう点を自由に運営出来るようにするには、やはり財団法人或いはもつと広く言つて特殊法人組織の研究所というものが是非必要だと思ふんです。

三木 大体そういう意見ですがね。私立大学を向上させるためには結局国立にした方がいい、その代わり私立大学は今持つて居る研究所の方に力を注いで、慶応なら慶応の大研究所を作るといふような方向に結局進まなくちゃならんのではないかと思ふ。

菅井 官立と比べて私立大学で足りないのは研究室がないということ、或いは研究室が非常に貧弱なことですよ。大学は勿論ですが、例えば予科¹などでも、高等学校へ行けば一部屋持つて勉強出来る

1 この場合私立大学の予科のことだろう。戦前の学制で、旧制高等学校に入れないものは大学に行くのに、大学の予科（高校に当る）から入るといふことになっていた。

ようなことが理科系統ではあるんだ。私立などでは絶対にないですよ、そういうことは。これは寄せ集めだということからも来るのでしょうか、専任の人だつて少ない。こういうことはやはり予科

本科全体を通じてもつと研究室というものを重んじてやるか、或いは研究所を分離するならその形で研究員としてやらせるか、そういう行き方をずつとやって行くのがいいんじゃないかと僕は思いますね。これが今非常に足りない。だから私立

にはいい先生が行かないですよ。はつきり申しますとね。そうして勢いブロック制になつて来るんだ。自分の学校を出た人を使う。その方が安く使えるから、そういうことになつてはいけないんですよ。大学の権威というものを本當に付けて、国家の研究としてやって行く限りは、そんなことぢや駄目だと思うんだ。そうして先程も言われたように人事交流をぐんぐんやる。これは悪い意味

での日本の特長で、人事交流をやらなくて自分の所の卒業生だけを使う。

三木 これは一つは封建的なセクシヨナリズム及び温情主義だね。随つて或る意味では学者の世界ほど自由競争のない所はないでしょう。他の職業はもつと激しい競争にさらされて居るんですよ。うかうかしていると叩き落されてしまふんですから。ところが大学という所程自由競争のないものはないと思うんですね。

菅井 自由主義というようなことが言われながら、最も自由競争のない所は大学だな。

三木 所謂自由主義的な自由競争はいけないけれども、本當の競争というものがなければ進歩はしないですよ。

菅井 フェアプレイがちつともない。コソコソと研究室やその同じ自分の卒業した大学に論文を出せば博士になるんですからな。そういう行き方ぢや

学位問題というようなものも相当再検討する必要がある。そうでなくては学問の権威が生まれませんね。

学位制度の改革

推薦制度の復活

三木 学位は前のような推薦制度の方がいいと思う。

菅井 僕もこの間話したんですよ。お役所で学位をどうするか、一体大学にのみ学位の自由※【権】を与えて置くのがいいか研究所にも学位の自由※【権】を与えるのがいいのか、やはりどうしても今のような日本の状態じゃ博士というものの価値は生まれませんね。こつちの※【「口」か、「召」がつぶれたように見える】惜しみぢやないけれども、実際そうなんだ。

三木 吾々でもなりたければ何時でもなるがね（笑声）。併しそんなことはやはり別問題として、何

と言つても学位は推薦制度にすべきだ。推薦ならば凡ゆる所から推薦出来るんですよ。大学に推薦権を与えず、国家的な推薦委員の機関を作つて、その代わり会社の重役でも何でも推薦出来るというような制度にして、それは論文というようなこともいいけれども、論文ということになると、唯論文を書いてそれで済めば後はやらないというようなことでも出来るし……

菅井 そういふのが多いですよ。

三木 そうなんですよ。それから力があつてもその時は他の仕事で忙しくて書くのが面倒臭いというような人もあると思うんだ。色々のことがあると思うので、やはり昔の推薦制度にして、国家的な推薦機関を作ることによつて学問の権威というのが進められると思うんですよ。

菅井 だから、その場合、学位の問題に就いてオリジナリティーというものを再吟味する必要がある

る。学位はオリジナリティーを重んずると言うけれども、今オリジナリティーを重んじて居るかな、かなり問題だと思う。

三木 つまりオリジナリティーということの意味を再検討する必要がある。

菅井 僕はそう思ってますがね、例えば理科・工科系統で長い計算をしたものを十も書けば博士になりますよ。少し趣向を変えた計算で顔負けするよ。うな長い計算をすれば博士になれるんだ。計算がないとどうも博士にしないらしいんだ（笑声）。

三木 オリジナリティーというものは結局影響力とか刺戟力だと思うんだ。その人のやった※【仕】事が他の者に※※【刺戟】を与えて行く。そうして何かを創り出させるというようなことがオリジナリティー、そういうものならば、どんな小さい仕事でもいいと思うんです。そのものが完成しなくてもいいと思う。他人が仕事を完成してもいい

ようなもので、本当に何か新しい方向を与え、その方向によつて物を生産させる。学問上でも或いは技術上でも何でも生産させるもの、これがオリジナリティーというものだと思うんですよ。そういうような一つの觀念に立たなければ、今ぢや結局オリジナリティーとは何か、と云えば、沢山本を読んでうまく折衷したと云う事でしょう（笑声）というと言い過ぎかも知れませんがね。

菅井 同感だな。

三木 つまり偉い昔の大学者の揚足を少しづつ取つて……

菅井 そうして自分はちつともその水準を上つてないんだ。

船山 経済なんかでどうでしょう。今の現実の経済問題の研究によつて博士になったような人は居るのですか。

大河内 実際問題ですか。

船山 最近色々な人が何か非常に細かい問題に就いて学位を取って居るように僕等に思えるんですけどもね。

大河内 実際問題がやはり多いですね。非常に具体的に……

菅井 今までのやり方だと所謂書齋派だけが徒に学位が多くて、現場にタツチして居る人は勢い持てなくなるね。これはどうしても破らなくちゃならないですよ。

大河内 唯学位論文に出たものが、これが学位論文だと言われて、ああそうかという位の程度で、それが何も影響しないんですよ。

三木 全然影響しない。

菅井 今までの日本の学位論文を集めて、これが世界の文化にどれだけの寄与をなしたかということを考えれば自ら分ることだ。中には相当いいものもあるでしょうが、寧ろ推薦された博士の方にい

い人が居るんじゃないか。

三木 昔はそんなに矢※【鱒】に推薦しなかったですよ。昔は夏目漱石のように推薦されて断つたというようなああいう面白い人が居たけれどもね。

菅井 兎に角僕は推薦制度は非常に賛成ですよ。強力な国家機関によって推薦をやる必要がありますね。

大河内 私は長老の先生から聞いた話ですが、推薦制度は非常に慎重にやっていますね。随分熟慮して、個人的にもその人の人柄を知って居る。

菅井 第一論文を書かなくても学問の経歴というのは判断出来ると思うんだ。

三木 一般的な社会的効果に於ける——社会的というよりも、学問上に於いてもそういうもののインシアティブということがやはりオリジナリティーですよ。

大河内 さっきの官学と私学の問題ですが、昔の

明治時代の官学と私学の色程今はないでしょうね。

三木 不可能なんですよ。自由主義社会に於いてこそ初めて可能であつて、自由主義社会が行詰ると共に、昔のようにはつきりした私学の特長を発揮するということは出来なくなつて居るのですね。

富田 しかし私は学問教育のことを全く政府の手に委ね切つてしまうのは、どうかと思いますね。小さな例ですが、この間文部省の維新資料編纂局を閉鎖するという話を聞いたのですが、あれなんか政府でやつてゐる一つの研究所ですがね。予算の関係が成り立たんからというので、仕事を中途半端で放り出してしまふんでしよう。彼処で出して居る出版物を読んでいる者はまるで維新の所まで行かない中に中絶されてしまふ。あんな馬鹿なことはないですよ。

三木 やつと緒に付いた所でしよう、あの仕事が。

菅井 先程言い落としたのですが、大学の経費というものは特別会計なんでしょう。あの特別会計はなぜやつたかということは、あれは少し調べて戴くと分ると思いますが、昔政党政治の時にそれを防衛するためにあの特別会計を布いたのでしよう。そうぢやないんですか。

大河内 よく知らんですが……。

菅井 今ぢや無意味なんです※【3字判読不能】ういうことがあつたために今費用の捻出が非常に窮屈なんです。そういう点も新しく考え直して、殊に私学全体を官学にするというような企図がある場合には会計法規というそのものをもつと新しくやり直す必要がある。

三木 第一機密費を持つてないのは大学だけでしよう。他の官庁は莫大な機密費を持つて居るけれども、大学は持つてない。

1 名前がかすれて不明だが発言の順から見ても、

大学の動員問題

学問と政治との関係は？

大河内 私はこういう問題を一つ持つて居るのです
が、どうでしょうかね。学校つまり教師の立場と
して学生を教育指導する職務と、それから自分自
身研究活動をするという、そういう別の分野と、
それが今特に両立しなくなつて居ると思うんです
よ。

三木 それは殊に勤労奉仕とか報国団とかいろんな
ものが出来るに従つて益々困難になりますね。

大河内 それもありますし、先からお話のあつた、
例えば帝大の教師が他へ講義に行くという風なこ
とまで加えると本当の意味で落着いた研究活動の
時間というものは一つもないと思うんですよ。そ
れはそれで教師が勤まつて居ればいいのだと言え
ばそれまでの話ですけども、やはり研究活動が

継続出来ないような教師は教師としてもストップ
ですから、その両方の間の調和の問題がやはり制
度として……

三木 だからそこにやはりドイツの賜暇制度とい
うようなものが必要ですよ。それは仮に今のよう
な状態で行けば大学教授の質というものは非常に
低下するでしょう。吾々外から見てもあれぢや勉
強する暇はありませんよ。今の国家の要請に応え
て行くには。ですからそこに学問の方から言う
と考えなければならぬ大きな問題があると思ふん
だ。

菅井 それは全体の大学の動員問題なんです、結
局。つまり今までの大学の動員の仕方というもの
に一つの無理があつたわけなんですから。実は外
国のいろんな例を見るとやはりそうぢやなくて、
或る部分は残して置くのですね。或る部分の相当
重大な研究をやつてゐる、そういう人達はそこま

で引出されないんですね。こういう点は考え直す必要があるんじゃないか。

三木 動員の場合には熟練工がどんどん遠慮なしに初め動員されたでしょう。あれと同じことだと思っんですよ。大学に於いても、つまり教授の中に於いても報国団とか勤労奉仕とかいうものにもっと打込んでやる人があってもいいと思うんですよ。併し特定の人にはそういうことに全然巻込ませずに研究をやらして行くというような、そういう意味に於ける動員のシステムというものも考えなければいけないと思う。そういう意味に於いて大学ばかりぢやない、国民全体を如何に使うかという使い方をもう少し研究する必要がありますね。

菅井 そうですね。そういう点と関係するでしょう、結局。

大河内 そうです。

学生 学問と政治との関係について何かお話し願えないでしょうか。

菅井 学生は政治に関与すべからずというような問題でしょうね。

三木 唯、政治というのは何かということになると

……

菅井 そうなんだ。今動いて居る政治に矢鱈に学生の眼を向けて行くということがいいかどうかということに就いては、僕は懐疑的ですがね。それよりももっと高い政治理念というか、学生が法科だけでなく経済とか理科系統などで、特に理工系統などでもっとそういう点の把握をしつかりさせるように※※【指導】してもらえばいいんじゃないかと思うんだ。

三木 それにはやはり大学の学問として一番欠けて居るのは政治学だね。政治学というものの程内容に於いて貧困なものはないんじゃないですか。これ

をもつと発達させるように考えて行く、同時に凡ゆる学生に高い意味に於ける政治理念を把握させるということが絶対必要だと思ひますね。

菅井 一年ばかり前、学生が政治に参加すべきかどうかというようなことを大分僕は新聞で求められたんですが、とうとう書かないでしまつたんだ、あの時と現在とは余程様子が變つてますがね。併し現在では僕は政治に関心を持つことは重大だと思ひますがね。

大河内 そうですね。

三木 妙な政治運動に利用されることは絶対いけないだね。

学生 純粹な意味に於いて政治というものに科学性を与へ、文化性を与えるものは大学の存在だと思ふのですけれどもそういう問題で何かないでしょうか。

菅井 大学だけぢやなく、全体のインテリの職分で

しようね。特に大学が重大な役割は勿論持つと思ひますがね。併しそれには實際はもう少し難しい問題がありそうだな。そうぢやないですか。というものはこの問題など實際はもつと言論の自由がなければ駄目なんです。それを許さなくて何だかんだと言つても始まらないんだ。

三木 国策樹立の上に於いてもヨーロッパ戦争に對する見透しとか日米問題の見透しというものをもつと自由に討議させなければ国策が立たないです。

菅井 やはり或る程度國民の自由な討究というものを許して、その上でやつて行くということが必要だと思ひますね。これは官吏として言うべきかどうか知らんけれども、僕は一國民として言いたいな、もつと公明な、もつと明るい、それこそ明朗な一つの新たな世界というものを学生の中に与えて行かないと……

三木 本当の創造的なものはあり得ないですよ。

菅井 だから勤勞奉仕だと苦虫嘔潰したような顔をしてやって居て、本当に歎喜力行団¹ぢやないが、喜んで仕えるというような気持ちが何処にもないというようなことぢや実に淋しいことだと言わざるを得んな。国家のために憂えるよ、正直に言つて。それにはやはり個人の相当の自覚というものをその中に与えるような導き方が重要だな、どうしても。

緊急時局と大学の使命

純粹研究と国家的指導者の養成

学生 三木先生、国家と大学との關係について何か結論づけて戴きたいと思いますが。

三木 国家は大学を重んじ、大学は国家を重んず

¹ ドイツのナチス政権下にあった活動で、ナチの宣伝を兼ねて多様な余暇を演出した。

るといふ精神に徹すればいいわけでしょう。国家が大学を軽んじ、大学が現実の国家の当面している問題を回避するような態度ぢや困るわけなんでしょう、結局。

学生 歴史的に見て今までどうだったでしょう。

三木 歴史的に見れば、大学が存在理由を有している間は何等かの意味に於いて、明治時代に於いても自由主義時代に於いてはあれでよかつたんだから……。

学生 どういう役割を国家の上に於いて果たして来たのでしょうか。

三木 やはり国家の必要とする人間を作つて居たわけでしょう。その必要とする人間の種類なり、性質なり、理念が變つて来たということぢやないですか。つまり自由主義時代には自由主義時代に要請されるような人間を兎に角作り出して来たわけでしょう。併しそれではやはりいけなくなつて来

たわけなんだ。併し勿論私なんか自由主義が全体的にいけないというわけじゃないんです。自由主義のいい所はもつと生かさなければならぬし、まだまだ日本では生かされるべき方面は多いと思うんですがね。併し兎も角も全般的な考え方が、自由主義に留まることは出来ないわけだから、そこに違つた国家的な要請が出て来て居るわけでしょう。大体これまでの大学教育から言えば、明治初期には指導者を作つて居たと思うんだ。ところが大正位になつてから資本主義社会の安定というか、一応の發展と共に、今度はサラリーマンタイプ、所謂官僚とか会社社員とか、そういうものを作つて来たと思うんですよ。併し今度は再び指導者教育に変わり、而も新しい意味に於ける指導者教育に變つて行かなければならぬ、こういう風に思うんですがね。国家が大学にそういう任務をはつきり自覺させ、又大学もそういう任務を自覺

すれば学生なんかの意気も大いに昂つてくると思うんですよ。やはり学生諸君にもまだまだサラリーマンになるのだという気持ちが多過ぎるんじゃないですか。新しい意味に於ける指導者になるということ、指導者と言つても何も唯ブラブラして居るわけでなしに、人間が数人集まれば必ず指導者があるわけですから、そういう意味に於ける指導者教育にならなければならないと思いますね。国家の要請に應えるという場合に大学がまだまだそういう觀念に達してないんじゃないかな。やはり何か今直ぐ間に合う、或いは国家の政策に悪く言えば追隨する人間を作ればそれでいいというのが国家の要請に應えるという意味だと思つて居る。そうぢやないと思うんです。国家の必要とする指導者を作ることが、即ち大学が国家の要請に應えることだというように考えが變つて来なければならぬ。要請に應えるということを直ぐ何

か現実に行われて居る政策に間に合うというか、矛盾しないというか、対立しないというか、そういう人間を作ることだと考えるから、段々卑屈な人間を作るような危険があるわけですね。

菅井 時局便乗ということがこの頃言われますね。

その点で少し横道にはいるようだけれども、つまり、※【6字不明】うのがあ※【3字不明】ね。科学研究は※※※【国家に】役に立たなければならぬ、今までそういうことを考えないで研究をやつて来た。そういう問題に就いて新聞や雑誌に色々議論されて居る。これは特に大学の教授が議論して居る。そういう議論を読んで見て感ずるところは、一つの例を言うと、俺の研究は十数年間或る研究をやつて居たと、ところがその研究は、本当は自分が行詰つた筈なんですがね。その行詰つたのを行詰つたと言わないでそれを切替えて国家の役に立つようにしようというような非常に下卑

た時局便乗主義が流行るんだ。僕はそういう大学の教授の存在というものはかなり考えて行かなければならぬと思うんだ。十数年間身を粉にしてやつた研究が国家の役に立たないとは断じて思えないんだ。身を粉にして純粋な探求をやつた。其処から寧ろその人が行けなかつたというなら、其処から本当の問題が突抜けられなかつたということがその人の責任なんだ。そこを言うならいいが併しそういう研究は駄目だということにはならないと思うんだ。

三木 或いは失敗したということをはつきりして、こういう風に失敗したと結果を出せば非常に大きな進歩なんだ。

菅井 ところがそう言わない、そういう時局認識なら僕は非常に下卑た認識だと思うんだ。もつと大学教授というものは今の国家の役に立たなくとも将来の国家をになう純粋な探求をやっているん

だ、そういう決意でやって欲しいし、学生諸君もやって欲しい。そうして今の水準にマッチするような研究ぢやなく、或いはそういう人物を作るんぢやなくて将来の大きな目的に合うような人物を作る、それが三木さんの今言われた指導者だと思ふんだ。そういう行き方に教授も学生もして行くということが是非望ましいと思う。その意味で近頃學術の純粹な研究というものがいけなくなつたなんということを言う学者諸君が居ることは非常に心外なんだ。もつと自立性を持たなければ駄目ですよ。

三木 あまり単純に自己否定し過ぎると思うね、総ての者が。これはいけないと思う。やはり自分の生きて居るということに何か意味がなければならぬですよ。戦線に立つて弾丸に中つて何時死ぬか知れない非常に多くの人間が居るんだから、それだけの覚悟さえあれば相当のことが出来ると思

うんですよ。

菅井 御召があれば何時でも国難に赴く。併し与えられた時間は全力を挙げて自分に与えられた純粹な研究、それがどんなに現実に縁遠くとも、信念を以てやって行くならやれると思うんだ。それだけの覚悟があつたら日本の學問はもつと上がるね。

三木 やはり自分のやって居ることは決して無駄にならないという確信ですね。それはやはり必要だと思うんだ。

富田 どうも大変長い間誠に有難うございました。

会場 レインボーグリル
日時 昭和十六年十月二十一日

底本：『三田新聞』（472号）1941.11.5

民族の哲学

三木清

高坂正顕：1900～1969、鳥取県出身、京都帝国大学卒、西田幾多郎門下生、京大教授、戦争擁護の論陣を張り戦後教職追放、戦後の「期待される人間像」をまとめる。

記者 最近民族々々ということを頻りに言います。

事実、歴史を創ってゆく大きな原動力が民族にあることは誰の眼にも明らかなのですが、日本で民族についての理論的な考察がなされたということを含んで余り聞いたことがありません。ただナチス流の「血と土」の理論が直訳的には言われている状態だろうと思うのです。偶々、高坂先生が民族の哲学を最近御研究になつていますので、この

機会に少なくとも問題を提起するだけでも結構です。僕たちの俗耳に解る程度の言葉で、そういう問題を取上げていただきたいと思うのです。

三木 いや、俗耳にわからないようなことはないだろう。（笑声）高坂君にひとつ話を伺おう。僕は今日は質問役で君に話して貰うために来たのだから。

高坂 民族について特に研究してみたわけでもないのですけれども、近頃の歴史哲学ではあまり民族のことを問題としていなき過ぎると思いますね。特にオーソドックスの哲学がそうなのです。しかし現在いろいろな問題が政治的な性格を示している以上、民族の問題がどうしても無視できぬものになって来ているのは事実です。特に、歴史の動力——即ち歴史を動かしてゆく力は何かということになって来ると、どうしても民族が問題に

1 これにダイナミックとルビがある筈だが底本のママ

なる。もともと歴史というのは民族の興亡の跡を尋ねるものだと言われていたことも更めて考えてみなくちゃならないのではないか。

実際、民族の問題には文化の問題とは異なる顔があると思われるのですがね。文化は次々に継承されて行くと考えられることも出来る。しかし民族はそうは行かないのではないですかね。民族は滅べばそれっきりになって了うのですから。ここに歴史の危機に際して、民族の問題の方が文化の問題に比して一層真剣な問題を含むという結果になって来るわけなんです。

それぢやその民族というものをどう考えるのが正しいか。僕はですね。余りナチス張りの民族の考え方というものは、どうもちよつと困ると思うのです。どこがが一番困るかといえば、民族を単に自然の側面から考える。所謂「血と土」ですね。しかしこれでは民族は、自然的世界の一自然物とい

うことになって、歴史的世界に於て歴史を創造するものという意味が稀薄になる。民族というものを考えるときには、歴史的世界に於ける主体的なもの、つまり歴史を動かしてゆくと共に、場合によつては歴史に因つて亡びもするというような意味のものとして考えてゆかなければならない。その点、所謂民族理論と言われる類のものは、血の純粋性だとかなんとか言つて、実は自然科学的概念を神話化している。いかにも自然科学的な基礎を有っているように見せかけながら、実は極めて政治的な概念なんだ。無論、それが政治的な意味を有っているということが悪いのではない。政治的、政策的概念である以上は、それはやはり歴史の中で考えなければならぬ。歴史の主体としての民族とか種族とかいうものは、單純に「血」だとか「土」だとかいうことだけでは考えられないと思う。もつと歴史を創つてゆくものとして考え

なくちやならない。

それと共に、更にこのように歴史を創つてゆくという場合、内容を抜きにしてしまった政治というものは実はないんで、何かの意味で文化的な内容とどこかで接触する。文化を内容として有つとか、媒介として利用するとか、いろいろな形で接触してくるわけです。つまり民族ということを考えて行くと共に、民族をただ客観的な自然的概念として考えるのは間違いで、主体的な内容というものと絡合せて考えてゆかなくちやあ民族というものは十分に決定ができないだろうと思う。

そのように民族というものは、文化を創つてゆく主体ということになるが、その創つた文化が、逆に民族の生活を限定し返して来ますから、民族が歴史を創つて行くと共に、同時に逆に歴史の中で民族が創られるということにならなくちやならない。つまり民族というものは、現在においてもつ

ねに新しく出来つつあるんだ、ということになる。私は近頃、痛切にそういうことを思うのです。例えば日本民族という場合、将来を負う日本民族は実は現在新たに出来て来つつあるのである。もし新たに発展しつづあるのでなければ、将来性がないわけです。だから今までの、ただ過去から譲られたものを其儘現在に保持しているだけのものとしての民族の考え方ぢやいけないし、又そうかといつて、現在民族が出来つつあると言っても、それは今までの過去の歴史から無媒介的に出来てくるのではないと思う。歴史的世界では、何ものも忽然として新たに生ずるということはないのだから。やはり過去を地盤として新しく出来つつあると見なくちやならないぢやないか。

で、このように民族が現在出来つつあると考えること、このような考え方が許されるものか、どうかということですがね。そんな点から、三木君の

お考えを伺ってみたいと思うのです。

三木 民族を歴史的なものとするのはヘーゲルなんかの歴史哲学もそうだが、今日の民族という思想には自然主義的な見方が強調されている。ところがそういう生物学的な見方の出て来たことが、現代の一つの注目すべき特徴でないかと思う。今日の民族論はヘーゲルなんかの民族精神というような思想に繋がらないで、むしろゴビノー¹、チェンバリン²などの生物学的な考え方に繋がっている。そこに何か重要な現代民族論の特質があるのではないか。それがどういう意味をもっているかを究明しておく必要があるんじゃないか。

高坂 その点をまず究明しておくのがいいと実は私も考えていたのです。さっきいったようにゴビノーにしても、チェンバリンにしても、民族とい

- 1 Joseph-Arthur de Gobineau (1816～1882)
2 Houston Stewart Chamberlain (1855～1927)

うものを考えるとき、それをなにかはじめから先天的に決まったものとして観ている。特にアーリヤンの系統が最も優秀で、他の民族は生まれながらにして劣等である。これはゴビノー自身がフランス革命の後に出来て、ルソーの「人間は生まれながらにして等しい権利を有っている」というような考えを否定してね、人間には生まれながらにして支配するものと支配されるものがある。それを民族にもつていつて、支配する民族とされる民族があるというように決めて行つたものなのです。それによつて白色人種が他のものを支配する当然の権利をもっているということを基礎付けしようとしたものなんです。つまり自然科学的、生物学的な種と人間の種、即ち白色人種とか黄色人種とかを同じように考えた。そして自然科学的な仮面のもとに、民族的、政治的支配を当然の権利として権威付けしようとした訳なのだ。対

外的にはそうだし、また対内的には貴族政治の立場を基礎付けようという意図もあるね。そういう点からゴビノーやチェンバリンの自然概念としての民族概念は新しい将来性のある民族理念ではないと思う。特に現代において深い意味をもつべき筈のものぢやないと思う。尤もそれと相並んで、恐らく原始民族への関心、また爛熟した文化というものに反対する民族理論、さてはニーチェ的の考えというものもあり得ると思う。これは別個の問題なんだけれど、生命力の強い民族というようなものを考えてみなければならぬ。これはまた別に考えてみる必要があると思う。が、ゴビノーやチェンバリンというのは、はじめから十分に批判されているもので、これは新しい意味をもつよりも、むしろ否定されるべきものの、古い形のものではないでしょうか。

三木 ところが現代において実際に一種の生物学

的な民族論が政治的意味を帯びて出て来ている以上、ともかくその歴史的必然性を考えてみなければならぬのではないか、というのは、例えば今、君の言ったとおりに人類の自由平等というような当時の思想にたいして、人類不平等というような思想を基礎付けるためにあの生物学的な民族論が出て来た。それはつまり一種の反動思想なんだね。そこにナチなんかの思想が結びつくということは……。

高坂 当然なんだよ。

三木 前の世界大戦に負けたドイツとしては、ともかくそういうところに現代的意義が生じて来たといえるね。

高坂 それはいいんだけど。

三木 もう一つこういう点はどうかね。個人においても先天的素質というものが問題になる。先天的に低能な者や或いは天才としての素質をもつて生

まれる人間があるというように考えられる。そうすると、民族というものを考えた場合に、やはりそういう区別が考えられはしまいか。

高坂 しかしそれはどうか、それだけでは民族が天降りになつて来るので、結局非歴史的になつて了う。単に自然概念には尽きないものが民族にはないだろうか。民族については単に先天的素質を考えれば、民族の歴史性は無意味になる。尤も現在、民族の間に価値の差別があるということは認めなければならぬと思うが、しかしそれを生まれないがらの血の相違に帰せしめるのは困りはしませんか。

三木 それだけぢや困るが、民族については素質優劣ということが全く問題にならないのかね。

高坂 ただですね。素質と言つても民族の場合は個人の場合と違つて過去からの歴史的な文化の集積、或は遺産、或は結末という形でアンラーゲ

【Anlage】が形成されるのだから、素質そのものが既に歴史的なのです。尤もそれに対して、さつき言つた新しい生命力、新しい文化形成力としての民族の強さというものを十分考えなくちゃいけないと思うけれど、先天的に高等民族と下等民族とがあるというふうに極めてしまつたら、歴史は決定論か運命論になつて、結局歴史でなくなりはいませんか。

三木 先天的という意味は、個人にしても自分の親というものがある。つまり遺伝だね。その遺伝において、獲得された素質が遺伝するかどうかということは、ひとつの問題であるが、仮に獲得された素質が遺伝するとすれば、親がこういう職業で、こういう環境に生活したというようなことによつて、子供の素質が決められて来る。そういうように、民族の素質というものも決められて来ると考

1 素質・素養・天分・同封、インストール

えられないかね。

高坂 それはそうなのです。僕の言うのはそれなんです。自分には両親があり祖先がある。そして自分がそれから決まって来るということは、つまり

歴史的に決まって来るということですね。随つて現在の自己と言っても、決して自由に決まるのではなく、現在にも過去から決まって来ている部分がある。その事は認めなくちゃならぬ。しかしそれは、歴史の発端から天降りのに民族の優劣を先天的に認めようとするのと大分違う。先天的な相違を仮定してしまえば、歴史の将来まで過去から定つてしまう。それでは歴史的創造も、飛躍もない。

三木 ところが自然的素質というようなものを考えないとすると、民族論というものはかなり力が弱くなつてきはしないかね。自然的なもの的重要性を認めないで、それがただ歴史的に形成されるも

のと考えるなら、階級というようなものでもそうなので、民族主義的な歴史論というものの根柢が弱くなりはしないかね。

高坂 しかし、僕の言うのは、歴史は自然というもののなしに成り立つているというのぢやない。ただ歴史の中で自然というものを考えてみたときに、その自然というのは歴史の材料とか、手段とかいう意味を相当もつのですね。自然は歴史の可能性とも言えると思う。自然は歴史の可能性として歴史を創つて行く材料となりうる点がある。少なくとも自然的なものでもつて、人間が完全に極められてしまえば、結局、運命論か決定論か唯物論の類になつて、歴史ではなくなる。だから自然というものを歴史の中で認めるなら、いわゆる歴史的天然として観なくちゃ具合が悪い。民族的素質を単に先天的にではなく、歴史的天然というふうに観てゆきたいと僕は思うのです。

三木

それは賛成なんだ。ただ、そういう考え方を徹底してゆけば、どうして民族でなければならぬいかという根拠が弱くなりはないか。どうして特に民族というものを重んじなければならないかという点をもう少しハッキリして貰いたいね。

高坂

レクチャーみたいで気がひけるのですがね。民族を限定するのに色々なメルクマールが挙げられている。普通に血だとか土だとか、即ち血縁共同体とか地縁共同体とか、また運命共同体とか言語共同体とか信仰共同体とか文化共同体とか、いろいろな特徴で決めようとする。しかしどれで決めようとしても十分決められない。例えばユダヤという一つの民族を考えた場合、どれを持つて来たつてピツタリとは決らない。血も相当混合している。住んでいる場所も違う。いろいろな運命の中に抛り込まれている奴もある。どうもそういう風で決まらない。民族というものは、いくら外か

ら決めようとしてもピツタリとは決められない。民族とは何かということは客観的な概念でもって外から決めようとしても決まらない。無論今挙げたどの概念も民族にとつてみな必要ではあるので。必要だけれども、しかしどれも十分でない。不十分である。しかも民族というものはやはり極まって来なくちゃならない。してみると民族は外から決らないのだから、ただ内からのみ決定されるということにならなくてはならないか。それは結局、民族は自分で自分を決める、自己限定性に民族の主體的の意味がある。民族というものも主體的である以上、自己限定的でなければならぬ。或る個人を外からいくら決めてしまおうとしても決らないように、民族というものも外からいくら決めようとしたつて決らない。民族は自分で自分を決めなければ決つてこない。つまり、民族というのは主體的な概念だということになる。

ところでそのように主体的概念としての民族というものは、現在動いてゆく、歴史の中心に立つ筈のものである。過去の滅んでしまった民族なら、外から決めてしまってもいい。また外から決める

より外に道はない。しかし現在生きている主体的な民族は、自分で自分を決めなければ決まらない。それで、民族が自分で自分を決めようとする時、そこに国家という意義が実現するのではないか。つまり民族が十分に自己限定的な形をとったときに国家的民族といったような形になると思うのです。するとね。そういうふうな主体的自己限定的なものを無視しては歴史というものは十分には考えられないという現象をどう考えてゆくかという問題なんですよ。

三木 その内から決めるもの、自己限定的なものを自然と考える。民族の思想というものは、従来の歴史論で無視されて来たものを重視するところに

意義があるので、もしそれを歴史的に形成されたものと考えてゆくと、歴史は結局、民族からではなくて、世界史から考えられねばならぬことになるね。

高坂 そうなんです。

三木 そうして来ると民族の思想の根拠が逆に弱くなつて来るといふ自己矛盾が生じはしないかね。

高坂 そいつは自己矛盾というよりも、民族というものの本質に基づく両面なのですよ。民族は確かに世界史からのみ考えられるものなんだけれども、しかし逆に世界歴史を動かしてゆく中心に立つ主体的なものがなければならぬ。それが民族なのです。民族の抗争というものがなければ世界史というものは十分には考えられない。こう言つてもよい——民族には自己矛盾的な性格があるので、世界を無視しては民族が成り立たないと共に、民族を無視しては世界は成り立たない。世

界が動くというときに、民族というものを通じて動いてゆく。

三木 それは相互限定ということになるが、そういうことではやはりどうして民族というものが特に問題になるかがわからないのではないか。そこは例えばスピノザがいったように、「総てのものは、自分の存在において固執しようと努力する」つまり自己保存だね。自己保存の本能というような一種の自然主義的な考え方を基礎にすることによって民族の思想が力強くなるということにならないかね。

高坂 自己保存の意味はある。

三木 民族は歴史的に作られてゆくものというならば、究極のものは結局世界ということになりはしないか。ヘーゲルの立場は民族精神に止まらないで世界精神になった。

高坂 民族と世界の相互限定なんですよ。

三木 相互限定というだけでは、どちらが究極のものかわからない。民族は世界の自己限定として生ずると考えることができる。ところが今日の民族論は、スピノザ的な自己保存と自己発展の衝動というような一種の自然主義的な考え方が基礎になってはいしないか。例えば、今の日本においても大陸発展は日本民族の自己保存の衝動だということに説明されている。

高坂 今までの民族論、そして現在普通に行われている民族論というものもよくないと思うのだ。民族の意義というものは、単に民族保存ということだけからでは十分には基礎付けられないと思うね。それだけではなく、民族の自己保存は、他民族の自己保存と共に、広い世界という共通の場面で行われている。その中で民族の自己保存の意義を認めてゆくためには、どうもさっきの自然的本能というだけじゃピッタリしないのではないです

か。

三木 そうすれば、歴史は究極は世界から考えてゆかねばならぬことになりはしないかね。

高坂 それだけでは世界主義になるかも知れないが、世界というものを決めるのは逆に民族なんだ、逆に。だから世界というものを既に一定の形に出来てしまったものとのみ考えるのは、まだ、僕のいわゆる世界を歴史的に観ていない。動く世界を観ていない。

三木 そうすると、民族の興亡というものはどうして決つて来るのかね。

高坂 そいつが面白い問題だと思ふのだ。それはね、民族というものはそれ一つだけでは成り立たない。一つの民族が他の民族と対した場合にはじめて民族と謂える。世界中が同一民族であつたら民族でない。民族の族とか人種の種なんかということとは謂えない。民族という以上は他の民族と対し

て考えられている。他の民族と対しているという以上、どうしても交渉なしでは済まされない。その間に戦争が起つてみたり、両方に共通するような文化的なものがあつてみたりする。そういう関聯の中で民族の興亡ということがある——と考えるね。一つの民族というだけではそういうことはあり得ない。もと、民族というものは世界の中にあるものなのだから、他の民族に対する関係というものはどうしても重要な意味を有たざるを得ない。ただ、他の民族との関係というふうなものは、単に政治的な関係とか戦争というだけのものぢやないのですね。そいつを結んでゆく地盤になるようなものとして、僕はやはり文化的なものがあると思う。尤も現在、文化的なものの力は、表面に顕れたところだけを見ると、大した力がないかも知れないけれども、過去から積み重なっている文化的な力というのを見ると、東洋というものが、

やはりある共通な地盤になるようなものを有っている。現在だけを見るとそうでないかも知れないが、過去から蓄積して来ているものを見ると、それはどうしても無視されなと思う。ところが、

そうした文化というものは、やはり外的に表現され、創られて行ったものとして、客観的な意味が相当強い。それにたいして、創つてゆくのはやはり民族なんで、その創られていった文化と創つてゆく主体としての民族との間の矛盾のようなものがある場合に民族は飛躍しなくちゃならぬ。飛躍しなければ滅んでしまう。ここに民族の興亡の最も深い理由がありはしないだろうか。

三木 ある民族は栄え、或る民族は滅ぶというとき、そこにヘーゲルのいった世界史の審判というようなものが考えられないかね。

高坂 つまり、或る一つの民族が他の民族を媒介にして自分の大を成すのですよ。その際、媒介にな

り手段になるものは皆文化的な意味をもつ。経済にしても何にしても。

三木 他の民族を媒介にするというのは、その民族を滅ぼして？

高坂 そうではない。それは古い形の観方だと思う。

三木 少なくとも今まではそういう形をとつて来た。

高坂 それはイギリスが植民地政策的にやつてきた仕方なんで、そのやり方は却つて今或る行詰りに面している。植民地政策式のやり方でもつて、他の国を利用するということは過去の形態だ。

三木 君の媒介というものは、民族ではなく文化の概念が中心になりはしないかね。

高坂 そこで新しい意味の民族概念が必要だと思ふ。

三木 そうして、君の考えでゆけば、東亜民族というようないつのものが出来てくると考えられない

かね。

高坂 そのように考えるのは民族の否定だ。

三木 民族が歴史的に作られてくるものとすれば、東亜民族というような一つのものが作られてこないという根拠は？世界民族即ち人類というものが考えられて、東亜民族というものが考えられない根拠は？

高坂 そのときにね、歴史の現在の段階というものをね、即ち過去からずっと来ている歴史というものを無視してしまえば、東亜民族というものも考えられるし、或いは東亜民族とアフリカ民族をくつつけたもの、即ち黄色人種と黒色人種とを結合したようなものも考えることは出来る。しかしそれでは、過去からの歴史の動きというものを無視してしまつて、現在の諸民族というものを勝手に結び付けてしまうという形になつてしまやあしないか。現在の地盤から考えなければならぬと思

うのですよ。

三木 文化というものから考えてゆけば、東亜民族というようなものが歴史的に作られてゆくと考へることもできるし、世界民族というようなものを考へることもできはしないか。そうでない根拠は？

高坂 歴史というものは、どこかに歴史を動かしてゆく主體的なもの、即ち歴史を創つてゆくものがなくちゃならない。過去を未来に媒介してゆく意味での自発性を自分にもつものが出来なければならぬ。それは解りきつたことかも知れないですがね。又そうしたものはただ一つぢやあ主體的なものと謂えない。我と汝といった形で、他の主体に対してはじめて主体という意味をもつ。そうでなければカントの意識一般のように自然界の主体に止つて、歴史の中における主体でない。

三木 それはその通りだ。ところが歴史を創つてゆ

く主体が階級に対する階級というようなものでなくて、民族でなければならぬ理由、民族に対する世界というようなものでなくて、民族に対する民族でなければならぬ理由は何かね。階級とか世界とかいうものを歴史の主体と考える理論もあるからね。

高坂 それぢや国家という意味のものが出来来ない。

三木 国家といつても変わつてゆく。純粹に歴史的に考へてゆけば……。

高坂 純粹に歴史的に考へて行つた場合にも、歴史の現実の中に「永遠の今」というようなものが——「永遠の今」ということをよく言うだろう。こういうことはただ言葉として、あつても無くてもいいというものではなく、歴史の現実の中で生かしてみることがあると思うんだ。すると、それは時間の流れの中において絶対性を要求しうるような

ものでなければならぬ。もし現実においてそのような絶対を求めようとすると、国家の有つてゐる權威というようなものがそれではないだろうか。無論個人にたいして道德の權威というものがある。しかし、その權威というものはあるべきはず、ということに過ぎない。しかしこれが国家權威となると、事情が違ふ。かりにそれを否定しようとする者が出来来ても国家の權威はそれだけでは否定されない。却つて逆に否定する者を否定して了う。それは何んとしても国家の中に入つてゐるものにたいしては或る絶対權を有つのだ。「永遠の今」は歴史的現実の中に、そのような形で實現されるのではないだろうか。もしそう言えるとなれば、民族が自己限定的になるということは、民族が權威を自己の中に有つて来ることなんだと思うのです。

三木 個人のうちにもそのような、「永遠の今」が

実現されると考えられないか。その限り個人だって絶対的權威を有つていえるといえないか。「永遠の今」というものから考えられるのは世界史で、民族の權威というものはその世界史的使命から出てくるのではないか。

高坂 しかし、個人は他を絶対権でもって強制することはできないよ。

三木 そこに權威と權力とも區別がある。しかし民族も世界史の審判の前に立っていると考えられる。だから民族にも興亡がある。また歴史的に見ると、民族というものは他の民族と融合して一つの民族を形成し、或いは民族の聯合の上に一つの国家を創つてゆく。どのような民族も純粋に一つのものではなからう。

高坂 しかしさっき言ったように世界帝国というのは成り立たないね。

三木 ともかく現在民族というものが重んじられ

るようになったのは、従来の歴史理論にたいしてもつと自然的なものを重視しようとするところにあるのではないか。そこに従来の理性主義的な歴史論ではないけない、自然的なものを混えた一つのものが出て来る。

高坂 混えたということは、逆にいえばもともと歴史的なものを認めることではないでしょうか？

三木 マキャベリズムとスピノチズム【Spinozism】とは通ずる。そこにさっきいった權力の問題が出てくる。スピノザ的な自然権というものについてもつと考えてみなければならぬのではないか。

高坂 しかしそういったような民族理論をそのまま採用されますか。

三木 その歴史的必然性を認めて然る後に……。

高坂 しかしそれでは困りますよ。認めて然る後にどうかされて了つては。問題は其俚に認めるか、否かにあると思うのですが。

三木 その限りについて認めなくては、現在の民族論というものは問題にならない。

高坂 その限りというのは、従来の特に理性的な歴史の観方にたいして牽制の意味で認める——というような限りですがね。それならいいんですが、それ以上のことを意味するとなると……。

三木 自然主義的な民族論が出てきたには歴史的必然性というものがあると思う。そういう自然主義がもっている批判的意義を認める。しかし究極は世界史の立場から見られるので、民族主義もそういう意味の世界主義までもつて来てその中で考えねばならない。

高坂 もしそうならば、今仰ったような点の批判は私も認めます。しかし、それから上は世界主義でもいいし、個人主義でもいいということになると、はじめに民族主義を認められた意味がなくなつて来やしませんか？

三木 究極は世界主義ということになる。民族も世界史の中で考えられるのだから。

高坂 もしはじめの出発点をその限りに於てにせよ認めるとすれば、どうも僕の帰結の方が正しいと思う。三木君のでは世界主義になつて了う。

三木 そこは世界主義でいいぢやないか。

高坂 世界主義という言葉が誤解を招きますよ。単なる世界主義では主体のない世界になつてしまう恐れがある。

三木 世界というものは主体ぢやないの？世界史の主体は世界ではないの？

高坂 いや、歴史の中へ出て来る具体的な形に於ける主体でない。

三木 世界というものも歴史的に作られてゆくものとして具体的な形をとっている。世界が世界を創つてゆく。

高坂 具体的な形をとっているのは世界ではなくし

て民族ですよ。

三木 民族とか国家とかは世界史の中に現れてくる歴史的個性だ。そういう世界そのものも歴史的個性的なものでないの？

高坂 民族が具体的になつたものが国家だと思うんですが。

三木 種々の民族の上に一つの国家が考えられはしないか。必ずしも一民族一国家ではない。現に日本の国家の中には朝鮮民族などが含まれている。

高坂 今のようなお話だと、どうも政治と文化とを離し過ぎると思う。といって従来の結び付き方でいいというのではないですよ。ただ、文化的なものではなくてもいい、政治的なものだけでもいいというのは、もし現在が世界歴史の新しい転換点に立っているとするならば、それぢや具合が悪いと思うんです。なぜかという、新しい一つの時代が出来て来るという時は、やはり一つの文化、少

なくとも新しいモラルというようなものがなければならぬ。でなければ新しい世界というもののは出来て来ない。ただ政治的な運動だけでギリシャが出来たとも考えられないし、ローマが出来たとも考えられない。ここまでは政治でやったが、ここからは文化になろうとしたってそうはゆかない。現在のような時代に於ても、学問的に考えてみれば、やはり政治だけがいいとはどうも謂えないのですがね。三木君の言われる気持ちは僕に解るけれども……。

三木 しかし君の言うようにいつて来ると、民族理論というものは弱くなるな。現在の民族主義はむしろ従来の文化主義的な歴史哲学に対する批判の意義をもっているのだろう。

高坂 弱くなるのでない。あまり民族理論というものは強くなつても困る。

三木 僕も民族というものを認めている。民族とい

うものは、仮に世界語というものを創ったとしても、それが逆に分化して、それぞれの民族語というようなものに分れてゆく。そういう意味の歴史的個性なんだ。しかしその場合の民族というものは、今日の民族主義の考えている民族とは違う。どんな世界主義だって、民族は認めている。ただその認め方だ。どう認めてゆくかという問題だ。

高坂 民族というものは新たに発展して行く。現在の民族と将来の民族とは違う。民族は歴史的に創られたものから創られているのだ。その点、僕の考えは認められてもいいと思うのですがね。

三木 それは認めるが、民族は変わるというような考え方からは今日の民族主義は出てこない。

高坂 以上のような意味なら変ってもいいじゃないでしょうか。

三木 そういふのは民族主義ぢやないだろう。

高坂 ナチス流の民族理論ではないけれど、新しい

日本の民族理論とは言えないですかね。余りナチス流の民族理論のようなものを日本に持つて来られても困ると思うのですよ。

三木 それは僕もそう思っている。そうなれば、今の民族主義には賛成できないことにないね。

高坂 今の一般の民族主義はどうも賛成できないけれども、しかし、それにも拘らず、新しい民族理論が必要だと思うのです。僕の考えも、その一つの案として批判して頂きたいと思うのだけれど……。

三木 大東亜共栄圏という考えに立つならば、一つの民族と他に民族との関係が重要な問題になるね。

高坂 僕はこう思うのです。イギリスのやり方を見るとイギリスは他の民族をただ手段として使っている。だから資本主義的な形態になつてしまつたのです。尤も私はそうかといって、経済やなんか

を無視してもいいという、そんなお目出度いことを言うつもりでない。現在の民族も、ただ自分だけでは立つてゆけない。そうかといって、他のものをイギリス流にただ手段としてのみ使うことができない。して見ると、手段と媒介というものを区別するのが必要だと思う。手段とは外のものをただ物として使ってゆく場合で、媒介とは相手の主体性を認めて、それによってこっちが生きてゆこうとするような場合だ。日本以外、つまり東亜というものは日本民族に対する媒介者の位置をとる。或いはそれを多くの国を媒介としてやってゆくときに※【「1字潰れている」「逆」か?】に日本以外の国が日本によって代表されてゆく。こっちが他の国を媒介とすると共に、向こうが又こっちに代表されて来る。主権というふうなものを互いに損わないでやってゆく道がありはしないか。でない、東亜共栄圏というものは全く成り立た

ない。無論東亜共栄圏という名前はどうでもいい、他にいい名前があれば、それにしてもいい。

三木 例えば、ソビエトなんかは多数民族の聯合の上に一つの国家を考えている。そういうものと、どう違った形態が考えられるかということが問題だ。

高坂 問題ですね。ソビエトの場合は、過去の歴史というものに、現在において殆ど意味をもたしていないと思う。しかし僕の言うのは、民族に民族としての歴史を認めようとするのです。

三木 そこには、民族というものを認める以上は、やはり固有の文化とか伝統とかを認めているんじゃないかな。

高坂 手段として認めているに止まって、本質的には認めていない。どうもそういう気がしますよ。

三木 そこはどうか？

高坂 どうか知らないけれど、そういう感じがする

な。

記者 息抜きに口を挿みますが、ドイツとイギリスはいわゆる北歐民族【Nordics】^{ノールディクス}で、同じ血が流

れていますね。北歐民族主義はドイツにもイギリスにもあるけれども、現在ドイツは広域政策^{グロスラウム・ポリティク}【Großraumpolitik】からヨーロッパを中心にラテ

ン民族のイタリアと結んでやっている。そういう事実は何かこの問題に対するサジェスチョン【suggestion】にならないですか。

三木 現在の民族理論というものは、結局マキャベリズムだ。政治的な神話を創り出すために使われている。

高坂 そういうものが多いのだ。確かに……。

三木 それ以外に民族理論を考えてゆけば……。

高坂 僕のはそのつもりだけでも……

三木 いわゆる民族主義にならないと思う。

高坂 だから僕は、いわゆる民族主義でなくてもよ

い。しかし、民族主義というものの意味を十分認めなければならんと思うのだね。

三木 それは認めなければならぬ。

高坂 正しく言えばですね。民族は認めるけれども、民族主義というものには制限を加えなければならぬ。

三木 そうすると、ソビエトなんかで考えている民族論とどう違うかね。

高坂 歴史性の尊重というようなことが違う。過去の権威というようなものの意味の置き方が大分違うと思うな。

三木 各々の民族が自分自身の権威を絶対的とすれば、世界は成り立たない。何か世界に共通なものが出てこなければならぬ。

高坂 だから、単に絶対性を主張するだけではどうにもならなくなってしまう。どうもそういう行き方では具合が悪いと思う。

三木 しかし民族主義というものはこういう意義をもっているのか。民族というものは、歴史的に作られて現在する社会や文化を破って新しいものを生み出してくる根源的な自然力と考えられるね。例えば、ドイツの民族主義は、ヴェルサイユ体制を破ろうとして現れた。その民族論は一種の自然主義的なものを持っている。

高坂 そうなんだ。

三木 資本主義体制というものであつて、民族が出て来たのではない。

高坂 そいつを動かして来たのは、資本主義だけではないと思うのだ。そこが少し違うんだがね。

三木 だから、民族という概念は、政治的な意味をもっている。つまり民族主義は民族解放の思想として意義がある。これは個人の場合でも、封建的なものからの個人の解放を求めた場合、一種の自然主義思想が出てきた。現代の民族主義には植民

地的状態からの解放を求める民族主義がある。帝国主義的な体制にたいして、それを打ち破ってゆく民族の自然的な自己保存、自己発展の意欲というものが考えられる。

高坂 単に自然的な力というのは怪しいね。歴史的な自然だろう。そうでなければ態々^{むさむさ}……。

三木 歴史的な自然というだけでは力がない。草も木も歴史的な自然だからね。

高坂 しかしそういうものと繋がって中心に立つ自由な主体がなければ、草や木が歴史的な自然にならない。政治や経済に動かされるだけだったら歴史にならない。

三木 その主体性というものの根底を自然の思想に求めている。そこに解放思想の特色があるので、ヒューマニズムでも人間の自然の解放を求める一種の自然主義の形をとった。

高坂 歴史にはもっと広い、単に経済的でない場面

があると思う。その中で主体的な意味をもつもの、特に特殊的な主体があるならば……。

三木 自然的なものの根源的意義を考えなければ、主体というものは、階級でもいいじゃないか。

高坂 それぢや、さつきいったような絶対権というふうなものは出て来ない。それを認めれば国家という形になつてくると思う。

三木 国家というものも世界史の審判の前に減びることがある。

高坂 しかしそれにしても主体性はなくならないね。

三木 減びる場合、絶対性というものはどういうように考えられるか。

高坂 「永遠の今」のようなものが、歴史的現実の中出现している筈だ。でなければ歴史ではない。

三木 君のいう絶対権はスピノザ的な自然権が基礎とならないのか。永遠の今というものから考える

と、絶対性は個人だつて出て来る。ソクラテスが出てきたじゃないか。

高坂 ソクラテスは毒を服ませられて了つた。

三木 毒を服んだから権威が出て来た。

高坂 しかしその権威は大分違う。

三木 それは中途半端な考え方にならないのか。

高坂 いや歴史的現実がそのようなものを要求しているのですよ。

三木 君のいう絶対性なら、民族でなくてもいい。

高坂 違う。国家的民族が歴史的な世界から要求されるのです。実際の歴史を観てご覧なさい。国家というものを無視出来ない。とにかく現実の生きた存在なのだから。

三木 ソクラテスを殺した国家も滅んだ。民族も滅ぶと考えると、もつと厳しい思想が必要になる。

高坂 どうもそこら辺りで暗礁にぶつかるようだけれども……。 (笑声)。

三木 要するに民族主義というものは歴史の現在の

段階においてどういう意味をもっているかという、現在の帝国主義的な体制を打ち破ってゆく自然的力として、ちょうど個人がどのような隷属状態におかれても、自己保存自己主張の自然力によってこれを打ち破ってゆくというのと同じような意義を持つていると思う。そこに現代の民族主義的自然主義の解放思想としての意義があるが、それだけでは破壊的に止まって、建設的であろうとするには世界的な見方が必要だと思う。

高坂 資本主義的なものにたいして、それを打ち破ってゆくような意義が民族理論の中には確かにある。それはいいと思うけれども、しかしそのときに三木君は、資本主義的なものを単に抽象的に一般的に考えて、主体的なものを抜きにしている。単なる資本主義一般というように考えてしまわずに、それを具体的に考えると。イギリスとか、ア

メリカとか、とにかく一つ民族なり国家なりを中心にして立っている資本主義になりはしないか。民族理論はそれを打ち破ってゆく又別個の意味をもっているとは言える。

三木 資本主義的社会は世界がすべて資本主義的傾向をとることによって安定した。これからもそういうように、世界が一つになるものが出て来なければならぬ。日本だつてこれまでは資本主義ぢやないか。

高坂 だから問題になるのは、日本の中に在る資本主義を破るということになる。その点に民族ということをいう意味がある。民族的意義を抜きにしまうわけにいかない。

三木 歴史的な自然といつても、自然と歴史との対立を考えることができる。歴史的に創られたものを自然的なものが破ってゆく。破ってゆくことにおいてみずから歴史化されてゆく。そういうように

歴史化されてゆく過程において残余として残つてゆくものを自然ということができる。

高坂 残余であると共に、新しいものが出来て来る材料にもなると思う。

三木 それは材料にもなる。

高坂 そうすると、新たな歴史を創造する地盤として民族というものに十分な意義を認めなくちゃならないと思うのだ。

三木 民族の意味を認めるけれども、その認め方が問題なんだ。自然主義というものの新しい意味を考えないで、現在の民族論の意義は考えにくいのではないか。

高坂 自然というのは、歴史的自然という意味を有っておらなければならない。

三木 歴史的自然というのは一般論で、そういえば草も木も歴史的自然だ。

高坂 出来て来るには主体的なものがある筈だ。

三木 世界は主体的なものではないのかね。

高坂 しかし現実には歴史的主体として、世界を変化させているのは人間だ。

三木 逆に世界が人間を変化させている。

高坂 と共に世界を変えるのは人間だ。世界が人間を変えると共に、民族が世界を変えるのだ。

三木 民族は個人を媒介にして世界的になる。

高坂 個人を変えるのは同時に民族だ。グルグル廻りますよ。(笑声)

三木 それぢや意味がない。

高坂 意味がなくてはな。

三木 そういう議論は調法「#重宝」だけれども、弱い。実践の力が出て来ない。

高坂 弱くないよ。(笑声)

三木 そういうことで政治というものは動かない。随つて勢い偏狭になる。

高坂 理論が偏狭になるのは困る。歴史が傾斜を

有つのは現存の段階が課されている課題に因るのだ。

三木 歴史というものは一面的に動いている。

高坂 しかし自分を偏狭にしてはいけない。

三木 その一面性の本質を理解するのが物の歴史的必然性を把握することだ。

高坂 民族の自己保存というものは、ただ一つの民族だけでは問題にならない。他の民族というものがあつて、民族の自己保存が問題になるのだ。だから他の民族を認めているのだ。

三木 そうなると、民族を越えた世界というものから考えてゆかねばなくなる。民族と君のいう永遠の今との間にもう一つ世界というものを考えねばならない。

高坂 だから動くところの地盤があつて、そこから出て来るものがある。それは現在において民族という形をとっている。が、それを基礎付ける民族

理論がともかく誤っているのだ。

三木 現在の民族主義というものは、従来の自由主義にたいする徹底的な批判として意味をもっている。

高坂 僕もそれを認める。

三木 それ以上になれば民族主義というものではない。十分だ。民族は認めるけれども、民族主義は認めない。

高坂 僕もそうだ。

三木 しかし君の議論では、現在の民族主義というものとの意義が弱くなつてきはしないか。むろん理論がどうなつてもいいが……。

高坂 民族が生きればいい。

三木 民族というものは変つて行く。

高坂 そいつは国家的民族という形をもつて動く。

三木 それでは満州国というのは、あれはどうなんだ。

高坂 民族的国家という形をとつてゆくでしょう。

成長して行けば。

三木 ところが五族協和に立つ民族的国家という場

合、それは従来いわれた民族的国家の概念とはよほど違ったものになる。ともかく現在の段階において、民族主義というものは、従来の世界を批判的に否定して新しい世界を作つてゆく契機になっている。そこにそれが政治的な概念である理由があるので、自然主義というものも文化主義に対して、そういう政治性をもつた概念として特徴がある。

高坂 三木君の言われたように、民族主義というものは今までの個人主義とか資本主義とかいうものにたいして、それを否定して新しい段階にゆく否定の役割を演ずるような意味が確かにあるのだ。しかし否定だけでは足りない。否定は同時に建設というものに進んでゆかないことには意味がな

い。

三木 そうすると世界というものを考えねばならな

い。

記者 大論戦になったですね。

三木 論戦のつもりではないが、問題のありかを

ハッキリしようとしたのです。(終わり)

底本：『文藝』1941.12

文化の運命

——第4回日本評論時局研究会

松本潤一郎：1893～1947、千葉県出身、東京帝大卒、

社会学者、法政大学教授、東京高等師範学校教授

岸田国士

三木清

大串兎代夫

津久井龍雄

穂積七郎

室伏高信：1892～1970、神奈川県出身、明治大学

法科中退、ジャーナリスト。

文化の定義

記者 それではこれから始めたいと思います。お忙しい所御出席願いまして有難うございました。今晩は大体文化問題を中心に致しましてお話願いたいと思います。文化問題と云って大掴みに申しま

すならば、所謂出版文化であるとか或は地方文化であるとか、そういった問題がございますが、初めに最近科学文化とか、生活文化とかいわれているが、そういった文化という言葉がどうしてあらゆる生活部面に流行するようになったかという点から始めて戴いたら結構かと存じますがそういう点について松本先生からでもお願いしたいと思います。

松本 文化の問題はやはり野蛮人でない限り何等かのカルチュアを持つし、何等かの文明を持つ。こういうような意味で人類の生活全体からいつて一つの理念的な象徴になると思うのです。デエントでしたか、野蛮人は何も身につけて居らんけれども、文明人は着物を身につけて居る。着物だけでなく文化を身につけて居るという風なことをいつて居りますけれども、その意味ではまあ如何なる民族でも、如何なる国民でも文化的憧憬というよ

うなものを持つことは当り前で、殊にいろいろの生活面に際会すると、着物以上の文化というものをどうぬぎ合わせるかという問題に直面致します。今日の時代のクライシス【crisis】というようなものを結び付けて文化というものを考察再吟味されて来るのではないですかね。

記者 しかし、今日でも所謂自由主義文化があり、そういう文化があつて、最近では政治の面に於いても勿論全体主義の……、それに関聯して文化面に於いても文化というものは吟味されて居る。それが何故新しい課題をもつか。そこに何か現実的な要請というか、問題というか、そういったものが存在するのではないかと思うのですが……。

松本 そういう問題については、私はこう思う。広い意味に於いては、文化の問題は結局吾々の生活形態の問題に独り精神的な面といったようなものに文化というものは限定されるというようなこ

とはないだろうと思うのです。ですから生活文化ということを広くいえば、文化は総て生活文化と想うのです。唯そういったも音楽もあるし、文学もあり、思想もありますから、特に教養的なものと申しますか、文明的なものと申しますか、そういうものを文化中の文化という意味で取上げて来る。それが一番今の問題なんですね。して見るとそれ以外の方面の生活形態にいろいろ緊迫した問題が出て参ります。今いうような文化中の文化というようなものはまま子扱いにされる。或は第二、第三義的なものに陥れられるといったような問題がある所に文化の問題を殊更考えて来る。まあそういう風に考えられるのですね。

記者 然しその文化という見解が昨今急に転回しなければならなくなつた。そういう意味に於いての新しい文化というものの概念、或は原則というか、そういったものが多少有耶無耶に過されて居るか

ら文化概念というものが非常に乱雑なあつかいを受ける。という傾きもあるのではないかと思うのですかね。

松本 それはそうです。

記者 その点について岸田先生如何ですか。

岸田 どこから始めていゝか、文化という言葉の流行という所からいえば、これは言葉だけが流行することでもないけれども、やはり戦争に依つて文化が脅かされるという、そういう不安が一番基礎になつて居ると思うのです。それに対して文化の破壊戦争——文化の破壊ぢやない、建設だという議論が出たり或は戦争は文化の母体でもあるというような議論が出たりするというような所から文化が戦争と結び付けて、多くの人の関心を引き始めた。そうしてその人も自分の仕事と関聯して——仕事の面と関聯して、そうして無意識的に文化擁護の立場に立つ側から文化という言葉が

段々分派して行つて居るのではないかと思うのです。その時分の仕事は文化領域だということを改めて見直して居るというような所から来て居るのではないかと思う。それで音楽文化とか、出版文化とか何々文化という一々文化というレッテルをはつきり貼つて、僕等も一寸その点で辟易して居るのだが、必ずしも文化という言葉をつけなくてもいいようなものにも文化をつけ足して、それからこれが今仰つたように、これはまだはつきり出ないのも文化という言葉が非常にまだと思う。日本語としてそのなまであるということは当然のことだけれども、元来私の知つて居る限りでは、外国の翻訳だし、それから同じ外国語でも英語やドイツ語やフランス語の語源の、言語の概念が違うものだから、ドイツ語から翻訳して文化と言う言葉を使って居る人と英語から翻訳して文化と言う言葉を使って居る人との間に非常に大きな

開きがある。それと同じ日本語として焦点を合わせて行こうとして居る所に混乱が生ずる。これは一つの現象である。ですから文化という言葉が新しい日本語としてはつきりした概念とイメージを作って行くまでには相当暇がかかる。だから例えば翼賛会に文化部というものが出来た。この文化部の文化は一体何だというと誰も分らないのです。分らないというのは、詰り何語から翻訳した文化なんだということがあるのではないかと思うのです。それは銘々自分流に皆が考えて、文化部というものはこういうものだという一つの仮定を作って居る訳です。最初文化部というものが出来た時にも、私は文化部で何をするのかという話をこっちから聞いたんですが、これは非常に今から考えて見ると面白い返事だったと思うのだけれども、それは結局文化部を誰がやるかに依って決まるのだということだった。それは僕は一方責任を

重んずると同時に、又非常に何か妙な矛盾の気持があつたのです。それで私の考えたことは、ドイツ語でもない、フランス語でもない、英語でもない、日本語の文化というものを文化部で拵えなければならぬのだということを考えました。

戦争と文化

松本 こういう風なことではないのですか。今先生がいったように、転換期だということです。旧文化から新文化に、文化を根柢的に変えて行かなければならない。そういう意味が多分に含まれて居るのではないかと思う。今の生活文化ということになると、古い文化生活から遊離して居る点もあるし、もつと現実の生活とぴたりする文化でなくてならぬ。そういう意味があるのではないかと思う。文化を擁護されるという意味が自分自身でお考えでしょうけれども、全体の空気から見ると

と政治が何といつても優越する。或は戦争が優越

するといつてもいいと思うのですがその必要が文化に対して政治が関聯するということはいつていいと思う。経済に対しても同じである。経済を統制するという意味と同じように文化を統制して行く。そこで文化の問題が今までの民間的な、個人的なものから政治的なものに団体的なものに移つて行く。そういう意味で文化の問題が新しい意味をもつて来たんじゃないか。そこで文化の問題が単なる今まで考えられたような文化の問題でなしに、国家とか政治とか国防国家とか、そういうものと密接なる関係を持つて大衆の前に現れて来たんじゃないか。僕等はそう考えるのですが、そうではないでしょうか。

岸田 文化というものの今のあり方はそうです。唯文化という言葉の流行の原因は必ずしもそこまで認識の下に言葉があつちこつちで使われて居る

とは思えない。

室伏 流行して居るかどうか。お上がやる仕事だから、文化というと印刷文化協会というものが出来

たり、いろいろなものが出来るだろうと思うのですが、そういうのはオベンチャラ的な意味が多分にあるのです。便乗しようという気持がある。そうして文化という名前を付けたら都合がいいではないかという、そういう気持であると思う。実際に流行して居るということは相当問題だと思ふのです。

岸田 流行の信念の中にあるのですよ。

津久井 文化一般ということとは必ずしも便乗ということになるか知らんがその中に特に日本文化というような所に力点を置いてそうして日本文化の探究とか、或は発展とかいうことが一つの今日の政治的な動向に一致するものがあるのぢやないか。又今日の戦時にそれだけの政治的理由というこ

ともないでしようが、今までの西洋文化に対して日本の文化を探究するとか、広めるとかいうことが一つの意味を持つて居るのではないかと思うのです。

室伏

仕合わせなことには、今の軍人ですね。軍人が文化というものを軽蔑しない。たしかにそういう点があると思う。つまり宣伝戦が重要だということ、軍の人がよく知って居るので、文化なり思想なりというものは戦争の上にも必要であるということを知られて居るんですね。そこが非常な幸福なことで、その為に一方で国防国家といながら文化というものを尊重して行く。そういう点は非常にいいことだと思うのです。吾々が擁護しなくてもお上の方で擁護して呉れるという、今その点からいうと非常に仕合わせなことだと思うのです。それにはやはり津久井君のいったような日本文化をどういう文化に作って行くかということ

が問題ではないかと思うのです。文化の概念をどうするということが非常に重要な問題であると思う。吾々は文明というものと文化というものを一体どう考えていいかということを昔から考えて居るが、自分でもはつきりしない。言葉としては文明と文化と違った言葉があり、又どつかに違った概念があると思つて居るが、しかし、相互に関係して居るようにも見えるし、又両立しないというような考え方も成立つと思う。僕等は例えばアメリカほど高度の文明を持つて居るものがないというところが一方でいえるだろうがアメリカのような低い文化というものを持つて居るものはないということができる。古い国民であればある程どつかに文化の臭いがある。しかし、それが高度文明を持つて居る訳でない。文明と文化というものは分けることが出来ると思う、要するに今文化の問題がやかましくなつて来たというのは、文化という

ものと民族というものの、これを何か結び付けて文化を動員することが国家を動員することであり、そういう意味が非常にあると思う。同時にそれが日本の歴史の上からいうと一つの大きい変化を示すものぢやないかという風に考えますね。どうでしょう。

岸田 今文化というものに関心を持つて居る国民層の一番正しい考え方はお説の通りなんです。これをしっかり中心として文化の問題が進められて行かなければならんと思うのですね。しかし、まだ一方に於いては今のようなそれだと必ずしも政治が文化をリードするのではなくて、政治の根柢に寧ろ文化があるということがいえる訳なんです。唯まだ文化というものが装飾的なものであるという考え方を持つて居る人がありますね。相当地な知識階級の中にこれを考えて居るのではないかなと思う。今日では言葉の通念を唯不用意に使つて

居るのだと思うのです。

松本 そういう意味で私は去年でしたか文理科大で学生の討論会があつたのです。そこで文化と政治だつたと思うのですが、そういう問題を中心と致しまして、十五六人朝から夕方までに研究発表をやつたんです。それが結局二つに分れるのです。二系統にそれは文化が究極目的であるという見方、つまり文化の装飾説以上に文化至上主義、政治はそれに役立たなければならんという系統です。それが二割位、それから文化は政治を補強するものであるという見方——仰る点になるのですが、これが先ず七割位、曖昧ながありました。が、これは非常にその問題についてやはり今日のインテリの見方を代表し、且又割合に於いても代表して居るものぢやないか。こういう風に感じたのですが、私は無論文化は国破れて山河ありといえますけれども、やはり民族なり国家なりの原動

力として培養されなければならんし、又眞の国家であれば発展的な文化を育成するようなものでなければならん。こういう考え方でありますけれども……。

岸田 そこで私は疑問を持つて居るのですが、疑問といつても私の解釈ですが、広い意味の文化と狭い意味の文化、これを混同して居る所があるのですね。

松本 それはありますね。

文化の危機

室伏 そこを一つもつと掘りつめて行つて貰いたいですね。つまり問題は二つあると思うのです。どういう文化を作つて行くかというような積極的な問題、もう一つは政治と文化という問題で、どちらが根本的な問題かという、そこをはつきりさして行かなければならんと思うのです。僕等の考え

は結局政治よりも文化が根本だと思つたのですが、それは時代に依つて違ふのです。国家の危機時代にはあらゆるものを国家に役立たせなければならんというように見れば、政治というものはつまらぬもので、国家でさえも興亡は常なもののであるが、文化の方は遙かに重要なものだと思つたのですが、民族的の危機を前にすると、文化は従属していいという考えです。そこを一つ皆さんで討議して貰いたいのです。

岸田 僕は広い意味の文化を——まあ口でいえないのですが、結局一つのものになり、民族を価値づけるもの、これが文化だと思ふ。価値づけるということは如何なる国で価値ありとするかということに依つて文化の性格が出て来ると思ふ。或る国ではこういう文化を以てその国の価値とする。その価値標準が国によつて違ふ。そこに……。

室伏 平時ならばそれでいいと思うが、例えば、ベ

ルギーも一つの文化を持つ、スカンジナビアも一つの文化を持つ。こういう闘争の時代になって来ると今までのものは皆やつつけられてしまう。そういうことはいって居られないのではないかと思う。文化は結局最も偉大なものであつても、それは政治に所属しなければならんと思う。こういう場合にはそこに問題があると思う。文化一般の問題ではなくして、今日に於けるこの日本に於ける文化の問題なのだから、その点から論じないと間違ひが起るのではないかと思うのです。

岸田 私はその点からも論じられるような意味でいつて居るのです。例えば現在の日本の国力というものを考えてどつかに弱点があるとする。これはやはり日本の今まで育成した文化というものの弱点がある。つまり今の日本の国の要求して居る一つの力というものはこれは文化的でなければ育成出来ないし解決出来ないという意味で僕はいう

訳です。例えば僕はこれも常識的な議論なんだけれども結局倫理的にも弱点を持つて居る。科学的にも大いにまだ弱点を持つて居る。それからもう一つの現在の日本の弱点というものは民族として品位が非常に下つて居るといふこと、これは倫理的な意味と同時に、倫理というものに対する感覚が非常に鈍つて居ると思う。これが大陸に於いて指導民族としての資格が疑われる点だと思う。そう考へて来れば今日の日本の文化というものを考へて、而も今日この戦争をして居る民族としての弱点というものは結局文化そのものの欠陥なんであつて、文化というものを戦時状態に適應するように変へて行くのではなくして、原則的な文化を持つた国家ならばやはり戦争にも強くなければならんという立前を日本の文化は作つて居る訳です。これが僕の考へ方です。フランスが戦争に負けたといふことは、フランス文化は非常な高度なもので

あったが、やはり不健全だったということで僕は解決したいのですがね。

室伏 しかし、文化というものは高度になって来ると、やはりそういう弱点を持つのではないですかね。高くなればなる程……。

岸田 それは僕は今までそういう風に解釈したのです。忘れられないという洗鍊——洗鍊の極度はデカダンスだ。所がその洗鍊ということは国家ということを考えないでいったんで、国家ということ

を考えたならば、適度の訓練が必要なんです。その訓練というものは海洋的な気温が最も健康にいいかという、そうではなくて、刺戟温度というものが必要になって来る。この刺戟温度を与えない文化だったのです。こういう風に僕は解釈するのですがね。

室伏 しかし、文化というものを根本的に文化本位という立場から考えて行くと、国家民族というも

の生存発展と両方しなければならんと思う。例えばギリシヤなんかは一番の発展期は植民時代なんだから、所謂植民時代で、文化の点からいえばよくなかったと思う。それがギリシヤ文化の一番発展期はプラトーン、ソクラテス、アリストテレスというような時代になって来ると、国家的には植民時代が終りを告げて衰退期になって居る。どこの国でも同じだと思う。東洋文化にしても、東洋は非国家的精神が多いのではないかと思う。非常な穩遁的なものになって、非常な深みはあるが、發展的思想からは遠くなつて来るといふ、老莊の思想にしても無論のことだし、宗教的なものでもそうです。文化を文化本位に考えると、僕は民族國家の發展ということはどうも考えられないのです。今の起つて来て居る文化の問題というものはその国家にどういふ文化が役に立つかということ

が根本の問題になつて来るのではないかと思う。

岸田 文化というものは、今までそういうものではないかなかつたと思うのです。ですからこれはやはり国家意識といえますか、そういうものが結局今までの前例ですね。ギリシャにしてもフランスにしても、国家意識というものと文化というものとのが遊離して居つた所にあるので、それは前車の轍を踏まないように文化というものはそういう前例に依つて宿命的にそういうものだということを考えるのは歴史を短く考え過ぎるのではないかと思うのですがね。

室伏 しかし、どう考えても進軍ラッパが最高の芸術だという風には考えられないですね。そこに文化そのものと民族の発展というものと食違ふ所がどつかにあるということは僕は考えられるのですかね。

松本 私はその問題についてはやはり強大な国家を

なさしめるものは文化の過程であるし、それから国家の問題というものを私はダイナミックに見なければならぬと思う。例えば或る時機に国家が強大であるというばかりでなく、総てに互つて強大であるという、所謂動的な国家ということを考えて来ると、どうしても文化の過程というものを必要とするし、而もそれは国家的標準に結び付けられもするけれども、しかし、それが先にプロジェクトされますが、一定以上にだけ役立つて、それ以上の発展には貢献するかしないか分らないというようなことではないかと思うのです。将来に互つて国家の強壯剤の種を蒔いて行くような文化でなければ本當の文化でないし、歴史上に於けるギリシャの文化とか、フランスの文化であるとか、又支那の文化であるとかいろいろありましようけれども、私はそれは文化のどこかに欠陥がやはりあるので、その欠陥を招来しないようにして行く

ということが文化政策の非常に重要なポイントではないかと思う。然らばそれがどこにあるかという問題になると、私は普通の文化の頹廃する、文化が冗長的に陥るとかいったような観測をして居る訳です。しかしながらそれは一つのポイント

でありますし、つまり生活の現実性を忘れてセンシャリズム【sensualism】に行く。こういう問題で誰でも分かる点ですけども、もう一つは私はこの点にあるのではないかと思う。つまり非常に高度の団体生活でありますと、団体内部の融和とといったようなことに重点が置かれて合理性をなくする。現在の問題とすると、例えば農村更生の問題なんかはどこに欠陥があるかといえ、私は合理性がない所に欠陥があると思う。農村は醇風美俗であるというが、そのクリティック【critique】を交えない繋がり、そういうような空気が却って農村更生を妨げるので、私はクリティックの

精神と、それから生活の現実を忘れないということが文化問題で留保されるならば、これは相当健全な文化が続くのではないか。こういうような気がするのですが……。

政治か、文化か

室伏

しかし、その目的を設定した文化で、民族なり民族発展ということを基本にした文化政策などで、それはやはり政治が優先する文化といってもいいですね。

松本

私はそういう意味に於いては政治の優越する文化というものは本当の文化ではないか、そうでない場合に於いて、つまりフランス破れたりということになるのぢやないか。フランス破れたりのフランスの文化というものは外の国に取り入れられて、より高度な文化を生成せしめるからお満足すべきである。こういういえますけれども、外の国

で摂取して、より高度の文化をなすものは、僕は淘汰された文化だと思うのです。総てがフランス文化ではなくして、外の国の観点で取捨選択して、その中の取るべきものを取り、取るべからざるものを捨てた意味に於けるフランス文化ということになるのぢやないかと思う。例えばギリシャの文明の問題でも、ギリシャのいろいろ喜劇や悲劇に出て来るような文化があるのですね。非常に頹廢的な宴会ばかりやって居つて、金持ちは朝から晩まで酒を飲んで居るといふような文化を仮にローマでその倣採用したならば、或はルネサンスをその倣に生かしたならば、これは到底ローマの大をなさんし、近來ヨーロッパ文明といふものをなさんものだ。こう思うのですからね。

室伏 それはそうですね。長い目で見れば一体ギリシャが世界に貢献したか。大きな大帝国を作つたローマが貢献したかといふことは問題で、随つて

文化の方が大きいのか、重大な根本の問題であるのか、或は大帝国を作るといふことが根本の問題であるのかといふことがいえるのです。今そういうことをいふべき時機でなくて、日本が発展すべき時機であるから、これは総てのものを国家目的に皆集中していいと思う。そういう意味で文化という問題も文化の立場から考えずに、国家の立場から……。

岸田 それはそうですね。

松本 その場合に於いて重大なポイントは次のような点にあるのぢやないかと思う。つまり茲に高度国防国家といふものを建設するのであるといふ、謂わば手近な目標があるのです。その問題にあらゆる文化的勢力といふものを集結せしめるということは実に必要ですけれども、同時に国家の生命は長く、民族の将来は遠いのですから、私はその点から更に次の段階に發展して行くだけの文化的

なエネルギーというものを持たせなければならぬ
いし、日本の場合に於いて当然それだけの余裕は
あるべきものである。こう信ずるのですがね。そ
こで文化的なエネルギーを使いきってしまうとい
うようなことになつては、これはどうも国家の将

来、民族の前途に対して洵に申訳がないので、百
米の競争ならばそのテープをきるまででいいので
すが、百米競争の次の又競争が控えて居ります。

その次も次も控えておりますから、そういう意味
合いの将来に互るエフィシエンシー【efficiency 有
能さ】というものを多分に持つものだし、持たな
ければならぬものですから、その見透しをつけて
行く、つまり現在の一億の人間を動員するのみな
らず、将来の百億の国民を動員するというような
意味合いに於けるゆとりのある見方をして行かな
ければならぬのぢやないかと思うのですね。

室伏 しかしわが国にそんなゆとりがありますか

ね。事実上それは出来ますか。結局国家が必要か
ら重圧されて——重圧されるのが当然だと思ふの
ですが、重圧されてその方向に文化というものは
動いて居るのではないかと思う。文化政策もその
方に動いて居るのではないかと思う。

岸田 それは一つの問題として考えていいのぢやな
いですか。つまり誰も将来のことを考えないで居
るといふことがいけないので、考えながら現実の
一つの大きな国家の要望に答えながら行く。それ
を考えないで答えて行くといふことは非常に違
うのではないかと思ひますね。無理だろうと思ひ
ます。

津久井 今でもこういうようなことはいわれるので
はないですか。国を焦土としても日本の理想を行
うといふ場合に立たなければならぬといふような
ことをいわれる場合には、一種の文化といふもの
を日本文化といひますか、日本の理想といひます

か、そういうものを非常に絶對的なものと考えて、その為の政治でもあれば戦争でもあるのだというような考え方がそこにあるのぢやないかと思うのですがね。しかし、具体的にそれを唯政治か何かの一種の形容詞だということになればそれは別問題になります、しかし、何かこれが一番正しいというものがあつて、それを行為の戦争であるということでないといつたり打ち込めない、現実の必要から文化というようなものが便宜的に左右されるといふような考え方には満足の出来ないようなものがあるのぢやないかと思うのです。

室伏 それはやはり文化人なんだよ。(笑声) 現実的な問題として軍需工業は盛んになつて行くが紙は減つて行く。それだけ政治なり国防国家の必要に依つて文化が圧迫されて居る。それは当然なんです。圧迫さるべきなんで、紙が減つたと同じように文化の外の力に依つて抑えられて行くという

ことは事実だと思う。だから今の文化というものが国防国家に非常に役に立つのであるとすれば、それをその立場から——国防国家という立場から文化をもつと擁護していいのではないかという風に考える。紙を減らさなければ日本の国が亡びるといへば結構だが、それ程切迫した問題でなくて、文化というものがまだ国防国家の点からいうと、これでもいいものだという考えが一方にやはりあるのではないかと思うのです。そういう立場から文化を擁護するのが本当ではないかと思う。

穂積 その点は先刻いわれた転換期に於ける文化政治の反省という意味をはつきりしないと一般的には納得出来ない点があると思う。今までのあり来つた文化というものが一つの国家目的から遊離して居つた現象があつたというので、そこで大きな深刻な反省と悩みがある。その悩みの中から更に次のものを創造しようという立場にあるのだから

ら、そういうことをいえば結局文化だけがその悩みにぶつかって居るのではなくして、今までの政治、経済も総てが国家目的から相当遊離して居る所に問題があつたのではないかと思う。そういう点からいえば、今日直接目的としての非常に具體的目的としての高度国防国家というようなものが出て居ると思う。若しくは今日やつておる戦争自体もそうだと思うのですが、それに更に本當の文化価値といえますか、そういう価値づけがなければ戦争の指導的なる方向というものはつきり掴めないのではないかと思うのです。唯戦争が種々の情勢からやらなければならなくなつて来たからやるのだ。やる以上は勝たなければならんということだけでなしに、もう一步向うに出て、戦争の目的は何か、今までの文化生活の領域に互つても相当政治というものがこれを強力なる統制を加えて行かなければならんという場合に於けるそ

の政治の目的といえますか、意思というものをそこに私は文化国家としての価値批判ということをして茲で根本的にやる必要があるのぢやないか。そういう意味に於いて生活文化という言葉がもう少し反省していい新しい意味のものではないかという風に私は思うのです。国民の生活というものがこれは固より国家目的に副わなければならん訳でございしますが、その生活が問題であつて、その生活は統一された一つの意思と體驗を持たなければならんと思う。その生活の一側面が即ち今までに於ける政治生活、経済生活、文化生活という風に見られた訳でございします。統一した生活を除けて外にあるものではないかと思うのです。そういう意味で全体的の再編成といひますか、政治から指導された文化ということでなしに、そういう消極的な追隨から積極的な創造に一つの意味を持つべきでは

ないかという風に思うのです。そうでありませんか何か今までの抑えつけられたというか、段々侵蝕されて来た文化生活というものの未練が一つはあって、あきらめの文化観というようなものが出来るのではないかと思いますね。

岸田 それは絶対にいけませんね。それは世界観ということから無論出るんですけれども、現在の日本人の生活観というものを確立しなければならんと思うのです。これがこんなに生活観というものがあるやふやで、寧ろ空白状態である時代は曾てなかったろうと思う。それを一つどこで立てるかということは問題ですが、これは国民自身から立て行かなければならんが……。

穂積 室伏さんこの点はどうでございましょうか。先刻いわれた現実——現実の倫理というものが一つあったというお話が出たんですが、その場合に今日の戦争なりその戦争の直接目的を戦に勝つ

ということに頑張つて行くための政治意思ということが考えられるし、そういうような今日の戦争自身が今までの行詰つた世界文化体制というものを新しいものに作り変えて行く為の戦争自身が内在的な文化要求から出て来たという見方ができないものでしょうか。

室伏 それは出来るでしょう。僕等もそういう風に考えます。つまりこれはやはり或る意味からいうと、それはいいか悪いか別だという風に私は考えて居ります。そうしてそれはその戦いの世紀だという空気なりの中から戦争が出て来た訳なんだから、戦争が始まつてからそういう世紀が出来て来た訳ではないと思う。そこに戦争の必然性があった訳です。だからそれを戦争文化という意味に考えることも出来ると思う。リベラリズムの文化が頽廃してしまつて、これに変わるものがなければならなくなつて来たんだから、そういう意味は十分

いえると思いますね。

政治の文化性

記者 問題を現実の面にまで引き戻すことに於いて、最近では特に経済だとか文化だとかに優位しての政治ということが注目されて居るのですが、優位にあるべき政治そのものが優位としての条件を備えて居らない。こういう現実的な問題に關聯して、所謂文化政策はどうなればならんか。こういう問題が中心問題ではないかと思うのですが、所謂政治と文化というものとに關聯しての文化政策というか、そういうことが割合に忘れられて居るのではないかというようなことが感じられるのですが、そういう点について松本先生一つ……。

松本 それはやはり政治というものを経済や文化や殊に軍事というようなものから引離して考えて

はいかんと思う。政治は包括的な意味合いに於いて取上げられなければならないので、文化的な内容とか、或は経済的な実質とかいうものを抜きにして、政治というものを空回りさしてしまうということは実に困った問題で、その意味に於いて政治を実質づけるといったようなことが仰る通り非常に重要なポイントだと思う。それだから私はやはり文化と政治というものを非常に対立的に引離したものでなくて、政治というものの中に文化的要素というものは既に浸まして居らなければならん。それを既知数として政治の運転ということが行われなければ本当の政治ではないと思うのです。穂積さんの仰る意見に大賛成です。

穂積

国家の生活というものを政治、経済、文化というように分けて、政治が経済や文化に対して非常な指導力を持ち、経済や文化生活というものはこれに追隨し、若しくはこれに唯協力するものだ

という概念自身に私は相当疑問を持つて居る。そこに今までの自由主義的なものの考え方があった。そうして又自由主義的な政治の指導力を藏して来た原因がそこに根本的にあると思うのです。ですから政治というものは狭義の意味に於ける経済生活なり若しくは文化生活そのものの中に生き生きとして居つて始めて意味があるものぢやないかと思ひますね。

文化の運命

室伏 しかし、僕等はそう考えないね。つまり或る時機には政治というのは余り尊重されないのだ。又それほど意味を持たない。依然として文化を忘れるというのが寧ろ破壊思想であつた点もあるし、それから自由主義の時代に於いては成るべく少なく納めるということがやはり時の要求でもあつた。その時代の總ての諸条件に適應して居る

のだね。所が今日になつて逆になつたというのはそれは今日の問題だと思ふのです。政治の本来そのものの問題ではない。いつでも政治が支配すべきではなくして、経済が政治を支配した時代もある。それはその時代にはその方がよかつたのだ。今日は政治が経済も文化も僕は支配する時機になつて居ると思ふ。これも長いことはないと思ふ。結局経済の力の方が強いかと思ふ。今日の自由主義の終りには政治がこれを支配しなければならん。随つて経済だけでなしに、文化をも政治が指導して行かなければならんと思ふ。これが今日の性格——時代の性格だという風に考える。

穂積

その点は私はこう思ふのです。今いわれた自由主義時代に政治というものは経済生活若しくは文化生活に余り立入りしてはいかん。立入りしない方がよかつたんだということです。それは政治が経済から圧迫されて居つたのではなくて、自

由主義時代に於ける政治は自らの意思として経済を個人主義的、自由主義的にやらせるという意思を持つて居ったんじゃないか。政治自身の自由主義時代は政治はなかった。

室伏 政治というものは経済が主であつて、それにサービスして来たんだ。

穂積 しかし、何といひますか、そういう形を取ることが自由主義時代の政治の目的であつたと思うのですね。

室伏 政治が時代的な性格を持つ訳です。全然政治がなかったとはいえないが、その前の時代から自由主義の時代が来て少なく治めるということになつて来たんです。

穂積 だから経済や文化生活に政治が今までなかったのではなくして、大いに政治はあつたと思うのです。

室伏 あつたとすれば何もしない政治があつたと思

う。

津久井 そういうことは国に依つても違ふのではないですか。アメリカなんかは非常に経済というのが政治を支配して行われて来たけれども、日本なんかはどうだろう、そういうことは……。あつても非常に短い期間だけのように考えられるのですね。

穂積 それは所謂自由主義というものの典型的な要素というものは日本に少なかったと思うのです。

大串 そうですね。日本は政治は始終強いですね。どつかで支配をして居りますよ。

室伏 自由主義時代でも強かった。

穂積 日本の資本主義経済が、政治の力を借りなければ発達出来なかつた所にあるのぢやないですか。そこに官僚政治の非常な強い社会的な地盤というものもあつたのではないかと思うのですね。

保護政策に依り育成政策に依つて初めて日本の自由主義経済というものは成長して来た訳ですから、だから英国に於ける経済の発展というものはなかつた訳ですからね……。

大串 それは私の方からいうと、憲法政治と一口にいうですね。しかし、日本の憲法政治というものが一体日本国民生活の——パーセントで現す訳には行かんが、どれだけ本当に支配して居つたか、外国人の目から見れば余程問題だと思ふのですね。どうも表の文字に表現されない以外の政治支配ということが相当日本ではありますからね。

穂積 その点は引括めていえばこういう風に思ふのですがね。それでは経済というものは一体それ自身が意思を持たずして、自然発生的に成長して来たかというところではないと思ふのですね。例えば最近問題になつて居る純粹経済学の問題なんかも、自由主義経済が政治性というものを排撃し、

若しくは持つて居なかつたというと決してそうではなくして、自由主義経済学こそはそれ自身が非常な政治意思というものを持つて居つたと思うのです。唯今日の場合国家経済とか国民経済ということがいわれることは自由主義時代より、より以上に政治性を強く要求して来たかと言うとそうではなくして、内容が違ふというだけではないかと思ふのですね。

室伏 しかし、それは結局政治に対して新しく發展して来た経済が打勝つたということだと思ふ。これは経済ということよりもつと根本的なものは技術だと思ふ。新しい技術から新しい経済が生れて来た。その新しい経済が古い政治をぬつて行くということが事実だと思ふ。その上に新しい政治というものが生れて来たんだ。根本的にいえば技術だと思ふのです。技術の变革から産業革命が生れて、その産業革命の上に新しい政治が立つてき

たんで、自由主義時代は要するに経済というものが基礎であつたという見方には間違ひはないと思うのです。

津久井 その問題は政治と文化の關係は非常に簡単に見えてこんなからかつて来るのは、政治という言葉で現される觀念内容が立場に伴つて變化して居るから、同じ言葉を使つても現される立場が非常に違つて見える。現在のように指導なら指導という意味で政治を使う場合に、非常に内容が食違つて来る訳です。しかし、自由主義時代の政治概念というものはやはり先程いわれたように、やはりそれ自体が持つて居つたんですね。一種の団体行動とか知らないが、やはりあることを政治と云つたんですね。

室伏 それはどつちが先立つて居るかということを歴史的に見て行くと、自由主義時代には経済の方

1 底本では次に、句点が入るが誤植と見る。

が先だ。今日は政治が先に立たなければならん。これはいえるだろうと思う。

穂積 唯こういうことはいえませんか。封建時代から自由主義時代に変つた場合に於いても、その時にこれを思想的に見ればなぜ一体變つたのか、今まで圧迫されて居つた経済というもの伸びてきて他をリードして来たというよりは、やはり国家なり民族なりがより高度なものに伸びる為に自由主義経済が取入れられたんだ……。

室伏 これは政府が指導して、例えば古い政府昔の中世期時代の政治がそれを指導して来てやつたかといえ別だが、逆でしょう。商人なんかは危険思想と見られて居る時代が随分あつた。發展しようという過程に來ても時の政治と両立しないからどんどん圧迫されて來た。それにも拘らず新しい経済が押しきられずに封建国家というのは亡び

た。そういう意味でなくては説明はちつとも出来
んと思う。

穂積 私はそう思います。その側面もございますが、

その場合にそういう自由主義的な経済が封建的な
政治意思と戦つて勝つたというよりは、自由主義
的な政治自身が封建的な政治意思と戦い勝つて
きたということがいわれるのでないですかね。

室伏 その政治意思はどういう地盤から来たか。や
はり新しい都市がどんどん発達するようになって、
今までの土地経済の上に立つて居つた封建経
済というものは倒れて、都市的な新しい都市が出
て来た。だから根本は経済の方にあるのではない
か。

穂積 そこで私は日本に於ける自由主義時代に於い
ても、なぜ一体自由主義体制を取るに至つたかと
いう場合に、そこに一つの国家目的というか、民
族意思というものをやはり吾々としては自覚する

必要があるのではないか。今までの封建体制では
もう既に民族若しくは日本国家の生命力を伸ばす
ことが出来なくなつたが故に自由主義時代の政治
も経済も文化も、総て国家目的をはつきり持つて、
その国家目的を生かす為の……。

室伏 それは正しいと思うのですが、それは自由
主義の或る発展過程に日本は突然に国を開いて来
た。それに適合しようとしたから日本の国の場合
は特殊だと思うのです。世界史的に見て……。

穂積 それは世界史的に見ても、世界の歴史が一つ
の国家体系というものを人類の生活を国家を一つ
の道徳単位としてはつきり自覚したという歴史は
説明出来ないことはないと思うのですがね。例え
ば英国に於きましても唯問題はそういう意味に於
いて正当づけられた自由主義時代の経済なり文化
なりが……。

室伏 それは国家という觀念は近代になって出て

来たんだから、所謂自由主義時代に出来たんだから、自由主義と国民観念は両立しないと考えるのは大変な間違いだと思う。民族的観念、国家的観念というものは一般的に知られるようになったのは自由主義の時代だと思う。それまでは国家的観念はない。自由主義というものは国家観念或は国家そのものの発展する大きい一つの過程をなして居る。

穂積 ですから自由主義は国家を分散し、崩壊したかというと決してそうではなしに、更に統一国家というものを建設した。唯その場合に自由主義の中期から末期に、持つべき国家目的というものを政治も経済も文化もこの意思を忘れて、そうして自分自身の中に自然發生的に独自の意思というものが有り得るかの如く錯覚した所に問題があるのではないでしょうか。そういう風に成長して来た所に文化の再編成という問題も、再建という問題

も、今までの過程に於ける政治と経済との対立に於いてものを考えるというよりは、もう一遍国民生活全体の歴史的なる再編成という点をはつきり自覚すれば、追隨でなしに創造的な理念が掴めるのではないかという風に思いますね。

室伏

自由主義時代の国家という観念は兎に角として、国民的なもので発展して来たのはたしかにそうなんです。ヨーロッパも相当に国民というものゝの観念が出て来たのは十九世紀の或る年代から来た。自由主義もそういう意味からいえば、非常に貢献して居るように見えるが、自由主義というものゝは経済に便乗して来た。根本は経済にある。そこは全体主義と区別して見なければならんと思えますね。

穂積

だから自由主義政治自身が将来国家意思というものを自覚せずして、経済にばかり目を呉れて来た所に指導力の力があると思います。

室伏 それは政治の問題だね。

文化運動の性格

穂積 唯こういうことを思うのです。素人考えですが、今日の日本に於ける文化問題を考えて見た時に、それに対するあきらめ的な感じが相当強いと思うのですね。いい換えれば自由主義的な文化というものを不変の如く思つて、本来あるべき文化というものと自由主義的な固定化した文化というものと混同して居ると思うのですね。そうでなしに、もう一步その立場を脱却して考えれば、今日の日本の政治なり戦争なりに文化価値の自覚というものがない。いい換えれば思想性がない所にはつきりまだ国民に自覚されて居ない所に、寧ろ戦争なり政治なりの弱い面があるのではないか。更に文化運動の脆弱性があり、同時に文化運動の高度の使命というものがあると思う。いい換えれ

ば戦争と政治というものに、これを次の新しい自由主義時代に変る新しい時代に導き出す為の一つの目標を持たせること、そのこと自身が文化運動の寧ろ高度なる意思でなくてはならんのではないかと思う。そういうことを考えれば政治とか戦争とかに引摺られて居る所の文化でなくて、もつと創造的な、指導的な文化意思というものが国家の意思に結付いてそこに生れて来るのではないかと思う。

岸田 僕は生れつつあると思う。これは勿論どこにということとははつきりいえないかも知れんが、私は最近地方を歩いて見まして、そういう点は非常に變つて来ている傾向があります。唯これは変な現象ですが、所謂文化人としての一種のプライドを持った人程座り直るのが難しいようです。しかし、実際に例えば農民を指導して居るとか、或は農場で働いて居るとかいう人で、比較的文化的な

正しいセンスを持った人が、今までの文化というもの
の考え方の誤りというか、或は又そういうものは既に過去のものだという気のつき方が非常に早いように思うのです。そこは当然のことだけでも、やはり都会が比較的その点で遅れて行くんだかないかという気がしますね。

穂積 その点はたしかにそう思いますね。というのはやはり文化とか政治とか経済というものが本来ながら国民としての生活ですね。生活意識、無意識は別と致しまして、生活文化というものをやはり体得するというか、生活を通して文化というものをして一般の勤労国民の方がはつきり掴んで居るのではない。いい換えれば勤労者の生活自身が非常に動いて居るものを国家的に再編成せられつつある。その場合には自由主義時代の文化人の生活自身がはつきりした地盤というものを持ち得ずしてぶらぶらしている。そこに文化というもの

信が持てなくて、非常に消極的なサボタージュとい
いますか、そういうものが出来て居るのではない
かと思う。

津久井 それは本質的にそういうものが、文化と政
治というものの間にはあるのではないかというよ
うな気もするのです。例えば政治というようなも
のはどうしても権力に依る強制というものがどう
しても加わるし、そうすると文化ということの中
にはそういうものはないのぢやないかというよう
な気がするのです。そういう点ではつきり僕等も
出来て居るような出来て居ないようなことがある
のだね。そこに何か一つのものがあるのだがね。

松本 それはその問題と一緒に文化問題、政治問題
と大きく関聯して問題となるのは、私はやはりベ
ルグソン¹ぢやないが、現在の日本はやはり東亜共
栄圏というようなより大きな団体生活というもの
1 底本ではベルンソンとなっているが。

に入り込もうとして居る。所謂開かれた社會の文化という問題が非常に問題になるのぢやないかと思う。例えば日本内部の問題として妥当性を持つ文化でも、今度それを東亜全体に宣伝して行くとか、或は融合せしめて行くとかいう問題になりますと、これは中々国内問題とばかり解決出来ない問題があるのですね。これは外の文化と接触し、外の文化と融合せしめて育たなければならぬという面が非常に出て来て居るのです。こういう問題については如何でございましょうか。これは重要なポイントだと思う。

室伏 今翼賛会の方は、大体翼賛会が何をやったかというのみそぎをやっておるが、これだけだろうと思う。人の記憶に残つて居るものは……。外のことは人間が大変變つて居るが、残したものはみそぎだけだが、みそぎは僕はこういう解釈をして居る。みそぎは悪くない。日本の歴史を見ると最

初はむすびで、高御座日神——これは自然だ。それに続くものは所謂みそぎなんです。みそぎまで来ると一つの文化に違いない。結構なことだ。これは事に依ると昔はお風呂というものがないのだから、お湯を知らないのだから水で洗うより仕様がなない。(笑声) そういう意味もある。しかし、これを文化の意味に解して心を淨めるという意味に解してもいいと思う。その次に来たのは天照大神で、これは国家的な意識だと思う。ここまで来なければならぬと思う。みそぎの段階に止まつて居つていいかどうかということが問題です。わが国の神話から考えても、もつと發展的な所に進まなければならぬが、それを今繰返して居つてどうするか。日本が大東亜共栄圏ということをいわないで、農民国に帰つて行くならば、農民思想を鼓吹することは非常にいいことだと思うが、一方大東亜共栄圏で大帝国を築かなければならぬ時に農

民思想に帰って行けるか。そこに問題があると思う。

松本 私はその場合に結局総ての文化——生活文化は無論ですが、現実的な生活の上に強く根を下ろさないものはもう駄目なんだ。到底国家生活の内容としても取り入れられない、それだから発展的国家であればある程発展した地盤の上に非常に現実的な文化を形成して行く。そうしてその上に理想的な文化、文化中の文化というようなものをピラミッドの頂点として華やかな花を咲かせる。こうならなければならないと思う。

室伏 農民思想というものは美しいことで、それは非常にいいことだと思う。僕等も「土に還る」という本を書いたこともある。(笑声)しかし、あの時には僕等は発展が止つたなと感じた。そういう時代にはそれより仕様がなと思った。しかし、発展する時機には発展させなければならん。発展

時代に農民思想をもつて来る。この位矛盾したことはないと思う。発展的な時代には発展的な思想を持つて来るより仕様がないのに、それを農民思想を持つてきて発展しろということは無理だと思う。これは思想的に打壊さなければならんと思う。

大串 それは思想の問題として考える場合と、政治の現実問題として考える場合と、一寸そこは分けてをしてお考えないと……。そうでないと時代思想からいつて何というか、言い方がまずいが、人間でいうならば頭よりは体の方がいいという、自然に帰る行き方を思想全体の動向が取つて居る。ものが變つて来る場合の一つのめぐり方ですね。

室伏 文明に対しても僕等は疑問を抱くが、発展的な時には科学的な思想を鼓吹しなければならんと思う。日本では今技術などを尊重しておるが、しかし、一方科学というものを尊重するというのが、科学的精神を弾圧して居る。これで科学が盛んに

なると思うか。もつと科学的精神を盛んにしなければならんと思う。

記者 三木先生一つ……。

文化の反省

三木 現在の問題の根本は政治の問題だと思う。政治が立直らない限り文化政策をいくらいつても駄目だと思う。だから現在政治の問題に総ての国民の関心は集中して居ると思う。文化人の関心も——文化人が消極的だということは、要するに政治が文化人にまだ本当に自分を理解させて居ないからだ。文化人がいつでも政治に対してスローだということはいえないと思う。以前には多くの文化人、青年学生が熱情を以て政治に赴いたこともある。現在の政治が自分を反省して、文化人を引摺って行くものにならなければならんと思う。そういう反省が足りないで文化人のことをいうの

は、政治が自分の無力なことをいつて居るだけだと思う。今日に於いては文化人ばかりでなくて、一般の国民が同じ気持だと思う。文化人と一般の国民と全く違うように考えるのは正しくない。

室伏 文化が政治を引っ張ることが出来ないということは……。

三木 文化人はもう少しいい意味に於ける政治的にならなければならん。文化人がもつと政治を理解し、政治的になるということが必要だと思うのです。今日の時代は……。

室伏 君のいうのは政治が文化人を理解しなければならんということではないですか。

三木 逆にいえば……。しかし、今日は政治が文化人を理解してくれることを待つて居る時代ではないと思う。これから少なくとも十年とか二十年とかは文化人が本當の政治的にならなければやりきれないでしょう。そういう時機になつて居るので、

それだけの或る意味に於ける追いつめられた気持がない限りに於いては文化も政治もないのではないか。

大串 所がこの頃考えられるのは、文化人が政治的になるのはいいですが、従来の農村文化人が政治的になったのは実に困るので……、

三木 それは政治を知らないのです。例えばこれまでの文化人というものは政治では一番遅れて居たんでしょ。日本に於いて一番発達して居ないのは政治学だと思うのです。外の学問に於いては多少古典的なものがありますが、政治学に關しては日本にはないと思う。そういうように政治的なことが非常に立遅れて居るのです。これはやはり自由主義というものが十分発達しなくて、国民全般に政治的な関心というものが十分昂揚されなかつたということに原因があると思う。しかし、兎に角自由主義時代を超えて行くにしても、そう

いう一つの政治の中に積極的な関心というものが文化人の中に出て来なければならんと思う。それは必ずしもこれまでの意味に於ける文化人というものとは文化の教養を持たない。政治というと政治家のあとにくつついて躍り廻ることであるとか、或は妙なポリシーを弄することのように考えた。陰謀でも企てることだと極めた非文化的な考え方だと思ふのです。

室伏 現実の問題は文化のほうが政治から攻められている。そういう立場にあるのではないですかね。
三木 攻めて居るが、しかし、攻めるだけが政治ではないと思う。

室伏 政治よりも大きい力が政治をも攻めて、その力が文化をも攻めて居るというのが今の現実ではないですかね。

三木 文化人を政治に憧憬を持たせなければならんと思う。自分がそういう風にやって行きたいとい

うような憧憬を持たせなければならんと思う。

室伏 それは今までは文化人は政治を自分の方から指導するという気持があつた。

三木 しかし現在ではただ消極的に何とか政治的現実に順応して行くというだけの考えがやつとのことであつて、積極的に自分が政治を指導するといふ気構えというものはないではないでしょうか。

室伏 それはどっちが悪いか……。

三木 そのうちに事情が變つて文化人の価値が分かれると思う。

室伏 まだ早いということになる……。

三木 まだ早い。

岸田 その時になつて立上がつて、それまで文化人が政治に政治性を持つだけの訓練が出来ますかね。

三木 それまでにしなければならん。
岸田 する方法は……。

三木 する方法はいろいろあると思うのです。例えばそこは文化部あたりでやるべき仕事ではないかと思う。(笑声)

岸田 地方文化運動というのはその訓練の積りでやつて居るのですが……。

松本 僕は過去の文化人というものが立上らなければならんという見方は取りたくないのです。寧ろ立上るものはもつと広い層で、而も青年層というものゝが動員せられて来るという時代がなければならんのではないか。つまり純潔な現実生活の汚点に染まないような、しかしながらその現実立つた青年層というものが日本に於いて立上るというやうな気分が起らなければ救われないので……。
三木 それはそうです。文化人だけが立上るということはありません。

大串 それは先程からの問題で、政治と文化とどっちが先に出るかという、これは一概に決められない。

い、両方やはり縄になったような具合に行かないと実際にならない問題だ。

三木 しかしながら今の一般論ではなくて、今の現実の問題としては政治がやはり……。

大串 しかし推進して行く行き方からいうと、それはナチスが出て来てからは政治がリードして居りましたが、あれを出すまでには寧ろ文化ですよ。それはやはり思想家とか何とかいうものがどんどん鞭打ってやって居るからそういうものが出て来る氣運が出て来るのですよ。出て来てしまえば政治が先になる。しかしそれも文化性を含んだものだから……。

三木 それは革新を予想することでしょう。

政治の反省

記者 今日の時代はどう考えても政治が文化を指導しなければならぬ。政治がその指導性をもつな

らば別だが、今日の所その線にまで政治は高まつていない。したがって政治と文化の問題は色々論ぜられるだろうが、現実になんという文化政策をひく必要があるか。この点について真面目に考えることが要請されていると思う。

三木 要するに文化というのは来るべきものをいつも目指して行かなければならぬ。文化というのはそんな昨日今日の問題ではないと思う。これから十年先、二十年先の一つのものを予想して仕事をやって行かなければ……。

記者 それを現実にどう教育乃至は指導するか。そういうことが文化政策の根本問題になるだろうと思うのですがね。

三木 それはもう少しいたいことがある者にいわせる、それだけだと思う。今日の時代に於いて本当にいいことを持つて居るものは必ずしも自由主義者ばかりではないと思う。必ずしも反国家

的なものばかりではないと思う。それだけのことをやらなければどうにもならなくなつて、型にはまつてしまつて、型の中で何かをやつて行こうということは出来ないのですから、型を破る為にはやはり型から外れたものに活動余地を与えなければ駄目だと思う。

室伏 僕は根本の問題は、本当の日本人というものを考え出すことだと思う。つまり今の日本は九割九分までドイツ主義のナチズムの影響を受けて居る。このドイツ文化に隷属するという立場から開放されないで何も出来ないのぢやないかという考えです。それはいい所を吸収することは結構なんだが、元々ナチズムというものは——ファッショにしてもそうだが、あれは救国思想だと思う。国が亡びたから初めて興り得た思想なんです。僕がドイツ行つて一番感心したのはファーターランド【Vaterland】というものが出たんです。何をや

るかといったら、お爺さんが出て来て隅つこで祖国のファーターランド何とかいつて歌い始めたが、僕等も感動を受けたが、一般の聴衆は非常な感動を受けた。そういう時にヒットラー運動が興つた。ドイツ人としてはこれは出来るのだ。祖国民族的思想というものが起るのは当然です。日本は大東亜共栄圏で大なる発展をしようという時に、亡びた大民族の立直るのを真似する必要はないと思う。日本はこの上発展しようというのだから初めから発展して行かなければならん。学ぶべき所はあるが、元々ドイツナチズム文化に隷属して日本主義なんかを唱えることは間違いだと思う。

三木 それは僕等も非常に賛成だね。

大串 結局それは真似するとか真似しないとかいう議論をするよりは、積極的に前に一步出るんだよ。

1 今も歌われるドイツ国歌の三番の歌詞にある。

室伏 奈良朝までは悲しいかな日本には余りないのです。

三木 解決して居ないものは、例えば民族問題なんかでも本当に解決して居ないと思う。

大串 それは民族問題でなくて、宗教問題は一番何といつても弱点です。そういう所には日本でも直ぐ解決は出来るとはいえないが、非常に伝統的な強みというものはあるのだから、そこに突っ込んで行かないと文化問題も創造的なものも出来ない。

穂積 問題はそういう日本のものが国の中にどこにあると思う。唯今日の政治の中にそういう意思があるかどうかということが問題だと思う。

岸田 今いわれたように、現在の政治というものは期待を持たない。国民全体が持たないと思う。それなら今ここで文化政策ということは将来の問題として論じていいか、現実の問題として文化政

策という面からいろいろな問題を取上げててもこれは空論だと思う。僕は文化運動という形で、つまり国民の中に一つの運動を起こす以外にこの局面を打開するという考え方です。これは本当は政治運動ですよ。しかし、政治運動という形は今はずう取れない実情にある。しかし、文化運動というのはやはり広い意味の政治運動という性格をもつて行かなければならん。それは決してカムフラージュではなくして文化運動でいいのです。そこに僕は今の文化運動の進め方の根本方針があるので。しかし、これはやはり文化運動に参加する人達がその理解を持たなければ出来ないのです。その理解を持つ為には何か積極的な気持がなければ理解出来ない。消極的になつて居るとどうしても理解出来ない。今の政治に絶望して居るという気持が理解出来ない。今の政治が内部的にどう変るかということは別の問題ですが、これを変えて

行くことが出来ないかどうか。これはどうしても僕は考えて貰わなければならないと思う。必ず僕はその意思が集結すれば日本では革新という形ではなくて、その意味で政治を変えて行ける力を実際に持つて居ると思いますね。

室伏 それも考えられるのだが、しかし、例えば文化政策といつて見ても、文化政策をやる方の所謂指導者ですね。指導者と被指導者とを比べて見てどっちが一体利口なのかということが相当問題だと思う。指導者よりも、被指導者のほうが利口になって居る。そういう所におしつめられるのではないかと思う。

岸田 だから文化政策ということを現在空論だといふのです。

三木 今は文化政策なんということは一種の理想論であつて、やるべきものは国民運動ですよ。文化運動も国民運動の一つとして。

室伏 国民の側から来る運動でなければ、これはお役人の運動としか見て居ない。

文化運動の政治性

穂積 私は岸田先生なり松本先生に端的にお尋ねするのですが、今いったような意味に於ける要求というものは、意識、無意識の間に国家の新しい再編成、国家生活の再編成ですね。そういうことは政治の部面に於いても、政治自身がそういうことを無意識の内に要求して居ると思う。それが新体制運動として現れて来て居る。しかし、現実には国民に政治的な自覚を持たしめ、政治的な力を培養せしめなければならぬ。国民運動としての翼賛会が一番国民から政治を奪い去つて居ると思うのです。翼賛会運動の埒内に於いてなされて居る国民運動と称するものの中に於いては政治的なものは非常になくせられて居ると思う。唯その場合に於

いてそういう風な政治の指導力、いい換えれば生活の再編成の指導的な立場を取り得るような文化運動ですね。それを目標とした文化運動、そういうものを培養せしめる為に既存の政治意思に依つてなされて居る運動だと思う。そういう運動の中で文化運動だけまだ反動的な要素を持たずして、進歩的な運動を展開せしめるような工作が取れるのではないか。

岸田 可能がある……。

穂積 可能性があるのぢやないかと思うのです。昨年の秋頃私共も翼賛会運動の中で国民の関心を多少でも持たしめ得るものは文化運動しかないのぢやないかという風に思つて居つたんです。それは先刻いわれた通り、文化部というものは何をするかといえ、なつた人に依つて違ふといつた如く、そういったことも国民の中にもあつたと思うのです。あの人がやるのだから多少は国民運動的

な性格も理解出来るのではないかという期待も持つて、最近になりまして段々その面もゆとりがなくなつて来、相当しめつけられて、反動的な要素の方が少し強くなつて来たのではないかという風に思うのですが、翼賛会運動なり出版文化協会の機構の問題にも触れますし、いいたいことをいわしめるということの要求ですね。これとは逆になりますと今いったような、これからなすべき文化運動というものの具体的な目標というものが、国民の見方というものも變つて来ると思うのです。

岸田 お話は尤もだと思うのですが、それは翼賛会というものを固定したものと考えるからであつて、翼賛会というものはどうでもいいものなんです。これは唯一つの公然と運動ができる名目だと僕は考えて居るのです。そういうことをやはり暗黙の裡に理解し合わなければ駄目だと思う。翼賛

会が官僚的になった。これは駄目だという考え方はなくて、やはり翼賛会というものは利用出来るだけして行く。それに依つて翼賛会も変り得る。そういう希望を持つていいのではないかと思うのですがね。例えば今の文化運動というのは東京にはありません。ないと思うのです。地方に起つてつある文化運動というものは、自治的に皆起つて居る。それは必ずしも新しい性格をもつた文化運動ではなくして、旧態依然たるものもありますけれども、そういうのは私の方で説明を取りながら多少でも直して行く。所がこの場合に成るべく自治的に結成されることを望んで居るのですが、翼賛会の機構上地方の支部というものが除け者にされることを喜ばない、やはり支部を通じてやらなければならん。支部というものは県庁にあるのです。そこに一つのまずい遣り方があると思うが、又県庁にあるということを重大視過ぎる傾向もあ

るのです。県知事が支部長であるということを余り重大に考え過ぎる傾向がある。そこで僕は一つの緩衝地帯として各支部に文化委員会というものを作らした。これは取敢ず支部長の啓蒙機関、それから文化運動に対する緩衝地帯ですね。若しそういうものに対する無理解の弾圧というものがないように文化委員会で指導してやるといふ形になれば先ず一応認められることで、文化委員会というものを作つた。これも最初から吾々が望むような委員会が出来るとは当然思つていない。しかしそれにしても県庁の役人だけに依つて指導されるよりもずつと私は広いそういう思想段階として文化委員会というものを作つて、それで中には非常に結果がいい所もある……。

津久井　そういう方針とか方法とか、或は文化運動よりはやり易いとかいう考え方に少し間違ひがあるのではないですかね。本当の革新的な思想に立つ

て居るものかどうか、本当にそういう革新的な思想に立って居るものであれば、文化運動としても非常に危険だと思うのです。そこで吾々にしても或は岸田さんにしてもやって居ることは今の日本を支配して居るような上層者の思想と、本質的或は革命的につまりどつか違うのか、或はそうでなくして大体同じようなことを年が若いから少し気のかいたものを、或は直接政治に触れないかどうかということが問題ではないかと思う。僕等が今までの思想の流れと一致して行くような流れの思想というのでは僕は結局同じではないかと思う。

松本 それは私はいかんと思うのですよ。今まで来たような流れの延長に於いて文化運動なり或は広い意味に於ける政治運動というものではないと思う。私の方の文化局¹で私もいろいろ話は聞きます

¹ 松本は1941年日本出版文化協会に就任しているのでこのことか。

が、期せずして目標が一致して来るのです。それは唯既成の文化至上主義といったような意味合いではなく、つまり国家的目的というようなものに即応しながら更に発展的国家目標というものに遠い目標を置いて来る。これはやはり私は文化人としてもいわばこういうような対勢に於いてもものを考える場合に当然到達する点ではないかと思う。そういうような意味合いに於いて、つまり文化政策で悪ければ文化運動というようなものが行われるならば、これは非常に健全である。まあ過去との聯関は暫く別として、現在正に日本に於いて要求せられるような健全性を持つて居ると思う。その場合に今までの文化主義というようなものと、唯歴史的に結び付いて、そうしてその発展であるというだけでなく、非常な方向転換は現実に要請されるのですかね。これは吾々の方の關係ばかりでなく全面的にそうではないかと思う。

岸田 こういう例があります。甲府で文化団体というものがあつて、これは自発的に結成された、それを見ると文学とか芸術とかそういう方の人だけです。文化運動ということがぴんと来るにはそういう人達です。それにいくらか範圍を広めて写真というものを入れたお医者で写真をアマチュアとしてやつているものが入つて来た。そうすると展覽会でもやるのだろうというような積りで入つて来た。所が文化運動新しい性格ということで吾々は一生懸命に説明したのですが、そうすると医者で文化運動が出来るのだということに気がついたのです。それで医者として文化運動をやるということとは、これはうちに来る患者を診てやるだけではないか、甲府付近の保健衛生という問題について吾々に関心を持つてそれに対する対策を考えなければならぬというので、近頃誰でも考えることだが無医村の診療を考えた。或る時医者は自分達だ

けでそれをやらないで、学校の先生とか、文学者とかそれぞれの道につけて行つたのです。そうしてそこで無医村の診療をやつて先生達は今まで全く自分達が気がつかないことを文化運動というのの中に入つた為にやつて居る訳です。どうも医者の新体制というものは何だというようなことを言葉だけで、患者を良心的に見るといふようなことだけしか考えなかつたのですが、これなんか話を聞いて見ると意外でもあるし、又面白くもあり、文化運動の効能といえますか、これは医者が政治的になつたことなんです。

室伏 そういいい所が非常にあると思うな。大勢のものが集つてやつて居るのを見ると立派に見えるのですね。

岸田 そういうものがなさ過ぎたんですね。
室伏 何でも誰がやつても同じですからね。しかし、やつて行くことはいいですね。やつて行けば何か

になるのですね。

大串 しかし文化という意味で、或る意味に於ける自分達の生活の反省ということは少しずつ起つて来たんではないですかね。

松本 大いに起つて居りますよ。そこが新文化の擡頭であるし、現実的には抑圧せられて居るというような点はあつても、それが新文化の萌芽になつて伸びて行くものだ。こういう風に樂觀するのですよ。

大串 私もそう思いますね。

松本 私は結局政治の問題に於いては、政治の目標ということも目標だけでも、同時に技術ということを深く考えて貰わなければならぬと思う。つまり民衆を引っ張り、国民を動かさなければ政治は仕様がなからぬ。

三木 もう少し自分達を批評して呉れる人を集めなければならぬと思いますね。

松本 吾々の方でいろいろな会なんかを致しますが、

そうすると吾々の方だけが総ての責任を背負ひ込みすべての仕事の中心になつて、お前達宜しくやれといったような意味合いに於いて傍観者になられるのが実は一番強いのですよ。もう少し鞭撻するのみならず、積極的に協動して戴きたいという氣持をいつも私は持つんですね。

記者 それでは大分時間が立ちましてから文化協会と翼賛会の二先生に頑張つて貰う。又外部からも協力する。そういうことをお契いしましてこの辺りでやめることに致します。どうも有難うございました。(終)

底本：『日本評論』1941.12号

学生は如何に生くべきか

司会 三木 清

帝大 原 敬一

帝大 小山泰藏

早大 伊藤大助

慶大 長谷川英夫

東京女大 戸澤 静

東京女子医専 阿部歌子

津田英学塾 小林志保子

★現代学生の置かれている位置

記者 この重大な国家的危機の時代を、次の日本を背負つて立つ若き学徒諸君は如何に生き、考え、実践しているか。国家の諸君に対する期待の今日程大なる時はないと考えます。時代との関聯に於

て諸君の理想を、志向を、大胆に述べていただきたい。若き知識人の生きる生き方を結論づけてみたいと思うのです。三木先生に司会をお願いいたします。

三木 今晚は、私は進行係のつもりで来ました。自分の考えを述べるより、皆さんの話を聴きたい。それで私の質問に対して、皆さんがお互いに質問応答される形を取つて進んで行きたいと思うのです。

現在の青年学生諸君の問題になつておることはいろいろあるが、その中には、外部から想像も出ないような問題、時代に対する関心の持ち方、時代に対する悩み、希望、要求と云うものもある。従つて自分達が理解されていないというような問題を中心にして、話をして行けばよいぢやないかと思うのです。

差当つて学生生活の内部の問題——学園の新体

制、報国隊の組織とか、最近に於ける学年短縮の問題、或は徴兵令改正の問題なりを機会にして、学生の生活なり、或は生活に対する気持なりがいろいろ変わつて居るぢやないかと思うので、そういうことについて誰方か口火を切つてくれませんか。

原

どうも今迄は学生というのは一つの別の社会と考えられて、普通の社会から切離されたもので、本当の意味での社会を成していなかったという所があつた訳です。今回の臨時措置を契機として、本当の意味での学生生活を拵えて行きたいと考えるのですが、その方法が見つけ出されないのです。**三木** 一体これ迄の日本の社会では、学生は或意味に於てあまりに特別扱いされ過ぎておつたと思う。そのために善い所もあつた、弊害もあつた。そういうことが今度の事変を機会に、殊に最近の変化に於てなくなり、学生も国民の中の別のもの

でないことがはつきりして来たのぢやないかと思う。それと同時に、学生生活の特殊性というものが失われて行く悩み、学生は国民の一人でありながら、しかし学生はやはり学生であるという所が無くなる危険が非常にある。これは学園の新体制を考えておる当局者が、特に注意すべき点だと思ふのです。そのことについてまだはつきり方策が出来ていないと思うのだが、こういう時代にありながら、学生というものがなお一つの特珠の意味を持つて居るといふことをはつきりさせる必要があると思ふのです。

原

結局、学生が特殊性が無くなつて行くのは確かですが、今迄学生というものに特殊性を持つて居るような学生生活をさしていたことが、いいかどうかといふことは、非常に疑問だと思ひます。例えば学生の学問に対する態度が非常に曖昧ぢやなかつたかと思ふのです。学生には学生らしい本分

がある訳ですが、それをもつと生かすように、教育制度、或は社会制度なりが出来なければ、結局学生というものはどう迷ったって仕様がなないぢやないかと思うのです。

三木 例えば学問というものを功利的に考えて、親の方ではこれを投資のように考え、学校に入れて置けば、後はそれがいくらかよくなって返つて来るとか、学生の方でも社会に出てからの就職のこ とばかり考える、少なくともそういう点に重きを置いて学問をしたという意味ですか。

原 そうです。だからこの際、そういう風の態度をもつと徹底させて、学生を職能教育に引つ張つて行くか、或はもつと本当に学問をする学生の姿にして行くか、これが非常に問題だと思ふのです。

長谷川 学生がこういう萎縮をした形を取つたのは、嘗ての運動が閉塞した結果だと思ふのです。あの運動そのものの意義は別問題として、あれが

学問と社会を有機的なものとして教えた点は非常に考えさせられるものがあると思ふのです。それをいきなり学生を社会から切離して再び象牙の塔で沈黙を守る態度を取らせたがその運動に代る学生への一貫した指導方針を為政者なり指導者なりが取り得なかつたことが、今の学生に中途半端の形を取らせる一つの原因ではないかと思う。しかし今からでもいい。一つ学生に新しい方向を具体的に示して貰い、それに向つて行くことが必要だと思ふのです。今のような制度では学校を出るのは安っぽいサラリーマンの型を作る、一つの生産物として、大学という過程を辿らせるに過ぎない、こういう態度を取つて行くのは、次代の国家、社会を負つて立つ青年、就中学生としての態度としては大きな障碍じゃないかと思ひます。

伊藤 しかしあまり対外的なものに学生が関わらされ過ぎるのは、学生自身の態度なり、又は学生に

対する社会の態度なりがはつきりしていないというところにあるでしょう。例えば学生の態度嗜好などにしても、現代のポイントをはつきり認識していないことが、一般に外部的なものを求め勝ちにさせる傾向があると思いますね。

三木 傾向としてどちらに傾いておるのが強いのですか。自分を見凝めようとするのと、社会に対するものと……。

原 両方とも無関心だと思っています。

伊藤 僕は自分を没却して、社会の成り行きに従って行く便乗的態度を取る人が寧ろ多いんじゃないかと思っていますね。

三木 女の方はどうですか。

戸澤 それは世間とか家庭に引き摺られてそれだけで止る人もあるでしょう。私としては自分を中心にして世間を見たい、自分を顧みる事が一番大切で、それから世の中の動きを見て時代精神を体

得して行きたいと思っています。それに時代がいろいろ変わって来た時には、やはりいろいろの制約を受けたりするでしょうけれども、私はどんな風になっても、自分の立てた目標は貫徹するようにしたい、或程度表面の動きが変わったつて、真理には間違いないという気が致します。それが又一番時代のためにお役に立つと思います。

小林 学校を出たらその目的に合致するのでしょうか。

戸澤 全部合致する訳ではないけれども、自分の目的を達する道にはなると思います。

★女性生活の社会化と勤労奉仕の意義

三木 ここで問題を少し逸れるか知れんが、今の女の学生に対して、男の学生はどういうことを一番希望しておりますか。

小山 僕は今日出席して思うのですが、ここに、出

席の才媛はいい（笑声）。だが花嫁学校の生徒は嫌ですね。あの宝塚タイプの……しかし一般的にみて女性生活、殊に若い女の人の生活は変わつて来たと思います。この一年を振り返つても農村では農繁期託児所が多くなり或は特殊の学校では対社会的な設備をして、非常に社会と触れ合つていきます。そうでなくちゃいけなくなつて来ております。

三木 女子の生活に於ては社会化ということが強くなつて来ておるのですが、これは時代の要求に従つてそういうことになつておると思います。男の学生の方ではどんなことがあります。

小山 学校の報国隊が出来て、勤労奉仕作業をするということなど、それに繋がったことではないでしょうか。

三木 勤労奉仕ということについて、積極的に自分で意義を認めてやつておる人が多いんですか、そ

れとも受け身でやつておる人が多いのですか。

伊藤 どっちともはつきり云えないのですが、僕の方では鍊成部などがあつて、一月に五日位働いておると聞いたのですが、これは単に勤労作業ばかりでなく、どんなことを事実しておるか知れんが、兎に角、今迄の学生の雰囲気から抜け出る歡びを感じておる。そういう氣持が非常に高まつて来るという具体的例として、指導者として僕達の中からこそ立つのではないかということを、勤労奉仕に行つた人々から聞くのです。

長谷川 勤労奉仕は以前とやかく論ぜられたのですが、当時指導者はあれを穿き違えて、隣の庭園の草除りを小学生にやらせたり、或はつまらない肉体的労働のみに依つて精神的部面を強調して行こうとしたんじゃないですか。しかしそれも最近は変わつて来ています。この夏赤羽の兵器廠に、我々報国隊が一中隊から二十六中隊まで勤労奉仕

に行つて、實際○○○○とか○○○○なんかを造り、

兎に角僕等は近い将来入營して、この○○○を使つて戦う時があるという面から、これを生産することとに非常な意義を感じました。そんな風に最近勤労奉仕というと、率先して立ち上がる氣持が学生の中に出て来たのは、見逃せないと思うのです。

阿部 私達の学校の勤労奉仕は、男の方のようなやり方とは違いますが、夏休みの間診療所に勤労奉仕をするのです。授業の中では得られぬような大きなものが得られ、社会にも接し、自分の勉強にもなります。

三木 男の方でも自分の学んでおる専門的な仕事と密接な方面の勤労奉仕を希望されるのでしょうか。

伊藤 それはそうです。僕は理工科ですが、實際土を耕すことに時間を奪われるより、工場とか会社社に行つて、實際に動いておるものを見たい氣持ち

が強いですね。

長谷川 僕等の学校で新体制の組織改革の問題が文科関係の学生から出たのですが、その時、僕等の法科の学生で文化団体に關係しておる者は全部經濟警察官の手助けをしようということになりましたが、最も近い具體的の面から入つて自分の勉強線を發展さして行こうということが非常に強かつたと思います。

★学生生活における悩みと社会的關心

小山 しかし良心的な学生ほど悩みが多くて解決がつかないのではないのでしょうか。

三木 悩みの根本はどこにありますか。

小山 我々に何程かの思想がありとすれば、その思想が骨肉化していない故でしょう。その本を質せば教育制度にもあり、自分の意志の薄弱さにもあるのですが、自分自身でものを考えそうして行く

ということを学校で教えない、思想で以て生きたり死んだりすることは、少なくとも学生時代にはないことでしょけれども、そういう風の生活の立場というものが日常生活にもなかったし、今もない。その自分の立場を一応反省してみた場合に、躊躇もし悩みもするでしょう。

戸澤 そうでしょうか。学生生活で与えてくれないでしょうか。

小山 少なくとも我々が見たり考えたり実践したりすることは、詰込主義、棒暗記主義を奉じておる学校より遙かに深いと思うのです。僕はそれで僕の尊敬する先生を訪ねて、自分はどうしたらよいかということを訪ねた。先生は「僕等の時代は不幸だった、寧ろ君等は幸福だ、君等は自分自身の足で立てるぢやないか」と答えられ、結論としては、どんな思想、内容の如何、主義の如何は問わないけれども、その思想、その主義を持つておる

ならば、それを奉じろということです。我々の生活に徹しろ、そうして何ものかの真理を得たら、殺されてもそれを守り。それに近きより遠きに及ぼして行く以外にはないと、深刻な顔をして云われました。

三木 そういうことで安心出来るのですか。

小山 僕は現代学生の行くべき道は生活を基調とするものだと思います。島木健作氏が先日の農業経済の座談会に來られて、満州農業の話をした時に余談ですが、或学生が、東亜共栄圏とか、アメリカに來栖大使が行ったとかいうことはどう考えたらよいかと云つたら、今の学生の社会的関心は皆そういう風にしか現れないと不満氣に、そんなことを知つて君は一体どうしようと思うのか、君のできることは学校で真面目にやつて、勤勞奉仕を一生懸命にやることだ、それで嫌らなかつたら学校を止める、自分自身の生活を考えないで社会

的な問題に関心を奪われて何になるんだと極めつけて云つていられたのですけれど……。

三木 しかしそれで君達は解決を与えられておりますか、それは結局いまの世の中から云えば、個人主義という風にみられないですか。

小山 そんなことはないでしょう。自分の志を活かそうと思う者でなくちゃ、国家のために潔く死ぬる覚悟は出来はしない。自分の生活に先ず徹底しなくちゃね。

三木 そういう思想が現代では個人主義と云われていやしいですか、どうです。今の学生諸君には、その問題はそういう風に単純に割切れない所があるぢやないですか。

小山 僕はそういう風に、割切れないながら割切つたんです。

三木 それほどそれが簡単に割切れるよりも、もっと大きな政治的の力が被さっているんじゃないで

すか。そういうことを感じないですか。

小林 勉強に時代の動きとか理論とかが一緒になつて行くことに意義を感じていらつしやる訳ですか、学校に生きることが即ち社会に生きること、それだけの信条が、それだけの生活に徹すると思いますか。

小山 そうでなくちゃならぬと考えるのです。職域奉公だつて、職工は職工で一生懸命やれ、学生は学生で一生懸命勉強しろという訳でしょう。

三木 それだけの問題なら簡単だけれども、それで済まないものを感じませんか。

戸澤 割切れやすい、物ごとを単純に取るか知れないのですが、東亜共栄圏とか職域奉公とかを伺うと、私は自分の生活と結びつけて、どうしたら私がか少しでもそれに協力できるかということを感じるので。無論学生生活にいろいろ不満なところもあるけれども、こういう時局だから或程度そう

されねば仕方がないと思って、その点あまり考えるよりも残されただけかの範囲で、要求されておるものを自分の生活の中に生かすことができるが、あまり大きなことはとてもできない。卒業も控えて、生活のことも考えますけれども私は丁度今の学校に入ったことが、東亜共栄圏というもの

の希望を果たすことに少しでも役に立つことが分つて、とても嬉しいと思っております。女は卒業しても戦争に行くのでありませんから、男の方の真剣さには及ばないか知れませんが、徴用令など叫ばれておりますし、女の人も用いられることに、生き甲斐を感じております。

阿部 あなたのように自分の進もうという方向と一致する場合はいいけれど、そうでないと苦しいと思います。例えば私など卒業して医者として世の中に立ちます時に、どういう方法でどういう方向に進むことが、医者として一番社会のために必要

かということは、自分としてよく認めておりますが、分かつておつてもそれができない場合があるのです。

長谷川 僕は学生は学生として、社会人は社会人として職場を護れと今云われましたが、それだけを護ることによつて満足はできない、こういう時代には学生の殆ど全部が何をしていいか分らないのではないかと思いますが、学校にも制度的欠陥があり、学問を勉強することが、果して東亜共栄圏に協力することであるかどうか、僕はそれ以上に、もつと何かをしたいと、非常に焦燥を感じることにあります。

小山 そうというのが真面目な学生の現実の相と思うが、そういう現実をつきつめないでポカンとして、今まで通り立身出世主義を奉じておる人が沢山あり、乃至は白眼的に社会を見ておる学生もありますね。

三木 それがしかし現在の社会の要求している人間に一致しておりますか。

小林 一致していないでしょうけれど……。

三木 一致していない社会を一致させよう、働きかけようという気持ちは出て来ないですか。

伊藤 僕は確信がないとそういう気持は出て来ないのぢやないかと思うね。小山君の話を聴いておると、あまりに個人的なという感じが起きないのです。

長谷川 この悩みは学生だけでなく、インテリゲンチヤの共通の悩みですね。

★解決の鍵は何処に

三木 それはどういうものが解決すると思えますか、例えば、政治というものが、根本的に変わらなければ解決できない問題ですか。

伊藤 政治が変わるからこつちも変わるという問題

ではない、要するに自分自身に対して正直な行動をするということが解決して行く道ぢやないですか。こういう転換期だから一つの指導精神は確かに必要ですが、そういうものは何も今更求めなくても、現に日本に存続しておる、大化の改新にしろ、明治維新にしろはつきり云えば尊王精神というものは日本の一つの大きな指導原理で、これから発展して行く政治とか経済とかの問題は、自分の立場には何も干渉しないと思うのです。

小山 僕の友達で女子大の英文科にいた女ですが自分の生活に嫌らなくて女子大を中途で止めて、それから社会的関心などという気持からでなく、家庭におつては自分の生活に規律ができないというので、母親の反対を説得して職業婦人になったのです。私は何ができるかと高を括っていたのですが、働いている場所は理化学方面の会社でしたので、今度研究所が出来て、鉱物を分析する顕微鏡

をのぞくのは女の観察が細かいからいいだろう

と、そつちに廻されることになり、盛んに理化学の本を読んでいるのですが、そういう人は偉いと思うのです。時代の思想を現に克服して今生きておる生活をしているのです。吾々の生活は一つの実践でしかないのですから、そういう志を生かそうという覚悟さえつけば、自分独りがカンカンになつて考える必要も無く、協同生活の中に自分自身が生かされると思うのです。

三木 そこに大きな問題があろうな。つまり或意味では、自分の生活だけを小ぢんまりと一つの秩序のあるものにして行くことは、これは一定の範囲内に於ては、やろうと思えばやれる。しかしそれには安住できないところに、何か反撥するものがあるのぢやないかと思うのですが、あなたの覚悟は決つておるというが。

小山 決つていないが、見通しだけは分るというん

です。

三木 見通しとなれば、今後の社会はどう変わつて行くかということを含んでしよう。そういう一つの見通しは学生諸君が持つておりますか。

長谷川 一般としては持たないですね。

三木 持つておる学生のパーセンテージは多いんですか。

長谷川 少ないでしょう。

三木 大きな問題ですね。その意味に於ける社会への希望をドンドン云つてください。

★社会への希望

長谷川 ドイツの大学のことを聞いたんですが、ドイツではどんな主義、学説に対してでも自由に研究させるらしい。そうしてその学生を一つの学問に集注させる、その理論を学ぶことに依つて、新しいものを創り出すという傾向があるぢやないか

と思うのです。日本の大学などでは、殆ど認められていない。女のひとなんかは花嫁学校に行くというのが一つの嫁入道具として品物みたいに扱われておると思うのです。もう少し教養としての学問をして欲しい。一般に日本の女性には知性が低いぢやないかと思うのです。人形的存在の形式を捨てて、もつと進んで新しいものを創り出す。建設的意欲がほしいと思います。

小林 その意慾はありますが、女の学生一般には方向が分らないのです。

戸澤 そういう意慾を持つておつても、家庭の親達（おやさま）がそれを認めてくれないことがあります。やはり一番無難なのは花嫁学校に入つて従順な、今までの女の人になるのがいいということになります。

長谷川 確かにそうなります。僕等の方の学生についても云える、新聞記者になりたいという友人が「新聞記者になつても飯が食えない」と親達から

反対されて止したのがあるが、日本の性格が、現段階以前の諸条件の混在という点から、若い人の氣持を無視したような力に左右されるぢやないかと思っています。

戸澤 今度の徴用令で勤めに出さねば引つ張られると、職業につくのを許した家庭もあるが、就職なんかしたらいい所にお嫁に行けないと云われるとまたあわてているという状態です。徴用令が出されるような時代になつて男の人達の征つた後で、結婚まで自分のできるだけのことをしたいと思ひます。

長谷川 日本の女性の知性が低いと一概に云えないのは、家庭の条件が悪いから、これを高めようという意慾が潰れるので、日本の家族制度の弊害もある。僕の友人でベーベルの婦人論を盛んに読んでいて、一般の人と違った女性觀を持つていながら、自分が結婚する場合は、平凡な奥さんを貰つ

てしまったのです。

戸澤 私はいずれは家庭生活に入りたいと思うのですが、こういう時代に直ぐ結婚をするということとはなかなかできないので、自分で研究をする傍ら、少しでも足りない所をお手伝いしたいと思っております。

小林 英語に徹して、果して日本人として生きられるでしょうか。

長谷川 それは生きられると思う。それは例えば幕末から明治維新にかけて、あの喧騒な風雲の中にあつて、その渦中に捲きこまれず明治新政の基礎たるべき新しい文化の育成に尽瘁された福沢先生のその態度がいい例だと思います。そのことは、当時は論難されたかも知れませんが、今日いかに有形無形に大きなものを与えられているかを考えた時、仮令今、英語が直接役立たなくてもそれへの努力を惜しんではならぬと思います。この際英

語をやめて政治運動へでも直接乗り出すというのなら、話は別ですが、私たち学生は政治運動に携わることを許されていない。しかも私たちの与えられた範疇で新体制に充分協力出来るのだし、そういう意味で厳に輕挙妄動を慎んで、今こそ英語なら英語に努力すべきだと思います。英語の技術というものの体得は決して次の時代に無駄ではないでしょう。

小林 私は生きる根本は日本精神に徹することだと、宗教みたいに思うのですが、そういうことと英語をやっておくことは……。

伊藤 それは結びつけられては困るのですが、今の時代は知識とか教養とかいうような問題ばかりでなく、やはりインテリゲンチヤの知識とか教養で教えられてきたものが、こういう時代になって、高度の国家というものを通して、人間に還るといふような道を通るのぢやないですか。

★学問への情熱

阿部 皆さんのお話を伺っていると、男の学生の方は学問そのものに情熱をお持ちになれないようにも聞えますが、情熱を持つて進んで行くこととはできないのですか。

長谷川 学問というものがあまりにも現実と切離されておるから情熱を持つてうとしても持ち得ないということがあるじゃないですか。

三木 寧ろそうではなく現実と近づきつつあるのじゃないですか。(笑声)

長谷川 例えば経済原論を教わると、その教わったことが社会に出ると、直ぐひっくり返ってしましますから、こういう時の流れの激しい時代には、そういうものに集注するだけの熱情がなくなってくるのぢやないかと思うのです。

伊藤 教育方針というものが間違っておるのぢやな

いかと思う。例えば数学にしても、人と社会と数学というものが遊離して、冷たい感じがして嫌になります。そういうことはやはり教育が間違っておる、数という自然科学に対して、僕達の先人達が、迫害の中にあつていかに戦つて来たかという、数の対する歴史的な意味を最初教えるべきではないでしょうか。経済原論の場合でも、論理しか教えられずにいて、その遊離した觀念が学問にあるので、僕達の情熱が失われて行くのぢやないか。本当にそういうものをよく知っておる人から話されて見ると、少なくとも情熱を感じざるを得ないと思うのです。

小林 歴史的な過程とか、ローマンスとかいうことを先ず教えられねばならなかったのに、女学校の教育でも、その上の教育でも、それを教えるより先に技術を専ら注ぎ込まれたのですね。

戸澤 でも若し私達の時代の悩みが解決つかないな

ら、何か他の方面から解決の方法を捜して行くという意欲がなければならんと思います。

三木 解決の転換はどういうところから来ますか。

伊藤 三木先生何か仰ってください。

★学生生活態度

三木 結局我々は社会の中に生活しておる訳だから、今の場合自分を確立するということだけに行ってしまう、自暴自棄という所迄行かなくても、自分だけの小さい世界を造り、そこで自慰的生活をしておることになってしまう危険があるのです。自分を確立することは、これは非常に必要なことだけでも、自分を確立するということは、ただ自分だけでできる訳でない。社会の中で自分の生活を確立することを離して考えれば、結局それは言葉は非常によいが、生活の実際の気持としては、冷笑とか虚無とかいうものに近くなっ

て来る。現在の煩悶を解決するということは、それはどうしても自分で解決しなければならぬ問題だが、同時に又社会が変わって行くという一つのことが必要ならば、本当にならないと思うのです。個人主義だつて、個人主義時代に於ては個人主義ということと社会的のものが一致しておつたのであつて、個人主義の立場で自分というものを生かして行けばいいというようなことで安心でき、又それに十分社会的意味もあつた。しかし今ぢやそういうことができない訳ですから、どうしても社会的に自分を自覚して行くことが必要だと思う。その場合にやはり社会的に行動するという一つのことが必要な訳です。しかし今いろいろ話があつたが、社会的に行動するためにはいろいろ制限がある。例えば政治的活動の自由を許されていないということが学生諸君ばかりでなく、一般国民にもある訳だ。それから婦人の場合には、もう

少し直接な、家庭という問題もあつて、それが制限を与えておるのです。これを打破つて行くということは、一種の抽象論、理想論として云えば、そんなことを蹴飛ばして行くべきだという風に云えると思う。しかしそれは一つの理想的のもので、やつて行ける力のある人はそう沢山はないだろう。やはり世間に打突ると煩悶が出て来るのが普通だろうと思う。どういう障碍もそれを越えて行くという一つのものを持ち得ないところに、現代のいろいろな人の煩悶があるのぢやないかと思うのですが、そういう場合どうすべきかということが問題になつて来る。その時にただ自分の生活だけを考え、自分の生活に秩序を与えて行くといふだけでは足りないのです、そこには社会なり歴史なりの動いて行く姿を見極めて行くことが必要であらう。そこで歴史の動き、社会の変化の見透し、認識というものが、要求されて来るので、そういう

う社会的の認識ということは、これは実践ということ迄行かなくても、すべての者が学生として求めて行くべきものであらうと思ひます。そういう認識に依つて見透しが出来れば、その見とおしの線に沿うて自分の為すべきことを決めて行くことはできるだろうと思う。直接に今直ぐ実践に飛出すといふことはできない、そういう見透しの下に自分をいろいろな意味に於いて準備をする。例えば自分の修得する技術なり知識なりが、そのために役立つようにやつて行くことも一つでしようし、或はもつと簡単なことから云えば、自分の健康といふことを注意して行くこともそうだ。学生時代はそれが主になるだろうと思う。従つて一番根本の問題は、社会なり歴史の動きの見透しを持つといふことになつて来る。そうすると、つまり学生時代にやる学問といふものが無意味でなく、自然学問といふものに對する意義も分つて来る

し、学問をするということに対する情熱も生じて来るだろうと思うのです。今は実践の時代であることは確かに云えるけれども、しかし実践ということは非常に広い意味を持つておる。或ることをやることも実践だし、やらないことも場合に依つては積極的な実践であるという場合もある。兎に角そういう認識を持つことが、実践に取つても必要だし、又これからの世界の關係が複雑になるに従つて、行動のために知識を必要とすることもいよいよ多くなるので、時には、そういう認識は非常に大きな意味を持つて来ると思う。ですからその認識の獲得が大切で、若し一旦これが獲得されるとなれば、恐らくどういふことでもが、その目的のために役立たせることができるだろう。つまり体を丈夫にすることは、これはどういふことにも役立つ訳だから、従つて体を健康にすることは、どんな時でも大事である。勤労奉仕でもそれに

依つて共同作業の精神を養うという事、或は労働の意義を認め、喜びを感じるという風に解して行けばそこに大きな意義を見出し得る。それで今必要なことは、落ちついて世の中を見極めて、焦らなくて為すべきことを為して行くといふことぢやないかと思うのです。一番いけないのは一種の神經衰弱的な状況に陥ちてしまつて、いろいろな社会の慌しい変化に引き摺り廻されて、神經衰弱が普遍的に来るといふことです。そういうものに取籠められることが、国家としても國民としても非常に危険な訳です。今日明日のことなら、本能でも主観でも足りるのですが、三年五年という将来を見極めて行くことが大切なので、そういう目的さえ決まれば、自分の技術教養をそのために生かして行くことができると思うのです。そういう態度が、今の学生諸君の生活態度ぢやないかと思ひます。ただ今の世の中は、どうも自分の思つてお

ることが云えない、活動もできないというように考えるだけなら、消極的になってしまふ訳ですから、一定の認識を以て、与えられた状態を技術的に生かして行くという態度が一番大事ぢやないかと思ひます。

長谷川 今のお話は悩んでおる学生に対してですが、全然悩んでいない、自覚を持っていない学生に対してはどうでしょうか。

★科学的思弁の問題

三木 そこにはやはり学校で科学的精神を本当に教えて行くことが必要ぢやないかと思う。簡単に云えば、もう少し厳しい考え方が必要だと思ふ。そういう厳しさを現代に於て与えるものは、一種非情的に物を見て行く科学的精神と、もう一つは宗教的な厳しさであります。生死の絶壁に自分を置いて人生を批判して行く厳しさです。そういう厳

しさがなくなることが、危険なことぢやないかと思ふのです。比較的甘い考え方が多過ぎるので、この二つの厳しさを学校で教えなければならぬと思ふ。そうすればすっかり違つて来ると思ふのです。

記者 それは学生だけでなく、一般的にそういう無関心の状態に多数がいるので、これは政治の問題としても社会一般の問題としても重要なことだと思ひます。これを追及して、何とか解決をつけることが必要だと思ふのです。今女の学生諸君から、男の学生諸君に対し、悩みの実体がはつきり呑み込まないという質問があつたのですが、女の学生諸君に、現在の時代に対する悩みは、そんなに輕くしか思つていないのかという反問が出て来るのですが、女の方の御考えはどうですか。

戸澤 悩みはありますが、どうしても時代の子供である以上、将来を背負つて立つ、明日のために

立たねばならぬ気持もあります。それで女の場合には深刻な悩みを経験しないからこんな大きな口を利くのか知らないけれど、何だか男の学生の方はあまり阻まれているからどうもできないという気持、そこに建設的の気持ということが感じられなくて、そんなどつちつかずの投げやりみたいな気持になってしまったら大変だという気が致しました。本当に今の世の中は、自分自身乗切って行くのは大変だと思うのですけれども、一步でも明日のために道を切拓いて行かないといけないと私は思うのです。私達でも悩みのない訳はない。随分悩んでおるのです。けれども狭められた中で、できるだけのことを努めたいと思うのです。

長谷川 女の学生の人達が、男学生はどうして焦燥を感じるのかわからないというのは、将来自分で生活資料を得ることがないから、結局具体的、現実的な諸事象に関心を持たないからだと思いま

す。その点男の学生は、兎に角独立して生活の糧を得なくてはならないのですから、先ずいかに生活すべきかということが問題なのです。その生活は他ならないこの社会なのだし、それも単に一個人の生活のみでなく、民族全体の繁栄の為の生活ですが、それを考えた時この社会にはまだ改革さるべき大きな問題が残っている。しかしこの問題は現在の学生たる社会的地位ではどうすることも出来ない。而も優れた先輩がこの問題で蹉跌したり、神がかり見たいような人が案外中をきかせたりしている現状では、自分のもっている世界観、人生観が客観的に正しいか否か、それらを判定指導している人達も無いという有様で、それらが次第に内訌してあらゆる問題に懐疑的退嬰的になりがちなのです。国家が今このような学生を要請していないことは分っています、見方によれば国家と社会とかを真摯に考えればこそ焦燥を感じるの

だとも云えましょう。その点女の方は将来殆ど結婚されるのだし、社会に出て独自の生計を終身立てる訳ではないといったところから、結局こうした悩みをあまり持たれないのではないかと思ひます。

阿部 私など兎に角医者というものは、医者という職業の悩みに限られてしまうのですが今日の医者は無力だ、政治的にも何も動けないということも悩みの一つでございますね。

★いかに生きるべきか

三木 しかし生きておる以上何もできない訳はない。何かできると思う。そのできる事柄を積極的に発見し開拓して行くことが必要だと思う。何もできないということはない、つまりできないということに決めてかかるのが一般論、抽象論になるのぢやなからうかと思うのです。そういう風にな

ると、悩みというのは抽象的な悩みになり、一種の自棄的なものになる危険があると思うのです。自棄的な気持というものは煩悶の抽象化だと思ふ。そういう意味に抽象化して行けば、救い得るものは結局、科学的に分析されたものでは救われないので、一種の宗教的信念しかないのです。それでそういう所迄行かないとすれば、結局どういう状態に置かれても人間は生きて行かねばならぬので、生きてゐる以上どうしたつて理想的の状態はない。どんな時代でもいろいろな困難はあるから、その中で自分の為すべきことを具体的に発見して行くような積極的な態度が一番必要ぢやないかと思うのです。

戸澤 先刻私は東亜共栄圏というようにのことを申しまして、大言壮語したようで恥ずかしいのですが、数年前支那の方をお呼びした時、支那の知識階級の婦人との理解を日本の知識階級の婦人は真剣に

考えなければいけないと思い、将来できたらそういう方面にお尽くししたいという気持がありまして、学生会議などにも出まして、国際的な会合にでも若し出ることができたら、英語というものもいろいろの意味で必要だと思いますし、英語を勉強して、本当に女として真剣に歩んで行きたいという気持になつていたので、あんなことを申し上げたのです。

三木 そうだと思う。東亜共栄圏ということを、一般論として考えては大言壮語になり易いと思うのです。それにも拘らず、その中で実現し得るものがある。今の支那婦人との交歓ということもその一つだ。そういうものを発見して行くという努力を、すべての人がそれぞれの面に於てやつて行かねばならんと思うのです。そうでなくただ東亜共栄圏ということ唱え、或はそれを抽象的の論として反駁しておつては限りがない。

兎に角、東亜共栄圏とか民族の共存共栄ということはいいことです。そのために自分のやるべきことを発見して行くという、発見的態度が必要だと思うのです。自分で現代に於て生きる生き方を、何とか発見して行くという、一つの態度が尊いだろうと思うのです。

阿部 さつき私は何もできないと申しましたのは、医者として普通の診療に従事しておつても、根本的問題を救い得ないということです。

三木 ところが、根本的ということ云うのはいいけれども、それは抽象的になる危険があると思う。根本的に何もかもやらねばならぬということが理想化されると、現実に行ることがなくなつて、つまり抽象的煩悶に陥つて行くことがあると思うのですから、そこはやはり与えられた現実の中で自分の為すべきことを発見——単に一時の思いつきというでなく、科学的の認識に立つて、発見して

行かなければならぬ。科学的の認識を深めると共に、一定の与えられた状況に於て、具体的にやって行くことが必要ぢやないですか。例えばあなたの場合、日本の無医村をなくすることは、これは政治がどうある、アメリカに対してどういう外交手段をとるかということとは直接関係なしに、非常に有意義なことですな。

長谷川 秀才型の学生などは、教師が教壇で言ったことを丸暗記するだけで、オリジナリテイがない。自分の仕事を自覚することが全然ないので、熱情が湧かないぢやないでしょうか。

三木 そこは大いに考え直して行くべきものがあるでしょうね。それは本当に科学的態度ぢやない。科学ということは、現実を支配する精神です。現実を人間の可能なる力で変えて行く。客観的にも、それと逆に、現実を支配して行こうという精神か

ら科学は生れてきたのですから、科学的精神の本当のものを理解すれば、人間の力は絶対ではないけれども、与えられたものに対して現実に働きかけてゆくことで、やはり発見的、発明的にやるべきのことを考え出すという心構えが必要だと思うのです。

記者 それではここらで打ち切りましょう。有難うございました。（完）

底本：『婦人公論』1942.1

決戦政治の確立

——第五回日本評論時局研究会其の一

岩淵辰雄：1892～1975、宮城県出身、早大文科中退、自由通信社、国民新聞、読売新聞、東京日々新聞の政治記者、45年4月終戦を訴えた近衛上奏に関連して検挙される。

三木 清

菅 太郎：1904～1980、愛知県出身、東京帝国大学法学部卒、内務官僚、福井県外事課長兼特高課長、戦後、衆議院議員五期、第二次池田内閣経済企画政務次官

穂積七郎

清水 伸：1906～1987、日本史研究家、慶応大学政治科卒、専門は憲法、時事新報論説委員、東海大学教授

本紙記者

(第一ホテルにて)

政治の能率化

記者

それでは、これから始めます。政治全般の問題を中心としてお話したいと思います。初めに、今日の情勢からいつて一にも二にも決戦政治体制を完璧にすることが問題だと思われます。例えば翼賛会を現在の情勢に応じてどう改革したらよいかというようなことからお話を願ったらいと思います。

三木

そういう問題よりもう少し根本的な問題を考えなければならぬのではないかと思います。一体強力政治、強力政治というが、強力とは一体何かという問題を考えなければならぬのではないかと思います。その強力の要素も色々あるが、僕は今一番必要なのは政治の能率化ということではないかと思っています。現在の政治体制では、非常時局を乗り越えて行くための能率が非常に悪いのではないかと思います。例えば政戦一体という。これ

だってやはり見ようによつては政治の能率化だと思ふ。つまり一体化されるような機構が出来ることによつて能率がよくなる。二つのものに分れてそれが独立にやつておる。そのうちに行詰つて一緒になつて行くと、又分れるというようなことでは非常に非能率的であつて、いつでも一つになつてゐるということが能率を發揮する訳ですね。そういう政治の能率化という問題を考えなければならぬと思う。日本の政治機構ではそこが非常に複雑ではないかと思ひます。例えば内閣がある。そのほかに議會がある。それから枢密院あり翼賛会がある。そんなわけでこの能率化が欠けておるのではないかと思ひます。随つて愈々非常時局に処して行く場合に、その能率化が行われないと、結局誰がやる。やれば必らずほかの機構からその反対が出るとか、或はそれに対する批評が出て来るとかいうことになつて、又後戻りして行くとい

うようなことがこれまで幾らも見られたのです。

記者 そうすると、具体的に、その政治の能率化を図るには、どういう場所から取りかかるかということを考えなければならぬと思うのですが……。

清水 僕はこう考えるのです。枢密院があり、議會があり、色々な機関がある。これはいつの時代でも、何処の国でも同じだろうと思ひます。政党政治の時代では色々な政党が沢山分立してゐて、そういう機関の対立という点からいつたならば、今日よりひどかつたのではないかと思ひます。又アメリカなどもそうではないかと思ひます。併し結局僕はその場合問題になるのは、各政治機関それ自身が政治というものに対して果して同じ考え方なり、概念なり、イデオロギーなりをもつて本當に協力しているかということが、これが能率問題の基調として見逃してはならないと思ひます。それで、今日の問題は、政治というものをはつき

りと規定して、みんなでそれをその概念の上に組織化するなり、能率化するなりしなければならぬということになるのではないかと思います。結局政治観念というものをはつきりとして行くということが一番根本問題ではないか。ドイツあたりではドイツ民族を健全に發展させて行くのが政治だという風にはつきりと自分自身で政治というものを独断してかかっているからいゝですね。所が日本ではその考え方がはつきりしないものだから、一致した行動、つまり政治力というものが出て来ないのではないかと思います。

三木 政治学者は随分政治というものを色々いっておりましようが、併しそういうアカデミックな問題をここでいいましても仕方がないと思います。簡単にいえば、やはり国家が生存し發展して行くという場合は、自分一人つまり世界に一つの国家しかない訳ではない。色々な国家がある。つまり

一定の歴史的な環境の中に生存しているから、そういう一定の環境の中に於て国家が生存し發展して行くために政治が行われて来たかと私は思います。国家は一つの主体なんですから、その主体の環境の中での強化というものが必要であり、随つてそこに国内の統一をし、その力を集中して行くような政治技術があると思う。それから環境に対して自分の環境の中に於て生きて行く場合に於て一定の技術が必要である。丁度自然なら自然の環境の中に於て人間が生きて行くために自然を變化して行く上の技術というものがある。そういう技術と同じ技術だと思います。併しこの自然の場合と、それから社会的な歴史的な環境とは環境の性質が違ふのですから、その技術の種類が違つて来ますけれども、併し一般的に見れば、環境の中に於ける主体の生存及び發展の技術、こういうことがいえるのではないかと私は思うのです。

記者 菅さん如何ですか。

政治意思の問題

菅 そのことに關聯して、今日のような決戦体制下になつて、最も必要だと思ふことは強い統一した政治意思というものを、確立することだと思ひます。歴史が守成の段階に在るときには色々な政治意思が対立して揉み合つて然るべく何処かへ落ちついて行くやり方でよいのでありますが、民族的な大發展、国家の大進展をやらなければならぬ今日の時代にあつては、国政が恐らく明治維新に次ぐ大きな一つの飛躍的改革をやりながら行かなければならんです。そういう段階の政治ですから、内外の客觀的情勢に即するような新しい政治意思に立つて、それをはつきりと政治の主体なるものが握んでおることが先決問題だと思ひます。従来屢々客觀情勢に即応する新しい世界觀

に基く政治意思が確立しないということがよくいわれたのですが、それはこのことを意味していたと思うのです。それが出来て、そうしてその政治意思に基いて客觀的情勢に即応するような科学的な計画的な政策がそれから生れて来る。そうして生んだ政策を色々な反対や摩擦を克服して飽くまで押切つて断行して行く、而も国民大衆に理解させ協力させて、そうして国民大衆を引っぱつて行く。そういう形で徹底した政策というものを、町の中、農村の中にも一つ一つ滲み透るように具體化して行く、こういう時期でなければならぬと思ひます。

記者 併しさつき三木先生がいわれたように、日本が今決戦体制下におかれておる。もつと政治が一層能率化されなければならぬ。そういうことを申されたのですけれども、その最も政治を能率化する工作という点を追究する必要があると思ひま

す。そういう点について、菅さんからお話願ったらいゝと思います。

菅

先ずそういうのはつきりした最高の政治意思がきまつて、それに基いてこれを如何にして妥当な政策に具体化するかという政策の考究樹立という段階に於ても相当能率化の問題があると思います。次にはきまつた政策を執行して行く、殊に国民大衆の中に的確に実現して行く、これらの段階についても亦非常に能率化の問題が起つて来ると思うのです。つまり国策の確立と、その行政としての執行と、両方面に亘つて能率の問題があると思うのです。例えば企画院が段々強力になつて来た。而も企画院も最近になるに従つて益々各省は対する統制力といえますか、そういうものが段々強化して来た。各省に委せておつたのではこういう専門的な大観した政策が立たないということでも、企画院が活動することによって、企画院から呼び

かけることによって、そういう全体主義的な政策がどんどん確立されると思うのです。更に最近行政機構改革問題でこういう点を更に強力にして行くということが考えられております。それから執行の問題につきましては行政事務の戦時再編成というような目標の下に色々な改善工夫がされ、各部門々々に於て相当刷新されつゝあるのであります。例の許可認可事項を整理したとか、その手続を簡略にしたとか、そういう問題を初めとして、かなりこの方面に於て、能率化の問題が捗りつゝあり、今後、相当迅速に色々の改善が加えられると思うのです。

三木

私は政治は技術だということをいいました。それは菅さんの仰つたようなことゝ根本に於て一致すると思うのです。詰り技術的というのは第一に意思欲というものが確立しなければ成立たないと思います。そうして唯意欲だけではやは

り技術は成立たない。この環境の客観的な、科学的な認識を基礎にやらなければならん。そういう主観的な意欲と客観的な認識との総合として技術というものは積まれておるのではないかと思ひます。自然に対する技術は机なら机を造るというような場合も同じだと思います。そういうこの両面がしっかりしなければ、本当の政治というものは強くない訳です。先ず第一に一番重要なのは国民に国家の政治意思というものが本当に理解され、共感共鳴されて、そして積極的にそういう意欲を実現しようとする衝動といひますか、そういうものが旺盛にならなければならん訳です。この政治意欲というもの、政治意思というものは東亜新秩序の建設とか或は東亜共栄圏といわれておるものですが、今政治意思と仰つたのですが、それは東亜新秩序の建設というようなことです。か。

菅 やはりそうですね。対外的な問題としてはや

はり今の支那事變の処理とか東亜新秩序の建設とか、それを通じての外国の勢力を東亜から駆逐して東亜民族を解放するというそういう対外政策の手を打つのが政治の基本方針といひますか、政治の信念といひますか、そういうものですね。

三木 そういうものをどうです、穂積さん、国民に心から自分自身の意欲というものが十分に握まれているのですか。唯教えられた言葉を繰返しておるとか、与えられたものを復習しておるといふのではなしに、詰り一種の国民的な衝動にまでそういう一つの政治意思というものが国民の中にはつきりしているのですか。

穂積 詰り菅さんのいわれるのは今日大東亜共栄圏建設というやうな政治スローガンだと思ひます。そういうやうなものを日本の国民の与えられたる条件の中に於て、歴史的の条件の中でこれを生活にまで結びつけて如何に具体化して行くかといふ

ことが問題ではないかと思ひます。さつき清水さんも政治問題についていわれたのですが、政治とは何かというようなことが今日なぜ論議されるかということとは、僕はこういう風に思ふのです。その点と關聯しまして、一体如何なる国家体制が最も日本のあるべき体制であるのか。そしてそれが最もその民族の生命の發展のために強力なものであるか。その具体的な内容が甚だしく同一でないが故に、一体政治の限界はどこなのか。どこまでが政治運動で一体誰が政治をやるのかというような疑問が出て来るのではないかと思ふのです。ですから吾々は政治とか經濟とか文化の間に於ける領域をどこで學問的に決めるかという問題よりは今日この一つの統一した生命体として發展して來た日本民族の生活体といひますか、ある姿ですね。これが今日の段階に於ては一体如何なるものであるべきか。その具体的な内容が決定されてい

いが故に、色々この政治の領域ということにひつからんで、摩擦やら反動やらがそこに出て來るのではないかと思ひます。それが決まりますれば政治運動の領域とか、それから文化運動も經濟運動の領域というものも自ら解決するのではないかと思ふのです。今お話のあつた点で少し話が食違つたような感じがするのですが、例えば技術の問題なんです。技術とか能率とかいうことが、詰りそれは一つのあるべき政治体制から出て來る所の政治のファンクションの姿だと思ふのです。そうすると今日一番日本に於て問題なのは、一体國民の姿が決戦体制という現實の要請にどう顯れるか。之が肝心な問題だと思ひます。随つて今日の歴史的段階に於てどういう体制を整えるべきかということが一番その政治の意思を決定する具体的な内容になるのではないかと思ひます。さつきお話のあつた通り、東亞から白人の勢力を驅逐するのだ。

随て今日の日米戦争の方向というのは、これはもう支那戦争どころか満州事変以来はつきりしていった点ではないかというように考えられる訳です。それが日本の政治の思想史等の中に於てはそれはつきりしていなかったと思います。今度の戦争の歴史的な意味が非常に晦まされておつたのではないかと思うのです。ですから国民の生活の再編成と戦争というものが結びついて国民に握まれていなかったということに思うのです。所が今日の状態になつて見て、その上層の指導者なりインテリゲンチヤが頭の中で考えておつた今度の戦争の意義というものが、観念でなしに具体的な現実として国民の前に初めて出て来た訳ですから、そこから大東亜共栄圏というスローガンと、それから国民生活の再編制なりその上に立つた政治力の強化というものと結びついて来るのではないかと思うのです。

政治の国民的反省

記者

要するに今日考えねばならぬのは日本が如何に飛躍するかという問題と結んで政治の国民的反省は何か。これが忘れられてはならないと思います。

岩淵

その反省するというのは、これから作るものは一生懸命やられておるけれども、どうしてそういうものが必要なのか。例えば能率の問題にしてもなぜ初めから能率がなかったのか。いつ頃からそういう必要が出て来たのか。これに対する反省が第一に必要ではないですか。

記者

清水さん如何でしょうか。

清水

問題が複雑になつて来たのですが、私はこう考えるのです、日本民族が今日まで経て来た経過を見ますと、やはり大きな世界史的な必然の上に發展して来たと思うのです。満州事変以来、支那

問題、それから日本の世界経済上の地位とか色々な角度から見て、日本は一致結束して日本自身の生存と発展を期するということは、それはもうしなければならなかったことだと思えます。所がその当時国内情勢は、資本主義の建設されたる、又思想的には自由主義、個人主義の考え方に依て支配されておった。そして政治体制もそのように進んで来た。所がそういうような大きな国家的な意思のためにそれが又国内の自由主義的な、資本主義的なものと離れて外へ飛出して、そしてあとになってその大きな国家意思、民族意思というものを遂行する考え方では、力がだんだん強くなつて、そうして国内の体制をその方に改変して行くという過程を今までとつて来た。所謂ごてごてのようなものが殖えたのではないかと思えます。それでさっきの政治理論の確立とか、政治理論を統一するとかいう問題は、そういう今までの自由主

義的な個人主義的な政治観を、総力戦的な一致団結した理論及び態勢に切り換える。そのために起きた混乱だ。そういう基本的な問題に触れて来たと思えます。ですから僕の不完全な理論の問題を取上げていえば、今までの政党政治、具体的にも政党政治ですが、そうした議會を中心としたばらばらな政治を全体主義的な総力戦的な政治に切り換える。そういうためには、政治というものゝ考え方を、今までの権力の上に政治を遂行して行つたら、一部の政党支配といったようなものの羈絆からもつと全体主義的なものに發展させる。そういう所に問題があると思えます。そのためにはそういう政治理念というものをこゝで皆で共通に把握して進むということが問題になつて来ると思えます。それがその上に技術的な問題が決まりさえすれば、技術的な問題はほとんど片づくのではないか。その切り換えを今やりつゝあるのではない

かと思ひます。それからそのあとは僕の独断ですが、そういう総力戦的な政治というものを考えました時に、今までの議會中心ではないかん。部分的な政党ではないかん。そういうことになつて来ると陛下を中心として吾々がそれに全能力を結集するような体制を作る。そのためには政治というものは昔からいわれておる本當の政という考え方に皆がなつて来るのではないか。ドイツでは先程も申上げましたが民族の發展を図る色々なことが政治だ、というように独断的に考へてそうしてそういうようにぐんぐん引張つて行つた。日本の場合は政治とは政だということで陛下の意思を國家の意思としてそれを受継いで、そうして下から盛上つて行くのだというやうな、そういう何かプロパ[proper]な独断的な考へをこの際はつきりと打捨てる必要があるのではないか、そんなふうな氣持があるのです。

穂積

今まで詰り情勢に引摺られて來た日本の政治を、今度は情勢に一步先んじてこれを指導し、體系化し、計画化して行く所の政治意思というものが要求される訳ですが、その政治意思というものはさつきからお話があつた通り、その單なる觀念的な政治意思でなしに、具體的な指導力を持った政治意思というものは、或る上層の個人の頭の中や書齋の中で出來上るものでなしに、もつと具體的な政治生活の過程に於て出來上るものであらうと思ふのですが、それが今までの日本の政治体制の下に所謂拳國一致内閣というから、そういうものが要求される。特に昨年から新体制運動、翼賛會運動というものが出來たのですが、この短い時間に於ける日本の一つの政治活動の経験から考へて見て、そういう具體的な指導力を持った政治意思というものは一体どこから生れて、如何にして構築されるものであるかということについて、

さっきの菅さんのお話を少し前へ進めて戴いたら
どんなものでしょうか。

菅 どうですか。あなたの御意見から一つ……。

三木 併しもう現在の段階に於てはそういうことよりもつとイニシアテীবをとっているように実はとつていなかった状態がそこで初めて決まつて来るのではないかと思うのです。詰り本當の觀念の上でない一つの政治意欲というものが初めてこゝで決まつて来るのではないかと思います。そういう段階まで来ているのではないかと思ひます。

岩淵 来ているでしょうね。

菅 ですから穂積さんのいわれるのはそういう政治意思を生む。生んだものをやはり的確に具現化して行くというそういう勢力がどこにあるか。その組織をどうするかという問題ですね。

穂積 そうです。だから今日ある所のこの行政機

構なり組織の一部分を技術的に手をつけて改変する、そういうことで今日要求されておるような指導力を持った政治というもののは出て来ないと思ひます。例えば第三次近衛内閣が去る時の言葉に、内閣に於ける意見の不一致ということがいわれたけれども、これは国民にいわせれば甚だ心外な言葉だと聴取つておる訳です。特に戦争が始まつてから、挙国内閣でなければならん、それから新体制の指導者であつた近衛さん自身が、それ以後は特にその一億一心でなければならんといつて要求して来た方が、たつた十人足らずの内閣で、而もこの重大な時期に臨んで閣内の意見が不一致な所まで来たから政治を投げ出すのだという言葉は、甚だ心外だと思ひます。所が問題はそこに上つていないので、そこに近衛さんの今の言葉を單なる得手勝手な言葉と聞くのでなしに、近衛さんがちよつとセンチメンタルな所もございますが、最

後に残した政治的な良心の所から出て来た言葉だ。言換えれば求むべからざる所に政治の統一を求めてもいつまで経つても求められないということとを、国民は今日自覚しつつあるのです。ですからそこから今いわれた統一された政治意思というものの、而もそれが指導力を持ったものとして一体どういう形で始めなければならんか。そこに今日の具体的な政治の問題の中心があるのではないかというふうに思います。

政治の科学的認識

三木 一面に於てそういう主体的な意思の確立という問題が差迫つておると共に、逆に考えれば支那事変以来内閣は非常に沢山送^かつたけれども、結局皆同じことをやっておるといふことを考えて見ると、詰り唯の意欲だけではないかん。客観的な要請、必然性というものがある。そういう必然性の認識

が足りなかったから、認識力によつてこれを克復するという自覚なくして、結局内閣は始終送り新らしいことをやるようにいてやはり同じことばかりやっておるのは、これは客観的な必然性に押されておると思います。ですからこの客観的な必然性をもつとはつきり、所謂主観的な希望を混じえず、もつと詳しい科学的な認識の下に立ち、然る後にそれを活用して立直つて行くというような所が、不足という少し語弊があるかも知れませんが、でも、認識の不十分ということが大分あるのではないかと思います。例えば支那事変に対する見通しというものの、或はヨーロッパ戦争に対する見通しというものの、それから人生、人間に対する見通しというものにつきまして、実際に於て僕らは非常に自分勝手な見透しをしておるのではないかと思います。詰り非常に主体的な見透しで客観的な見透しでやらないで、自分の希望だけに頼つてい

たというような考えがあつてそうして一度やはり冷酷な科学的な認識によつて、逆に現実に支配出来たのだというそういう考え方をもう一度回復しないと、詰り主観意思というようなことばかり強調した所でやはりそこに一面性が出て来る危険性があるのですね。現在に於てぎりぎりの所に押込められたというものは或る意味ではどうしても自分の意思を確立しなければならぬ。生きて行かなければならないという、謂わば反動的な意欲の確立ということが必要になつておると同時に、やはり今度は現実をはつきり見ざるを得ん状態にまで来ているという事もあるのですね。そこに国家の立直りのモメントが掴まれると思うのです。それを掴むということが政治の一番重要な現実だと思ひます。

記者 そういう意味で新しい政治の理念というのは、清水さんのいわれたこととは別に国民がよ

く知つておると思うのです。それは理論的に学問的にどう体系づけるかということは分らないのですが、今日どういう政治が国家的に要請されておるかという点に就いては国民がよく知つてゐるのではないか。そういう国民のいゝ所をキャッチする所に初めて大政翼賛会のなすべき仕事があると思ひます。そういう点を岩淵さんと穂積さんに願ひます。

岩淵 国民がそういうものを掴むと同時にこれは政治をやる方が掴まなければならぬ。

菅 併し今与えられた条件の下でどういう風にして今いったような政治力を結集して行くかということを見ると、翼賛会は兎に角一応出来たけれども、色々な意味に於て骨抜になつてしまつて、非常に国民の失望を買つておる、今度壮年団結成という問題で今一度筋金を入れて建直しをしようと思ひます。斯ういう所に一つの足場があると思ひます。

これを中心にして政治力結集と政府が声明して
おる通りに新らしい世界を建設する、外に向つては
東亜新秩序を建設して行くという、これを中心
に固まればいい。

記者 併し翼賛壮年団¹の現状はそれに答えています
か。

翼賛壮年団の新課題

菅 壮年団の中央本部をこれから造るのです。今日
でも地方の方はどんどん造っておりますよ。これ
は今からやれば稍々不満足な所があるし、御批判
の所はあたるかも知れませんが、この問題は今後
の問題ですよ。

記者 何れにしても国内体制を一層整備する。そう
いうことを先ず今日の内閣そのものがやらなけれ

1 有事の際には国土防衛の民軍的役割、国防思想の普及、
銃後奉公活動の強化を掲げ官・軍が進め、翌年の選挙に介入。

ばいかんと思います。そういう意味で所謂大政翼
賛会でもいゝ。或は翼賛壮年団でもいゝ。本当に
そういうことをやって欲しいと思います。

三木 それはそうです。

菅 今まではその肚がきまらなかったから、問題は
停頓して居た。しかしそれももうきめなければなら
ん段階です。

記者 僕のは、国民は、日米が戦う以上、そ
れをきっかけに国内体制を整備してくれ、そう
いった要望が強いと思うのです。

菅 やるように持つて行つたらどうですか。吾々は
指導力があるから、中堅の者がどうしてもやらな
ければならんという意思を持つておれば、やはり
そういうことになる。日本はやらなければならん
という状態になると同時に、明日を背負うような
政治意思を造るものの勢力があらわれて来ればそ
こまで引っぱつて行くですよ。

岩淵 これはこういうことになるのではないですか。今日の段階は日本の為政者というか、実際の

政治を指導する立場にいる人達がそこではつきりした決断を持つという事だ。

記者 もう少し政治組織の問題を検討して下さい。

三木 それがためにはもう少しイデオロギーというものをなくして、もつと技術的に解決して行くというような考え方で行つて解決出来る問題が沢山ある。そうしてそうすることによって又イデオロギーが生きて来るというような考えで、問題をもう少し考えなければならぬ。これまではあまりイデオロギーに因われたのに、そういうために使うべき力というものが使われてないというようなことが随分あると思います。ですから国民の総力を合理化して使うというそういう見地からだけでもやって行けば十分改革出来る問題が沢山あると思います。

穂積 本当の識見と力を持った者が出て来なければ

いかんと思います。

岩淵 今も僕はこう思いますね。日米戦という未曾

有の歴史的危機に臨んで一切が更新されることが一番肝要だと思うのです。

三木 私もそう思いますね。そういう点では……

穂積 それをずばつと立ち切つて、こゝで立ちかわつて来るというのでなしに、バトンを受ける者が、それは第一の緩衝地帯が大政翼賛運動ですね。

記者 僕の方は翼賛会や壮年団を非常に鞭撻して居りますよ。今日でも多大の希望をもっているし、またこれへの協力については些かも吝でないです。三木さん、翼賛会の強化策についてどうですか。

三木 国策は兎も角として、現実の足場は只今の所は翼賛会しかありませんね。

菅 改組されるべき翼賛会ですね。特に新に組織さ

れるべき壮年団ですね。

穂積　そこでさっき菅さんの言葉の中にもあったのですが、翼賛壮年団というものを一つの足がかりとしてフルに出来るだけの限度に於て活用するというのは大賛成です。そういう意味で何処にということではなしに凡ゆる問題に於て活用をしなければならんと思います。そこで翼賛会並にそれに関連する所の翼賛運動にしても私はそういう意味で非常に期待をかけて居りましたが、唯一の最後の切札だという風に見ておるのです。そこでこの翼賛運動の性格というものに吾々は一応の見究めをつけておかねばならんと思います。それも唯古い方程式でござってやっておるのではないかと思います。私は翼賛会の出来た時からこう思ったのです。翼賛運動というものは明治維新に比べるならば明かに効果があつたと思います。この全国民を旧体制の抱合したような形で、そのも

の自身が日本の本当の指導力を建設する中核的な主体者にはなれない。所がそれぢや全然無意味かというところという意味でなしにこれは新しい政治力が生れるための一つの前進堡壘として活用する。所がこの翼賛壮年団なるものは結局誰によつて指導されておるか。こういうことになれば換骨脱皮された本部ということになって来る訳です。こゝに中央指導本部なるものが出来まして、そこに非常に高い積極的な指導方針が出て来るかというところ、そこまで期待するということは余りすぎると思います。そうなると全部駄目かということになりますけれども、公武合体運動というものはやはり中央に筋金が入つておつた。薩長土肥の本当の中核的な者が盛んに繋がつておつたという形であつたのですが、これが翼賛会に於ては不幸にして逆に反動的なものにこの堡壘を取られてしまつた。そこでこれを盛りかえすということです

が、その場合に飽くまでもやはりこういうことを私は今日の地方に於て進んだ連中はさつきいった通りに翼賛会をそういう性格に於て掴んでおると思います。一応の結論を出しておると思います。そこで翼賛会運動をやるという場合に、この翼賛壮年運動を客体として考えておる。そしてこの生活部門の方がこの運動の主体となつておる。そこで主体と客体とを利用するというと語弊がありますが、これをフルに活用して行く。そういう気分が出て来ておる、そこで結論をいえば私もそう思うのですが、バトンを受取る体制ですね。その運動はあゝいう段階に於ては特殊の体制で行かなければいけない点があると思います。それでずつと持つて行く。そういうことになる、翼賛会の内であるとか外であるとか、職能組織であるとかそうでないとかいうような問題を遙かに超えて、総ての問題が民族の当面している危機の現実という

ものを掴んで初めてそこに横の連絡組織というのが出来て来るのではないかという風に思います。そういう点を考えますと、本当の政治というもの、下の方からは出て来ないで上の方ではやり損いもありますし、それからなまぬるさもあると思います。そこで上も下もお互に転嫁せずに自分自身の責任としてやつて行く。そういう国民的な気持ちに成り切つた態度が必要ではないかと思ひます。そういう用意が皆出来つゝある。それが日米戦争というものを希望でなしに現実として見て、そうして戦つて行かなければならん。そういう所から初めて日本の新体制運動なるものが出て来ると思ひます。

岩淵 翼賛会は今度はどんなふうに変更するのですか。

菅 それはどこまで進んでいるか分らないのですが併し壮年団本部はこの間までいっておつたのは、

翼賛会の内部に指導局を置くという意見でした。それでは今までの観念的のものでありますが、思い切って団本部と断った方がいゝのではないかという論も強いので、翼賛会自身も将来壮年団よりはもつと澆刺としたものとして外廓ではあるけれども、独立した本部を持つて行こうではないかということです。私もその方がいゝと思います。

穂積 外廓ということで行けば外に置いた方がいゝと思います。

記者 その翼賛壮年団が新らしく運動を展開する上に於て、来年【1942昭和17年】選挙があるのですが所謂解党政党的の問題をどう解決するのですか。

選挙の問題

穂積 翼賛壮年団の選挙運動をやったらいと思えます。併しそれは本当はいかんといいことになつ

ておりますが、その点は兎に角少し手綱を弛くしたらいいと思います。それが翼賛壮年団を動かす唯一つの途だと思ひます。

菅

政党の問題は内務省のものになりますけれども、一体政党の復活を認めるか認めないかということです。今までのことから行くとそう政党が復活するとは思わんです。そうなると結局今政党としては東方便¹だけある。他にもう殆どないですね。

そこで国の方針として、政治家に於ては所謂自由主義的な分立した政党が議會に於て部分的に争うというそういう政争は許されない。そういう政党は認めないということになれば、それで仮りに翼賛会としても、併し全体の政治を刷新する。やはり全日本の民族の興隆を背負つて立つておるといふこの翼賛壮年団というものがそういう意味で

1 中野正剛の主催する政治団体、一旦は翼賛会に入っていたが、この時は離脱し、この翌年選挙後は再吸収される。

立つて政治運動をやつてもいい、と思います。治安警察法にいう政治の結社でないというけれども、それで政治運動をやれないということはない。今いったようにそれこそ高度の政治性、そういう意味の政治運動は私は大いにやつていい、と思います。これが具体的に選挙法にいう選挙運動をやつていゝかどうかということは、選挙の解釈で決まるでしょうけれども、兎に角いゝ人を出して地方の政界というものを綺麗にするという、そういう運動は当然乗り出していい、と思います。

岩淵 来年選挙をやるのですか。

菅 やるだろうと政府が新聞にはいつておるのですが、正式に政府が声明したのではないですね。

清水 翼賛運動は一応の姿勢としては出来ると思いますが。併し例えば次ぎの選挙にどういふ人を出すとか或は日本の経済機構の問題とか経済組織の問題とか、そういう具体的な問題について、翼

賛会は何かしら一つの決定をして立上ろう。例えば利己主義排斥とか或は具体的な問題に立つて動こうとすると、そこに時代というものの大きな実際的な制約を受けるだろうと思います。唯翼賛会というものが一応形の上で出来ることは技術的にそんなに困難なことではないと思います。併し実際の経済生活とか具体的な政治活動に乗り出す時に、大きな問題にぶつかつて来る。

穂積 そこなんです。だから翼賛壮年団に何をやらせるかということです。

三木 それにはやはり政治的な綱領を掲げなければならぬ訳でしょう。兎に角政治運動をしようということがありますね。

菅 今までのように翼賛会はなるべく精動のようにして政治運動はやらないのだというのでは御話にならない。政治運動をやる以上ははつきり新日本を建設するという政治的方向を持つて之を大綱的

に表明する綱領を持つことが必要と思います。それをやらないなら殊に壮年団は意味をなさんと思ひますよ。

穂積 その場合に於ける政治運動というものが又選挙の問題と関聯して来ると思ひます。名目だけは今までのような政党でないとしても、外面的な議會主義的な考え方で選挙運動に臨むとなればこれは相當な問題だと思ひます。翼賛壮年団の基本的なものは結局私は国民生活の再編成をやらなければならんということになると思ひます。そこに於て、經濟問題に於ては無論生産力増進運動だといふような運動をやる。それから三木さんがさつきいわれたのですが、政治の能率化の問題が提案されたのですが、それと同じように今日具體的な問題をとつてそこでやつて行くと、そのやることが既成政党を根本において解消せしめることであり、同時にそれに代つて新しい政治力、議會勢

力の地盤というものが初めてそこへ出て来る。今までのように既成政党の古いものに代つて、新しいものが出て来た。議員というものは結局、国民の生活組織にはいつたものであつて、ちよつと氣の利いたことをいう位の人間であつてはならんと思ひます。そういう基本的な生活組織の再編成をやつて一つの条件としては、議會に於ては旧政党に代つたものが出て来る。その点が本末顛倒されるといけないと思ひます。それからもう一つは來年の選挙について、若しこの儘の形で外の方から、選挙の周旋運動だけをやつて宜しいというやうなことをいつたら、翼賛壮年団運動は來年になるとがらになりますよ。既成政党に逆にひつくり返されて混乱してしまひます。翼賛壮年団運動の統一というものは出来ません。それからもう一つ重要なことは、今までは危機々々と盛んにいつているがこれは觀念の上の危機ですましてい

たのです。所で世界戦争に一步足を踏込んだということになる。と今までのような生活の問題とか本当にそれに触れた政治の問題を遠ざけておつた翼賛会がそれに手をつけないということをしていても、それは出て来ますよ。内務省でそれを認めても、法律の上に於ては政治結社でないということであつても、具体的なそういう団体がどんどん出て来ます。それに対していかに対処するかということが問題だと思ひます。寧ろそのものが国家の危機観に立ち、そうしてその本当の情熱の上に立つておりますからそれをいくら抑えようとしたつて抑えきれんと思ひます。だから翼賛会を中心として立つその思想政治団体を統一したいという希望を持つておつたらもつと積極的に国民の要求する、而も国家が今日要求しておる所の政治力の強化の点をもつと勇敢に翼賛会自身が足を踏込んでもつと高度な指導性を持つということではな

ければ、これは嘘ですよ。そんなことでは到底今までとつて来たような考え方を以てしては、到底今日の政治、国民の真摯な要求というようなものを満足せしめることは不可能だと思ひます。

決戦政治の確立

清水 私はいこう考えます。翼賛会が行く所まで行くには色々な段階を経るだらうと思ひます。今いきなり翼賛会壮年団を作るとします。そして次の総選挙を期して候補者を出し選挙をやると思ひます。これに便乗して既成政党の人達が乗出して来ると思ひます。その場合に俺は賛成だからといつて飛込んで来る感心しない代議士、これを阻む表面上の理由はないと思ひます。いざという時に結局翼賛会というものに最初はあまりそういう高度の政治経済に対する期待をかけることは、結局部内抗争のようなことに発展しはしないかと思ひます。い

まの段階では余り高度の期待を持つと失望せざるを得ない。そこで第一の段階として翼賛会というものがない一応こゝで国民が一本になる、そうして決戦態勢の中で政府と一本になって政府の政策に協力してゆく。その程度に僕は発展すれば第一の成功だと思っています。その次に起きて来る問題は高度に国内生活を刷新し、経済生活の凡ゆる部門の刷新をする。その時に具体的に人が落ちて行くだろうと思います。その時に残る人が本当の壮年団であり、翼賛運動というものを作って行くのではなからうか。一応こゝであまり高度のことを期待するということは混乱が来はしないかという心配があるのです。だから政府と唯協力するという点だけが最初のステップで、今度は實際的に政策が動いて行く時にこぼれ落伍する人間が出て来る、結局本当のものが残るといふようなふうになつて翼賛会というものが本当に発展して行くの

ではないか。そういう二つの段階を考えなくてはいけないのではないかと考えています。

穂積

併し戦争の段階にあるのですからその二つのステップの考え方というものがもつとせめられてしまうのではないかと思います。それをもつと高度化するものを要求して来ざるを得ないようになっているのではないかと思います。

菅

その壮年団のやる政治運動というものが生活面の中に根を下して来なければならんということは全くその通りですね。やはり政治運動といつても地盤というものをしつくりと日常生活の中に食込んだ形態で発展せねばならんと思います。それは今のお説の通りだと思ひます。

岩淵

こういうことが起きて来ないですか。政府に協力するということは政府も希望するだらうけれども、実際にやった時は国民の生活の面にびつたりと一致して来た時は所謂政治を批判する要素が

出て来ないですか。

穂積 出て参りましょうね。

岩淵 その批判の要素が出て来た時にバトンを受継ぐことになるのではないでしょうか。

穂積 それを批判する要素というか政府が向う政策の方向よりも更に高度なものになります。民の要求する気持は始終あるですよ。

菅 それが始終政府に向つて要望する。所謂下意上達の形で政府に通ずる。

岩淵 その要望に政府が応じ兼ねるようでは面白くありませんね。

三木 それ程強い要望でなければならん訳ですね。

記者 それでは時間も遅れましたから、これで終りたいと思います。今日日米戦を控えて吾々国民の政府に対する信頼を一層強めねばならないと思います。従つて大政翼賛会や壮年団の役割も倍加して来た次第ですが、吾々も一層これへの協力を積

極的にしなければならないと思います。色々有難うございました。

底本：『日本評論』1942.1月号

占領地の経営

松前重義：1901～1991、熊本県出身、東北帝国大

学工学部卒、官僚、戦後社会党から衆議院議員。

東畑精一：1899～1983、三重県出身、東京帝大農

学部卒、東大教授、昭和研究会、戦後農政審議会

会長など。

佐藤弘：1897～1962、大分県出身、東京帝大卒、

経済地理学者、東京商大教授。

三木清

小山栄三：1899～1983、東京帝大卒、社会学者、

新聞学。

大岩誠：1900～1957、東京出身、京都帝大卒、政

治学者、滝川事件で京大助教を辞め立命館大学

へ、のち満鉄調査部。

大東亜の資源

記者 大分戦局も拡大しまして、直ちに問題になる

のは、軍事行動の直ぐ後に続いて占領地を如何に経営するか、満州に対する経験、中華民国に対する経験、そのままで今度も押して行つていゝのか、斯ういうことは直ちに国民一般の直ぐ日程に上せて置いて常識を養つて置かなければならんのぢやアないか、そういうように考えられるものですか、未だ一寸はやまつて居るかも知れないが、今晩斯ういう座談会をやつてみたいと思つた次第であります。

それで甚だお忙しいところを皆さんお集り下さいまして有難うございました。

御迷惑ながら大岩先生に進行と申しても何んですが司会をして戴いて御自由に御会談下さいますようお願い致します。

大岩 では進行係を命令されましたので一言、一寸

御挨拶申上げます。大東亜戦争の進展もいよく、去年の十二月八日から決戦期に入りまして我々が常に感激致して居りますような戦果と共に南アジア及び太平洋方面は着々皇土が拡げられて行く訳であります。そこで問題になりますのは、この戦争の目的すなわち十二月八日の大勅に仰せ出されました東亜の安定、従つて世界の平和を確立するために御奉公いたすにつきまして、先ず日本が高度の国防国家を建設するために必要な戦争資源の獲得、それから、もう一つはその資源の獲得を確保する意味に於きまして、従来、米英の圧力の下に呻吟して居た東亜諸民族を解放することが問題になる訳であります。そこで、直ぐ今日の話題であります「占領地経営の諸問題」というのは、今申した資源の獲得、それから、それを十分に確保するための政治的の措置、それには勿

論さまざまの政治の問題、人口問題とか、或は社会組織の再編成といったような問題も起りました。うが、これらを包含する大きい意味での民族問題を如何に取扱うかということも当然問題となつて来ると思ひます。かような問題を御参列の諸先生方から御自由にお話を願つて、読者諸氏の参考に供したいと斯う思う所以であります。お話を願ひます。

順序といたしまして、先ず最初に資源の問題の概括的な御説明なり、また特に重要と思われる事柄なりについて佐藤先生にお話を願ひ、それから次第に今申し上げた諸問題についてお話をすすめていたゞきたいと思ひます。

佐藤

今、大岩さんから、お話になりましたように、この新しく東亜の経済政策をやるにつきまして、その基礎づけと申しますか、根拠づけと申しますか、それは今のお話のように、この東亜民族が、

自覺をもつて大東亜意識に目醒めて行く、ということを経済的基地を、或は拠点を獲得するということを第二の条件にして、この基地の獲得がなければ経済政策は成り立たない。この基地を獲得致しますと、これに附随致しまして港湾であるとか、内海であるとか、その他の地理的条件はひとりでこれの中に入つて参りますから、先ずハワイであるとか、マニラとか香港、シンガポールの如きはこれは日本の領土にする。この基地の獲得を第二の条件と致しまして、第三は重要な資源の獲得を行うことです。この三つのことを、経済政策を行うにつきまして、基礎的の条件と致しまして、この上に、新しい「大東亜国土計画」なるものを樹てる。そこで、どういう具合にして樹てるか、という問題になるのでありますが、これは時間的の見透しと場所的な点から見るのがよくはないかと思いま

すので、時間的見透しでは現在今日緊急にやらなければならんこと、来年やらなければならんこと、或は二、三年先にやらなければならんことがありますので、それを分けてこゝで論じたらどうかということと、いま一つは各地域別に問題を取扱つたらどうかという二つの行き方があると思います。そこで、先きほど御注文の資源のことで、非常に範囲が広いのですがこれを大ざっぱに申上げてみますと、今日のこの東亜共栄圏で我々が動員する物資と、それから、動員しない物資との関係をどうするか、例えば石油を我々が使うと、その外ニッケルであるとか、ゴムそういうものを使う、そういう関係と、今一つは非常に共栄圏で余る物資がありますから、余剰の物資と不足の物資の関係をどうするかということが資源から来る大きな問題と思うのであります。そこで有り余る余剰の物資をずっと、北から見てもみす

まア日本では御承知の通り生糸が非常に余りますし、満州国では大豆、支那では桐油〔#植物油の一つ〕とタングステンとアンチモニー【antimony、アンチモン】がありますし、それから馬來半島〔#マレー半島〕ではゴムに錫、南の方にかけては矢張りゴム、錫、椰子油、砂糖にカボックとありますし、それから例のキニーネ²がありますし、フィリッピンのマニラ麻、斯ういったものが所謂対世界生産の五〇パーセント以上を占めて居るので、この余り方が非常に大きいのです。ゴムに一例をとつてもゴムが東亜共栄圏で百二十万トンぐらい取れますので、その内で日本が使つて居りますのは僅か〇万トンでありますから、〇万トン以上余りますし、砂糖に致しましても台湾が〇〇〇万トン、フィリッピンが百万トン、ジャワが百五十万トン

1 パンヤの木の種子からとれる繊維
2 戦前はマラリアの特効薬であつた。

で、全体で〇〇万トンありますので、今我々は汁粉も喰えないのですがこれを喰える状態に致しますには台湾の砂糖で十分間に合うのです。フィリッピンで百万トン取れまして、八十万トンはアメリカに出て居りましたし、ジャワも余りますので、この余り方とゴム、錫、これをどう処分するか、差当つてこの問題が外に於いては非常に大きな問題だと思ふのであります。日本に於いて不足します物資の棉花、羊毛、ニッケル水銀、或は皮革の類、雲母、鉛、石綿³そういったものと将来物々交換をやるかどうするかという問題が起きて来ると思ふのであります。斯ういったこの余剰の資源をどうするかという差当つての問題、それから内側に於きましては、日本国内に於きまして経済の差当つての問題は船が足りませんから船を造らなければなりません、船を造るには兎に角鋼材が足りない、鋼材を造るには鉄鉱石を持つて来なけ

ればならない鉄鉱石を持つて来るには船が足りないというように循環して居りますが、差当つてスチール【steel 鋼】の生産が少いのでこれをどうするかということが目下の問題になつて居りまして、藤原銀次郎¹氏、また商工大臣は旺んにこの一点張りにこの問題を主張して居るのでありますが、まア実業家の方面では紡績機械を毀すのは勿体ない、将来のために惜しいと、いろいろ最近反對もあるようですが、兎に角屑鉄も足りませんし、屑鉄代用の海綿鉄とルツベ、或は特殊銑²というものも足りませんから兎に角何とかして、屑鉄と所謂原鉄、そういうものゝ補充をやらなければならんですが、これはどうしても遊休施設を破壊してでもスチールの生産をやらないと船を造ります釘一本でも入用の状態ですから、これは一つ

2 1 三井財閥の製紙王、国務・軍需大臣など歴任。
海綿鉄とルツベともに製鋼用の原料

大いに重点主義を強調してですね、やらなければならんと思うのです。内に於きましてはこの問題と、いま一つは、これはよくいわれることですが、軍官民の三つが合同して、いろんな統制会社を纏めて行くという、これが国内に於ける最も緊急に今やるべき問題ではないかと思うのです。ですから国内が二つと国外が一つと、これが今やる問題で、それから、来年、再来年、十年後にやる問題は占領後各地域に於ける基本問題で、これは後で皆さんに承わりたいと思うのです。

東畑 今度占領したところに造船能力というものは、勿論破壊されるでしょうが、比較的楽に回復したならばどのくらいあるのですか……。

佐藤 私の考では泰^{タイ}や仏印の北にあるチーク材の輸出が止りましたので、これを河から流してバンコック、サイゴンで簡単な機帆船を同一規格でウイントこの際造つたらいいと思うのです。それから、

もう一つフィリッピンに木材が沢山ありますから、マニラで木船をウント造つてこの東亜其栄圏

は島が多いのでありますから、その島を伝わって行けばいゝのでありますから、そう大きい船は要りませんから、今〇〇トンぐらいの船ですが、それもなく、能力としても出ないし、〇〇万トンの能力が実際は〇〇万トンぐらいのところなんです。目下のところ千五百万トンの計画を樹てゝ居るようであります、将来は千五百万トン以上なければならぬと思いますが、差当り五百トン内外の木造船の建設をマニラ、サイゴン、この辺りに建てたらどうかと思うのです。

東畑 いやどのくらいの能力があるのですか「汽船は仮に鉄鉱があるとしたら……」

佐藤 いや、鉄鉱があれば、労働力があれば幾らでも造れるのですが、今のところスチールの生産が十分とは云えないから思うようにいかぬでしょ

う。

松前 先程ゴムの消費は〇万トンと仰いましたが、あれは戦時ですか、平時ですか。……

佐藤 平時です。

松前 そうすると、戦時でしたら四、五倍になりますね。

佐藤 いや、今そんなにならぬと思います。〇万トン使つて居るかどうかと思います。民需を軍需に取り入れてつまり使用総量に変化なしと思われま

三木 今迄イギリスやアメリカから輸入していたが今度それが止まる。そこでこちらで何とかしなく

ちやならぬものはやはり繊維類とか雑貨ですか。

佐藤 雑貨繊維類が最も多いでしょうネ。

松前 繊維機械――。

佐藤 機械はやはり足りない。農業用の農具が沢山這入つておりましたがそれを入れなければなりま

せぬし、反対給付と云うのですか、それが無いものですかこれをするかと云う問題が一番大きい問題だろうと思うんです。

東畑 実は日本で銅が足らぬと云うことをよく聞きますが何か代用にならぬものでしょうか。

工業技術の新課題

松前 その問題ですが、私は工業技術の立場から観て今日日本の工業技術をどうするかと云うことは、東亜共栄圏を背景とした、その資源を背景とした工業技術をどう云う風に持つて行くかと云うことを日本の今後の工業の問題と十分に關聯を持たせて發達せしめなければならぬと思う。勿論新東亜共栄圏の建設はその一つになると思うが、その具体的の問題としては、従来の技術と云うものは世界中の物資を以て必要なものは必要なところで使おうと云う概念の下に出ている國際經濟の上に

立つてやつていましたから、銅を使わなければならぬところには銅を使う、ニッケルが必要のところにはニッケルを、タングステンが必要のところにはタングステンをと云うわけで自ら其処に分野が決つておつた。それが今度はなくなつた。銅は少い。銅は、今度の共栄圏に於いては非常に少い。その銅をどうして支給して行くか、或は又ニッケルは、錫はあつても或はアンチモニーは余り出ないと云うこと、それを如何にして工業生産を維持する上に適當な方策を講じて行くかと云う問題が根本の問題として生れて來ている。これは各方面にあることなのでして、或るものは沢山あるが足りないものはない。そのないものをあらゆるものによつて我慢するような方法を先ず考えなければならぬ。その意味を、資源を背景とした、我々はまあこれを日本的な性格と云いますが、そう云うものが工業の中に、詰り日本的な工業と云うも

のが出来て来なければならぬと思う。それで共栄圏の確保が出来るんじゃないかと考えているんですが、従来のような工業の態勢ぢやあそれは却々出来ませぬ。不可能に近い。やはり此処にそう云う新しい資源を背景とした技術の基礎的な研究と云いますか、研究以外に計画と云いますかそう云うものが行われなければならぬと考えます。ですから非常に計画的の基礎の上に立った計画経済が立たないと私は結局不足を来す虞があるんじゃないかと思う。政策の実行に対しては、今のお話のような船の問題にしても船だけに止まらんで結局、動力、電気の問題が出て来ると思う。総ての問題は工業の基礎的背景で決まりますから生産そのものゝ中に資源をどうしても考えなくちゃならぬと思う。その中に東亜共栄圏の性格がある、そう云う分度を基礎的のところに分けて当らないと不足を来す虞がある。これは外の方面にも沢山

あるでしょう。米だけを其処に作られちゃ困る。砂糖の問題もありましょうが、まあ食糧品、生活必需品に於いては余ると云うことこそあれ足らぬと云うことは少いでしょうが、工業の方面に於いては足らぬものが沢山ある。今一番困っているのは鉛、それと銅、併しアルミニウムがあるから宜しいと云うことになりましょうが、ところがアルミニウムは技術的にイギリスのようにボーキサイトからとると云う技術を打替えておるんですが、ところが、ボーキサイトからとる生産設備を替えても差支えないようにする、その生産設備そのものでもやっぱり東亜共栄圏の背景の資源によつて替えて行かなくてはならぬ。そう云う全面的な計画的な基礎を保持してやらなければならぬと思う。

佐藤 それが結局根本問題になりますネ。東亜共栄圏は鼠一匹通さぬような本当の封鎖経済をやると

云うことがはっきり立ちますならば相当色んな生産制限、技術的の改革が出来ますが、やはり世界の生産分布を考慮に置いてやって行くようになるんじゃないかと思ひます。

松前 それを乗切る努力を以て、これが最後の段階なら、手前の既設とのつなぎをどうするか、その現実にあいてどうするか、これは銅、鉛がなくてはどうにも出来ない、将来鉛、銅があれば、もつとあるところへ行ったら盛んになりましようが、相当循環性を持っていますから、これから日本の生格は必然的に検討されなければならぬ。それでなければ計画経済は出来ない。

三木 そう云うもので実際に成功しているものはあります。事変後いわゆる代用品で間に合せて成功しているもの、日本で発明されたものはありませぬか。

松前 多少はございます。

東畑 木炭自動車……（笑声）。

松前 併しやっぱり銅に代るアルミニウムと云つたそんな程度で発明と云うとこまで行きませぬネ

東畑 代用品はどの程度迄行けるものですか、今の技術では。米に代るに外米は代用品に近いものですネ。あの程度行けますか。

松前 その程度へは行けます。併し行けぬものもあります。例えば鉛、あれ程軟くて酸に侵されなくてそうして非常に使い易いと云うものは一寸ない。それに代り得るものはない。仕方ないから我慢して外のものを使う。

東畑 余つたものゝ、別個の用途と云うことも考えられますネ、これも技術的に。

佐藤 例えばゴムは余ると思うが、毯にして全部の子供達に配つてもいいが、實際は鉄が欲しいんぢや。砂糖は黒砂糖にして舐めてもいいが。

三木 唯余るだけでは経済恐慌になりますね。

松前 併し余るものはいゝが、先ず片付けるのは足らぬものですネ。金属資源に於いて実は相当足らぬと考えています。

東畑 ビルマに鉛が相当あると聞いていますが、それは相当の量ですか。

佐藤 ビルマ・印度にあるようです。

松前 多少あるかもしらぬがやっぱり十分には。

東畑 併し日本が絶対に足らぬと云う意味で困ると云うことゝ、米国、英国が困ると云うことゝはその程度はどうなのでしょう。これは、貿易統計等はよく知らぬがそんな問題も考えられるわけですね

松前 それはまあ非常に困ると云う点では、殊に錫、ゴムではアメリカは非常に困ると思うが、ニッケルはカナダにあるからあり余ると思いますが、濠州まで共栄圏に入れるとすれば彼処は鉛がある。

大岩 タングステンはどうですかやはり米国も南支那を日本に押えられゝば南支那は殆んど世界の過半数の生産を持っていますから相当困るんじゃないですか。

松前 唯今の日本の占領地域にはありますネ。

佐藤 日本の共栄圏とアメリカの共栄圏内と比較して資源の上で困る程度はこの俤の程度ではアメリカの方が困る程度はひどい。併し困らせて経済上向うを参らせることが出来るかと云うと、これは別問題ですね。

南アジアの農業

大岩 共栄圏に対する日本の技術的な役割と云うことは色々外の産業部門にも問題が多いと思います。が、南亜細亜の基本的な産業は云う迄もなく農業でございます。そこでこの辺で東畑先生に農業問題に付いてのお話を願いたいと思います。

東畑 今差し当りの問題となると一つはこれは日本

本もそうですが、例えばマレー半島それからフィリッピンは食物が足りませぬから仏印、泰^{タイ}辺りから多少持つて来なければならぬ、こう云う問題がありましようネ、ビルマ、あれでイギリスの食料は相当欠乏して来る。そう云うものが差し当りの問題としてあると思うのですが。少し遠い問題を考えますと、農業の発展段階が余程遅れていますから同じ資本労力を投下しても発展させる可能性は日本の内地より遙かに強いと思います、将来性は非常にあると思いますね。で、それはそれとしていゝわけなんでありますが、そのことが日本の内地の農業に非常に大きな影響を与えて来ると云うことになりますから、この問題の大きな基本計画と云うものは内地をどうするか、或は内地の農村問題をどう解決するかと云うことに懸けて一番基礎的の問題があると思う。この共栄圏の中で今

佐藤さんの云われた砂糖だとか、ゴム、規那¹等は非常に過剰になって来るわけですが、ゴムの林は外にすぐ転載出来ませぬが、砂糖の方のところによつては棉花を作ると云う可能性と云うものは少々あると思う。併しこれにもすぐには到底出来ぬことだと思う。いづれにしても、話は戻りますが日本の農村問題の解決と云うことがこれ等に結び付いて来るわけで私は非常に有難いことだと思っています。具体的ことはとも角として押し進めて考えてみれば満州事変にしろ、支那事変にしろ元の起りは日本の農民問題、それと中小工業の問題ですから、人口問題の意味でも当然その解決を予想されるような結果になって来ると思う。

佐藤 泰、仏印、あつちの米は集約的にやれば今の生産量の倍位期待出来ますか

大岩 印度支那では一ヘクタール当りの収穫高は日

1 キーネはこの樹の樹皮から得られる。

本の三分の一ですから、改良の余地はあるわけです。

東畑 過去の経験を以てすれば、朝鮮の経験を以てすれば、段々殖えて行くんじゃないかと思ひます。集約するには肥料をやるとかしなければならぬが、これは向うの人に肥料を日本から買つて貰う、その結果として殖えることになりますから、長い問題として観ると結局内地の問題と結び付いて来る。

佐藤 占領地で米の足りないところは英領マレーなんかそうでしょうが、云うところはどうするんですか。切符制か何かやるんですか、土人等少し驚くかもしれないが、物資の交流がよく円滑に行きませぬから。

松前 何しろ今から四年位前に行きましたが、行つてみると農業生産と云うものには我々素人から観ても相当増産出来ると云う感じがしますね。中小工

業の話が出ましたが、日本の中小工業と云うものは相当に外国輸出貿易の重要な役割を今迄持っていた。寧ろこの重工業と云いますか頭脳の工業それよりも以上に日本の輸出貿易に貢献した。例えばランプ、ラジオの部分品、それからその他写真の材料、そう云う風なものが相当外国に輸出されておつた。ところが蘭印、仏印、殊に蘭印は税関の技術のアレで物資が突ッ帰された。突ッ帰したのは特許に触れると云うので突ッ帰されたんですが、蘭印で私の行つたところは電球が二ギルダー、日本の金で四円、日本の電球が向うへ行けば一五銭か一〇銭で這入る。それを絶対に入れないで二ギルダーのものをフィリップンでもオランダのものを入れている。今度この税関の障害がなければ相当向うにも歓迎され日本のものもどんどん輸出出来ると云う形になり得ると思う。泰国は僅かに這入つておつた位ですが。

人口問題と華僑

大岩 南方は、人口の稠密度が高い地域が多いのですが、これについて小山さんのお話を伺いたいと存じますが。

小山 ジャワが非常に多いがまだ南方では大体人口のタイプが三ツありましてネ、一ツは激増型、一ツは停滞型、殖えもしないが減りもしないもの、一ツは段段減つて行く激減型、この三ツです。特に南方で段々殖えるのはジャワだけで後はそんなに殖えていないと思いますがジャワと台湾が世界で一番殖えているわけですが。

東畑 人口増加率はどうか。台湾は世界でも優秀な方ですがそれでも失業者もないと云う有難い状態ですが。

小山 この外のところでは正確な統計は却々集まらないんですが、ジャワは正確に出ておりませぬ

がマニラと合わせて計算しますと多少出ますが、ジャワも今迄殖えていたが最近殖えていませぬ。ジャワの状態は一方に於いて産業の方の発展期が過ぎた。外来労働者を非常に制限しまして支那人の苦力が減っている。外来の労働者が止まっている。それを一ツは国内の人口が殖えた。あゝ云う国でも多少は進歩して行くので支那人同志の競争になると云う意味もあると思うが、南太平洋一般は減っていると今の人類学者は云われるが、欧露巴列強国にとつて太平洋の有色人種はアレですが、とに角そんなに減っているところはない。例の流行性感冒からは非常に減つて来てはいます。

佐藤 南洋全体で華僑はどの位おりますか。

小山 計算はまち／＼でジャワはジャワ、昔から這入った者はジャワ人として計算する。泰で最近来た者だけを計算する。ですから二百万位の開きは

出来てしまう。最初の報告が五百万としても二回、三回になりますとまた違つて来る。その点正確にしようとするに却つて不正確になるようなことになる。外部に対するセンセス「#国勢調査」は支那人を二通りに使い分けて、支那人を白人並に扱つて対外的に見栄をしたりしている。併しオランダで比較的正確なセンセスをしたが、これを発表しておりませぬからはつきり判りませぬ。

佐藤 労働者と商人と工業家とに分けるとどれが一番多いですか。全体としては中小商人でしょうか。

小山 新しい者はみんな労働者です。昔からいた者は殆んど労働をやつておらぬです。商人になりません。そうして親分のように苦力を使うんです。面白いのは日本で云えば昔よく支那人がストライキを起しましたネ。僕の親父もゴム園をやつていたんですが、そう云う時同郷の支那人は使わない。団結心が同郷の者同志起るんです。ゴム園なんか

でも必ずストライキをやる。蘭印なんか広東系が多いが彼等は同郷心はあつても民族心はない。併し福州系も亦いるから広東系が暴れ、ば帰つてもいゝと云えば、福州系がそれに代ります。そう云う同郷的の考え方をするので違つた系統のものを半分位づつ交ぜて使っている。

佐藤 華僑が本国へ送金する金は統計的に觀てまちまちですか。

小山 えゝ、送金する者もありますが、山東系はいゝが広東系の者は本国へ一回位帰るが帰る時に持つて行く。彼等はみんな女房を二人持つている。故郷に細君を置いてある。これはまあ親が金を送つて貰う為に女房を人質に取つて置くようなわけだが、又ジャワへ行けばジャワで女房持つている。悪く云えば二重結婚だが、そうして二年位で帰つて来る。その時は金は持つて来ます。その金は持つて来る以外に決して離さないで持つている。相当

頑張った奴は大抵金持になって大きな別荘なんか持って留っている、特に支那人の華僑は支那の生活その保つて這入れると云う便宜があるので這入る。満州の露西亞人を見ましてもそうでありますから、支那人だけではないのですが、自分の国と同じやり方で行けると云うので来る。本妻も置けば妾も持てると云う習慣も結局母国と交渉する強靱な生、活力を持っているところと思う。

佐藤 大体七、八億円位毎年本国へ送るでしょうか。地理の方で面白い問題があるのです。華僑が本国へ送る金が七、八億円、一生に一度メッカ、メヂナにお参りする回教徒の巡礼が落すお賽銭が、六、七億円、ローマの名所旧跡に、世界中から集つて来る旅人の落す金が七、八億円、パリに世界のならず者が落すのが七、八億と云う面白い現象がある。それを纏めて何か面白く書いたら……（笑声）

小山 それで持つて帰る金は、私が支那の留學生を捉えてきくんですが、特に最近金は全部持ち出せないらしい。そうすると満州国の苦力が支那に帰る時持つて行くみたいに色々工夫するらしい。税関では支那の女はやかましくないらしい。それで最近では別に女を連れて歩く。本物は故郷に置いてありますから囧の女を連れて歩くと云つています。

東畑 男の行くところへ何処でも女が付いて行くとかうのは日本だけじゃないですか。

小山 そうでしょうね、あの熱い熱帯の下の日本の島へ行つて、着物を着て白足袋を履いている女の人がある。それが非常に綺麗に見えて望郷心をそゝられてセンチメンタルになる。一つは外務省が人道問題で昭和七年淫売を引揚げさせた。あれはいゝことでしたが日本の南洋発展が止まったのはそれからですね。日本の方針は大体北へと云つ

たようなわけで南はあまりやらない方針が続いて来ている。とに角南方の方は余り喜ばれなかった。その時行つていたのはあゝ云う連中らしい。本国に帰つて正業に就いたというが一パーセント位なものだそうです。

出稼人と郷土

東畑 私はよく判らないがジャワは人口が稠密なんでしょう。ところが同じ蘭印でもスマトラ、ボルネオはとても人口が減つた。あれは自然的な移動ですか。

小山 ジャワから出て行つた人間はジャワに帰る。ジャワは彼等にとつてはやはり故郷であつて出稼的の意識を持つてゐる。日本人でも今こそ満州に行つてゐる人は最後迄止まるが、昔海外に行つた人は帰つて来ることを考へてゐる。そう云う考へ方が今でも多い。農業にしても自分だけ細々喰つ

て行くと云うのが多く、国際経済のそれはとに角、金が出来たら皆ジャワに帰つて来る。それでジャワはあれ程人間が稠密でありながらスマトラ、ボルネオの大半はジャワ人ですから結局彼等は故郷に帰る、故郷を離れないと云う現象なんです。

大岩 そう云う問題は印度支那にもあります。印度支那つまり仏印でも人口過剰の地域が御座います。さつきも統計の不正確というお話がありましたが、仏印でも統計が非常に不正確で最近の仏印行政年鑑などを調べてみますと、その不正確さが判ります。その一例を申しますと、或る一つの州の人口は約一、三三一人とあります。約一人と云うのは洵に頗る変な数字です。(笑声) 今迄仏印は二千三百三万人と云う人口数になつていたが、その年鑑を調べますと二千四百六十三万強になつております。そのほかカトリック教の教職者を通じてカトリック教の信者と非信者との統

計を採った宗教学者があるが、その人の推算は約三千万内外と云う数字を示していて、一向、基準になるものがありません。その原因は、これは外の地方にもあると思うのですが、殊に仏印では人头税が因になつてゐる。仏印では人头税は、村落共同体に或る一定の税額を割り当てて収税する仕組ですから予め村の人数を少く申告しておくとか割当額が少なくなるわけです。之れは東京^{トシキ}デルタの中の一つの村のことですが、公けの報告を見ると五百人位と云うことになつてゐるが、フランスの社会学者が実地について調べて見ますと、村民の数は約その二倍ある。これなどは半分の人数で、少い税額を引受けて倍の人数の頭割で負担しようと云う魂胆の現れです、かように人口数と云うものは、色んな関係があつて、はつきりしない場合が多いと存じます。もう一つはさつきも小山さんのお話にありましたがジャワの人間は故郷から出

ないと云うことでしたが東京^{トシキ}その他安南地方でもやはりそれが見られます。村落共同体が閉鎖的のもので家族制を厳守してゐる為どうも外へ行きたがらない。仏印当局者は稠密な人口を疎開する為色々試み最後に分村計画迄樹ててやつて見ました。それは村の鎮守の社である亭^{テイ}ごとそつくり外に出したら稍成功したそうです。

東畑

ボルネオ、スマトラ、セレベスの経営で真先に足らぬのは労働人口ですネ。それを土着の人間に頼ることは出来ない。貴方の今お話のサイコロヂーを破らなければ開発しようにも出来ない。或は他所から支那人或は朝鮮人が這入つて来ると云うようなことになると思ふ。却々前途遼遠なことになると思ふ。

小山

支那人の開発の偉さと云うものを感じたことがあるが、向うにいる支那人は六尺位の高さの、水に一遍浸けた材木の上で半身裸でゴロ／＼寝て

いる。マラリヤの蚊は樹木より高く上らないと云うので家が周囲の樹木より高くしてある。風通しは悪いと思うが。……併しそれで遅くなっているわけです。マラリヤ蚊を防ぐ為には家の近所に高い樹木を置かない。寝る時その木より高いところにおればいゝんだそうです。

松前 それは本当です。私は台湾で社宅が断崖の上に建っているのを見ました。日月潭ですが、何故あんな上に造るのか聴いてみたら途中で木があると蚊が木を伝って上って行くから木があつては不可ぬ、彼処は断崖が高いから、木がないからよいと云う話でした。それは本当です。

東畑 三木さん、彼等が故郷を離れたがらないと云う話と今の大岩さんの家族制度の話もありましたが、原始人と云つたら悪いかも知れないが、原始状態に近いような人間はそう云うサイコロヂーのあるのが本来のものなのでしょうか、どうなんで

しょう。

三木 簡単に云えば未開の人間程世界が狭いわけですから。それに血の觀念を基礎にした家族制度と云うのもあるわけでしょうから。

小山 家族制度は相当強くあると思いますネ。この間北海道を歩いてみたが、この頃政府の宣伝が行き届いたのか彼処の娘は全部満州に行きたがつている。ところが親父は労力が不足しているので悉く反対なんです。それで両親と若い者との反目はひどいものですヨ、驚きました。

文化政策の諸問題

三木 そこに矛盾がありますネ。家を離れたがらない方が団結性は強いけれども同時に発展性に乏しい。この矛盾を解決することは大きな問題だと思います。それに差し当り東亜共栄圏の言語の問題ですが、現在土着民の間では狭い範囲でしか互に

言葉が通じない。そこに言語の統一の問題があるので、仮に今後日本語を公用語にするとすれば、日本語の改良、単純化と云うようなことが必要ではありませんか。

大岩 日本語の問題は我々専門にやつたわけではないので、ただ日常の経験を申しますが、例えばラジオを聴いておりますと、どれが標準語か判らなくなる場合があります。アクセントの付け方などでもすると地方の方言が強くて出ているのがあります。まして、それが子供の時間などに出て来ると日本語を正しく伝承するために面白くない結果になると思いますね。

東畑 今度は海外の外への発展と内へと発展と両方持つていきますから――。

小山 我々として指導官を現地に何人位送つたらいゝか計画して呉れと云つたような注文を受けていますが、向うの土着の人間同志も日本人が發展

して呉れるのはいゝが原住民と同じ仕事をされると職業の半分もと云つたようなことで、又それを却々どうしたらいいか、我々一応考えなければならぬことになつて非常に弱つています。

三木 今度は宗教政策が相当根本的な問題ぢやないかと思ひます。高度の文化政策というよりも……。

小山 一番低いと考へて、日本精神等いきなりやらぬ方がいゝと思ひます。僕は暫く放つて置くのがいゝと思う。その方が生活が混乱されませんから。併し今度は支那事變の経験もあつて、だからそう云うことは考へていないらしく見えますネ。

東畑 植民政策にいゝ言葉がありましたヨ、「黒く考へる」と云うのですが、土着民のその發達の段階、その要求と云うかそれ等によく即応して考へて行くと云うことでしようが、如何に巧に黒く考へるか、それが出来たらそれこそ日本は名実共に

指導者たり得ると思います。それからまた宗教、言語、慣習、色んな事柄が黒く考えると云うことに懸つて来ると思う。

小山 大体に於いて熱帯の人間は食欲と性慾が満足されておれば指導者なんかどうでもいゝと云う状態のようですからね。

三木 支那辺りと違つて高度の文化政策はあまり必要でないでしょう。

大岩 そう云うことは云えますね。既に方々で話題にしたことで、今更申すのもなんですが、安南に皇軍が進駐した直後日本の「支那の夜」と云うレコードを安南人に聞かせた。ところが、あのメロデーが非常に安南人に歓迎されたということです。それは何か劇場の幕間にやったそうですが、ところがあのレコードの買手が非常に付いて、街

¹ ベトナム北中部を指す。安南人・国というのは他国との関係で呼ばれる名に過ぎない。

のキャバレーでも何処でもそれをやっていて、仏印へ行った或る評論家にむかつて、安南人が、「支那の夜」は日本の軍歌かと聞いたそうです。これは小松清氏の「仏印への途」に出ております。頗る示唆に富んだ実例だと思います。それから、日本化の問題についてのことですが、さきほど原住民に対し今の東畑先生の「黒く考える」方式に従つて、彼等のそれぐゝの状態、生活状態、文化状態に應じてその能力を引き伸ばしてやると云うようにするのが本当の日本精神ぢやないでしょうか。勿論、向上の方向を亜細亞的自覚即ち日本を指導者とする自覚に向わしめると云う態度は、必要です。

小山 日本でもいきなり大学には行けない、小学校、中学授からやつて行くのですから共栄圏もやつぱり……

松前 私向うの小学校を見て歩きましたが、向うの

小学校は実際素敵なんです。この部屋より一寸広いでしょうか、下は土間に筵、黒板等はありません。入口もない。其処で一日一時間、一年間やる。

然もその辺の方言でやる。それで小学校の教育は済んだ。それも休み／＼やるから殆んど授業時間はない。あのジャワの小さな島々には沢山の方言があるが、教育も方言でやるのでお互に話は通じませぬ。勿論そう云う風な政策を採っている。あれが一緒になったらやろうぢやないかと云うことになるし、彼等の故郷をつくることになるから言葉は共通なものを与えない。これは標準マレー語でも作って言葉は共通のものにしくちやいかぬように思います。これは一寸水を注げば段々生えて来る。今迄抑えに抑えて完全に抑えていました。

小山 さつき「支那の夜」の話がありました、泰では李香蘭¹が有名なんだそうです。何か李香蘭の

1 山口淑子（大鷹淑子）

一日をシリーズにして送って呉れと大使館から云って来たそうです。尤も日本人でも騒ぐから同じかも知らぬが……。

大岩 仏印では、一時、インテリの間では松岡さんが有名だったそうですが或る人に云わせると今の李香蘭が松岡さんと並んで人気をさらっていたそうですね。

松前 マレーに行くとき写真屋が非常に流行る。日本人で成功したのは大抵写真屋だそうですが、これは文化政策として言葉の問題と、映画の問題、それから印刷による色々なもの、小学生の読むもの、これはどう云う言葉でやるか問題だが、それから放送、新聞もありましょうが。

東畑 実質的には目に訴えると云うことが感覚的にはつきりするんですが、多少技術、そんな高尚な技術はとても駄目でしょうが、そう云うことでカヴァー出来ると云うことは大きな文化政策です。

大岩 これは原住民のインテリ層に対しても特に重要なことです。

小山 向うへ謡曲や能、あゝ云うものを持って行っても無理です。能など日本でも謡曲をやる人だけが……、大体謡曲、講談、そう云うものゝシリーズを作りたいらしいが……。

日本認識の貧困

松前 僕は向うへ行く時「日本の工業」と云う映画を持って行つた。三年前でしたが蘭印ではどうしても揚げさせない。バタヴィヤ「#ジャカルタ」の領事館に頼んだが駄目。直接向うの政府に掛け合つたが何かこれにサインしろと云うことで蘭語だからよくは判らないがサインしたが、どう云うものかと聴いてみると「オランダ人と日本人以外の民衆には見せませぬ」と云うことが書いてあつて、一寸それに違反したことをした場合にはあら

ゆる処分に応ずると云うことだそうで、それにサインをしないと揚げさせない。バンドンでそれをやりまして、政府の役人を全部招待すると云いましたら彼処の総督も来ました。皆、驚いた、心から驚いた。全く日本を知らないですからネ。それを観ていた日本人も非常に喜びました。今迄こう云うものを持って来て呉れた人は一人もないと云つて泣いて喜びました。それ程日本の実力と云うものは紹介されていない。その時日本領事館で「バンブー」と云う映画を一緒にやつたが、あれは竹を切つて来て傘をさして歩くと云つたものだが、あの傘と云うやつはあの辺のインドネシアで作る傘と同じで結婚式なんかにあの傘をさしている。俺達と同じことやっていると向うの人に思わせる。それを領事館で見せている。

東畑 それはインドネシアに限つたわけでない。私自身経験したんですが、よくアメリカ人が日本へ

やって来てワンダフルだと云つておるが、何がワンダフルかと思つてよく話してみると大概汽車が走っている、電車が走っていると云つてワンダフルだと云つている。日本へ来て幻滅を感じたと云う人はいない。日本はもつと進んでいるかと思つていたらまだこんなものかと寧ろ期待を持つておるから幻滅を感じたというのならまだよいがたゞワンダフルと云う奴は日本をみくびつて考えていた奴で、そんなのは相手にしないことにした。

松前

私はフィリップンに行つた時小学校の地理の教科書を殆んど買つて読んでみたのですが、日本と云う課にどう書かれていたかと言つと「船に乗つて瀬戸内海に行くと或海岸に着く。其処から上陸すると神戸と云う街がある。其処から大阪迄汽車がある。それが唯一の汽車である。大阪は七万若しくは八万の都会で繊維工業の中心地である。何故日本は繊維工業が盛になったかと言つと

佐藤

それは面白い。

松前

日本人は非常に安い賃金で働くからだ。その土地は非常に狭い」と云う風に書かれている。非常にカルティベートに書かれている。それから東京迄汽車がない。そうして最後にこう書かれている。「日本人は好戦国民である」と盛に書き「若し日本人に一片の鉄を与えたならば日本人は武器を造るであらう。若し支那人に一片の鉄を与えたら支那人は鋏を作る」と書いてある。そう云う風にしてフィリップン人の教育をしている。

写真が出ているんですが随分ひどい写真で、藁葺の農家の前にちやんちやんでこではち巻をして子供を背負い、跣で寒そうに人が立つてゐるもので、これが田舎の典型的の百姓の家だと書いておる。いゝものは一つも載っていない。

三木

これ迄いわゆる日本的なものとして世界に紹介しようとしていたのは、どちらかと云うとそう

したものでしたね。

小山 結局、日本人が悪いのですよ。

東畑 価値観が悪い。

言論政策と宣伝戦

松前 併し彼処で「バンブー」（竹）をやる領事に
も驚いた。今日の戦争こそワンダフルですよ。そ
れから私は言論政策、これは本質的のものぢやな
いかと思うのですが、従来イギリスがロイターを
通じて世界の隅々迄新聞で、通信で指導して来た。

これが東亜共栄圏に於いても将来の判断を下すよ
うな方々の言論関係を同じ通信網を通じた言論政
策を確立しなければならぬ。そう云うものをやつ
て東亜共栄圏と云うものは国土計画的な、そうし
て文化とのマッチした形に於いてそれをするこ
とが非常に重大だと思う。

小山 ジャワでは事変始つて以来二五も放送局を

造った。デマに掛つてはいけなと云うのでき
がけをやつたんでしようが……。

東畑 ペナンの放送局でもどん／＼やつてい
るでしようか。

松前 やつているでしょうね、サイゴンはやつて
おります。

東畑 併し西洋人より日本人に対しては今度の占領
地域の、仏印、泰辺りの住民は何かこう人種的に
アフィニティ【Affinity 親近感】は感じ易い
でしょうね。我々によく従いて来る、我々も氣楽に
……。

小山 民衆は感じましようがインテリは又違
うでしょうね。

東畑 その点或る意味に於いて統治はし難い。

松前 支那事変とは一寸違いますね。支那は敵対
行為をするが今度は親しみを以て来る。

三木 そういう点は確かにやり易いですね。

松前

ゲリヲをやられる心配ありませんし、ですからこう云うことを或人は云っているんです。例えば通信網にしても支那がどうなるか判りませんが将来共栄圏の中に這入るでしょうが、通信網、鉄道網、道路網をどう整備するか。従来は全部南から北に鉄道は走っている。道路も南から北に、通信網は西から東、そう云う性格を持っているんですが、と云うのは、西から東と云うのは海を通っているんですが、片一方は陸ですがこれを逆に打ち替えなくちゃ不可ん。これは東から西へ大陸に向いてしなくちゃならぬ。通網信は北から東へ向いてしなくちゃならぬ。そう云うような根本的なやり替えを必要とする。ですからこれは余程しっかりした国土計画が出来上らなければならぬ、それによって着々実行に移さなければ不可ぬ。

新秩序建設の方策

占領地の経営

記者

白人の圧力を追払ってやっただけですから喜ぶと云うこともあるが、それでは消極的だからもう少し喜ばせてやると云う方法はどうか。彼等は欧州の政策から受けたものは結果に於いて搾取式のものであったが、それに代るもの、又或るものは局部的には高度の文化を与えられたかも知れないが、我々は更にその上を行かなければならぬが、それにはどうしたものでしょう。

松前

何をやっても喜ぶ、日本人は西洋人のようなことはやりませぬから、私は植民政策のことは何も知りませぬが台湾からフィリッピンに渡り、マレー半島に行き、ジャワ、仏印に出て帰りました、ハイフォンで船に乗った時は「これは何かやらなければならぬ」と云う風に闘志満々として日本へ帰って来た。そのやり方を比較してみると「帝国主義下の台湾」〔# 1929 年矢内原忠雄著〕な

んと云う本を書いている人もいるが、日本が台湾にやつてゐることはまだくゝいゝです。蘭印辺りでやつてゐる白人のやり方は全くひどいですからね。日本人は決してあゝ云うようなことはしない。そんなことする気にならぬですよ。

記者 先ずその日本のやり方は結局においてはいいのだということを支那人に知らせる方法はないものでしょうか。

松前 それより朝鮮に知らせなければならぬ。それを台湾に行つてやらなければならぬ。

佐藤 先ず民衆を如何に喜ばせるか、それは實際大きな問題だと思ふ。日本人の這入り込んだところは必ずものがなくなつて物価が騰つてゐる。今度はそのなりはしないだろう。一応それは来るかも知れない。不平が起るかも知れないが、それをなくす為最低程度の衣食住は保証しなければならぬと思う。とに角、如何にして喜ばせるか、喜ばせ

る方法も文化政策もやつて貰いたいが……。

小山 日本人が這入るとどうも賑やかになると云うが、そうならないように馬券は禁止する、ダンスホールは禁止する、賑やかにならぬようにやつてゐる以上そう云う意味では賑やかにならぬがそう云うやり方も……。

東畑 趣旨は採るべきだが、それも余り……。

記者 それから東亜新秩序の建設、東亜開放と云うことは共栄圏内の民族を向上させると云うことも含んでいるが、そう云う秩序を獲得し、文化を身に付けて来ると批判的精神も出来て来て今迄知らなかつたことを知るから反抗もして来ると云う様な事に対して、何か大乗的に考えて置かなければならぬのぢやないですか。

三木 差し当つて重要な点は、お前達も一緒に開放戦に参加すべきだ、その責任をお前達も分担しなければならぬのだと云うことを東亜の諸民族に

教えることではないかと思ひます。その為には日本の戦費を分担する、公債も買えと云うようにやらなければならぬと思う。あまえさせることはどうかと思う。何でもこれまでよりよくしてやるというても、戦争している間は事実上よくなることは困難だと思ふ。寧ろこの戦争の意味を教へてその責任なり負担なりを分担すべきことをはつきりさせた方が、妙なイリュージョンを懷かせて、そのために却つて不満を起させ易い結果になるよりもいゝんぢやないかと思ふ。

佐藤 船も出来て、もう少し余裕が出来たら東京に民族大会を開く、共栄圏の民族が集つて旗をつくる。共栄圏のマークをつくる。それを以て共栄圏の民族の自覚を持たせたい。

小山 満州国が今年で建国十周年ですがそれをやりたいと云つていましたが…。なんでも満州国の方が早い。

東畑 日泰攻守同盟が出来た時、¹ピンプ首相が坪上さんと握手した時「セームカラー」と云つたそうだが、其苦労と云うかそう云う心持ちが現れていると思ふ。私は今迄のやり方は呉れて喜ぶと云う乞食扱いにしたやり方だと思ふ。

三木 そこは先方の人格を認めないといけないと思ふ。

小山 民衆を全部捉えると云うことは無理ですからインテリを掴む。インテリさえ掴めば後は右と云えば右、左と云えば左に向く。其処の中心になるものを掴む。与えると云うのも余っているから呉れる中には恐がつて呉れると思ふ者もあるうし……。

東畑 そう云うことは態度に自信がないんですね。今迄は外交的に遠慮があつたが今度は一緒になつ

2 1 ルアン・ピブン：1938年からタイの首相
坪上貞二：1884～1979、外交官

てやろうぢやないかと云う態度が要ると思う。相手の連中を用いるんですね。

小山 現地のオランダの人に聴くと、日本に占領されると日本は文化が低いから我々の月給も引き下げるだろうと云っているようですが。利害関係もあります。

東畑 日本にはそんなブルータル【brutal】残忍ななことは出来ない。強い神経や動物心はない。そう云う意味では、そう云う態度は發揮して行くと思います。

松前 僕は蘭印をブラリ／＼歩いて感じましたが、自動車に乗って舗装道路を走っているのはオランダ人、オランダの役人。ダットサンはオランダとインドネシアの混血、自転車に乗って歩く、これも混血、トコ／＼歩いて行く者がある、これがインドネシア、大体月給もそんなものらしい。

三木 ところが日本でも田舎などでは自※【動】車

に乗ってゆく人は歩いてゆく人よりも偉い人だと考えている。土人にもそういった心理があるので、妙な人道主義は却って馬鹿にされる惧れがあるということを考えねばならぬ。

小山 日本の豪傑タイプ、××大学タイプ、向うへ一番に這入り込んだのはあゝ云うタイプの人ですが、民族が違いますと腹の中は判りませぬから外部から這入るより外はない。日本人のようにおでん屋で友達になつてすぐ家に泊めちやつたようないゝところもあるが、判つて呉れゝばいゝが、察してくれないとそう云うことは、禪に尻はしりでも具合が悪い。禪は向うから来たから祖先が現れたと思うかもしれないが。

佐藤 植民政策でいつも議論になる点はこれ迄の欧羅巴のように病院を建てるとか学校を造るとか資本を以てやる、日本はものがないのですから日本精神で行く、親分、子分の気持で行く、それでい

つも衝突するが、それをどの程度に調和を保つて行くか難しい問題だと思う。

植民政策の揚棄

記者 従来の所謂白人の植民政策をとに角捨てるといふか卒業したものを捨てなければならぬのぢやないのですか。

東畑 それは確にそうです。恐らくイギリスの悪口を云えば幾らでもあるが、三百年あれだけ抑えて来たと言ふことは何か其処にありますね。これに強い要素がある。これを如何に操つて、如何にそれ以上のものに参酌するか、今から五〇年間日本は苦勞すると思う。

佐藤 植民政策で問題になるのは日本内地から人間が外に出る。それは日本の富の力を減らすことになるか増すことになるか、いつも議論になるが、その南洋の政策としては、現状の俣の労働力は華

僑がありますから職業の機構、土民の文化機構をその俣うまく活用して活かして行く、或は商人とうまく力を合せて行くと云うことが今の差し迫つた日本としてやるべき方法ではないかと云うことを云われるのですか。

三木 土着資本はあるんですか。

東畑 ないですヨ、あつても支那人のものでしょうね。

松前 国民に最低の生活を確保させると云うお話がありました、ところが向うの住民の現在の生活は最低生活もやり得ない。一日働いて一〇銭位しか呉れない。そうして働いたら税金を納めなければならぬ。一ヶ月で三ギルダー、四ギルダーにしかならぬ。オランダの者は安い者で二千ギルダー、第二世が五百ギルダー、段々二世になると下つて来て普通の人は四ギルダー、精々五ギルダー半、それで喰わなければならぬ。とに角喰うや喰わず

の生活で、質屋の廻りは、公設質屋がありますが其処につまらぬものを持つて来て一〇銭、二〇銭と置いて生活している。ですからあの状態なら日本人が行つてやればあれ程の搾取は出来るものぢやない。

小山 少し金が溜ると働かなくなる。お金があるとハイヒールなんか買つて来たり、身廻品ばかり買つて来たりしているが、また蓄積の必要もないが、そう云う訓練から始めなくちゃならぬ。

東畑 それは生活に希望がないからです。蘭印なら蘭印で昇進すると云うこともないし、希望が出来て勤労心が出て来れば。

記者 独立したいと云うことを考えることと、生活がよくなると考えることは、必ずしも一致しているわけではないでしょうね。

東畑 それは別でしょう、差し当つては。

記者 それでは今の新しい共栄圏の中で独立させる

ことは……。

東畑 それは出来ないと思う。やろうとしても。それを抑えると云うことは長い将来の問題になるでしょうが、其処迄引つ張つて行くと云うなら日本の方針も考えなければならぬが。

記者 政治は暫くわれわれが預かつてやらなければならぬわけですか。

三木 当分は。

東畑 地方行政とか何か自治的のものはありませんが。

佐藤 マライでは英国は宗教と習慣に関することは手を付けなかつた。その他には大いに干渉したが。

松前 私の友人が一年伝道に行つたんですが絶対に伝道させない。彼等が自覚を起しますから土人には伝道させない。とに角あそこの民族と云うものは搾取するだけして置いて後は亡びるものは亡びていゝ、そうしてこれ等のものに対し世界文化に

置き替えると云うことはしない、とに角あるが俣に委せて自分達のやることだけはやっていた。

三木 オランダの植民政策はそれだったんでしようが、イギリスはもう少し進んでいたように思いますが。

東畑 おこぼれをやると云う気持はあった。オランダはあの植民地を持つていたと云う考えは賛成ぢやない。持たされていた。あゝ云う強国の間に挟まれているから何処も独占出来ない。ポルトガルの植民地もそうだろうと思う。ですからジャワの性格をオランダ的に解釈しちゃ不可ぬ。小国で大国に挟まれている。そう考えないとその性質が歪曲されて来ると思う。日本がオランダに代るんぢやない。英米に代ると云う風にみて行かないといけない。オランダ人は非難に値しないと思う。

二〇世紀、一九世紀にかけての植民地は結局イギリスが全国の植民地を牙城として持つていた。こ

れはよく判らぬけれどもそう云う風に思います。

記者 それでは東亜民族を開放してやると云うだけでは不可ぬので、日本が指導者であると云うこと、盟主であると云うことを教えなければならぬと云うことになります。こう云う問題で大岩先生に結論のようなことを。

大岩 今までのお話で一番根柢になる問題の検討、それに対策は総括的に出まして話題に登ったわけでありますから 改めて云う必要はないと思いますが、さつき一寸お話に出ましたように、南方亜細亜の各民族の指導的な地位にある日本が南アジアの民族をして、亜細亜の一員として日本と共に亜細亜の運命を担つて行くと云うことを自覚せると云うことは一番大切な問題であります。それについては十分なお話がなかったように思いますから、こゝで私の考えを申上げたいと思います。

す。松前さんのお話にありましたように、西欧各国の教育政策によって非常に歪曲された地理或は歴史を教え込んでいた為、亜細亜民族は自分たちの世界の本当の姿を知っておりませんし、また自分の国の古典と云うものに対して親しむ機会を全く与えられていないのです。泰とか安南など云う国をとってみるとはつきりそれが見られると思います。泰は独立国でありますがその文化面は政治経済と同じく、イギリスの勢力が非常に強く、泰の歴史も今迄泰語で書かれたものはなかった。寧ろ英語で書かれたものが彼等の教科書であつた。従つて当然の結果としてイギリスの利益になる様な技術を以つて材料の選択をし解説をする云う具合でした。これが近頃に至つて泰人が自分の国の歴史を書こうと云うので相当著述も現れて来たようでありますが、日本人は此際、泰国人が自身自身の力で自国の歴史を知ろうとする努力に対し

て十分に協力し助けるのが非常に必要ぢやないかと思ひます。又安南国の方でも御承知の通り彼等の国家生活は二千年來続いているのですがフランスが蹂躪して以來アレキサンドル・ド・ロート¹と云う教職者が発明した「国語」^{コクゴ}を現在ハ公式の文字として普及させております。これは安南語をローマ文字化したものです。従つて今の若い連中は横文字は読むが縦文字は判らぬ、古典と云うものも少しも知らぬ。漢字が読めるものも殆んどいない。結局フランス人が自国に都合のいゝように書いた歴史書を読まざるを得ない。その多くは例えば安南と日本との御朱印船時代からの関係等は寧ろ無視しております。はつきり云えば東亜共栄圏の建設と云うことは三百年前から日本がやつてい

1 1591〜1660、イエズス会の宣教師。
2 「クオックグー」ラテン文字と記号を用いたベトナム語表記法。

た。その当時安南に行った日本人は広南王国の阮氏と云う王の信任を得ていた。日本人は日本町を作って地方住民に桑の栽培を教えたり、養蚕を教えたりして産業立地的な行動迄とっていた。日本が広南国王から自治権を与えられて活動していたと云うことなどはフランス人にとつてあまり面白いことではないのであるべく黙っている。支那との関係にしても自国すなわちフランスに不利益でないように書いております。ですから安南人も本来に自分たちの祖先の行つたことを知らぬ。安南人はつきり自国の姿を書いたものを読むようになれば自国の運命も知るでしょうし希望も起つて来るでしょうし、亜細亜に於ける日本の地位もはつきり認識させることが出来る。で結論として日本人が差し当ってやるべきことは各民族の指導をなすために、まず亜細亜の本当の歴史をよく知らしめる必要がある。それにはいつも云うのです

が岡倉天真的「東洋の理想」「日本のめざめ」などを読ませたいと思う。安南辺りの非常に特殊なインテリには「肉弾」とか新渡辺「#新渡戸稲造の誤植だろう」さんの「武士道」など、それから「忠臣蔵」こう云つたものが読まれている。かような著述のしつかりした原典を南アジアの各民族語に翻訳して各民族の指導分子に読ませることが非常に必要であつて、これは文化行動の基本的な仕事の一つであると思います。以上結論には不適當ですが、予ねて考えておりますところをこの機会に申し述べます。

記者 それではどうも有難うございました。

(1942 (昭和17) 年1月14日)

カナ表示変換:「ジャヴァ」「ジャバ」「ジャバア」→「ジャワ」
底本:『科学主義工業』1942.2

【凡例】

以下は神戸大学附属図書館新聞記事文庫から得たデータを元としている。元データは新字新仮名遣いに改めているが、句読点は原資料のままである。以下は作成者の判断で句読点の追加、読点を区点に改めるなどをした。また座談会の話者に付けられていた敬称の「氏」は省いた。

比島文化を語る

文士・画家座談会

出席者（順序不同）

尾崎士郎：1898～1964、愛知県生まれ、早稲田大学

政治科中退、小説家。

石坂洋次郎

今日出海：1903～1984、北海道生まれ、東京帝国

大学仏文科卒、評論家、小説家。

火野葦平：1907～1960、本名玉井勝則、福岡県生

まれ、早大中退、「麦と兵隊」。

上田広：1905・1966、千葉県出身、国鉄に勤めながら小説を書く、戦中は兵隊小説を。

三木清

（以上文士）

向井潤吉：1901～1995、京都出身、関西美術院、

川端画学校にまなび、日本各地の民家を写真に徹してえがきつづけた。

田中佐一郎：1900～1967、京都出身、入江波光に日本画を、安井曾太郎に洋画をまなび、戦中は

戦争画を描く。

（以上画家）の諸氏

本社側

藤本本社マニラ支局長：不詳

柴田賢次郎：不詳

牧野純夫：不詳

吉良武夫：不詳

佐々木剛…不詳

田中義高…不詳

時日 五月十六日

場所 日本倶楽部

【マニラ本社特電十八日発】 三百五十年のスペイン支配をこれに続く四十年米国支配から離脱して新たに東亜共栄圏の旗幟の下に立つた比島において精神生活の基礎ともいふべき文化の問題は果してどうであろうか。比島にはアメリカニズムはあつても何ら独自の文化がないとはよくいわれるところであるが果してどうであろうか。今回の比島派遣軍にわが文壇、画壇からも多数の文士、画家諸氏が従軍し、宣伝工作に、また文化工作に血みどろの努力を続けているが、本社ではこれら有力者の座談会を開き比島文化の各般の問題に亘つてその私見を叩いた、以下は

比島文化を語る

その概要である。

指導理念が先決 ここにも見る米の陥穽

藤本 これから比島の文化について御意見を伺いた
いと思います。

尾崎 文化といえば精神文化がその中心をなすが比島には精神的文化はないようだ。あるいは比島人にいわせるとそうでないというかもしれないが、われわれにはそれを見る眼がないというのは言葉がお互通じないからだ。いつかピーコック・ビルの放送場で若い比島人作家連の座談会を開いた時、誰か比島には伝統がないといったところ、通訳が伝統を電灯と間違えたので、作家連はむきになって電灯はある、電灯はあると主張するのだ。簡単なことのようだが、こうした勘違いが起る。要するに言葉の相違はわれわれをして彼らの中に深く入って行けない障碍を

なしている。文化を講ずる前にこうした大きな困難があるのだ。

今 多少文学的な雑誌もあるし賞金千ペソか、二千

ペソの作品募集もやっていたようだが、これという作家も出ていない。映画にしても映画技術、機械等は米国から転入したなかなか素晴らしいのだが、肝心な作家がいないのでストーリーを組立てることが出来ない。最近アルキリヤといういい人が売出しているようだが、この人は三十三歳未満の新進だ。

石島 比島が独立国でなく常に属国であつたということが比島独特の文化を生むことが出来なかつた一因ではないか。

火野 たしかにそうだ。現在比島に見ることの出来る文化といえばスペイン、米国の影響を受けた文化にすぎない。

尾崎 野蛮的生活から瓦斯を使い電燈を使うように

なつた文化的生活の進歩はあるが肝心の精神的文化には見るべきものがない。

三木 スペインの植民政策は比島の文化的発展を阻

止する経済的搾取を主にし、次いで米国人が入つた場合も比島の工業界の発達など考えず、ただ原料を比島から取つて工業品を売附け消費させた。そしてこれが比島独特の文化発展を阻害している。将来比島の農、工業の調和ができて経済的独立が成立すれば文化も当然生れて来るに違いない。比島に現在文化がないと悲観する必要はない。十分文化を生む可能性があるし、またわれわれはこうした方向に指導して行かねばならないと思う。

石島 比島に独特の文化を打建てる場合に宗教が非常に大きな問題になつて来ると思う。比島に文化が育つてもそれはキリスト教的文化ではないだろうか。

尾崎

それはまず日本がどんな文化を比島に要求するかが問題で、まずこの根本問題が確立され明確にならねばならない。そうした意味で南方文化問題の中心は現地にあるのではなく内地にあるのだ。

今 文化と気候論はどうです。文化を育てていた場合にこの暑さが非常な影響を持つことを考える必要はないだろうか。

尾崎

暑さの影響は確かにある。

今 読者の側からいつてもそうだが、比島人に読書欲があるかどうか疑問に思う。マニラには総合大学が六つ、単科大学が十もあり知識人は相当いるのだが、市内に本屋は数える程しかない。その本屋にもある本といえば安っぽい米国の三文小説ばかりだ。

火野

確かに書籍といえば大衆物が多い。肩の凝る本はこの気候では読めないだろう。気候の影響

は我々確かに考えねばならないことで、日本では春から夏が来て、秋冬を迎えまた春を楽しむという気候の変化が非常に刺激を与えてくれるが、ここでは夏の次にまた夏という変化のなさが、われわれの想像出来ないほど精神的影響を齎していると思う。比島人の衣服を見ても男が赤衣着物を着たり、花模様の上衣着たりしているが、これは色彩が綺麗だとか、調和がとれているから着ているのではなく何か変わったもの、ぱつと目立つものを着たいという欲望から着ているようだ。色彩に対してはわれわれでは掴めない異った考え方を持っているのではないだろうか。南洋民族の中で独立でもしようという民族は今のところ比島だけが、果して比島人に独立しようとする民族の精神的深さがあるだろうか。

三木

軽佻浮薄な比島人の性格も米国が長い間に

作つて来たのだ。比島の農産物の八〇％は米國に輸出され、輸入するものといえは全部米國の工業品で、米國は品物を売るために流行で比島人を操つてゐる。

尾崎

比島の蘇峰といわれる人でペドロ・アウナリオという人がいる。この人は比島で日本が何かやろうとしても、それは非常に困難だ。何故かなら比島には青年がいない、つまり青年の中に比島人を求めることが出来ない。それ程青年はアメリカ化されてしまつてゐる。比島人の性格を多少でも持つてゐるのは僅かに老人のみで、日本は青年に呼びかける前にまず老人に呼びかけよ、といつてゐる程だ。しかしスペイン、米國が強力な政治力をもつて比島人を支配して来たにしても、その支配に屈服し切れないものが國民性にはある筈だが、比島にはそれがない。安々とスペイン、米國の政治的繩張の中に入り

切つてしまふところに國民性の欠陥があるのではないか。

上田

バタアン戦線で捕虜となつた比島人の若い將校に何度も会つてみて感じたことは、彼の言動を見聞きしていると彼らが米國的存在であることも事實だが、そのほかにふてぶてしい存外なものを感じた。これは彼らの國民性として将来伸ばし得るものではないかと思つた。

向井

一般に比島人は怠惰だといふけれど北部ルソンのバギオ附近に住むイゴロット族は非常に勤勉だ。日本人の経営してゐる氷屋で働いてゐるイゴロットの青年は昼間は忠実に働き夜学校に行つてゐるという。

火野

それは文化の方面でもそうだが、イゴロット族にしろタルラック州の山間地帯に住むネクリート族にしろ、ミンダナオのモロ族にしろ面白い独得の文化や生活様式をもつてゐるが、彼

らは全くの原住民扱いにされて比島を代表する民族ではないのだね。

田中 スペイン化され、米国化されて独得の文化も持たないタガンログ族やビサヤ族が比島を代表するのだから、彼らのみを中心に文化や国民性を論ずるのも何だか変だね。

石坂 従来比島では独立問題は単に政策として弄ばれて来た傾向があるのではないか。

三木 それは実際そうだ。米国が独立させた方が経済的に利益だと思つて独立の好餌を与えようとしたわけで、果して比島人に根強い独立精神の根拠があるかどうか疑問だ。

今 比島の歴史を見てもそうである。精神的独立はちつとも考えられない。経済的独立のみ論ぜられて来たにすぎない。

石坂 比島民族というよりは寧ろマレー民族だが、ここの上層階級には混血人の多いことを注目し

なくてはならぬ。

三木 民族の混血ということは非常に重要であつて、比島の混血についても今後重大関心が払われるべきだと思う。

火野 百姓も收穫まではやるが、さて精米とか、販売方面になると華僑に独占され甘い汁はみんな吸われるという。

向井 この間米人捕虜のオーエンスが来たから、米国は比島に何の文化もやらぬではないか、残したのはチェスターフィールド（煙草の名）の看板だけだ、といつてやつたことがある。

田中 若い技術家にはよくあつたが日本で見るとな美術精神が全然見られない。私どもはこちらへ来て赤い花にもアカシヤにも感情をそそられることがしばしばあるが、比島人がその感情をもつかどうか疑いたいな。

三木 農村方面を歩いてみてその感を深くするよ。

もつともこの農民層は日本には比較にならぬ程文化は低いのだが。

今 比島人は直ぐ与えて貰うことを考えている。これが永い間の隷属的な精神の現れだと思う。

尾崎 日本民族の精神に触れると、米国式教育を受けたものはそのまま止つていられなくなる事がわれわれにも諒解出来る。

石坂 また半面ではわれわれ自身が日本人の国民性を反省しなくてはならぬことを痛感する。

三木 日本人の生活がはつきりと指導理念に盛られていぬ以上、南方共栄圏の発展は困難だと思う。

石坂 尾崎氏のいうように国の根本的理念の確立が第一だと思う。表現はそれによつて十分認識させることが出来るのだから。

福本 いろいろ興味ある且つ有益なお話をしていただき有難う御座いました。

底本：神戸大学経済経営研究所蔵新聞記事文庫
東南アジア諸国(13-126)より

底本の親本：東京日日新聞 1942(昭和17).5.20

「以下の記事は、日本占領下の東南アジアに於ける日本語教育が主題で、座談会部分は半分だが、参考のために記事全文を載せた。」

南の日本語教育

出席者

司会者 軍報道部 石坂洋次郎

軍政内務部 内山良男…不詳

軍報道部 三木清

軍政部宗教部主事 千葉勇…不詳

軍政部交通部 並木芳雄…不詳

軍報道部 村上富夫…不詳

日本語学校校長 中島正義…不詳

滞日十八年機械技師 アギラル…不詳

行政長官府勤務 ベニテス…不詳

マニラ市水道局技師長 デリオン…不詳

【本社側】 福本支局長、牧野、上妻支局員…不詳

(一) 物本位、まず耳から

もつと来て下さい日本の先生

比島(上)

南方各地における日本語熱は素晴らしい。簡単な日常語はよく耳にする。然し日本語を通じて東亜建設の真意を諒解させ、深遠な東洋文化の精髓たる日本文化を摂取させて、東洋民族たる自覚を喚起させるためには日本語の徹底的教育が必要であり、克服すべき幾多の困難がある。マニラ本社支局では実際に日本語を教授する側と修得する側の代表者に参集を求め、如何にすれば正確かつ迅速に日本語を教育し得るかを検討し日本語教育の貴重な指針とした。

福本 マニラでは入城以来日本語熱がますます盛ん

となつて、昨今では方々で日本語講習会が開かれ軍政部当局でも熱心に日本語指導に當つておられます。われわれは今後とも正しい日本語を間違ひなく彼らに教えてゆかねばならぬと思いますが、本日は教える方々と教えられる方々とお招きして日本語教育の実際を検討してみたいと思ひこの座談会を開きました。石坂さんに司会をして頂きます……。

石坂 東亞諸民族の眞の協力を得るためにはどうしても通用語が必要であり、これは日本語をもつてしなければならぬ。ところが日本語を他の民族に修得させることは非常な努力を要する。まず当局としての立場から内山氏から願ひします。

内山 フィリッピンでは支那で使用された「ハナ

シコトバ¹」を軍政部として使用することにした。

即ち日本語を聞いたり話したりすることが第一要件で、書いたり読んだりすることは二の次にした。日本語はどうしても日本人によつて教えなければ正確な発音はむづかしい。このためには多数の日本語の先生を内地から呼ばねばならぬ。小学校には内地から僅かであるが教員が来るはずで、一方比島の小学校の教員を集めて来月（八月）から日本語を教授し、初歩教授に当らせるはずである。中等学校以上は現在計画中である。

石坂 比島で話される言葉は英語、スペイン語をはじめ各地の言葉を入れると八十幾つという多数に上るので、日本語の問題以外にも比島の国語統一が必要だと思う。

内山 比島では小学校で第二外国語としてスペイン

¹ 大陸向けに編纂された初級日本語教科書、次の段階は『日本語読本』巻一、巻二があつた。

語を課していたが今度これを廃止した。

三木 比島の言葉の統一は比島人自身の問題で、比島文化の発展と国家の統一が出来なければ本当に出来ない。タガログ語を国語ときめたことは形式的にきめたまでで、果して国民的に普及したかは疑問である。

日本語の問題として重要なのは、日本語を教える態度の問題だと思う。スペイン時代にはスペイン人は土語を理解して行つた、ところが米國時代にはアメリカ人は英語ばかりで行つた。ヨーロッパやアメリカにあるベルリッツ外国語学校では最初からその言葉で終始して教えて非常に能率を上げている。日本も日本語をもつて教えるという主義、これが一番重要でないかと思う。

並木 長期にわたつて日本語を教授する場合はそれでよいが、今の場合のように、急速にしかも年齢のいつた者に、いきなり子供に教えるように

音から注ぎ込むことは困難だ、文法や語意から行つた方がよいと思われる。日本語教育には大人と子供とを区別する必要があると思う。

三木 ご尤もな説だが、それでも実際に物について音で教える方がよくはないか、日本人は本に頼り過ぎる。今後は教育全般もそうだが、語学も本より離れて物に即して行つた方がはるかに進歩を見えると思う。

中島 根本方針としては三木氏の通りであるが、実際に教えて見ると並木氏のいうようになって来る。特に抽象名詞を教える場合、たとえば「愛」というのを教えるのに急速に教授する場合は彼らの知っている言葉を仲介するのもやむを得ない。

三木 米國人が比島に英語を普及したのは、他の外語を知らなかったのが却つて今日のように普及出来た原因ではないかと思われる。

並木 腰を入れてやるときはよいが、三ヶ月でしかも一週間三回、一回二時間程度の現状ではどうしても英語を入れる必要がある。

中島 英語を使つて教えれば進歩が早いが、すぐ進歩が止まる、どうしても音感教育が根本でなくてはならぬ。

三木 比島人は音楽がわかり、耳の訓練が出来ているから音から入つて行く方がよい。

千葉 ローマ字を使うかどうかの問題であるが、ローマ字で日本語を発音出来ぬ場合が多いし、しかもローマ字そのものが種々書かれているから自分はローマ字を使わない方針で全部片仮名、平仮名、漢字で行くことにしている。

アギラル なるべく簡単なものから教えれば比島人も日本語を覚える。そしてローマ字は使わない方がよい。例えばコップという言葉でもローマ字で書くより仮名でツを小さく書けばよく発音出

来る。またゼと書けばゼと発音するが、Z Eと書けばセとなる、スペイン語でZはSと発音するからです。

それからぜひ日本人の先生にならいたい。それでないと言音はうまく行かない。比島人の英語の発音のよくないのを見てもわかる。

(二) 雑誌が『サシ』になる

難かしいテニヲハ『ツ』の発音

比島(下)

石坂 日本語を教える側と習う側とで具体的に何が困難かを聞きたい。

中島 自分は戦前から日本語教授をやっていたが、戦前には必要というより趣味から習うといった風で第一に気分が違ふ。戦後はみな必要に迫られているから熱心で成績が非常によい。四ヶ月で

初等科を終るが殆ど全部のセンテンスの種類を教えてしまう。その間に片仮名と平仮名を教える。発音ではザ行の発音と撥音のツが困難だが、日本語にはこれがなかなか多い。たとえば雑誌もザシ、サシとなる。それから困るのはたとえば私、僕、俺、余など一つのことを種々表現されることだ。しかも丁寧な言葉とそうでない言葉が実際に必要だから教えづらい。

並木 比島役人に教えているが、たとえば「踊れ」と「踊って下さい」とどう違うか文法的に解決しないと気がすまない。それから電話の「モシモシ」を「ハロー」と同じだと教えると「モシモシお早う」という。

中島 それから「行こう」とか「しよう」とか伸びる場合も彼らには難かしい。例えばソシキとソーシキでは全く意味が違う。ケシキとケーシキでも全く意味が違う。これも随分困らしい。複

文もなかなか難かしいようです。簡単な複文例えば「きのう町で買って来た鉛筆」ぐらいのものでも難かしい。

福本 日本語を教えるのに、まず片仮名で行くか平仮名で行くかが大分議論があるようだが。

内山 軍政部ではまず片仮名を教えている。

中島 わたしはまず片仮名から教え、次に平仮名を教えているが同じようによく覚える。横文字になれている彼らは丸みのある平仮名を決して難かしがらない。はじめから平仮名を教えてはという議論があるが、自分は少しも実行困難でないと考える。

石坂 習う側としてはどんな点が難かしいか。

デリオン チュとツの発音が難かしい、殊にツの発音がうまく出来ない。それからUとIがしばしば聞えない。サイレントだと思っている。デアリマスといった場合のスである。ローマ字で書

くとSUと書くが、発音上はSに聞える。だから、やはり片仮名で教えて貰った方がはつきりする。

ベニテス 第一にテニヲハが難かしいと思う。これ

は自分が教わったところを家で兄妹に教えているうちに段々上手になって来た。それから一般に日本語は非常に難かしいとされている。

実際、バツカリーの日本語教科書などみると「何と日本語は難しいか」と思うが、一つの言葉をとって系統化してみるとそんなにも難しくはない。例えばノムという言葉をとってノミマス、ノンデイマス、ノマネバナリマセン、ノミナサイ……といった具合に整理するとそんなに幾つもない。それに日本語を勉強するときに英語を頭に置いてはだめだ。タガログ語を頭に入れて、これと比較しながら考えていると大変似ている点が多いのでたやすく覚えられる。

私は兄妹にも友達にもこういつて日本語は難し

くないといっている。

石坂 (アギラル氏に) 何年ぐらいで日本語が話せるようになったか。

アギラル 日本に行つて三ヶ月ぐらいで相当出来るようになった。それから漢字は字の形で判読出来るようになった。それに漢字は面白いです。たとえば木は木の形をしている。その木が三つ集まつて森になり、とても面白い……。それから日本人は言葉ですぐその人の教養から地位がわかる。特に上官と下のものはすぐわかる。

石坂 軍報道班で編纂した日本語の教科書について編纂者の村上氏から……。

村上 日本語の教科書は一月の終りごろまでに、まるで雨後の筍のように一円から一円五十銭くらいで随分沢山出た。中にはハズバンドとして夫、主人から宅があり、グッド・バイとしてアバヨと書いてあった。二月の初めに検閲制が実施さ

れそれらを押収し、これに代るものを作ることにし、こちらからいうのがわからなくても比島人が意思を発表出来るように方針を定めて、日本語教科書を作った。この本は五十音や日本語の発達の歴史、文法、それから単語三百語を集め、最後に簡単な字引も加えている。近く完成するが従来のは会話がその場合しか使えないが、今度は単語を応用出来るように仕組まれている。

石坂 われわれは日本語に十分な自信をもつて行かねばならぬ。日本人はちよつとしたところに英語を使ったりするが、これはいけない。お互もそうだが比島人には正しい日本語を使いたい。現地の日本人は広い意味でみな日本語の先生である。一人一人が正しい日本語の先生であるという自覚をもつことが正しい日本語を教え、また今後の文化工作の基礎となるものと考えられる。

(三) 漢字は五百以内に

学芸会で鮮か邦劇『父帰る』

^{タイ}盤谷^{バンコック}日本語学校長平等通昭¹

タイ国では日本語教授はバンコック日本語学校が中心になって行っている。この日本語学校は昭和十三年十二月開校、外務省補助、現地大使館監督の下にタイ国文部省で私立小学校として公認されている。王城の前、東京ならば丸ノ内というような官公衙街に所在して従前は夜間教授で百五十名くらいを収容したが、私(平等氏)が昭和十五年十月に赴任した時は、五、六十名の生徒がいるに過ぎなかった。その後順次増加し、昭和十六年十二月の皇軍タイ国進駐後日本語熱が盛んとなって、昼夜兼行の四部教授を行い、

1 1903 不詳

多い時は六百人近い生徒を收容、現在は四百人の生徒を收容している。教師は日本人の専任教師に私と鈴木忍君（国際学友会派遣）ほか一名、講師に佐瀬芳之助氏（タイ国美術工芸学校教師）タイ人は男女五名である。生徒は官公吏が多く、それに学生や

結婚前 の女生徒も来ており、男女の比は二対一である。皆良家の子弟で、就学の目的は日本の文化、風俗、習慣を知るためと日本へ留学するために来ているのも多い。本年三月二十五日初めて第一回の卒業式をタイ政府のシルヴァコーン劇場で、帝国大使、タイ国親王、諸大臣出席の下に盛大に行い、終つて学芸会を催し、唱歌も会話も朗読もすべて日本語、卒業生は菊池寛の「父帰る」を日本語で上演して、バンコックの邦人を驚かした、卒業生は僅か八名であつたが、風波の立つた折も隠忍して、三年間勉学を継続

して来た学生である。今回の進駐では四名が光栄にも軍臨時通訳に採用されたが、卒業生、在校生で邦人官庁、商社に奉職しているもの多く、就職の申込みに応じ切れないほどで入学申込も殺到するので最近商業区に分校を一つ設ける予定である。

教科書は従前は日語文化学院の日本語読本、国定教科書の小学国語読本（一ヶ年に二冊の予定）を用いていたが、現在は国定教科書の入手困難なので、上級（三年）にのみ国定教科書を使い、下級は国定教科書が得られないので「ハナシコトバ」上中下、国際学友会の日本語読本等を用いている。これ等の書籍も船便や輸出手続の関係で入手が遅く難かしくなつたので現在は「ハナシコトバ」に多少の訂正を加えたものを当地で印刷して用いている。今後出来得る限り、タイ人向きのものを現地で作つて自立して行く方

針である。会話は各学年とも邦人教師が自分で教材を作り謄写版で印刷して頒布している。教材は何に拘らず円滑に豊富に内地より補給して貰えたら、それに越したことはない。国定教科書も日本人児童のため編輯されたものをそのまま外国人に教えるのは不適とも思うが、

学生は 国定教科書によつて習うのを希望しているので、これを全然捨て去ることは出来ない。卒業生と三年生にはこの五月から当地発行の邦字新聞バンコック日報をも使用して新聞を読む稽古をしているが、現地新聞は未だ印刷も不鮮明で誤植も多く、文章もよくないので、出来得れば内地の一流新聞に換えたいと思うが、部数も多く入らずに日時も遅れるので実行しにくい。何かやさしい明るい文学小品の副読本が非常にほしい。海外日本語普及に中央団体でも出来て、教材その他を提供し、連絡にもあたつて貰える

と好都合である。例えば教材に附帯した謄写版原紙や印刷紙のような物資の入手にも困つてるので斡旋して貰えるのと好都合である。

仮名遣いは一学年で「ハナシコトバ」を用いる期間は表音式を用いている。この方式は外国人に日本語初歩を教えるには、確かに適当で、日本語習得が早い。しかし「ハナシコトバ」は上中下しか出来ておらず、かつ一般の日本文献はすべて歴史仮名遣いであるから、これを歴史仮名遣いに切換えることにしている。これは一枚のプリントで容易に変更出来る。漢字も外人には難かしいものであり、使用漢字五百字の範囲に止めるように注意している。仮名は初学年では片仮名を用いているが、二学年以後では平仮名をより多く用いている。これは表音式より歴史仮名遣いに切換えるのとはほぼ同じころに行つている。

タイ国における日本語の普及のためには、タイ人向きの日本語教科書を作ることと、本校の分校を

各地に 開設することが必要である。これは及ばずながらぼつぼつと着手しているが、タイ国の大
学、専門学校、中等学校に英語に代つて第一外国語として採用して貰うことが肝要である。チュ
ロンコン大学の予科ではこの六日から開始され、大学部では夜間講座が始まつてタイ人教師が教えているが、これが他校にもおよぶなら日本語普及には最も有効である。在留邦人将兵が普及させる日本語も、純正で組織的ではないが、普及には極めて有効である。在留日本人がタイ語を習つて使うのも必要であるが同時に金を出して使う事務員、召使は英語の代りに努めて日本語を使うなら日本語普及の底力は驚くべきものであろう。

(四) もう片仮名で作文

言葉を通して精神指導へ

ビルマ

【ラングーン本社特電沢開特派員発】ラングーンの日本語学校は去る六月一日に開かれた。昭南でもバタヴィヤでも日本語学校を経営しているのは軍宣伝班であるがここでは軍宣撫班である。軍宣撫班というのは仏教国ビルマにふさわしく特に内地の坊さん達ばかりで組織されている宣教化班である。日本語学校開校の噂を聞いて押し寄せて来た志願者は約千百名、このうちから五百五十名を選抜、男子女子、少年の三部に分け男子三百二十名を四クラスに、女子百四十名を一クラス、少年九十名を一クラスと計六ク

ラスを設けるほかビルマの坊さん八十名を対象とする特別クラス一がある。授業時間は各部とも一週三日で一日おきに日本時間の午前十時半から午後零時半までの二時間ずつ、指導には宣撫班の四名が当り補助にビルマ人教師二名を使っている。開校約三ヶ月にしかならぬのに生徒達は中々熱心で、中にはすでに片仮名で作文を書くものすらある。ビルマは南方圏の中で最も大きな戦禍を受けた。この中から原住民達の日本語を学ぼうとする努力は涙ぐましいものすら感じられるが、いまラングーン日本語学校主事上田天瑞師（高野山大学教授）からビルマにおける日本語教育の實際を聞いてみる。

一、教材について ビルマ文字による日本語会話の小冊子は五、六冊巷間に現れているが、いずれも極めて杜撰なものであり教科書になるようなもの

のを入手することが出来なかつたので、われわれ教師が教材を編纂、謄写して生徒に配布した。内容は簡単な実用会話を主とし文法的教材をも加えたものでわれわれは週二回教材の検討を行い改善を期している。

二、仮名づかい ラングーン日本語学校は修学期間を一ヶ年とし四ヶ月をもつて一学期としている。現在は第一学期で、この期間は耳と口の練習に主力を注ぎ仮名は片仮名を教えることにしている。第二学期以後に平仮名および平易な漢字をも教授する方針である。

三、普及の程度 日本語学校は現在ラングーンに一校、シリアムに一校あり、いずれも軍の手で開設されている。モールメンには四月から日本語学校が開かれていたが六月から小学校、中学校な

どが開かれたため、日語学校は廃止され、これらの学校に宣撫班から教師を派遣して日語教授を行っている。なおマンダレー及びバセインにも最近開校の予定と聞いている。

四、将来の見通し ビルマ各小学校及び中学校に日本語を正課として、また日本語速成教授機関としてラングーンなどに代表的日本学校を設置して日本語の普及を計れば近い将来、相当日本語の普及を見ることが出来よう。ビルマ人は一般に語学に興味と才能を持っているようで、殊に日本語とビルマ語との文の構成が全く同一なことは彼らの最も便としている点である。

仏印

仏印教育局日本語講師 西貢にて 祖河孝

仏印ではまだ民間に日本語教授の学校が許さ

れていないし、安南人はその生活の中に日本と接して生活の必要上、多少は日本語を覚えてゆく程度を出ていない。今のところ仏印政府の夜間教授が唯一の機関である。つまり仏印で日本語教育の対象となるものは市井の日語熱とは別に、特にそれぞれの必要上、仏印政府によつて命ぜられた人々や、これに準ずる人達だ。そこで私は試験的にまず日本語の概念を植えつけることにした。これには仏文法あるいは仏語のあらゆる角度から日本語を解説して行くほかはない。大体約三ヶ月で彼等に日本語研究の意欲を持つように仕向け、日本語を困難なうちにも学ぼうとする楽しみを沸かせたことは成功だった。この上で初めて実際の教授に向ったがやはり文法を通じての教育には日本語は表現が多く、繊細な感情を有するためと日本文法があまりにも難解であり、一律に教育する困難を生ずるため、

実際に見、感覚によって知る直接法を採用した。

このため教材もやむなく自分の構想によってその日のプランを作り、予定を作成したが、大体において成功しいまはこれらを一つに総合整理するよう努力している。教育に当って問題となるのは片仮名、平仮名の何れをとるかということだが、新聞その他はいずれも平仮名なので弱ったが、普通の教育プロセスのように片仮名を用いることにしている。かかるうちにも、私の特筆したいことは定期に試験を行い、全員にその能力を批判させるようにしたことだ。このためまず第一回を八月の末に実施することになっている。

以上のように仏印における教育法は非常に変則的なものだが、私達は将来如何にしてもその対象を児童とし、しかも暗記法による原則を首唱するものだ。そして片仮名による新聞雑誌の発

行、日本語で話す社交機関を作ることが必要だと思う。教材も絵画によって説明する直接法を採用、単なる日本語を教授するだけでなく、日本語を通じて日本精神、日本文化の指導へと向けねばなるまいと思う。【終】

底本：神戸大学経済経営研究所蔵新聞記事文庫
東南アジア諸国(13-20)より

底本の親本：大阪毎日新聞 1942(昭和17).8.18
21

大東亜文化

三木清

中島健藏：1903～1979、東京生まれ、東京帝国大
学仏文科卒、文芸評論家・フランス文学者。

編輯者 今夜は大東亜共栄圏文化について話して

いただきたいと思います。ヨーロッパの場合なんかの場合と異なり、大東亜の文化的統一なり確立のためには様々な面倒な条件があると考えられます。日本や支那はとにかく、マライだとか、ビルマだとか、ジャワとか、フィリッピンとか、一応今まで西洋文化によって中断されていた形の固有文化が幾つもあり、それを含めての大東亜文化というものを日本が確立しなければならぬ、そういうふうな状況だと思えます。そこで、各地域の

固有文化を大東亜文化の各单位としていかに蘇らせ、統一するかの問題、やはり各地に未だに浸潤している西欧近代文化に対する問題、日本文化の大東亜共栄圏文化の指導者としての反省、そのような様々の問題が考えられると思うんですけれども、そういったことについて実際に現地から帰っていらしたお二人に話していただきたいと思えます。

中島 大東亜共栄圏の中のいろいろな地域の文化が地域によって可成り質が違ふということが一つの問題ですね。それと同時に、質が違いながら共通の点を有っていると思う。清水（幾多郎）君と、ちょうど帰りの船で一緒に、その時彼が真つ先に提出した問題だけれども、各地域なり、民族なり夫々様々に分かれる文化の程度だね。そういう文化には、いずれも特徴がある。その特徴を認めてそれを活かしながらやってゆくか、それともそう

いう特徴なんというものは、必ずしも大して考えずにそのまま全体をあるひとつのレベルに上げてゆくか、そこに非常に深刻な問題がある。それについて彼は意見を吐いていたわけなんです。例えば、

清水君の所見によれば、ビルマならビルマの文化財と号するものが非常に薄っぺらだというのだね。それにたいして一種の憤りみたいなものを感ずる。もしも大東亜共栄圏の諸地域の文化の質を異質のまま、それを何か抽象的な共通の理念なり何なりによつて結び付けるとすれば、後れたというか、頹廢した文化というか、そういう文化がそのまま活かされて来るわけです。それに対してこつちが大して刺戟もしないで抛つて置いてよいのだろうか。それぢや困るんじゃないか。つまり一種の放任主義だね。それではいかんから、こいつを一定の水準に高めなければならぬ。高めなければ、共栄圏として成り立つてゆかないぢや

ないか——ということを考えてきたらしい。当人がいないから確かめるわけに行かないが、大体そういう意見らしい。そういう問題があると思うんです。

ところで別の見方から南方の現地文化がもう一つ共通の特徴を有っているだろうというのが、船の中で私が吐いた意見なんだがね。例えば回教化されたインドネシア文化は、外の文化——つまりヨーロッパ文化ですね、ヨーロッパ文化と接触しない前の形で相当高度だと思う。多少自然主義的な見方になるけれども、歴史を無視して対照をやめて、或る運命的な条件の下に発達した文化として考えると相当高度だと思う。それがヨーロッパ文化とぶつかつて、相対的に程度がガタツと落ちて来たという形だと思う。そこで今の南方圏の諸文化は何も未開社会的ではない。未開社会の文化でなくして、むしろ相当まで出来上がりながら停

滞した文化だ。それが主としてヨーロッパ文化との接触によつて自然現象的に圧迫されて、急速に頽廢の相をあらわして來た。今度新しく日本との交渉が始まつて、無論政策的な働きかけも行われるが、それ以前に、頽廢しつつある現地文化と、ヨーロッパ文化の影響と、日本文化の実力とが、はげしくぶつかつた時どうなるかということを條件的に知つて置く必要がある。——と、そういうふうな問答をしたのですがね。

そういうことについて、フィリッピンなんかはどうでしょうね？

三木 フィリッピン辺りの問題からいえば、現在あちらの知識階級の間でも二つの違つた意見があるように思われる。一つは固有文化の復興という考である。もう一つは復興派にたいする修正派というようなもので、つまり西洋文化の影響を受けてきたことは必ずしも全部悪いのではなくして、

その中で悪い部分を修正してゆけばいいんだ——というような考えなんだけれども、かような二つの考えについて、固有文化の問題が差し当たり問題だろうと思うが、この固有文化という点から考えれば、ともかくフィリッピンにはスペインが来る前に固有文化があつたということは事實である。しかし、程度から云えば、今日の文化水準というものから観て、それをそのまま復興するとしてもとても大きな働きをなすことができないようなものぢやないかと思うね。固有文化の復興を云う人は、とかくその水準を強調したがるのだけれども、それは行き過ぎで、公平に観て、可成り低かつたといつてもいいだろうと思う。そこからしてフィリッピンに固有文化が無いというような説も出てゐるわけだ。しかし固有文化の反省は大切なことで、それはその水準如何ということよりも、今後の文化の向うべき方向、日本の指導してゆく

方向を定める上に大切なことだと思う。

そこで東亜文化というものが考えられるためには、何か現実の地盤が必要なんで、それには西洋文化とは違った一つの共通の地盤が必要なわけで、その地盤が問題なんだけれども、その場合地理的な聯関——つまり総ての国が東亜という一つの地域にあつて、地理的な親近感を有つてゐることの外に、人種的な近づきということが考えられるけれども、もう一つは、これは僕がフィリッピンへ行つてから特に強く感じたことだけれども、産業上或いは生活上の基礎的な条件が共通である。そこから一つの共通の民族的な性格および文化的な性格が出て来ているということが非常にあるんじゃないかと思つたわけだ。それはよく云われることだが、東洋の社会は農業社会で、しかも米作——それも灌漑による米作を中心にしてゐるということ、そういうことは、もちろんいろいろ

な地域において特産物というものがあるとか、或いは近代的な工業というものの発展があるとかというようにして条件は違つてゐるけれども、しかし、ともかく長い間の伝統から考えれば、一つの共通な地盤としてやはり非常に重要な意味を有つてゐるんじゃないか。そういう意味から、東洋的な農業社会及び農業社会の文化というものを大いに研究する必要があるんじゃないか、ということを僕は痛感したわけなんだ。

それは日本の文化を觀ても、日本は、共栄圏の中では一番近代的な産業の進歩してゐる国だけれども、しかし、民族的な性格及び文化の性格を今日においても規定してゐるものは、殊に西洋文化にたいして規定してゐるものは、やはり農業社会の文化というやうなものぢやないかと思う。そこに東亜文化の一つの共通な地盤があるので、この農業社会というものの、農民の生活形態というやうな

もの、それから出て来る農民的性格および農民文化の性格というようなものをもっと深く探究するということが、東亜文化というものを考えてゆくに根本的に必要ではないか、というようなことを考えたわけなんだ。

例えば、東洋に於ける共通のものとして一番眼に付くのは、家族制度だと思うが、その家族制度というようなものもやはり東洋的な農業社会と密接な関係があるんじゃないか。そういうことが、東洋的な観念或いは思想の性格をいろいろ決めているんじゃないかと思う。もちろん、そういうところにのみ固執するんでなくて、近代的な産業というものの重要性を考えなければならぬけれども、しかし、そういう農民社会および農民社会の心理、生活感情というようなものの伝統の有つ意味をもっと新しく解釈し直す、高度に思想化してゆくということが、重要ぢやないかということ

を僕は痛感したわけだ。そこに東亜文化の共通の地盤というものを求めてゆかねばならない。

もちろん、現実の段階においては、家族制度というようなものを見ても、フィリッピンでも、支那でも同じだけれども、いろいろな弊害を有っている。例えば、フィリッピンでは、食えなくなると、親戚に転がり込むというようなことからして、独立心を失くする。転がり込まれる方では結局働いてもひとにタカられてしまうから働かないほうがいいというので、働け者になる——というような、現実の問題としては、そういういろいろな弊害も伴っているわけで、そういう点からいつて、これをもっと醇化して文化的に高めて行くということは必要だけれども、ともかく東亜文化の共通の地盤としては、今いったような点を僕は今度行つて痛感してきた。

中島 地域によつてずいぶん違うわけだけれども、

まあマライなんかは、固有文化というような觀念が通用しない代表的な土地なんだな。大体、彼処では原住民というものは殆ど文化的な意味を有っていない。現在棲んでいる人間の人口構成から云つて、殆ど移住民、人口の半分を占めるインドネシア族でさえ、目ぼしいのは大抵ジャワ、スマトラから再び入つて来たところのマライ族、それから後の半分は華僑なんだね。彼らの従事する産業は、大体ゴムなり、錫なりという原料生産なんだけども、ゴムのやり方などでも、現在ではもうヨーロッパ的な要素も入っているが、華僑本来の形としては、南支那地方の農村の性格というものゝを相当残しているんじゃないかと思うのです。で、結局マライ辺りだと、インドネシア的な固有文化というものは殆ど考慮の外に在る。無論イスラム教というものも大切だが、それに対抗し、現在それ以上の力を有っている華僑文化というもの

のを先ず考えなければならぬ。大体彼等は南支出身であつて、南支の彼等の出身地の生活形態から作られている性格は、やはり主として農村的なんです。これがしかし、マライなんかだと資源の關係とか、氣候の關係とか、土地の關係とかによつて穀類を作る農業でなく、ゴム林というような、広い意味の農業に入つて来た。

それから錫なんかの採り方にしても、華僑には大いに特色がある。近代のヨーロッパ的な大きな裝置が出来ゝる以前に、やはり非常に規模の小さい錫採取が行われた。その形式なんかも、大体小数の仲間が組んで同郷同村のつながりに頼つてやるという形なんだね。例えば、護謨林を拓くにしても、大きな近代的なエステート *estate* と別に、彼等がやつていたという面白い遣り方がある。三人位が組になる。組になつて一人が賃銀労働をやる。そうしてあとの連中は、その収入で食わして貰つ

てどんどんジャングルを拓いて行く。そうして一定の耕地を造る。其処に護謨を植え付けて、そいつを今度はそういう開墾の能力の無いマライ人に売り渡す。売り渡すと同時に、彼等は、採取される護謨の買付けや生活必需品の配給に関係して来る。つまり農業的な労働から極く小さな商業資本経営に移って行く。そういうふうにして利益を分けながら段々大きくなったのが今の華僑の大金持の歴史なんだね。そういうことなんかも、やはり南支那の農村の性格というようなものと関係があるだろうね。南方では特に南支那の要素が非常に重大だと思う。僕は、インドネシアの文化、インドネシアが回教化されてからの文化だね、こういうものの意味はだんだん小さくなって行く気がするのです。

そういう点ではビルマなんか、どうなっているか、現実を知らないが、——とにかく、今度の南方圏

に於ける日本の主動的働きかけに關聯して、現地の基礎的な要素としての南支那をどうしても考えから外すわけにいかんのだね。華僑という点、普通には商業的才能や資本だけを概して重要に考えたがるのだが、人口構成の上から云つても、労働者だね、苦力というものがやはり大部分を占めているのですね。この連中も永久に苦力で居るわけでない。いろいろ盛衰があるが、ずいぶんいろいろな圧迫を受けながら、一進一退して今の一種の華僑の社会を創っている。やはり支那と日本の文化というものの関係を更めてよく観ないと、結局どうにもならぬ。インドネシア系の文化というのは、回教の文化に關聯して次に重要だけれども、これはまあむしろ段々下火になる文化でないか。それよりもっと現実的な南支那辺りからやって来た文化の問題がどうしても中心になると思うのです。

三木 東亜文化といつても結局、今、中島君が言っ

たように、日本と支那とが一番重要な要素であるわけなんで、今の話にあった、マライ辺りで護謨林の栽培とか、或いは錫を採るとかが中心的な産業になつてゐるような場合でも、農民的な生活形態といふようなものがその産業の中に一つの形式として残つてゐるということは、僕は非常に面白いことだと思ふんだ。日本の産業はもつと近代化されてゐるけれども、やはりその中にも日本的なものといふべき、家族的といふようなもの、——その家族的といふのは、僕は大体農村的な文化から来たものだと思うが——そういうものがどこまでも残つてゐるというところに特色があるんだろう。そこに日本の産業の強靱性があるんじゃないか、という気がするんだがね。だからして、そういう意味においてもこれまでわれわれが余り注意しなかつた農民的な生活形態というものを、もつ

と社会学的に、また心理学的に研究して行くことが非常に重要でないか。農村社会学とか、農民心理学といふようなものはこれまであまり研究されてゐないと思うのだが、日本では一番重要なものぢやないかといふことを感じたのだけれどもね。

ルーラル・ソーシオロジー【Rural sociology】、農村社会学といふか、そういうものはアメリカが一番発達してゐるようだけれども、アメリカの農村といふものと東洋の農村といふものとは非常に違う。だから、アメリカの農村社会学といふものを東洋へ持つて来るといふことはできない。そういう点において農村社会学、或いは農民心理学といふようなものをもつと研究するといふことが、学問的に云つても、東洋的な文化のスタイルといふようなものを探り出す一つの重要な手懸りでないか。農民文学といふものもそういう点においてもつと思想的に考うべきものがあるのではない

か。

それから実際問題としては、日本が大東亜共栄圏にたいして与えうる最も手近で最も有力なものは、日本の非常に発達した農業技術でないかと思う。これを先ず与えるということが重要なことで、そういう点からいっても、やはりこの農民文化の伝統というものを基礎にして、東亜文化というものの方向を考えて行くということが、重要ぢやないかというふうに思うんだがね。

で、農民文化というと、もちろん農業という一つの特種なもの、限定されたものに拘泥わつてしまふと危険があるんだけど、そうでなしにそこにもつと一般的な文化のスタイル、文化の形式というようなものをそこから見出して来るということが必要でないかと思う。これは芸術家や哲学者の仕事だろう。

中島 マライは人種が非常に多いところだが、だい

たいにおいて、現地人たるマライ人と、華僑と、それから印度人と、それから欧亜混血児、現在のこの種の構成は大体南方圏に適用するものだろうと思うけれども、これがおのおの民族によつてコミュニティを作っている。彼等みずから、英語でコミュニティと呼んでいるのだが、これは何と訳すか、血縁的な種族中心の、或いは郷土中心の社会であり、それが更に大きくなれば、つまりチャイニーズ・コミュニティ、インディアン・コミュニティ、マレイアン・コミュニティということになる。そのコミュニティという呼び方が、社会学の方でいう共同社会に通ずることも明らかだ。勿論農村的な性格とも関聯がつくのでしようが、それよりも考えなければならぬことは、さつきに護謨林の場合のように華僑なんかのやつていた遣り方を農村的であり、且又共同社会的であると考えるならば、われわれが踏み越さなければ

ばならないところの自由主義の遣り方にそれが現実的に負けて来つたことだ。若干の少数の人間がお互いに労働力を出し合い、且生活の協力もし合うというような、そういう閉鎖的な形のものは、それだけではゴムや、錫の値下りを生じた恐慌の場合に明らかに弱点を出している。そういう場合に、彼等の企業等がどんどん亡びて行つて、全く契約による苦力というようなものに労働力を求める近代的なエステート経営にだんだん併合されて行つてゐるという事実がある。そこで次の問題としては、そういう東洋というか、大東亜圏というか、その共通の特質をなすという農村的な性格だね。これが僕はそのまま型通りに、いわゆる近代主義に負けてゆくとは思わなければならないけれども、しかし、例えば、華僑の、商業的な才能、まあ主として物の配給に関する彼等も実権だね。これは現在でも実に大きい。ところが、こいつは徹底的な

近代主義的な機構に寄生することによつて威力を発揮するのであつて、これが彼等の好むと好まざるとに拘らず、戦争目的の遂行という絶対的な条件によつて、果してどれだけ活動の余地があるか。華僑は、今まで世界恐慌の影響を受けたり、それから統治者のいろいろな干渉によつて、ずいぶん迫害されたり、落されかかったことがあるが、つねに切抜けて来た。ところが、今度の世界戦争の影響は、彼等としては始まつて以来の大難関だ。それがですね。日本の実例などを彼等が理解し得れば分るのですが、つまり華僑の性格が、南支を基準とする一種の農民的性格から出ているとすれば、それをつかみなおして、更に修正する道はあるわけだね。それはしかし、ヨーロッパ的な段階でもつて考えるわけにゆかないので、東洋的な、飛躍的な何か一つの大きな段階というものがあると思う。現に日本などそれが速やかに順調に行つ

ているわけですね。

今度マライに行つて特に感じたのは、過去の停滞していた地域にたいして、われわれがどういうふうに指導してゆくか。この指導はその時々々の命令や威力による指導だけでなく、どうしても根本的に指導しなければならぬという段階に来ている。そういう点はどう思います。

三木 そこに日本の指導というものの問題があるわけだろうけれども、その指導して行くといった場合に、日本文化というものをもう一度反省しなければならぬわけだ。日本文化は東洋的な農民主会の特徴を基礎的に有っている。と共に近代性というものをともかく持っているわけなんだけれども、その間の調和というものがまだ十分に自覚されないで、はつきりしていないと思う。しかし現実においては、その調和というものが何かやはり日本において創られつつあるような気がする。そ

ういうものを科学的に哲学的に捉えて、そこに日本文化の形式というものはつきりさせるということが必要だと思う。一方においては、日本文化の現実についてその近代性というものをだけを離して強調する思想が出て来る。他方においては、日本の固有の伝統というものを強調する思想が出て来るといふようなことになっていたんだけれども、しかし現実の日本の社会、文化というものを考えると、そこに何か近代的でありながら、しかもやはり東洋的な性格を有つたものが必然的に生まれつつあるんじゃないかと思う。それは生まれつつあるんだけど、まだ思想的にそれを本当にはつきりした形において捉えていないところに問題があるので、今日よく言われているように、南方辺りへ行つて、日本の文化を紹介するという場合に、表現の問題が問題だ、というのはその意味なんだ。どう表現していいかわからぬ、という

ことが云われているのだけでも、それは現実の日本の歴史的発展において当然創られつつあるところの形というものが、ほんとうの形として具体的に捉えられていないというところにあるんじゃないかと思う。それを発見して新しい表現にそれを与えるということが日本の指導の上に非常に大切なことではないかと思う。古くから歴史的に見て、日本文化は一方どこまでも伝統的でありながら他方どこまでも進歩的であるという著しい特色を持つているので、そういう性格から、遅れた民族に対する指導の新しい形が作られねばならないのではないか。

中島 さっきの一番初めの清水君の疑問の結論としては、固有文化というようなものに余り大きな意味をもたせ過ぎてそれを骨董的に過大評価をしたり、又は英国流の放任主義というものに安住するというようなこと、そういうことではなく、やは

り南方も大東亜的な大きな単位として育って行く上に、やはりおのずからそこに文化的な干渉が行われる。干渉といっても、むしろ物理学的な意味の干渉もあつて、どうしてもそこに何か現象が起らなければならぬと同時に、何でもかんでもこちらのものを流し込むというのではなく、適切な政策による指導が行われて、その両者の渾一の形で新しいものが生まれて来つつあるというふうなことになると思う。

三木 それは伝統的で同時に進歩的であるという日本文化の特徴を他に及ぼしてゆくことで、そういうものを新しい形としてはつきりさせるということとは、日本が指導者として必要な条件だと思う。フィリッピン辺りでいっても、日本人が非常によく働くということはフィリッピン人にも解る。それには関心するのだけれども、どうして一生懸命にやっているのか、その精神が解らない。それで

は彼等をほんとに教育することができない。そこに精神が一つの形をとつて来れば、そういう形を通じて解らせることができると思う。そういう形を創つてゆくということが、必要ではないかと思う。

中島　そこでね、マライの経験というと、ヨーロッパの文化の影響というものが、考えていたよりも浅いという事実ですね。つまり東洋的な農民の性格というようなものに十分に目をつけるとすると、そういうものにたいするヨーロッパの影響というものは意外に浅いのですね。これはあらゆる点で見受けられる。言葉の上ですらそうだ。フィリピンなんかは違うかと思うのだが、マライにおける英語の勢力は、極めて重要であるには相違ないのだけれども、浅い。実際、少し深く地道な仕事をしようのすれば英語だけでは行かない。マライ語だけでもいかぬ。結局支那語をやらなければ

ばならないということに落ち着いてくる。僕は、今度の経験で大東亜圏の諸地域が、無論従来ヨーロッパの勢力下にあつたにしても、意外なほど濃厚に東洋の特徴を残しているということを痛感して来たのです。

三木　その点は、フィリピンは一番ヨーロッパ化され、殊にアメリカ化されているといわれているけれども、そういう所へ行つて、僕が一番感じたことは、やはりアメリカ文化の影響というものが浅くて、東洋的な性格を非常に濃厚に有つているということなんだね。そこに僕が比島人の東洋的性格「#三木全集第十五巻収録」というようなことを書いた一つの動機があるんだがね。その点からいつても、そういう民族にたいして指導者の資格を有つているのは、やはり西洋人でなくて、日本人だということをはつきりいうことができるね。彼等の東洋的性格というものが日本文化を浸

透させてゆく現実の地盤である。

もちろんフィリップンにおいては、特殊な一種の貴族階級としてインテリというものが在る。これは西洋化され、殊にアメリカ化されているのだけれども、そのインテリは大衆から隔絶しているわけなんだ。つまり国民的な基礎を有っていないというところが、フィリップンのインテリの著しい特徴なんで、早い話が、インテリは国民的な基礎を有っていないために、純粹に文化的な職業においては食つてゆけない。例えばね、小説家が純文学を書いても買ってくれる者がない。国民は買うだけの経済的な能力を有っていないのだからね。画家は金持ちの肖像画でも描いて生活しなければならぬという状態だからね。つまり、文化人を支持する健全な中産階級がなく、インテリは大衆から離れた一種の貴族階級のようになっているの
で、そういうことがこのインテリの抽象性、観念

性というものの原因なんだね。そういう抽象性、観念性ということから国民的文化というものはできないんで、外来文化の模倣になるということが出て来ると思う。これはフィリップン辺りの知識階級が特に反省を要することなんで、つまり国民生活とほんとうに密接に結び付けば、文化というものが見えただけの文化の模倣になる気遣いはないと思う。

そういう意味において、日本の知識階級にしても、もつと国民的な基礎に立つ、国民の生活の中に入つて行つて、国民の問題をほんとうに自分の問題として考え、国民のために文化を作つてゆくという大きな決心が必要でないかと思う。それが現在の日本が当面している、現実から要求されている重要な点だろうと思う。

中島 マライ辺りで、一番ヨーロッパの影響を有効に受け、且つ頑強に固有の性格を遺しているのは

やはり華僑なんだね。これはもう理屈抜きに、いろいろな話をしてみたり、仕事をしてみたりしてみても、一番ほんとうに相手になり得るものはやはり華僑。英米あたりの勢力が非常に南方で強かった時代には、華僑がその尻馬に乗って在留日本人を相当悩ませたという事実がある。われわれが今の状態で仕事をする段になると、そこに考うべきことがある。というのは、日本と支那とが確実に手を握り合わなければ大東亜の理想なんというのは成立しない。これは改めて南方でも痛感して来た事実である。

華僑の中にも若干のインテリがあるけれども、そのインテリも必ずしも軽薄なインテリではなくして、もつと固いものを残しているインテリなんだね。これは全体の支那から観れば或いは遅れたインテリ層かも知れない。そういえるかも知れないけれども、そこに何か今日の状態における華僑

問題があると思う。

で、日本文化の固有性ということが、外の民族に、よく解るかどうかは問題だ。しかし、今僕はいろいろな経験の結果、少なくとも他民族にくらべて率直にこいつを一番早く解るのは支那人でないかということまで考えているのだけれども、これは南洋華僑のほんの少部分と接して得た感じだから、支那全体に推し進めることができるかどうかかわかんがね、そういう感じがある。日本と支那との間の縁を考え、共通性というものを考える時に、農業の形、特に水田の耕作しかない、黄色人種であるということしかないというような議論があつたが、むしろ、もつと積極的につながりがないという感じがした。

編輯者 三木さん、言語の問題について話してください、大きな問題だと思うのですが……。

三木 そうね。一般的な問題として日本語を普及

させてゆく、これを東亜の共通語にしてゆくとい

うことは、これは必要なことで、どこまでも熱心にやられなくちゃならないことだが、それと共にフィリッピン辺りの問題にしてみると、これは従来の植民政策においてもつねに問題になって来たと思うのだけれども、つまり土語だね、土語というものをどうするかという問題がある。まず土語の統一という問題がある。フィリッピン辺りになると、八十七位の地方語がある。そういう場合に、これを統一してゆくということが必要なんで、フィリッピンではケソン政府の時代にタガログ語を国語にするということを決めたんだが、しかし前に云ったようにフィリッピン人の知識階級というものは、だいたい観念的なんでね、フィリッピンの独立とか何とか言いながら、タガログ語を国語として普及するという努力を熱心にやらないで、むしろ英語を喋ることを得々としているとい

う状態だったのだね。

そういうことはフィリッピンのインテリに観念的抽象性を現しているわけだけれども、ともかく土語を統一するということは、日本にとつては現実の必要になつてくると思う。そこで日本の軍政においても、日本語と共にタガログ語を公用語にするということを決定した。それと共に、今後においては、日本語を土語の中へ入れてゆく、土語の日本語化ということも考えねばならぬと思う。例えば、ラテン語やギリシャ語が西洋の言葉の中へ入つていると同じように、何らかの形において日本語を土語の中へ入れてゆく。フィリッピン辺りの土語の中にはスペイン語がたくさん入っているのだが。そういうようなことから考えてみても、日本語を将来土語の中へ入れてゆくということが必要だと思う。これは支那なんかにおいては、実際に相当そういう結果になつているので、例え

ば、支那における科学的な述語というものは、大體日本で西洋の科学の訳語を造つたものをそのまま用いているというような状態なんだ。そういうことを、支那語ばかりでなしに、外の言葉においてもやつてゆく。いわゆる文化的な語彙はだいたひ日本語であるというような方向に進めてゆくというようにすれば、そこにおのずから日本語の勢力が土語の中に普及してゆくということになる。だから、日本語を普及すると共に、土語を整理し、しかも、土語の中へ日本語を入れてゆく、これが非常に必要なことぢやないかと思うね。

中島 ジャワでもそれをやっているらしいね。ジャワなんかの場合だと、インドネシア語が高度の形で残っていて、また既にオランダ語なんかもほとんどん入ってたらしい。マライなんかはそれは別問題になる。フィリッピンにおける支那語の勢力というものはどうですか。

三木 支那語はね。だいたい華僑が話しているわけだね。フィリッピンの華僑は、人数からいっても相当であるわけけれども、支那語はフィリッピンの土語の中にいくらか入っている。これはつまりスペインが来る以前からすでに支那との交通があつて、支那語が、殊に生活に関する言葉においては入っている。土語化されているわけなんだ。そういう意味において日本語を土語化してゆくということだね。そういうことを、僕は、考えてゆかなければならないんじゃないかと思うのだね。

中島 それは民族的、或いは人種的構成が比較的固まっているところで特に可能なんだ。マライにおける海峡マライ語というものはこれもなくすことはできない。マライはだいたいマライ語と支那語ですな。しかしジャワ辺りのマライ語に比べて、マライの海峡マライ語は、非常に崩れたものです。

がね。それにしても全部を日本語にするということは殆ど考えられない。むしろマライ辺りでは、マライ語と同時に支那語の問題だね。華僑というものがいる以上、一番やはり根強く残るのは華僑の言葉だと思うんですよ。まあ二重国語にはないうる。華僑の大部分は支那語を語り、同時に英国時代には英語を語ったということになり、やはり支那語が頑強に残ってゆく。もつともそのうちの

小数が英語人種になってしまい、最早支那語は解らぬし、漢字が解らぬという連中が出来て来ている。数においてはそれほど多くないかも知れないが、やはりインテリとしての特徴的な事実だな。まあ言語なんというものは、学校だけで習っても仕様がな。やはり日常生活の中で使わなければならぬ。そうするとやはりマライ語なり支那語なりが家庭生活でどんどん使われている以上、これを認めると同時に、日本語というものを家庭生活

に入れなければならない。入れるというよりは、入って来る時期が来ると思う。しかも、土語や支那語が全くなくなることはない。僕はマライしか知らんけれども、南方に関する限り、各地域の状況によつて、相当の手心が必要である。やはりそれがいろいろな差別を生じながら、何か根本原理で統一されてゆく。

きよう問題になったのは、つまり東洋の文化の基礎としての農民的性格というものです。そういうところからだんだん掘り下げて行つて、一つの基礎的な、まあ全体の繋がりを見付けることはできる。やはり早く具体的な形をつかむことがもつと必要だ。その第一歩として今日のような話になったわけですね。

底本：『文藝』1943.3

参加者略歴

石坂洋次郎：1900～1986、青森県出身、慶応義塾大学卒、小説家。

大串免代夫：1903～1967、大阪生れ長崎育ち、東京帝国大学法学部英法科を卒業、文部省教学官。

尾崎秀実：1901～1944、東京出身、東京帝国大学卒、東京朝日新聞社から上海に駐在、満鉄調査部嘱託、1941.10.14「ノルゲ事件」で逮捕・死刑。

岸田国士：1809～1954、東京生まれ、軍人のち劇作家・演出家、大政翼賛会文化部長、文学座創設者の一人。

小林秀雄：1902～1983、東京生まれ、東京帝国大学仏文科卒、文芸評論家、『小林秀雄全集』（新潮社刊）

菅井準一：1903～1982、山形県出身、東京帝国大学卒、科学史家。

津久井龍雄：1901～1989、早稲田大学英文科中退、赤松克麿・倉田百三らと「国民協会」設立。戦後は公職追放。

永田清：1903～1957、慶応義塾大学経済学部卒業。

35年慶応義塾大学教授、戦後は実業家に転ずる。

細川嘉六：1888～1962、富山県出身、東京帝国大学法科大学政治学科卒、大原社会問題研究所員、ノルゲ事件で逮捕、戦後は日中友好に尽す。

穂積七郎：1904～1995、（別名：鈴木七郎）愛知県出身、日本労働総同盟本部教育出版部員、日本労働学校主事、昭和研究会労働問題研究会、戦後衆議院議員、無所属から国民党を経て日本社会党。

矢部貞治：1902～1967、鳥取出身、東京帝国大学法学部政治科卒、同大教授、政治学者・評論家、昭和研究会外交部会長。

作成者：石井彰文

作成日：2010.11.14

追加：2010.12.7 新聞記事文庫から二件追加